公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第 219 集

八尾市・東大阪市

池島・福万寺遺跡 13

（池島Ⅱ期地区 08−２調査区）

一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書

2011 年 11 月

公益財団法人　大阪府文化財センター

池島・福万寺遺跡 13

二〇一一年十一月

公益財団法人　大阪府文化財センター

公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第 219 集

八尾市・東大阪市

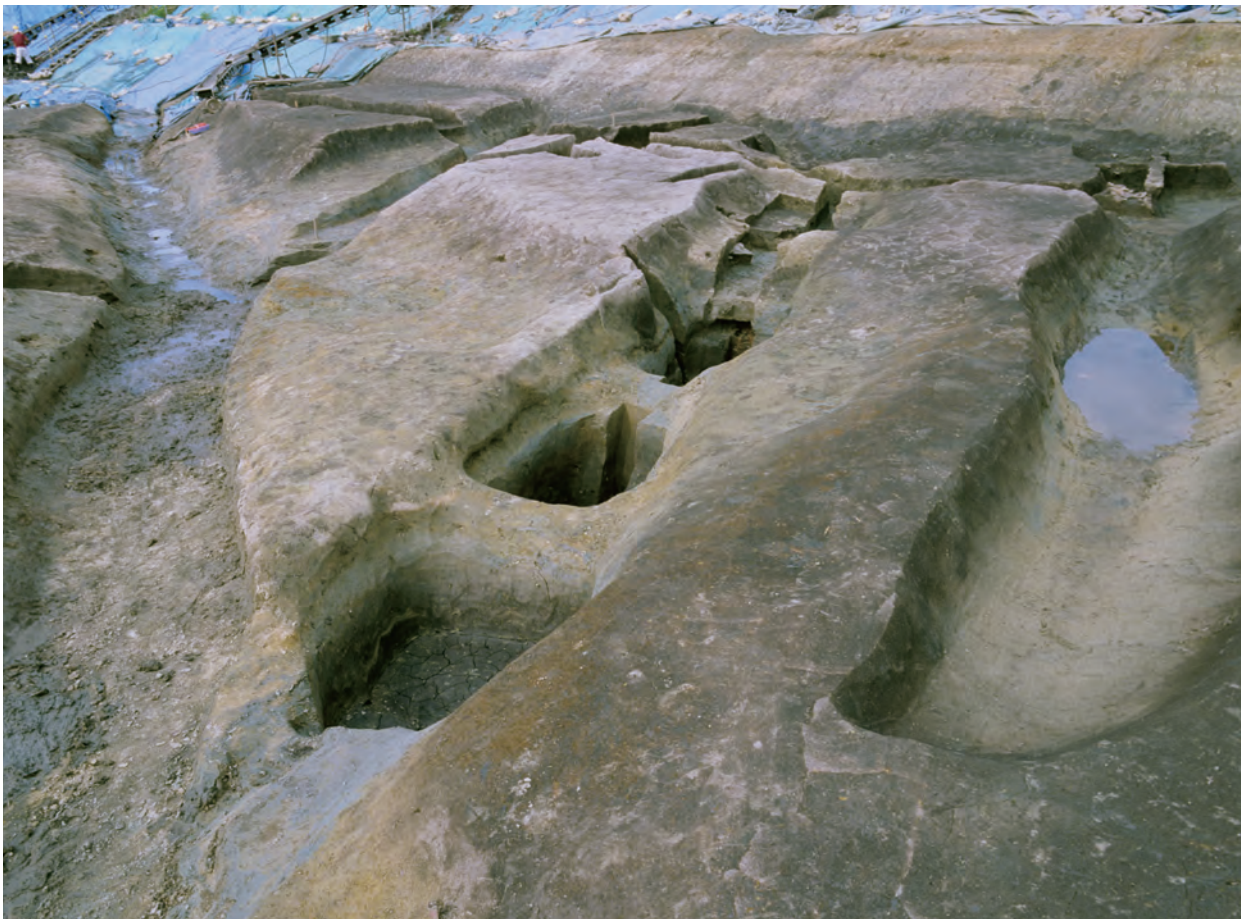
池島・福万寺遺跡 13

（池島Ⅱ期地区 08-２調査区）

一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書

公益財団法人　大阪府文化財センター

調査地遠景（西から）

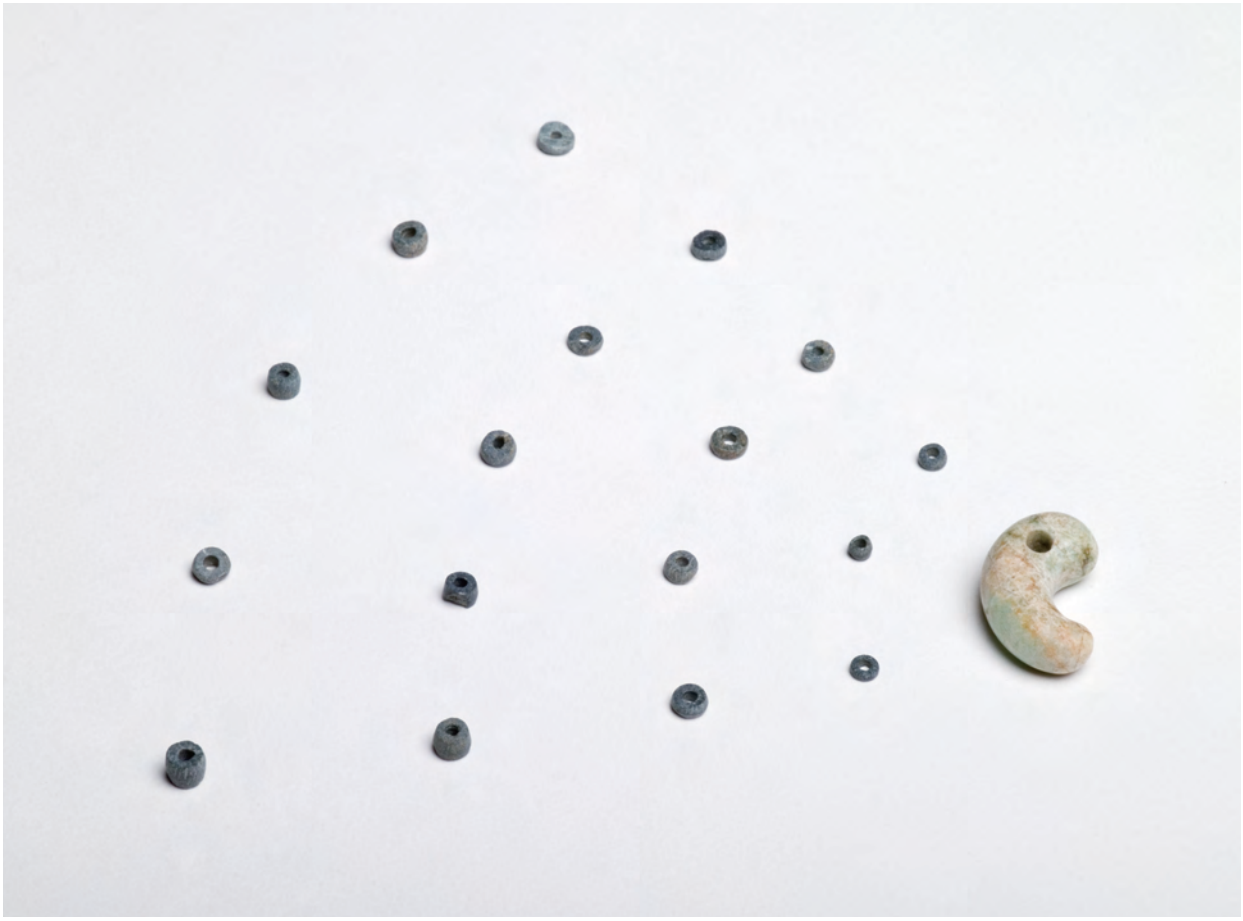


第 13 面　835 溝（南西から）

第 13 面出土　土錘・石錘

第 10 面出土　土師器・陶質土器

第 13 面出土　弥生土器



第 10 面出土　臼玉　第 10 ～ 11層 出土　翡翠製勾玉

第 13 面出土　石棒・人形土製品

序　　文

水鳥が泳ぎ、蜻蛉が飛び交う恩智川治水緑地公園は、府民の憩いの場として休日はもとより日ごろから散歩やスポーツに興じておられる姿が多く見受けられます。

最近の異常気象による災害を目にする度、数年前にこの治水緑地公園が水没した時を思い出し、治水事業の大切さを痛感します。

また、この治水緑地公園がある池島・福万寺遺跡は、近世から縄紋時代後期にいたるまで 20 枚を越す遺構面数をかぞえ、その深度は実に 4 mを超える深さとなっています。このことは、我々の先人たちが洪水と戦ってきた歴史を赤裸々に物語っております。発掘調査によって得られた成果から、先人たちが洪水によって受けたダメージに屈することなく、むしろそのことを糧として、巧みに利用して土地を活用していく逞しさを学ぶことができますし、こうした先人たちの弛まぬ努力と洪水を克服するしたたかさは、私たちに勇気と希望を与えてくれるものです。

今回の調査では、これまでの生産域の調査に加え、弥生時代前期の集落域の一端を捉えることが出来ました。多量に捨てられた土器や水漬けのまま放棄された木製品、さらに信仰のよりどころである石棒や人形土製品など、縄紋時代から弥生時代へと変化していく中での人々の生活を垣間見ることが出来ました。

池島・福万寺遺跡の発掘調査が始まってから 30 年余り、大阪府文化財センターが発掘調査に携わってからでも 20 年を越えました。その間多くの成果をあげてまいりました。今後も調査によって得られた成果を発表し、府民の皆様に還元していくことをお約束いたします。

なお、最後になりましたが、大阪府寝屋川水系改修工営所をはじめ、池島小学校、北山本小学校、池島中学校、府立みどり清朋高等学校、池島町自治会など、多くの地元の皆様に感謝申し上げるとともに、今後ともセンター業務に一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成 23 年 11 月

公益財団法人　大阪府文化財センター

理事長　水野正好

例　　言

1．本書は、大阪府東大阪市池島町と八尾市福万寺町にまたがる地域に計画された恩智川治水緑地建設に伴う池島・福万寺遺跡Ⅱ期地区 (08 － 2) 調査区の発掘調査報告書である。

2．調査は、大阪府寝屋川水系改修工営所から財団法人 (現：公益財団法人) 大阪府文化財センターが一級河川恩智川治水緑地池島・福万寺遺跡Ⅱ発掘調査（その 10）として平成 20 年 9 月 1 日から平成 22 年 9 月 30 日の間委託を受け、平成 20 年 10 月 24 日から平成 22 年 8 月 31 日まで現地調査を行った。その後、一級河川恩智川治水緑地池島・福万寺遺跡Ⅱ遺物整理（その 1）として、平成 22 年 9 月 1 日から平成 23 年 3 月 15 日まで間委託を受けて遺物整理作業を行い、平成 23 年 11 月 30 日本書の刊行を以って完了した。

3．調査は以下の体制で実施した。

〔調査〕

平成 20 年 10 月 24 日～平成 21 年 3 月 31 日

調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘、中部調査事務所長　寺川史郎、池島支所長兼調査第一係長　金光正裕、主査　陣内暢子、副主査　後藤信義、技師　井西貴子、専門調査員　飯田浩光

平成 21 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日

調査部長兼調査課長　福田英人、調整グループ長　金光正裕、調査グループ長　寺川史郎、調査グループ主幹兼池島総括主査　小野久隆、主査　陣内暢子、副主査　後藤信義、技師　井西貴子、専門調査員　飯田浩光

平成 22 年 4 月 1 日～平成 22 年 9 月 30 日

調査部長兼調査課長　福田英人、調整グループ長　江浦　洋、調整グループ主幹　岡本茂史、調査グループ長　岡戸哲紀、調査グループ主幹 (池島・福万寺総括)　金光正裕、主査　後藤信義、技師　井西貴子、専門調査員　前田俊雄

〔整理〕

平成 22 年 10 月 1 日～平成 23 年 3 月 15 日

調査部長兼調査課長　福田英人、調整グループ長　江浦　洋、調整グループ主幹　岡本茂史、調査グループ長　岡戸哲紀、調査グループ主幹 (池島・福万寺総括)　金光正裕、主査　後藤信義、技師　井西貴子、

4．本書で用いた現場写真は調査担当者が撮影した。遺物写真撮影に関しては、調査グループ主査　片山彰一が担当した。木製品の樹種同定は調査グループ主査　山口誠治が行った。

5．本書の作成にあたり、弥生時代前期遺構面について工樂善通氏（大阪府立狭山池博物館）、藤澤真依氏、廣瀬雅信氏（大阪府教育委員会）、内田真雄氏（高槻市教育委員会）、陶質土器に関しては金斗喆氏（釜山大学校）、田中清美氏（財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所）、石材同定に関しては小倉徹氏（財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所）、人形土製品に関しては大野　薫氏（大阪府教育委員会）、人形土製品の胎土分析に関しては別所秀高氏（財団法人東大阪市施設利用サービス協会）、魚類遺存体に関しては山崎健氏（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）、桿秤鉤に関しては秤屋健藏氏（秤乃館）、土錘・石錘に関しては久保禎子氏（一宮市博物館）にご指導賜った。記して厚く御礼申し上げる。

6．発掘調査、遺物整理の実施にあたり、下記の関係諸機関、方々にご指導・ご助言をいただいた。記して感謝の意を表する。（順不同）

大阪府寝屋川水系改修工営所、同所南部工区、大阪府教育委員会、松田順一郎氏（財団法人東大阪市施設利用サービス協会）

7．航空測量に関しては、株式会社かんこうに委託した。

8．分析については、以下の分析をそれぞれの業者に委託して行っている。分析結果については本文中にその概要を記した。

蛍光Ｘ線分析：有限会社　遺物材料研究所

陶質土器胎土分析：株式会社　パレオ・ラボ

大型植物遺体同定：パリノ・サーヴェイ株式会社

9．788 土坑の魚類遺存体については山崎健氏（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）に原稿を執筆いただき、第 5 章に掲載した。

10. 本書の執筆は後藤信義・井西貴子（現：大阪府教育委員会）・飯田浩光（現：大阪府立近つ飛鳥博物館）・前田俊雄（現：奈良県立橿原考古学研究所）・松尾奈緒子（現：福岡市教育委員会）・ 柴田将幹（同志社大学文学部文化史学科）が分担し、文責は各章の末に記した。編集は井西が行った。

11. 本調査で出土した遺物および写真・実測図等の記録類は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡　　例

1．遺構実測図の基準高は、東京湾平均海面（T.P. 値）を使用している。

2．遺構平面図の座標値は、世界測地系に基づく国土座標第Ⅵ系で標記している。また、本書で用いた方位は座標北を基準とした。ちなみに磁北は座標北から西に 6°49′、真北は座標北から東に 0°12′振っている。

3．発掘調査および遺物整理においては財団法人大阪府文化財センターの『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003 年）に準拠した。

4．地層および土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編　農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所　色票監修『新版　標準土色帖』2007 年版に基づいている。

5．遺構全体の平面図は 500 分の 1、遺構図は 20 分の 1 もしくは 40 分の 1、遺物実測図は 4 分の 1 を原則とする。但し、一部必要に応じて任意の縮尺を設定しており、その都度スケールを明記する。銭貨は 3 分の 2、犬形土製品は 2 分の 1、釘は 2 分の 1 である。

6．遺構番号については遺構の種類に関わらず 1 から通し番号を付した。

7．なお、本調査区は池島Ⅱ期地区 05 － 2 調査区（以下 05 － 2 調査区）と西側で接している。遺構が 05 － 2 調査区と連続する場合は（05 － 2 調査区 1）というように遺構番号を付した。

目　次

巻頭カラー
序文
例言
凡例
目次
第１章　調査にいたる経緯と経過、調査の方法
　第１節　池島・福万寺遺跡発掘調査の経緯と経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第２節　調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第２章　基本層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第３章　遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　第１面・第１ｂ面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　第２－１面 ・・12
　第２－３面 ・・14
　第２－４面 ・・16
　第２－５面・２－5b 面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
　第３面 ・・21
　第４面 ・・24
　第５面 ・・28
　第６面 ・・32
　第７面 ・・34
　第 10 面 ・・・40
　第 11 面 ・・・76
　第 12 面 ・・・82
　第 13 －１面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
　第 13 －２面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
　第 14 面 ・・・96
　第 15 面・・・113
　第 16 面・・・188
　第 17 面・・・195
　第 18 面・・・202
第４章　出土遺物の検討　　土錘・石錘 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・243
　　　　　　　　　　　　　08 －２調査区出土弥生時代祭祀具について ・・・・・・・・・・・・248
第５章　自然科学分析　　池島・福万寺遺跡の炉跡から出土した魚類遺存体 ・・・・・・・・・・251
　　　　　　　　　　　　池島・福万寺ⅡヒスイIII製勾玉産地同定分析 ・・・・・・・・・・・・・253
　　　　　　　　　　　　大型植物遺体同定 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・268
　　　　　　　　　　　　池島・福万寺遺跡出土陶質土器の胎土分析 ・・・・・・・・・・・・・272
第６章　総括 ・・277

挿　図　目　次

図１　池島・福万寺遺跡調査区配置図　1
図２　国土座標地区割り図　4
図３　08－２調査区地区割り図　4
図４　基本層序断面模式図　6・7
図５　第１b面　全体図　11
図６　第１～１b層・１b土坑出土遺物実測図　12
図７　第２－１面　全体図　13
図８　第２－３面　全体図　15
図９　第２－３面　13・15・17～19・29～31溝断面図　16
図10　第２－４面　全体図　17
図11　第２－４面　23・26・27溝・25坪境溝・24島畠断面図　18
図12　第２－５面　34水口、第３面　35水口平・断面図　18
図13　第２－５面・２－5b面　全体図　19
図14　第２層出土遺物実測図　20
図15　第２－３面・第4面　出土貨銭拓本・断面図　21
図16　第３面　全体図　23
図17　第３～５面　38・54・62坪境畦畔・42・58・64島畠断面図　24
図18　第３面　32・33ピット断面図　24
図19　第４面　全体図　25
図20　第３層出土遺物実測図　26
図21　第４面　49島畠出土遺物実測図　26
図22　第４面　49島畠、第５面　66島畠断面図　27
図23　第４面　60島畠出土桿秤鉤実測図　27
図24　第４面　52溝断面図　28
図25　第４面　43ピット平・断面図　28
図26　第４層出土遺物実測図　29
図27　第５面　62坪境畦畔・64島畠出土遺物実測図　29
図28　第５面　全体図　30
図29　第５面　61島畠出土遺物実測図　31
図30　第５面　66島畠出土遺物実測図　31
図31　第５面　69島畠出土遺物実測図　31
図32　第５面　70島畠出土遺物実測図　31
図33　第５面　71島畠出土遺物実測図　32
図34　第５層　出土遺物実測図　32
図35　第６面　全体図　33
図36　第６面　79鋤溝出土遺物実測図　34
図37　第６面　81・82鋤溝断面図　34
図38　第６面　103鋤溝出土遺物実測図　34
図39　第６面　111鋤溝出土遺物実測図　34
図40　第６層　出土遺物実測図　34
図41　第７面　全体図　35
図42　第７面　117・120土坑平・断面図　36
図43　第７面　132土坑平・断面図　37
図44　第７面　137・138土坑平・断面図　37
図45　第７面　143土坑平・断面図　38
図46　第７面　144・145・147・153・154ピット断面図　39
図47　第７層　出土遺物実測図　40
図48　第10面　全体図　41
図49　第10面　北東部遺構図　42
図50　第10面　建物配置図　43
図51　第10面　建物１平・断面図　44
図52　第10面　建物２平・断面図　45
図53　第10面　建物２・３出土遺物実測図　45
図54　第10面　建物３平・断面図　46
図55　第10面　建物４平・断面図　47
図56　第10面　建物５平・断面図　48
図57　第10面　建物６平・断面図　49
図58　第10面　156・424井戸平・断面図　50
図59　第10面　423・427・428・429ピット平・断面図　51
図60　第10面　156井戸出土遺物実測図　52
図61　第10面　234井戸・235土坑平・断面図　52
図62　第10面　234井戸出土遺物実測図　53
図63　第10面　310井戸平・断面図・見通し図　54
図64　第10面　310井戸遺物出土状況図　55
図65　第10面　310井戸出土遺物実測図　56
図66　第10面　310井戸出土双孔円板実測図　56
図67　第10面　310井戸出土臼玉実測図　57
図68　第10面　310井戸出土木錘実測図　57
図69　第10面　402井戸平・断面図　57
図70　第10面　402井戸出土遺物実測図　58
図71　第10面　196土坑断面図　58
図72　第10面　221・545土坑・222・224・544・546ピット平・断面図　59
図73　第10面　221土坑出土遺物実測図　59
図74　第10面　271・573・574土坑平・断面図　60
図75　第10面　272土坑平・断面図　60
図76　第10面　272土坑出土遺物実測図　60
図77　第10面　379・391・434・443・444土坑断面図　61
図78　第10面　485土坑遺物出土状況図・断面図　61
図79　第10面　485土坑出土遺物実測図　62
図80　第10面　491土坑断面図　62
図81　第10面　493土坑遺物出土状況図・断面図　62

図82　第10面　493土坑出土遺物実測図　62
図83　第10面　552土坑平・断面図　63
図84 第10面　590土坑遺物出土状況図・断面図　63
図85　第10面　591土坑断面図　64
図86　第10面　459溝断面図　64
図87　第10面　164ピット遺物出土状況図・断面図
図88　第10面　160･164ピット出土遺物実測図　65
図89　第10面　B区232・226・218ピット出土遺物実測図　65
図90　第10面　232ピット遺物出土状況図・断面図　65
図91　第10面　C区258ピット平・断面図　66
図92　第10面　C区255ピット出土遺物実測図　66
図93　第10面　D区315ピット出土遺物実測図　66
図94　第10面　E区337ピット出土遺物実測図　66
図95　第10面 547落ち込み断面図　68
図96　第10面　547落ち込み出土遺物実測図　68
図97　第10面　233ピット断面図　69
図98　第10面　529・530・531ピット断面図　69
図99　第10面　549畦畔断面図　69
図100　第10面　460溝出土遺物実測図　69
図101　第10面　460溝①②断面図
図102　第10面　出土砥石実測図　70
図103　第10層出土遺物実測図　70
図104　第10b層出土遺物実測図　71
図105　第10～11層出土勾玉実測図　71
図106　第11面　全体図　72
図107　第11面　367井戸平・断面図　73
図108　第11面　367井戸出土遺物実測図
図109　第11面　598井戸断面図・遺物出土状況図　74
図110　第11面　598井戸出土遺物実測図　75
図111　第11面　316土坑断面図　75
図112　第11面　612土坑断面図・遺物出土状況図　75
図113　第11面　612土坑出土遺物実測図　75
図114　第11面　347・599・603溝断面図
図115　第11面　347溝出土遺物拓本・断面図　76
図116　第11面　599溝出土遺物実測図　76
図117　第11面　603溝出土遺物実測図　77
図118　第11面　614・623・632溝断面図　77
図119　第11面　614溝出土遺物実測図　77
図120　第11面　632溝出土遺物実測図　78
図121　第11面　628土坑断面図　78
図122　第11面　570・571ピット断面図　78
図123　第11面　569溝断面図　79
図124　第11面　577・578溝断面図　79
図125　第11面　579・580・581溝断面図　79
図126　第11面　582・583溝断面図　81
図127　第11層　出土遺物実測図　81
図128　第12－1・2面　全体図　83
図129　第12－1面　637・638落ち込み・
639土坑平・断・立面図　84
図130　第12－1面　637・638落ち込み出土遺物実測図　85
図131　第12－2面　640～643・645土坑断面図　85
図132　第13－1面　全体図　87
図133　第13－1面　646流路・
658・660高まり・677溝断面図　89
図134　第13－1面　658高まり内出土遺物実測図（1）　90
図135　第13－1面　658高まり内出土遺物実測図（2）　91
図136　第13－1面　663高まり土器出土状況図　91
図137　第13－1面　663高まり出土遺物実測図　93
図138　第13－1面　648・649・665溝・655高まり断面図　94
図139　第13－1面　665溝出土遺物実測図　95
図140　第13－1面　676溝・675・682高まり平・断面図　96
図141　第13－1面　685・689ピット・
672・674水口・677溝平・断面図　97
図142　第13－1面　646流路出土遺物実測図　98
図143　第13－1層出土遺物実測図　98
図144　第13－1面　646流路断面図　99・100
図145　第13－2面　全体図　102
図146　第13－2面　699・711・712土坑平　103
図147　第13－2面　704・713土坑・
687・688・709溝平・断面図　104
図148　第13－2面　678・688・709溝出土遺物実測図　105
図149　第13－2層出土遺物実測図　105
図150　第14面　全体図　106
図151　第14面　面上・716・723・721溝出土遺物実測図　107
図152　第14面　土器（234）・692・693・695・696・
716～718・721・723溝平・断面図　108
図153　第14面　717溝出土遺物実測図（1）　109
図154　第14面　717溝出土遺物実測図（2）　110
図155　第14面　665・717・835溝南壁断面図　110
図156　第14面　691流路出土遺物実測図　110
図157　第14層出土遺物実測図（1）　110
図158　第14層出土遺物実測図（2）　111
図159　第14層出土遺物実測図（3）　112
図160　第15面　全体図　114
図161　第15面　溝状遺構全体図　115
図162　第15面　728溝出土遺物実測図　115

図163　第15面　729溝出土遺物実測図　116
図164　第15面　730溝出土遺物実測図　116
図165　第15面　731溝出土遺物実測図　116
図166　第15面　732溝出土遺物実測図　117
図167　第15面　750溝出土遺物実測図　117
図168　第15面　772溝出土遺物実測図　117
図169　第15面　840溝出土遺物実測図　118
図170　第15面　842溝出土遺物実測図　119
図171　第15面　848溝出土遺物実測図　119
図172　第15面　856溝出土遺物実測図　119
図173　第15面　785・788・798・832・
833炉・784・786土坑平・断面図　120
図174　第15面　788炉出土遺物実測図　121
図175　第15面　872炉平・断面図　121
図176　第15面　861炉出土遺物実測図　121
図177　第15面　861炉・821・853土坑平・断面図　122
図178　第15面　872炉出土遺物実測図　123
図179　第15面　821土坑出土遺物実測図　123
図180　第15面　853土坑出土遺物実測図　124
図181　第15面　783・800・816・870土坑平・断面図　125
図182　第15面　816土坑出土遺物実測図　125
図183　第15面　803溝平面図　127
図184　第15面　803木製品水漬け遺構－①
遺物出土状況図・断面図　128
図185　第15面　803溝出土遺物実測図（1）　129
図186　第15面　803溝出土遺物実測図（2）　130
図187　第15面　803溝出土遺物実測図（3）　131
図188　第15面　803溝出土遺物実測図（4）　132
図189　第15面　803木製品水漬け遺構－①・
835木製品水漬け遺構－④・－⑤
出土遺物実測図　133・134
図190　第15面　803溝・835木製品水漬け遺構－⑤
出土遺物実測図　135
図191　第15面　803溝出土遺物実測図（5）　136
図192　第15面　864溝遺物出土状況図（1）　138
図193　第15面　864溝遺物出土状況図（2）　139
図194　第15面　864溝遺物出土状況図（3）　140
図195　第15面　864溝断面図　140
図196　第15面　864溝出土遺物実測図　141
図197　第15面　835溝遺物出土状況図・835木製品
水漬け遺構－①・865溝断面図　143・144
図198　第15面　835木製品水漬け遺構平・断面図　145
図199　第15面　835木製品水漬け遺構－①平・断面図　145
図200　第15面　835－②平面図・土器出土状況図・断面図　146
図201　第15面　835木製品水漬け遺構－③～⑤平・断面図　147
図202　第15面　835木製品水漬け遺構－④・⑤
平面図・遺物出土状況図　148
図203　第15面　835溝出土遺物実測図（1）　154
図204　第15面　835溝出土遺物実測図（2）　155
図205　第15面　835溝出土遺物実測図（3）　156
図206　第15面　835溝出土遺物実測図（4）　157
図207　第15面　835溝出土遺物実測図（5）　158
図208　第15面　835溝出土遺物実測図（6）　159
図209　第15面　835溝出土遺物実測図（7）　160
図210　第15面　835溝出土遺物実測図（8）　161
図211　第15面　835溝出土遺物実測図（9）　162
図212　第15面　835溝出土遺物実測図（10）　163
図213　第15面　835溝人形土製品実測図　164
図214　第15面　835溝出土遺物実測図（11）　164
図215　第15面　865溝出土遺物実測図　165
図216　第15面　726溝土器出土状況図　166
図217　第15面　726溝断面図　166
図218　第15面　726溝・727落ち込み平面図　166
図219　第15面　727落ち込み断面図　166
図220　第15面　727落ち込み土器出土状況図　166
図221　第15面　726溝出土遺物実測図　167
図222　第15面　734・754・814・841溝断面図　167
図223　第15面　734溝出土遺物実測図　168
図224　第15面　814溝出土遺物実測図　168
図225　第15面　841溝出土遺物実測図　168
図226　第15面　869溝平・断面図（1）　169
図227　第15面　869溝平・断面図（2）　170
図228　第15面　869溝出土遺物実測図　171
図229　第15面　735・739・752・766・767・775・858～860・
863・866ピット断面図　172
図230　第15面　752溝出土遺物実測図　172
図231　第15面　725流路出土遺物実測図　173
図232　第15面　727落ち込み出土遺物実測図　174
図233　第15面　817落ち込み出土遺物実測図　175
図234　第15面　854落ち込み断面図　176
図235　第15面　862ピット平・断面図　176
図236　第15面　857ピット平・断面図　176
図237　第15面　854落ち込み出土遺物実測図　177
図238　第15面　857ピット出土遺物実測図　178
図239　第15面　859ピット出土遺物実測図　178
図240　第15面　1142落ち込み平・断面図　178

図241　第15面　1142落ち込み出土遺物実測図　179
図242　第15面　石錘出土状況図　180
図243　第15面　石棒出土状況図　180
図244　第15面　石錘・石鏃・石匙実測図　182
図245　第15面　石棒実測図　183
図246　第15面　包含層出土遺物実測図（1）　184
図247　第15面　包含層出土遺物実測図（2）　185
図248　第15面　包含層出土遺物実測図（3）　186
図249　第15面　包含層出土遺物実測図（4）　187
図250　第16面　全体図　188
図251　第16面　掘立柱建物7平・断面図　190
図252　第16面　958・967土坑・977溝平・断面図　191
図253　第16面　958土坑出土遺物実測図　192
図254　第16面　967土坑出土遺物実測図　192
図255　第16面　977溝出土遺物実測図　192
図256　第16面　942・950・951・1015・1046・1091・1100
・1101・1105・1132・1139ピット平・断面図　193
図257　第16面　1015・1046・1101・1105・
1132ピット出土遺物実測図　194
図258　第16面　上面出土遺物実測図　194
図259　第16層　出土遺物実測図　194
図260　第17面　全体図　196
図261　第17面　971木棺墓平・断面図　197
図262　第17面　971木棺墓完掘状況平面図　198
図263　第17面　972木棺墓平・断面図・973土坑平面図　198
図264　第17面　975木棺墓平・断面図　199
図265　第17面　971木棺墓出土遺物実測図　199
図266　第17面　1113～1115土坑平・断面図　200
図267　第17面　972木棺墓出土遺物実測図　201
図268　第17面　975木棺墓出土遺物実測図　201
図269　第17面　973・1113～1115土坑出土遺物実測図　201
図270　菅状土錘　長さ/最大幅と径の関係図　244
図271　第17面　出土石棒実測図　250

表目次

表1　管状土錘一覧表
表2　板状土錘一覧表
表3　石錘一覧表
遺物観察表

図版目次

巻頭カラー　1～4
図版1　断面　第1～2層
第2～10層
第10～13層
第13～15層
第15～17層
第17～18層
図版2　第2－1～第2－4面　全景
図版3　第3面　全景
図版4　第4面・第5面　全景
第4面60島畠盛土内　棹秤鉤出土状況
図版5　第6面・第7面　全景
図版6　第7面　全景・遺構　第十面　遺構
第7面　120土坑
第7面　132土坑
第7面　137土坑
第7面　143土坑
第10面　164ピット
第10面　232ピット
図版7　第10面　全景
図版8　第10面　全景
図版9　第10面　遺構　掘立柱建物1
掘立柱建物2
掘立柱建物3
図版10　第10面　遺構　掘立柱建物4
掘立柱建物5・6
156井戸
図版11　第10面　遺構　310井戸
図版12　第10面　遺構・第11面　全景
第10面　402井戸
第10面　272土坑
第10面　485土坑
弟10面　460溝
第11面　北東部
図版13　第11面　遺構　367井戸
598井戸　完掘状況
347溝
367井戸
598井戸
図版14　第13－1面　全景・遺構
646流路　断面

665 溝　断面
図版 15　第 13 － 1 面　遺構　西半部　全景
675 高まり・676 溝
665 溝
655 高まり・649 溝
648 溝・660 高まり
672 水口
674 水口
663 高まり土器出土状況
図版 16　第 13 － 2 面　全景　遺構・第 14 面　全景
第 13 － 2 面　北半部　全景
第 13 － 2 面　699 土坑
第 13 － 2 面　688 溝断面
第 14 面　全景
図版 17・18　第 15 面　全景
図版 19・20　第 15 面　遺構　803 溝 (木製品水漬け遺構)
図版 21 ～ 24　第 15 面　遺構　835 溝 (木製品水漬け遺構)
図版 25　第 15 面　遺構　864 溝
869 溝
864 溝
114 落ち込み遺物 (615)
869 溝
図版 26　第 15 面　遺構　石錘出土状況
833 炉
788 炉
857 ピット
石棒出土状況
727 落ち込み
862 ピット
図版 27　第 16 面　遺構　掘立柱建物 7
895 ピット
896 ピット
図版 28　第 17 面　全景 (部分)　遺構　971 木棺墓
972 木棺墓
973 木棺墓
図版 29　第 1 層から第 2 層　遺物
図版 30　第 2 層・第 3 層・第 2 面から第 4 面　遺物
図版 31　第 10 面　遺物（1）
図版 32　第 10 面　遺物（2）
図版 33　第 10 面　遺物（3）
図版 34　第 11 面　遺物
図版 35　第 10 から第 11 層・第 12 － 1 面・第 13 － 1 面　遺物（1）
図版 36　第 13 － 1 面　遺物（2）
図版 37　第 13 － 2 面
図版 38　第 14 面・第 14 層　遺物
図版 39　第 15 面　遺物（1）
図版 40　第 15 面　遺物（2）
図版 41　第 15 面　遺物（3）
図版 42　第 15 面　遺物（4）
図版 43　第 15 面　遺物（5）
図版 44　第 15 面　遺物（6）
図版 45　第 15 面　遺物（7）
図版 46　第 15 面　遺物（8）
図版 47　第 15 面　遺物（9）
図版 48　第 15 面　遺物（10）
図版 49　第 15 面　遺物（11）
図版 50　第 10 面・第 15 面　遺物（12）
図版 51　第 15 面　遺物（13）
図版 52　第 15 面　遺物（14）
図版 53　第 15 面　遺物（15）
図版 54　第 15 面　遺物（16）
図版 55　第 15 面　遺物（17）
図版 56　第 15 面　遺物（18）
図版 57　第 15 面　遺物（19）
図版 58　第 15 層　遺物（1）
図版 59　第 15 面　遺物（20）・第 15 層　遺物（2）
図版 60　第 16 面・第 16 層　遺物
図版 61　第 17 面　遺物

第 1 章　調査にいたる経緯と経過、調査の方法

第 1 節　池島・福万寺遺跡発掘調査の経緯と経過

河内平野南東部は、旧大和川水系の河川活動によって地形形成に多大な影響を受けてきた。特に近年、平野部の急激な市街化の進行とそれに伴う水田・溜池の激減などの影響で、地域の貯水・保水能力が著しく損なわれる事態が生じた。さらに地下水の汲み上げによる地盤沈下が引き起こされたことから、浸水被害が頻発するようになった。

このような事態に対処すべく、大阪府は昭和 50（1975）年に幹線河川の川幅の拡張や堤防の補強、「多目的遊水地」の建設を盛り込んだ寝屋川流域総合治水対策事業を計画した。「多目的遊水地」とは、平常時はグランドや緑地公園として開放し、豪雨時に河川で処理しきれなくなった水を一時的に貯留して河川への負担を軽減し、河川の水位が落ち着いた後に放水するシステムを有する施設である。恩智川流域では花園多目的遊水地（平成 13 年完成）、恩智川（法善寺）多目的遊水地、およびこの池島・福万寺遺跡の所在する恩智川治水緑地が計画された。この恩智川治水緑地は、東大阪市池島町と八尾市福万寺町に総面積 40.2ha、総貯水量 165 万㎥の規模を有し、恩智川右岸側（東大阪市）の池島Ⅰ・Ⅱ期地区、左岸側（八尾市）の福万寺Ⅰ・Ⅱ期地区の 4 期に分割して整備されることとなった（図 1)。

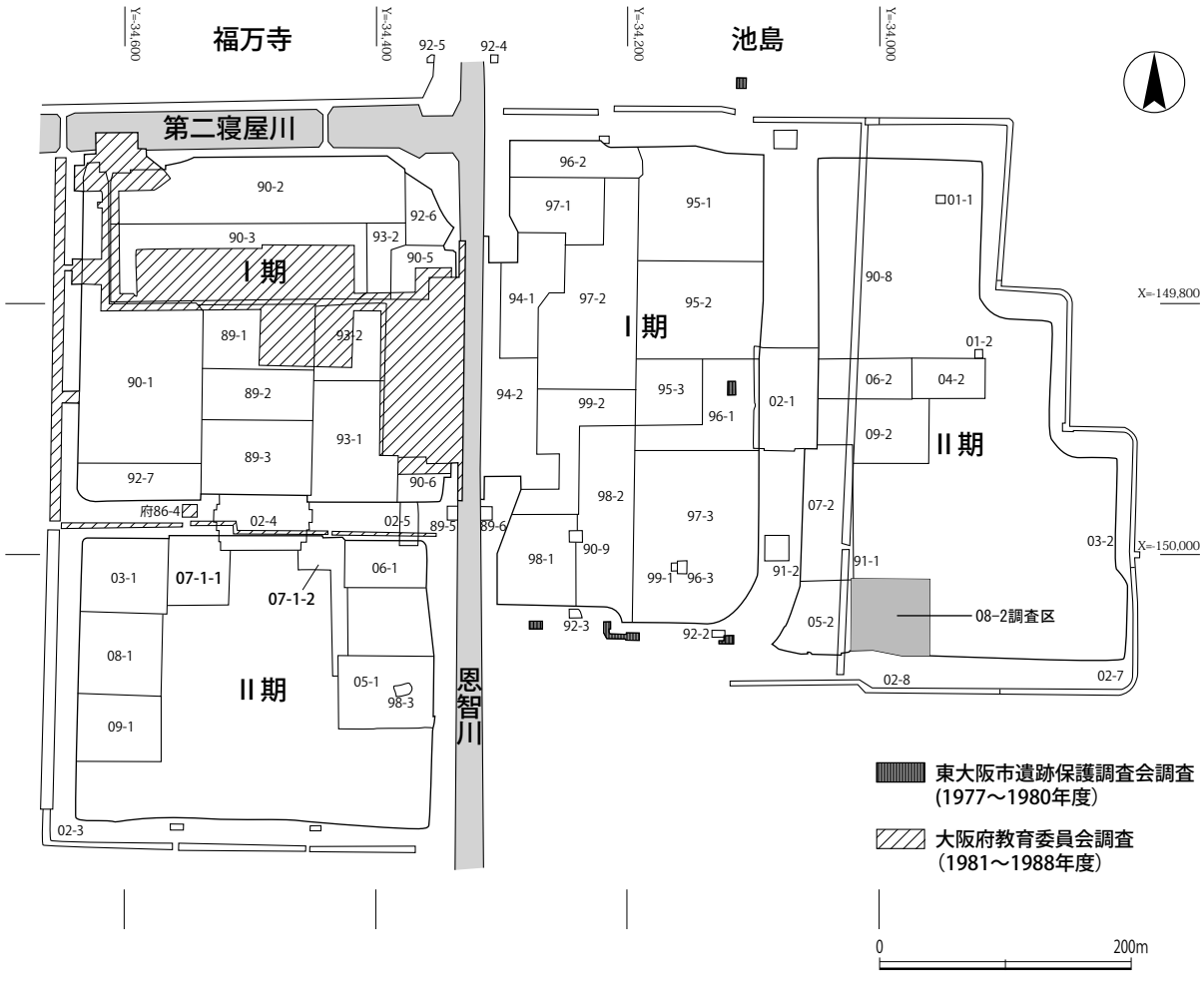


図 1　池島・福万寺遺跡調査区配置図（1/6000）

この恩智川治水緑地が計画された地域は、条里型地割が良好に遺存しており、「池島条里遺構」と呼称されてきた。昭和 47(1972)年に東大阪市遺跡保護調査会によって府立池島高校 (現:みどり清朋高校) 敷地内で発掘調査が行われたのを嚆矢に、昭和 52 ～ 55(1977 ～ 1980) 年には水道管埋設に伴う発掘調査が行われ、当地域が条里制地割の起源から現行地割にいたる変遷を追える遺跡であること、さらにその下層には弥生・古墳時代の遺構・遺物が存在していることが明らかとなった。そこで、恩智川治水緑地建設に先立って大阪府土木部都市河川課と大阪府教育委員会との間で埋蔵文化財の取り扱いについて協議がなされた。そして、その合意に基づいて昭和 56・57(1981・1982) 年に実施された福万寺Ⅰ期地区における試掘調査の結果、現地表下 2.5 mまで条里遺構が重層的に遺存し、さらにその下層でも弥生時代前期の遺物包含層・遺構が遺存していることなどが判明した (大阪府教育委員会 1982・1983)。この結果を踏まえて再度協議が行われ、現状保存は不可能であること、破壊が不可避な場所については発掘調査を実施し、記録保存を図ることが合意された。そして、昭和 59(1984) 年から大阪府教育委員会によって福万寺Ⅰ期地区の外堤部・越流堤・排水門・導水管など、治水緑地として必要となる機能部分から発掘調査が開始された。これらの施設部の調査終了後、池床部の調査体制について検討がなされた結果、平成元 (1989) 年から (財) 大阪文化財センター (現：公益財団法人大阪府文化財センター)(平成 7 年 4 月～ (財) 大阪府文化財調査研究センター、平成 14 年 4 月～ (財) 大阪府文化財センター) が発掘調査を担当することとなった。以後、福万寺Ⅰ期地区の調査を平成元 (1989) 年 4 月から開始し、平成 7 (1995) 年 3 月に終了した。池島Ⅰ期地区に関しては、平成元 (1989) 年から当センターによって部分的な確認調査が行われ、平成 6 ～ 13(1994 ～ 2001) 年度にかけて施設部・池床部の調査を実施した。

Ⅰ期地区の調査終了に合わせて平成 14(2002) 年 2 月から池島Ⅰ・Ⅱ期地区間の、平成 15(2003) 年 2 月から福万寺Ⅰ・Ⅱ期地区間の諸施設建設に先立つ調査が開始された。池床部の調査は、福万寺Ⅱ期地区は平成 15(2003) 年から、池島Ⅱ期地区は平成 16(2004) 年から開始された。

なお､現地調査を進めていく中で､現地公開を平成 21 年 7 月 4 日(弥生時代後期～古墳時代遺構面)と、平成 22 年 2 月 20 日 (弥生時代中期後葉遺構面) に行った。また、報道資料提供を行って平成 21 年 11 月 21 日～ 12 月 6 日に府立近つ飛鳥博物館においてスポット展示｢速報！ 4 世紀の池島･福万寺遺跡」を、平成 22 年 7 月 8 日～ 8 月 6 日に府立弥生文化博物館においてスポット展示「速報！弥生の人形土製品と石棒－池島･福万寺遺跡出土－」、同年 8 月 7 日～ 9 月 3 日まで弥生プラザ展示「発見！池島･福万寺遺跡の弥生時代前期のムラ」をそれぞれ行った。さらに、現地において平成 20 年 12 月 9・10 日東大阪市立池島中学、平成 21 年 3 月 17 日府立千里青雲高校、同年 7 月 27 ～ 31 日府立今宮高校、同年 10 月 15 日和光高校、平成 22 年 7 月 8 日、JAICA の研修生 4 名に発掘体験を実施した。(後藤)

第２節　調査の方法

本調査の方法については、例言にも述べたとおり当センターの『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』(2003 年）に沿って行った。まず、調査名であるが、調査開始年度と請負契約に記された工区数字の順に略称を付与している。本書に関わる調査は、「池島・福万寺遺跡Ⅱ (その 10）⇒ 08 － 2 調査区」と呼称され、文中に関連する当センターが調査を行った既往の調査区名についても、こうした呼称に統一して説明を行う。調査区名については、トレンチは一箇所であるため特段設定しなかった。但し、航空測量の撮影を含めた作業の効率化や廃土置き場等の関係上、南北に分割して調査を進めていった。ただし遺構面によっては作業の進行上、適宜、東西に２分割して調査を進めた。また、調査開始後すぐに攪乱が広範囲に及んでいることが判明し、深さが第 10 面に達するものもあった。未調査区へと繋がる東側に関しては、法面が崩落し遺構面が削平される可能性があったため勾配をゆるくするための拡張区を設定した。第 10 面以下に関しては攪乱が及んでいなかったため当初設計の勾配に戻した。写真撮影時のラベルには、北半部・南半部、東半部・西半部、拡張区、北西部といった呼称を適宜使用して撮影を行ったが、本報告においてはこの呼称は用いない。

調査は世界測地系に基づいた国土座標軸を使用しており、本報告においてもすべてその方式に従った。また、当センターでは大阪府内全域を共通の地区割りで統一し、国土座標軸を基準線として第Ⅰ～Ⅵ区画までの６段階の地区割りを設定している (図 2)。今回の調査ではこのうち第Ⅰ～Ⅳ区画までを用いた。

調査地の座標は既知の３級基準点をもとに基準点測量を行い、上記の基準に則り、調査地内に 10 m 間隔で基準杭を設定した。このようにして設定した地区割りは実測図作成の基準や遺物取り上げ単位に用いた。

池島・福万寺遺跡の調査では、全体の遺跡の理解や隣接する調査地との整合性を図るために、国土座標軸に則って南北・東西方向とも 20 m間隔にトレンチを設定し、後述する「人力掘削３」や地層の観察や記録に用いることになっている。しかし、今回の調査地では、トレンチ設定箇所のひとつである Y= － 34,000 ライン部分に坪境が、Y= － 33,980 ライン部分に現代攪乱がそれぞれ南北方向にはしっており、十分その機能を果たさないことが予想されたため、図３のとおりにトレンチを設定した。

池島・福万寺遺跡Ⅰ期地区における発掘調査では、現代盛土および現代の旧耕作土層を重機によって取り除いた後、人力掘削を開始していた。しかし、池島・福万寺遺跡Ⅱ期地区の調査においては、現代盛土および現代の旧耕作土層を重機によって取り除いた後、東西・南北方向共に 20 m間隔で幅２m のトレンチを設定して人力掘削 (「人力掘削３」）による調査を行った上で、近世後期面 (第２－１面）までの地層 (１層・１ｂ層）を再び重機で掘削し、以下、人力掘削による調査を行った。

調査においては、国土座標軸を用い、標高は東京湾平均海面 (T.P.）を基準としている。

各遺構面の測量は、縮尺 100 分の１の平板測量を基本としているが、周辺調査区との関連や、調査上重要であると判断した遺構面については航空測量に伴う測量を実施した。遺構図に関しては各遺構によって任意の縮尺を設定して平面図・断面図・立面図などを作成した。　（井西）

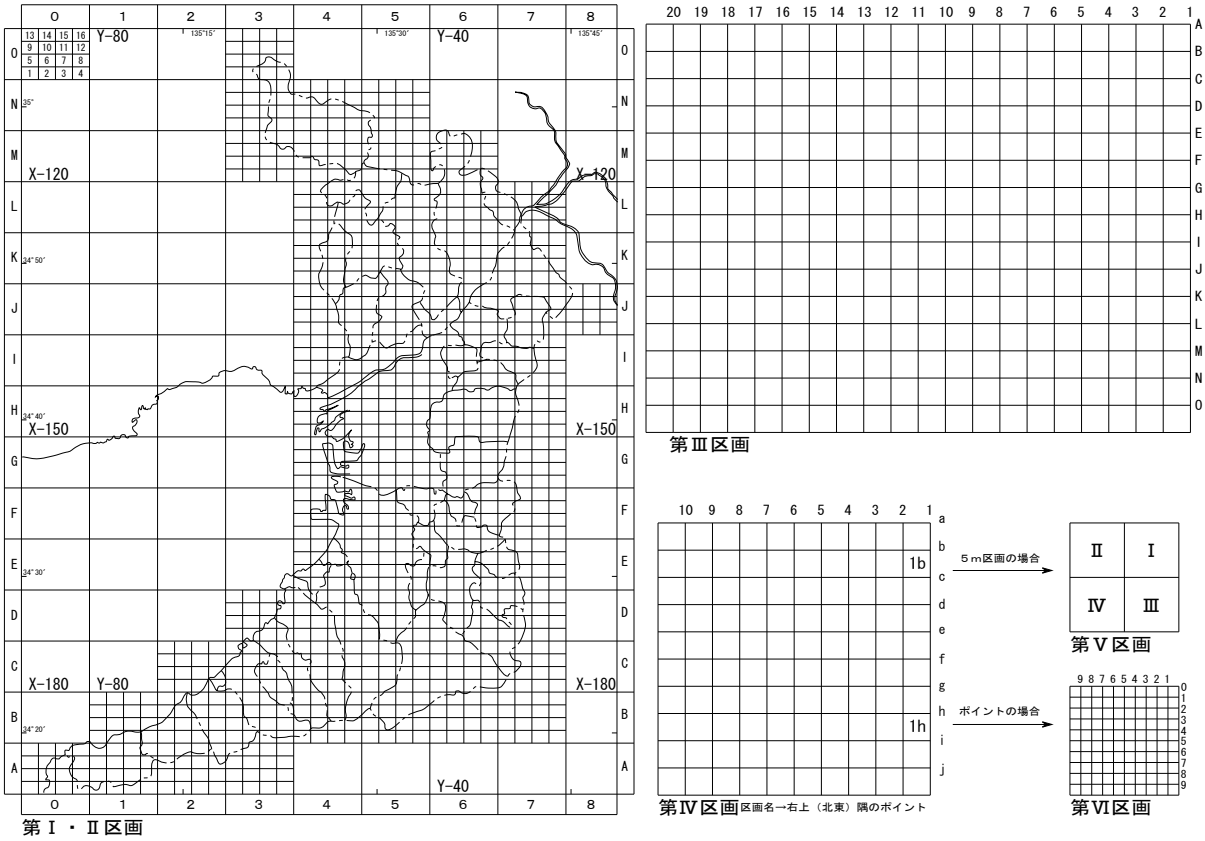


図２　国土座標地区割り図

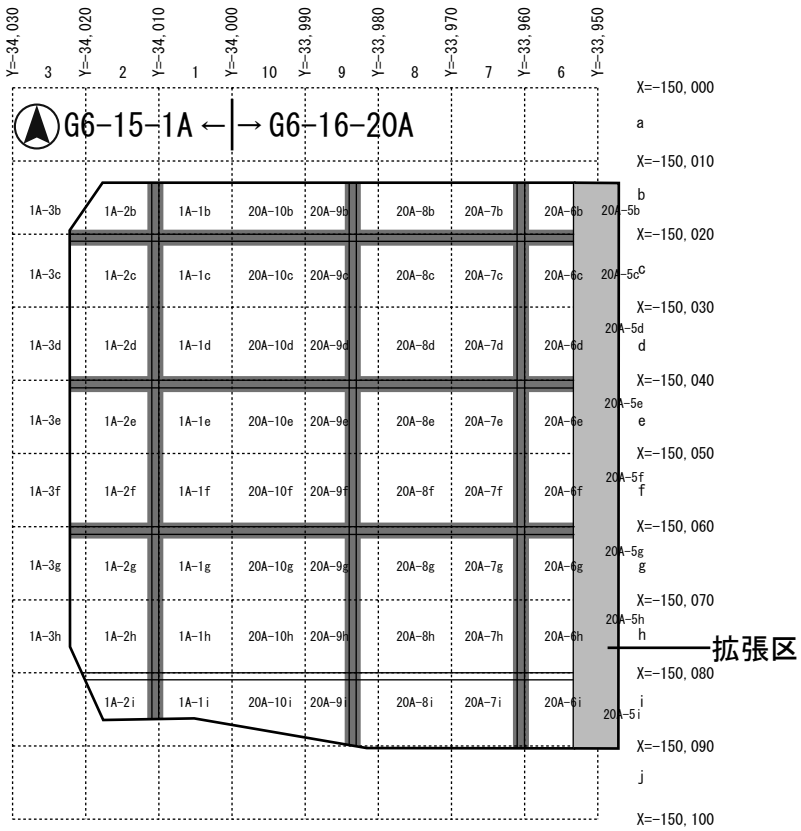


図３　08-2調査区地区割り図

第２章　基本層序

池島・福万寺遺跡における Ⅰ 期地区では、既往の調査成果により基本層序が確立されている (福万寺 Ⅰ 期地区 (財団法人　大阪府文化財センター　2002 年『池島・福万寺遺跡』 2)、池島 Ⅰ 期地区 (財団法人　大阪府文化財センター　2007 年『池島・福万寺遺跡』 3)。

しかし今回の調査区は、Ⅰ 期地区と距離的に離れていること、必ずしも同一層が堆積していないことを考慮し、Ⅰ 期地区および西側で隣接する 05 － 2 区調査区 (財団法人　大阪文化財センター　2008 年『池島・福万寺遺跡』 7) との対応関係を検討しつつも、本調査区固有の堆積層も含め本調査区内での基本層序を設定した。よって必ずしも既往の調査の層序名と一致しているわけではない。05 － 2 区調査区と層序番号は異なるが、同位層と認識できる層などの対応関係は本文中に記した。層序番号が同一とならないのは、本調査区が 05 － 2 区調査区より標高が高く、地層が東に向かうにつれて収斂するなどが理由である。

ただし、Ⅰ 期地区で確立された基本層序において、層番号が時期を含意とするものうち本調査区で確認されなかった層、第 8・9 層に関しては、混乱をさけるため本調査区基本層序番号からはずした。よって第 10 層は従来から認識されていた古墳時代包含層および作土層である。

第１層　T.P. ＋ 5.0 m。近・現代作土層。T.P. ＋ 4.8 ～ 5.1 m、層厚約 0.05 ～ 0.3 mを測る。撹乱部以外調査区全域で確認され 2 層 (1 － 1、1 － 2) に細分できる。層名は第 1 － 1 層がオリーブ灰色シルト～中砂、中砂主体の土層であり、第 1 － 2 層が灰黄色シルト～細・中砂、細砂主体の土層である。1 b 土坑は第 1 － 1 層下面で検出したものと第 1 － 2 層下面で検出したものとにわかれる。

第１ｂ層　T.P. ＋ 4.8 m。調査区全域に及ぶ洪水堆積層である。層名は灰黄色粗砂～極粗砂で中砂主体である。層厚 0.1 ～ 0.2 mを測る。

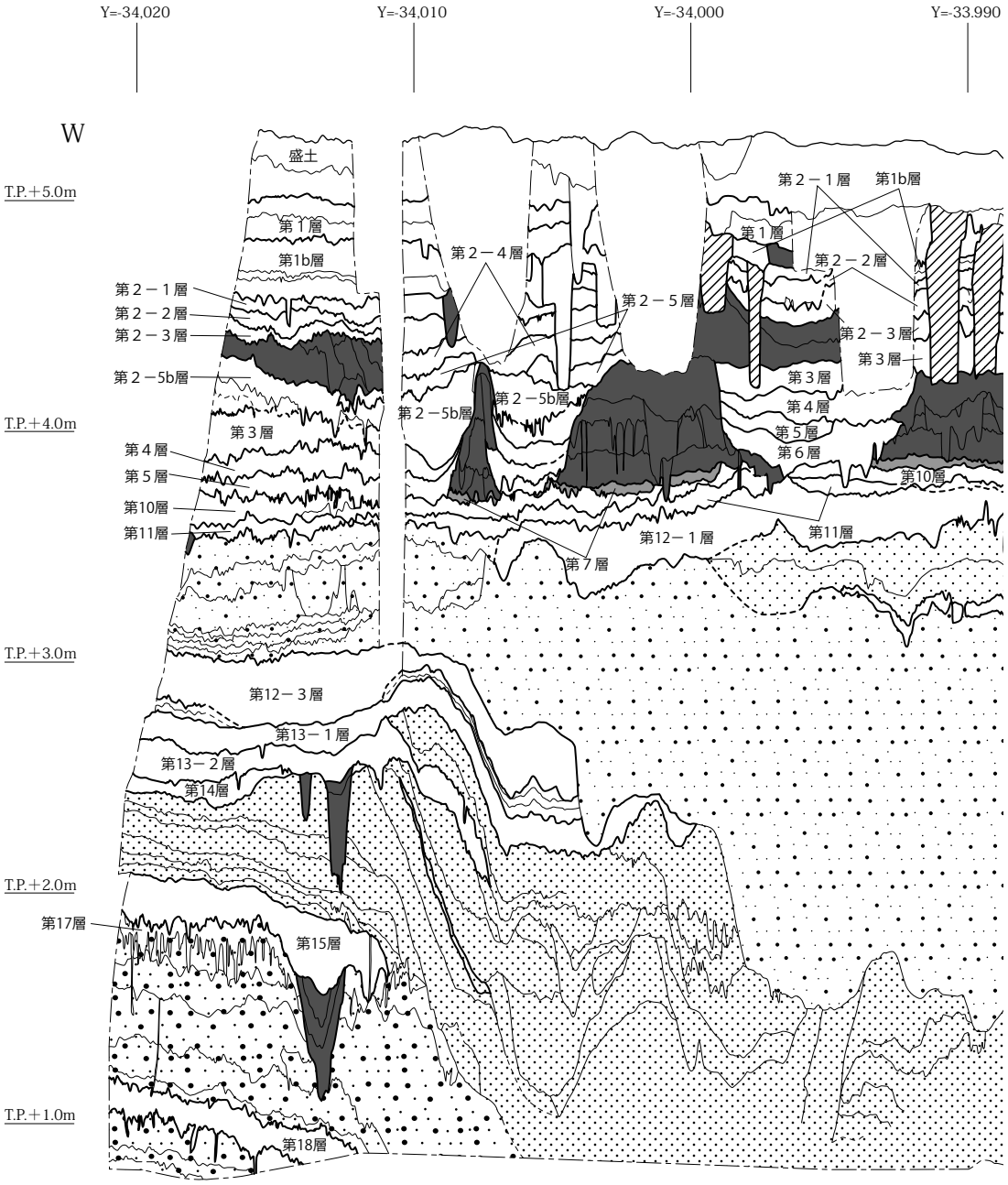
遺物は古代から中世の遺物が若干混入しているが、主として近現代の陶磁器・瓦などである。

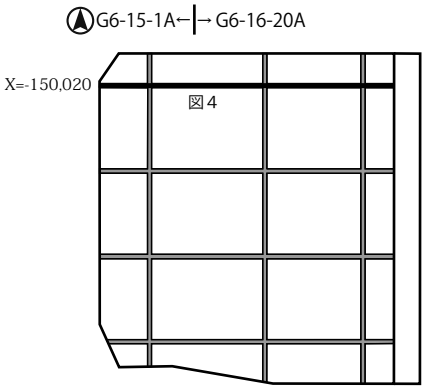
上記 2 層をトレンチによる断面観察調査を行った後、重機で掘削した。

第２層　T.P. ＋ 4.7 ～ 4.8 mで検出し、層厚は西側で 0.4 ～ 0.5 m、東側は第 2 － 3 層までは確認されたが、それ以下は部分的な堆積しか確認されず層厚 0.2 ～ 0.4 mである。洪水後に耕作が行われた結果形成された作土層を中心とする土層である。出土遺物や本調査区周辺で行われた調査成果の積み重ねから、近世に位置づけられる。本調査では、これを以下のように 6 層に細分した。

第 2 － 1 ～ 2 － 5 層は、細粒砂～極粗粒砂を多く含むシルト質あるいは砂質の作土層である灰黄 (2.5Y6/2)。一方、最下層の第 2 － 5 b 層は、黄灰 (2.5Y6/1) を呈し、中砂～極粗砂を主体とする砂質礫の洪水堆積層である。第 2 － 1 層～第 2 － 3 層については、調査区のほぼ全域で検出されたが、第 2 － 4 層および第 2 － 5 層、第 2 － 5 b 層は、Y= － 340,008 付近に位置する坪境から西側を中心に堆積しており、坪境から東側では基本的に確認することができなかった。ただし、第 3 層以前において相対的に低くなっていたと考えられる 49 島畠 (第 4 面)(X= － 150,050 以南)・51 島畠 (第 4 面) 付近の水田面では、第 2 － 4 層～第 2 － 5 b 層の堆積がみられた。時期は近世に比定できる。

【第２－１層】　作土層。上面は第 2 － 1 面。T.P. ＋ 4.8 ～ 4.5 mにおいて検出し、層厚は 0.1 ～ 0.3 m を測る。灰黄 (2.5Y6/2) シルト～細砂を含むシルトを主体とする。遺物は土師質土器、瓦質土器、陶磁


Y=-34,020
Y=-34,010
Y=-34,000
Y=-33.990
W
T.P.＋5.0m
T.P.＋4.0m
T.P.＋3.0m
T.P.＋2.0m
T.P.＋1.0m
盛土
第１層
第1b層
第２－１層
第２－２層
第２－３層
第２－5b層
第３層
第４層
第５層
第10層
第11層
第２－４層
第２－５層
第２－5b層
第２－5b層
第１層
第２－１層
第1b層
第２－２層
第２－３層
第３層
第３層
第４層
第５層
第６層
第10層
第11層
第12－１層
第７層
第12－３層
第13－１層
第13－２層
第14層
第17層
第15層
第18層


G6-15-1A
G6-16-20A
X=-150,020
図４

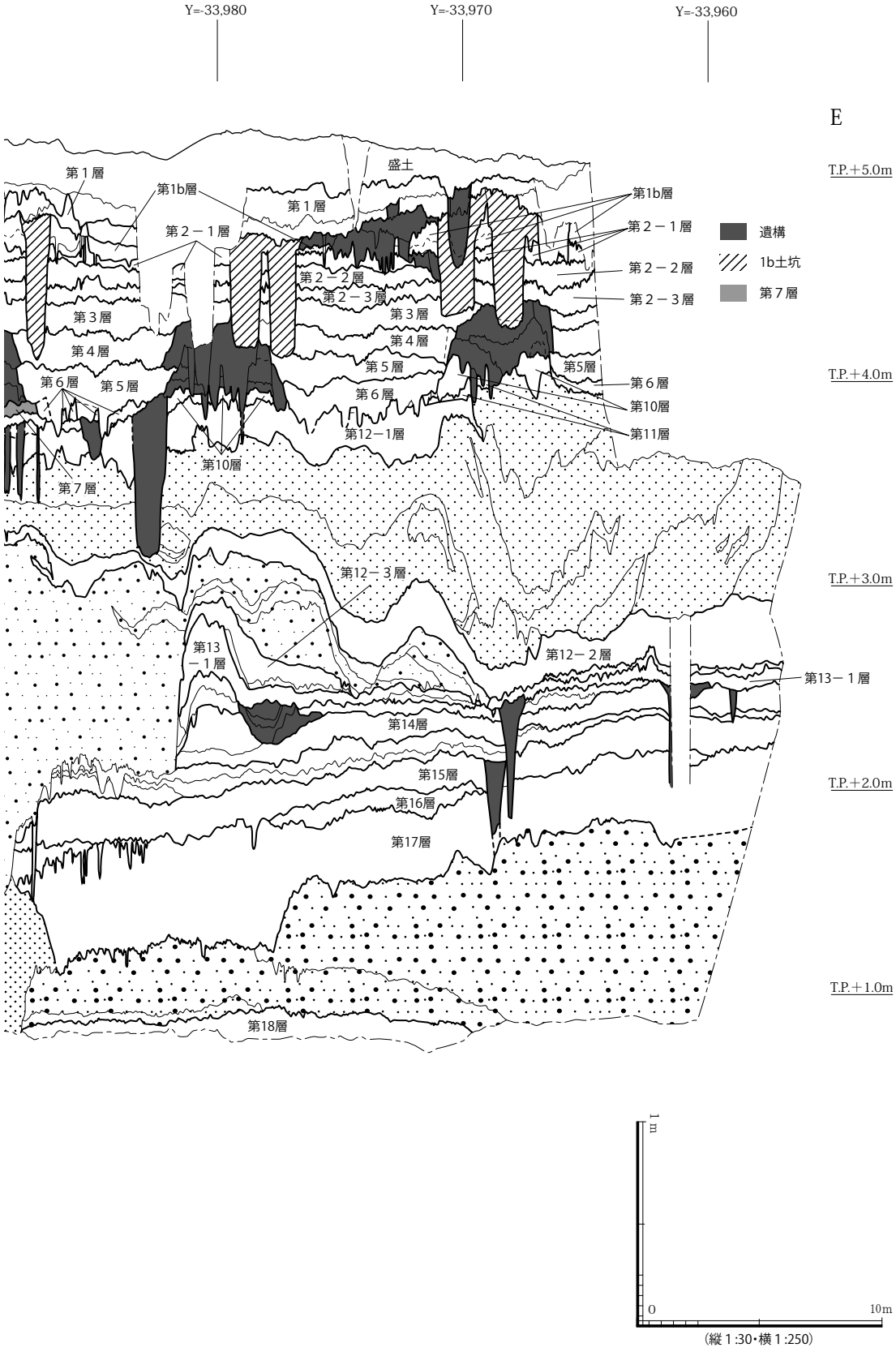


図４　基本層序断面模式図
（縦Ｓ＝１:30・横Ｓ＝１:250）

器 (黄瀬戸・瀬戸) などが出土した。

【第２－２層】 作土層。西側では T.P. ＋ 4.7 m、東側で T.P. ＋ 4.5 m、層厚は 0.05 ～ 0.1 mを測る。上面において遺構を検出できなかった。灰黄 (2.5Y6/2) シルト～粗砂を主体とする。第２－１層および第２－３層と比較して砂粒を多く含む。遺物は土師質土器、瓦質土器、陶磁器 (備前) などが出土した。

【第２－３層】 作土層。上面は第２－３面。西側で T.P. ＋ 4.6 m、東側で T.P. ＋ 4.4 ～ 4.5 mで検出し、層厚は 0.1 ～ 0.15 mを測る。灰黄 (2.5Y6/2) 極細砂～粗砂を含むシルトを主体とする。鉄分・マンガンの沈着が顕著である。遺物は土師質土器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器 (信楽、唐津、瀬戸) などが出土した。

【第２－４層】 作土層。上面は第２－４面。西側で T.P. ＋ 4.4 m、東に向かって Y= － 34,000 あたりで収斂する。層厚は 0.1 ～ 0.2 mを測る。坪境から西側を中心に分布し、一部が 49 島畠 (X= － 150,050 以南)・51 島畠付近の田面付近に堆積していた。灰黄 (2.5Y6/2) 極細砂～粗砂を含むシルトを主体とする。鉄分の沈着が顕著であり、第２－３層と比較して砂粒を多く含む。遺物は土師質土器甕、瓦質土器すり鉢、瓦器埦、陶磁器 (備前すり鉢) などが出土した。

【第２－５層】 作土層。上面は第２－５面。西側で T.P. ＋ 4.5 m、東側で T.P. ＋ 4.3 mで検出し、層厚は 0.1 ～ 0.2 mを測る。第２－４層と同様に坪境から西側を中心に分布し、一部が 49 島畠 (X= － 150,050 以南)・51 島畠付近の田面に堆積していた。とくに坪境から西側では、第３層以前において相対的に低くなっていたと考えられる部分で層厚が厚くなる傾向がある。褐灰 (10YR4/2) シルト～粗砂を含む中砂を主体とする部分と、暗灰黄 (2.5Y5/2)・灰 (7.5Y5/1)、シルトブロックを含む細砂～粗砂を主体とする部分から構成される。これは、第２－５層が第２－５ｂ層を母材として成立し、土壌化がすすんだ部分とそうでない部分が形成された結果であると推測される。遺物は土師質土器甕、小皿、瓦質土器すり鉢、備前すり鉢、灰釉陶器、瓦などが出土した。

【第２－５ｂ層】 洪水堆積層。西側で T.P. ＋ 4.3 ～ 4.4 m、東に向かって Y= － 33,990 付近で収斂する。層厚は、0.1 ～ 0.4 mを測る。第２－４層および第２－５層と同様に、坪境から西側を中心に堆積しており、一部が 49 島畠 (X= － 150,050 以南)・51 島畠付近の田面付近に確認できた。とくに、第３層以前の段階に位置づけられる島畠の肩部付近に厚く堆積する傾向がみられるため、一部の島畠付近では第２－４面および第２－５面検出時に、第２－５ｂ層を平面的に検出した。黄灰 (2.5Y6/1) 中砂～極粗砂を主体とする。0.5 ㎝大の礫をまばらに含み、部分的にラミナがみられる。遺物はほとんど含まれていなかった。本層の分布状況から、第２－５ｂ層をもたらした洪水の起源は、南西および南東に求められると推測できる。

第３層　作土層。上面は第３面。西側で T.P. ＋ 4.2 m、層厚 0.1 ～ 0.3 m、東側で T.P. ＋ 4.35 m、層厚 0.1 ～ 0.15 mを測る。条里坪境付近およびそれ以西は暗青灰～青灰 (10BG4/1 ～ 5 BG5/1) の極細砂～中砂混じり粘質シルト、それ以外の部分では暗灰～灰 (2.5Y5/2 ～ 5Y5/1) 中砂～粗砂混じりシルトである。尚、条里坪境より西側、X= － 150,040 より北側には本層上層に青灰 (10BG5/1) 中砂混じり粘質シルト層が部分的に確認された。おそらくこの層が 05 －２調査区で報告されている第３層の細分された上層３－１層に相当すると考えられ、本調査区の基本層序第３層は 05 －２調査区で第３－２層と報告されている層位に相当するものと推測される。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器などが出土した。時期は 15 世紀前半に比定される。

第４層　作土層。上面は第４面。西側で T.P. ＋ 4.0 m、東側に向かって高くなり T.P. ＋ 4.3 m、層厚 0.15

～ 0.20 mである。坪境付近およびそれ以西は暗青灰～灰 (5 BG5/1 ～ 5Y5/1) 極細砂～粗砂混じりシルトで、それ以外では灰～黄灰 (5Y5/1 ～ 2.5Y6/1) 細砂～粗砂混じり粘質シルトである。第 3 層より極細砂～粗砂を多く含む。遺物は土師器片、須恵器片、土師質土器、瓦質土器 (すり鉢・鍋)、陶磁器 (備前) などが出土した。時期は 14 ～ 15 世紀前半に比定される。

第 5 層　作土層。上面は第 5 面。西側で T.P. ＋ 3.9 ～ 4.0 m、東側で T.P. ＋ 4.0 ～ 4.1 m、層厚 0.10 ～ 0.20 mを測る。坪境付近およびそれ以西は暗青灰～青灰 (5 B 4/1 ～ 5 BG5/1) シルト～中砂であり、当該部分の第 4 層に比して砂礫が多く含まれる。それ以外ではオリーブ灰～暗灰黄 (5GY5/1 ～ 2.5Y5/2) 細砂～粗砂混じりシルトであり、第 4 層より多くの粗砂が含まれていた。遺物は弥生土器片、土師器 (古墳時代)、須恵器片、土師質土器、瓦質土器 (風炉・すり鉢)、陶磁器 (信楽)、瓦器埦などが出土した。時期は 14 世紀に比定される。

第 6 層　作土層。上面は第 6 面。西側で T.P. ＋ 3.9 ～ 4.0 m、東側で T.P. ＋ 4.0 ～ 4.1 m、層厚 0.10 ～ 0.20 mである。坪境付近およびそれ以西は暗青灰～青灰 (5 B 4/1 ～ 5 BG5/1) シルト～中砂であり、当該部分の第 5 層に比してシルトの割合が多くより粘質であった。それ以外では暗灰黄～灰 (2.5Y5/2 ～ 5Y5/1) 細砂～粗砂混じりシルトである。遺物量は他に比して多く、弥生土器片、土師器 (古墳時代初頭から古代)、須恵器片、土師質土器 (小皿、甕)、瓦質土器 (風炉・すり鉢)、瓦器埦などが出土した。時期は 13 世紀後半に比定される。

第 7 層　作土層。上面は第 7 面。西側で T.P. ＋ 3.7 ～ 3.8 m、東側で T.P. ＋ 3.8 ～ 3.9 m、層厚 0.10 m以下である。にぶい黄～暗灰黄 (2.5Y6/3 ～ 5/2) シルト混じり極細砂層である。他層に比して容易に識別可能であった。上部が島畠である箇所は比較的良好に遺存しているのに対し、水田域と考えられる箇所や第 10・11 面で微高地である調査区北東部分では認められなかった。耕作などに伴って削平されたものと考えられる。時期の確定できる遺物の出土なかった。

第 10・10b 層　第 10 層は古墳時代前期から中期の包含層および作土層。上面は第 10 面。西側で T.P. ＋ 3.75 ～ 3.8 m、東側で T.P. ＋ 3.9 ～ 4.0 m、層厚 0.10 ～ 0.15 mを測る。調査区西側では暗青灰～オリーブ灰 (5 BG4/1 ～ 5GY4/1) 極細砂～細砂混じりシルト層、水田畦畔が検出された調査区北側および南東部では灰黄 (2.5Y6/2) シルト～細砂層 (マンガン含む)、集落跡を検出した微高地を含む北東部では褐灰～灰黄褐 (7.5YR6/1 ～ 10YR5/2) シルト～極細砂層である。

第 10b 層は第 10 層下面、部分的に残存していた。上面は第 10b 面。調査区北西部 (Y= － 34,000 以西) および南東部など比較的標高の高い部分では確認できなかった。灰～灰オリーブ (5Y5/1 ～ 6/2) 極細砂～粗砂が主体の自然堆積層である。弥生土器片、庄内式期、布留式期の土器片が出土した。

第 11 層　上面は第 11 面。弥生時代後期から古墳時代前期包含層。良好に遺存していたのは調査区北西部のみである。第 10 層の細分とも捉えられる層であるが、検出された遺構に明確な時期差が見られたことから層名を付した。地形の下がっている東側部分では青灰 (10BG5/1) シルト層 (鉄分を多く含む。)、西側部分では褐灰～黒褐 (10YR4/1 ～ 4/2) 粘質シルト層である。

第 12 層　第 13 面の上を覆う洪水堆積層で、層厚は 0.4 ～ 1.6 mを測る。この第 12 層の堆積を境に地形は大きく変容し、調査区北東部に微高地が形成され、第 10・11 層上面で集落域が展開する。当該層は上から 3 層に大別できた。大別した 3 層の上面はいずれも顕著な土壌化層は存在せず、一連の洪水堆積層と考えられるが、第 13 面で検出した流路や溝は第 12 層の堆積過程の途中で埋没することなどから、当該層を 3 回に分けて掘削して調査を行った。

【第 12 － 1 層】 第 12 － 2 層の上に堆積する。洪水堆積の中の最終堆積層で、部分的に堆積する。シルトおよび極細砂混じり細砂層である。層厚は 0.2 mを測る。上面の標高は T.P. ＋ 3.6 ～ 3.9 mを測る。

【第 12 － 2 層】 第 12 層の中で最も厚く堆積する層で、0.5 ～ 1.5 mの厚さを測る。細礫～粗砂の比較的荒い粒径をもつ洪水砂の堆積である。第 13 面の流路や溝はこの層の堆積によって埋没してその機能を失う。上面の標高は T.P. ＋ 3.5 ～ 4.0 mを測る。

【第 12 － 3 層】 灰色シルト層で、層厚 0.05 ～ 0.3 mを測る。越流堆積層と考えられ、細かいラミナが認められた。上面の標高は T.P. ＋ 2.1 ～ 3.1 mを測る。

第 13 層　弥生時代中期後葉の水田耕作土層および土壌化層である灰色極細砂混じりシルト層 (13 － 1 層) と、自然堆積層 (13 － 2 層) である緑灰色シルト層に大別できる。

【第 13 － 1 層】 作土層。当該層は既往の第 2 黒色土層と呼称される層である。調査区南東部で T.P. ＋ 3.0 m、北西部で T.P. ＋ 2.8 m、北東部で T.P. ＋ 2.5 mを測る。調査区南半部は第 17 面からの微高地化の影響が残るものの、北東部は水田域として利用される。南半部の微高地部分は青灰色 (5 B 5/1) シルト層が、水田域は灰色 (N4/0) 極細砂混じりシルト層が堆積する。

【第 13 － 2 層】 自然堆積層。第 13 － 1 面の基盤層である。緑灰 (10GY5/1) シルト層である。当該層は第 14 面で検出した 691 流路の両岸を中心に厚く堆積しており、調査区の東側および南側に向かって薄くなる。そのため、第 13 － 1 面は第 14 面に比して平坦化し、水田域として開発される要因となったと考えられる。T.P. ＋ 2.4 ～ 2.65 m、層厚は 0.05 ～ 0.2 mである。当該層上面で 2 条の溝を検出した。弥生時代中期後葉に比定される。

第 14 層　弥生時代中期前葉の層である。標高は東側と西側は T.P. ＋ 2.5 m、調査区中央部では T.P. ＋ 2.35 mである。土壌化層である灰色極細砂・細砂混じりシルト層 (既往の第 3 黒色土層) と、その下層に自然堆積層である暗青灰色シルト層が堆積する。さらに、調査区の南東部を中心に、南東－北西方向ににぶい黄 (2.5Y6/3) 粗砂～中砂層が第 15 面を浸食しながら堆積する。層厚はいずれの層も 0.1 ～ 0.2 mを測る。

第 15 層　上面は弥生時代前期中～新段階の遺構面 (第 15 面) である。既往の調査で確認されていない層で、第 4 黒色土層の上層に堆積する黒色シルト混じり中砂層である。上面は T.P. ＋ 1.9 ～ 2.35 mで、層厚は 0.15 ～ 0.25 mを測る。当該層上面、南東部に広がる微高地部分を中心に炉跡、土坑、ピット、木製品水漬け遺構、溝、流路などの遺構が多数検出された。

第 16 層　弥生時代前期中～新段階の遺構面 (第 16 面) の基盤層で、既往の調査で第 4 黒色土層と呼称されるものである。本調査区においては南東部から中央部を中心に遺存する。黒色シルト～極細砂層で、上面は T.P. ＋ 1.7 ～ 2.2 mである。層厚は 0.1 ～ 0.3 mを測る。当該層上面で掘立柱建物を検出した。

第 17 層　弥生時代前期中段階遺構面 (第 17 面) の基盤層である。東に厚く、西に向かって薄く堆積しており、第 15・16 面の微高地を形成する。標高は T.P. ＋ 1.9 ～ 2.2 mで検出した。上下 2 層に大別できた。上層は灰白～緑白色シルト層で層厚 0.1 ～ 0.6 mを測る。下層は灰色シルト～細礫層で厚さ 0.3 ～ 1 m 以上の堆積が認められた。当該層上面で木棺墓・土坑・ピットなどの遺構を検出した。

第 18 層　既往の調査で「第 5 黒色土層」と呼称される層である。T.P. ＋ 0.9 ～ 1.15 mで検出した。黒色シルト層および細砂層で層厚は 0.1 ～ 0.2 mを測る。当該層は第 17 層下層の洪水流による浸食と調査限界 (T.P. ＋ 0.9 m) によって部分的に確認できたのみである。黒色土層の下層には自然堆積層である緑灰色シルト層が堆積する。

(松尾奈緒子　飯田浩光　後藤　井西)

第３章　遺構と遺物

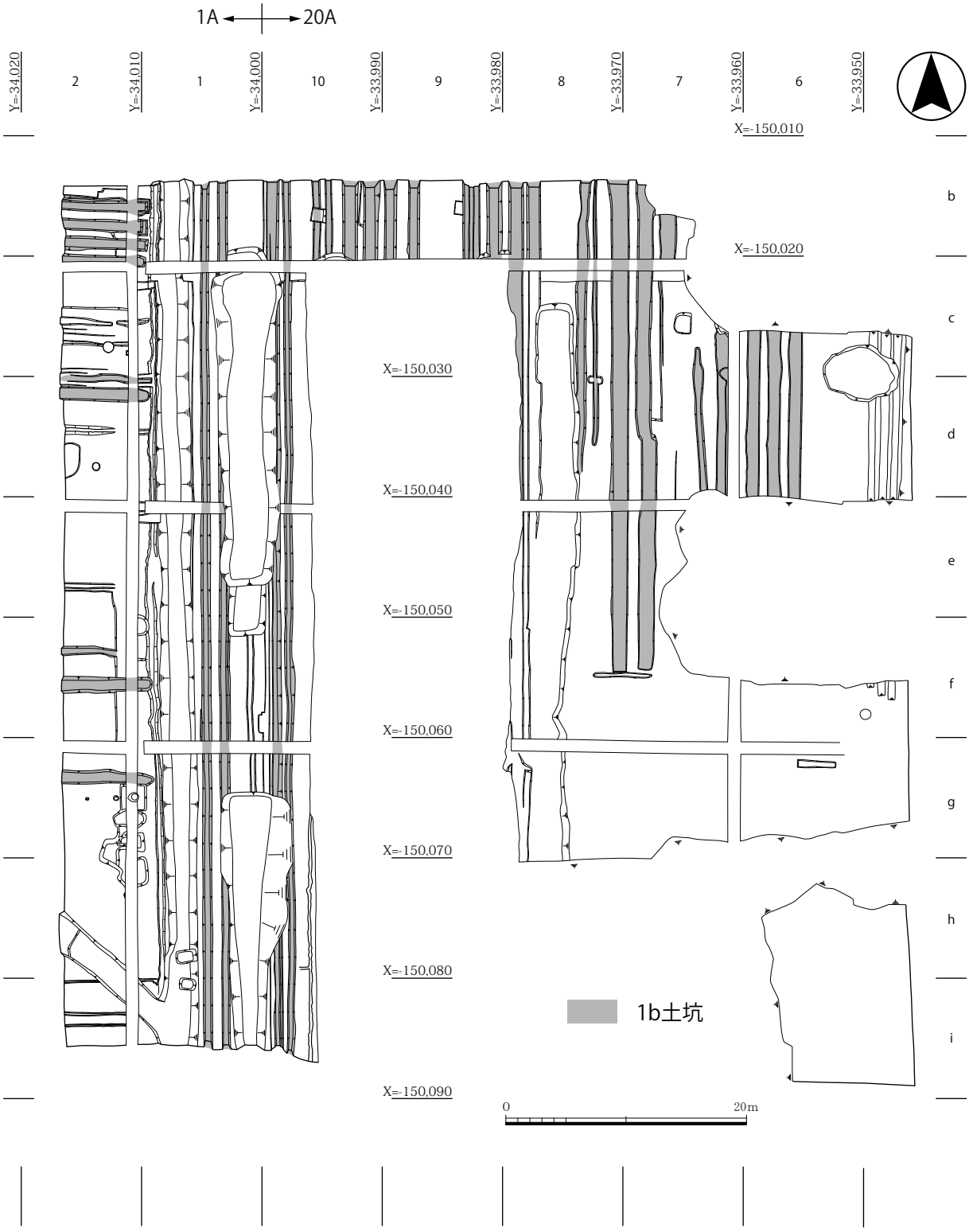
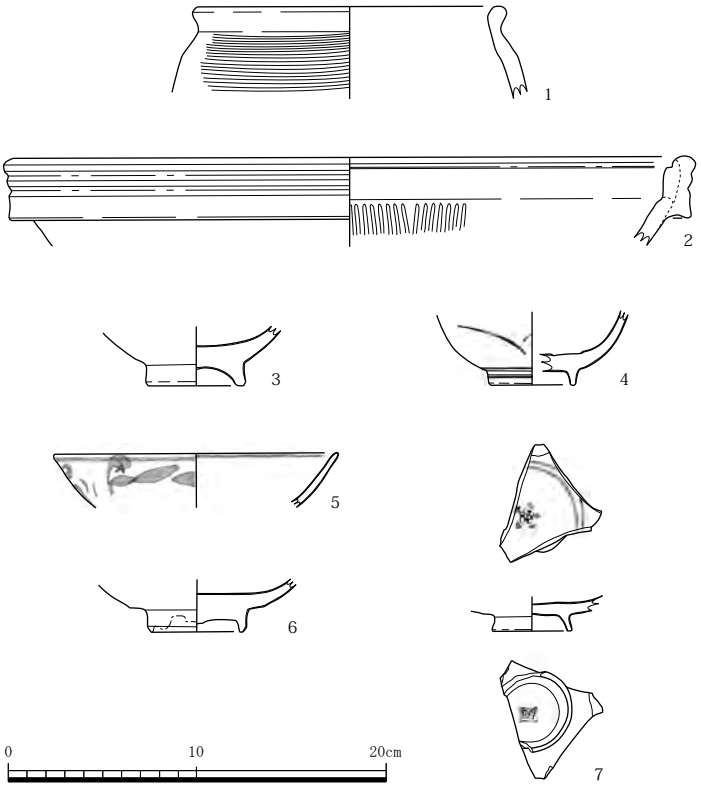


図５　第1b面　全体図（Ｓ＝１:500）

重機によって現代盛土層を除去し、現代耕土 (第 1 層) とその下層の洪水堆積土 (第 1 b 層) に関してはトレンチ調査を実施した。その後、再度重機によって第２－１層上面までを掘削し、当該面以降を人力掘削とした。

以下、各面毎に遺構全体図を示し、主要な遺構・遺物に関して記述する。なお図示した遺物の詳細については観察表にまとめた。



第１面・第１b 面 (図５、６・図版 29)

近・現代に属する耕作面である。面的な調査は実施していない。本調査区は坪境畦畔を境に西側が二十二ノ坪、東側が十五ノ坪である。１b 土坑の主軸方向は、二十二ノ坪では東西方向、十五ノ坪では南北方向をとる。遺物は古代から近世までの時期幅をもつ土器の小片が検出されたが量的には少ない。(１、２、６、７) が 1 b 層から、(3) が 1 ～ 1 b 層中、(4) が 1 層、(5) が 1 b 土坑内で出土した。(1) は近世陶器の甕、(2) は 18 世紀の堺すり鉢、(3) は近世陶器の瀬戸埦、(4) は 18 世紀の染付碗、(5) は 18 世紀の染付碗、(6) は 14 世紀の青磁碗、(7) は近世青磁染付の碗である。

図６　第１～1b層・1b土坑出土遺物実測図（Ｓ＝１：４）

第２－１面 (図７・図版２)

近世に属する耕作面。検出面の標高は、T.P. ＋ 4.8 ～ 4.5 mである。調査区のほぼ全域に広がるが、調査区南東部 (Y= － 33,969 および X= － 150,050 で囲まれる部分) では確認することができなかった。

遺構は西側でのみ検出され、坪境溝や水口、畦畔、溝を確認した。この１坪境溝より西側で検出された３・４畦畔および８～ 10 溝は主軸を東西方向にとり、１坪境溝より東側で検出された５溝、６畦畔は主軸を南北方向にとる。この傾向は、本調査区周辺の調査成果にも一致し、中世の遺構から継承されるものである。

１坪境溝　Y= － 34,007 付近、１Ａ - １b ～ h 区で検出した南北方向に縦断する溝である。第２－３面 11 坪境溝を踏襲したもので北側は調査区外に延び、南は撹乱に切られている。検出延長 67.5 m、幅 0.95 m、深さ 0.1 mを測る。埋土は１層 (第 1 b 層：灰黄 2.5Y7/2 粗砂～極粗砂) である。

３畦畔 (05 － 2 調査区 077 畦畔)　１Ａ -1・2d 区で検出した東西方向の畦畔である。検出長 4.1 m、幅 0.78 m、高さ 0.06 mを測る。

４畦畔 (05 － 2 調査区 078 畦畔)　１Ａ -2e 区で検出した東西方向の畦畔である。検出長 4.2 m、幅 0.48 m、高さ 0.08 mを測る。

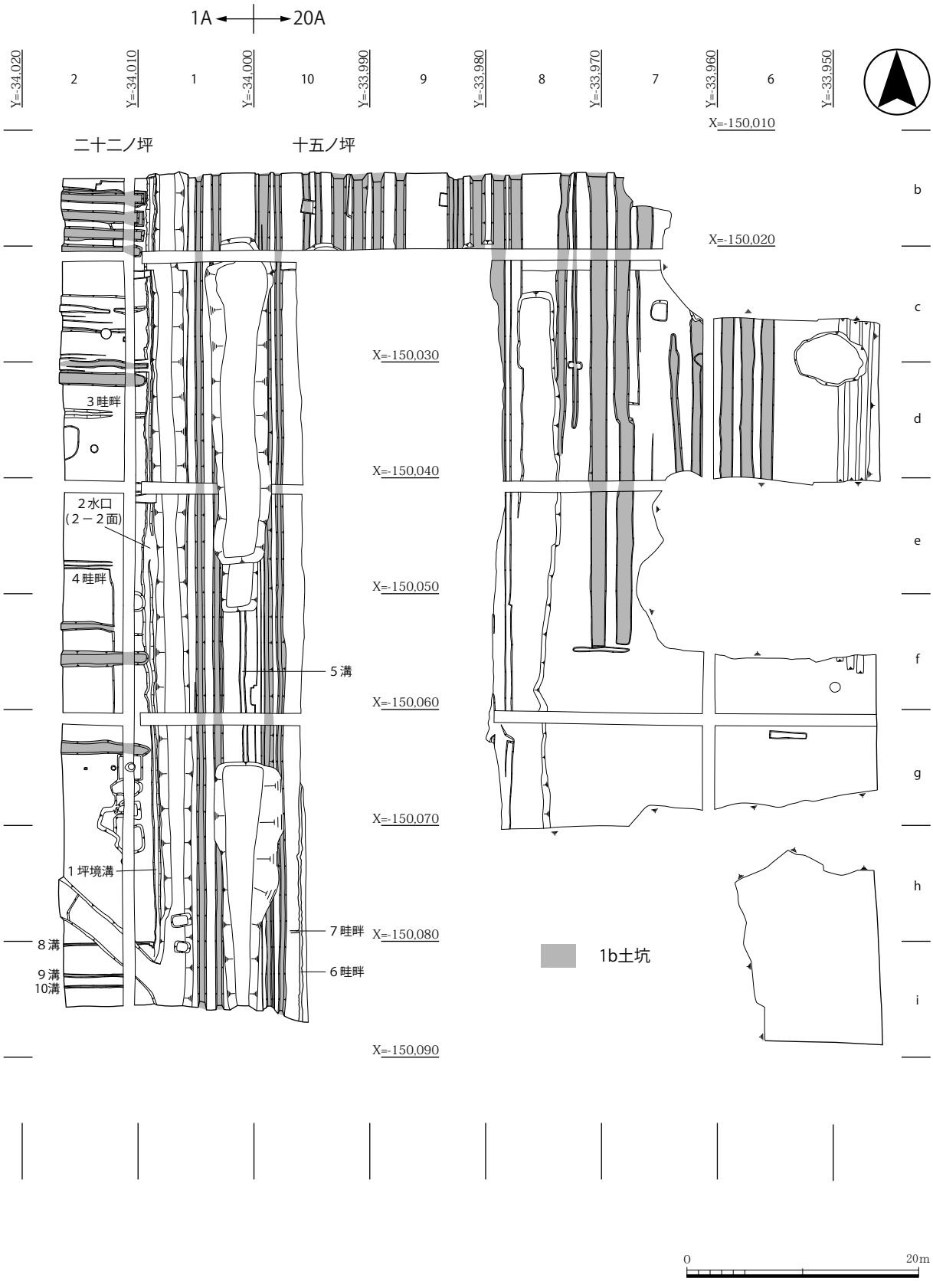


図7　第2－1面　全体図（S＝1：500）

6畦畔　20 A -10g ～ i 区で検出した南北方向の畦畔である。途中で途切れる箇所があるが、検出総延長 20.52 m、幅 0.43 m、高さ 0.06 mを測る。

7畦畔　20 A -10h 区で検出した東西方向の畦畔である。検出長 0.75 m、幅 0.22 m、高さ 0.03 mを測る。

5溝　1 A -1f・g 区で検出した南北方向の溝である。南北端は攪乱に切られる。検出延長 13 m、幅 0.54 m、深さ 0.07 mを測る。埋土は 1 層 (第 1 b 層) である。

8 ～ 10 溝　1 A -1・2i 区で検出した東西方向の溝である。いずれも東側は攪乱に切られ、西側は調査区外である。 8 溝は検出長 7.8 m、幅 0.22 m、深さ 0.09 mを測る。 9 溝は検出長 5.1 m、幅 0.3 m、深さ 0.09 mを測る。10 溝は検出長 5.07 m、幅 0.23 m、深さ 0.1 mを測る。いずれも埋土は 1 層 (第 1 b 層) である。

第 2 － 3 面 (図 8 ・図版 2)

近世に属する耕作面。検出面の標高は、T.P. ＋ 4.3 ～ 4.5 mである。調査区のほぼ全域に広がる。

遺構としては、坪境溝や溝、島畠などを検出した。11 坪境溝は、調査区南側の Y= － 34,007 付近で調査区を東西に区画するように南北に続くものである。また、調査区最北において、11 坪境溝の延長線上に、調査区外の北側に続く 13 溝が検出されており、13 溝も坪境溝である可能性が考えられる。このほかには、11 坪境溝よりも西側では長軸を東西とする 15・17 ～ 20 溝が、11 坪境溝よりも東側では 14 溝を除き長軸を南北とする 22・29 ～ 31 溝を確認した。さらに、11 坪境溝よりも西側では、第 3 層以下で検出されるような明確な盛土をもたない、島畠状の高まりおよびその痕跡を検出した。

12 島畠 (05 － 2 調査区 098 島畠) は南側へ低くなる段差をもち、16 島畠 (05 － 2 調査区 096 島畠)・**21 島畠** (05 － 2 調査区 091 島畠) は北側へ低くなる段差をもつ。

11 坪境溝　1 A -1e ～ h 区で検出した。Y= － 34,007 付近を南北方向に縦断する溝である。部分的に分断されているが、総延長 38 m、幅 0.25 m、深さ 0.06 mを測る。

13 溝 (図 9)　1 A - 1 b 区で検出した南北方向の溝である。坪境溝として機能していた可能性が指摘できる。北側は調査区外、南は攪乱に入って終わる。途中 1 b 土坑に切られるが、検出総延長 6 m、幅 0.2 m、深さ 0.09 mを測り、埋土は黄灰色シルト混細砂～粗砂で、ベース面である第 2 － 3 層由来の土を多く含む。

14 溝　1 A - 1 b 区で検出した東西方向の溝である。検出長 0.5 m、幅 0.2 m、深さ 0.05 mを測る。

15・17 ～ 20 溝 (図 9)　1 A -2c ～ g 区で検出した東西方向の溝である。東側はいずれも確認トレンチで切れているが、断面観察の結果さらに東に延びることが確認された。坪境まで続いていたものと推測される。検出長は約 5.5 m、幅 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.1 mを測る。埋土はいずれも 1 層である。

29 ～ 31 溝 (図 9)　20 A -7d 区で検出した南北方向の溝である。検出長 9 ～ 14 m、幅 0.5 ～ 1.5 m、深さ 0.1 mを測る。いずれも埋土は 1 層である。

12 島畠　1 A -2b 区で検出した東西方向の島畠であり、西側は 05 － 2 調査区側へ延び、北側は調査区外である。13 坪境溝には接続せず、手前で収束する。検出長約 5 m、検出幅 1 m、盛土はほとんど残っていなかった。

16 島畠　1 A -2c 区で検出した東西方向の島畠であり、西側は 05 － 2 調査区側へ延びる。北側は溝 (幅約 0.3 m、深さ約 0.05 m) を南側は土質の変化によって裾部を推定した。13 溝には接続せず、手前で収束する。検出長約 5 m、検出幅 1 m、盛土はほとんど残っていなかった。

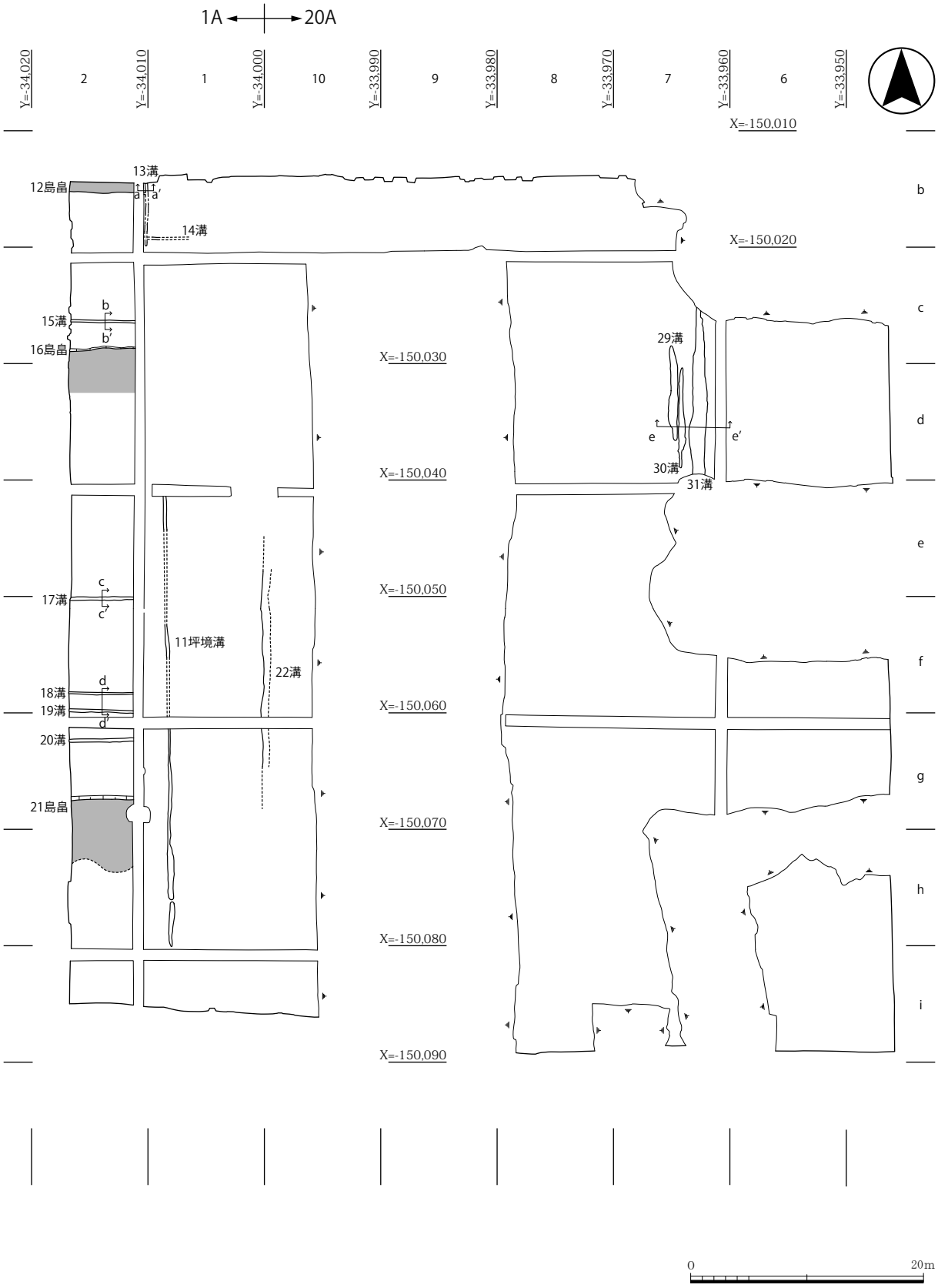


図８　第２－３面　全体図（S＝1:500）

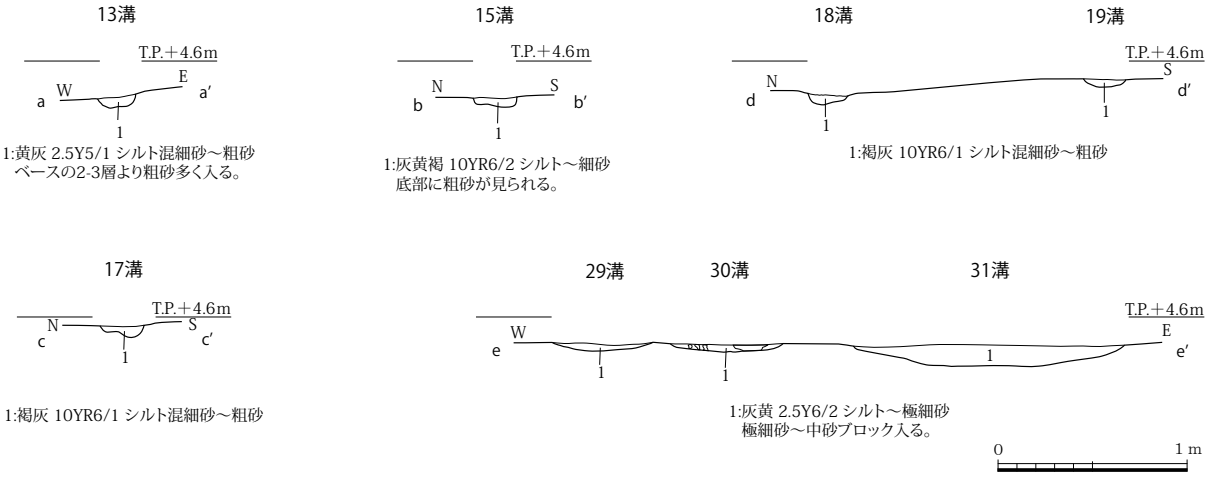


図９　第２－３面　13･15･17～19･29～31溝断面図（Ｓ＝１:40）

21 島畠　１Ａ-2g･h区で検出した東西方向の島畠であり、西側は05－２調査区側へ延びる。比高差0.4ｍを測る北側への落ちを検出した。13溝には接続せず、手前で収束する。検出長約5.4ｍ、南側の裾部は確認できなかった。盛土はほとんど残っていなかった。

第２－４面（図10・図版２）

近世に属する耕作面。検出面の標高は、T.P.＋4.36～4.68ｍである。Y=－34,007付近に位置する坪境畦畔から西側に広がる。第２－４層は調査区全体に広がらず、坪境溝より西側で検出された遺構面である。東側では、第４面で検出された49島畠（X=－150,050以南）や51島畠の上層部分が頭を出しており、田面部分にのみ堆積が認められた。当該遺構面で島畠が機能していたかどうかについては、上層からの耕作による撹拌が及んでいたため不明である。遺構としては、坪境溝や溝、島畠などを検出した。第２－１面・第２－３面と同様に、南北方向へ延びる25・26坪境溝を、調査区西側のY=－34,004～－34,006付近で検出した。これらの溝は、X=－150,050付近で途切れそれより南へは続かない。その南側では、南に向かって低くなる地形が観察されたため、その以北を28島畠（05－２調査区091島畠）とした。そのほかの遺構としては、25・26坪境溝よりも西側において、長軸を東西とする23・27溝・24島畠（05－２調査区096溝・097島畠）を検出した。25坪境溝・26溝よりも西側では遺構は確認できなかった。

25 坪境溝（図11）　１Ａ-１ｂ～ｆ区で検出した南北方向の溝で、北側は調査区外に延びる。途中途切れるところもあるが、総検出長約46ｍ、幅0.4～１ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は１層である。

23 溝（図11）　１Ａ-2b区で検出した東西方向の溝で25坪境溝には接しない。総検出長約５ｍ、幅0.35ｍ、深さ0.15ｍを測る。埋土は１層である。

26 溝（図11）　１Ａ-１ｂ～ｇ区で検出した南北方向の溝で25坪境溝と並行し、北側は調査区外に延びる。総検出長約49ｍ、幅1.3ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は１層である。

27 溝（図11）　１Ａ-2i区で検出した東西方向の溝である。総検出長約５ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は１層である。

24 島畠（図11）　１Ａ-2b・ｃ区で検出した東西方向の島畠であり、西側は05－２調査区側へ延びる。検出長約5.4ｍ、幅7.5ｍである。東側への落ちは、比高差0.2ｍ、南側は比高差0.4ｍを測る。X=

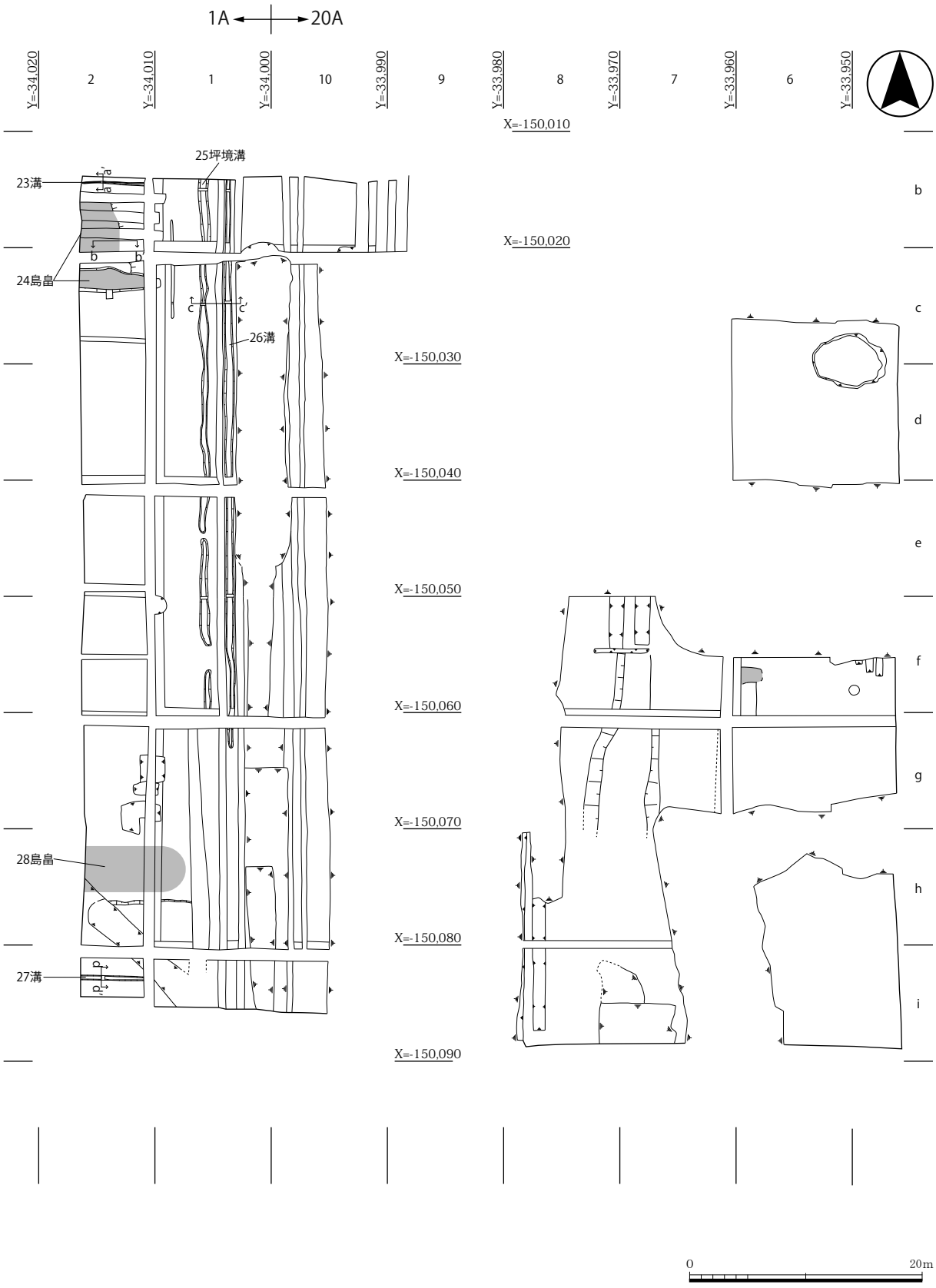


図10　第２－４面　全体図（S＝1:500）

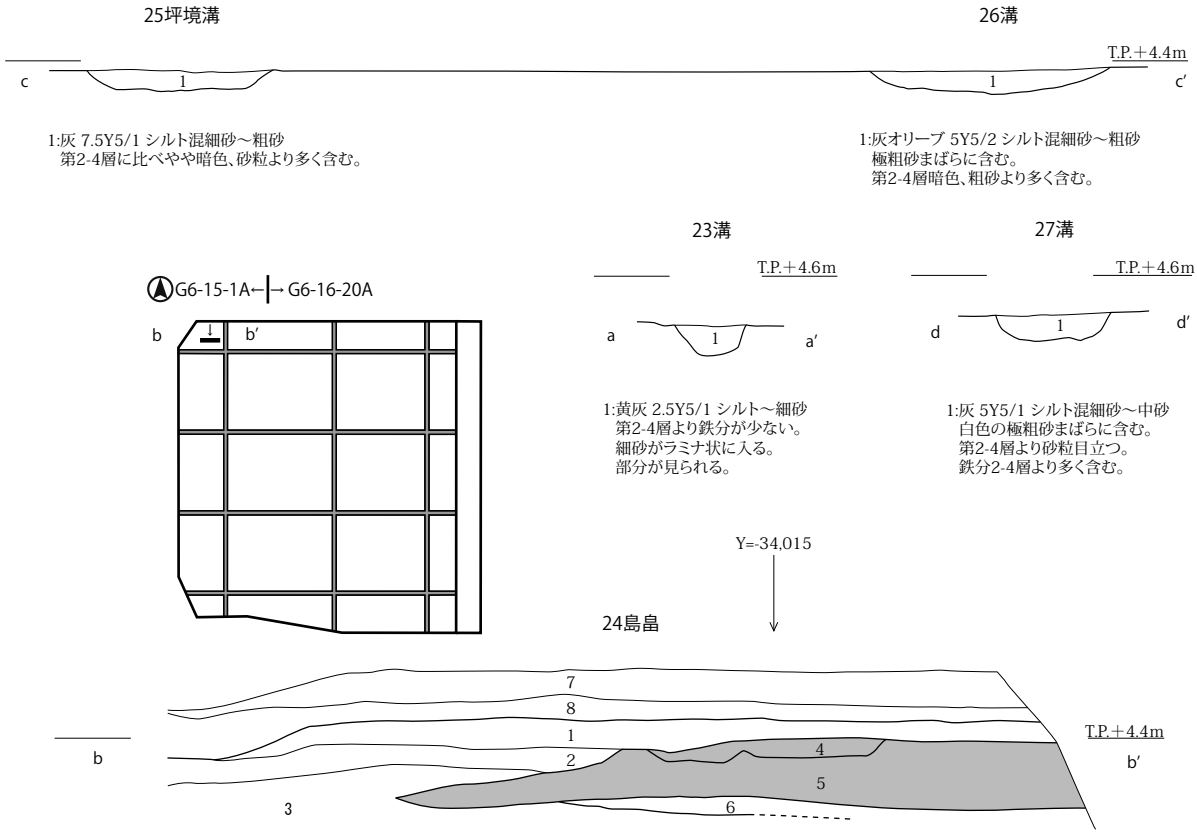


図11　第２－４面　23・26・27溝・25坪境溝・24島畠断面図（S＝1：40）

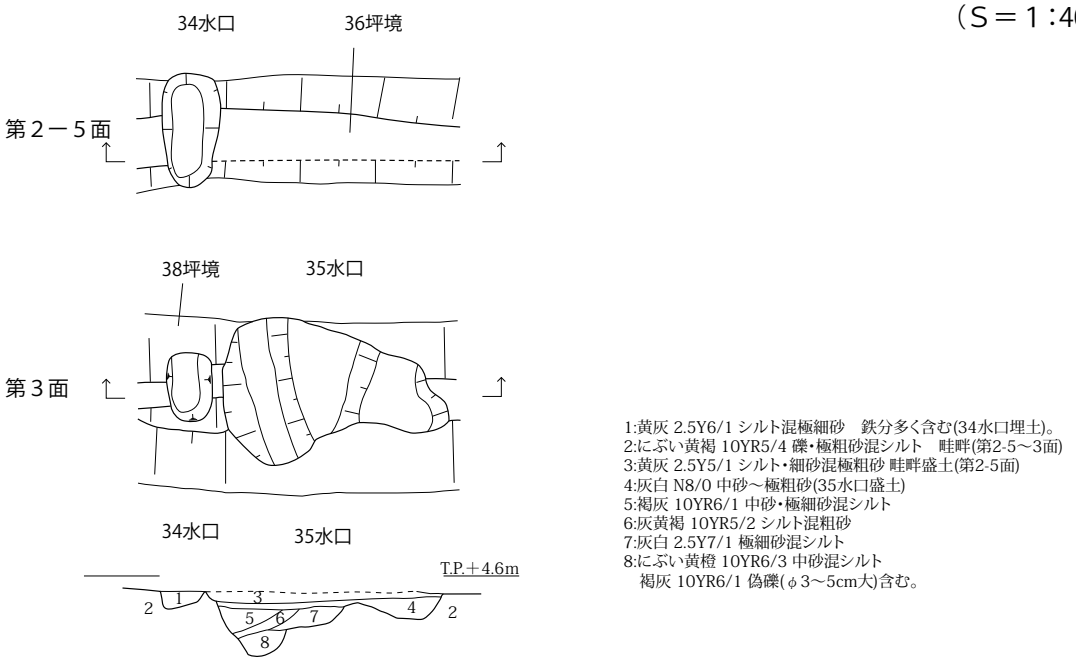


図12　第２－５面　34水口、第３面　35水口 平・断面図（S＝1：40）

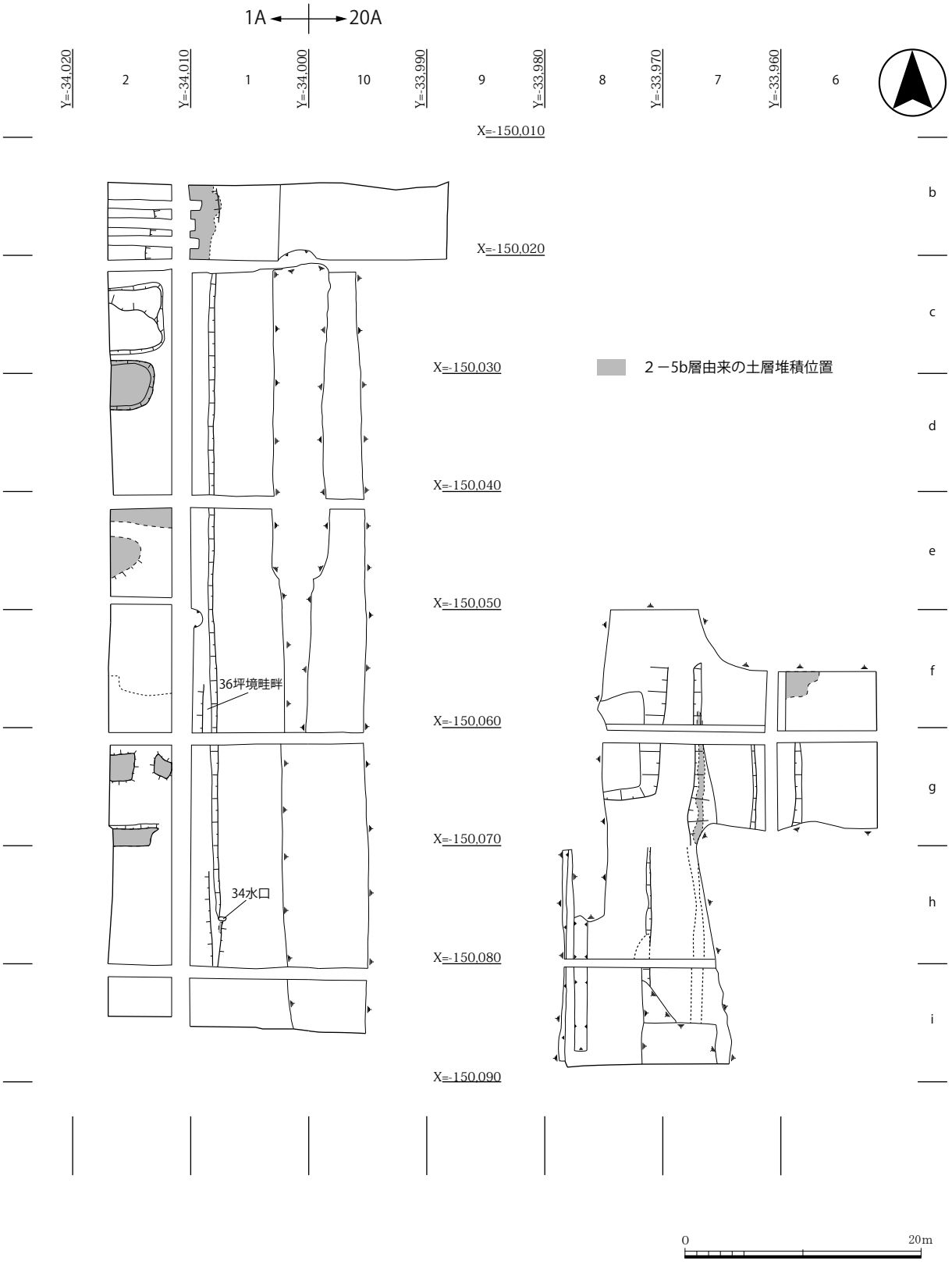


図13　第２－５面・２－5b面　全体図（S＝１:500）

－ 150,010 より南側はさらに東へと拡張されているが 25 坪境溝へは取り付かない。

28 島畠　１Ａ-1・2g・h 区で検出した東西方向の島畠で、明瞭な盛土はなく土質の変化で位置を確定した。

第２－５面・２－５b 面 (図 12、13)

近世に属する耕作面。検出面の標高は、T.P. ＋ 4.2 ～ 4.5 mである。第２－４面と同様に、Y= －34,007 付近に位置する坪境畦畔から西側に広がる。東側の状況も２－４面と同様である。遺構としては、坪境畦畔や 34 水口などを検出した。第２－５面段階で検出された 36 坪境畦畔は、第５層段階で構築されて以降存続するものであり、この 36 坪境畦畔の上の X= － 150,070 付近では水口 34 が確認された。当該遺構面が形成される契機として大量の洪水堆積層 (第２－５b 層) が考えられる。検出された島畠の芯や拡張部に第２－５b 層を利用している状況が確認された。またこの第２－５b 層は坪境より東側での層厚は厚く約 0.4 mを測る。第３面以下の旧地形が一段低くなっていることが確認された。

36 坪境畦畔 (図 13)　１Ａ - １b ～ i 区で西側への落ちを検出したが、東側の落ちは検出されなかった。

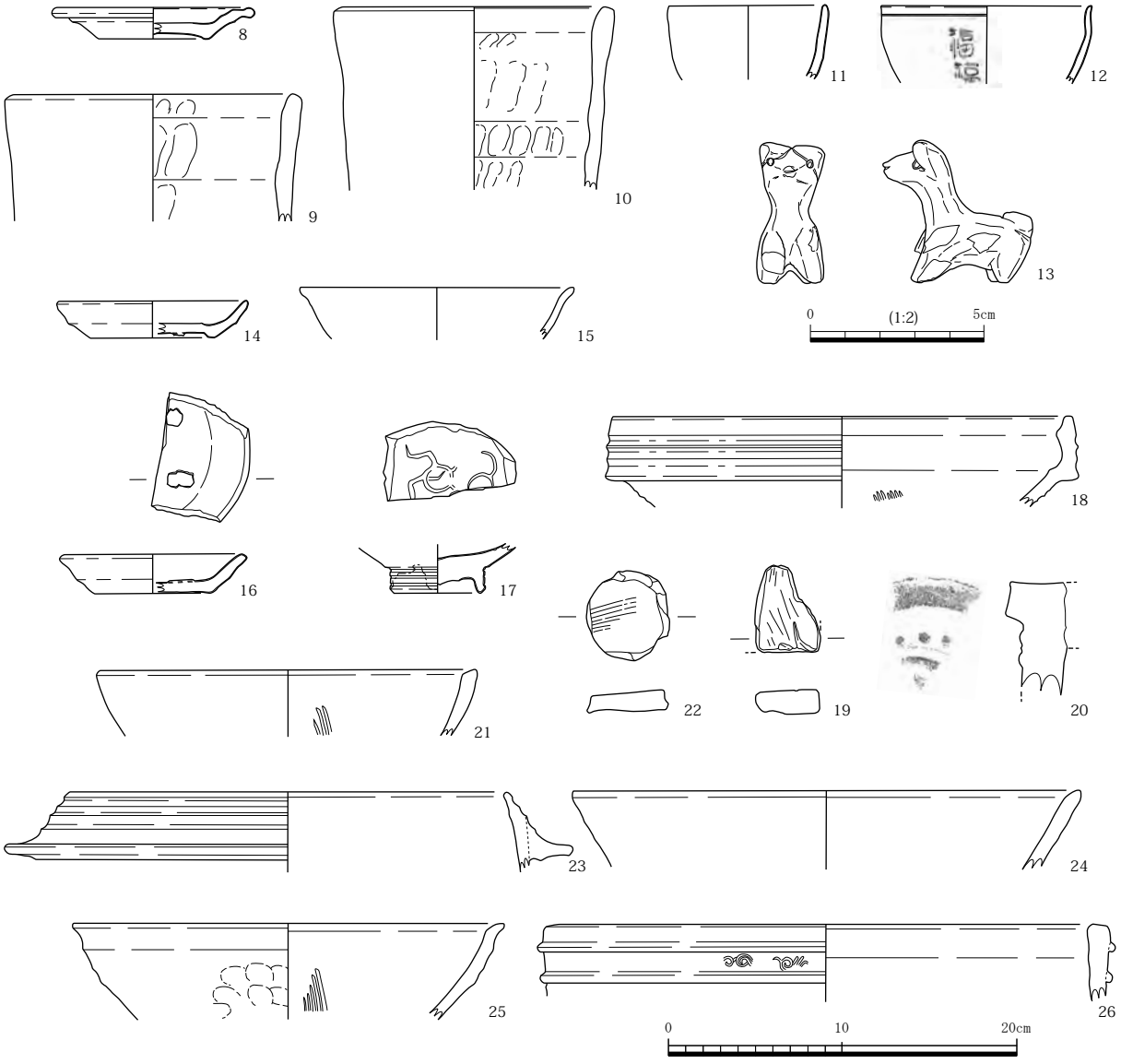


図14　第２層出土遺物実測図（S＝1：4・1：2）

検出長 58 m、比高差 0.2 mを測る。

34 水口 (図 12)　1 A -1h 区で検出した。長さ 0.6 m、幅 0.3 m、深さ 0.1 mを測る。埋土は 1 層である。第 3 面で検出された 35 水口を移動させたものであろう。

第 2 層出土遺物 (図 14、15・図版 29、30)　第 2 層からは陶磁器、瓦質土器、土師器、土製品、瓦、貨銭などが出土した。いずれの層も耕作によって撹拌されており、混入遺物も多くみられるが、図化しえたものも含め、従来から言われている年代と齟齬をきたしていない。第 2 － 1 層から出土した (8) は瀬戸皿、(9、10) は瓦質土器火鉢で 16 世紀に属する。第 2 － 2 層から出土した (11) は 18 世紀の瀬戸埦、(12) は 17 世紀の染付碗である。(13) は犬形土製品で江浦分類 1Ai 類である (江浦　洋 2000「大坂城跡出土の犬形土製品小考」『大阪文化財研究』第 18 号 (財) 大阪府文化財調査研究センター)。第 2 － 3 層から出土した (14) は 16 ～ 17 世紀の瀬戸皿、(15) は 17 ～ 18 世紀の青磁碗、(16) は美濃鉄釉皿、(17) は 17 世紀の唐津碗である。第 2 － 4 層から出土した (18) は 16 世紀の備前すり鉢、(19) は砂岩製の砥石、(20) は巴紋軒丸瓦瓦当部で外縁は平縁で、巴紋と珠紋 3 点のみが残っている。第 2 － 5 層から出土した (21、24、25) は瓦質土器すり鉢で 14 ～ 16 世紀に属する。(23) は瓦質土器羽釜である。(22) は瓦質土器を転用した円板で、第 2 － 5 b 層から出土した。(26) は瓦質土器火鉢で時期の詳細は不明。(27) は第 2 － 3 面の遺構面清掃時、1 A -1h 区で検出されたもので銭名は読めなかった。(28) も同じく清掃時 1 A -2b 区で検出したもので『天禧通寶』、初鋳は 1017 年である。(29) は第 4 面 1 A -2d 区から出土したもので『皇宋通寶』、初鋳は 1038 年である。

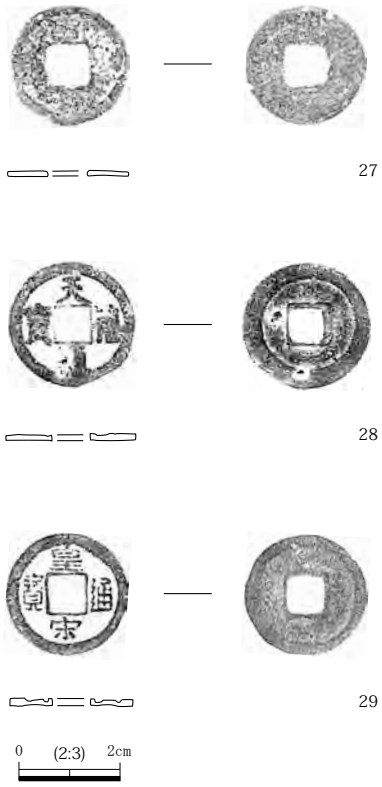


図15　第 2 － 3 面 (27・28)・第 4 面 (29)
出土貨銭 拓本・断面図 (S ＝ 2 : 3)

第 3 面 (図 16・図版 3)

第 2 － 5 層、一部第 2 － 3 層を除去して検出した。地形は、調査区北西部分が最も低く、東側に向かって緩やかに高くなる。水田面の標高は、最も低い調査区北西部分で T.P. ＋ 3.9 m代の箇所がみられ、調査区東側で T.P. ＋ 4.6 ～ 4.8 mの箇所がみられる。検出した遺構は、坪境畦畔、水口、畦畔、水田、島畠 4 基、ピット 2 基である。坪境西側の二十二ノ坪では、調査区北西部で東西方向に延びる島畠を 1 基、南西部で 2 基検出した。坪境東側の十五ノ坪で南北方向にはしる島畠を 1 基検出した。当該面で検出した島畠は全て第 4 面の島畠を踏襲してつくられたものである。尚、当面から第 5 面で確認した島畠はいずれも洪水堆積物からなると考えられる盛土で構築されているが、島畠内部には、ラミナが観察されるような残りの良い洪水砂は認められなかった。以下、各遺構について坪境畦畔、水口、畦畔、島畠、ピットの順で詳述する。

38 坪境畦畔 (図 17)　1 A - 1 b ～ i 区にかけて検出した、南北方向に延びる畦畔である。第 4 面 54 坪境畦畔、第 5 面 62 坪境畦畔を踏襲する畦畔である。検出長 71.3 m、幅 1.0 ～ 1.4 m、高さは 0.1 ～ 0.2 mを測る。上部は主に細礫をまばらに含むシルト～粗砂の盛土で構築されていた。

35 水口 (図 12)　1 A -1h 区の 38 坪境畦畔上で確認された水口であり、第 2 － 5 面 34 水口の南隣に位置する。南北は 1.2 m、東西 0.8 m、検出面からの深さは 0.35 mを測る。埋土は 6 層に分層される。最下層 (8) は中砂混じりシルトで、シルトブロックが認められる。中位には、極細砂混じりシルト (7) やシルト混じり粗砂 (6) などが認められ、中位の (5 ～ 7) が使用時の堆積層と考えられる。上位の黄灰色シルト～細砂混じり極粗砂 (3) や灰白色中砂～極粗砂 (4) は盛土と考えられ、第 2 － 5 面段階ではこの水口は埋め戻され機能しておらず、北隣の 34 水口が使用されたと考えられる。

37 畦畔　1 A -1i 区で検出した東西方向の畦畔で、41 島畠に接続し、また 38 坪境畦畔に取り付く。検出長 2.2 m、幅 0.9 m、水田面からの高さ約 0.06 mを測る。第 4 面の 53 畦畔、第 5 面の 63 畦畔に相当し、当面段階まで使用されたと考えられる。

39 島畠 (05 － 2 調査区 130 島畠)　1 A -2c 区で検出した東西方向の島畠であり、05 － 2 調査区側へ延びる。検出長 4.8 m、幅 5.7 m、水田面からの高さ約 0.2 mを測る。第 4 面の 55 島畠、第 5 面 69 島畠を踏襲する島畠である。細砂～粗砂を含むシルトからなる盛土により構築されていた。

40 島畠 (05 － 2 調査区 131 島畠)　1 A -1・2f・g 区で検出した東西方向の島畠であり、05 － 2 調査区側へ延びる。38 坪境畦畔には接続せず、坪境畦畔の手前で収束する。検出長 7.8 m、幅 1.2 m、水田面からの高さ約 0.1 ～ 0.17 mを測る。第 4 面段階の 56 島畠に相当する島畠である。上部は、下部に比べより細砂～粗砂を多く含むシルトやシルトからなる細砂～粗砂の盛土で構築されていた。

41 島畠 (05 － 2 調査区 132 島畠)　1 A -2g ～ i 区で確認した島畠であり、西側が 05 － 2 調査区、南側は調査区外に及んでいた。第 4 面 57 島畠、第 5 面 61 島畠を踏襲する。 1 A -2h 区付近では上部が撹乱を受けていた。05 － 2 調査区の成果から、主に東西方向に延びる島畠と考えられ、X= － 150,080 付近で L 字状に南側へ屈曲する。規模は 05 － 2 調査区から続く部分の検出長が 6.0 m、幅が 9.1 m、水田面からの残存高が約 0.1 mを測り、L 字状に南側へ屈曲する部分は検出長が 6.0 m、幅が 2.5 m、水田面からの高さは約 0.1 mであった。上部は、下部に比べより多くの細礫や中礫を含むシルト～粗砂からなる盛土で構築されていた。

42 島畠 (図 17)　1 A - 1 b ～ 1i 区および 20 A -10b ～ 10g 区で検出した南北方向に延びる島畠で、20 A -10c ～ 10e 区、20 A -10g ～ 10i 区では撹乱により大部分が失われている。検出長 71.4 m、幅 4.9 ～ 5.7 m、水田面からの高さは 0.1 ～ 0.15 mを測る。第 4 面 58 島畠、第 5 面 64 島畠を踏襲し、当面においても使用が継続していた。上部は粗砂～極粗砂を僅かに含むシルト～細砂からなる盛土で構築されていた。

32・33 ピット (図 18)　20 A -8b 区で検出したピットである。平面形は 2 基とも円形で、32 ピットは直径 0.13 m、深さ 0.09 m、33 ピットは直径 0.28 m、深さ 0.15 mを測る。埋土はいずれもシルト混じり細砂～中砂であった。性格は不明である。15 世紀後半の瓦質土器などが出土した。

第 3 層出土遺物 (図 19・図版 30)　第 3 層からは陶磁器・土師質土器・須恵質土器などが出土したがいずれも小片であった。図化しえた遺物として、14 ～ 15 世紀の備前壺 (30)、瓦質土器すり鉢 (31)、瓦質土器火鉢 (32) がある。

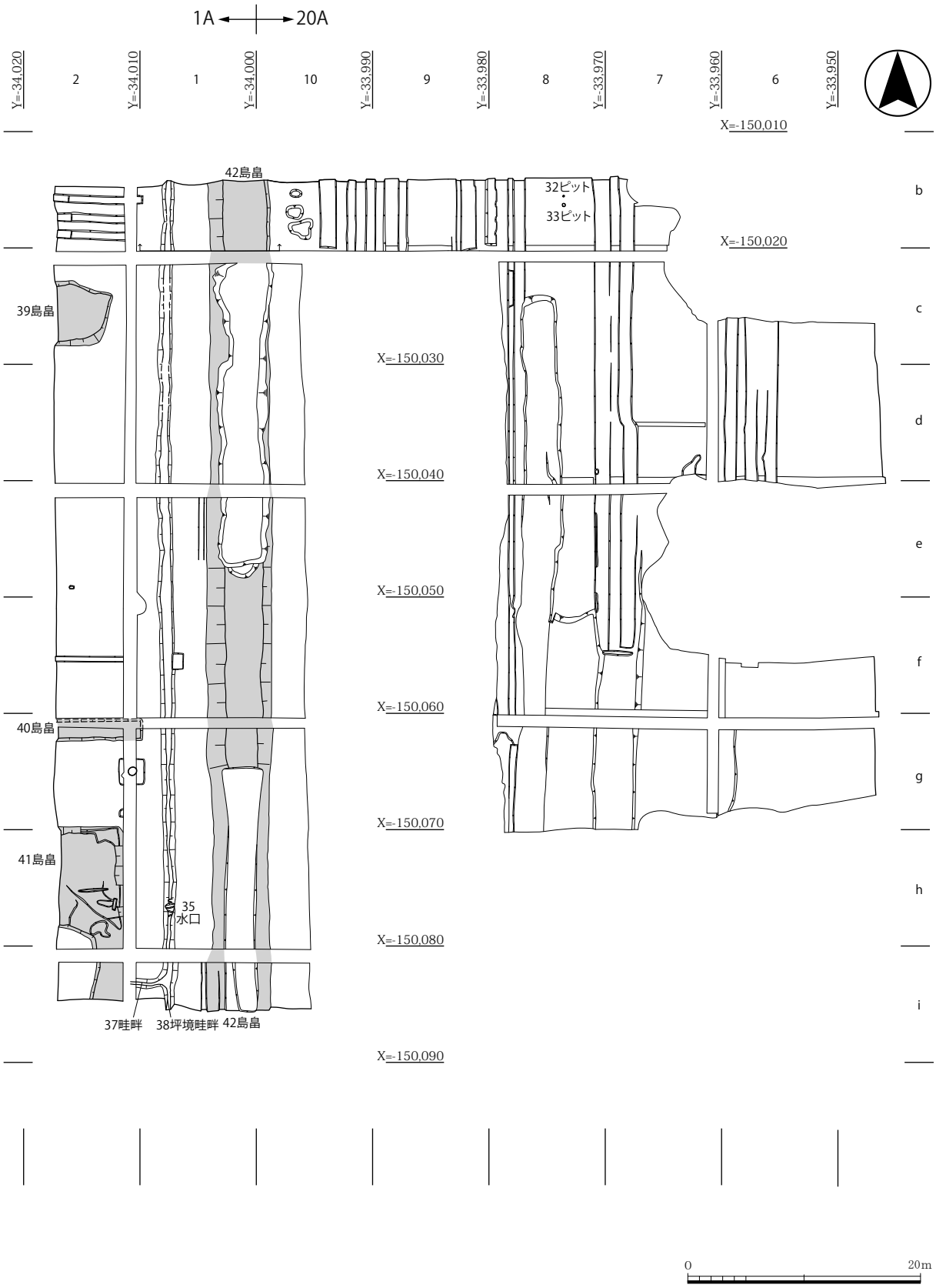


図16　第３面　全体図（S＝1：500）

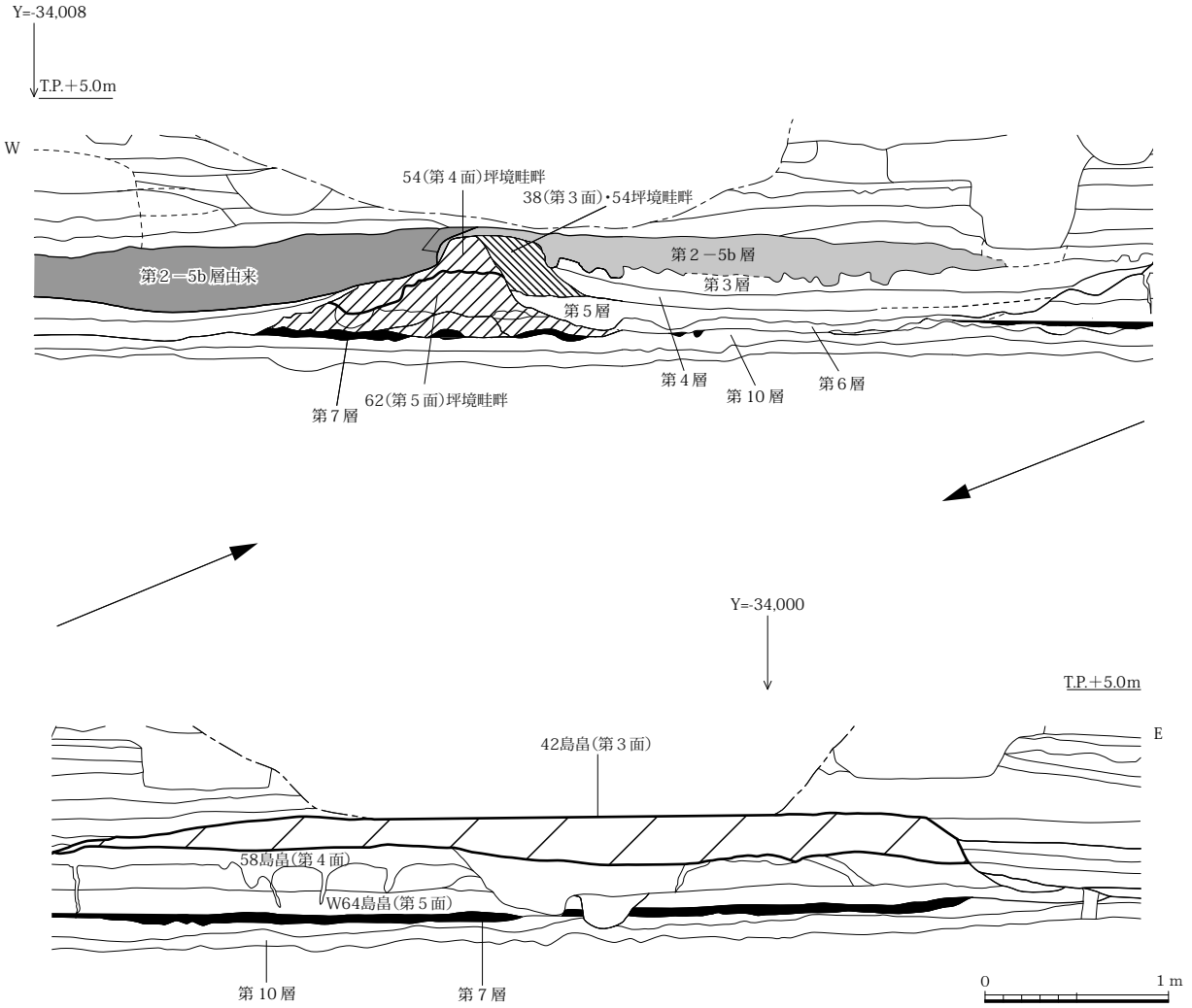


図17　第３～５面　38・54・62坪境畦畔・42・58・64島畠断面図
X=-150,020ライン（S＝1：40）

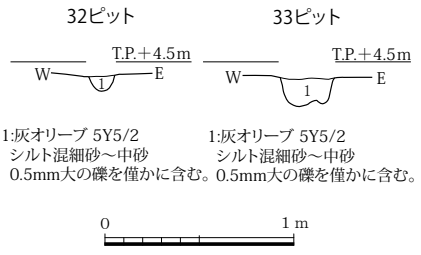


図18　第３面　32・33ピット
断面図（S＝1：40）

第４面（図 21・図版４）

第３層を除去し検出した遺構面である。地形は調査区北西部分が最も低く、東側に向かって緩やかに高くなっている。水田面の標高は、最も低い調査区北西部分で T.P. ＋ 3.7 m 前後の箇所がみられ、調査区東側で T.P. ＋ 4.3 m～ 4.6 m の箇所がみられる。検出した遺構は、坪境畦畔、水田、島畠 10 基、ピット３基である。坪境西側の二十二ノ坪では東西方向に延びる島畠を３基検出し、坪境東側の十五ノ坪では、南北方向にはしる島畠を７基検出した。以下、各遺構について坪境畦畔、畦畔、島畠、溝状遺構、ピットの順に詳述する。

54 坪境畦畔（図 17）　１Ａ - １ｂ～ｉ区にかけて検出した、南北方向に延びる畦畔である。検出長 70.5 m、幅 1.7 ～ 1.9 m、高さは 0.4 mを測る。第５面の 62 坪境畦畔を踏襲しており、上部は細砂～極粗砂を含むシルトからなる盛土で構築されていた。

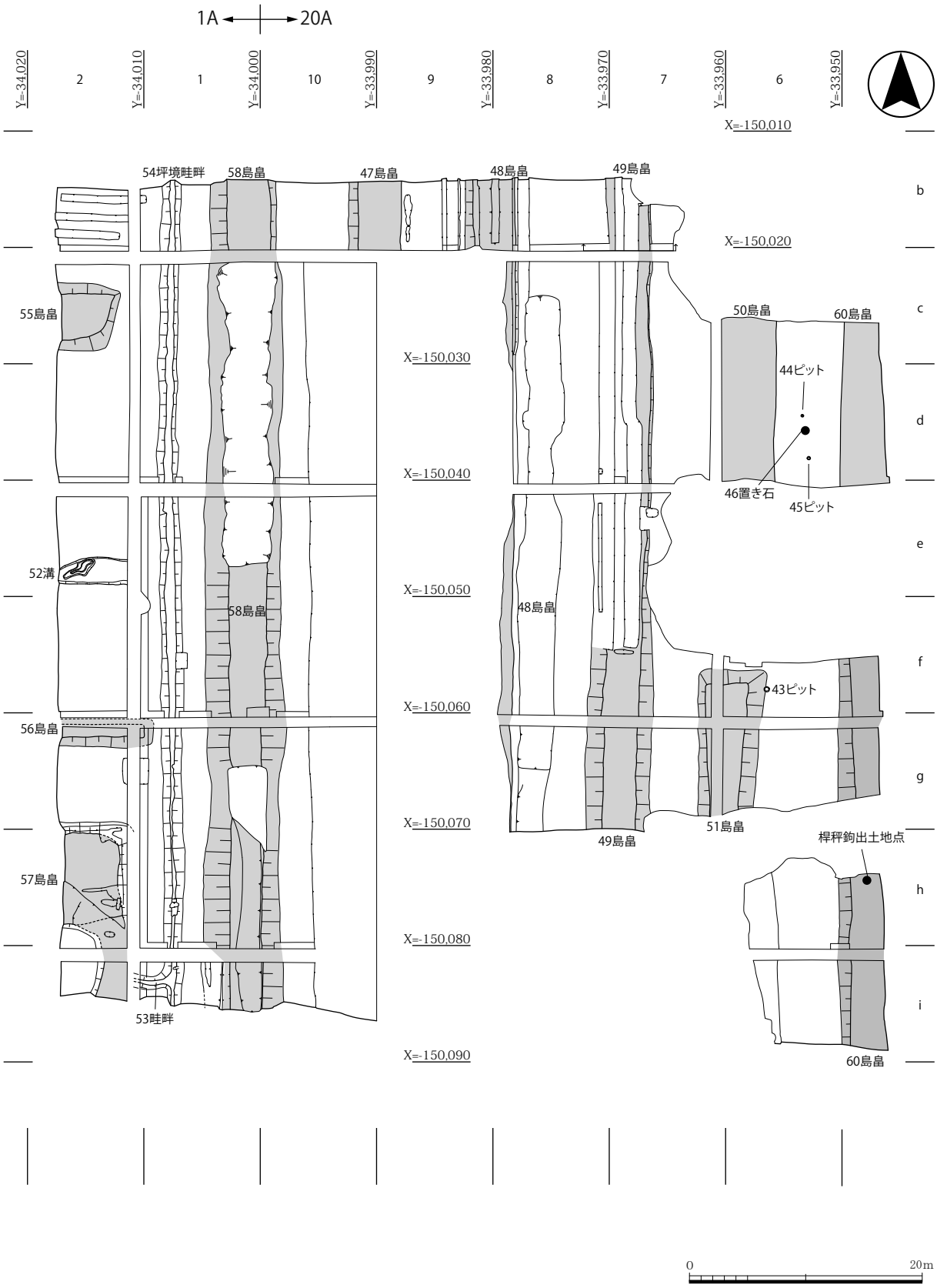


図19　第４面　全体図（S＝1:500）

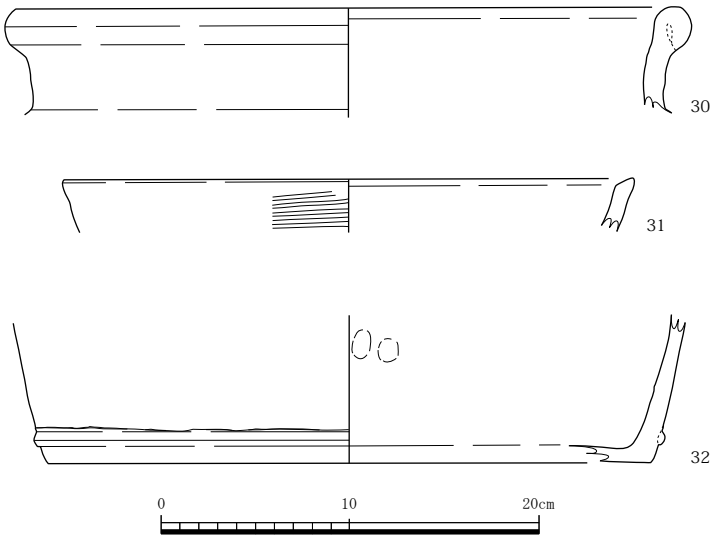


図20　第３層出土遺物実測図（S＝1：4）

53 畦畔　1 A -1・2i 区で検出した東西方向の畦畔で、東側は 54 坪境畦畔に取り付き、西側は 57 島畠に連結する。検出長 2.1 m、幅は約 1.2 m、水田面からの高さは約 0.1 mを測る。第 5 面 63 畦畔を踏襲し、当面段階においても引き続き使用されていた。

47 島畠　南北に延びる島畠であり、20 A -9・10b 区で検出した。尚、X= － 150,020 ライン付近より南側は撹乱で失われていた。検出長 6.0 m、幅 4.6 m、水田面からの高さは 0.15 m前後を測る。第 5 面の 70 島畠を踏襲し、細砂～粗砂混じりシルトからなる盛土により構築されていた。盛土は 70 島畠のものに比べ、より多くの粗砂を含んでいた。

48 島畠　20 A -8b～g 区および 20 A -9b 区で検出した、南北方向に延びる島畠である。検出延長 52 m、幅 4.6 m、水田面からの高さは 0.1 m前後を測る。調査区中央付近の大規模な撹乱により、西側の大部分が失われていた。第 5 面の 65 島畠を踏襲する島畠である。65 島畠の盛土に比べより多くの粗砂を含むシルトからなる盛土で構築されていた。

49 島畠 (図 20、22・図版 30)　20 A -7・8b ～ i 区で検出した南北方向に延びる島畠である。検出延長 56 m、幅 3.8 ～ 5.6 m、水田面からの高さは約 0.2 mを測る。調査区南端部分、20 A -7・8i 区付近では島畠の上部のみが撹乱を受けていた。第 5 面の 66 島畠を踏襲する。盛土は 66 島畠に比べより多く細砂～粗砂を含むシルトであった。北側の X= － 150,020 ライン断面では、盛土をして東側に拡張している状況が確認された。遺物としては 14 世紀に属する土師質土器小皿 (33) が出土した。

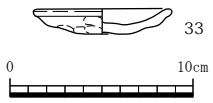


図21　第４面　49島畠出土遺物実測図（S＝1：4）

50 島畠　南北に延びる島畠であり、20 A -6・7c・d 区で検出した。検出長 9.0 m、幅 4.7 m、水田面からの高さは約 0.1 mを測る。第 5 面の 71 島畠を踏襲する島畠である。上部は 71 島畠盛土に比べ粗砂をやや多く含むシルトで盛土が形成されていた。

51 島畠　20 A -6・7f・g 区で検出した南北方向に延びる島畠である。検出長 12.6 m、幅 4.8 ～ 5.8 m、水田面からの高さは約 0.11 ～ 0.22 mを測る。南側は (20 A -6・7h 区付近) 撹乱を受けていた。第 5 面の 67 島畠を踏襲する島畠である。上部は 67 島畠の盛土よりやや多く粗砂が混じるシルトの盛土で構築されていた。

55 島畠 (05 － 2 調査区 130 島畠)　1 A -2c 区で検出した東西方向の島畠であり、05 － 2 調査区側へ延びる。検出長 5.2 m、幅 5.8 m、水田面からの高さ約 0.35 mを測る。第 5 面の 69 島畠を踏襲し、当面段階においても引き続き使用されたと考えられる。細砂～粗砂を含むシルトからなる盛土で形成されていた。

56 島畠 (05 － 2 調査区 131 島畠)　1 A -1・2g 区で検出した東西方向の島畠であり、05 － 2 調査区

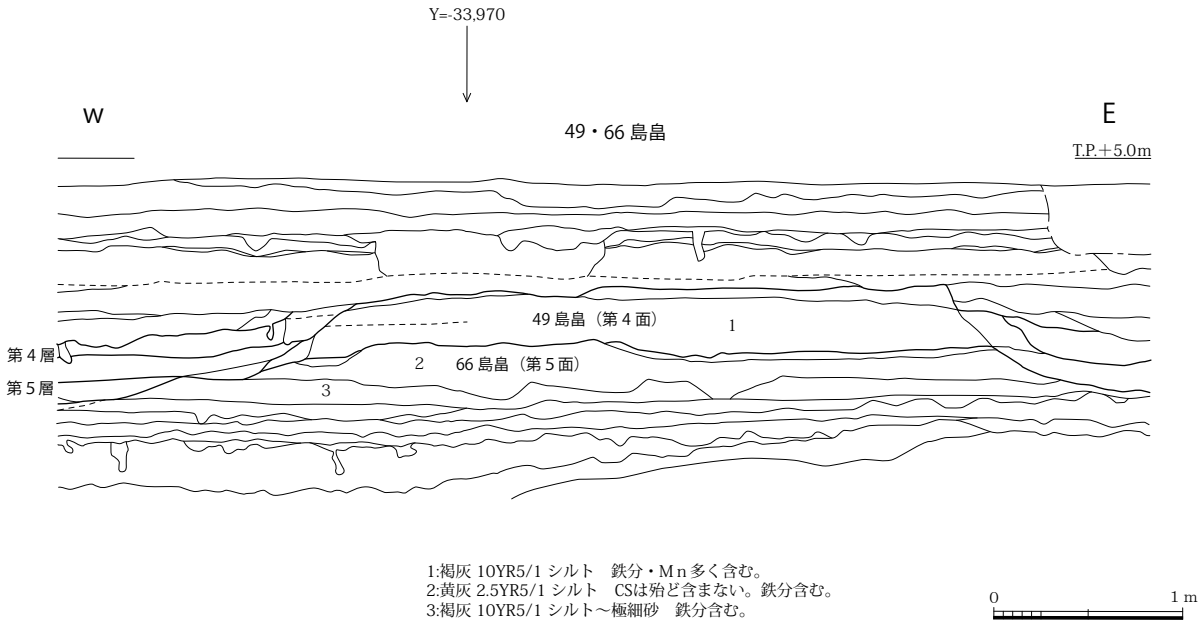


図 22　第 4 面　49 島畠、第 5 面　66 島畠断面図　X=-150,070 ライン（S＝1：40）

側へ延びる。54 坪境畦畔に接続せず、坪境畦畔の手前で収束する。検出長 7.9 m、幅 1.7 m、水田面からの高さ約 0.4 mを測る。当該面段階で形成された島畠である。洪水堆積物を芯として構築されたと考えられるが、ラミナが確認できるような洪水砂は認められず、シルト～粗砂の盛土で構築されていた。

57 島畠 (05 － 2 調査区 130 島畠)　1 A -2g ～ i 区で確認した島畠であり、西側が 05 － 2 調査区、南側は調査区外に及んでいた。第 5 面の 61 島畠を踏襲し、当面でも引き続き使用された。05 － 2 調査区の成果より、東西方向に延びる島畠と考えられ、54 坪境畦畔付近で L 字状に南側へ屈曲する。規模は 05 － 2 調査区から続く部分の検出長が 5.5 m、幅が 9.0 m、水田面からの高さが約 0.4 mを測り、L 字状に南側へ屈曲する部分の検出長が 6.0 m、幅が 3.0 m、水田面からの高さは約 0.15 mであった。上部は、第 5 面段階の 61 島畠の盛土に比べ粗い礫をより多く含み細礫～中礫混じりシルト～粗砂で盛土が構築されていた。

58 島畠 (図 17)　1 A - 1 b ～ i 区および 20 A -10b ～ i 区で検出した南北方向に延びる島畠で、検出長 71.4 m、幅 5.8 ～ 6.2 m、水田面からの高さは 0.2 ～ 0.3 mを測る。1 A -1c ～ e 区および 20 A -10c ～ e 区、1 A -1g 区、20 A -10g 区の島畠上部は大部分が撹乱の影響を受けていた。第 5 面 64 島畠を踏襲している。20 A -10 f 付近では、断面において、東側に拡張している状況が確認できた。盛土は 64 島畠のものに比べ極粗砂や細礫をより多く含む傾向がみられた。

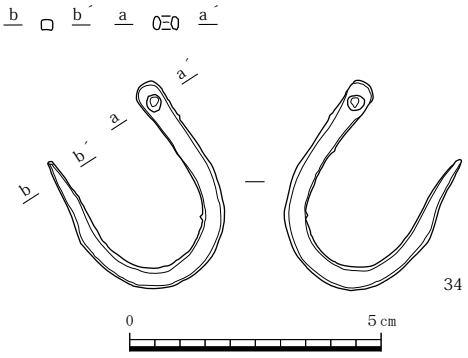


図23　第 4 面　60島畠
出土桿秤鉤実測図
（S＝2：3）

60 島畠 (図 23・図版 4、30)　調査区東端、20 A -5・6c ～ i 区で検出した島畠である。南北方向に延びる島畠であり、東半部分は調査区外であった。また、20 A - 5 b 区および 20 A -5c ～ h 区の一部が撹乱の影響を受けていた。規模は

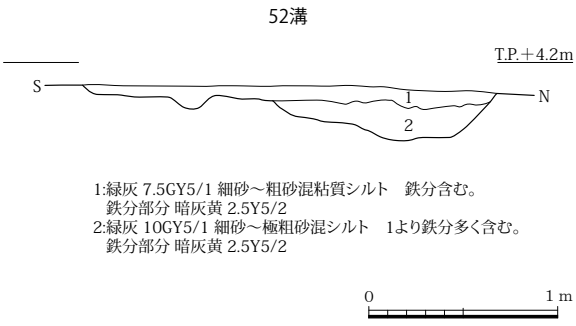


図24　第４面　52溝断面図（S＝1:40）

検出延長 42 m、幅 4.0 ～ 5.0 mを測り、水田面からの高さは 0.1 mである。第５面 68 島畠を踏襲し、上部は細砂～粗砂をまばらに含むシルトからなる盛土で構築されていた。遺物としては小型の桿秤鉤が出土した (34)。真鍮製で平面形は「U」字状を呈し、鉤先は鈍く尖りやや外反する。全長 4.2 ㎝、全幅 3.5 ㎝を測る。断面形は幅 0.5 ㎝、厚さ 0.3 ㎝の長方形を呈する。広面上端部付近に吊り下げるための円形の穿孔 (孔径 0.3 ㎝) をもつ。また、鉤下端部内側には使用による摩滅痕が認められる。鉤の大きさから推定される感量は 100 匁 (375 g) から 500 匁 (1,875 g) である (秤乃館館長秤屋健藏氏のご教示による)。

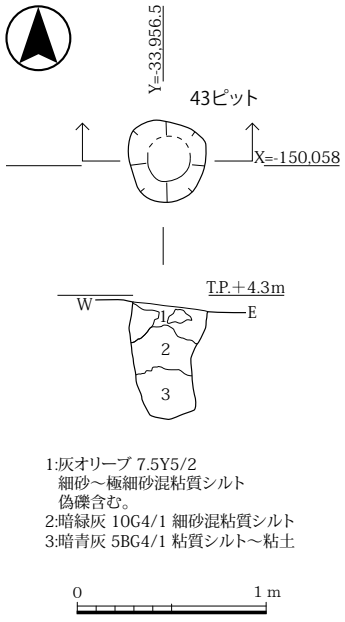


図25　第４面　43ピット
平･断面図（S＝1:40）

52 溝 (図 24)　1 A -2e 区で検出した東西方向に細長い、溝状の遺構である。検出長 5.8 m、幅 2.1 m、検出面からの深さは 0.3 mを測る。西側の一部は西接する 05 － 2 調査区へおよび、東側は Y= － 34,010 ライン付近で収束していた。埋土は２層に分層でき、上層は緑灰色細砂～粗砂混じり粘質シルト、下層は緑灰細砂～極粗砂混じりシルトであり、上・下層共にベース層より鉄分が多く含まれていた。性格は不明である。

43 ～ 45 ピット (図 25)　比較的近接した地区で３基のピットを検出した。43 ピットは 20 A -6f 区、44・45 ピットは 20 A -6d 区で検出した。43 ピットは直径 0.41 m、検出面からの深さは 0.63 mを測る。埋土は３層に分層可能で、上層はシルトブロックを含む極細砂～細砂混じり粘質シルト、中層は細砂混じり粘質シルト、下層は粘質シルト～粘土であった。44 ピットは直径 0.28 m、検出面からの深さは 0.38 mを測り、45 ピットは直径 0.32 m、検出面からの深さは 0.5 mを測る。埋土は細砂混じり粘質シルトであった。いずれも位置などに規則性はみられず、性格は不明である。

第４層出土遺物 (図 26・図版 30)　出土遺物の量は少なく、いずれも細片である。(35) は 13 ～ 14 世紀の白磁碗、(36) は 14 世紀の備前壺、(37) は 14 世紀に属する瓦質土器火鉢である。(38) は鉄製の釘で、重さ 12.2g を量る。

第５面 (図 28・図版 4)

第４層を除去し、検出した遺構面である。地形については、東側に向かって緩やかに高くなっており、調査区北西部分の水田面の標高で T.P. ＋ 3.7 m代の低い箇所がみられ、調査区南東部分の水田面において T.P. ＋ 4.2 m前後の最も高い部分が認められる。検出した遺構は、坪境畦畔、水田、畦畔、島畠９基である。坪境西側の二十二ノ坪で東西方向に延びる島畠を２基、坪境東側の十五ノ坪で、南北方向

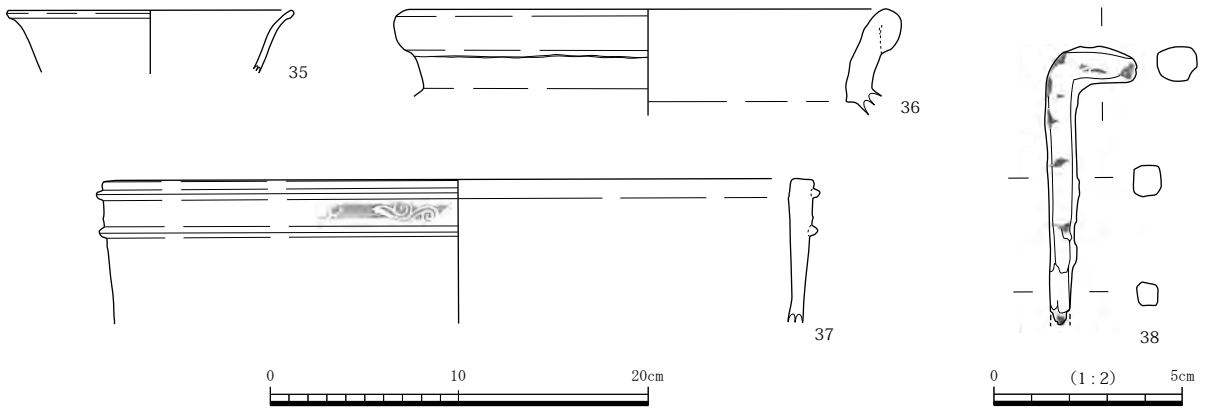


図26　第４層出土遺物実測図（S＝1：4・1：2）

にはしる島畠を７基検出した。以下、各遺構について坪境畦畔、畦畔、島畠の順に詳説する。

62 坪境畦畔 (図 17、27・図版 30)　１Ａ - 1ｂ～ｉ区にかけて検出した、南北方向に延びる畦畔である。検出長 69.5 m、幅 0.7 ～ 1.4 m、高さは 0.20 ～ 0.25 mを測る。主に細砂や極細砂を含むシルトからなる盛土で構築されているが、部分的により多くの粗砂～中礫を含むシルト～細砂の盛土が確認された。盛土の層相は島畠と類似しており、洪水を契機にその堆積物を盛り上げて構築していることが考えられる。遺物は主として 62 坪境畦畔と 64 島畠の間の崩落土より出土した。(39、40、44) は 62 坪境畦畔と 64 島畠の崩落土から出土した。(39) は 14 世紀の土師質土器小皿、(40) は同じく 14 世紀の瓦質土器火鉢､(44) は７世紀の須恵器坏身で底部に直線２本のヘラ記号が施されている。混入土器である。(41 ～ 43) は 64 島畠の構築土より出土したもので、(41) が瓦質土器すり鉢、(42) が瓦器埦で、いずれも 14 世紀、(43) が 13 世紀の瓦器埦である。(45) は 62 坪境畦畔構築土より出土したもので、古墳時代に属する土師器の移動式竈の庇部分である。混入土器である。

63 畦畔　１Ａ -1・2i 区で検出した東西方向の畦畔で、東側は 62 坪境畦畔に、西側は 61 島畠に連結し、南端部分は調査区外に及んでいた。検出長 4.2 m、幅は推定で約 0.8 m、水田面からの高さは約 0.2 m を測る。シルト～極粗砂のしまりの強い盛土により構築されていた。

61 島畠 (図 29・図版 30)

１Ａ -2g ～ｉ区で確認した島畠であり、西側が 05 － 2 調査区、南側は調査区外に及んでいた。05 － 2 調査区の成果から、本島畠は東西方向に延びていたと判断され、62 坪境畦畔付近でＬ字状に南側へ屈曲していた。規模は 05 － 2 調査区から続く部分の検出長が 5.6 m、幅が 9.2 m、水田面からの高さが約 0.2 mを

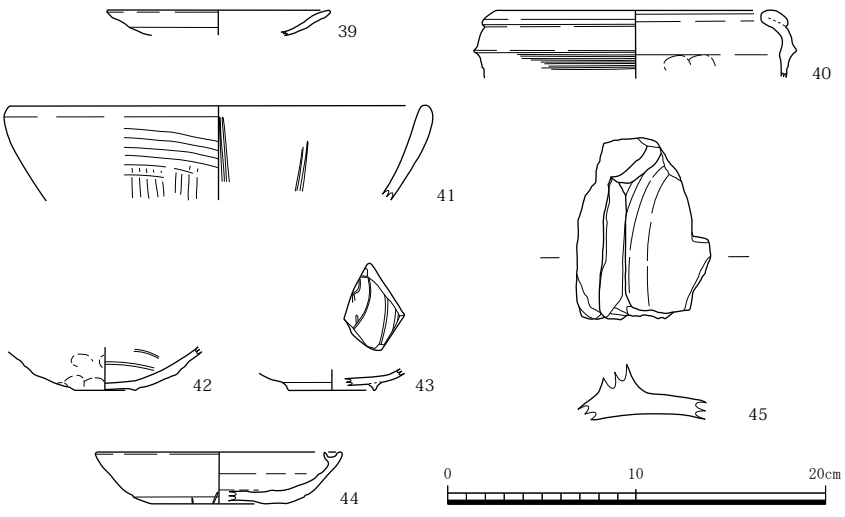


図27　第５面　62坪境畦畔・64島畠出土遺物実測図（S＝1：4）

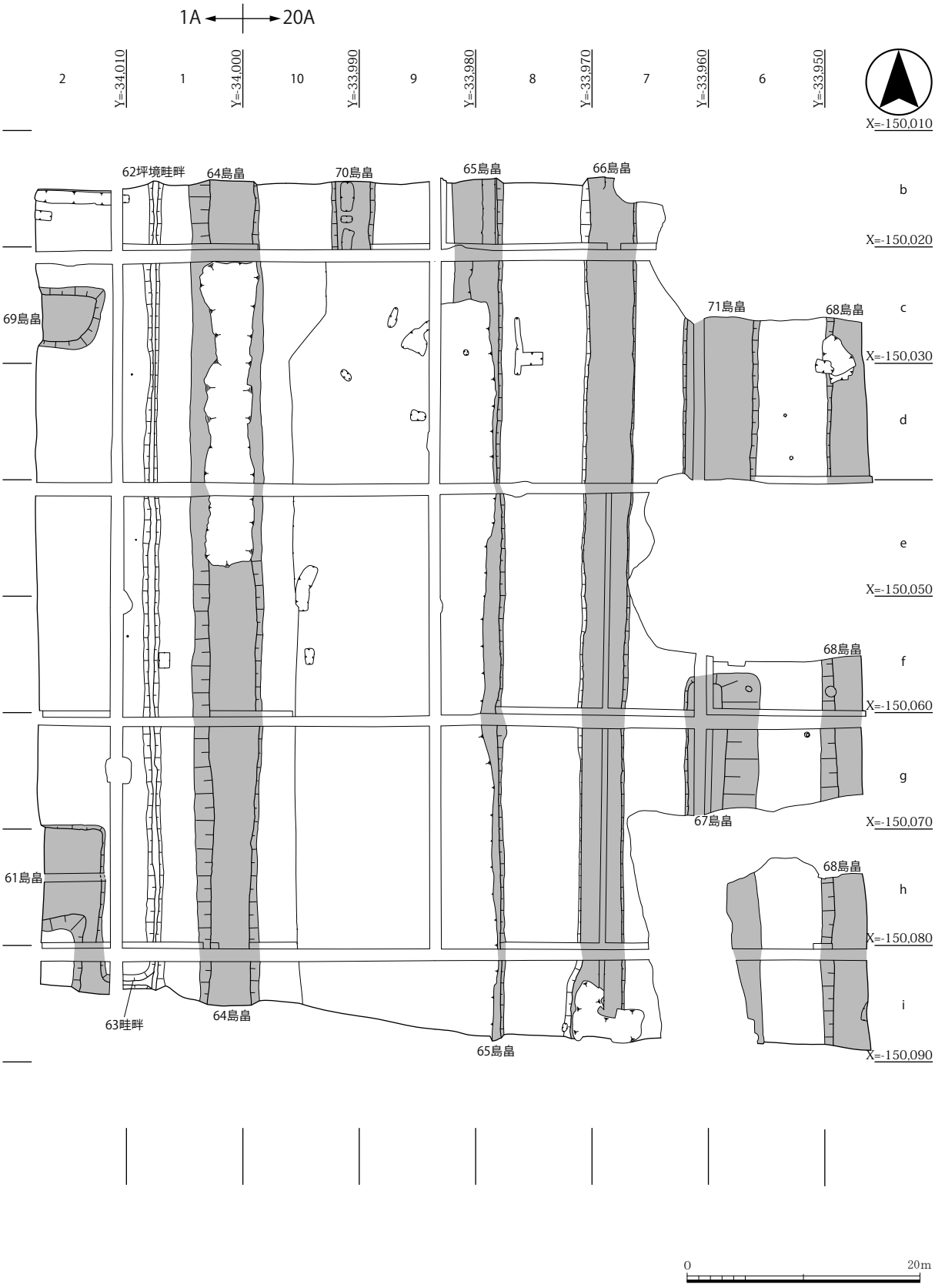


図28　第５面　全体図（S＝1：500）

測り、L 字状に南側へ屈曲する部分の検出長が 6.4 m、幅が 2.8 m、水田面からの高さは約 0.2 mであった。シルトのブロックや細礫の混じる細砂～粗砂のしまりの強い盛土で形成されていた。遺物としては 14 世紀の瓦器埦 (46)(和泉型) が出土した。

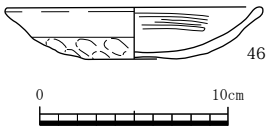


図29　第 5 面　61島畠
出土遺物実測図
（S＝1：4）

64 島畠 (図 17)　1 A - 1 b ～ i 区および 20 A -10b ～ i 区で検出した南北方向に延びる島畠で、検出延長 71.1 m、幅 5.0 ～ 6.1 m、水田面からの高さは 0.2 ～ 0.3 mを測る。北半の 1 A -1c ～ e 区および 20 A -10c ～ e 区の範囲の大部分は撹乱を受け、下端部分が遺存しているのみであった。砂礫混じりシルトからなる盛土で構築されており、ラミナがみられるような洪水砂を芯とするような状況は確認できなかった。

65 島畠　南北に延びる島畠であり、20 A -8・9b ～ i 区で検出した。調査区中央付近の大規模な撹乱により、西側の大部分が失われていた。検出長は 74.3 m、幅は調査区北側の遺存状況の良好な部分で約 4.1 mを測り、水田面からの高さは約 0.2 mであった。盛土は鉄分を下層より多く含み、粗砂がまばらに混じるシルトにより構築されていた。

66 島畠 (図 21､30)　20 A -7･8,b ～ i 区で検出した南北方向に延びる島畠である。検出長 74.2 m､幅 3.9 ～ 4.9 m、水田面からの高さは約 0.2 mを測る。調査区南端部分、20 A -7・8i 区付近が撹乱を受けており、そのためこの部分の形状がやや不整形である。盛土上部は微砂～細砂を含むシルトで構築されていた。遺物としては 9 世紀の土師器皿 (47)、14 世紀の青磁碗 (48) が出土した。(47) は混入土器である。

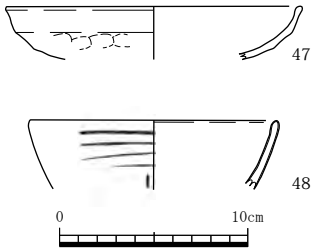


図30　第 5 面　66島畠
出土遺物実測図
（S＝1：4）

67 島畠　南北に延びる島畠で、20 A -6・7f ～ i 区で検出した。検出長 31.9 m、幅 6.4 m、水田面からの高さは 0.15 ～ 0.2 mを測る。西側南半が撹乱を受けていた。また、遺存している東端の部分は南北方向に延びる。極細砂混じりシルトからなる盛土で構築されていた。

68 島畠　20 A -5c ～ d 区、20 A -5・6f ～ i 区、20 A -6f ～ i 区で検出した南北方向に延びる島畠であり､東半部分は調査区外であった。尚、20 A - 5 b 区および 20 A -5c ～ h 区の一部が撹乱を受けていた。検出延長 62.8 m、検出幅 3.1 ～ 3.9 m、水田面からの高さは 0.1 ～ 0.2 mを測る。上部は粗砂をわずかに含むシルトからなる盛土で構築されていた。

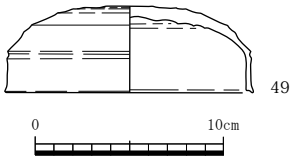


図31　第 5 面　69島畠
出土遺物実測図
（S＝1：4）

69 島畠 (図 31)　1 A -2c 区で検出した東西方向の島畠であり、05 － 2 調査区側へ延びる。検出長 5.8 m､幅 5.4 m､水田面からの高さ約 0.35 mを測る。細砂～粗砂を含むシルトの盛土で構築されていた。遺物としては 5 世紀後半の須恵器坏蓋 (49) がほぼ完形で出土した。

70 島畠 (図 32・図版 30)　南北に延びる島畠であり、20 A -9・10b・c 区で検出した。検出長 5.8 m､幅 3.3 ～ 3.6 m､水田面からの高さは 0.15 m前後を測る。X= － 150,020 ライン付近より南側は撹乱を受けていた。島畠上部には極細砂～細砂混じりシルトの盛土が認められた。遺物としては 12 世紀の瓦器小皿 (50) が出土した。

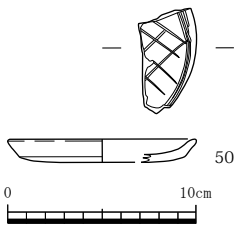


図32　第 5 面　70島畠
出土遺物実測図
（S＝1：4）

71 島畠 (図 33・図版 30)　20 A -6・7,c・d 区で検出した南北に延

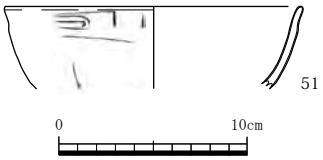


図33　第５面　71島畠
出土遺物実測図
（S＝1：4）

びる島畠である。検出長 13.9 m、幅 6.7 m、水田面からの高さは 0.2 ～ 0.3 mを測る。X= － 150,040 m付近より南側および X= － 150,026 m付近より北側は撹乱を受けていた。極細砂混じりシルトからなる盛土で構築されていた。遺物としては 13 世紀の青磁碗 (51) が出土した。

第５層出土遺物 (図 34・図版 30)　(52 ～ 54) は 13 世紀代の遺物で (52) が白磁碗、(53) は青磁碗、(54) は同安窯･青磁皿である。(55 ～ 57) は 14 世紀代の瓦質土器で (55) が甕、(56) はすり鉢、(57) は羽釜である。(58、59) は混入土器で、(58) が 7 世紀代の須恵器の坏身、(59) は古墳時代の須恵器の器台である。

第６面 (図 35、図版 5)

第５層を除去して検出した。地形は調査区北西部分が標高 T.P. ＋ 3.6 m～ 3.7 mで最も低く、調査区東側に向かって緩やかに高くなっており、調査区南東付近で標高 T.P. ＋ 4.0 m前後の最も高い箇所が認められる。検出した遺構は鋤溝で、当該面は下面の第７面に引き続き畠として利用されていたと考えられる。

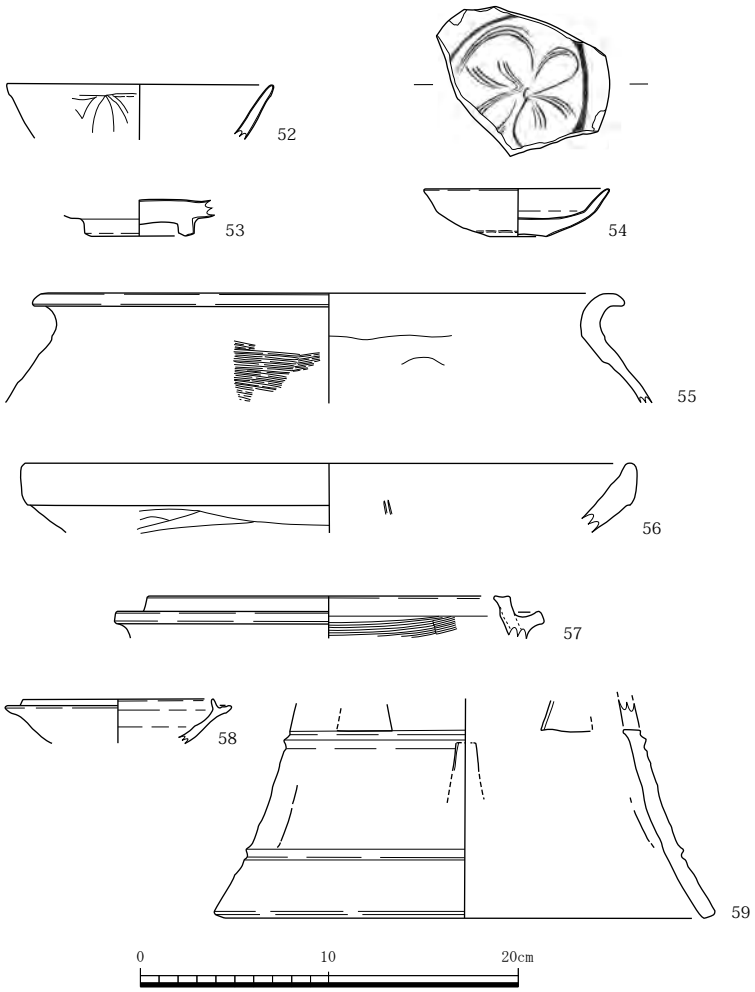


図34　第５層出土遺物実測図（S＝1：4）

鋤溝は調査区のほぼ全域でみられ、南北方向にはしるものが大半であるが、東西方向にはしるものも認められた。幅は 0.2 ～ 0.5 mを測るものが多い。検出面からの深さは、深いもので約 0.2 m、浅いもので 0.05 m程度である。第５面で島畠として利用されていた部分は遺存状況が良好であり、一方で第５面以降に水田面として利用されていた箇所は、耕作が繰り返されることで撹拌され、鋤溝の残りは良好でないという傾向が認められる。遺物が検出された遺構、比較的残りのよかった遺構のみ記述する。

79 鋤溝 (図 36)　20 A -10f ～ h 区で、検出した南北方向の鋤溝で、検出長約 31 m、幅約 0.5 m、深さ 0.1 mを測る。埋土は 1 層、褐灰 (10YR5/1) 細砂混じりシルトである。平安時代に属する土師器の鉢 (60) と高坏の脚部 (61) が出土した。

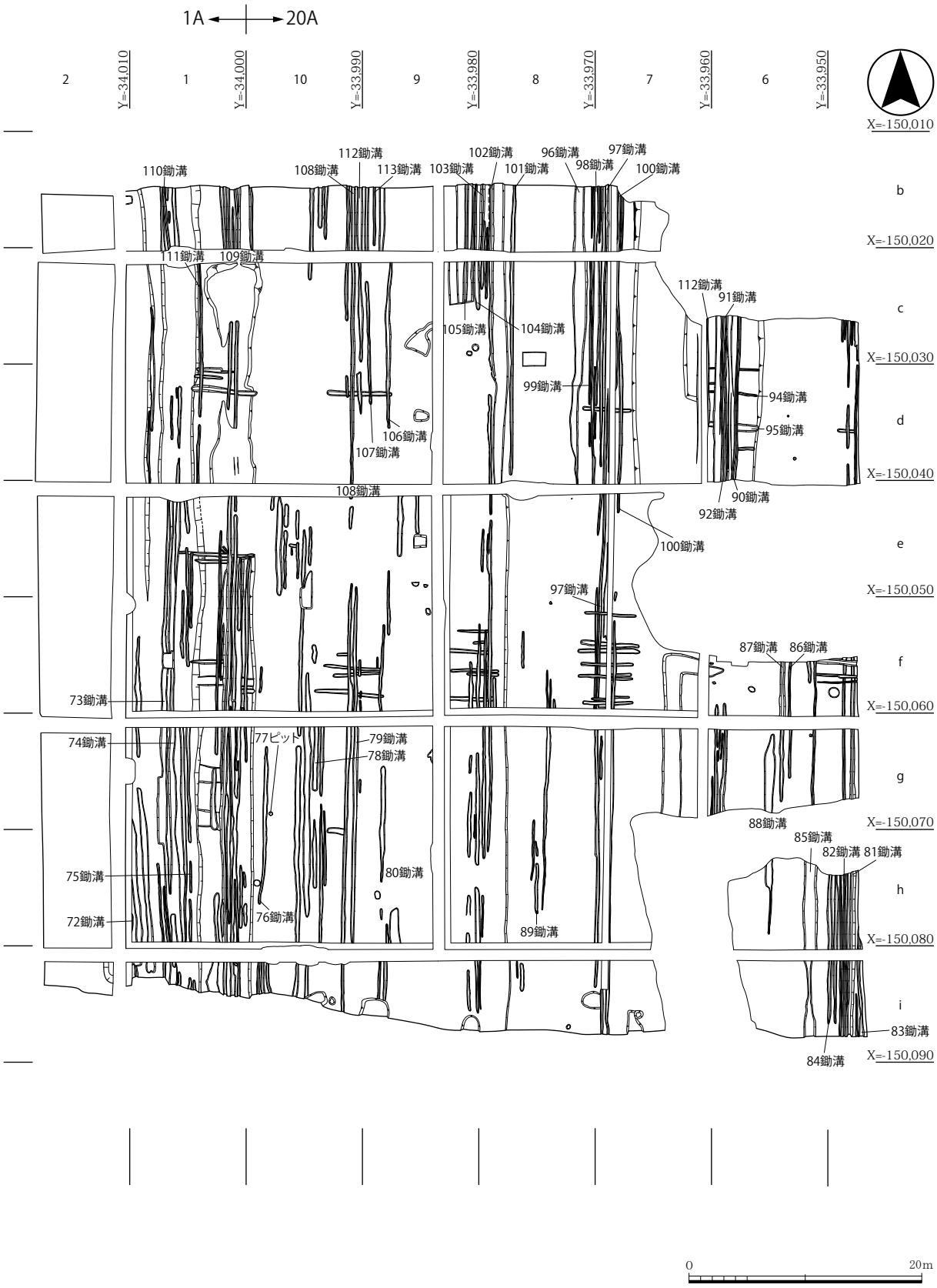


図35　第６面　全体図（S＝１:500）

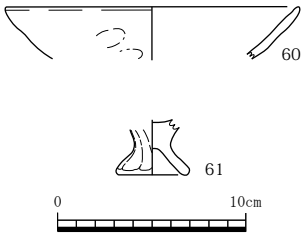


図36　第６面　79鋤溝
出土遺物実測図
（S＝1：4）

81・82 鋤溝 (図 37)　調査区東端、20 A -5h・i 区で検出した。81 鋤溝が幅約 0.3 m、検出面からの深さ約 0.2 mを測り、82 鋤溝が幅約 0.2 m、深さ 0.17 m程度を測る。断面の形状は 81 鋤溝が逆台形、82 鋤溝が半円形を呈しており、断面観察から、82 鋤溝が 81 鋤溝を切っている状況が確認できた。埋土は、81 鋤溝については２層に分層可能で、上層は極細砂砂混じりシルト、下層はシルトを含む層と偽礫を含む極細砂の層が互層状に堆積する状況が観察され、82 鋤溝は細砂混じりシルトであった。

103 鋤溝 (図 38)　20 A -8b 区で検出した南北方向の鋤溝で北端から３ m のところで２条に分かれる。検出長約６ m、幅約 0.3 m、深さ 0.1 mを測り、埋土は１層、褐灰 (10YR5/1) 細砂混じりシルトである。(62) は瓦器小皿である。時期の詳細は不明。

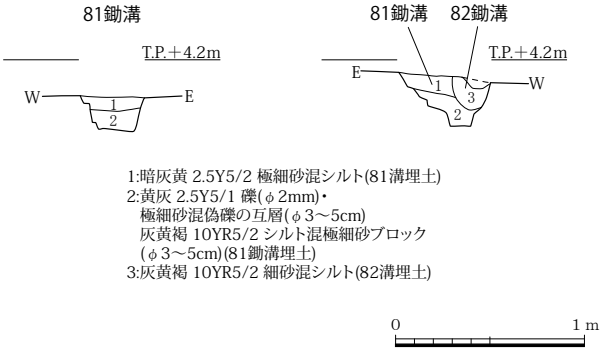


図37　第６面　81･82鋤溝断面図（S＝1：40）

111 鋤溝 (図 39)　1 A -1c・d 区で検出した南北方向の鋤溝で、検出長約 19 m、幅約 0.35 m、深さ 0.05 mを測り、埋土は１層、褐灰 (10YR5/1) 細砂混じりシルトである。(63) は 13 世紀後半～14 世紀の土師器皿である。

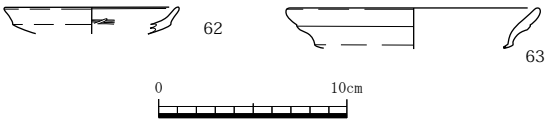


図38　第６面　103鋤溝
出土遺物実測図
（S＝1：4）

図39　第６面　111鋤溝
出土遺物実測図
（S＝1：4）

第６層出土遺物 (図 40)　(64、65) は 14 世紀の瓦器で (64) は埦、(65) が皿である。(66、67) は６世紀後半の須恵器の坏蓋、(68) は７世紀代の須恵器の坏身である。(68) の底部には直線１条のヘラ記号が施されていた。。

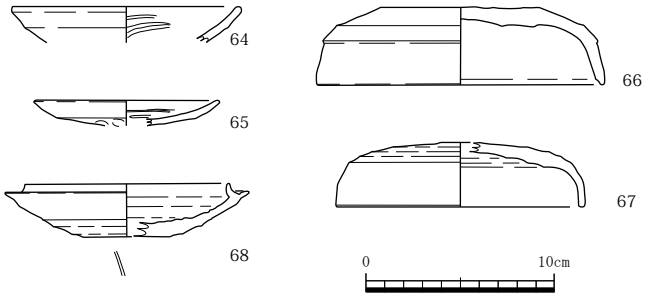


図40　第６層出土遺物実測図（S＝1：4）

第７面 (図 41・図版５、６)

第６層を除去して検出した。標高は T.P.＋3.7 ～ 4.1 mを測る。検出した遺構は、土坑、ピット、鋤溝であり、当該面は主に畠として利用されていた。これは、第 12 層の洪水砂層が厚く堆積し、第 10 面・第 11 面において微高地が形成され集落が営まれていたことを勘案すれば、水はけがよく、畠として利用するのに適していたためであると推察される。以下、土坑、ピット、鋤溝について遺構番号順に詳細を述べる。

117 土坑・115・116 鋤溝 (図 42)　1 A -1g・h 区で検出した。117 土坑は平面形が長方形を呈し長軸は南北方向をとる。規模は長軸 2.62 m、短軸は 0.7 mを測り、検出面からの深さは 0.12 mを測る。埋土は２層で暗青灰色極細砂～細砂混じりシルト～粘土であり、115・116 鋤溝に切られていた。115・116 鋤溝は、いずれも断面が皿状である。規模は 115 鋤溝が幅約 0.25 m、116 鋤溝が 0.2 m前後、検

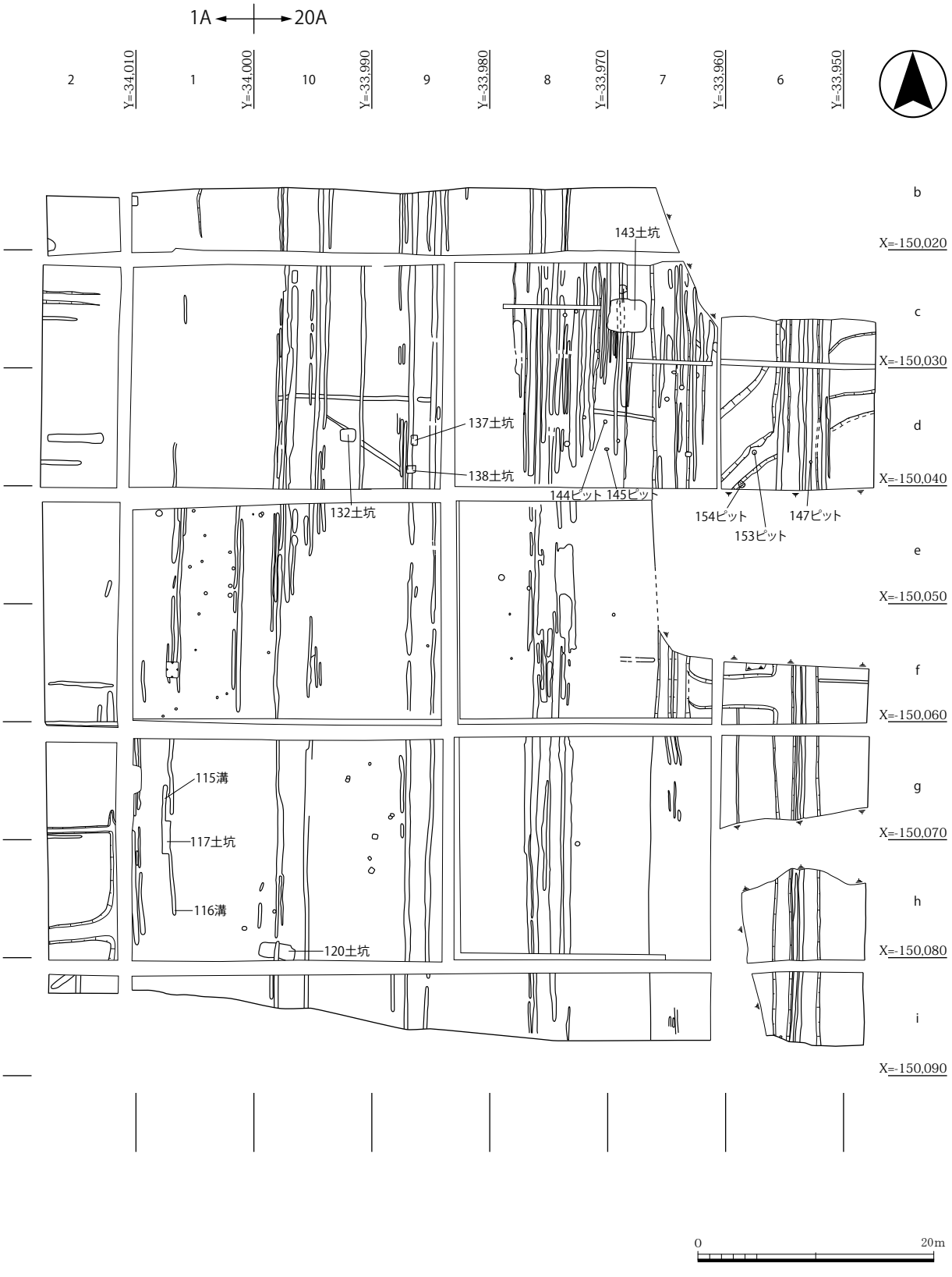


図41　第７面　全体図（S＝1:500）

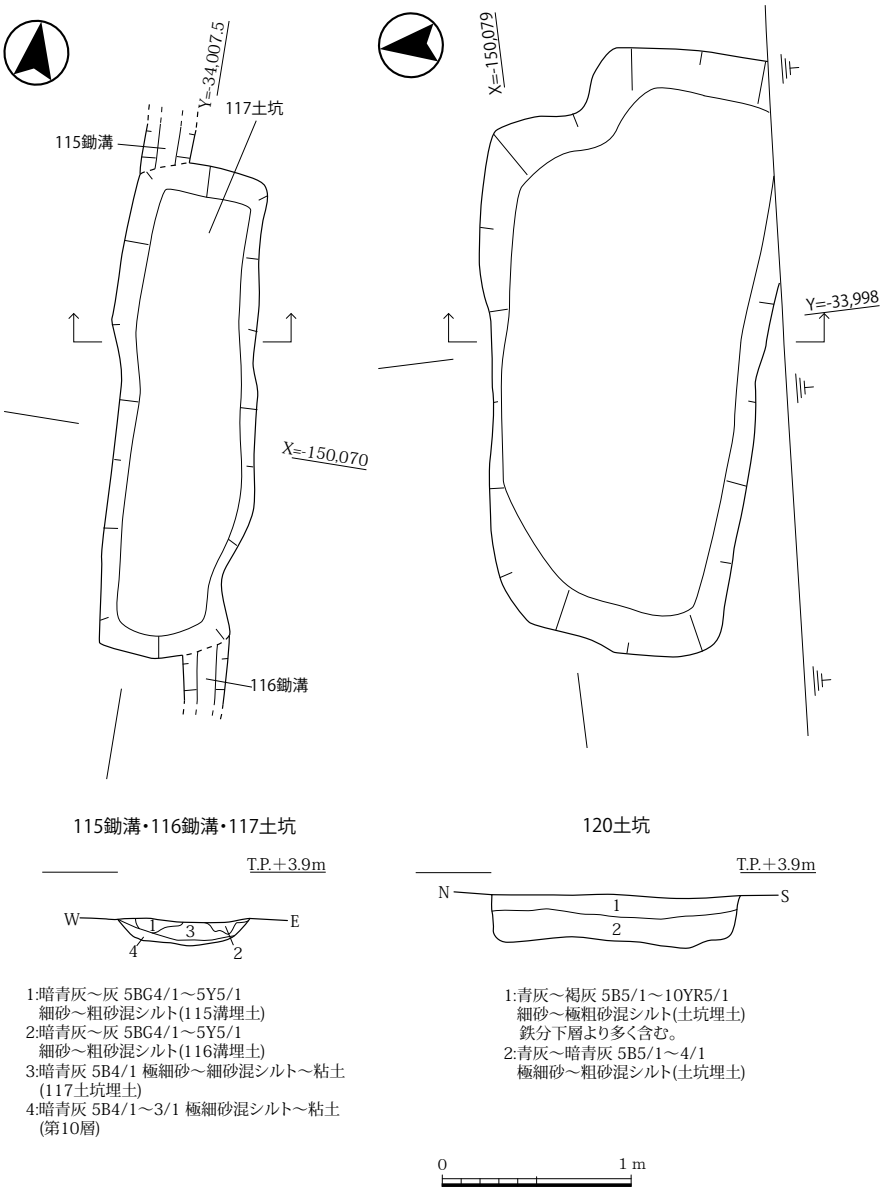


図42　第７面　117･120土坑 平･断面図（S＝1：40）

出面からの深さは 115 鋤溝が 0.07 m、116 鋤溝が 0.06 mを測る。土坑、鋤溝ともに遺物は出土していない。

120 土坑 (図 42・図版 6)　20 A -10h 区で確認した。平面形はほぼ長方形を呈し、長軸はほぼ東西方向をとる。南東の一部が側溝にかかっていた。規模は長軸 3.18 m、短軸は 1.32 mを測り、検出面からの深さは 0.28 mを測る。埋土は 2 層からなり、上層は青灰～褐灰色の細砂・極粗砂を含むシルト、下層は青灰～暗青灰色の極細砂や粗砂の混じるシルトであった。遺物は出土していない。

132 土坑 (図 43・図版 6)　20 A -10d 区で確認した。平面形は方形を呈し、長軸は東西方向をとる。規模は長軸 1.15 m、短軸は 0.99 mを測り、検出面からの深さは 0.33 mを測る。埋土は 2 層からなり、上層は灰黄～黄褐色粘性のある極細砂をブロック状に含む褐灰色極細砂混じりシルトで、人為的に埋め戻したと考えられる埋土であり、下層は黄灰～黄褐色シルト～細砂であった。遺物は出土していない。

137 土坑 (図 44、図版 6)　20 A -9d 区で確認した。平面形は長方形を呈し、長軸は南北方向をとる。

西側を鋤溝に切られていた。規模は長軸 0.89 m、短軸は 0.7 mを測り、検出面からの深さは 0.34 mを測る。埋土は暗青灰～暗黄灰色シルト～極細砂の単層であり、シルトのブロックがみられ、人為的に埋め戻したと推察される。遺物は土師器の細片が出土しているが時期の詳細は不明である。

138 土坑（図 44） 20 A -9d 区で確認した。平面形は長方形を呈し、長軸は東西方向をとる。西半を鋤溝に切られていた。東西の規模は下端から復原すると約 0.8 m、南北は約 0.6 mと推定され、検出面からの深さは 0.14 mを測る。埋土は青灰～暗黄灰色極細砂混じり粘質シルトの単層であった。遺物は弥生時代後期から庄内式期にかけての土器の細片が出土したが図化しえなかった。

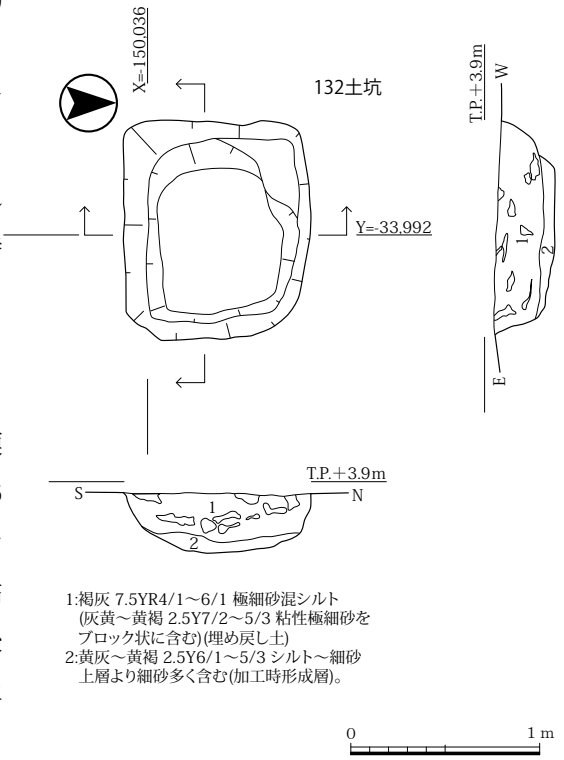


図43 第７面 132土坑平・断面図（S＝1：40）

143 土坑（図 45・図版 6） 20 A -7c 区で確認した。平面形は方形を呈し、長軸はほぼ東西方向をとる。５条の鋤溝に切られていた。規模は長軸 2.95 m、短軸は 2.73 mを測り、検出面からの深さは 0.67 mを測る。当該面で検出した同種の遺構と認識される土坑の中では、面積および検出面からの深さが最大の土坑である。埋土は 12 層

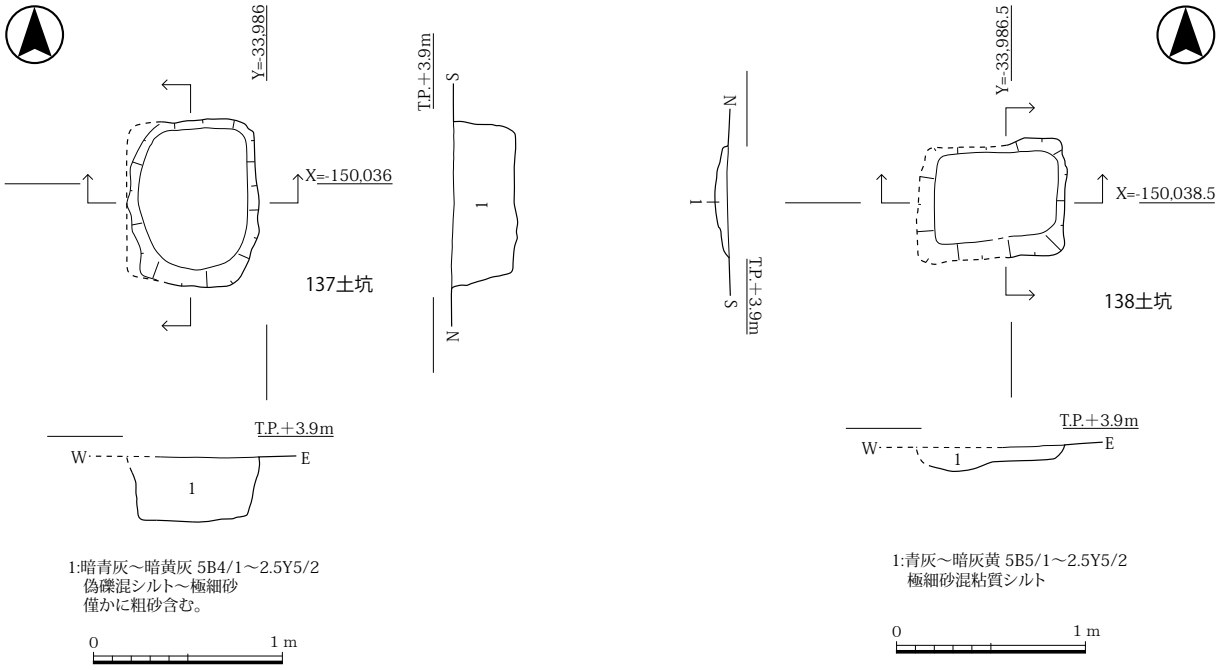


図44 第７面 137・138土坑平・断面図（S＝1：40）

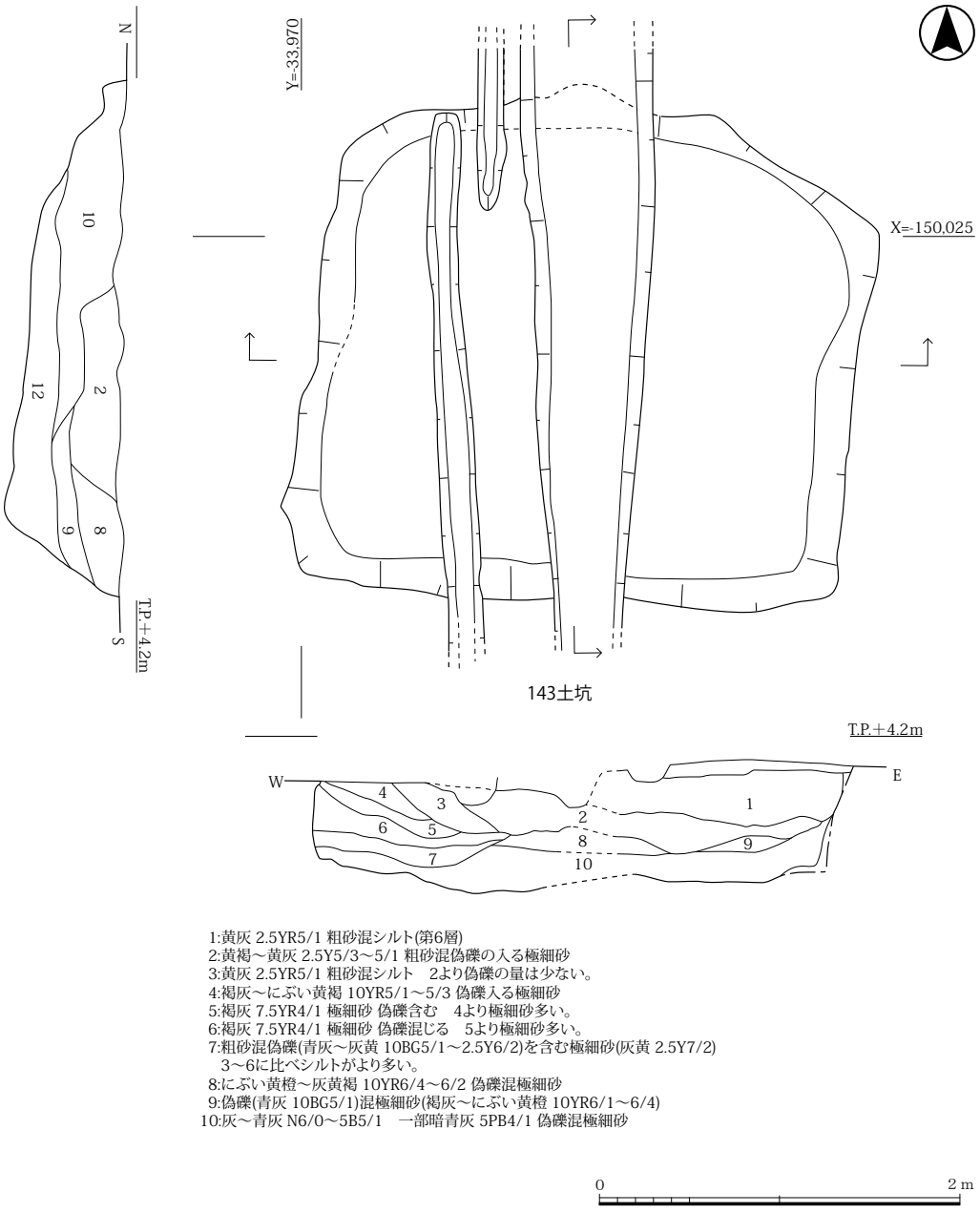


図45　第７面　143土坑平・断面図（Ｓ＝１:40）

からなり、シルトブロック混じり極細砂であった。(10 ～ 12) 層は上層に比べより多く極細砂を含んでいた。いずれの層にもシルトブロックが含まれることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。弥生時代後期から布留式期にかけての土器細片が出土したが、図化しえなかった。

144・145 ピット (図 46)　20 A -8d 区で確認したピットである。平面形は円形を呈し、断面形はすり鉢状を呈する。規模は 144 ピットが直径 0.47 m、検出面からの深さが 0.19 m、145 ピットが直径 0.28 m、検出面からの深さ 0.1 mを測る。埋土は２基ともに１層で、144 ピットが褐灰～灰黄褐色シルト～極細砂、145 ピットが褐灰～灰褐色シルト～極細砂であった。遺物は出土していない。

147・153・154 ピット (図 46)　いずれも 20 A -6d 区で確認したピットである。平面形は円形を呈する。規模は 147 ピットが直径 0.29 m、検出面からの深さは 0.32 m、153 ピットが直径 0.26 m、検出面

からの深さが 0.14 m、154 ピットが直径 0.55 m、検出面からの深さが 0.27 mを測る。埋土については、147 ピットの上層が褐灰～にぶい黄褐色極細砂～細砂混じりシルト、下層が灰オリーブ～青灰色粘質シルト～極細砂であり、153 ピットは褐灰～にぶい黄褐色極細砂～細砂混じりシルトの 1 層であり、154 ピットは、褐灰～灰褐色極細砂混じりシルトと褐灰～灰黄褐色極細砂混じりシルトの 2 層であった。遺物は、153・154 ピットから弥生時代後期の壺の小片と土師器の細片が出土した。いずれも図化しえなかった。

当面で検出した土坑は、いずれも平面形が長方形もしくは正方形を呈し、埋土にブロックを多く含んで人為的に埋め戻された状況が窺われ、各辺をほぼ正方位に合わせるものである。これらの特徴から、従来池島 I 期地区や西接する 05 － 2 調査区などにおいて確認されている「方形土坑」と同様、災害復旧に伴う遺構と考えられる。一方、ピットについては、位置に建物を構成するような規則性はみられず、性格は不明である。

鋤溝 (図 41)　鋤溝は南北方向にはしるものが多く、調査区のほぼ全域で検出された。幅は 0.2 ～ 0.3 mを測るものが多い。検出幅 0.6 m前後のものも確認されたが、幾条かの鋤溝が切りあっていたものと推測される。検出面からの深さは深いもので約 0.1 m、浅いもので 0.05 m程度である。埋土については、ベースの層に比べ、細砂～粗砂をより多く含んでいた。

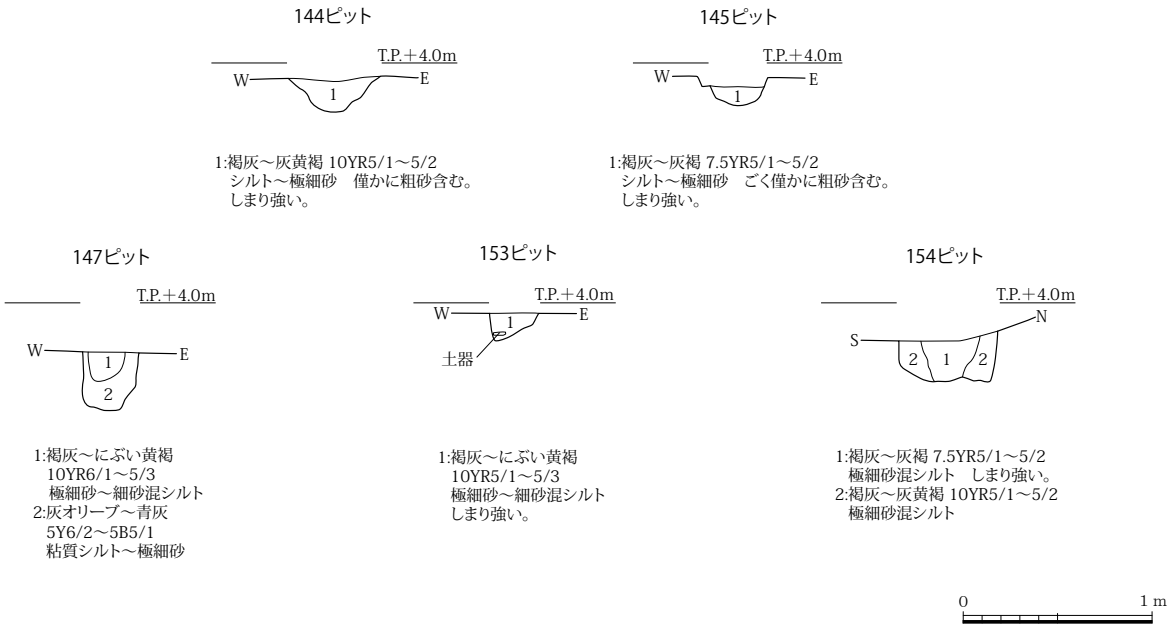


図46　第 7 面　144・145・147・153・154ピット断面図（S ＝ 1 :40）

第 7 層出土遺物 (図 47)

(69、70) は布留式期の土師器の壺、(71) は弥生時代後期の甕、(72) は庄内式期の鉢、(73) は 6 世紀代の須恵器の壺である。

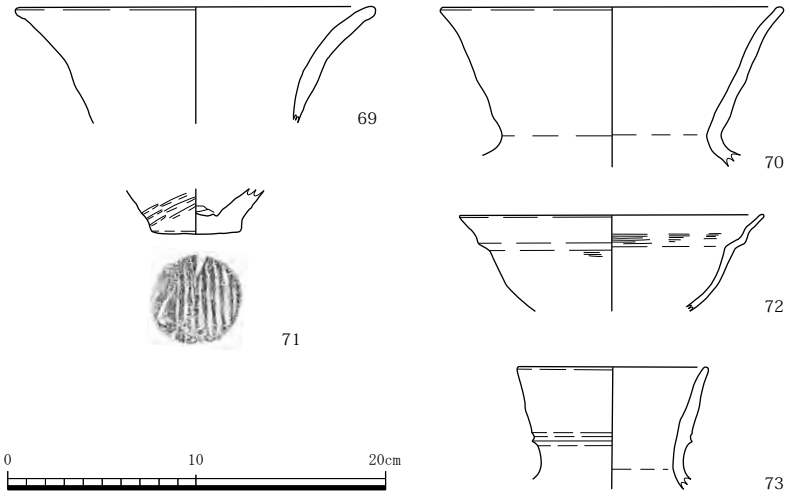


図47　第７層出土遺物実測図（Ｓ＝１：４）

第 10 面 (図 48、49・図版６～８)

第 10 面は、第７層を除去して検出した古墳時代に帰属する遺構面であるが、上層包含層が削平された高所では、飛鳥時代～平安時代の遺構も検出された。

地形については、調査区北東部分が標高 T.P. ＋ 3.7 ～ 4.0 ｍと最も高く、調査区西側は標高 T.P. ＋ 3.6 ～ 3.8 m、南側は標高 T.P. ＋ 3.75 ～ 3.9 ｍと比高差をもつ。北東部分 Y= － 33,990 より東、X= － 150,050 より北側で古墳時代に属する掘立柱建物や井戸などの遺構が密集していた。調査区西側部分では南東から北西へはしる 460 溝や水田域などを確認した。また中世段階において、島畠が形成されていた部分では、当面帰属の遺構の遺存状況は比較的良好であるのに対し、水田域であった箇所は耕作が当面まで及んだと考えられ、遺構上部が撹拌され遺存状況があまり良くない。また、微高地の北側の標高 T.P. ＋ 4 m前後の高い部分では、洪水氾濫堆積層 (第 12 － 1 層) が一部露出してきており第 11 層の堆積が確認されなかった。そのことから微高地の大部分では第 11 層上面 (第 11 面) と第 10 層上面 (第 10 面) を同一面で検出した。どちらの面に帰属するかは出土遺物と遺構の埋土などから判断した。以下、第 10 面で検出した遺構について、調査区北東部微高地、調査区北西部、調査区南部の３地区にわけて述べるとともに遺物から判断した帰属時期について記した。

【調査区北東部微高地の遺構】

調査区北東部の微高地では、古墳時代初頭に帰属する掘立柱建物６基、古墳時代に帰属する井戸５基、土坑 17 基、鋤溝 20 条、溝、ピット、高まりなどの遺構を検出した。

各遺構について、建物・井戸・土坑・溝・ピット・高まりの順に遺物が出土した遺構を中心に詳述する。基本的に各記述は遺構番号順に進めるが、ピットについては分布状況から地区を設定し、その地区毎に述べていく。

建物１ (図 50、51・図版９)　20 A -8b・c 区で検出した。標高 T.P. ＋ 3.8 ～ 3.95 ｍである。桁行３間、梁間２間の掘立柱建物で、平面形は方形である。南側梁間中央のピットは上面の削平が著しく (検出面 T.P. ＋ 3.7 m) 検出することは出来なかった。183・184・186・188・189 柱穴は下層ピットを切っ

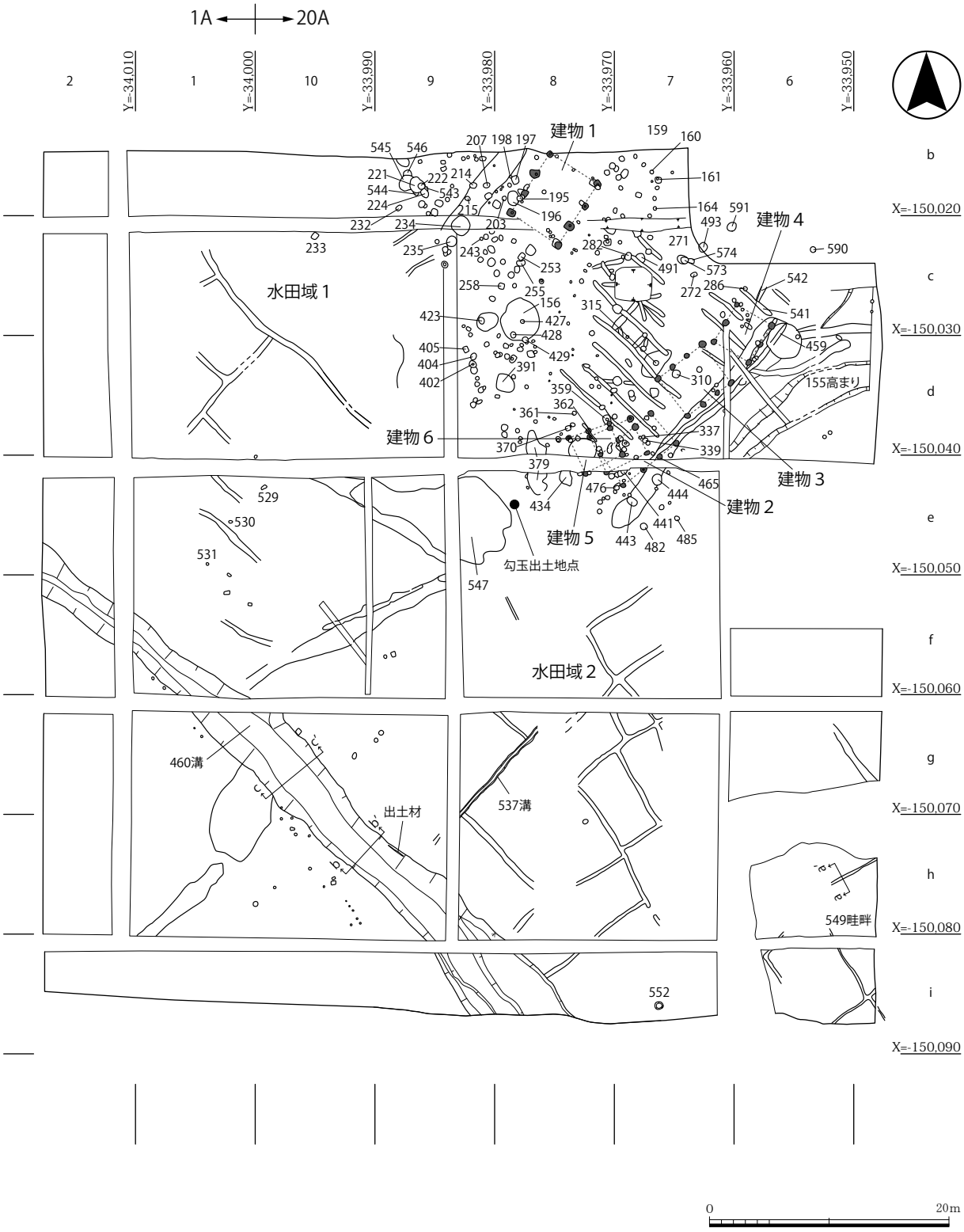


図48　第10面　全体図（S＝1：500）

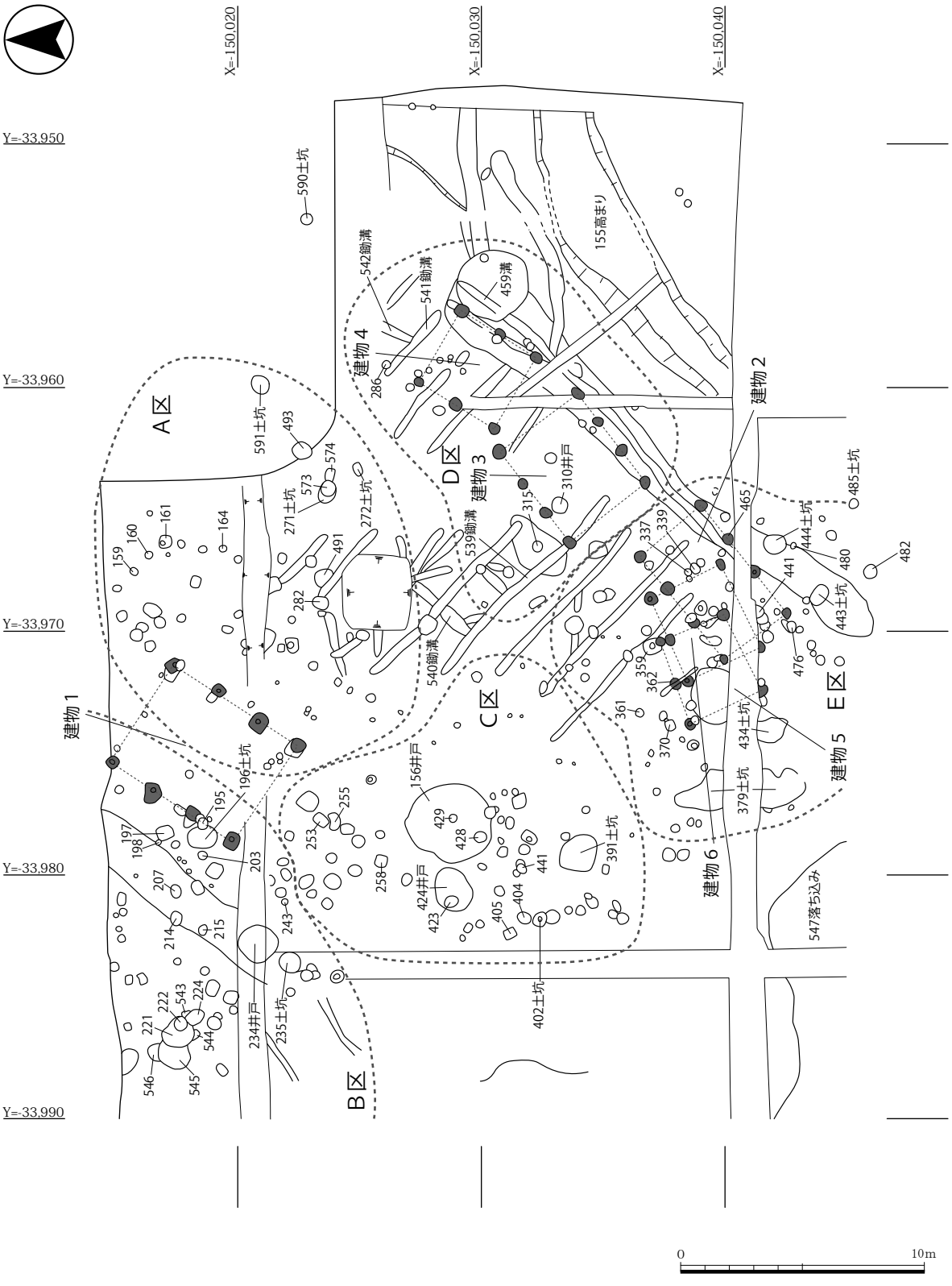


図49　第10面　北東部遺構図（S＝1：250）

ており、184 柱穴はさらに他のピットによって切られていた。主軸の方位は座標北から約 33°東に振れている。規模は、芯心距離 (以下全ての建物も同様) で、桁行は西側柱筋で 5.8 m、東側柱筋で 6 m、梁間は 4.6 mを測り、面積は約 27 ㎡である。柱間隔は、桁行で最大 2.1 m、最小 1.9 m、梁間は 2.2

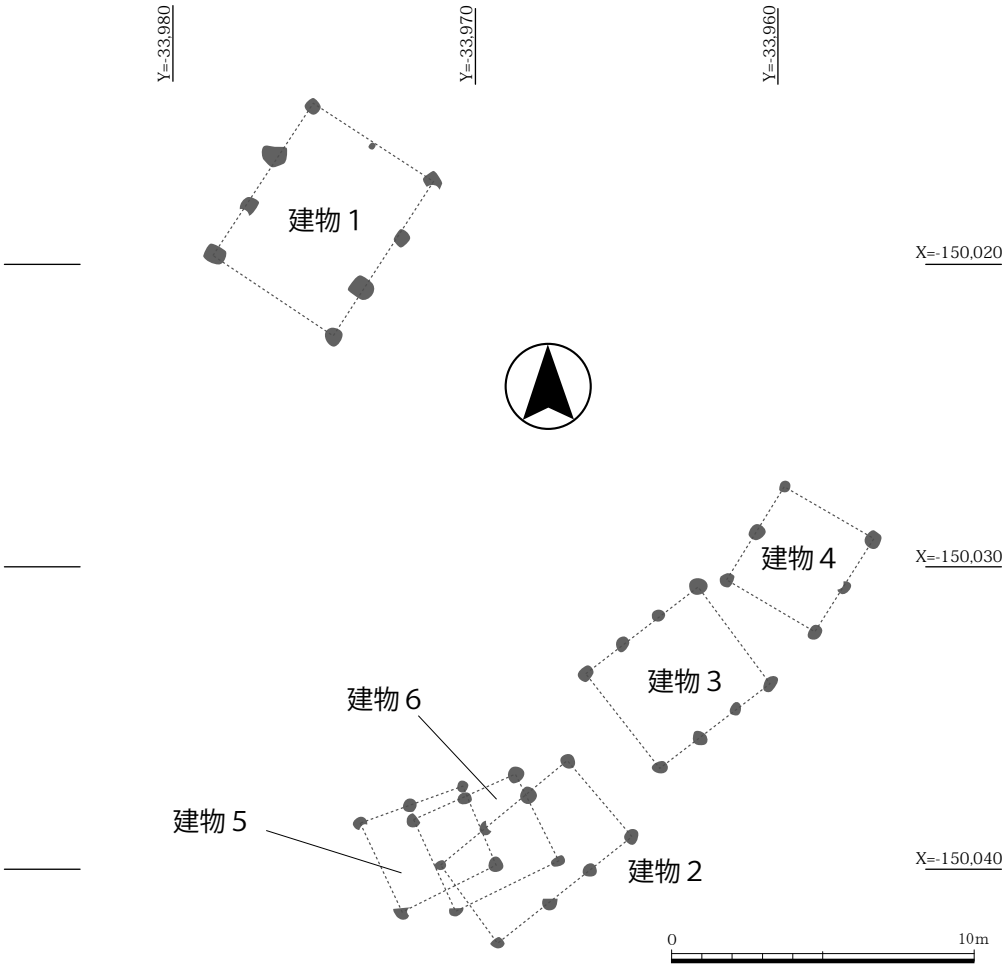


図50　第10面　建物配置図（S＝1:250）

～3ｍである。柱穴の平面形は方形を呈するものが 182・183・184・187・188・189 柱穴、円形を呈するものが 180・185・186 柱穴である。184 柱穴は、ピットに切られているため、平面形を正確に把握できなかった。方形を呈する柱穴の一辺は 0.3 ～ 0.70 m、円形柱穴の直径は 0.2 ～ 0.55 ｍである。検出面からの深さは 0.25 ～ 0.4 ｍを測る。187 柱穴のみ柱が遺存しており、残存長は 19cm、残存径は 13cm であった。また 182・185・186 柱穴には礎板として板材が遺存していた。いずれも樹種は檜材である。掘方の埋土は灰褐～褐灰色シルト混じり極細砂、柱痕部分は極細砂混じりシルトである。遺物は、180･187･189 柱穴以外すべての柱穴から庄内式期に属する遺物の細片が出土しているが、図化しえたものはなかった。

建物２（図 50、52、53・図版 9）　20 A -7・8d・e 区で検出した。標高 T.P. ＋ 3.7 ～ 3.8 ｍである。桁行３間、梁間１間の掘立柱建物で、平面形は方形である。建物５・６と重複する。柱穴の切りあい関係はない。主軸の方位は座標北から約 50°東に振れている。354 柱穴はピットに切られ、471・551 柱穴は側溝に切られている。規模は西側柱筋で 5.4 m、東側柱筋で 5.6 m、梁間は北側柱筋で 3.2 m、南側柱筋で 3.1 ｍを測り、面積は約 17 ㎡である。桁行の柱間隔は、440 柱穴と 471 柱穴の間のみが 2.1 ｍと若干長く、その他は等間隔で 1.8 ｍである。柱穴の平面は、不整形の柱穴 551 以外は全てほぼ円形である。円形を呈する柱穴の直径は 0.4 ～ 0.5 ｍである。検出面からの深さは、南側柱筋の 551・

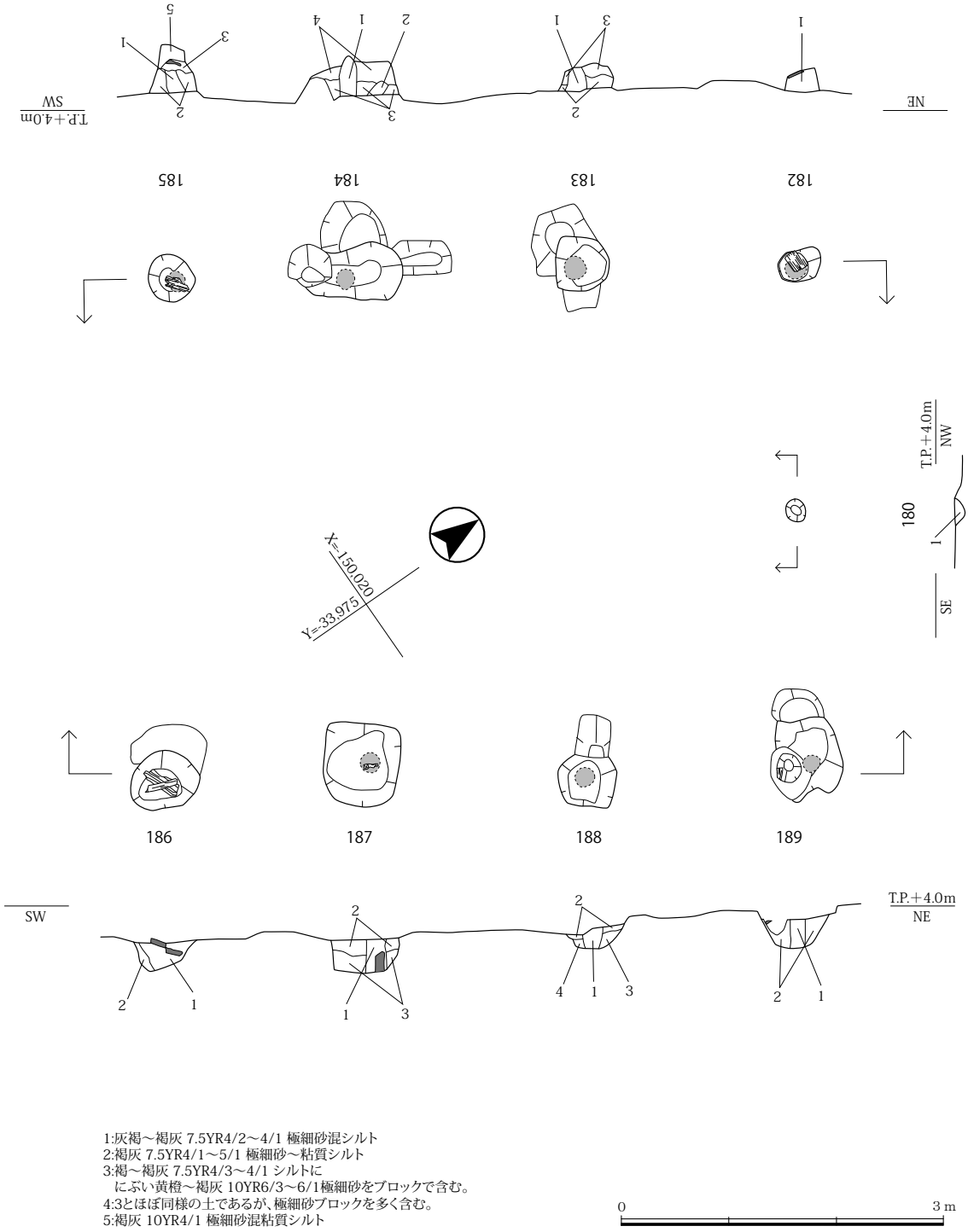


図51　第10面　建物１平・断面図（S＝１:60）

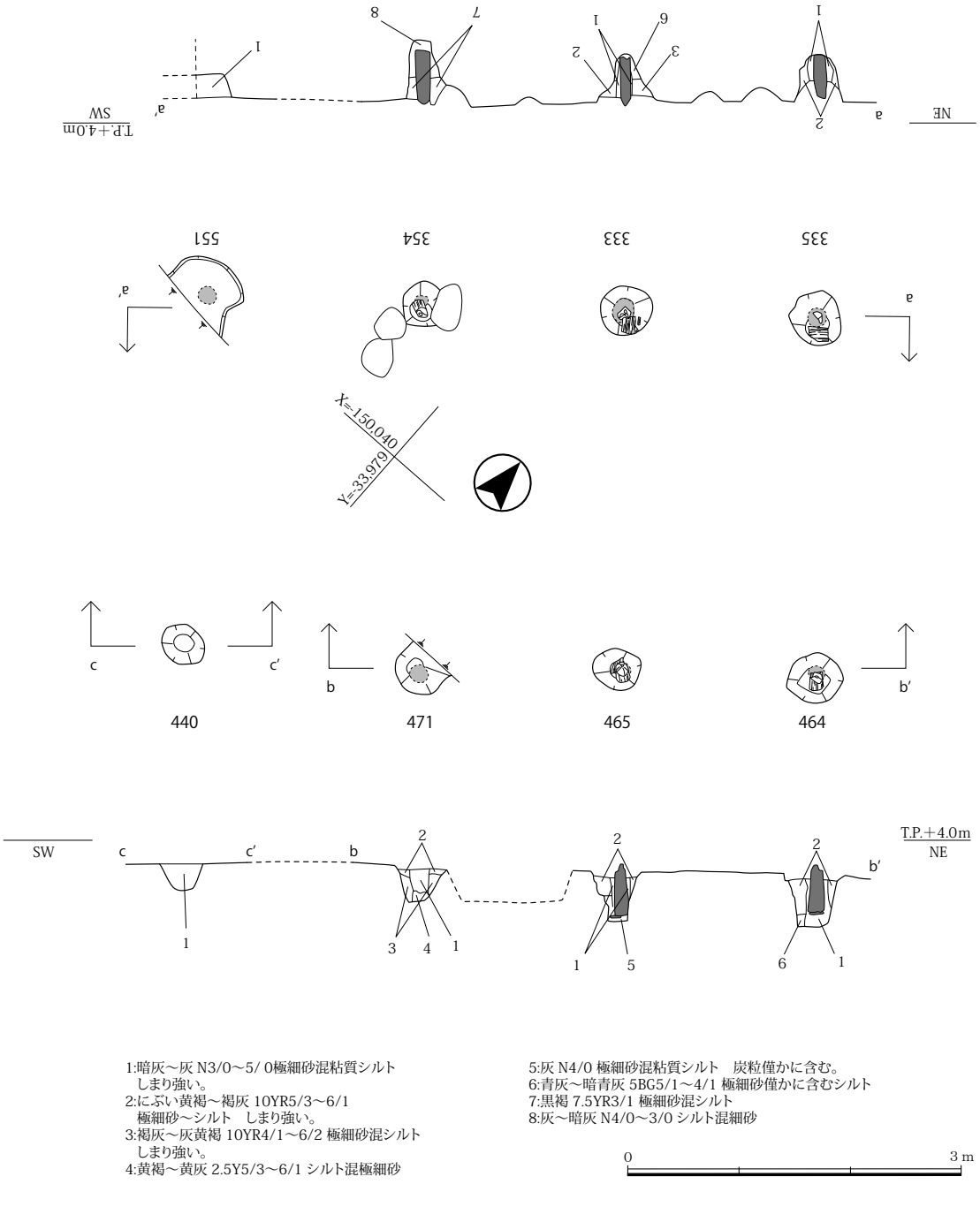


図52　第10面　建物２平・断面図（S＝1：60）

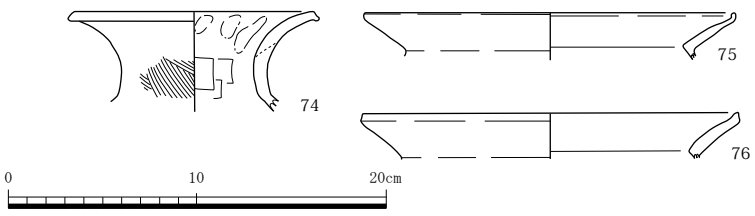


図53　第10面　建物２・３出土遺物実測図（S＝1：4）

440 柱穴が 0.2 mであり、それら以外は 0.3 ～ 0.6 mを測る。333・335・354・464・465 柱穴には柱が遺存していた。柱の残存長は 0.4 ～ 0.5m、残存直径は 8 ～ 14cm で、333 柱穴に残存していた柱材の樹種は檜材、335・354・464・465 柱穴の材は杉であった。また、335・464・465 柱穴では礎板と考えられる板材が遺存していた。樹種は杉である。掘方埋土は褐灰～灰黄褐色を呈するものが多い。柱が遺存していたもの、柱の周囲の土が灰色から黒褐色粘質シルトとなっていたものが 4 基確認され

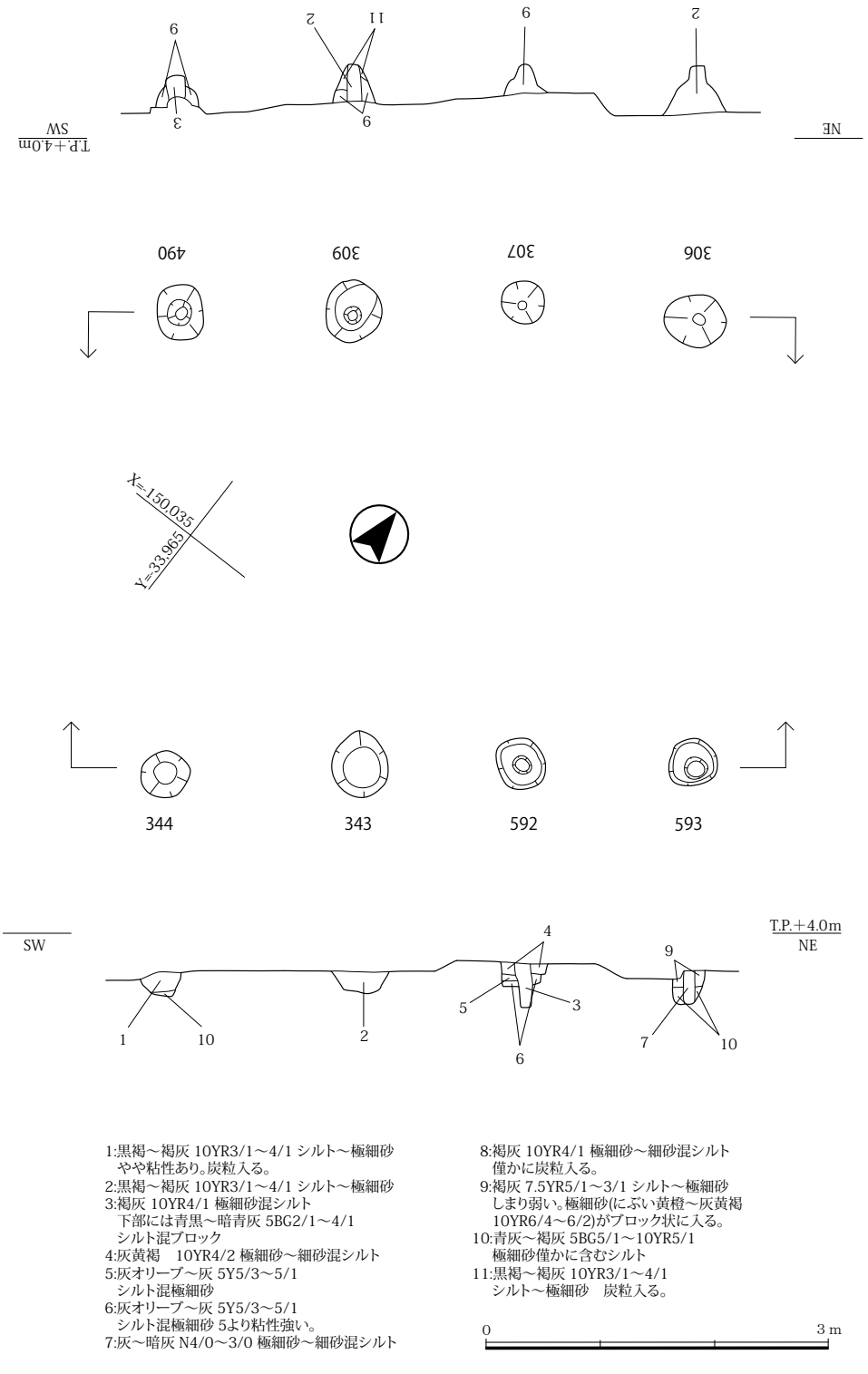


図54　第10面　建物３平・断面図（S＝1：60）

た。遺物は 465 柱穴から弥時代後期から庄内式期の壺の口頸部が出土した (図 53 － 74)。他に 333・354・440・464 柱穴から、弥生時代後期から庄内式期に属する遺物の細片が出土した。

建物 3 (図 50、53、54・図版 9)　20 A -7d 区で検出した。微高地東側の標高は T.P. ＋ 3.8 mである。桁行 3 間、梁間 1 間の掘立柱建物である。建物主軸の方位は座標北から約 53° 東に振れている。平面形は方形を呈し、規模は桁行が 4.6 m、梁間が 3.9 mで、面積は約 18 ㎡を測る。桁行の柱間隔は 1.4 ～ 1.7 mである。柱穴の平面形は円形を呈し、直径は 0.4 ～ 0.5 mである。検出面からの深さは、343 柱穴が 0.2 m、344 柱穴が 0.1 mであり、それ以外は 0.3 ～ 0.4 mを測る。掘方の埋土は灰褐～黒褐

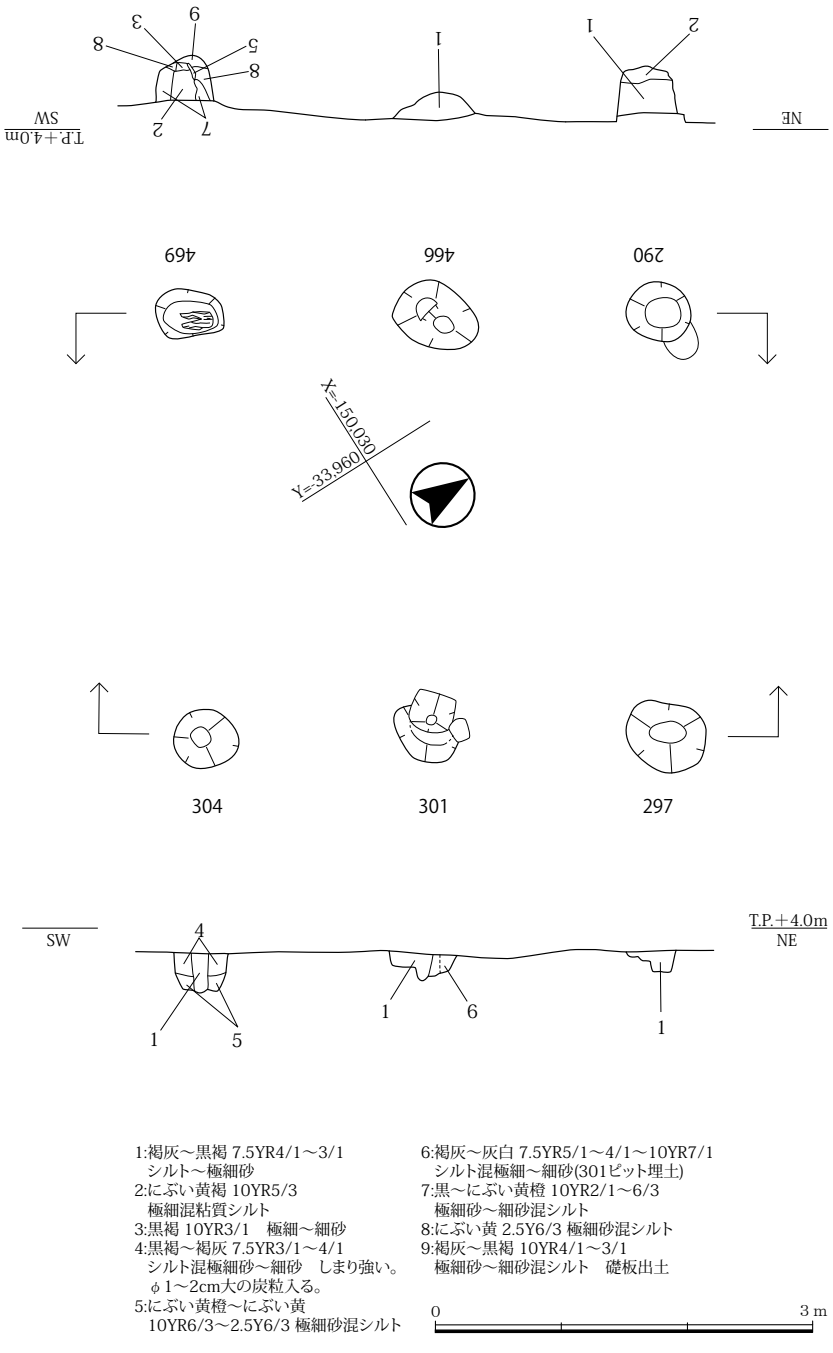


図55　第10面　建物４平・断面図（S＝1：60）

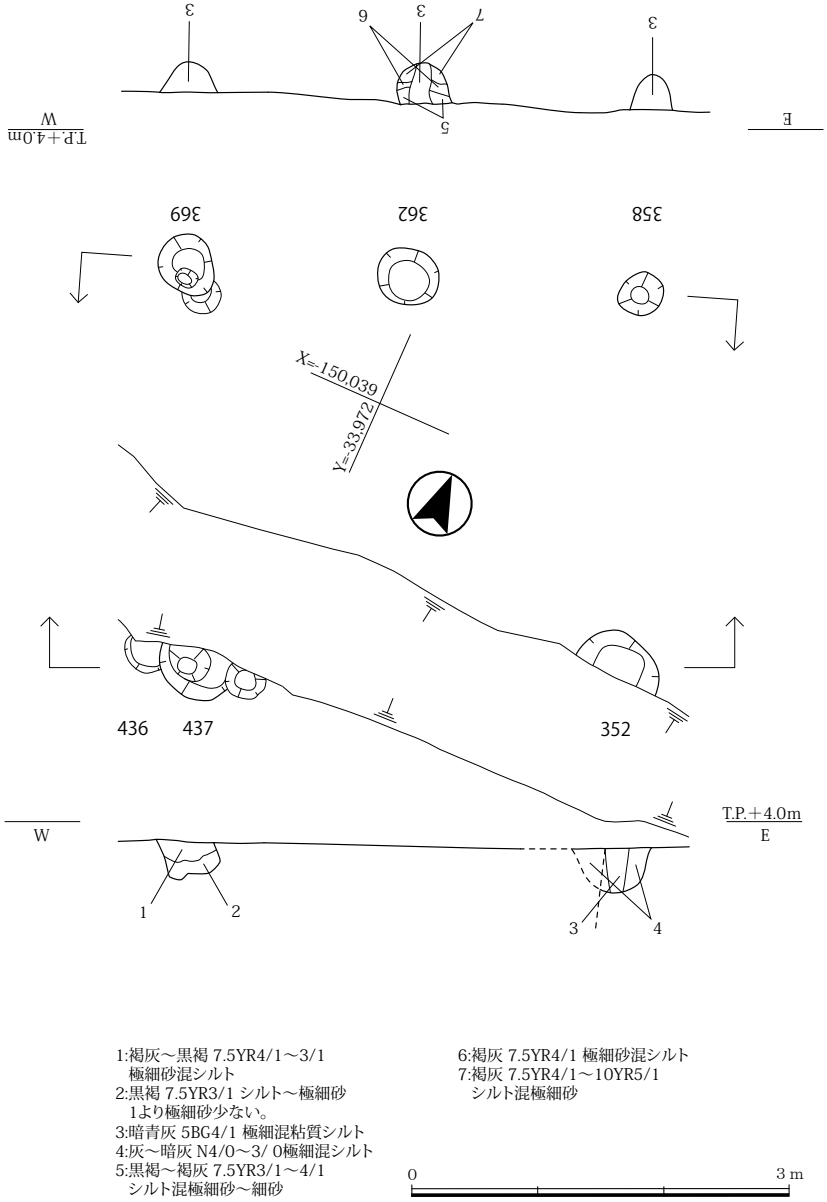


図56　第10面　建物５平･断面図（S＝1：60）

色極細砂混じりシルトが多くみられる。尚、490 柱穴は耕作に伴う 539 鋤溝に切られていた。遺物は 490・343 柱穴から庄内式期の甕 (図 53 － 75・76) が出土し、他に 344・592・593 柱穴から弥生時代後期から庄内式期に属する遺物が出土した。

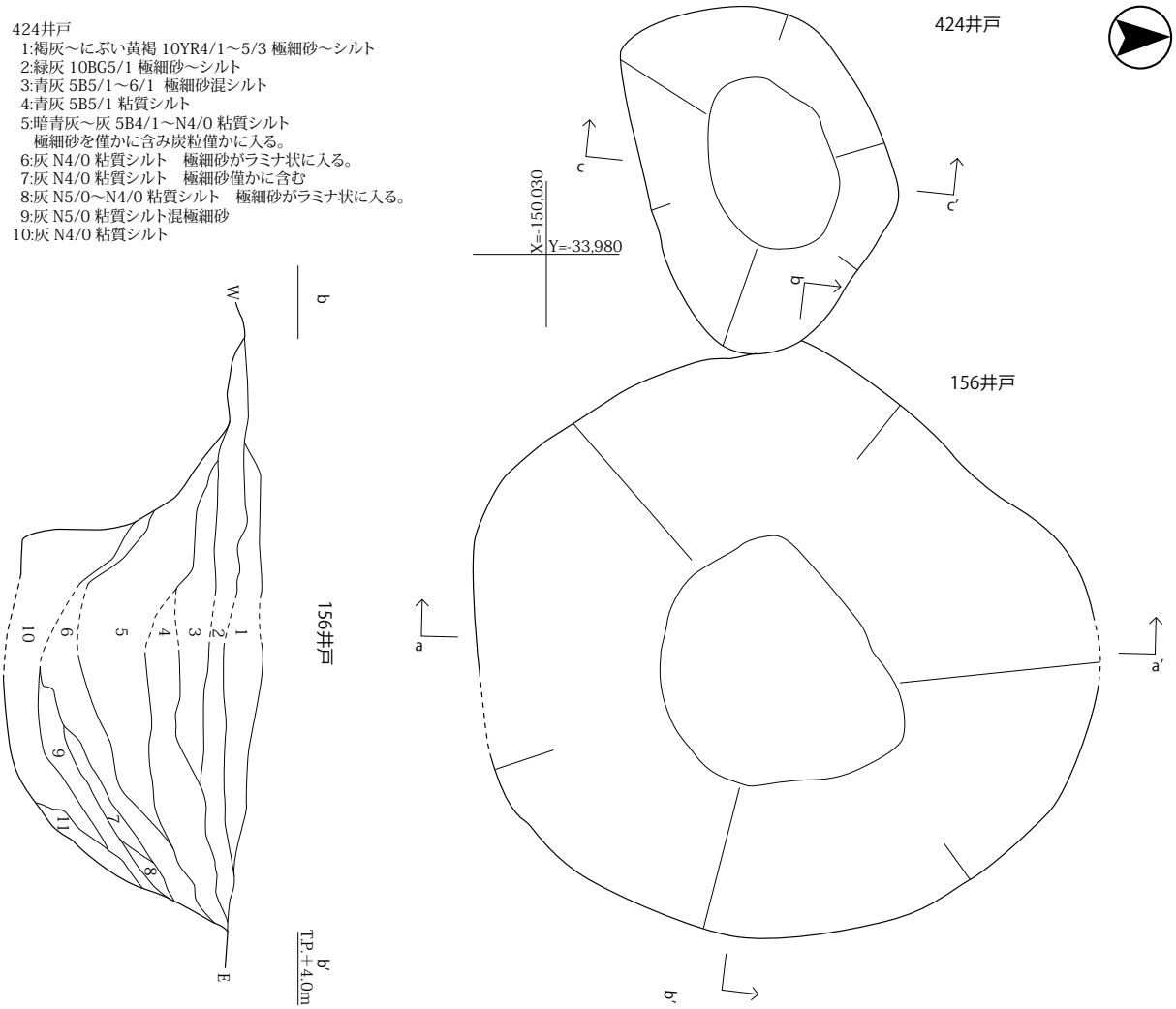
建物４ (図 50、55・図版 10)　20 A -6・7c・d 区で検出した。微高地東側、標高は T.P. ＋ 3.8 ～ 3.9 mである。建物３の北東に位置し、桁行２間、梁間１間の掘立柱建物である。建物主軸の方位は座標北から約 32° 東に振れている。平面形は方形で、規模は桁行が西側柱筋で 3.7 m、東側柱筋で 3.6 m、梁間は 3.3 mであり、面積は約 12 ㎡を測る。桁行の柱間隔は、最大で２m、最小で 1.7 mである。柱穴の平面形は 469 柱穴が隅丸方形であるが、他はほぼ円形を呈する。469 柱穴は一辺 0.4 ～ 0.5 m、円形を呈する柱穴の直径は 0.5 ～ 0.6 mである。検出面からの深さは最も深い 290 柱穴で 0.45 m、最

図57　第10面　建物６平･断面図（S＝1:60）

も浅い 297 柱穴で 0.15 mを測る。469 柱穴は礎板と考えられる板材が遺存していた。樹種は檜材である。290 柱穴は下層のピットを切っており、301 柱穴はピットに切られる。掘方埋土は褐灰～黒褐色シルト～極細砂である。290・304・466・469 柱穴から庄内式期に帰属する遺物が出土したが、いずれも図化できるものはなかった。

建物５（図 50、56・図版 10)　20 A -7・8d・e 区で検出した。微高地南側、標高 T.P. ＋ 3.7 ～ 3.8 m の地点に位置し、建物２・６と重複する。南側柱列中央は側溝に切られている。437 柱穴は他のピットに切られ、436 ピットを切っている。369 柱穴はピットを切っている。桁行２間、梁間１間と想定される掘立柱建物である。建物主軸の方位は座標北から約 70°東に振れている。平面形は方形を呈し、

424井戸
1:褐灰～にぶい黄褐 10YR4/1～5/3 極細砂～シルト
2:緑灰 10BG5/1 極細砂～シルト
3:青灰 5B5/1～6/1 極細砂混シルト
4:青灰 5B5/1 粘質シルト
5:暗青灰～灰 5B4/1～N4/0 粘質シルト
極細砂を僅かに含み炭粒僅かに入る。
6:灰 N4/0 粘質シルト 極細砂がラミナ状に入る。
7:灰 N4/0 粘質シルト 極細砂僅かに含む
8:灰 N5/0～N4/0 粘質シルト 極細砂がラミナ状に入る。
9:灰 N5/0 粘質シルト混極細砂
10:灰 N4/0 粘質シルト



156井戸
1:黒褐 7.5YR3/1 シルト混細砂 土器片を多く含む。
2:褐灰 10YR4/1 シルト混極細砂 φ3cmの細砂ブロック含む。
3:灰 7.5Y4/1 シルト混中砂 φ5cmの中・粗砂ブロック含む。
4:緑灰 10GY5/1 シルト混細砂・中砂 炭含む。
5:青灰 5B5/1 細砂混シルト
灰 N4/ 0シルトブロック・灰白 N7/ 0細砂ブロック含む。
6:緑灰 7.5GY6/1 極細砂混中砂
7:灰 10Y4/1 極細砂混シルト ラミナあり。
8:灰 N5/ 0中砂 オリーブ灰 5GY6/1 極細砂の互層 ラミナあり。
9:緑灰 5G5/1 極細砂～中砂 ラミナあり。
10:灰 N4/0 細砂混シルト
11:オリーブ灰 中砂～極粗砂 第11層
12:灰 10Y4/1 中砂混シルト～極細砂
13:青灰 5B5/1 シルト～極細砂
14:暗灰 N3/ シルト～極細砂 青灰 5BG5/1 偽礫入る。
15:灰 N4/0～N6/0 シルト～極細砂 14よりシルト量多い。
16:暗灰～黒 N3/0～N2/0 極細砂混偽礫 土器片含む。

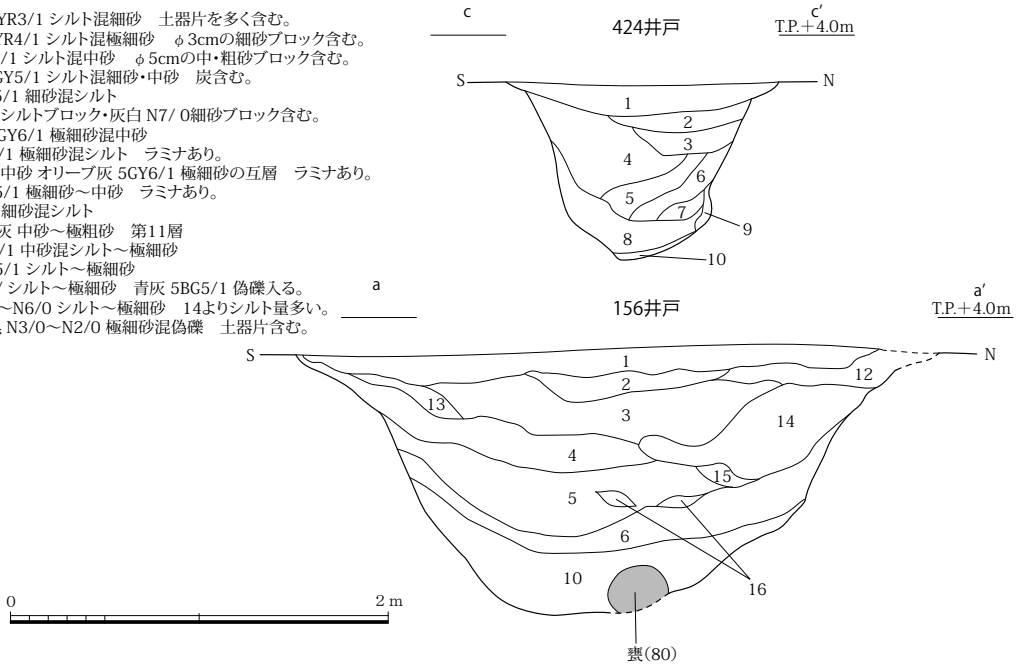


図58 第10面 156・424井戸平・断面図（S＝1：40）

規模は桁行が北側柱筋で 3.6 m、南側柱筋で 3.5 m、梁間は東側柱筋で 2.9 m、西側柱筋で 3.1 mを測り、面積は約 11 ㎡である。桁行の柱間隔は、北側柱筋は等間隔で約 1.8 mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し、直径は最小の 358 柱穴で 0.3 m、最大の 352 柱穴で 0.6 mとややばらつきがある。検出面からの深さは最も浅い 358 柱穴が 0.26 m、最も深い 352 柱穴が 0.5 mを測る。掘方埋土は褐灰～黒褐色極細砂混じりシルトが多くみられる。尚、362 柱穴は鋤溝に切られていた。遺物は 358・362 柱穴から庄内期に属する遺物が出土した。いずれも図化できるものはなかった。

建物 6 (図 50、57・図版 10)　20 A -7・8d・e 区で検出した。微高地南側、標高は T.P. ＋ 3.8 ～ 3.9 mである。建物 2 ・ 5 と重複する。桁行 2 間、梁間 1 間と想定される掘立柱建物である。建物主軸の方位は座標北から約 65° 東に振れている。南側柱列中央は側溝に切られている。平面形は方形であり、規模は桁行が 3.6 m、梁間は東側柱筋で 3.1 m、西側柱筋で 3.2 m、面積は約 11 ㎡である。桁行の柱間隔は、北側柱筋は等間隔で約 1.8 mである。規模、柱間は建物 5 と近似する。柱穴の平面形は円形を

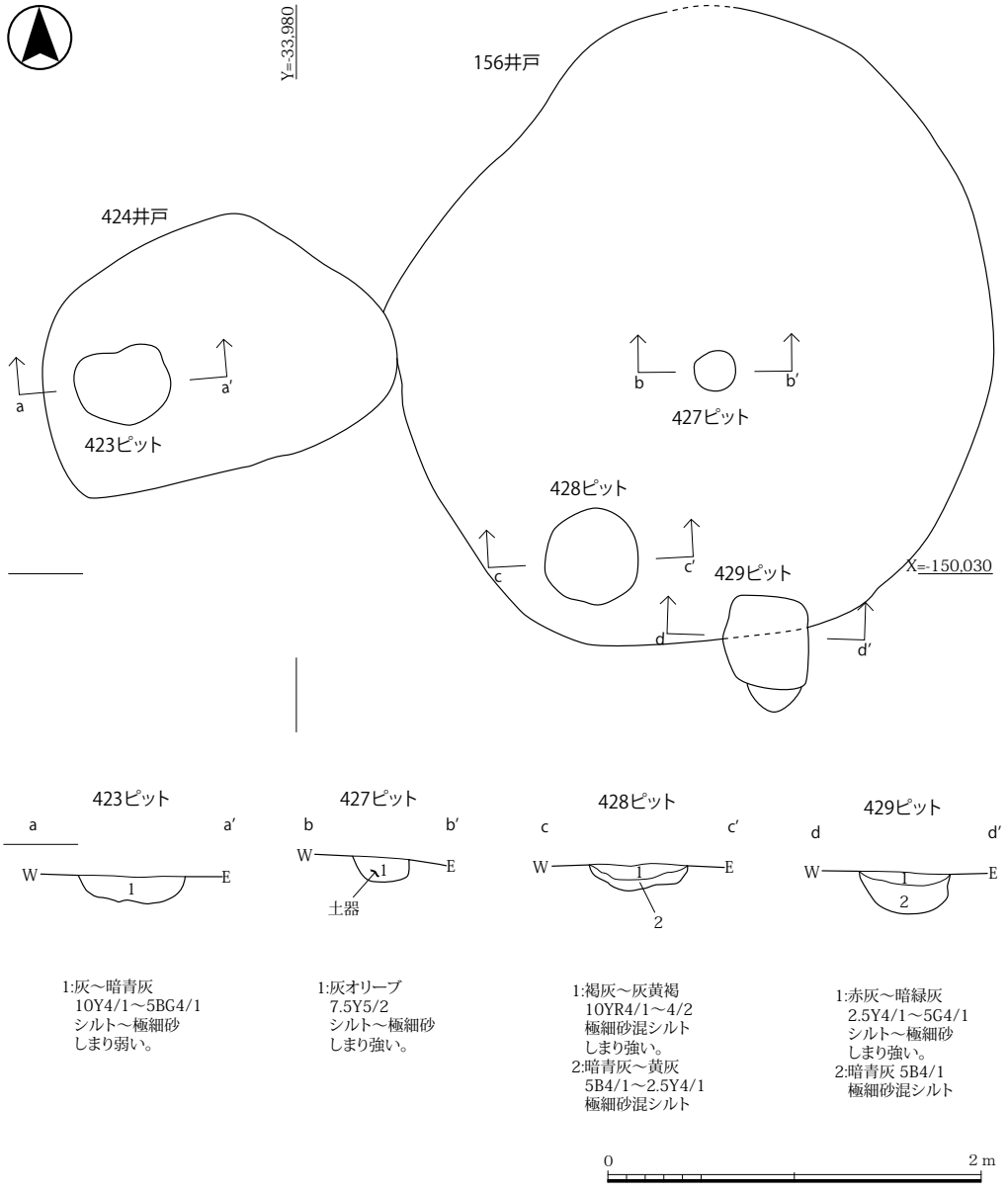


図59　第10面　423・427・428・429ピット平・断面図（S＝1:40）

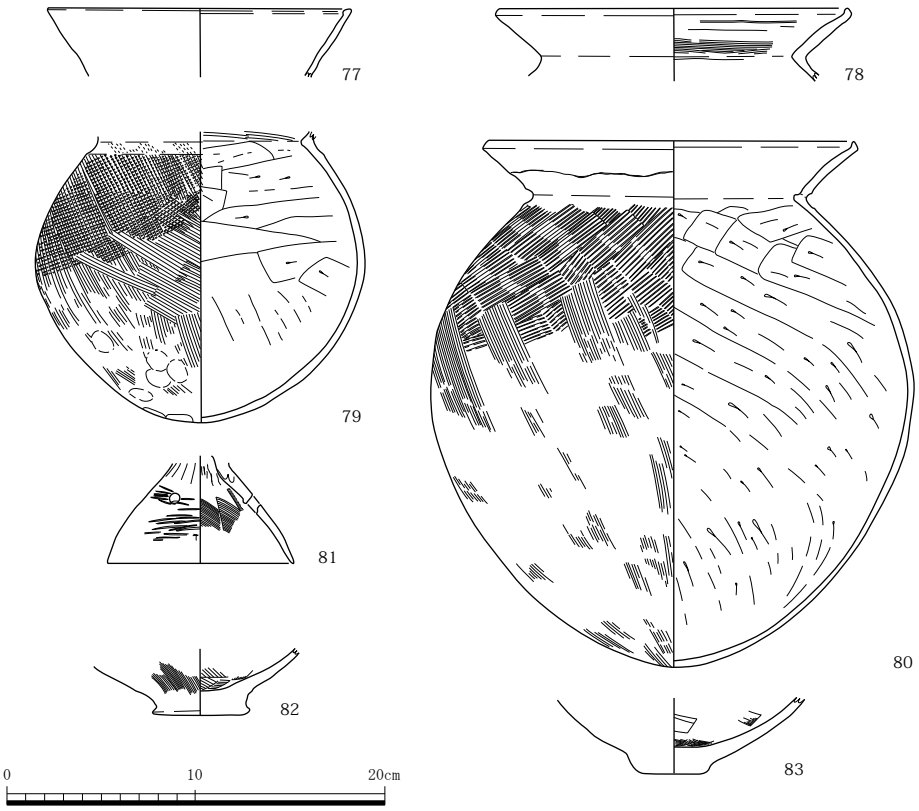


図60　第10面　156井戸出土遺物実測図（S＝1：4）

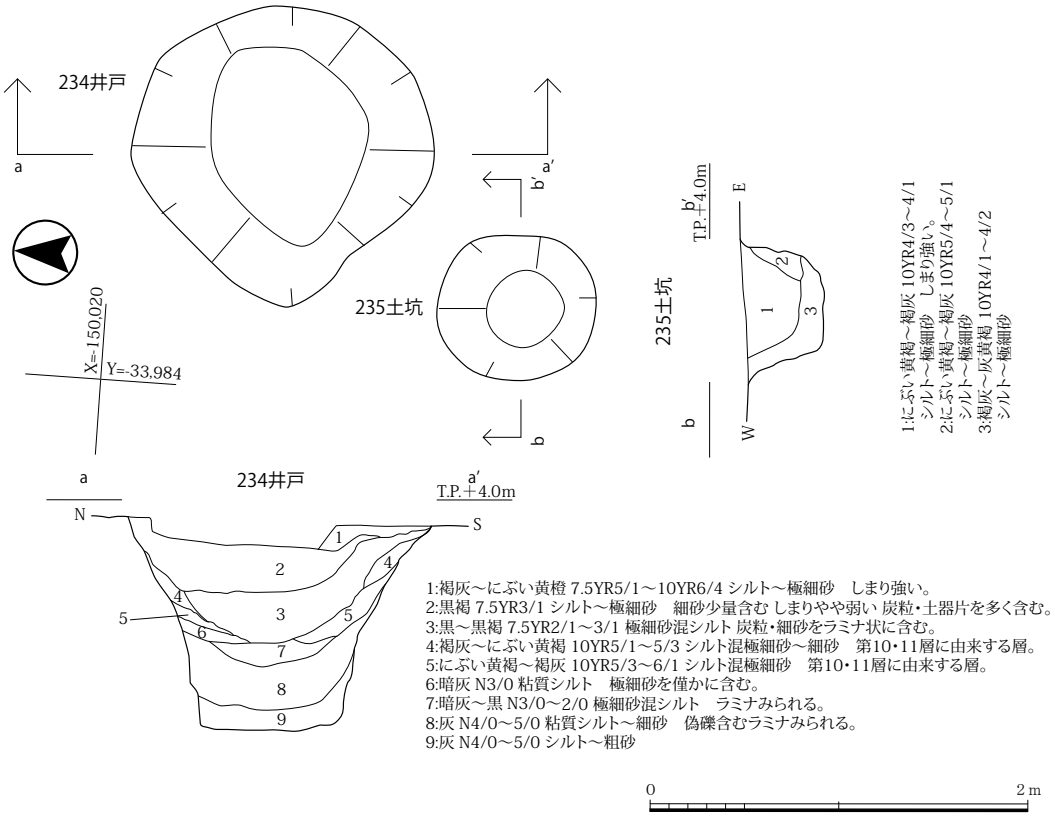


図61　第10面　234井戸・235土坑平・断面図（S＝1：40）

呈し、直径は最小の 357 柱穴で 0.4 m、最大の 332 柱穴で 0.56 mである。検出面からの深さは、最も浅い 357 柱穴で 0.34 m、最も深い 332 柱穴で 0.54 mを測る。掘方埋土は褐灰～黒褐色シルト混じり極細砂、極細砂～細砂である。尚、363 柱穴は鋤溝に切られていた。遺物はいずれの柱穴からも庄内式期に属する土器細片が出土したが、図化できるものはなかった。

156・424 井戸、423・427 ～ 429 ピット (図 58 ～ 60・図版 10、31)　156 井戸は、微高地の西、20 A -8c・d 区で検出した。形状・規模・埋土などの様相から井戸と判断した。平面形はほぼ円形を呈し、断面はすり鉢状である。427 ～ 429 ピットに切られる。規模は直径 3.3 m、検出面からの深さは 1.4 mを測る。埋土は灰～緑灰色を呈し、主として極細砂～中砂からなる。(7 ～ 9) 層ではラミナがみられ、井戸の使用時の堆積層と考えられる。また、(2 ～ 5) 層ではシルトや細砂～粗砂のブロックが確認されたことから、人為的に埋め戻したものと考えられる。最下層の (10) 層からほぼ完形に復原された庄内式期の甕 (80) や、土師器・弥生時代後期の土器細片が出土した。(77 ～ 79) は庄内式期の甕、(83) は壺、(81) は高坏の脚部、(82) は弥生時代後期の壺もしくは甕の底部である。遺構の時期は古墳時代初頭に帰属する。

424 井戸は 156 井戸と西側で接し、形状・規模・埋土などの様相から井戸と判断した。平面形は、東西に長軸をもつ隅丸方形を呈し､底面は丸みを帯びる。423 ピットに切られる。長軸 1.9 m､短軸 1.3 m、検出面からの深さは 0.95 mを測る。埋土は灰色粘質シルトと極細砂からなる。(6 ・ 8) 層ではラミナが観察され、井戸の使用時堆積層と考えられる。(2 ～ 4) 層は青灰～緑灰色極細砂混じりシルト～粘質シルト (シルトブロックを含む) で、人為的に埋め戻した土であろう。遺物は弥生時代後期から庄内式期の高坏、甕、壺の細片が出土したが図化しえなかった。古墳時代初頭に帰属する。

これらピット (423・427 ～ 429) は直径 0.3 ～ 0.55 m、検出面からの深さ 0.14 ～ 0.22 mを測り、埋土は灰～暗青灰色シルト～極細砂および極細砂混じりシルトであった。出土遺物は、弥生時代後期から庄内式期に属する高坏脚部、甕、壺が出土した。遺構の時期は古墳時代初頭に属する。

234 井戸・235 土坑 (図 61、62)　234 井戸は、微高地の北西、20 A -9c 区に位置し、形状・規模・埋土などの特徴から井戸と判断した。平面形は円形を呈し、断面は逆台形、底面は平坦であった。直径は 1.55 m、検出面からの深さは 1.1 mを測る。(7 ・ 8) 層は、灰色シルトおよび灰色極細砂～細砂の互層状の堆積であり、ラミナが観察されることから、井戸の使用時の堆積層と考えられる。(4 ～ 6) 層は廃絶後の堆積で極細砂～細砂を多く含むことから崩落土と考えられ、最終堆積層は炭粒や土器細片を含む (2・3) 層である。遺物の多くは下層 (7 ～ 9) から出土し､庄内式期に属する甕 (85)､高坏 (86)､

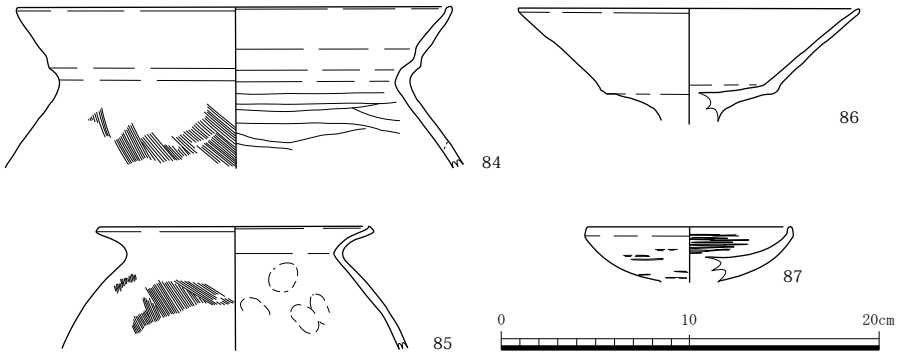


図62　第10面　234井戸出土遺物実測図（S＝1：4）

小型器台 (87)、布留式期に属する二重口縁壺 (84) などとともに小型丸底壺の細片や、弥生時代に属する甕の底部片が出土した。遺構の時期は古墳時代初頭から前期に属する。

235 土坑は 234 井戸の南西 1.5 mに位置するため、ここで記述する。平面形はほぼ円形を呈し、断面は逆台形で底面は平坦である。規模は、直径 0.84 m、検出面からの深さは 0.45 mを測る。埋土はにぶい黄褐色～褐灰色シルト～極細砂であり、ラミナはみられなかった。遺物の出土はなかったため時期の詳細は不明である。

310 井戸 (図 63 ～ 68・図版 11、31、32、50)　微高地の東側 20 A -7d 区、建物 3 と重複する。平面形は円形を呈し、直径は 0.6 ～ 0.7 m前後、検出面からの深さは 1.2 mを測り、形状・規模などから井戸と考えられる遺構である。埋土は 3 層に大別され、上層 (1 ・ 2) が黒褐～黒色極細砂混じりシルト、中層 (3 ・ 4) が、黒色極細砂を僅かに含む粘質シルト、下層 (5 ・ 6) が黒～暗灰色極細砂を含む粘質シルトであり、(6) 層には暗緑灰色偽礫がブロックでみられた。埋土中にはほぼ完形に復原され

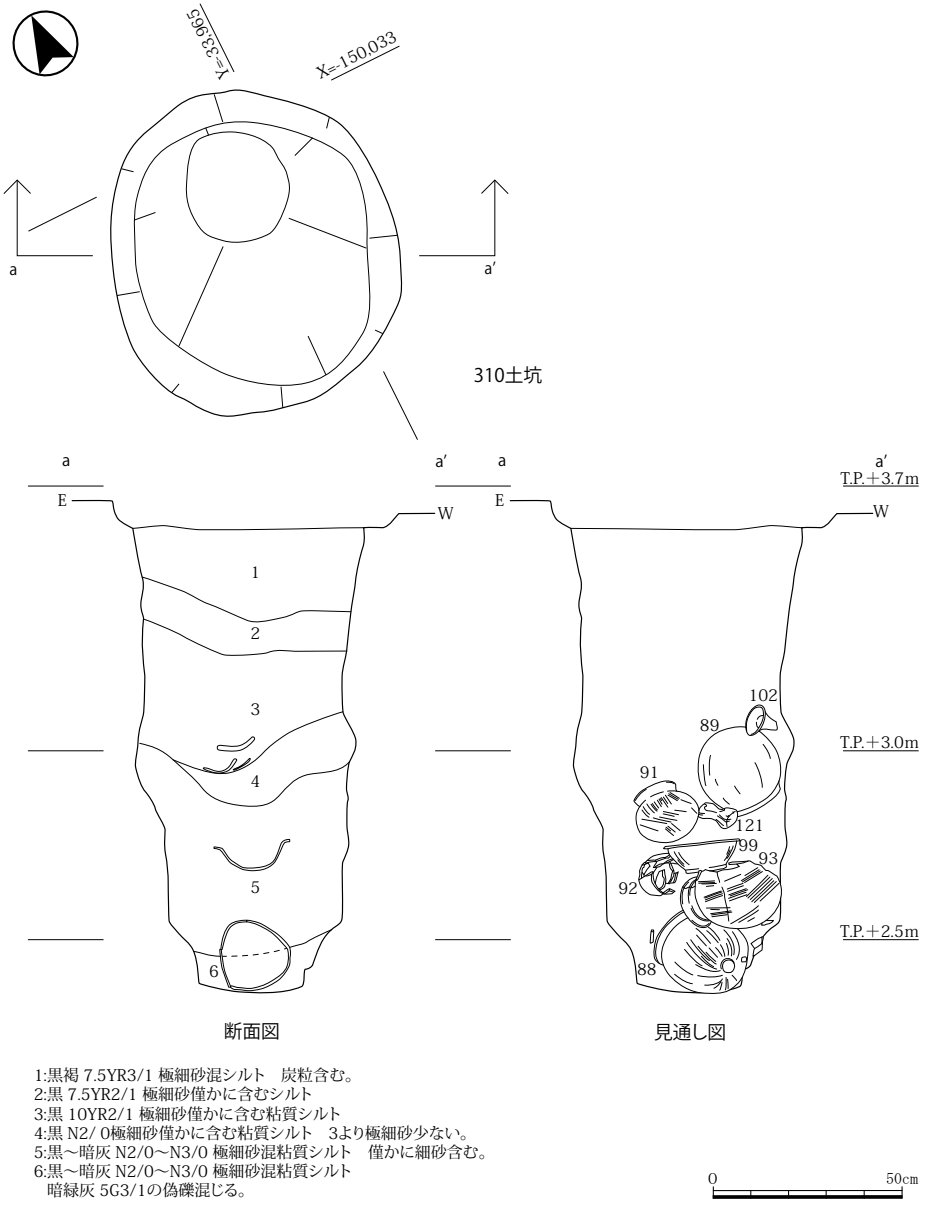


図63　第10面　310井戸平・断面図・見通し図(S＝1:20)

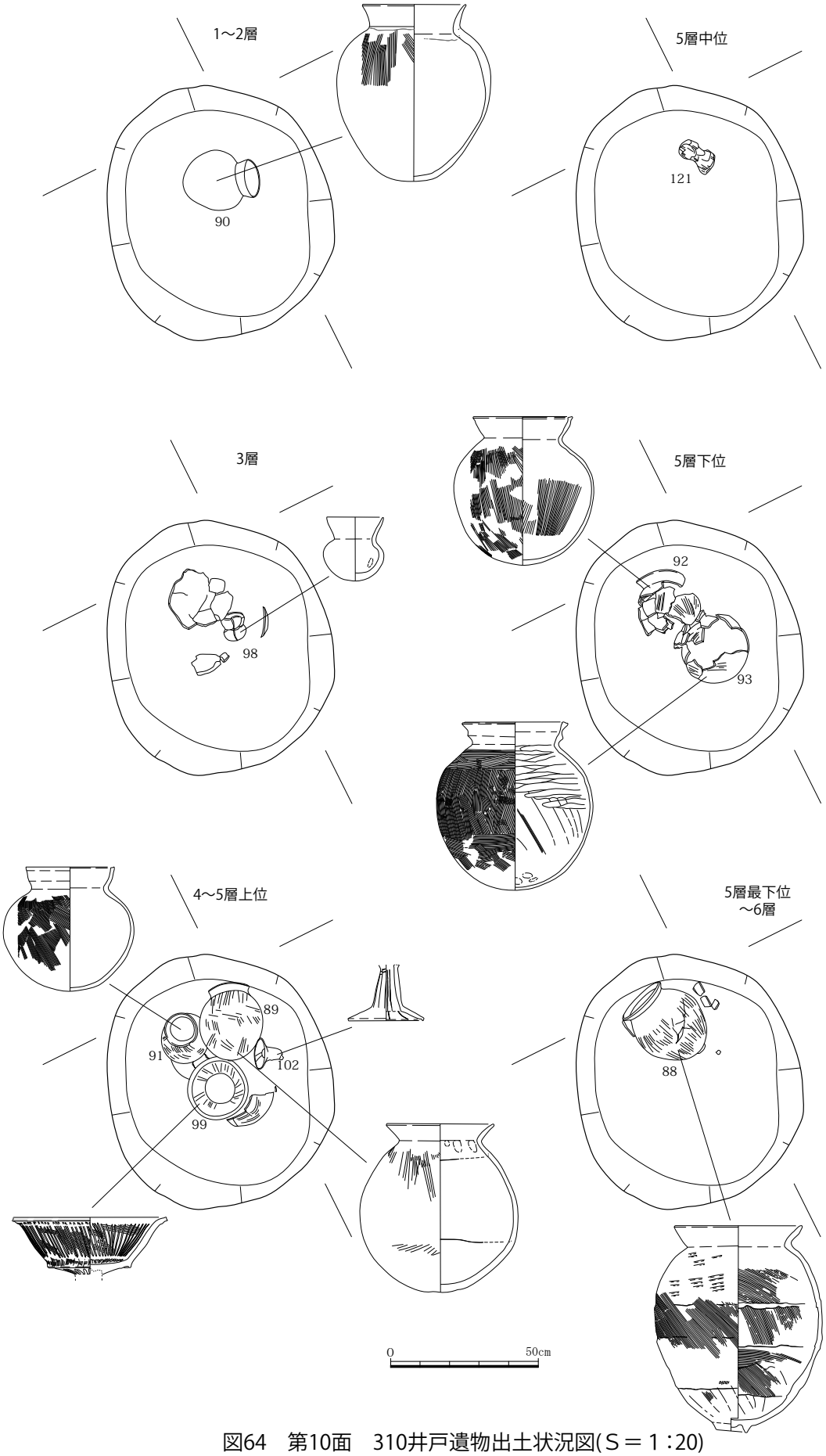


図64　第10面　310井戸遺物出土状況図(S＝1:20)

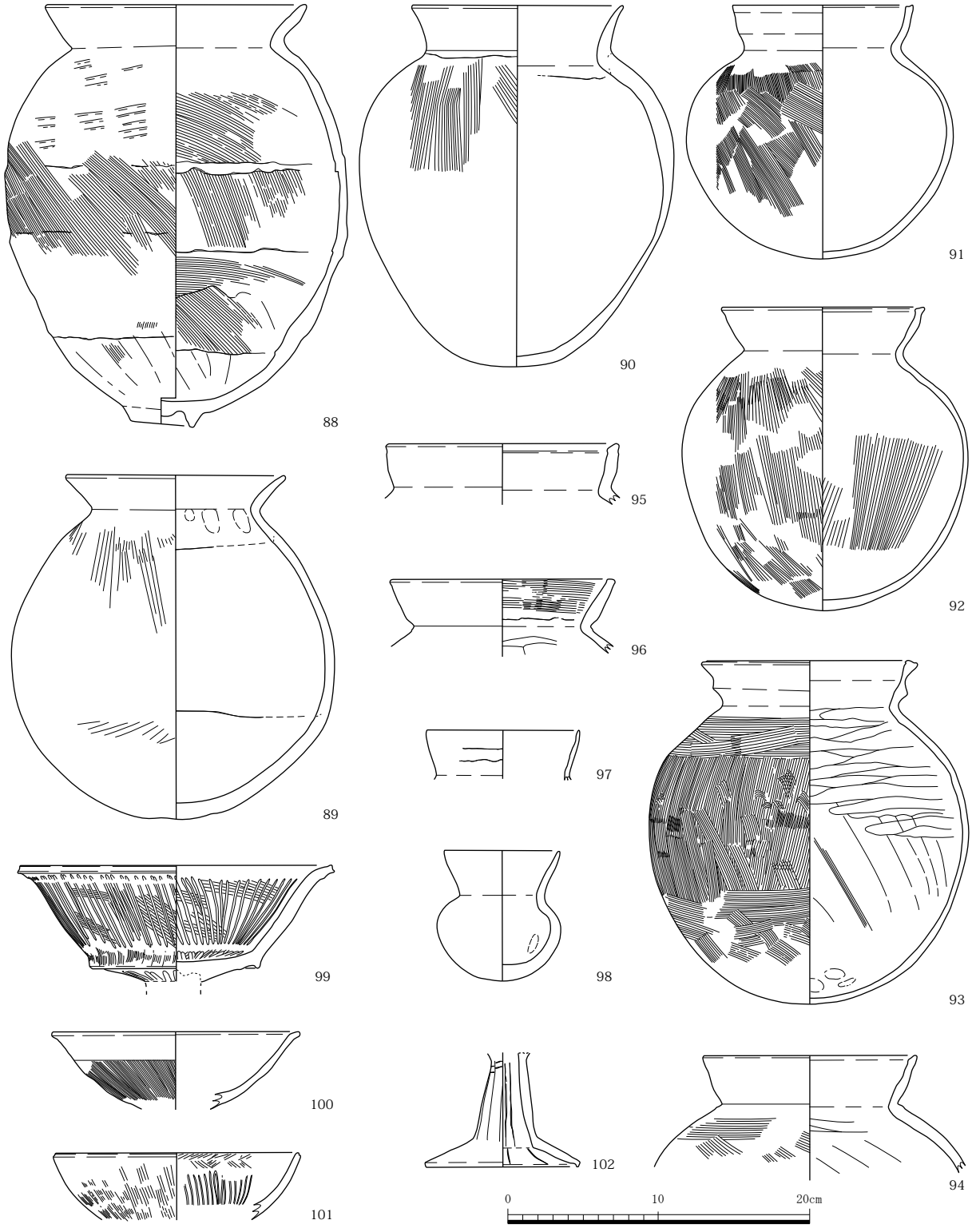


図65　第10面　310井戸出土遺物実測図（S＝1：4）

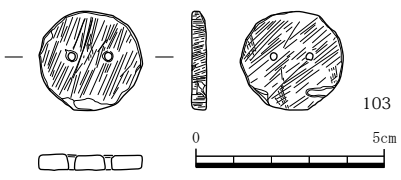


図66　第10面　310井戸出土双孔円板実測図（S＝1：4）

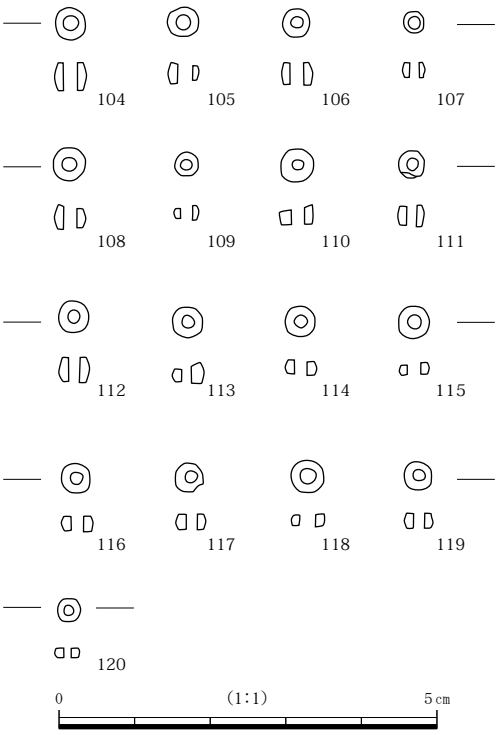


図67　第10面　310井戸出土臼玉実測図
（S＝1：1）

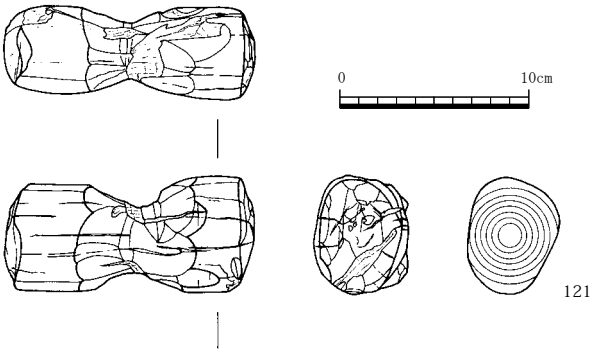
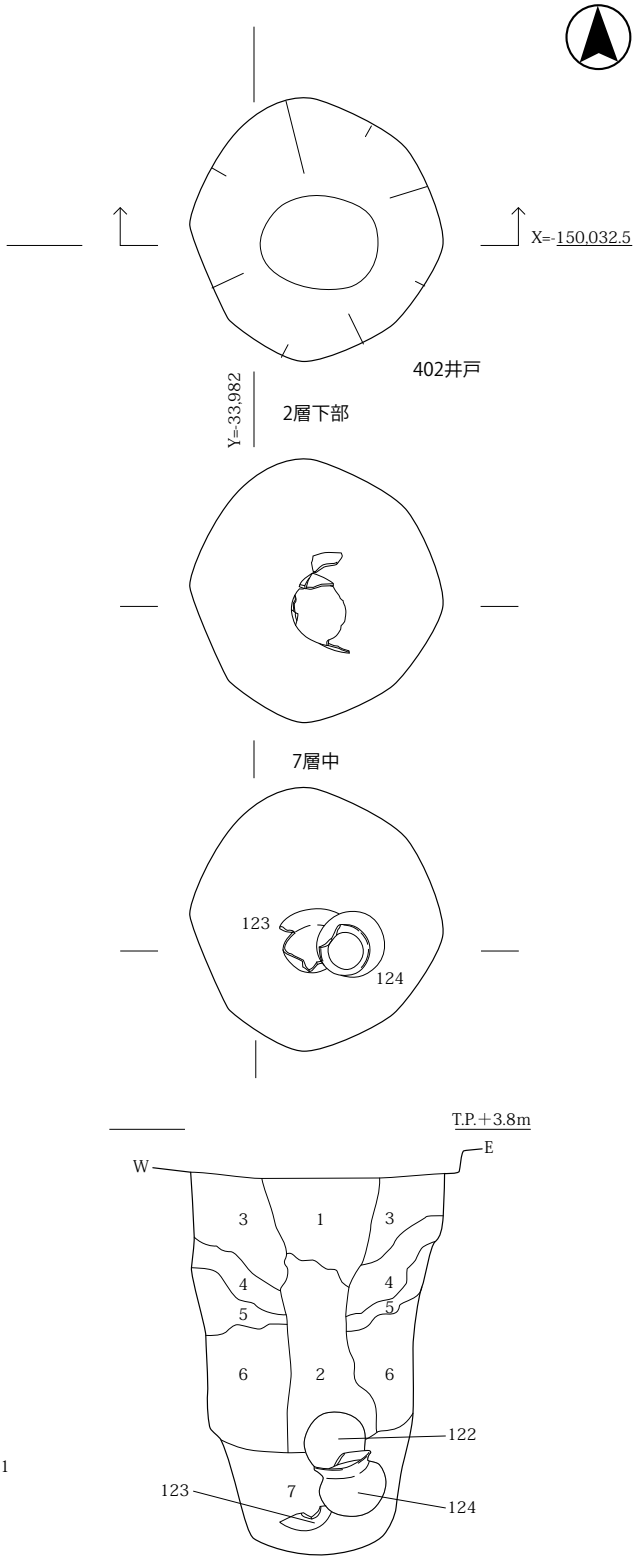


図 68　第 10 面　310 井戸出土木錘実測図
（S＝1 ： 4）



1:褐灰～にぶい黄褐 7.5YR4/1～10YR4/3
　極細砂～細砂混シルト　偽礫混じる。
2:灰 N4/0 極細砂混粘質シルト
3:褐灰～にぶい黄褐 7.5YR4/1～10YR5/3
　シルト～極細砂
4:褐～灰黄褐 10YR4/4～4/2 極細砂～細砂混シルト
5:青灰～暗青灰 5B5/1～4/1 シルト混極細砂
6:灰～暗灰 N4/0～3/0 極細砂混粘質シルト
7:暗灰～黒 N3/0～2/0 シルト混極細～細砂

0　50cm

図69　第10面　402井戸 平・断面図（S＝1：20）

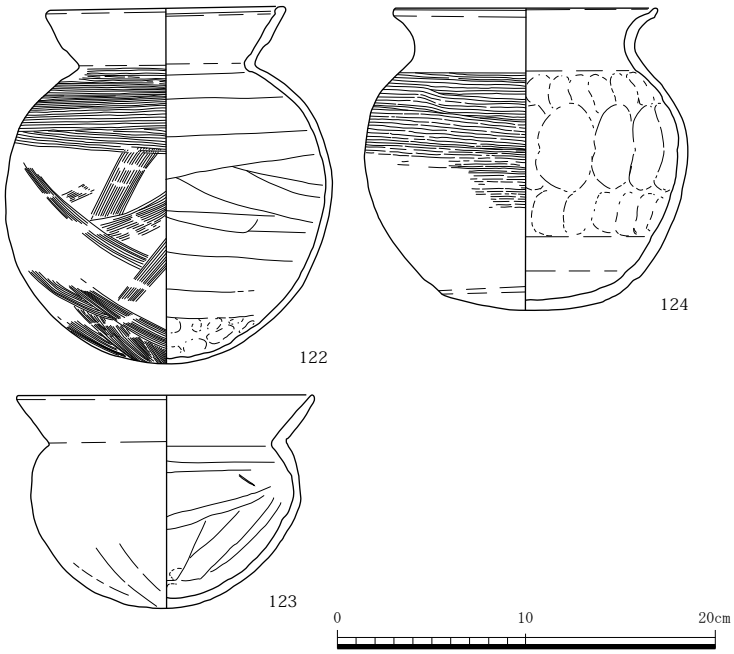


図70　第10面　402井戸出土遺物実測図（S＝1：4）

る土師器が比較的多量に遺存していた。(1 ～ 3) 層から滑石製双孔円板 (103)、(2 ～ 3) 層から布留式期の甕の細片、(3) 層からほぼ完形の布留式期の小型丸底壺 (98)、(3 ～ 5) 層からほぼ完形の布留式期の甕 2 個体 (89、91)、高坏の坏部 (99)、高坏の脚部 (102)、(5) 層の中位から広葉樹材の木錘 (121)、下位から布留式期の甕 2 個体 (92、93)、(5) 層の下位から (6) 層でほぼ完形の庄内式期の甕 (88) が出土した。(88) の底部は円盤充填のようにも見うけられる。おそらく小さな粘土板もしくは塊の外側に粘土を足すことで体部を作り上げたものと考えられる。外側にはみ出した粘土および底部調整のために継ぎ足された粘土がはがれていた。また埋土を洗浄したところ、滑石製の臼玉 (104 ～ 120)17 点が出土した。他にも埋土内より甕 (94 ～ 96)、小型壺 (97)、高坏 (100、101) が出土した。いずれも布留式期に属する。埋土のいずれの層にもラミナはみられず、遺物の出土状況から、使用後埋め戻されたと考えられる。遺構の時期は古墳時代初頭から前期に属する。

402 井戸 (図 69、70・図版 12、32、33)　微高地の西側、20 A -9d 区、156 井戸の南西 5.5 mに位置する。平面形はほぼ円形で、直径は 0.6 ～ 0.7 m、検出面からの深さは 1.1 mを測り、形状・規模から井戸と判断した。埋土は大きく 3 層に大別され、上層 (1 、3 ～ 5) が褐灰～にぶい黄褐色シルト、中層 (2・6) が灰～暗灰色粘質シルト層、下層 (7) が暗灰～黒色シルト混じり極細～細砂である。(2) 層は井戸の中央部上方に鉄分の沈着が多かったため土質が変化しているが切り合い関係ではない。中層から下層にかけてシルトから砂層の堆積がみられる。(3) 層はブロックを含む層であり、人為的に埋め戻したと考えられ、(1) 層と (3) 層は埋め戻しの単位として理解される。布留式期の甕 (122、123)、陶質土器広口壺 (124) が出土した。(123、124) は井戸最底部から出土した。(124) は正置の状態で検出され、その上に (122) 甕が乗せられた状態で出土した。(122) は球状の体部をもつ。米田敏幸氏 (八尾市教育委員会) による編年分類の布留Ⅲ式 (4 世紀後半) に当たる。(123) は鉢状に大きく開く口縁部と底部がやや尖り気味の体部をもつ。胴部外面には煤が付着する。(124) の陶質土器はやや丸みを帯びた平底を呈し、口径 13.9 ㎝、器高 16.9 ㎝、胴部最大径 17.0 ㎝を測る。土器の底部は粘土板充填後、内面よりたたき出して仕上げる。外面は口縁端部から頸部にかけてはヨコナデを施し、肩部から胴部下半にかけて工具による調整痕 (カキ目状) が認められる。下半部から底部にかけてはタタキの後、丁寧なナデによる調整を

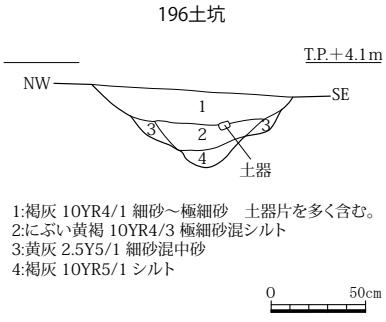
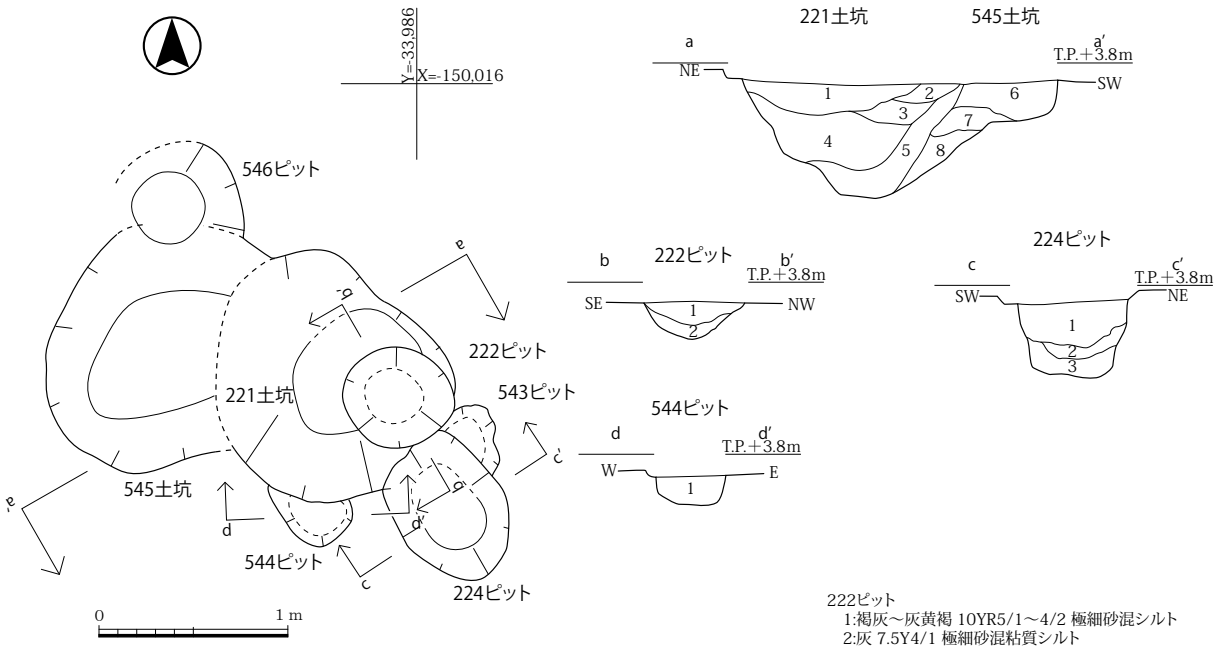


図71　第10面　196土坑
断面図（S＝1：40）



221土坑・545土坑
1:褐灰～灰黄褐 10YR5/1～4/2
極細砂～粗砂混シルト(221土坑埋土)
2:褐灰～灰黄褐 10YR5/1～4/2
極細砂混シルト　僅かに粗砂含む(221土坑)。
付近の第10面の遺構埋土とほぼ同じ。
3:褐灰～灰黄褐 10YR5/1～4/2
粗砂～極細砂混シルト(221土坑埋土)

4:灰 N4/0～5/0 極細砂混粘質シルト(221土坑埋土)
5:灰 N5/0～6/0シルト～極細砂(221土坑埋土)
6:褐灰～青灰 10YR5/1～5B5/1
粗砂混シルト～極細砂(545土坑埋土)
7:灰～にぶい黄 10Y5/1～2.5Y6/3
極細砂～粘質シルト(545土坑埋土)
8:灰 N5/0～6/0極細砂～シルト(545土坑埋土)

222ピット
1:褐灰～灰黄褐 10YR5/1～4/2 極細砂混シルト
2:灰 7.5Y4/1 極細砂混粘質シルト

224ピット
1:褐灰～黒褐 10YR4/1～3/2 極細砂混シルト
2:オリーブ黒～暗青灰 N3/0～5B3/1 粘質シルト
極細砂ラミナ状に入る。
3:灰～青灰 N5/0～5B5/1 粘質シルト～極細砂

544ピット
1:褐灰～灰黄褐 10YR5/1～4/2
極細砂混シルト

図72　第10面　221・545土坑・222・224・544・546ピット平・断面図（S＝1：40）

行う。内面については丁寧なナデ調整を行うが、体部上半部には当て具の痕跡が微かに残る。金斗喆氏 (釜山大学校教授) から「釜山や金海地域で多く出土するが、平底なのは珍しい」とのご教示を得た。この遺構はこれらの土器から古墳時代前期に属する。

196 土坑 (図 71)　微高地の北西、20 A -8b 区、建物 1 の西 0.5 mに位置する。平面形は楕円形を呈し、断面形はすり鉢形を呈する。規模は長軸 1.2 m、短軸は 0.85 mを測り、検出面からの深さは 0.45 m を測る。埋土は 4 層からなり、褐灰～にぶい黄褐色シルト～細砂である。遺物は弥生時代後期に属する甕・壺などが出土した。遺構の時期は弥生時代後期に属する。

221・545 土坑・222・224・543・544・546 ピット (図 72)　微高地の北西、20 A -9b 区、建物 1 の西約 12 mに位置する。遺構が密集した状況で検出されたことからまとめて記述する。切りあい関係から 222 → 224 → 221 → 543・545・544・546 が確認された。遺物は 222 から庄内式期、布留式期の土器細片、224 から庄内式期の土器細片、221 土坑から弥生時代後期と庄内式期の土器細片が出土した。222 ピットの平面形は円形を呈し、直径 0.55 m、検出面からの深さ 0.2 mを測る。埋土は褐灰～灰黄褐色極細砂～シルトなどからなっていた。222 ピットは 221 土坑と 224 ピットを切っている。221 土坑の平面形は不整形で、計測できる位置で検出長約 1 mを測る。検出面からの深さは 0.6 mである。埋土は 3 層に大別され上層が、基本層序第 10 層の土質に近似する褐灰～灰黄褐色極細

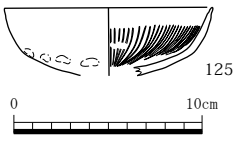


図73　第10面　221土坑
出土遺物実測図
（S＝1：4）

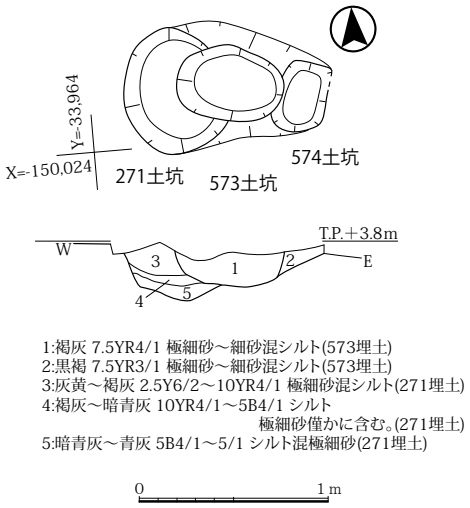


図74　第10面　271・573・574土坑
平・断面図（S＝1：40）

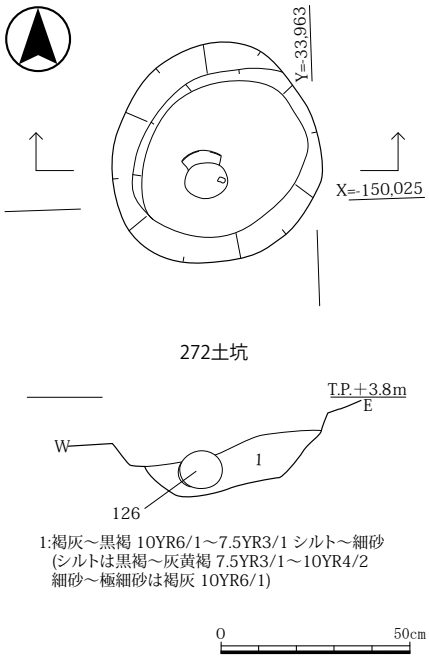


図75　第10面　272土坑平・断面図（S＝1：20）

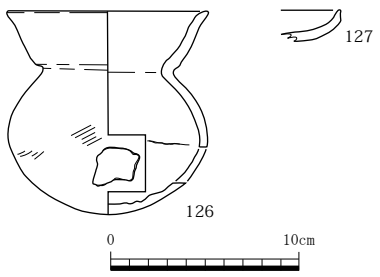


図76　第10面　272土坑出土遺物実測図
（S＝1：4）

砂～粗砂混じりシルト、中層が灰色極細砂混じり粘質シルト、下層が灰色シルト～極細砂である。中・下層の埋土は極細砂がブロック状に混じっており、埋め戻し土の可能性が高い。224 ピットの平面形は楕円形で、長軸 0.75 m、短軸 0.57 m、検出面からの深さ 0.4 mを測る。埋土は 3 層で褐灰～黒褐色、暗青灰色や灰色など、やや暗色の極細砂混じりシルトや粘質シルトからなり、221 土坑の埋土とはかなりの相違がみられる。545 土坑は 221 土坑に切られているため、平面形は判然としない。断面観察のためのセクションを 221 土坑との切り合い関係を重視すべく設定したため、本土坑埋土の様相は部分的にしか把握できなかった。埋土は 3 層で褐灰～青灰色粗砂混混じりシルトや灰色極細砂～シルトなどからなっていた。221 土坑に切られていた 544 ピットの平面形は方形と想定される。検出面からの深さは 0.15 m で、埋土は 221 土坑埋土より若干明るく、褐灰～灰黄褐色極細砂混じりシルトである。545 土坑北側の 546 ピットは、当初溝状の遺構と想定し掘削してしまったため、545 土坑との先後関係が把握できなかった。埋土は上層が褐灰～灰黄褐色・極細砂混じりシルト、下層が灰色粘質シルトの 2 層である。221 土坑より飛鳥時代に属する土師器の坏身 (図 73) が出土した。

271・573・574 土坑 (図 74)　20 A -7c 区で検出した。271・574 土坑は 573 土坑に切られているため、ここで 3 基についてまとめて述べる。これらの遺構は、微高地東側、建物 4 の北西 7 mに位置する。271 土坑の平面形は南北に長軸をもつ楕円形を呈し、長軸 0.65 m、短軸は推定で 0.5 mを測る。検出面からの深さは 0.3 mで、埋土は上層が灰黄～褐灰色極細砂混じりシルト、下層は暗青灰～青灰色シルト～極細砂である。573 土坑は東西に長軸をもつ楕円形を呈し、長軸 0.55 m、短軸 0.4 m、検出面からの深さは 0.2 mを測る。埋土は 271 土坑に比べ暗色を帯び、褐灰色極細砂～細砂混じりシルトである。574 土坑は南北に長軸をもつ方形を呈し、長軸 0.37 m、短軸は推定 0.25 m、検出面からの深さは残存部で 0.14 mを測る。埋土

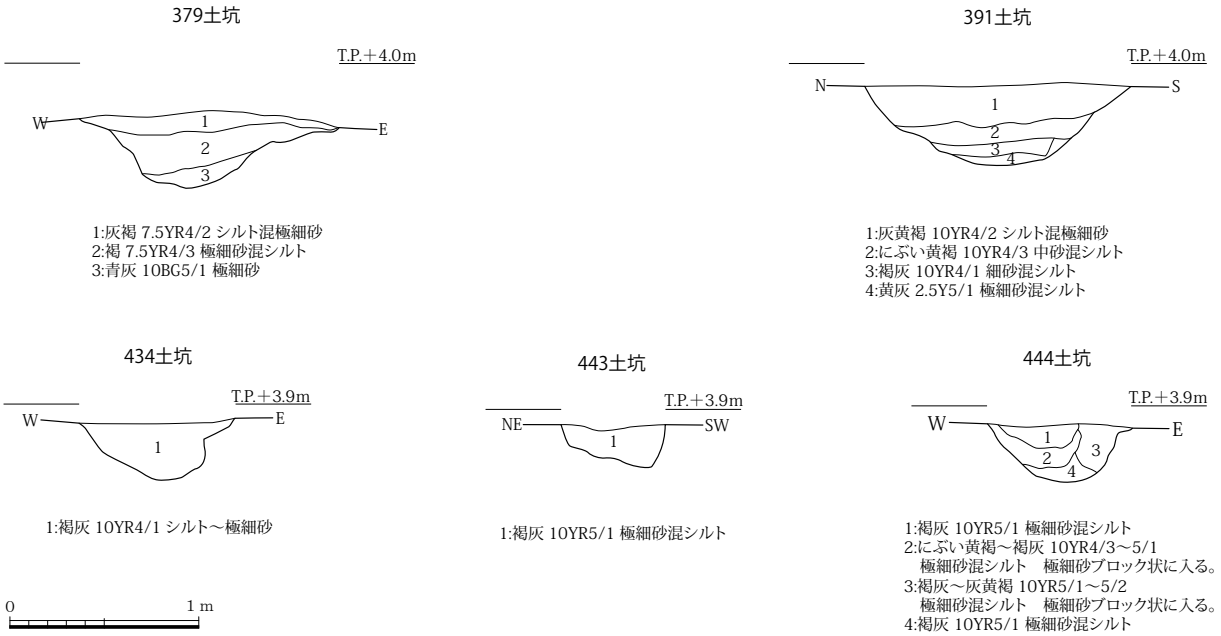


図77　第10面　379･391･434･443･444土坑断面図（S＝1：40）

は 573 土坑よりやや暗色を帯びた黒褐色極細砂～細砂混じりシルトであった。遺物は 271 土坑から土師器細片が出土した。

272 土坑 (図 75、76・図版 12、32)　20 A -7c 区、271 土坑の南東 1.5 mに位置する。平面形は円形で、断面は皿状を呈する。直径 0.55 m、検出面からの深さは 0.15 mを測り、埋土は褐灰～黒褐色シルト～細砂の 1 層である。遺物としては焼成後体部下位に孔が穿たれている布留式期の小型丸底壺 (126) や庄内式期の小型器台 (127) が出土した。

379 土坑 (図 77)　微高地南側、20 A -8d・e 区に位置する。平面形は南北に細長い不整形の土坑で、遺構の中央部を側溝に切られる。底面は凸凹していた。規模は南北長で 5.4 m、東西長で 1.5 m、検出面からの深さは 0.4 mを測る。埋土は 3 層に分層可能で、上層は灰褐色シルト混じり極細砂、中層は褐色極細砂混じりシルト、下層は青灰色極細砂であり、水成堆積と考えられるようなラミナは観察されなかった。遺物は弥生時代後期、庄内式期、布留式期の土器の細片が出土した。

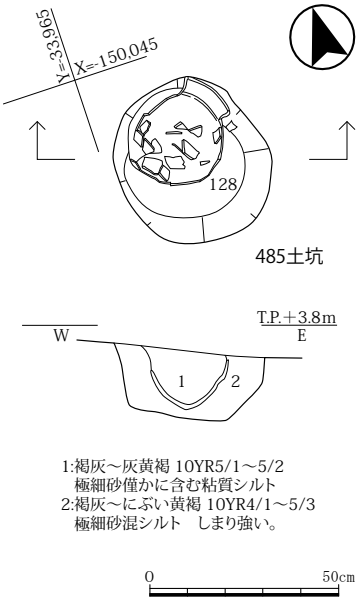


図78　第10面　485土坑
断面図･遺物出土状況図
(S＝1：20)

391 土坑 (図 77)　微高地の西、20 A -8d 区、156 井戸の 5 m南に位置する。平面形は隅丸方形で、断面はすり鉢状を呈する。規模は一辺が 1.4 mで、検出面からの深さは 0.42 mを測る。埋土は 3 層に大別され上層 (1) が灰黄褐色シルト混じり極細砂、中層 (2 ・ 3) がにぶい黄褐色～褐灰色細砂～中砂混じりシルト、下層 (4) が黄灰色極細砂混じりシルトである。遺物は土師器細片が出土した。時期の詳細は不明である。

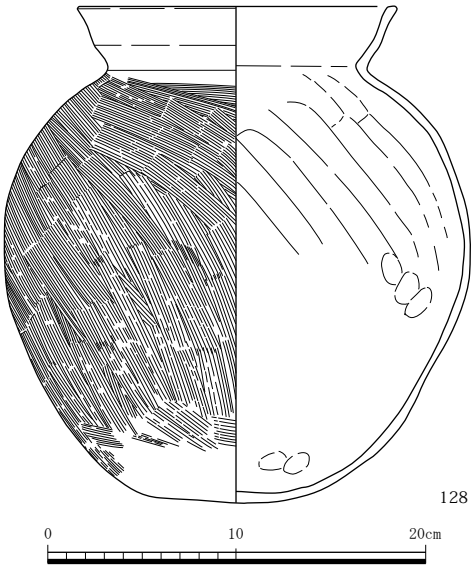
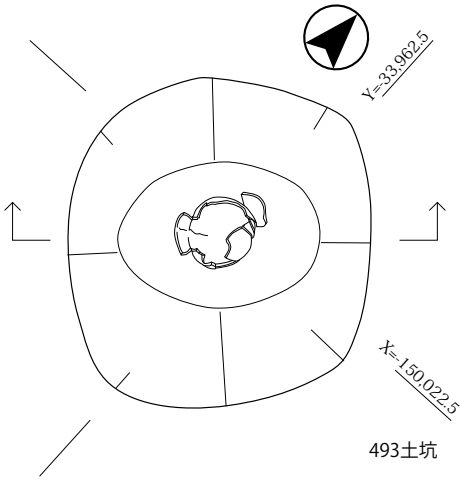


図79　第10面　485土坑出土遺物実測図
（S＝1：4）

434 土坑 (図 77)　微高地の南側、20 A -8e 区、建物 5 の南西隣に位置する。平面形は不整形を呈し、北側の一部は側溝に切られる。東西幅は約 1.0 m、南北検出長は約 1.2 mを測り、検出面からの深さは 0.3 mを測る。埋土は褐灰色シルト～極細砂の 1 層である。遺物は布留式期の甕、壺、高坏の細片が出土した。遺構の時期は古墳時代前期である。

443 土坑 (図 77)　微高地南側、20 A -7e 区、建物 2 の南隣に位置する。平面形は楕円形を呈する。長軸 0.9 m、短軸 0.55 mで、検出面からの深さは 0.3 mを測る。埋土は褐灰色極細砂混じりシルトの単層であった。遺物は庄内式期の甕、小型器台などの細片が出土した。遺構の時期は古墳時代初頭である。

444 土坑 (図 77)　微高地の南、20 A -7e 区、建物 2 の南隣、443 土坑の北東 3 mに位置する。平面形は南北方向に長軸をもつ楕円形である。長軸 0.9 m、短軸 0.75 mで、検出面からの深さは 0.3 mを測る。埋土は 4 層に細分することは可能で



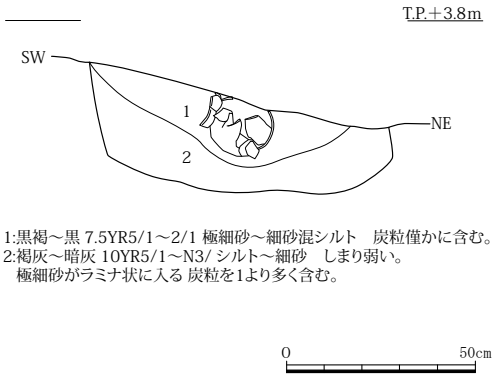


図81　第10面　493土坑 断面図・
遺物出土状況図（S＝1：20）

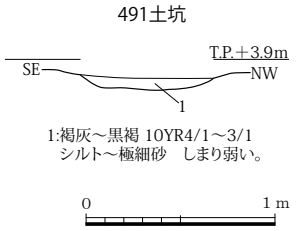


図80　第10面　491土坑
断面図（S＝1：40）

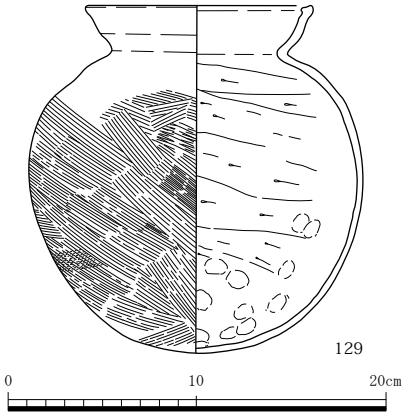


図82　第10面　493土坑
出土遺物実測図
（S＝1：4）

あるが、褐灰色～灰黄褐色極細砂を基本とする。(2、3)層では極細砂ブロックがみられることから人為的に埋め戻された可能性が高い。遺物は布留式期の甕､高坏が出土した。遺構の時期は古墳時代前期である。

485 土 坑 (図 78、79・図版 12、33)

微高地の南端付近、20 A -7e 区、444 土坑の南南東 3.5 mに位置する円形の土坑である。直径は 0.45 m、検出面からの深さは 0.2 mを測る。布留式期の甕 (128) が 1 個体出土しており、甕の上部付近の埋土が褐灰～灰黄褐色の極細砂を含む粘質シルトであるのに対し、甕の外側の埋土は褐灰～にぶい黄褐色のしまりの強いシルトであった。

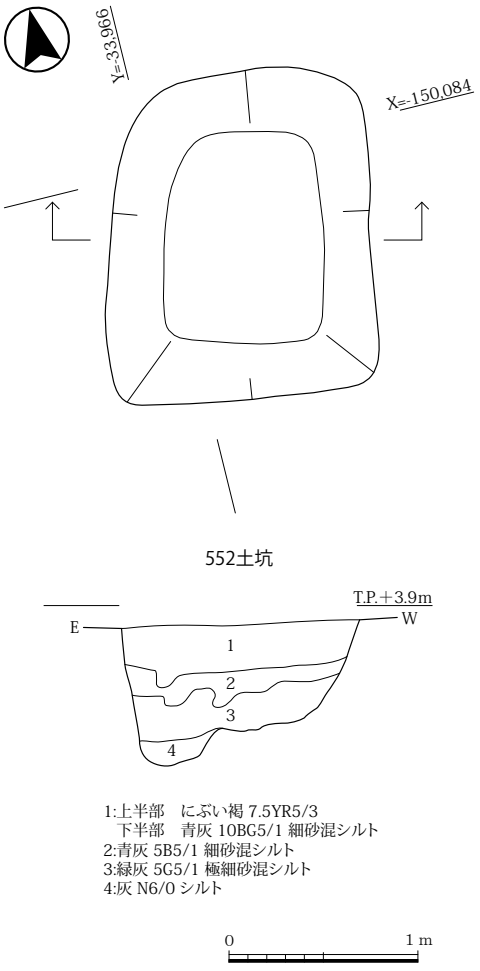


図83　第10面　552土坑
平･断面図(S＝1:40)

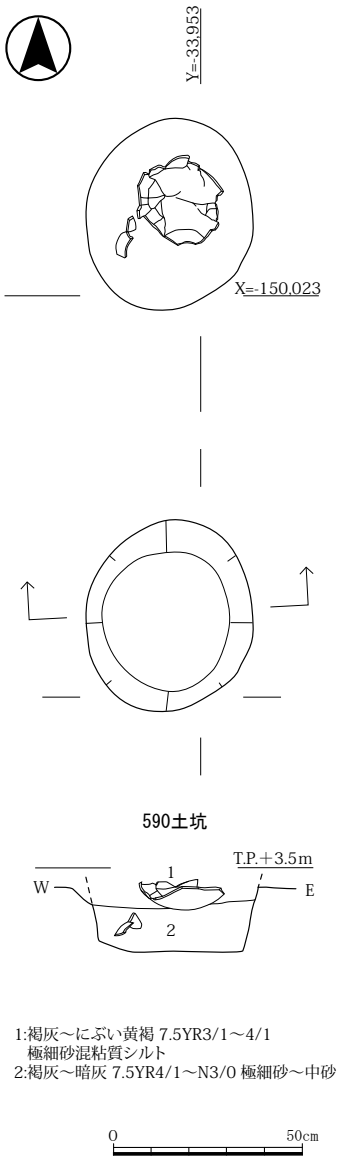


図84　第10面　590土坑断面図･
遺物出土状況図(1:20)

491 土坑 (図 80)　微高地北側、20 A -7c 区、建物 1 から約 8 m南東に位置する。平面形は円形を呈し、断面形が浅い皿状である。直径 0.7 m、検出面からの深さ 0.1 mを測り、南西側を後述する鋤溝群に切られている。埋土はしまりの弱い褐灰～黒褐色シルト～極細砂の単層である。遺物が出土していないため時期の詳細は不明である。

493 土坑 (図 81、82・図版 33)　微高地の北側、20 A -7c 区、491 土坑から東 5 mに位置する。平面形はほぼ隅丸方形を呈する。上面は近･現代の攪乱がこの面まで及んでおり東側部分が削平されていた。検出面での規模は、一辺が 0.7 ～ 0.8 mで、深さは 0.35 mを測る。埋土は 2 層に分層可能で、上層が黒褐～黒色極細砂～細砂と炭粒混じりシルトであり、下層が褐灰～暗灰色シルト～細砂で、ラミナが明瞭にみられる水成堆積層であった。上層からほぼ完形に復原された布留式の甕 (129) が 1 個体出土している。遺構の時期は古墳時代前期である。

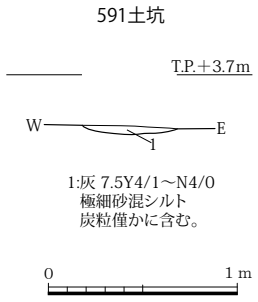


図85　第10面　591土坑
断面図（S＝1：40）

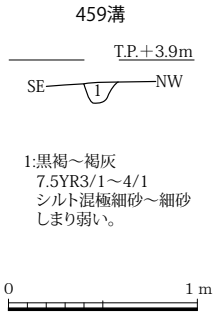


図86　第10面　459溝
断面図（S＝1：40）

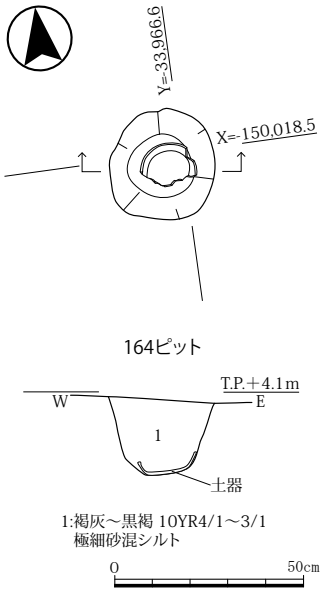


図87　第10面　164ピット 断面図・
遺物出土状況図（S＝1：20）

552 土坑 (図 83)　20 A -7i 区で検出した平面が方形を呈する土坑である。規模は長軸 1.75 m、短軸 1.4 mを測る。埋土は 4 層に分けられ、(1・2) 層が細砂混じりシルト、(3) 層が極細砂混じりシルト、(4) 層がシルトで、下部に行くほどシルトの割合が多くなる。第 10 面で検出したが、形状・規模・埋土の様相より、第 7 面に帰属する「方形土坑」と考えられる。遺物は出土していない。

590 土坑 (図 84)　20 A -6c 区、493 土坑から 9 m東、上面を近・現代の攪乱で削平されている。平面形は円形を呈する。検出直径 0.5 m、深さは 0.2 mと浅い。埋土は 2 層、上層が褐灰～にぶい黄褐色極細砂混じり粘質シルト、下層は褐灰～暗灰色極細砂～中砂である。庄内式期の甕の体部片が出土している。遺構の時期は古墳時代初頭である。

591 土坑 (図 85)　20 A -6・7c 区、493 土坑の北東 3 mに位置し、上面は近・現代の攪乱で削平されていた。平面形は円形を呈する。直径 0.5 m で検出面からの深さは 0.04 m、埋土は灰色極細砂混じりシルトの単層である。遺物は庄内式期の土器片が出土した。遺構の時期は古墳時代初頭である。

鋤溝群 (図 49)　微高地東半部で、北西－南東方向に平行して並ぶ溝群を検出した。上面に中世の島畠が築かれていた部分では良好に遺存していた。第 6 面で検出した条里型地割に規制された南北や東西を向く溝とは異なり、溝の多くは地形の傾斜に沿う向きあるいはそれに直交する向きで掘削されている。これら溝群の内、北西－南東方向 (座標北から 53° 西) の 539・541 溝の埋土は褐灰色シルト～極細砂、北東－南西方向 (座標北から 43° 東) の 540・542 溝は褐灰色シルト混じり極細砂であり、いずれもベースとなる第 10 層より暗色を帯びていた。溝の幅は 0.2 ～ 0.4 m、検出面からの深さは深いもので 0.2 m前後、浅いもので 0.05 m前後である。平行する溝の間隔は、芯々距離で 1.6 ～ 2.1 mのものが多い。畠の畝間溝の可能性が考えられる。但し、各溝の間に、作土のような特徴のある層などは確認されなかった。溝群の中に建物 3 の 490 柱穴、建物 5 の 362 柱穴、建物 6 の 363 柱穴を切る溝がみられ、建物廃絶後、微高地上が耕作地として利用されていた可能性が考えられる。

459 溝 (図 86)　微高地の南東部、20 A -6c・d、7d・e 区で検出した、南西－北東方向の溝である。建物 3 ・ 4 の南東隣に位置し、さらに本遺構の南東部の一部は建物 2 と重複する。検出長 16 m、幅 0.2 ～ 0.35 m、検出面からの深さは 0.06 ～ 0.1 mを測る。埋土は黒褐～褐灰色シルト混じり極細砂～細砂である。遺物は庄内式期に属する甕が出

土した。古墳時代初頭に属する。

ピット群 (図 49)　微高地上で多数のピットを検出した。特に建物 1 の西側付近 (20 A -8・9b 区)、156 井戸の北側・南側 (20 A -8・9c・d 区)、建物 2 ・ 5 ・ 6 の付近 (20 A -7・8d・e 区) に集中して確認された。これらのピットは明らかに建物を構成するものではなかった。これらのうち、帰属時期の判明したものは 47 基であり、弥生時代後期が 11 基、庄内式期が 22 基、布留式期が 6 基、須恵器のM T15 型式期が 1 基、飛鳥時代が 2 基、奈良時代が 2 基、平安時代が 3 基であった。ピットの平面形については、円形のものが 210 基、方形のものが 27 基みられた。これらのピットのうち方形のピットについては、弥生時代後期のものが 4 基、庄内式期のものが 10 基であった。特定の平面形のものが分布において偏るというような傾向は認められない。規模は、直径 (一辺の長さ)0.2 m以上 0.3 m未満のものが 4 割で最も多く、0.3 m以上 0.4 m未満のものがそれに続いて多い。検出面からの深さは 0.2 m未満のものが全体の 8 割近くを占めている。特定の時期に特定の規模のピットが偏るような傾向はみられない。

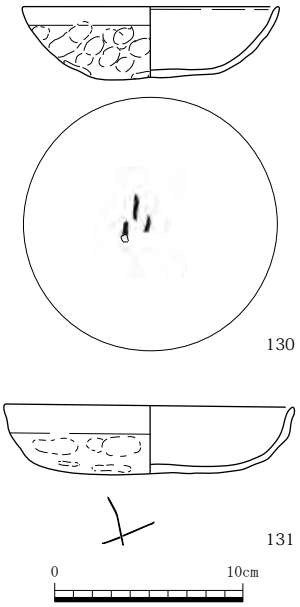


図88　第10面 160･164ピット出土遺物実測図 （S＝1：4）

これらのピット群について分布状況から A 区～ E 区に分け (図 49)、以下、地区毎に詳細を述べる。

〔A 区〕

建物 1 の東側の区域であり、48 基のピットを確認した。平面形は円形のものが 40 基、方形のものが 8 基であった。直径 (一辺の長さ) は 0.2 m以上 0.3 m未満のものが 23 基でほぼ半数を占め、0.3 m以上 0.4 m未満のものが 10 基でそれに次ぐ。検出面からの深さは 0.1 m未満のものが 24 基で半数を占め、0.1 m以上 0.2 m未満のものが 15 基でそれに続く。

尚、遺物から帰属時期が判明したものは、以下の 5

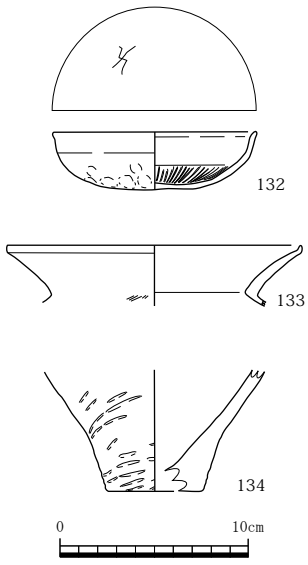
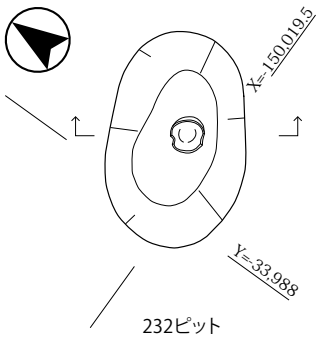


図89　第10面　B区232･226･218ピット出土遺物実測図 （S＝1：4）



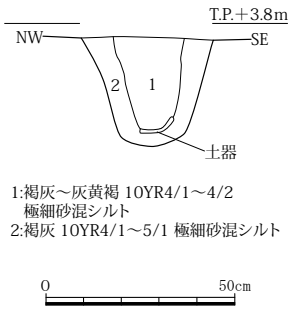


図90　第10面　232ピット断面図・遺物出土状況図（S＝1：20）

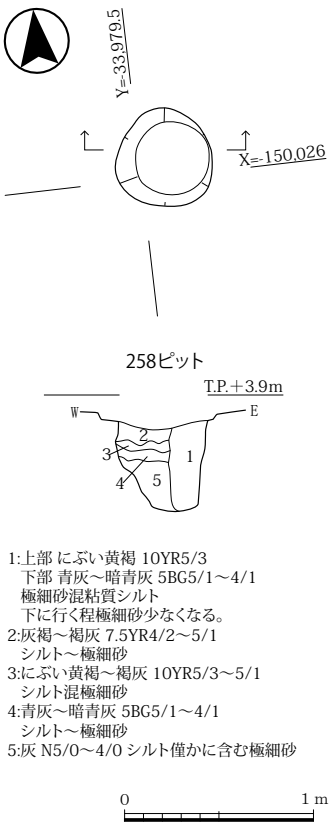


図91　第10面　C区258ピット平・断面図
（S＝1：40）

基である。161・282 は庄内式期の土器片が出土し、古墳時代初頭に帰属する。また 159・160・164(図 87・図版 6) は平安時代の土師器片が出土し、平安時代に帰属する。(130) は 160 ピットから出土した平安時代に属する坏身 (図 88・図版 33)、(131) も同じく平安時代に属する坏身で、164 ピットから出土した (図 88・図版 33)。帰属時期の判明するこれらピット群のうち 282 ピットの規模は直径 0.64 m、検出面からの深さが 0.44 mと他に比べて大きい。

〔B 区〕

建物 1 の西側の区域で、49 基のピットからなる。平面形は円形のものが 42 基、方形のものが 7 基であった。検出面からの深さが 0.1 m以上 0.2 m未満のものが 26 基で半数以上を占め、0.2 m以上 0.3 m未満のものと 0.1 m未満のものがそれぞれ 8 基でそれに続く。直径 (一辺の長さ) は 0.2 m以上 0.3 m未満のものが 20 基で最も多く、0.3 m以上 0.4 m未満のものが 10 基でそれに次ぐ。

遺物から帰属時期の判明したものは以下の 19 基であった。197・198・203・207・214・215・218(図 89 － 134)・243 ピットから弥生時代後期の土器、194・217・242・262・227・239・226 ピット (図 89 － 133) から庄内式期の土師器、222、223・231 ピットから布留式期の土師器、232 ピット (長軸 0.6 m、短軸 0.35 m、深さ 0.3 m)(図 90・図版 6) から飛鳥時代に属する土師器の坏身 (図 89 － 132・図版 33) が出土している。各時期とも規模は深さ 0.1 m以上 0.3 m未満のもの、直径 (一辺の長さ) が 0.2 m以上 0.4 m未満のものが多くみられる。

〔C 区〕

建物 1 の南側の区域で、50 基のピットからなる。平面形は円形のものが 42 基、方形のものが 8 基であった。直径 (一辺の長さ) は 0.2 m以上 0.3 m未満のものが 16 基で最も多く、0.3 m以上 0.4 m未満のものが 12 基でそれに次ぐ。検出面からの深さは 0.1 m以上 0.2 m未満のものが 18 基で最も多く、0.1 m未満が 17 基でそれに続いている。

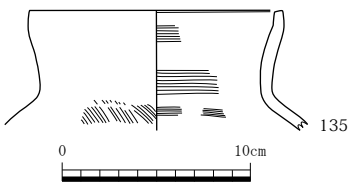


図92　第10面　C区255ピット
出土遺物実測図
（S＝1：4）

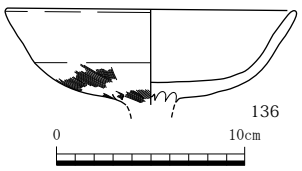


図93　第10面　D区315ピット
出土遺物実測図
（S＝1：4）

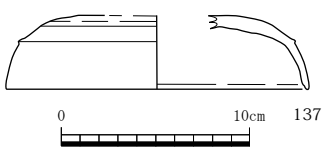


図94　第10面　E区337ピット
出土遺物実測図
（S＝1：4）

遺物から帰属時期の判明したものは以下の 10 基であった。253・404・405・423・428・429 ピットから庄内式期の土師器、411 ピットから布留式期の土師器、255 ピットから土師器の壺 (図 92)、427 ピットから奈良時代の土師器の壺、258 ピット (図 91) からは古代の土師器が出土している。大半の遺構の規模は直径 (一辺の長さ) が 0.2 m以上 0.4 m未満、検出面からの深さが 0.1 m以上 0.5 m未満のものである。

〔D 区〕

微高地の東側、建物 3・4 付近の区域であり、28 基のピットからなる。平面形は円形のものが 26 基、方形のものが 2 基であった。直径 (一辺の長さ) は 0.2 m以上 0.3 m未満のものが 11 基で最も多く、0.3 m以上 0.4 m未満のものが 9 基でそれに次ぐ。検出面からの深さは 0.1 m以上 0.2 m未満のものと 0.1 m未満のものがそれぞれ 12 基みられ、D 区の 8 割以上を占める。

遺物から帰属時期の判明したものは 4 基で、304 ピットから弥生時代後期の土器の細片が、315 ピットから出土した高坏 (図 93・図版 33) を含め 286・290 ピットから庄内式期の土器が出土している。いずれも規模は直径 (一辺の長さ) が 0.2 m以上 0.5 m未満、検出面からの深さは 0.1 m以上 0.5 m未満である。

〔E 区〕

微高地の南側、建物 2 ・ 5 ・ 6 付近の区域であり、 5 つの区域のなかでは最も分布密度が高い区域である。63 基のピットからなり、平面形は円形のものが 61 基、方形のものが 2 基であった。直径 (一辺の長さ) は 0.2 m以上 0.3 m未満のものが 26 基で最も多く、0.3 m以上 0.4 m未満のものが 21 基でそれに次いで多い。検出面からの深さは 0.1 m未満のものが 29 基で最も多く、0.1 m以上 0.2 m未満のものが 21 基でそれに続く。

遺物から帰属時期の判明したものは以下の 10 基であった。339・362 ピットから弥生時代後期の土器、359・370・476・480・482 ピットから庄内式の土師器、361・441 ピットから布留式期の土師器、337 ピットからＭ T15 型式の須恵器の坏蓋 (図 94) が出土している。大半の遺構の規模は直径 (一辺の長さ) が 0.2 m以上 0.5 m未満、検出面からの深さは 0.1 m以上 0. 4 m未満である。

155 高まり (図 49)　微高地南東部、20 Ａ -5 ～ 7,d・e 区に位置する高まりである。南端は撹乱で切られ、東は調査区外に延びる。6・7e 区から東に向かって緩やかな弧状を呈する。総検出長 13.5 m、幅 1.8 ～ 3.3 mである。155 高まりを挟んで北側 T.P. ＋ 3.7 ～ 3.8 m、南側が T.P. ＋ 3.6 ～ 3.7 mと若干の比高差がある。遺物は古墳時代の須恵器坏身片、弥生時代後期から庄内式期の土器の細片が出土した。

【調査区北西部の遺構】

調査区北西部では古墳時代の水田域、土坑、ピットを検出した。

水田域 1 (図 48)

調査区北西部のほぼ中央、1 Ａ -1c・d、20 Ａ -10c・d 区で水田畦畔を検出した。水田面の標高は T.P. ＋ 3.75 m～ 3.85 mで、水田域の中央付近が高く、周辺に向かって下がっている。水田として利用されている地区も集落域と同様に第 7 層下面で検出した遺構面であり、基本層序第 10 層の同位層として認識

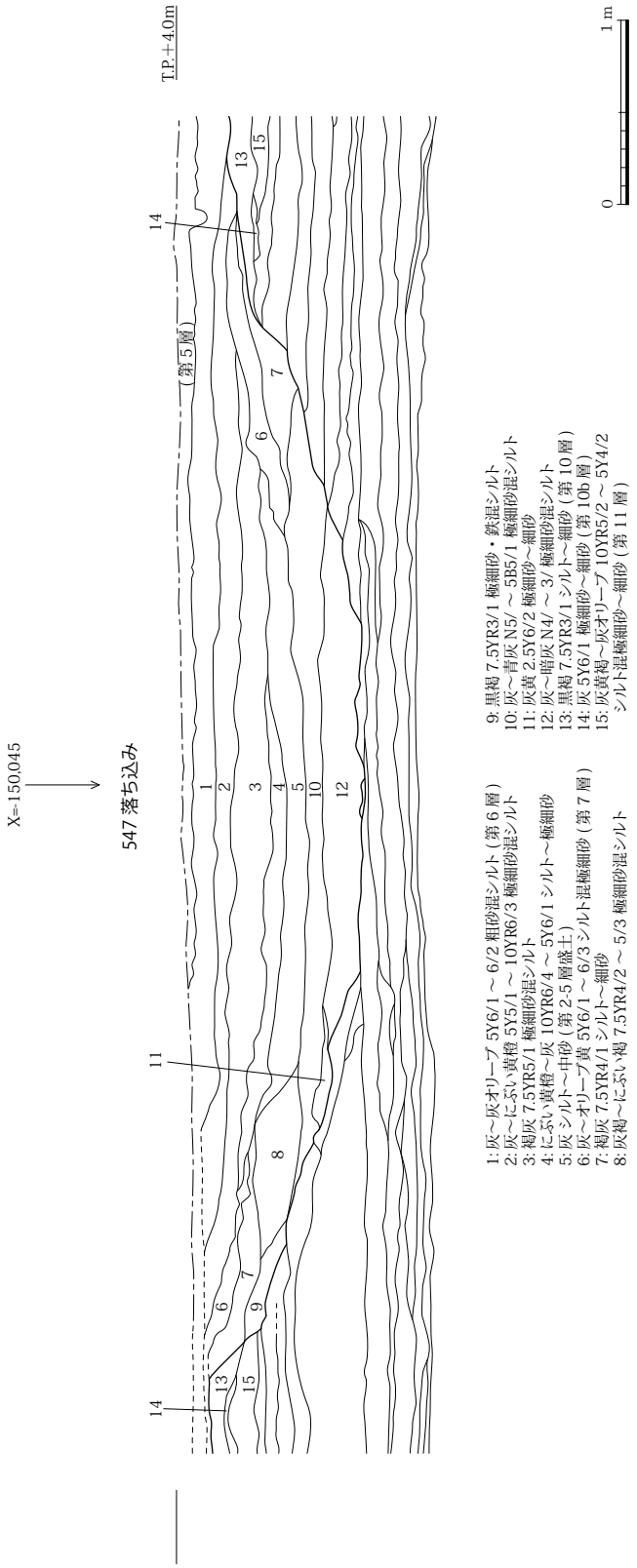


図 95　第 10 面　547 落ち込み断面図（S＝1：40）

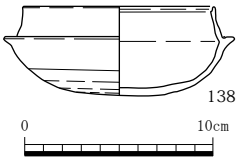
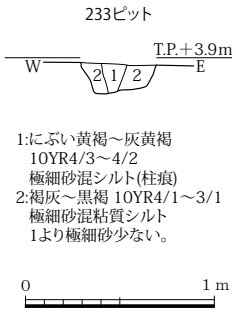


図96　第10面　547落ち込み
出土遺物実測図
（S＝1：4）

される。土質は水田域の方が粘質性が高い。畦畔は、南東－北西方向 (座標北から 48°西) のもの 2 条、南西－北東方向 (座標北から 41°東) のもの 2 条からなり、第 6 面検出の鋤溝や、第 7 面検出の 136 土坑に切られていた。畦畔の下幅は 0.22 ～ 0.45 m、高さは 0.01 ～ 0.03 m を測る。

547 落ち込み (図 95)　20 A - 8 ～ 10e 区 (T.P. ＋ 3.7 m ～ 3.75 m) で検出した、平面形が不整形を呈する大形の落ち込みであり、北西部分は細長く溝状となる。検出長は長軸で 15.5 m、幅は最大で 6 m、溝状の部分で 1.5 ～ 2 mを測り、検出面からの深さは、最も深い部分で 0.5 m、溝状の部分で 0.2 ～ 0.3 mを測る。埋土は 5 層に分層される。(2) 層中には基本層序第 7 層がたれこんでいることが確認された。埋土は上層 (1 ～ 5)、中層 (6 ～ 9)、下層 (10 ～ 12) の 3 層に大別できる。第 10 面段階で掘削された後、(10 ～ 12) 層、灰色極細砂～シルトが主として堆積する。続いて (6) 層 (基本層序第 7 層に相当) および (9) 層 (褐色～黒褐色シルト混じり極細砂～細砂で埋まり、最終的に (1 ～ 5) 層 (にぶい黄橙色および褐色極細砂～粗砂混じりシルト) で埋没したと考



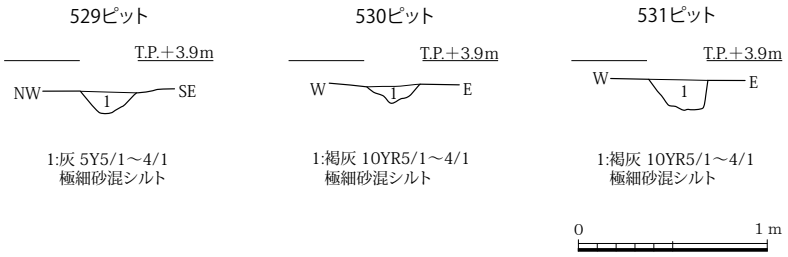


図98　第10面　529･530･531ピット断面図（S＝1：40）

図97　第10面　233ピット
断面図（S＝1：40）

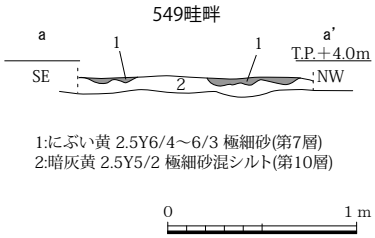


図99　第10面　549畦畔断面図
（S＝1：40）

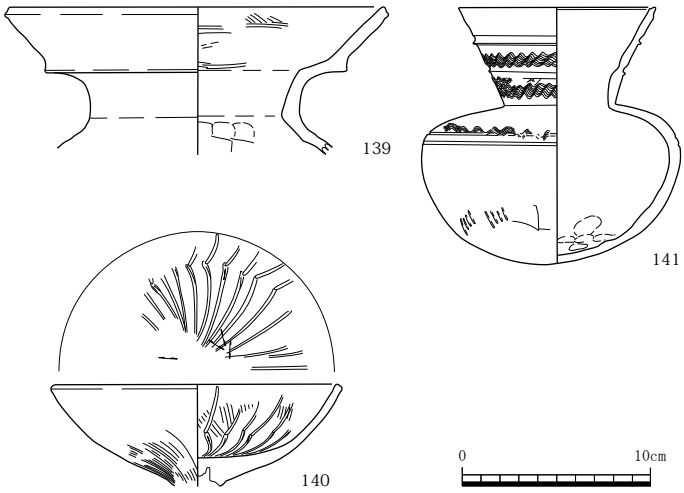


図100　第10面　460溝出土遺物実測図（S＝1：4）

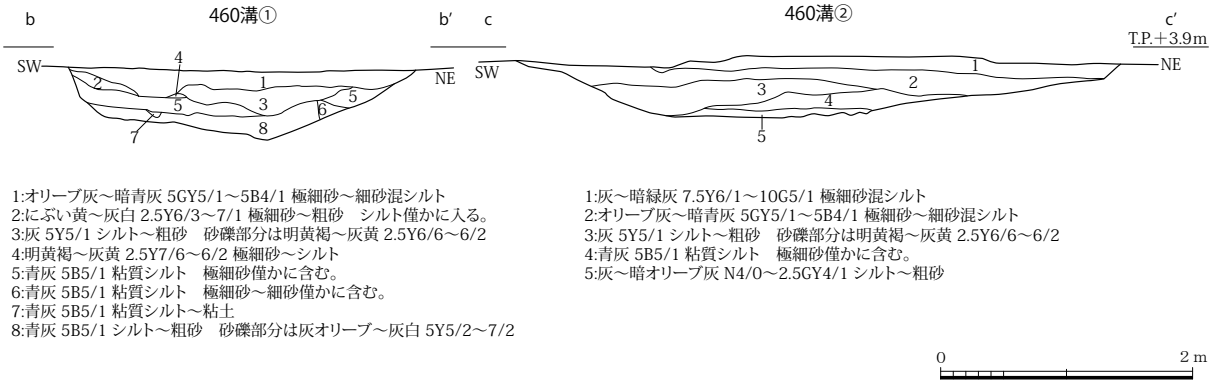


図101　第10面　460溝①②断面図(S＝1：60)

えられる。掘削された後、比較的長い時間をかけて徐々に埋没していったと推測される。遺物は埋土から TK47 型式の須恵器の坏身 (図 96・図版 33) が出土しており、古墳時代中期に帰属する遺構と考えられる。

233 ピット (図 97)　20 A -10c 区で検出した。平面形が円形を呈し、直径 0.4 m、検出面からの深さ 0.15

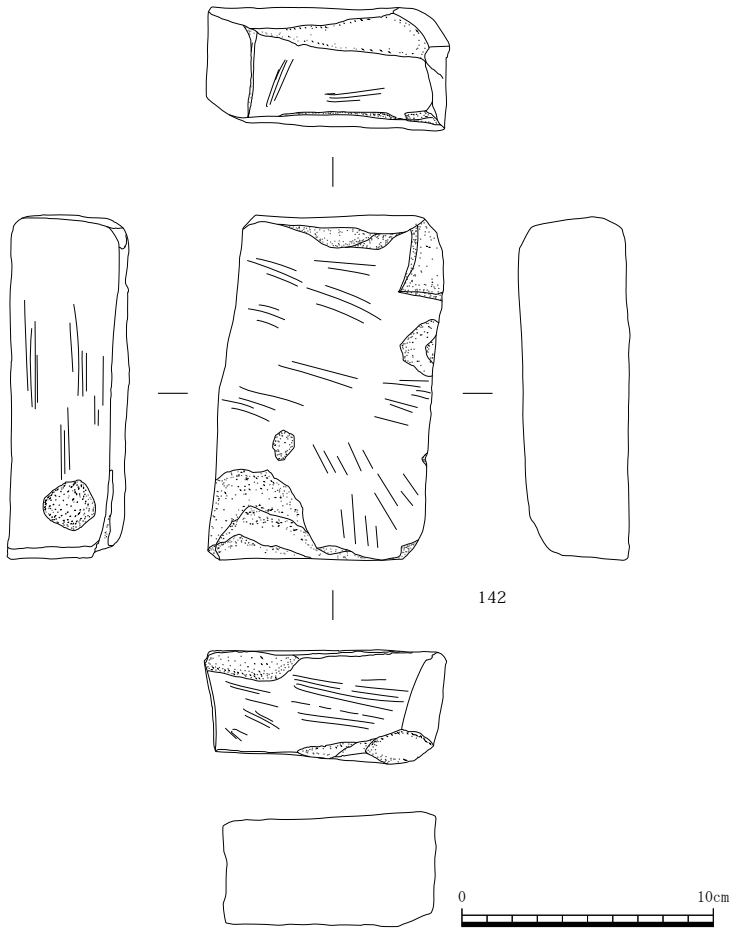


図102　第10面　出土砥石実測図（S＝1：4）

mを測るピットである。埋土はにぶい黄褐～灰黄褐色極細砂混じりシルト、褐灰～黒褐色極細砂混じり粘質シルトからなり、調査区北東部微高地のピット群にみられる埋土とほぼ同じであることから、第 10 面帰属の遺構と考えられる。

529 ～ 531 ピット (図 98)　20 A -10e 区 (529 ピット)、 1 A - 1 e 区 (530・531 ピット) で検出した。いずれのピットも直径約 0.3 m、検出面からの深さは 0.08 ～ 0.15 mである。埋土は灰色もしくは褐灰色極細砂混じりシルトである。遺物は出土していない。

【調査区南部の遺構】

調査区南部では古墳時代の溝と水田域を検出した。

水田域 2 (図 48、99)　調査区南部の東 側、20 A -5・6g ～ i、7・8f ～ i、9g・h 区で水田畦畔を検出した。水田

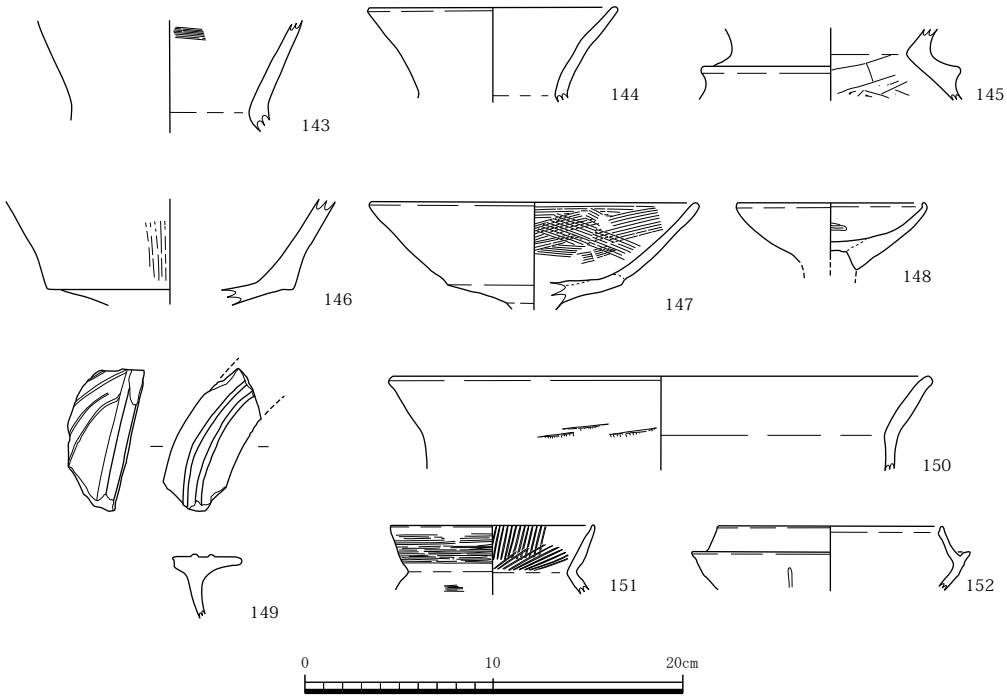


図103　第10層出土遺物実測図（S＝1：4）

面の標高は、南東隅付近が T.P. ＋ 3.95 m前後で最も高く、北西に向かって標高を減じており、20 A -8f 区付近で最も低く、T.P. ＋ 3.7 m前後である。畦畔は、南西－北東方向 (座標北から 31° 西) を向くものとそれにほぼ直交する方向 (座標北から 57° 東) のものがみられ、地形の傾斜に合わせて配置されている。畦畔の幅は 0.1 ～ 0.75 m、高さは 0.01 ～ 0.03 mを測る。尚、畦畔は、後述する 460 溝、537 溝に切られていた。

20 A -5・6h で検出した **549 畦畔** (図 99) は、幅 0.1 ～ 0.3 m、高さ 0.01 ～ 0.04 mであり、上部を基本層序第 7 層のにぶい黄色の極細砂に覆われていた。

460 溝 (図 100、101・図版 12、33)　1 A -2e・f、1f・g、20 A -10g・h、8・9h・i 区で検出した、南東－北西方向の溝である。南北端ともに調査区外に延びる。南側、8・9h・i 区では 2 段に落ちている。検出長は 54 m、幅 2.4 ～ 6.7 m、検出面からの深さは 0.4 ～ 0.6 mを測る。埋土は 3 層に大別され、断面①では、上層 (1 ～ 4) はオリーブ灰色やにぶい黄色、灰黄色などのシルト～粗砂、中層 (5 ～ 7) では青灰色極細砂を含む粘質シルト、下層 (8) は青灰色シルト～粗砂からなっていた。断面②においても、上層 (1・ 2) は暗緑灰色～オリーブ灰色極細砂や細砂混じりシルト、中層 (3 ・ 4) は灰色～青灰色粘質シルト～粗砂、下層 (5) は灰～暗オリーブ灰色シルト～粗砂からなっていた。尚、当溝は検出した位置と方向から池島 I 期地区の溝 7 、05 － 2 調査区 214 溝につながると考えられる。遺物は、埋土から布留式期の二重口縁壺 (139)、高坏 (140)、TK208 ～ 23 型式の須恵器の壺 (141) などが出土している。また、20 A -9h 区の溝東肩部で木材が出土した。

537 溝 (図 48)　水田域 2 の西側、20 A -8・9g・h 区で検出した溝である。北東端は鋤溝に切られて消え、南西端は側溝に切られて消える。水田畦畔とほぼ同一の主軸方向をとる。規模は、検出長 9.8 m、幅 0.3 ～ 0.5 mを測り、検出面からの深さは 0.03 ～ 0.07 mを測る。埋土はにぶい黄色～黄灰シルト混じり極細砂の 1 層である。埋土中には、基本層序の第 7 層が含まれることが確認された。遺物が出土しなかったので時期の詳細は不明である。

第 10 面出土遺物 (図 102)　(142) は砂岩製の砥石で、表面、片側側面、両木口に使用した痕跡が確認される。

第 10 層出土遺物 (図 103)　(143 ～ 149、151) が布留式期、(150) が弥生時代後期、(152) が 6 世紀前半に属するもので、(143、144) が壺、(145) が形態・胎土の類似性から山陰地方からの搬入品と思われる鼓形器台、(146、147) が高坏の坏部、(148) が小型器台、(149) が手焙り形土器、(150) が甕も

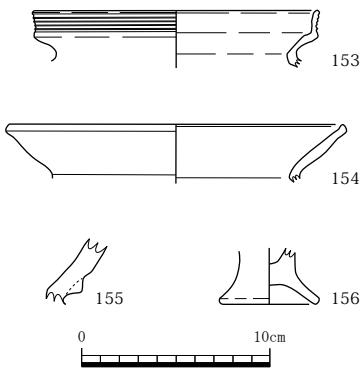


図104　第10b層出土遺物実測図（S＝1：4）

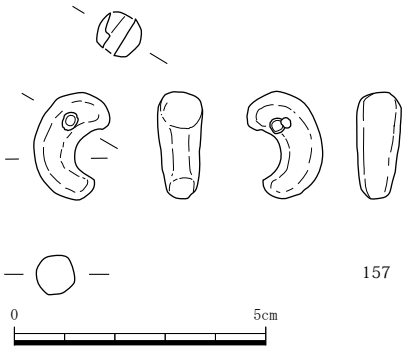


図105　第10～11層出土勾玉実測図（S＝1：3）

しくは鉢、(151) が小型丸底壺、(152) は須恵器の坏身で、外面底部付近に縦方向 1 条のヘラ描き沈線が施されている。

第 10b 層出土遺物 (図 104)　庄内式期に属する (153) が吉備系の二重口縁甕、(154) が甕、壺 (155)、台付甕の台部 (156) は布留式期に属する。

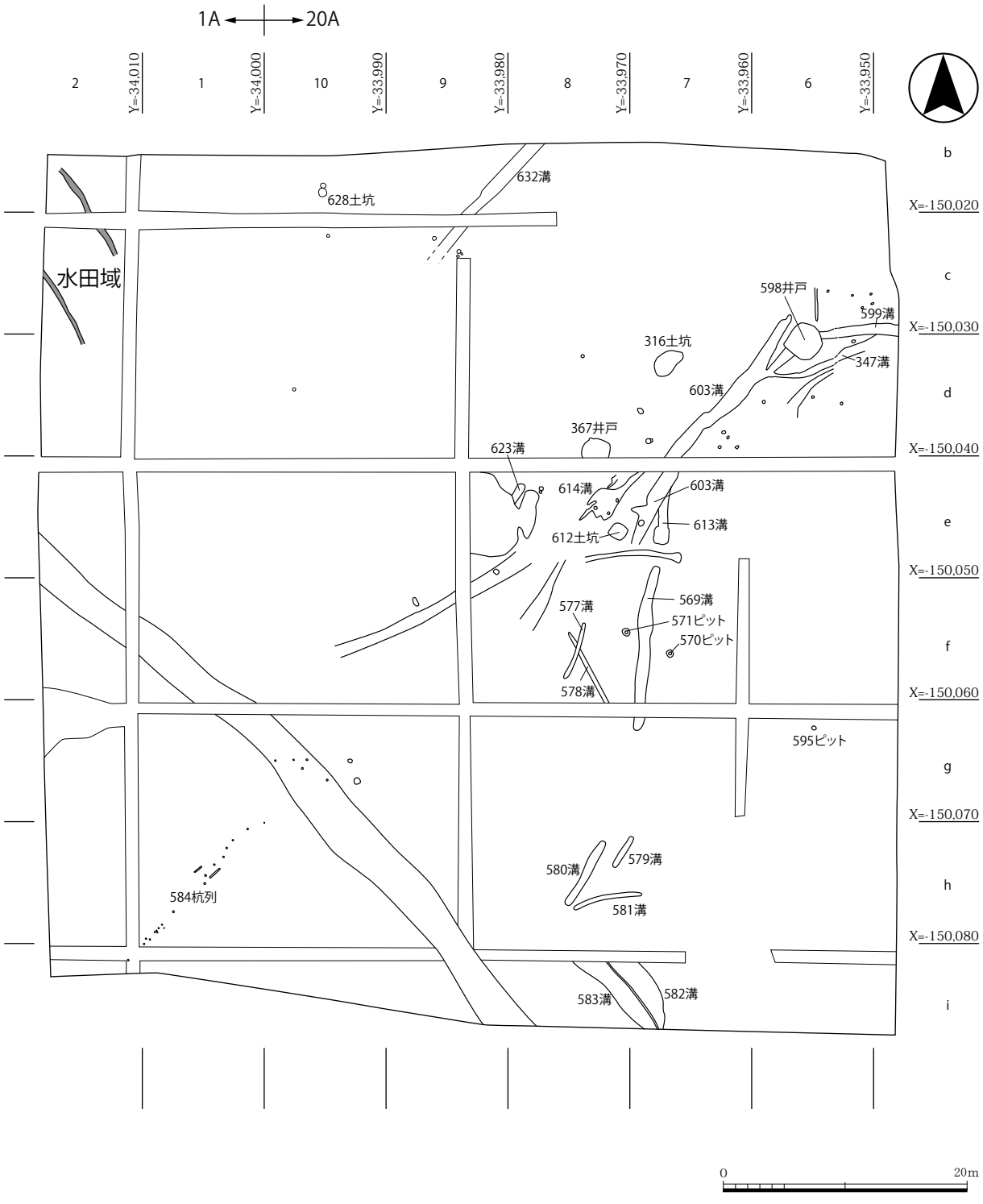
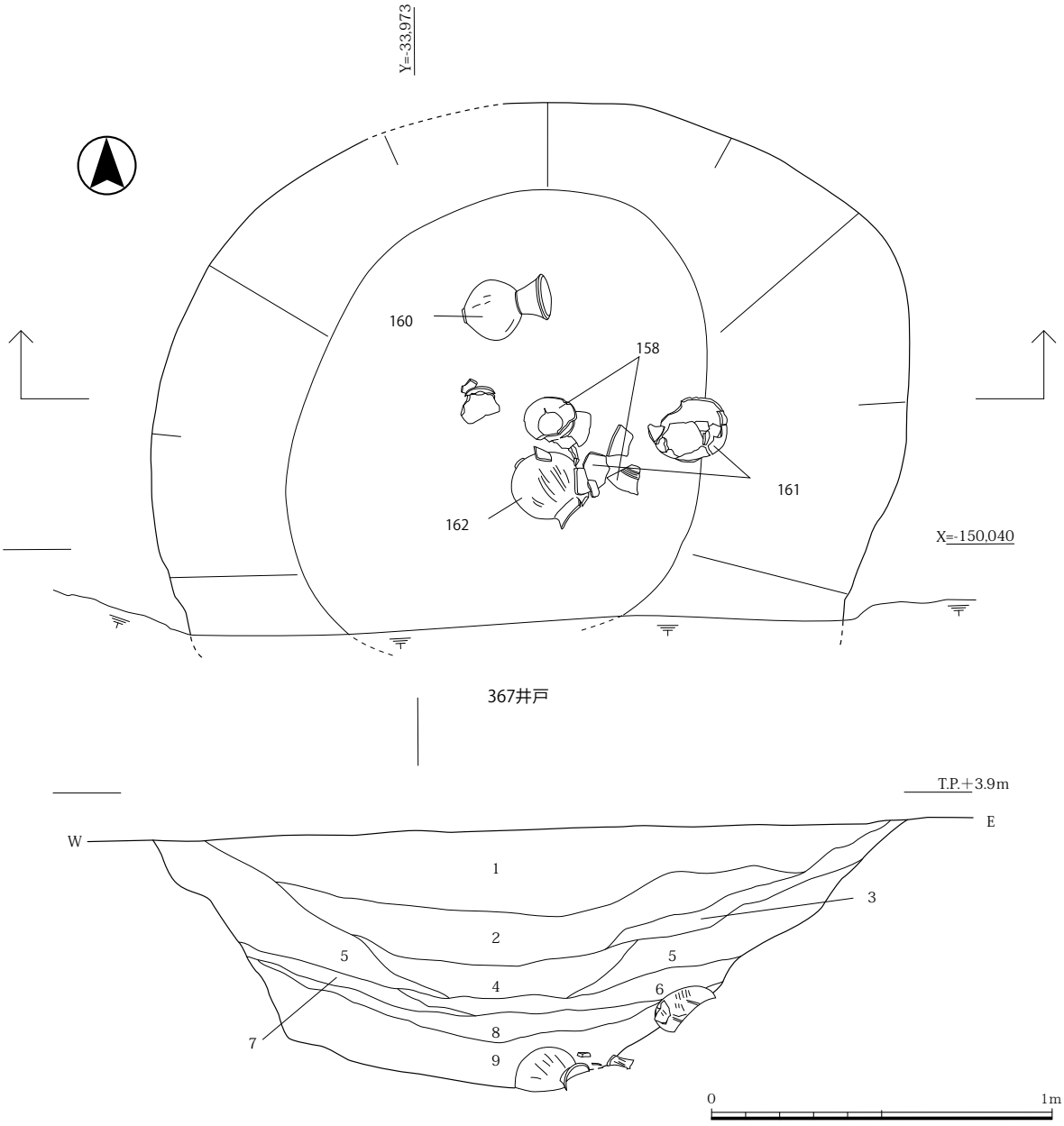


図106　第11面　全体図（S＝1：500）



1:黒褐 7.5YR3/1 中～細砂混シルト
炭化物、土器多く含む。
2:黒 10YR2/1 中砂混シルト
炭化物含む。
3:褐灰 10YR5/1 細砂混中砂
4:褐灰 10YR4/1 極細砂混シルト
5:灰黄褐 10YR4/2 細砂混中砂
φ3cmの偽礫含む。
6:灰 7.5Y4/1 シルト　ラミナ。
7:灰 7.5Y6/1 中砂　ラミナ。
8:オリーブ黒 10Y3/1 シルト
炭化物含むラミナ。
9:オリーブ灰 5GY5/1 中～粗砂
φ3～5cmの偽礫含む。土器多数出土。

図107　第11面　367井戸平・断面図(S＝1：20)

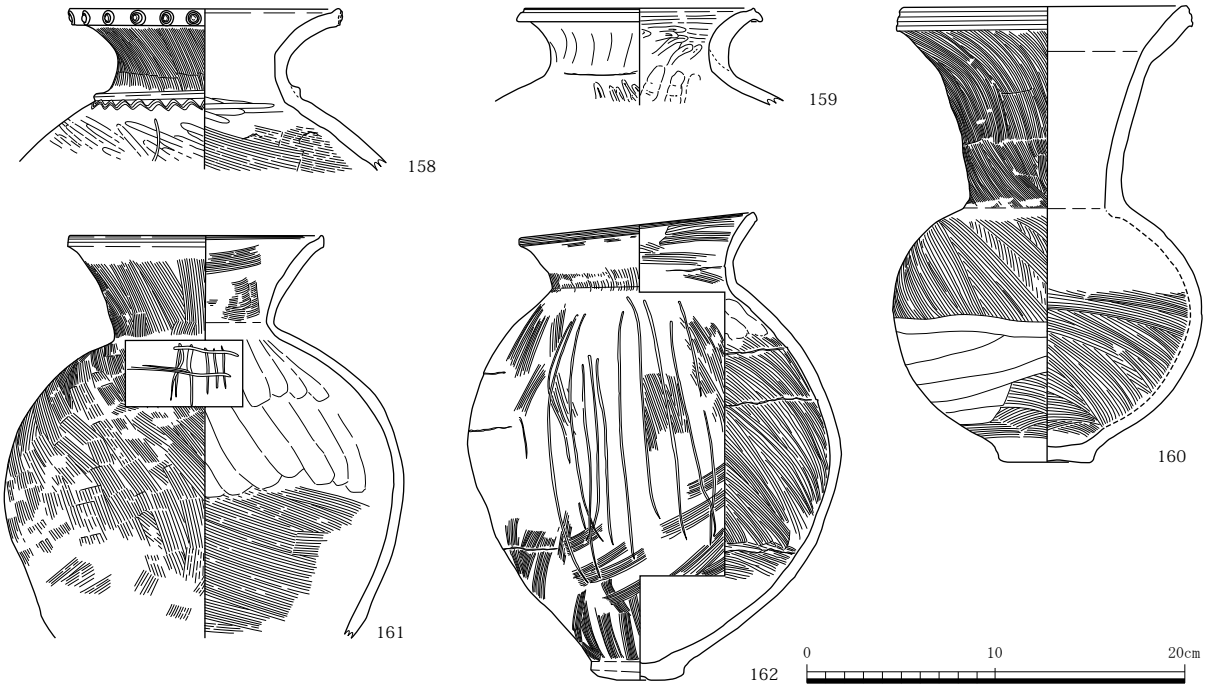


図108　第11面　367井戸出土遺物実測図（S＝1：4）

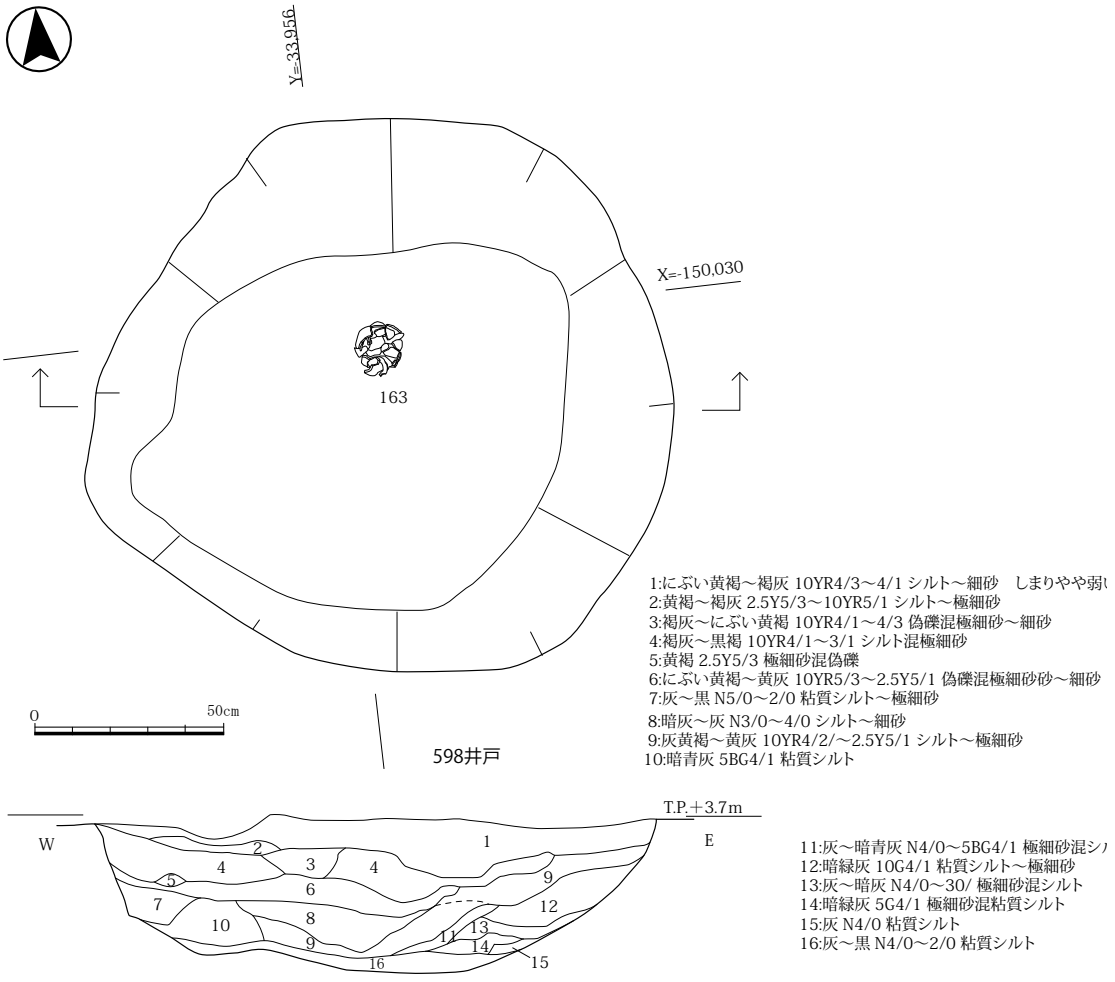


図109　第11面　598井戸断面図・遺物出土状況図（S＝1：20）

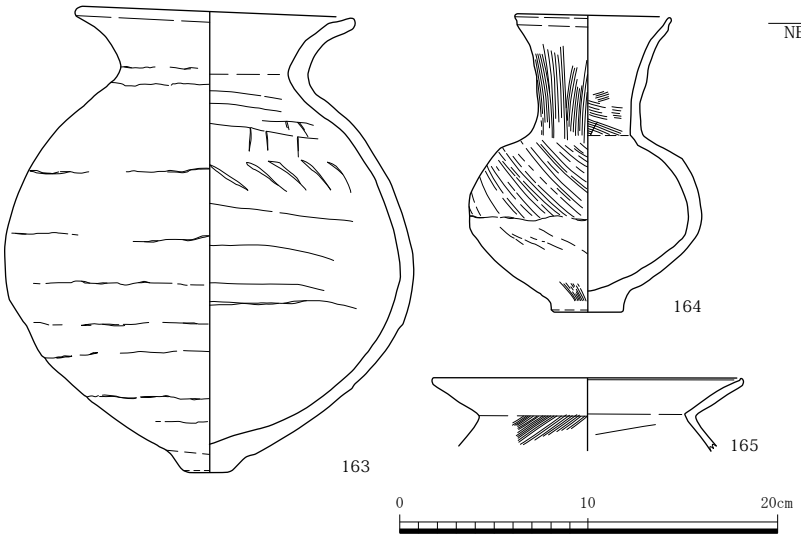


図110　第11面　598井戸出土遺物実測図（S＝1：4）

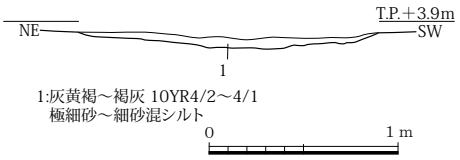


図111　第11面　316土坑断面図
（S＝1：40）

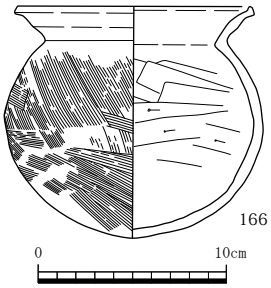
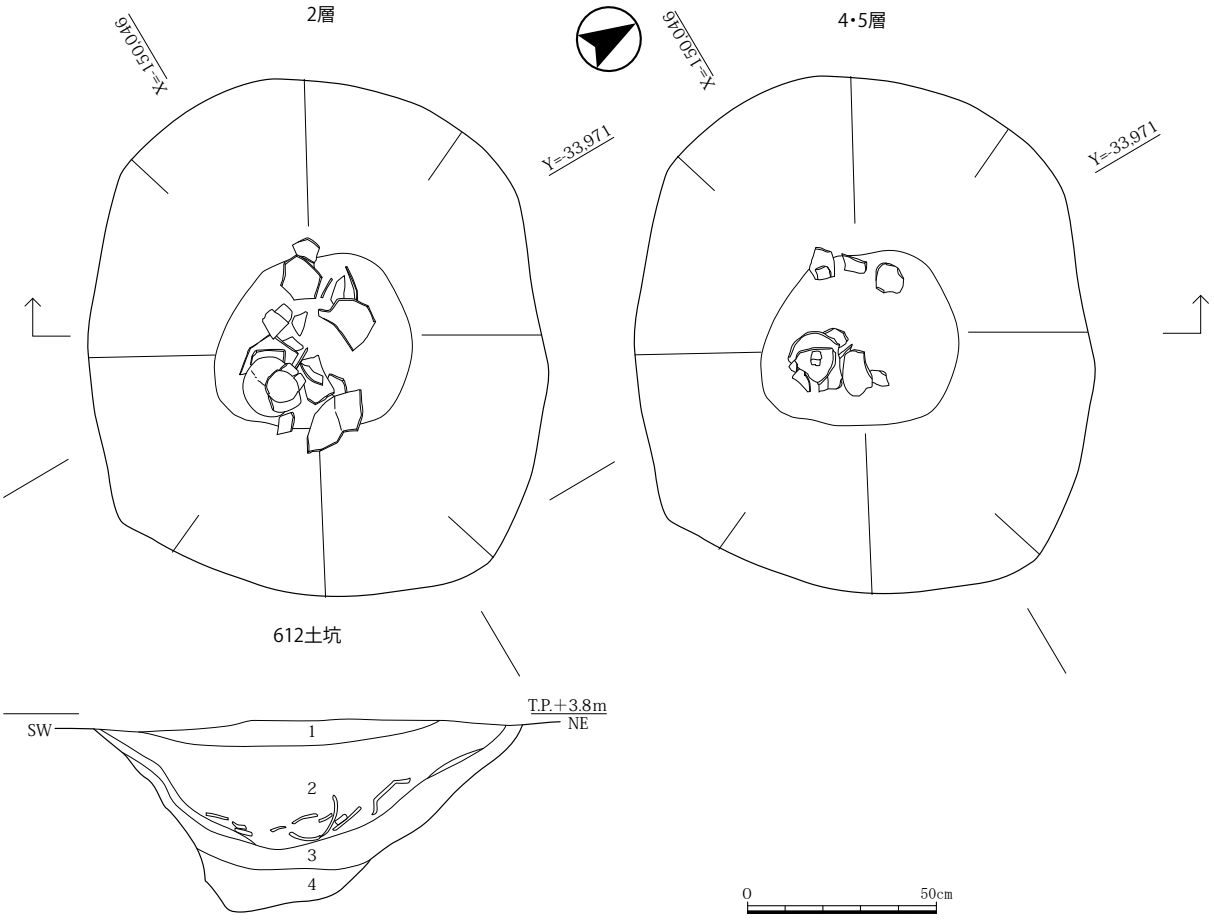


図113　第11面　612土坑
出土遺物実測図（S＝1：4）



1:褐灰～にぶい黄褐 10YR5/1～5/3 シルト～極細砂
2:黒褐～褐灰 10YR3/1～4/1 極細砂～細砂混シルト
　炭粒をまばらに含む。
3:黒 10YR2/1～N2/ 極細砂～細砂混シルト
　炭化物主体の黒色の層
4:黒褐～灰 10YR3/1～N4/0 極細砂混粘質シルト
5:灰 N4/0～5/0 粘質シルト

図112　第11面　612土坑断面図・遺物出土状況図（S＝1：20）

第 10 層～第 11 層出土遺物 (図 105・図版 35)　(157) は 20 A -8e 区で出土した翡翠製の勾玉である。長さ 2.1 ㎝、厚み 0.8 ㎝、重さ 3.7 g を測る。両側から穿孔を施すが貫通せず、その後再度片側から穿ちなおし、先にあけられた孔へ貫通させている。そのため片側面の孔は切り合いが確認される。

第 11 面 (図 106、図版 12)

第 11 面は、基本層序第 10 層・第 10b 層を除去し検出した、弥生時代後期から古墳時代初頭に帰属する遺構面である。

地形は第 10 面とほぼ同様で、調査区北東部 (Y= － 33,990 より東、X= － 150,050 より北側) の標高は T.P. ＋ 3.7 ～ 4 m、北西部の標高が T.P. ＋ 3.5 ～ 3.7 m、南側の標高が T.P. ＋ 3.6 ～ 3.8 mと約 0.1 ～ 0.4 mの比高差が確認された。北東部の微高地を形成している地区では井戸、土坑、溝を検出し、地形が傾斜していく調査区西部では水田畦畔、調査区南部では杭列や溝を確認した。

第 10 面でも触れたが、調査区北東部微高地の標高 T.P. ＋ 4 m前後の部分では、洪水氾濫堆積層 (第 12 － 1 層) が一部露出し、第 11 層の堆積が確認されなかったことから、微高地では第 11 層上面 (第 11 面) と第 10 層上面 (第 10 面) を同一面で検出した。このため、出土遺物と遺構の埋土などから判断し、基本的には第 11 面で検出した遺構について詳説する。第 11 面の帰属時期は弥生時代後期から古墳時代初頭であるが、先に述べたように第 10 面と同一面で検出した遺構について、現地調査時には第 11 面と判断して調査を進めたが、遺物を詳細に検討した結果第 10 面に帰属すると判断した遺構があり、それらについては帰属時期を記した。第 10 面同様に、調査区北東部微高地、調査区北西部、調査区南部の 3 地区に大別し様相を述べる。

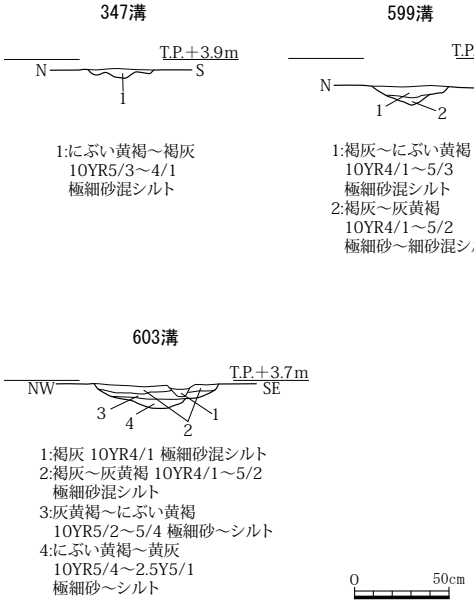


図114　第11面　347・599・603溝断面図（S＝1：40）

【調査区北東部微高地の遺構】

調査区北東部微高地では、南側に遺構が集中し井戸 2 基、土坑 2 基、溝 9 条、ピットを検出した。以下、この遺構種別の順に進め、各種別では遺構番号順に述べていく。

367 井戸 (図 107、108・図版 13、34)　微高地の南側、20 A -8d・e 区に位置する。形状・規模・埋土などの様相から井戸と判断した。平面形はほぼ円形

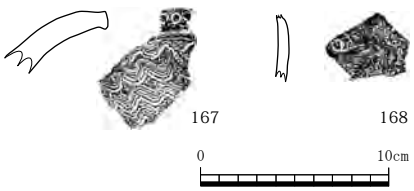


図115　第11面　347溝出土遺物拓本・断面図（S＝1：4）

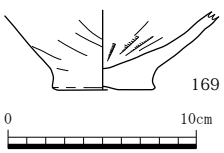


図116　第11面　599溝出土遺物実測図（S＝1：4）

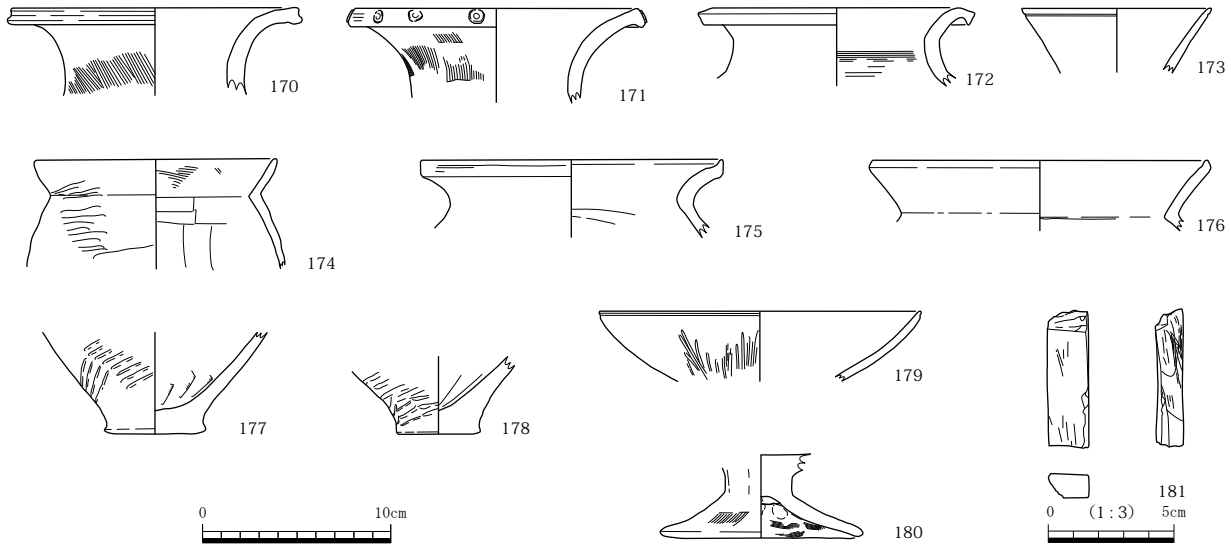


図117　第11面　603溝出土遺物実測図（S＝1：4・1：3）

を呈し、断面はすり鉢状である。規模は直径 2.2 m、検出面からの深さは 0.72 mを測る。埋土は上層 (1 、 2) が黒色あるいは黒褐色中砂～細砂を含むシルト層、中層 (3 ～ 5) が褐灰色あるいは灰黄褐色中砂や極細砂混シルト層で、崩落土などからなる層である。下層 (6 ～ 8) ではラミナが観察され、井戸の使用時の堆積層と考えられる。最下層 (9) はシルトを含む中砂～粗砂である。遺物は完形の弥生時代後期の長頸壺 (160)、ほぼ完形に復原された壺 (162)、壺 (158、159、161) などが出土した。尚、(158) は口縁端部に円形浮紋を巡らせ、頸部から肩部への屈曲部に突帯

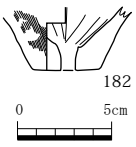


図119　第11面　614溝出土遺物実測図（S＝1：4）

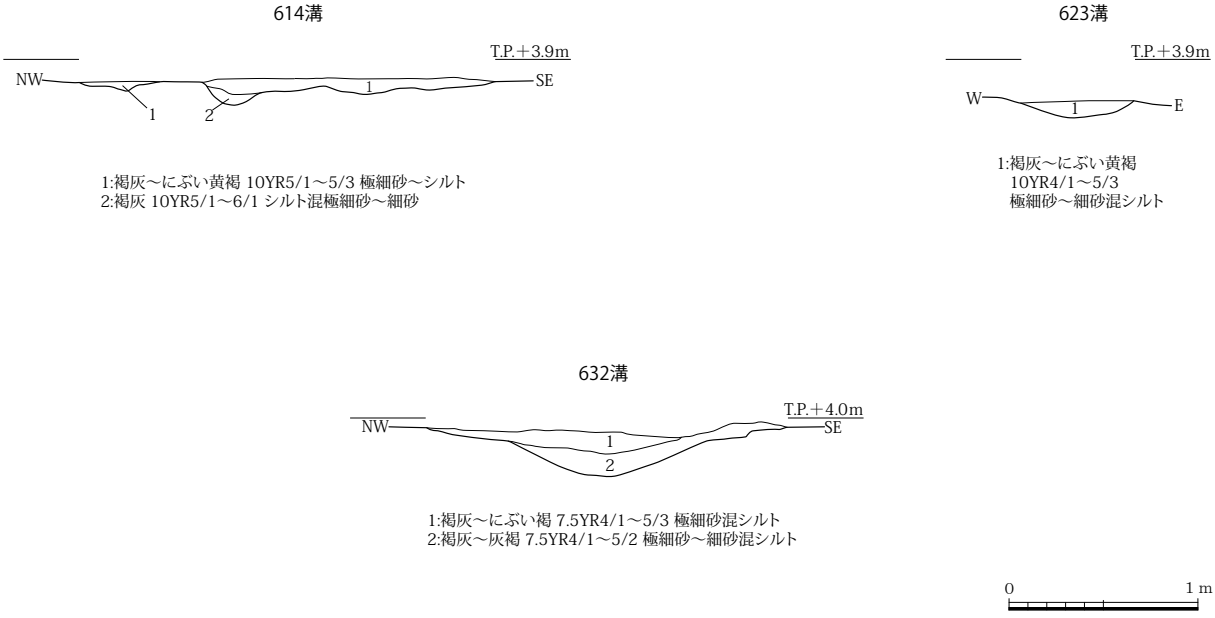


図118　第11面　614・623・632溝断面図（S＝1：40）

を貼り付け、その直下に３本歯による粗雑な波状紋を施す。肩部に上から下へ、右に張り出す曲線１条のヘラ記号が施される。肩部の調整はナデが施されているが部分的にタタキ痕が認められる。(161) は肩部にヘラ描き沈線による記号紋が施されている。縦方向、上から下へ約２～ 3.7 ㎝の沈線５条、上端側１条と下端側が１条の横方向の沈線によって切られる。縦方向の沈線は上端幅約 2.7 ㎝、下端幅約３㎝と若干裾広がりを構成し、線間は上端側で 0.4 ～ 0.6 ㎝、下端側で 0.5 ～ 0.8 ㎝である。横方向の沈線は左から右方向に施されており縦方向の沈線に比して彫りが浅い。壺 (162) は外面肩部から体部下位に、ヘラ描き沈線により縦方向 12 条の線刻が施される。長さはほぼ 11 ～ 14 ㎝、間隔は 0.8 ～ 1.2 ㎝を測る。

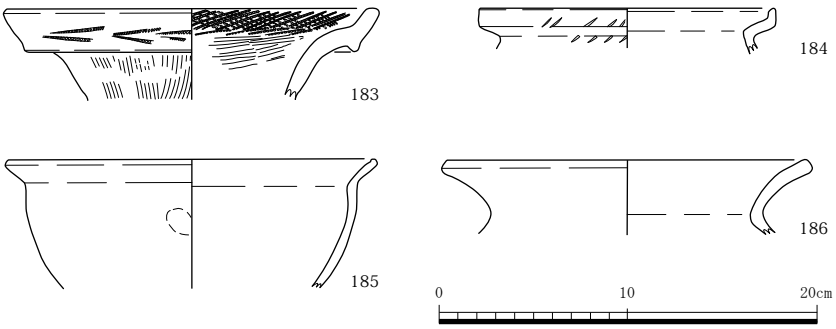


図120　第11面　632溝出土遺物実測図（S＝1：4）

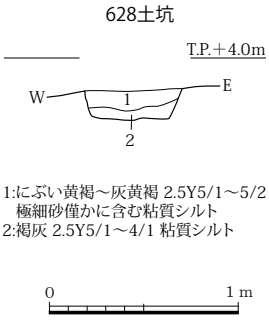


図121　第11面　628土坑断面図（S＝1：40）

598 井戸 (図 109、110・図版 13、34)　598 井戸は、微高地の東側、20 A -6c・d 区で検出した。形状、規模、埋土などの特徴から井戸と判断した。平面形はほぼ円形を呈し、断面はすり鉢状である。599 溝を切っていた。規模は直径 2.9 m、検出面からの深さは 0.84 mを測る。上層 (1 ～ 6) は褐灰～黄灰色のシルトや細砂を含む層、中層 (8 ・ 9 ・11) は灰～暗青灰色シルト～細砂であり、上層・中層ともにシルトブロックが観察されることから、主に人為的に埋め戻した層とみられる。下層 (7 ・10・12 ～ 15) は灰色や黒色、暗灰色を主とした粘質シルトからなる層で、崩落土などを含み、最下層は灰～黒色粘質シルトであった。最下層からほぼ完形に復原された弥生時代後期の壺 (163) が出土した。上層からは完形の小型壺 (164) と甕 (165) が出土した。いずれも弥生時代後期に属する。

316 土坑 (図 111)　微高地の中央、20 A -7d 区に位置する土坑である。平面形は不整形で、断面形は皿状を呈する。第 10 面で検出した鋤溝に切られている。長軸は 2.5 m、短軸 1.5 m、検出面からの深さは 0.08 mを測る。埋土は灰黄褐～褐灰色極細砂～細砂混じりシルトの単層である。埋土中から布留式の甕、壺、高坏の細片が出土しており、遺構の時期は古墳時代前期である。第 11 面で検出したが、第 10 面に帰属する遺構と考えられる。

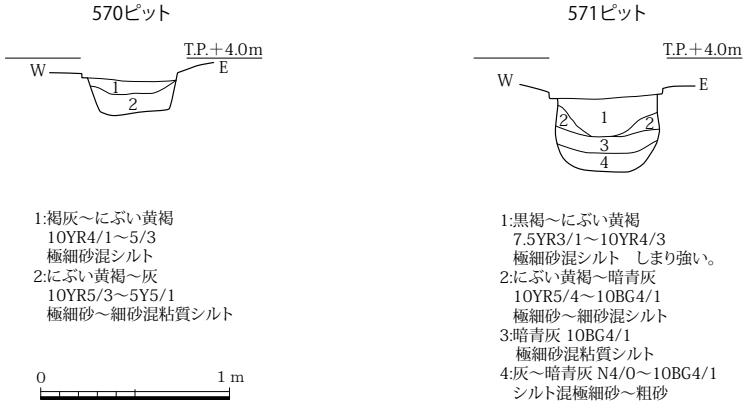


図122　第11面　570･571ピット断面図（S＝1：40）

612 土坑 (図 112、113・図版 34)

微高地の南端、20 A -8e 区で検出した土坑である。平面形は隅丸方形であり、断面形はすり鉢状を呈する。長軸は北西－南東方向である。規模は長軸が 1.35 m、短軸 1.2 m、検出面からの深さは 0.5 mを測る。埋土は上層 (1) が褐灰～にぶい黄褐色シルト～極細砂、中層 (2 ～ 4) が黒褐色などの暗色を帯びる極細～細砂混じりシルトで炭化物が多く含まれ、下層 (5) が灰色粘質シルトであった。遺物の多くは主として中層から出土している。弥生時代後期から庄内式期に属する土器の細片と庄内式期の甕 (166) が出土した。遺構の時期は古墳時代初頭である。

347 溝 (図 114、115・図版 13)　微高地東側の 20 A -5・6d 区で検出した、東北東から南南西方向、南にやや膨れて弧状を描く溝である。東北東端は東西方向の 599 溝に切られ、検出長 9 mを測り 20 A -6d 区で収束する。幅 0.45 ～ 0.8 m、検出面からの深さは 0.05 mを測る。埋土はにぶい黄褐～褐灰色極細砂混じりシルト層の 1 層である 。(167) は口縁端部に竹管紋を巡らせ、頸部外面には 5 本歯による波状紋が施されている。(168) は竹管紋の下から横方向に 1 ㎝ほどヘラ描き沈線が延びている。竹管紋直上にも同様の円弧をもつ半円が施されている。いずれも弥生時代後期に属する。

599 溝 (図 114、116)　微高地東側の 20 A -5・6c・d 区で検出した溝である。東端は調査区外であり、西に向かってほぼ直線的に 6.4 m延び、598 井戸に切られる。598 井戸から出て南西方向に方向を変え約 2 m延びて 603 溝に合流している。検出総延長は 10 m前後であり、幅 0.65 ～ 1 m、検出面からの深さは 0.1 mを測る。埋土は褐灰色あるいは灰黄褐色極細砂～細砂混じりシルトの上層と、同色の極細砂～細砂混じりシルトである下層に分かれる。弥生時代後期の壺の底部 (169) が出土した。

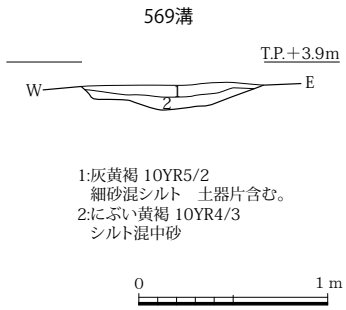


図123　第11面　569溝断面図
（S＝1：40）

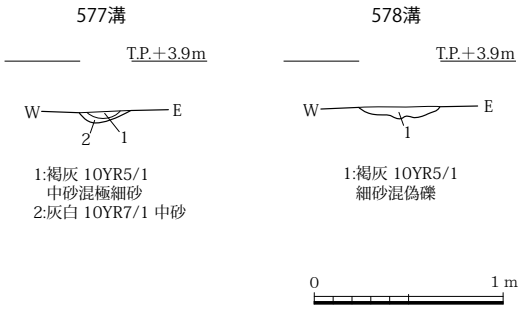


図124　第11面　577･578溝断面図（S＝1：40）

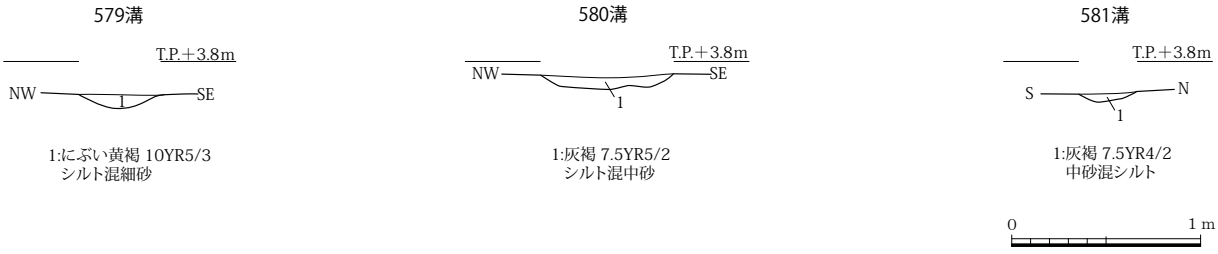


図125　第11面　579･580･581溝断面図（S＝1：40）

603 溝 (図 114、115、117・図版 34)　微高地東側の 20 A -6c・d、 7 d・e 区で検出した、北東－南西方向の溝である。北東側は 598 井戸の北側で収束し、南西側は 612 土坑の北東付近で消える。613 溝を切っている。規模は、検出長が 20.6 m、幅は 599 溝と合流している部分で 2 m前後、それ以外では 0.8 ～ 1.5 mであり、検出面からの深さは 0.2 ～ 0.4 mを測る。埋土は 3 層に分層可能で、全体的に褐灰色～にぶい黄橙色、にぶい黄褐色を呈し、(2 ・ 3) 層が極細砂混じりシルトであるのに対し、(4) 層は極細砂がより多く含まれる層である。遺物は弥生時代後期に属する土器や砥石などが出土した。(170 ～ 173) は壺の口頸部で、(170) は口縁端部に凹線を、(171) は口縁端部に円形浮紋を巡らせる。(174 ～ 178) は甕、(179) は高坏の坏部、(180) は台付甕の台部である。(181) は粘板岩製の砥石で 4 面とも使用した痕跡が観察される。

614 溝 (図 118、119)　20 A -7・8e で検出した、北東－南西方向の溝である。平面形は不整形で、規模は検出長 7.6 m、幅 0.6 ～ 2.4 m、深さ 0.06 ～ 0.12 mを測る。埋土は上層が極細砂～シルト、下層がシルト混じり極細砂～細砂である。遺物は、弥生時代後期に属する甑の底部が出土した (182)。中央部に焼成前穿孔が施されている。

623 溝 (図 118)　微高地南西、20 A -8e 区で検出した北東－南西方向の溝で、南西側の一部が、第 10 面の 547 落ち込みに切られていた。断面形は皿状で、規模は検出長が 1.7 m、幅 0.57 m、検出面からの深さは 0.08 mを測る。埋土は褐灰～にぶい黄褐色極細砂から細砂混じりシルトの単層であった。

632 溝 (図 118、120)　微高地北西部の 20 A -8b、9b・c 区で検出した北東－南西方向の溝である。20 A -9c 区の北側で一部を側溝および第 10 面の 234 井戸や 235 土坑、ピットに切られており、南西側は 20 A -9c 区の中央付近で消える。規模は、検出長が 13 m、幅 1.7 ～ 2.2 mであり、検出面からの深さは 0.2 ～ 0.3 mを測る。埋土は上層が褐灰～にぶい褐色極細砂混じり粘質シルト、下層が褐灰～灰褐色極細砂および細砂混じりシルトであり、下層の方が上層より暗色を呈し、極細砂・細砂をより多く含む。遺物は東海系の壺の口頸部 (183)、近江系の甕の口縁部 (184)、鉢 (185)、甕 (186) などが出土した。

【調査区北西部の遺構】

調査区北西部では、水田域と土坑 1 基などを確認した。

628 土坑 (図 121)　調査区北西部の北側、20 A -10b 区に位置する土坑である。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈し、長軸は南北方向である。規模は長軸が 0.8 m、短軸 0.5 m、検出面からの深さは 0.15 mを測る。埋土は上層がにぶい黄褐～灰黄褐色極細砂が僅かに混じるシルト、下層が褐灰色の粘質シルトであった。

水田域 (図 106)　調査区北西部の西側、 1 A -2b ～ d 区で、北西－南東方向 (座標北から 33° 西) の水田畦畔を 2 条検出した。水田面と考えられる畦畔付近の標高は T.P. ＋ 3.5 ～ 3.6 mであり、畦畔は地形の傾斜に合わせて配置されている。畦畔の下幅は 0.5 ～ 0.8 m、高さは 0.03 ～ 0.05 mを測る。

【調査区南部の遺構】

調査区南部では、ピット 3 基、溝 9 条、杭列を検出した。

570・571 ピット (図 122)　調査区南部の北側、20 A -7・8f 区で検出したピットである。平面形は 2 基いずれも方形であり、断面形は 570 が逆台形、571 がほぼ方形を呈する。規模は 570 ピットについ

ては一辺が 0.5 m、検出面からの深さは 0.22 m、571 ピットが一辺 0.55 m、検出面からの深さは 0.42 mを測る。埋土は 570 ピットの上層 (1) が褐灰～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下層 (2) がにぶい黄褐～灰色極細砂と細砂混じり粘質シルトからなる。571 ピットは上層 (1 ・ 2) が、主に黒褐色やにぶい黄褐色極細砂混じりシルトからなり、下層 (3 ・ 4) が暗青灰～灰極細砂混じりシルトやシルト混じり極細砂～粗砂である。571 ピットの方が 570 ピットに比べやや暗色を呈していた。土器の細片が出土したが時期の詳細は不明である。

569 溝 (図 123)　調査区南部の北側、20 A -7e・f 区に位置する、南北方向の溝である。南側は側溝内で収束し、北側は 7e 区の南部分で消える。本溝の北側に位置する 613 溝も東西方向の溝であるが、埋土、底面の深さから考え同一の溝ではないと判断した。規模は検出長 10.7 m、幅 0.7 ～ 1.25 m、検出面からの深さ 0.15 mを測る。埋土は灰黄褐色細砂混じりシルトの上層とにぶい黄褐色シルト混じり中砂の下層からなる。弥生時代後期の土器の細片が出土した。

577・578 溝 (図 124)　調査区南部の北側、569 溝の西隣の 20 A -8f 区で検出した 2 条の溝である。577 溝が北北東－南南西方向、578 溝が北北西－南南東方向をとる。577 溝が 578 溝を切っており、578 溝は南側が側溝内で収束していた。規模は 577 溝が検出長 4.7 m、幅 0.2 ～ 0.3 m、検出面からの深さ 0.06 m、578 溝が検出長 5.8 m、幅 0.2 ～ 0.5 m、検出面からの深さは 0.06 mを測る。埋土は 577 溝が褐灰色中砂混じり極細砂の上層と、灰白色中砂の下層からなる。578 溝の埋土は褐灰色細砂混じりシルトブロックとにぶい黄橙色細砂ブロックからなる。遺物は出土していない。

579 ～ 581 溝 (図 125)　調査区南部、20 A -7・8 h 区に位置する 3 条の溝である。579・580 溝が北東－南西方向、581 溝がほぼ東西方向である。規模は 579 溝が検出長 2.9 m、幅 0.4 ～ 0.5 m、検出面からの深さ 0.07 m、580 溝が検出長 6 m、幅 0.6 ～ 0.7 m、検出面からの深さは 0.06 m、581 溝が検出長 5.7 m、幅 0.35 m、検出面からの深さは 0.04 mを測る。埋土は、シルト混じり細砂や、シルト混じり中砂 (579・580 溝)、中砂混じりシルト (581 溝) からなる。遺物は出土していない。

582・583 溝 (図 126)　調査区南部の南端、20 A -7・8i 区で確認した 2 条の溝である。いずれも北西－南東方向の溝であり、規模は 582 溝が検出長 6.3 m、幅 0.7 ～ 1.8 m、検出面からの深さ 0.09 m、583 溝が検出長 7 m、幅 1.1 ～ 1.7 m、検出面からの深さ 0.06 mを測る。埋土は 582 溝が灰褐色極細砂と細砂混じりシルト、583 溝が褐灰～黒褐色極細砂混じりシルトであった。遺物は出土していない。

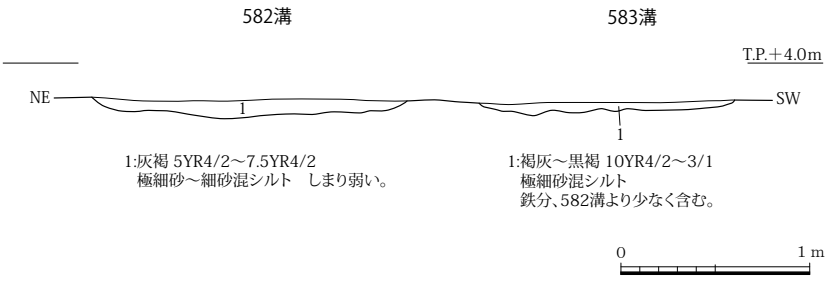


図126　第11面　582・583溝断面図（S＝1：40）

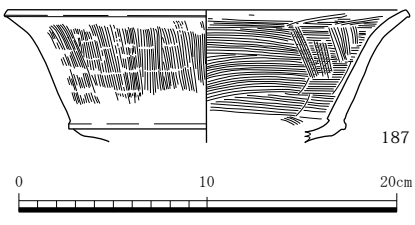


図127　第11層出土遺物実測図（S＝1：4）

584 杭列 (図 106)　調査区南西部、１Ａ -1h・20 Ａ -10g 区で検出した。杭は合計で 24 本残存し、北東－南西方向に並び、長さ約 20 mを測る。各杭間の間隔は 0.7 ～ 1.5 mを測る。

第 11 層出土遺物 (図 127)　弥生時代中期から後期、庄内式期までの遺物の細片が出土した。その中で図化できたものは、庄内式期の高坏 (187) のみであった。　(飯田　井西)

第 12 面

当該面は一部第 10 層を除去した段階で検出されたが、概ね第 11 層を除去して検出した面で、既往の調査で第 11b 層上面と呼称される面に相当する。第 12 面の基盤層である第 12 層 (既往の第１１b 層) は、第 13 面 (いわゆる第２黒色粘土層上面・既往の第 12 面・弥生時代中期後葉) を覆う洪水堆積層で、層厚は調査区北東部で 1.6 m、南東部で 0.7 m、北西部で 0.8 m、南西部で 1.0 mと非常に厚い堆積をしていた。基本層序でも述べたが、断面観察の結果、洪水堆積層の中でも３枚の安定した面が確認できたこと、その中で第 12 層によって完全に埋没してしまう第 13 面 646 流路の埋没状況が追えたことなどから、それぞれ第 12 － 1 ～３面として調査を行った。

第 12 － 1 面 (図 128)

当該面は、第 11 層が微高地を形成している調査区北東部の一部を除いて堆積しており、それを除去して検出した洪水砂層の最終堆積層上面である。遺構は調査区南半部で検出された。検出された遺構は土坑１基、落ち込み２基である。

639 土坑 (図 129、130)　20 Ａ -7h 区、638 落ち込みが屈曲する X= － 150,075、Y= － 33,965 付近で検出した。638 落ち込みを切る。規模は直径 0.6 m、深さ 0.5 mの円形で、埋土は上下５層に分層でき、１層目と４層目は第 13・14 層の偽礫を含むが、２・３層目には木片を含む有機物の堆積がみられた。

637 落ち込み (図 129・図版 35)　１Ａ -1h ～ 20 Ａ -8i 区で検出した。調査区の南東部から西北西方向に溝状に延びるもので、西端部は Y= － 34,010 付近で収束する。規模は幅 3.1 ～ 4.6 m、深さ 0.3 ～ 0.6 mを測る。遺物は弥生土器の壺 (188・189)、甕 (190 ～ 193) などが出土した。いずれも弥生時代後期に属する。

638 落ち込み (図 129、130・図版 35)　637 落ち込みの北東約 17 m、20 Ａ -8f ～ 20 Ａ -7h 区で検出した。南東－北西方向にはしり、Y= － 33,980 付近で収束する。規模は幅 2.5 ～ 5.5 m、深さ 0.2 ～ 0.5 mを測る。また、落ち込みの東端部は幅 0.5 m、深さ 0.1 mとなって南西方向に屈曲して 637 落ち込みに繋がる。遺物は弥生土器の壺 (194)、甕 (195 ～ 198) などが出土した。弥生時代後期に属する。

なお、この２基の落ち込みは、洪水堆積の最終埋没段階に流れた自然流路の痕跡と考えられる。

第 12 － 2 面（図 128）

当該面は、調査区南東部および西半部に堆積する第 12 － 1 層を除去して検出した。第 12 － 2 層の灰白色極粗砂層を基盤層とする。検出した遺構は土坑・杭群などである。土坑は 20 Ａ -7・8e 区で３基 (640 ～ 642 土坑)、20 Ａ -8g 区で１基 (645 土坑) 検出された。

640 土坑 (図 131)　20 Ａ -8e 区で検出した。直径 0.6 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は２層で上層には偽礫が含まれるが、下層はラミナがみられる。遺物の出土はなかった。

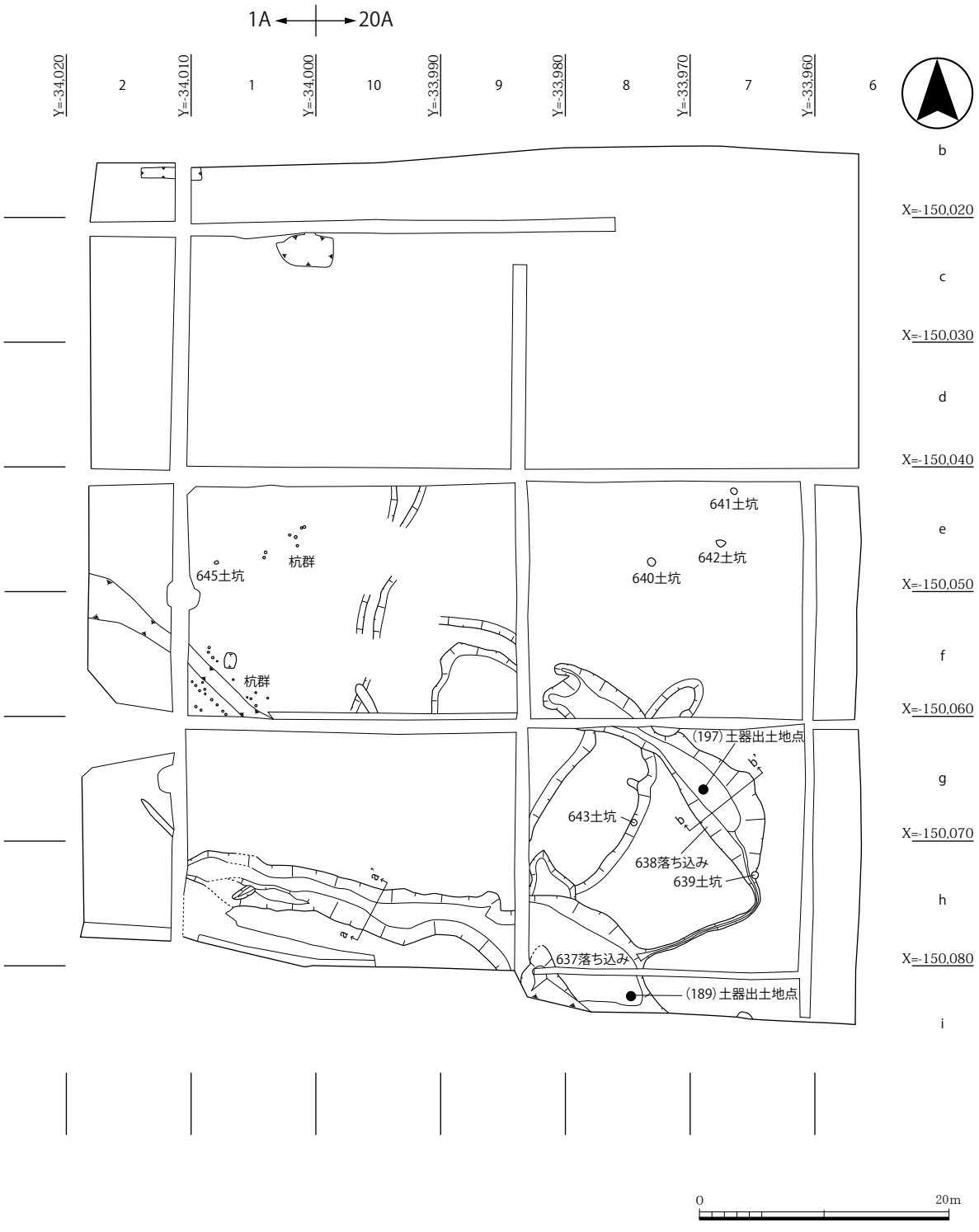
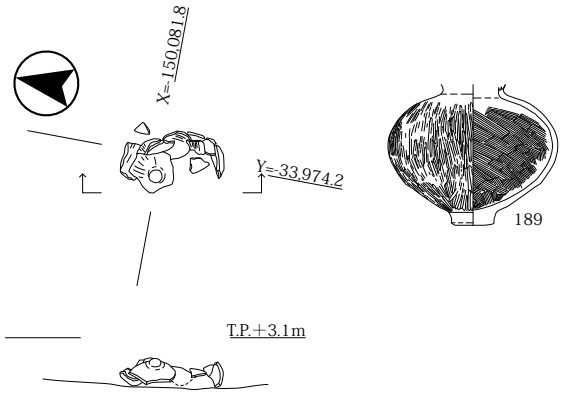
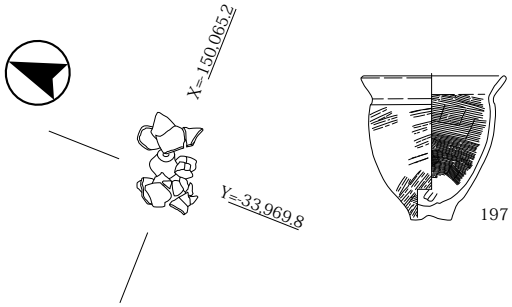


図128　第12－1・2面　全体図（S＝1:500）

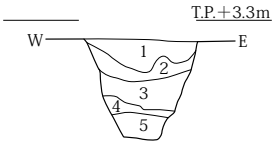
637落ち込み土器出土状況



638落ち込み土器出土状況

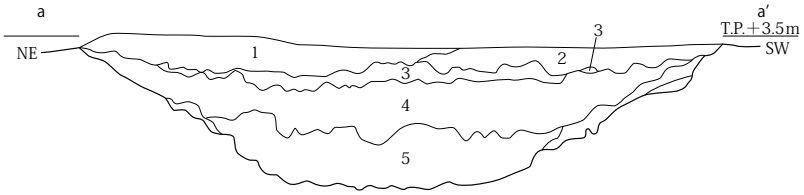


639土坑



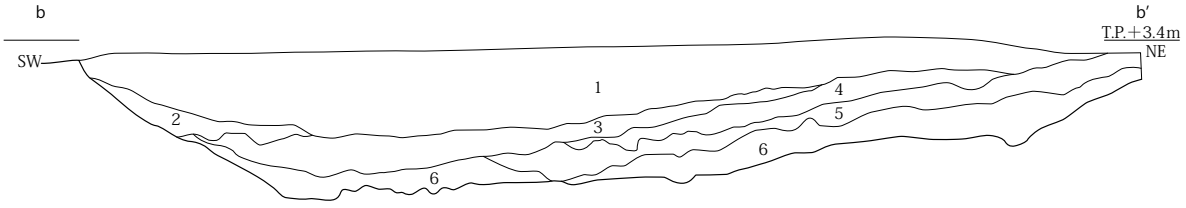
1:青灰～灰 10BG5/1～N4/0 微砂混シルト
　緑灰 5G5/1 微砂～偽礫入る。
2:灰 N4/0 シルト～微砂　木片等の有機物を少量含む。
3:灰～オリーブ黒 10Y4/1～3/1 微砂混粘質シルト
　木片等の有機物を2より多く含む。
4:灰～オリーブ黒 10Y4/1～3/1 偽礫混シルト～微砂
5:灰 7.5Y5/1 粘質シルト

637落ち込み



1:黄灰～にぶい黄橙 2.5Y5/1～10YR6/4
　シルト～粗砂
2:灰オリーブ 7.5Y5/2 シルト～中砂
3:灰～青灰 N4/0～5B5/1 極細砂～細砂混粘質シルト
4:青灰～灰 5B5/1～N4/0 極細砂～中砂混シルト
　粗砂僅かに含む。
5:5PB4/1～5B4/1 極細砂～中砂混シルト
　4より極細砂～中砂多く含む。木片含む。

638落ち込み



1:上部 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト～細砂　中礫～細礫僅かに含む。
　鉄分下部より多く含む。しまり強い。
　下部 灰オリーブ 7.5Y5/2 極細砂～中砂より多く含む。
2:オリーブ灰 2.5GY5/1 シルト～中砂
3:灰 10Y5/1 極細砂～細砂混シルト　細礫僅かに含む。
4:灰白～灰オリーブ 5Y7/2～6/2 極細砂～細礫
5:灰 10Y5/1 シルト～極細砂　下部で細礫～中礫含む部分有り。
6:灰 7.5Y6/1 シルト～粗砂　灰 10Y4/1 偽礫が見られる。

図129　第12－1面　637・638落ち込み、639土坑平・断・立面図（S＝1:20・1:40）

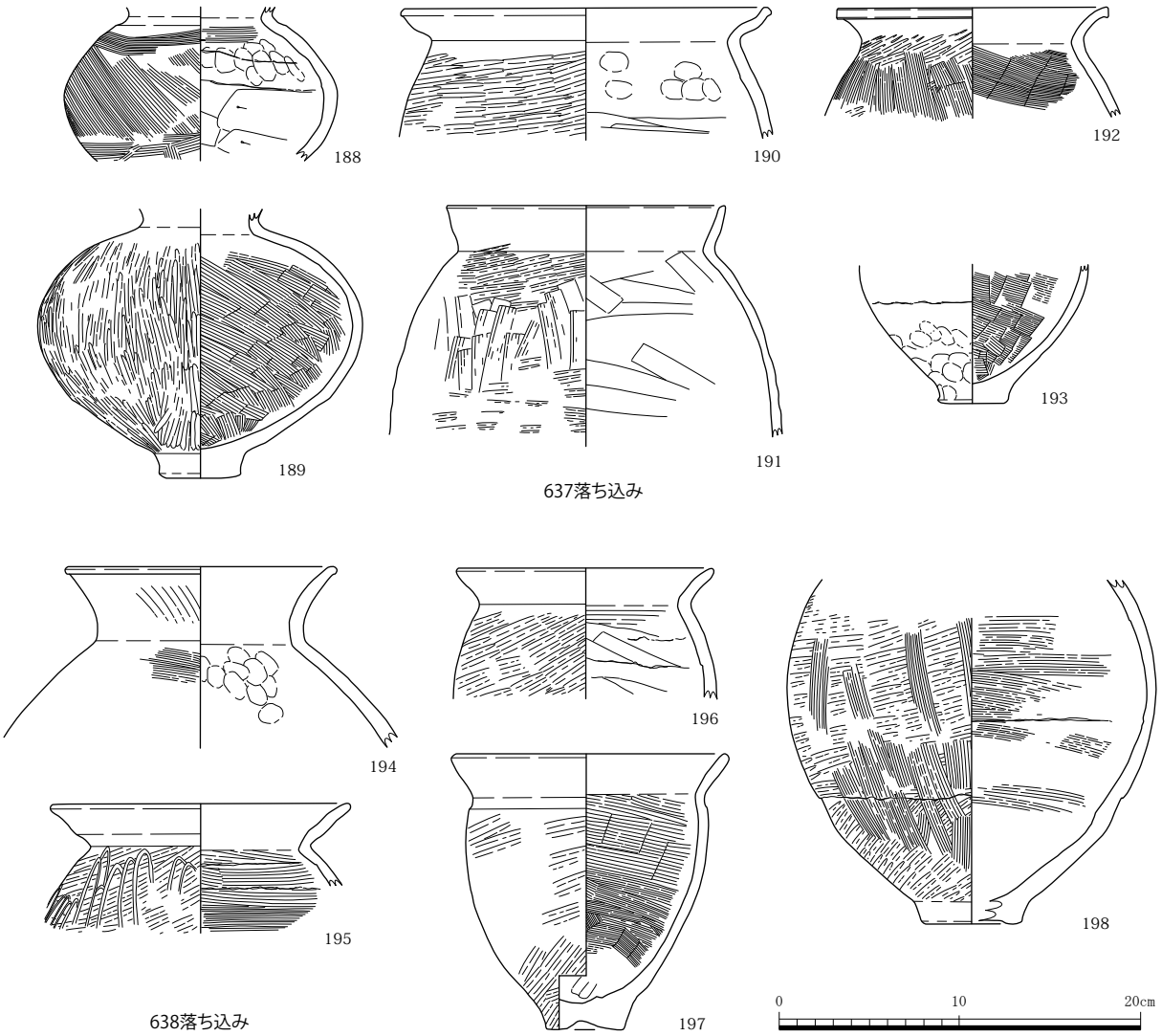


図130　第12－１面　637･638落ち込み出土遺物実測図（S＝1：4）

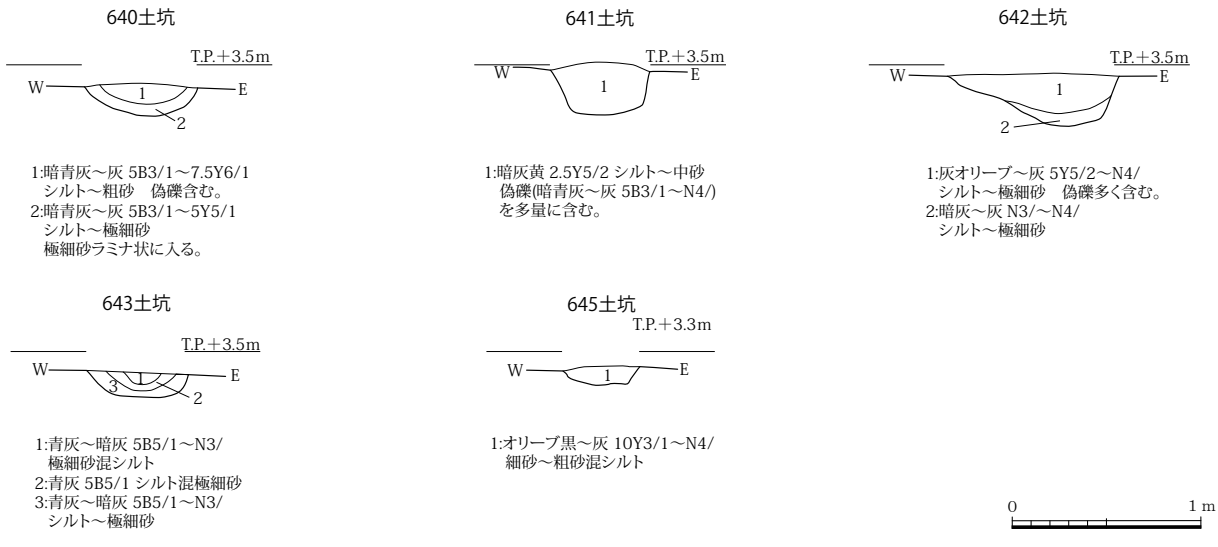


図131　第12－２面　640～643･645土坑断面図（S＝1：40）

641 土坑 (図 131)　20 A -7e 区で検出した。直径 0.55 m、深さ 0.25 mを測る。埋土は 1 層で偽礫を多量に含む。遺物は弥生時代後期の甕底部片などの細片が出土したが、図示しえなかった。
642 土坑 (図 131)　20 A -7e 区で検出した。東西方向に長軸をもつ不整楕円形で、長径 0.9 m、短径 0.5 m、深さ 0.3 mを測る。埋土は 2 層で、上層は偽礫を多量に含む。遺物の出土はなかった。
643 土坑 (図 131)　20 A -8g 区で検出した。直径 0.5 m、深さ 0.15 mを測る。遺物の出土はなかった。
645 土坑 (図 131)　1 A -1e 区で検出した。直径 0.4 m、深さ 0.1 mを測る。遺物の出土はなかった。
杭群 (図 128)　1 A -1e・1f 区の 2 箇所でみつかったが、性格は不明である。検出した位置から第 10 面の 464 溝に関連する杭群とも考えられる。

第 12 － 3 面

第 12 － 2 層を除去して検出した。当該面の基盤層である第 12 － 3 層は第 13 － 1 面を覆う自然堆積層であることから、第 12 － 3 面は第 13 － 1 面の遺構の影響を受けた凹凸が認められたものの、当該面上において遺構は検出されなかった。

第 12 層

前述したが第 12 層は第 13 － 1 面で検出した 646 流路の氾濫堆積物によって構成されており、遺物の出土は少なかった。出土した遺物は弥生時代前期から後期の壺・甕の底・体部片やサヌカイト剥片などであるが、細片のため図化しえなかった。

第 13 － 1 面（図 132・図版 14、15）

弥生時代中期後葉の遺構面である。当該遺構面は調査区の西側を南西から北東方向にはしる流路と堰の痕跡、 4 条の溝、高まり、さらに水田域とそれに伴う水口などを検出した。地形は調査区南東部が標高は T.P. ＋ 3.0 m前後で最も高く、北に向かって標高を減じており、調査区北側の水田を確認した箇所で標高は T.P. ＋ 2.5 m前後であった。

調査区西半では、南西から北東方向にはしる 646 流路を確認した。この流路の西側では、流路にほぼ直交して接続する 649 溝 (05 － 2 調査区 289 溝) とそれに伴う 655 高まり、さらに 657 高まりに並行してはしる 666 高まり (05 － 2 調査区 287 畦畔) を検出した。

流路より東側では、溝、水田畦畔、水口、高まりなどを検出した。665 溝は調査区の南東部を 646 流路とほぼ並行してはしる。水田は調査区北東部の 658 高まり、660 高まり、663 高まりに囲まれた区域で検出された。調査区南半中央部では 646 流路から取水して水田域に水を送るための 648 溝や、659 高まり、660 高まり、661 高まりによって「コ」字状に囲まれた微高地部、さらにその微高地部を南北方向にはしる 676 溝を検出した。665 溝より東側では南北方向にはしる 686 高まりを検出した。
水田域 (図 132)　調査区の北東部で 658 高まり、660 高まり、663 高まりに囲まれた範囲で水田面とそれに伴う畦畔 (670・671・678 畦畔) を検出した。畦畔は 658・663 高まりと並行して北東－南西方向にはしる幹線畦畔とそれに直交する枝線畦畔が検出された。したがって当調査区内においては 4 筆の田面を検出した。但し、畦畔の交点付近は撹乱によって削平を受ける。670・671・678 畦畔の規模はいずれも上幅 0.15 ～ 0.2 m、下幅 0.5 m、高さ 0.1 mを測る。幹線畦畔を挟んだ北西側の水田域は 648 溝から、南東側の水田域は 672 水口から取り込んだ水を利用したと考えられる。各水田面の高さ

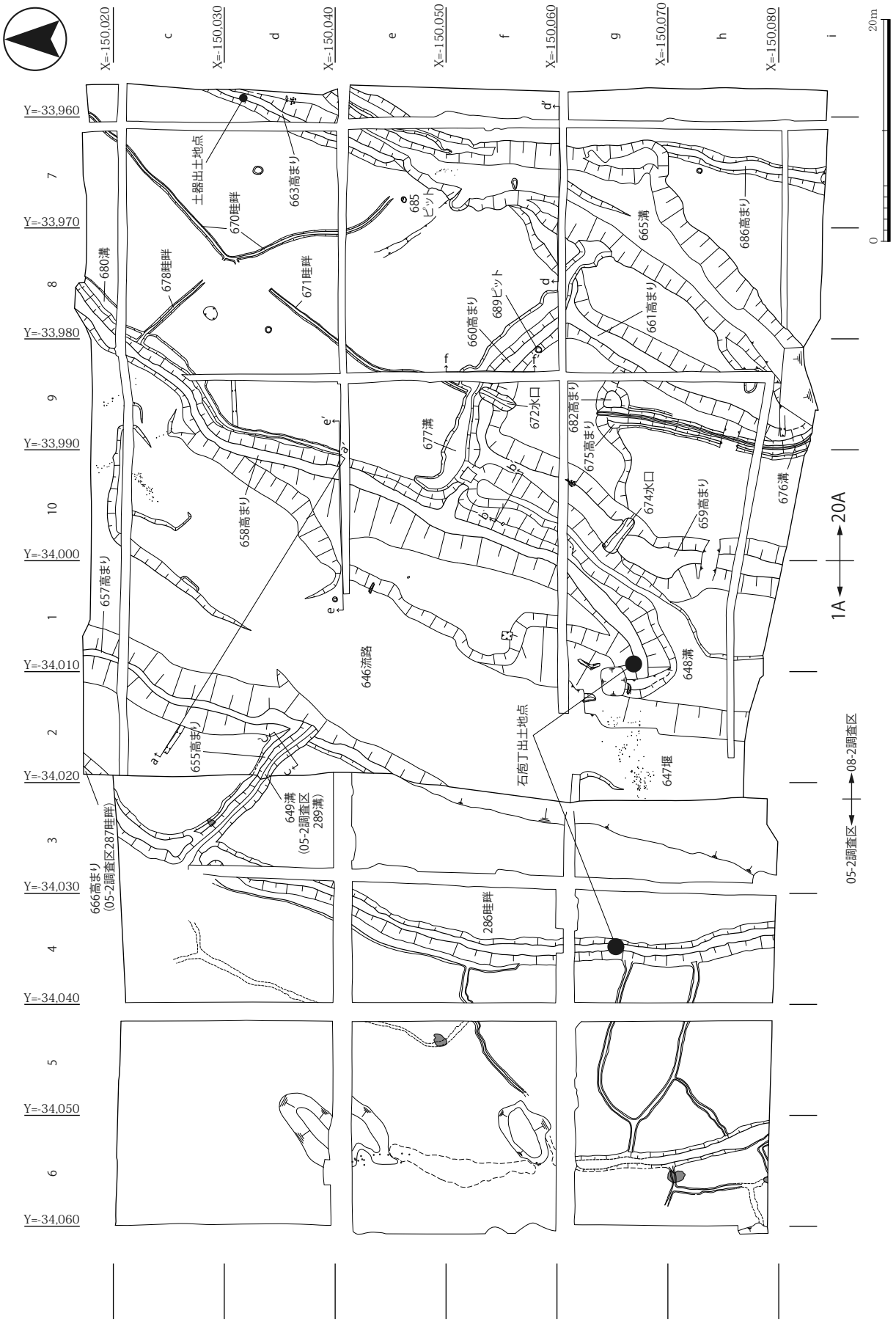


図132　第13－1面　全体図（S＝1：500）

は南の 1 筆が T.P. ＋ 2.56 ～ 2.61 m、東の 1 筆で T.P. ＋ 2.42 ～ 2.61 m、西の 1 筆で T.P. ＋ 2.46 ～ 2.59 m、北の 1 筆で T.P. ＋ 2.44 ～ 2.55 mを測る。

657・658 高まり (図 133 ～ 135・図版 36)　646 流路の両岸に取り付く高まりである。657 高まりの規模は、場所によって異なるが概ね幅 5.5 m、高さ 0.3 mを測る。一方、658 高まりの規模は、場所によって異なるが概ね幅 4.2 m、高さ 0.5 mを測る。この 658 高まり盛土中から石庖丁 (199・200)、石棒 (201) が出土した。

石庖丁 (199) は 1 個体の石庖丁が半截された状態で出土した。石庖丁の右半分は 658 高まり 1 A -1g 区から、左半分 (05 － 2 調査　図 52 － 135) は西側の対岸部に位置する 286 畦畔 (08 － 2 調査区 666 高まり) 内の 1 A -4g 区から出土した。 1 個体の石庖丁が 2 片に割られ、646 流路を挟んだ場所から出土したことは特筆される。石棒 (201) は結晶片岩製で、基部を欠く。残存長 10.0 ㎝、最大幅 4.3 ㎝、最大厚 2.5 ㎝を測る。重さは 142.5 g である。

660 高まり・677 溝 (図 133)　20 A -8 ～ 10e・f 区で検出した。660 高まりは南東－北西方向にはしる高まりである。660 高まりの規模は幅 2.2 ～ 3.2 m、高さ 0.2 ～ 0.4 mを測る。660 高まりの上には、676 溝や 674 水口から取り込んだ水を北東側に広がる水田域に送るための 672 水口が設けられている。677 溝は 660 高まりの北裾部に取り付く。溝の規模は幅 1.5 ～ 2 m、深さ 0.1 ～ 0.15 mで断面逆台形状を呈する。この溝は 648 溝や 672 水口から取り込んだ水を一旦受けて、溝の北東側に広がる水田域へと給水するための溝と考えられる。677 溝内からは弥生土器片が出土したが、いずれも細片で図示しえなかった。

666 高まり (05 － 2 調査区 287 畦畔)　調査区の北西隅 (1 A -2b 区) で検出された。657 高まりの西約 10m の地点を 657 高まりと並行してはしる。既往の調査成果によると、666 高まりは 05 － 2 ・07 － 2 調査区に広がる水田域を区画する高まり (畦畔) である。

663 高まり (図 136、137・図版 15、35)　20 A -6d、7d・e 区で検出した。665 溝の左岸に取り付く高まりである。規模は幅 1.45 m、高さ 0.1 mを測る。高まり上の X= － 150,031.8、Y= － 33,958.3 地点で弥生土器鉢 (202) が伏せられた状態で出土した。鉢 (202) は内弯しながら立ち上がり、口縁端部に面を作る。体部外面に縦方向のヘラミガキを施し、底部外面にもヘラミガキを施す。内面はハケメの後、暗紋状に縦方向にヘラミガキを施す。弥生時代中期後葉の所産である。

647 堰　646 流路内の 1 A -2g 区で検出された。杭の上部構造は壊されて失われていたが、流路底部に杭跡が残されていた。杭跡の位置から考えて、646 流路から 648 溝へ取水する際のダムアップを図るために打設されたと考えられる。

648 溝 (図 138・図版 15)　調査区の南西部に位置し、X= － 150,072、Y= － 34,009 付近を起点として 646 流路から分岐して北東方向にはしる溝で、幅 4.1 m、深さ 0.9 mを測る。溝の北東端部である X= － 150,053、Y= － 33,995 付近で 660 高まりと 658 高まりが陸橋状に張り出して水口状を呈する。引き込まれた水は 660 高まりの北側に接する 677 溝に落とし込んだ後、その先にある水田域に水を送ったと考えられる。なお、溝の底場レベルと水口状の陸橋部との比高差は 0.2 mを測る。溝内から弥生土器の細片が数点とサヌカイト剥片が 1 点出土した。

649 溝・655 高まり (図 138・図版 15　05 － 2 調査区 289 溝)　1 A -2d 区で検出された 649 溝は 646 流路から分岐し、ほぼ直交して南東－北西方向に延びる。649 溝の規模は、幅 1.7 m、深さ 0.3 mを測り、調査区外へ延びる。655 高まりは 649 溝の北肩部に取り付くが、洪水による削平を受けて

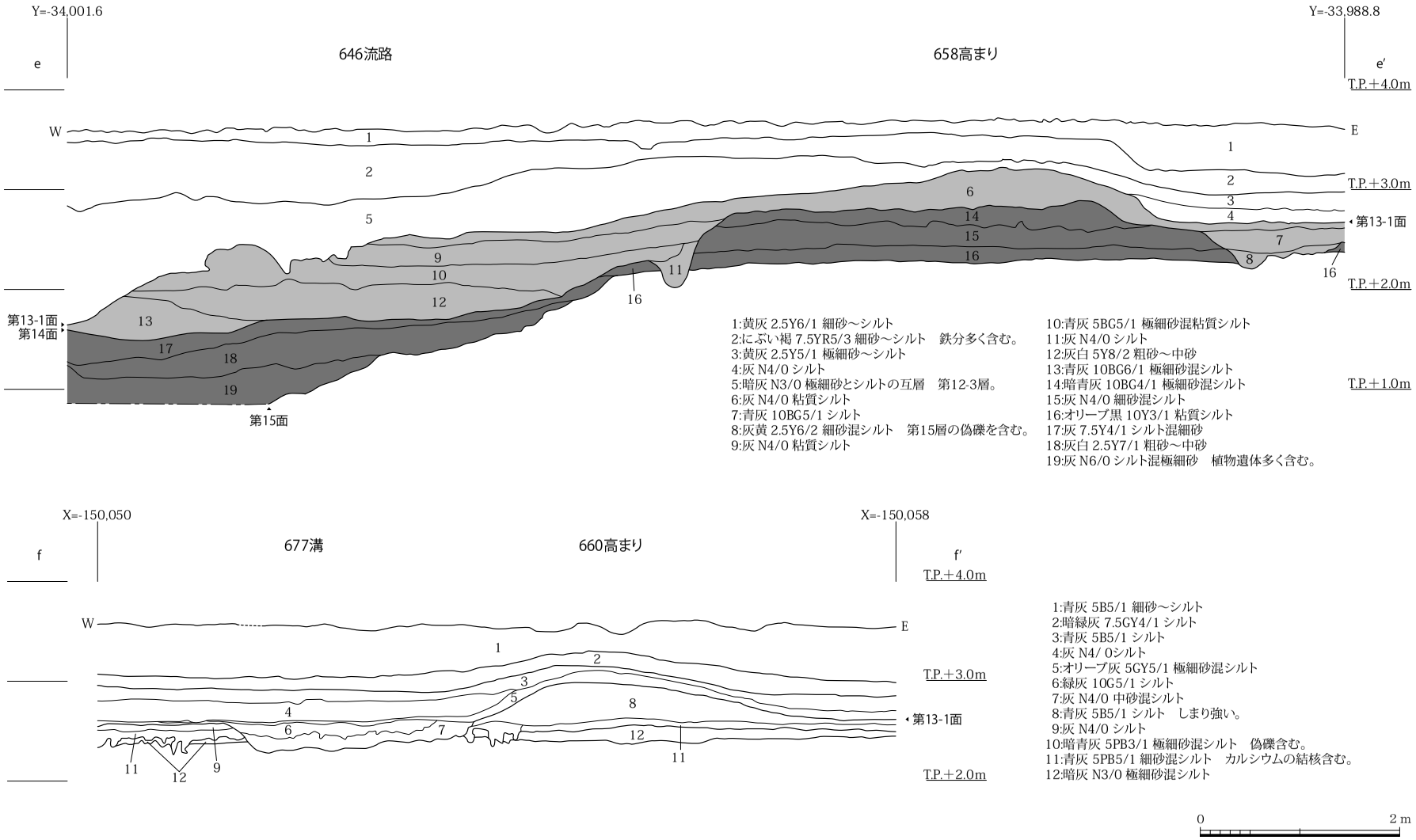


図133　第13－1面　646流路・658・660高まり・677溝断面図（S＝1：60）

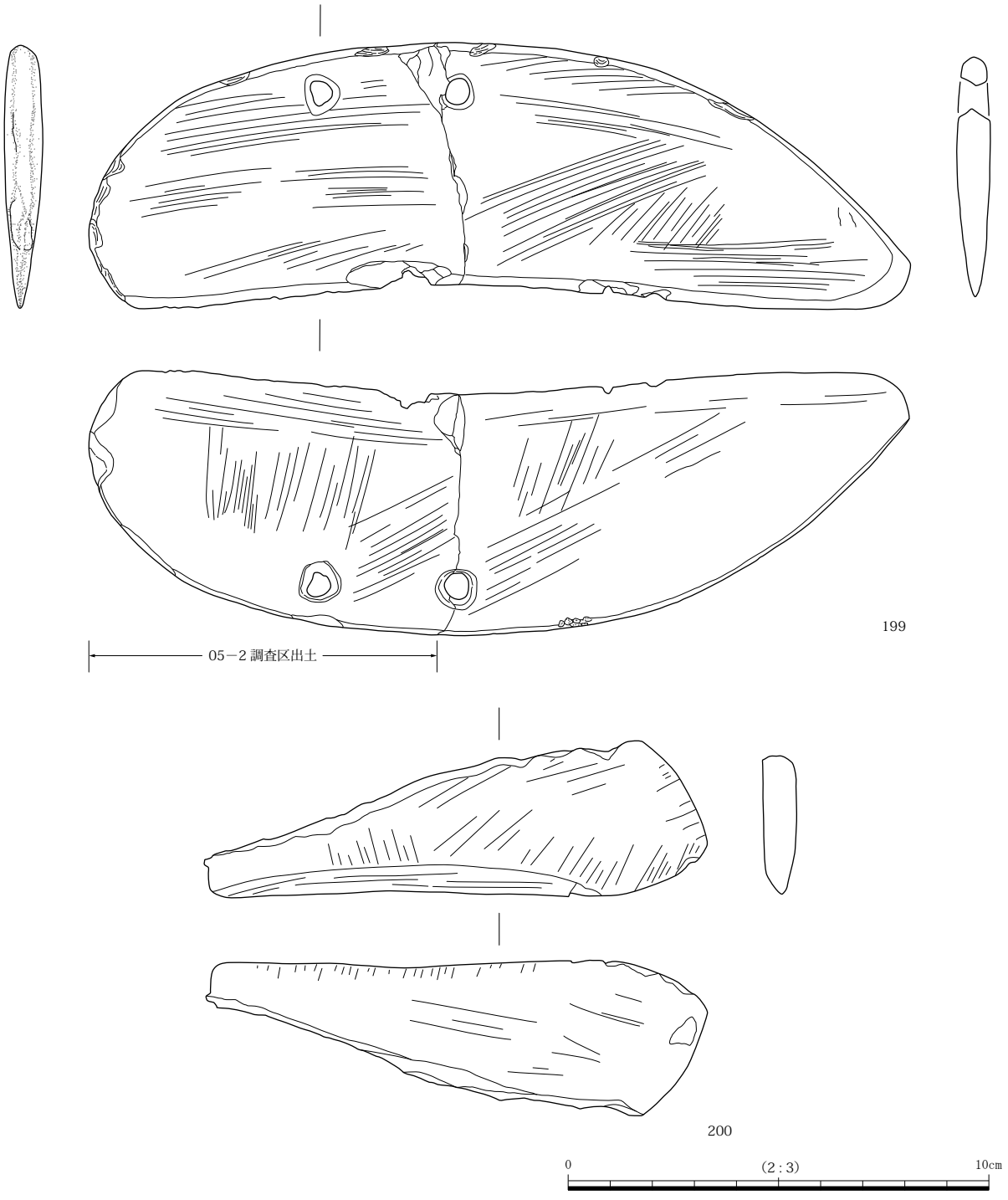


図134　第13－１面　658高まり内出土遺物実測図（1）（S＝2：3）

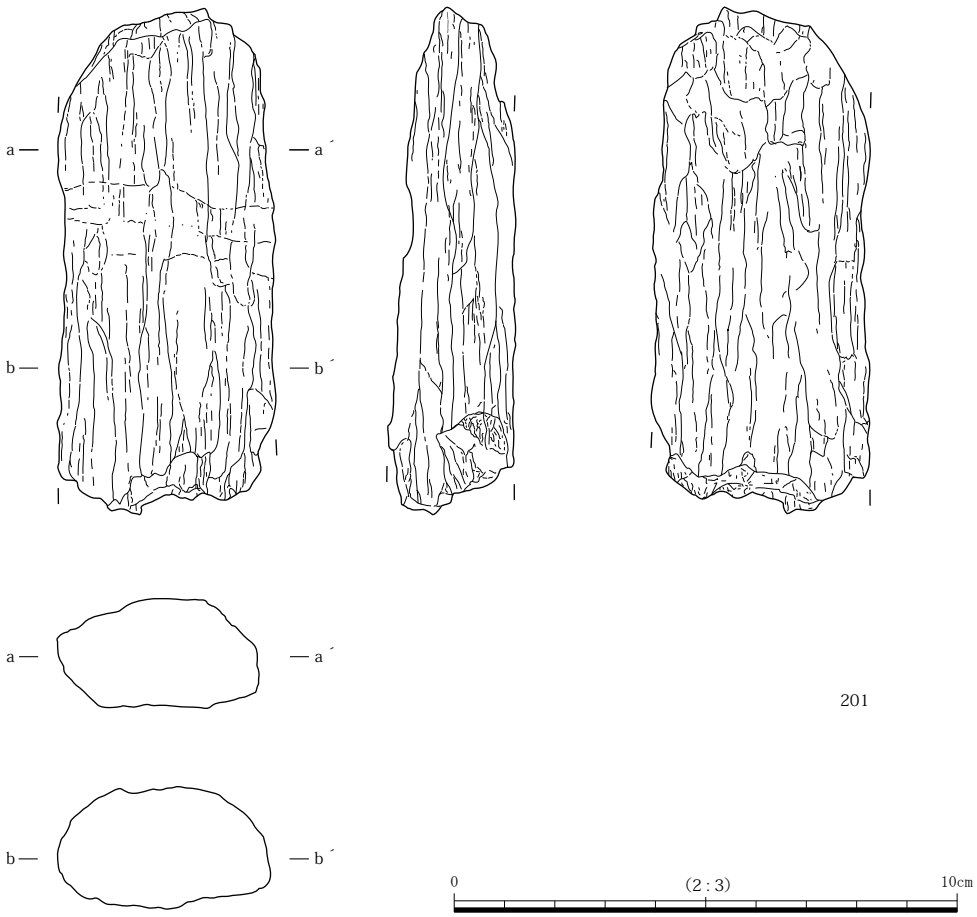


図135　第13－１面　658高まり内出土遺物実測図（２）（Ｓ＝２：３）

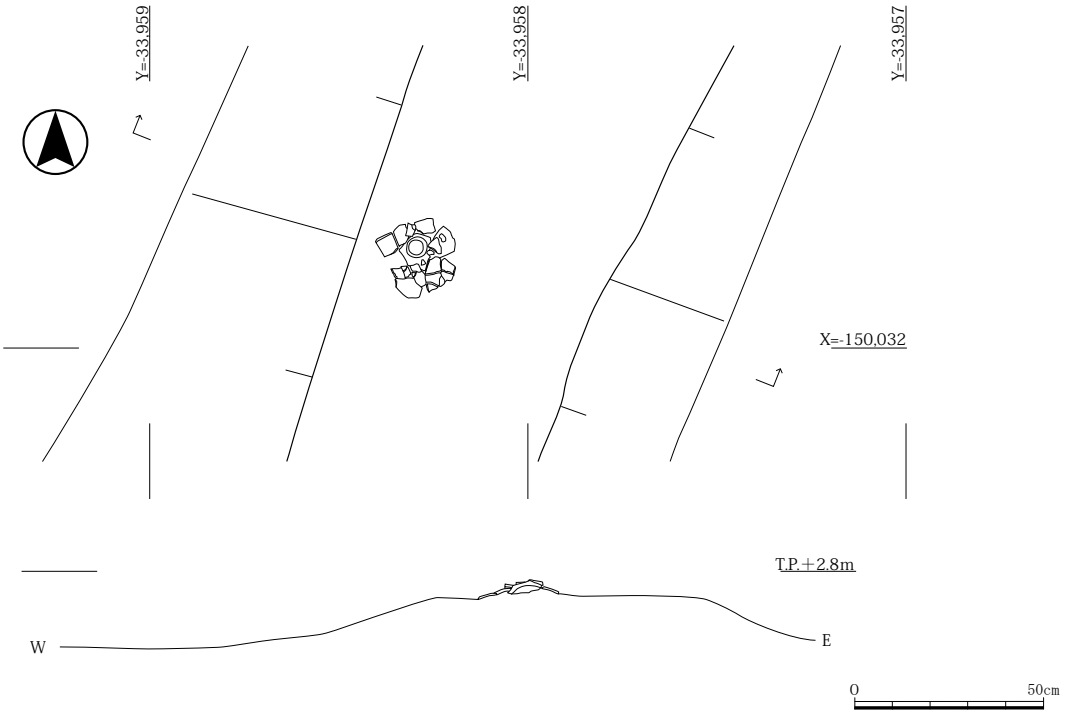


図136　第13－１面　663高まり土器出土状況図（Ｓ＝１:20）

残りが悪く、残存する幅 1.1 m、高さ 0.06m を測る。この 649 溝は 646 流路から取水し、既往の調査区 (05 － 2 ・07 － 2 調査区) で検出された水田域に水を供給するための溝である。溝内から遺物の出土はなかった。

665 溝 (図 138、139・図版 14、15)　調査区の東側を南西から北東方向にはしる溝で、初現は第 14 面 717 溝にまで遡る。規模は幅 8.4 m、深さ 1.7 mである。埋土は極粗砂で覆われており、646 流路が埋没するのと同時に埋没する。この溝は方向から考えて、南側の調査区外で 646 流路から取水し、同じく下流域に広がると考えられる水田域へ給水するために掘削されたものと推察される。溝からは弥生時代中期後葉の無頸壺 (203) や壺底部 (204)、サヌカイト製刃器 (205・206) の他に弥生土器の細片が少量出土した (図 139・図版 35、36)。無頸壺 (203) は体部外面に櫛描き波状紋と櫛描き直線紋を交互に配する。

676 溝・675・682 高まり (図 140・図版 15)　20 A -9g ～ i 区で検出した。溝の両側には 675・682 高まりが取り付くため、溝は 2 段落ちの形状を呈する。規模は高まりの上端間で幅 1.1 m、深さ 0.35 mを測るが、中端間で幅 0.3 m、深さ 0.25 mを測る。溝は調査区南端部から 661 高まりを横切るように北西方向に延び、途中 X= － 150,080、Y= － 33,990 付近で北へ向きを変えて 659・660・661 高まりに囲まれた微高地部分をはしり、X= － 150,065 付近にある比高差 0.15 mの段差部分で収束する。このことから、676 溝は南側の調査区外で 665 溝から分岐すると考えられる。676 溝内から弥生土器の細片が 1 点出土したが図示しえなかった。

685 ピット (図 141)　20 A -7e 区で検出した。直径 0.5 m、深さ 0.15 mを測る。埋土は第 12 － 3 層の中砂～シルトが堆積する。遺物は出土しなかった。

689 ピット (図 141)　20 A -9f 区で検出した。直径 0.5 ～ 0.6 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は第 12 － 3 層の粗砂～シルトが堆積する。遺物は出土しなかった。

672 水口 (図 141・図版 15)　20 A -9f 区の 660 高まり上で検出した。規模は幅 1.1 m、長さ 3.6 m、深さ 0.3 mを測り、676 溝および 674 水口を流れてきた水を 677 溝へ落とし込むためのものである。遺物は出土しなかった。

674 水口 (図 141・図版 15)　20 A -10g 区で検出した。648 溝に東接する 659 高まり上に設けられており、規模は幅 1.1 m、長さ 3.7 m、深さ 0.1 mを測る。648 溝の水を 659 高まりの東側へ水を送り込む。遺物は出土しなかった。

646 流路 (図 142、143・図版 14、35)　調査区の西端部を北東方向にはしる。流路の両岸に 657・658 高まりが取り付く。646 流路は第 18 面 (縄紋時代後期) まで遡ることが確認できたが、第 13 － 1 面段階での規模は幅約 20 m、深さ 2.2 mを測る。断面観察の結果、数回にわたって流心を変えながら埋没していった様子がみてとれる。埋土は極粗砂を主体に小礫～シルト層で、直径 0.4 mを超える流木が含まれており、大規模な流れによって埋没したことが窺われる。また、堆積層の葉理境のあちらこちらで噴砂の痕跡が認められる。遺物の出土は少なく、弥生時代中期後葉の壺 (207・208) や甕 (209) が出土した。壺 (207) は朝顔形に広がる口頸部をもつ長頸壺で、口縁下端部に刻み目を施す。

第 13 － 1 層出土遺物（図 144）　第 13 － 1 層は灰色極細砂混シルト層である。層中から弥生時代前期の壺 (210) や鉢 (211)、打欠石錘 (212) が出土したが、下層からの捲き上げによるものである。

第 13 － 2 面（図 145・図版 16）

第 13 － 1 層を除去して検出した遺構面である。土坑 5 基 (699・704・711・712・713) や、調査区の南西部で 646 流路から引き込んだ後、北東方向にはしる 3 条の溝 (687・688・709) などを検出した。断面観察の結果 3 条の溝は先後関係にあり、709 溝→ 687 溝→ 688 溝の順に掘削されたことがわかる。3 条の溝はいずれも断面逆台形状を呈し、人為的に埋め戻されている。これらの溝は 646 流路と 665 溝に挟まれた調査区内の微低地部をはしっており、646 流路から取水して、調査区外の微低地部に展開していたと推測される水田域に水を供給するために掘削されたものと考えられる。

699 土坑 (図 146・図版 16、37)　1 A -1g 区の第 13 面 658 高まり盛土を除去して検出した不整形な長楕円形を呈する。規模は長径 1.65 m、短径 0.5 m以上、深さ 0.15 mを測る。埋土に炭を多く含み、壁土状の焼土塊が多量に出土した。焼土塊は複数の大きさをもつ木や竹と思われる材が組合された痕跡を示しており、さらに焼土塊の表面上には植物繊維で編み込まれた蓆のようなものの痕跡が転写されていた。但し、壁土と考えるには厚さが均一ではなく、焼土塊を含めた土坑の性格は不明である。

711 土坑 (図 146)　20 A -7h 区で検出された。北東－南西方向に長軸をもつ楕円形の土坑で、規模は長径 2.1 m、短径 0.9 m、深さ 0.15 mを測る。遺物は出土しなかった。

712 土坑 (図 146)　20 A -7h 区で検出された。側溝によって切られたため詳細は不明であるが、不整円形の土坑で、残存する規模は南北 2.5 m、東西 1.5 m、深さ 0.4 mを測る。遺物は弥生時代中期後葉の土器細片が出土したが、図示しえなかった。

713 土坑 (図 147)　20 A -6g・h 区で検出された。北東－南西方向に軸をもつ不整形な長方形の土坑であるが、南西部は側溝により失われたが、残存長 3.7 m、幅 1.4 m、深さ 0.3 mを測る。土坑の南半部から炭・焼土が出土した (図トーン部分)。また、遺物は弥生土器の細片とサヌカイト製の刃器片が出土した。

704 土坑 (図 147)　20 A -8d 区で検出した。688 溝を切るが、688 溝と同じ方向に掘削されていた。幅 0.8 m、深さ 0.2 mを測る。弥生土器の細片と結晶片岩片が出土した。

687・709 溝 (図 147、148)　X= － 150,053、Y= － 33,996 付近を起点として 688 溝から分岐して、調査区内の微低地部を調査区北東隅に向けて延びると考えられる。X= － 150,054、Y= － 33,993 付近から南は 688 溝に切られるため、確かなことはいえないが、646 流路から分岐する溝と考えられる。

687・709 溝から弥生時代中期後葉の壺 (213 ～ 215) をはじめ、弥生時代前期の遺物 (216 ～ 222) も出土した。(213) は壺体部で外面に櫛描き直線紋を施す。(214) は広口壺で内外面ともヘラミガキを施す。(216) は壺蓋で、外面に縦方向のヘラ描き直線紋を施す。(217 ～ 219) は甕である。(220) は鉢で内外面ともヘラミガキを施す。(221・222) は打欠石錘である。(221) は結晶片岩製で短軸に、(222) は花崗岩製で長軸に抉りを入れる。

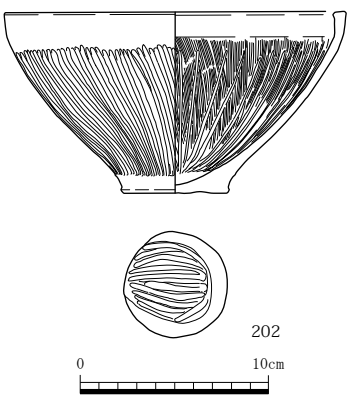
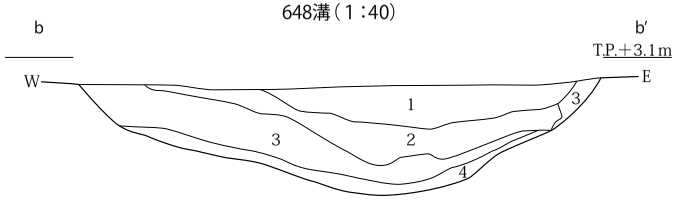


図137　第13－１面　663高まり
出土遺物実測図（S＝1：4）

688 溝 (図 147、148・図版 16)　709・687 溝と同様 X= － 150,072、Y= － 34,009 付近を起点として 709・687 よりやや東に振りながら北東方向に延びる。688 溝は途中、X= － 150,054、Y= － 33,993 付近までは第 13 － 1 面 648 溝と同じ場所をはしる。溝は断面逆台形を呈し、規模は上幅 0.8 m、

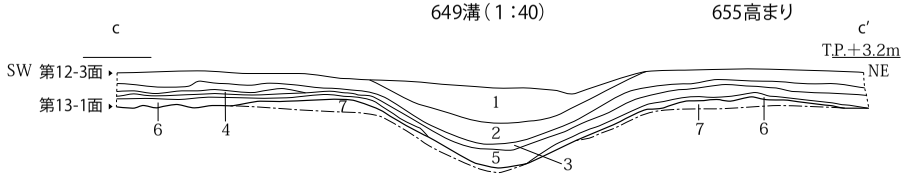
図138　第13－1面 648・649・665溝・655高まり断面図（S＝1：40・1：60）

648溝（1：40）



1:灰～緑灰 N5/0～7.5GY6/1 シルト
　有機物ラミナ見られる。
2:灰～オリーブ灰 7.5Y6/1～5GY5/1 シルト～細砂
　ラミナ明瞭。木片含む。
3:灰～緑灰 N5/0～5GY5/1　シルト 木片含む。
4:緑灰～暗灰 7.5GY6/1～N3/0 粘質シルト
　有機物多量に含む。黒色呈する。

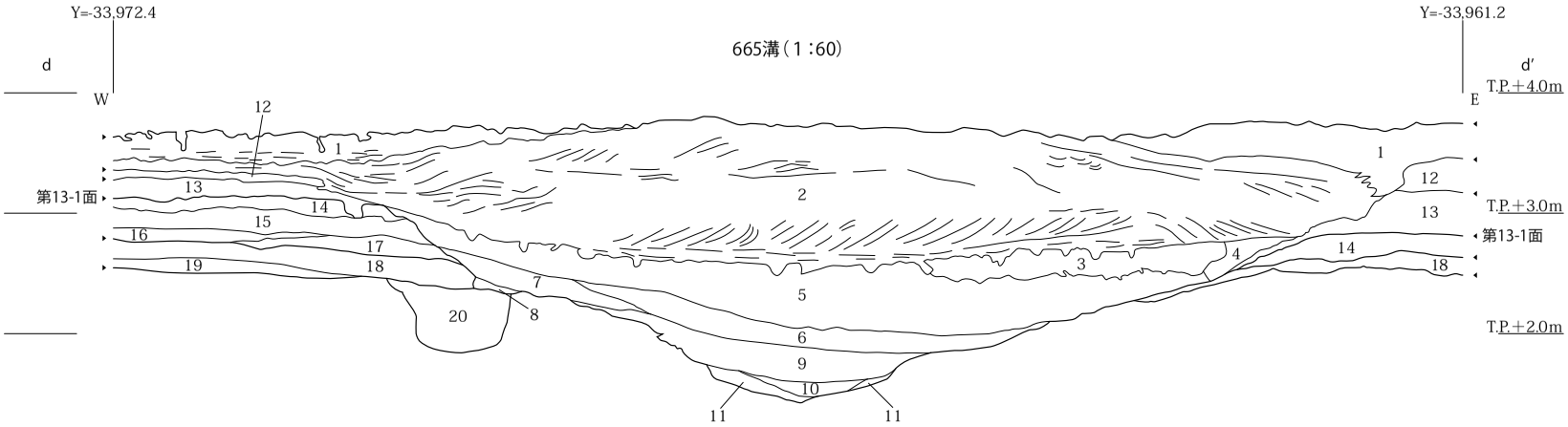
649溝（1：40）　655高まり



1:灰 10Y5/1～N5/0 シルト～細砂
　灰～オリーブ黄 5Y6/1～6/3 極細砂～細砂　ラミナ明瞭。646流路埋積土と同等か。
2:灰～青灰 N4/0～5B6/1 細砂～中砂混シルト　3より極細砂多い。
3:灰～暗青灰 N4/0～5B4/1 極細砂混シルト
4:灰～緑灰 N4/0～5BG5/1 極細砂混シルト
5:緑灰～灰 10G5/1～N4/0 シルト～細砂
6:灰～緑灰 N4/～5BG5/1 極細砂混シルト　溝底部付近では極細砂～中砂多い。
7:暗灰～灰 N3/0～4/0　第13層 646流路より東の第13層より極細砂多く含む。

0　1 m

665溝（1：60）



1:灰 N5/0 極細砂～シルト
2:灰黄 2.5y6/2 極細砂～細砂
3:オリーブ灰～灰 5GY4/1 極細砂混シルト
4:灰 N4/0 シルト
5:暗灰～暗青灰 N3/0～5BG3/1 極細砂混シルト
6:オリーブ灰～灰 2.5GY5/1～N4/0 細砂・極細砂混シルト　炭酸カルシウムの結核含む。
7:オリーブ灰 2.5GY5/1 細砂混シルト
8:暗オリーブ灰 2.5GY4/1極細砂混シルト
9:暗オリーブ灰～暗灰 2.5GY4/1～N3/0 細砂・極細砂混シルト　有機物・木片多量に含む。
10:暗オリーブ灰～暗灰 2.5GY3/1～N3/0 中砂～極細砂混シルト　有機物・木片含む。
11:青灰 5PB5/1 中砂～極細砂混シルト
12:青灰 5B5/1 極細砂～シルト
13:青灰 5B5/1 粘質シルト
14:黒 N2/0 細砂混粘質シルト
15:青灰～灰 5B5/1～N4/0 極細砂混シルト
16:青灰 10BG5/1 極細砂混シルト
17:青灰 10BG5/1 粗砂～極細砂混シルト
18:灰～灰 N4/0～5Y4/1 細砂・極細砂混シルト
19:黒褐 2.5Y3/1 極粗砂混極細砂
20：第15面 870土坑

0　2 m

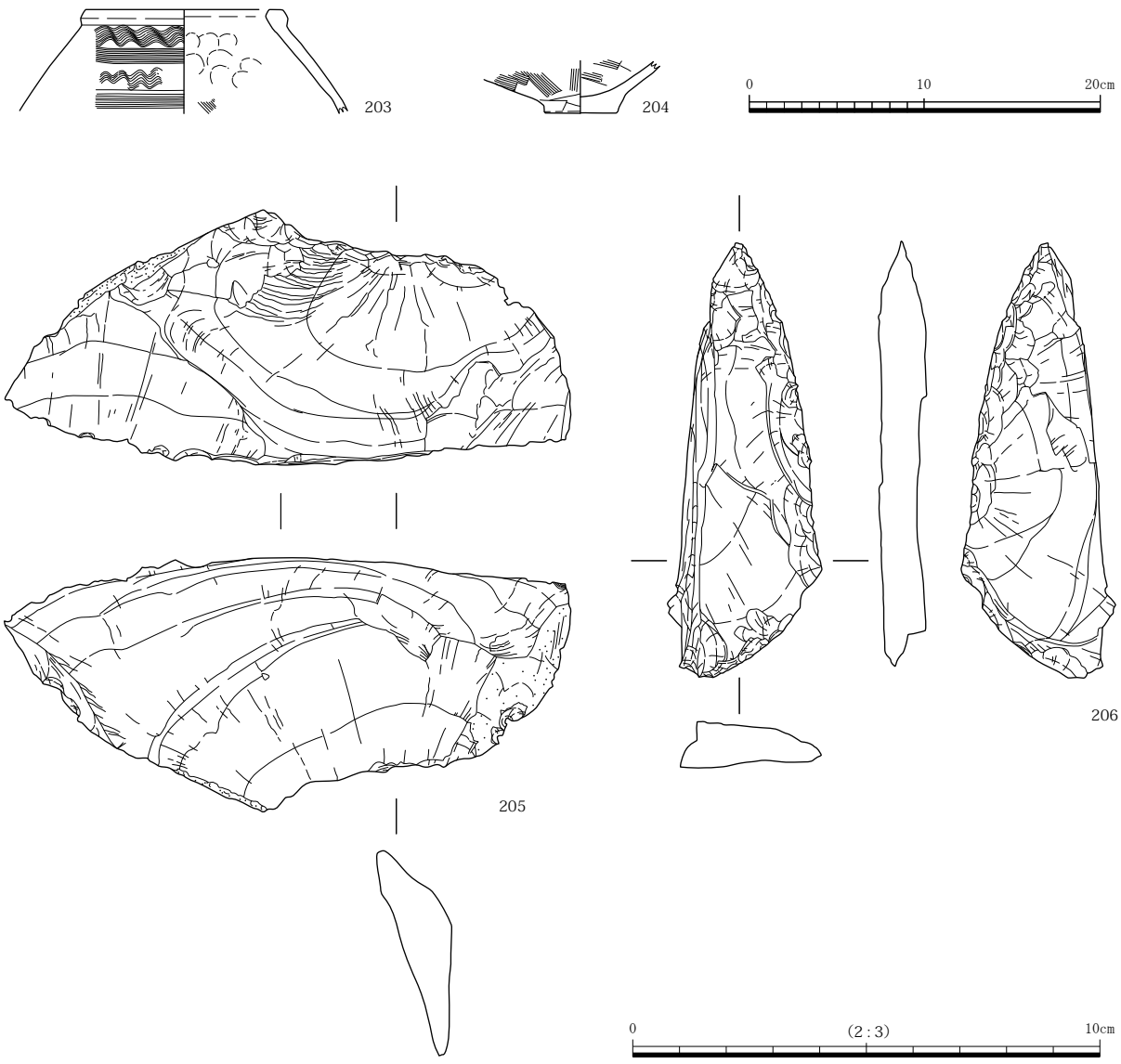


図139　第13－1面　665溝出土遺物実測図（S＝1：4・2：3）

下幅 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.6 mを測る。埋土は最下層に水成堆積層が認められるものの、d－d´断面付近より北東側は第 14 ～ 15 層由来の偽礫を含む土で埋め戻されている。d－d´断面付近より南側は、木片などの有機物を含むシルト層が堆積しており、この場所に関しては埋め戻されずに水成堆積層で埋没したことがわかる。出土した遺物は弥生時代中期後葉の壺底部 (223・224) や鉢 (225)、結晶片岩製の打欠石錘 (226) などである。なお、この 688 溝および 687・709 溝から出土した打欠石錘 (221・222・226) についてはその出土位置から、後述する第 15 面から出土した石錘群の一部が溝掘削の際に捲き上げられた可能性がある。

以上の成果から第 13 － 2 面の状況を述べると、まず、709 溝が掘削され短期間で埋め戻された後、ほぼ同様の場所に 687 溝が掘削し直される。この 687 溝も短期間で埋め戻された後に、起点を同じくするものの、やや方向を東に振りながら 688 溝が掘削される。その 688 溝も水成堆積層で埋没した X= － 150,054、Y= － 33,993 付近より北東側は掘削後、短期間で埋め戻されたが、X= － 150,054、Y= － 33,993 付近より南側は埋め戻されることなく第 13 － 1 面 648 溝へと踏襲されたものと考えら

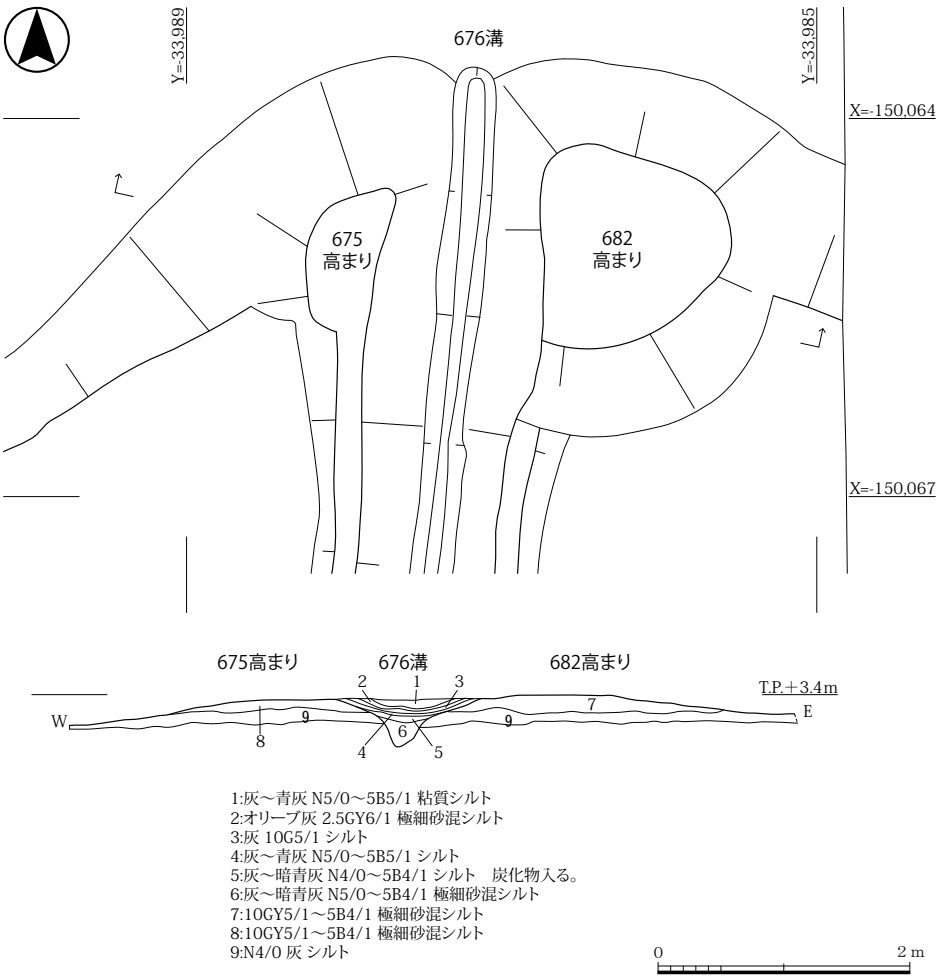
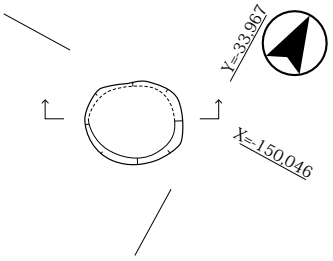


図140　第13－１面　676溝・675・682高まり平・断面図（S＝１:60）

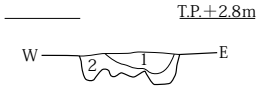
れる。なお、この埋め戻された 688 溝に沿うように第 13 面水田畦畔が構築される。よって、これら３条の溝が掘削された 13 － 2 面段階では、溝が指向する調査区外の北東側に水田域が広がっていることを推測させる。

第 13 － 1 面の成果と合わせて考えると、第 13 － 2 面段階においては当該調査区内までは水田開発は及ばず、さらなる微低地部となる北東側にまで水田開発がなされ、そこへ水を引くため結果的に３条の溝が掘削されたものと考えられる。しかもこれら３条の溝は常時水を供給するために必要とされたものではなく、短期間引水したのち埋め戻され、第 13 － 1 面段階になってようやく水田域として開発が及ぶことになる。

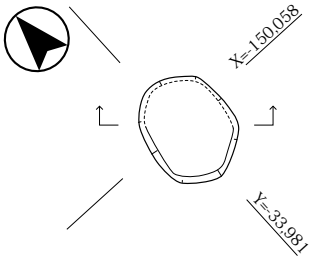
第 13 － 2 層出土遺物 (図 149)　第 13 － 2 層は緑灰～灰色シルト層である。層中から弥生時代中期中葉の壺体部 (227・228) や弥生時代前期の壺蓋 (229・230)、甕蓋 (231)、甕 (232)、安山岩製の打欠石錘 (233) が出土した。(227)・(228) 壺はいずれも外面に櫛描き直線紋と櫛描き波状紋を施す。(230) 壺蓋は体部にヘラ描き沈線を施す。



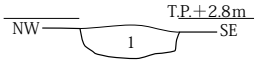
685ピット（１：40）



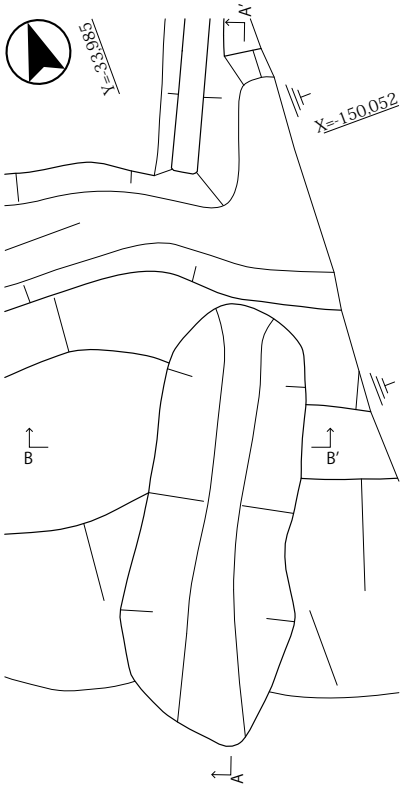
1:灰～青灰 N4/0～5PB5/1
極細砂～細砂混シルト
2:オリーブ黄～浅黄
5Y6/3～7/3 細砂～中砂



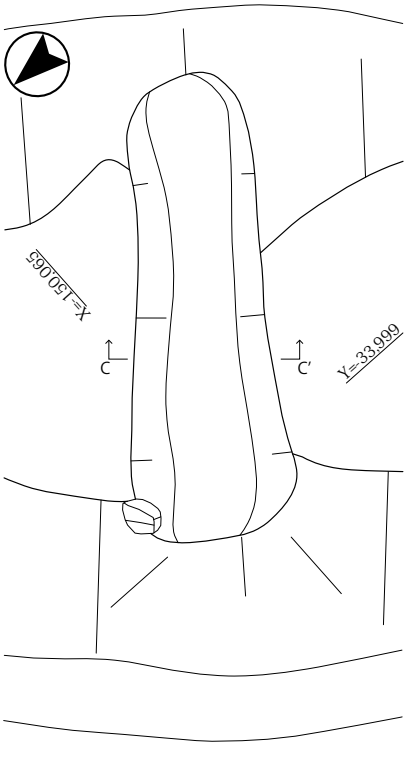
689ピット（１：40）



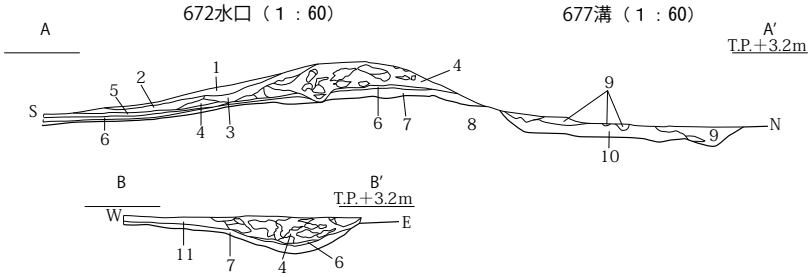
1:灰 7.5Y5/1 シルト～粗砂



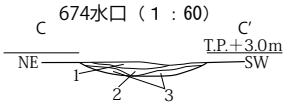
672水口（１：60）



674水口（１：60）



677溝（１：60）



1:緑灰～青灰 10GY5/1～5B5/1
極細砂混シルト
2:灰～青灰 N5/0～5B5/1 シルト
3:灰～暗灰 N4/0～3/ シルト

1:灰～青灰 N5/0～5BG5/1 シルト
2:灰～暗青灰 N5/0～5BG4/1 シルト
3:灰～暗青灰 N4/0～5BG4/1 シルト
上部に有機物ラミナ。
4:灰 N4/0 極細砂混シルト　偽礫を多く含む。
5:緑灰 5G5/1 極細砂混シルト
6:緑灰 10G5/1 極細砂混シルト
7:灰～緑灰 N5/0～7.5GY5/1 シルト
8:暗灰～灰 N3/0～4/0 シルト
9:灰～青灰 N4/0～5B5/1 偽礫
＋暗青灰 5B4/1 偽礫　カルシウム多い。
＋緑灰～青灰 5G5/1～5B5/1 偽礫
10:緑灰 10G5/1 偽礫
＋灰～青灰 N4/0～5B5/1 偽礫
11:灰～青灰 N5/0～5PB6/1 極細砂混シルト
660大畦畔の上部に盛られた土。

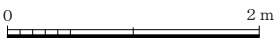


図141　第13－１面　685・689ピット、672・674水口、677溝平・断面図（S＝１:40・１:60）

第 14 面（図 150・図版 16）

第 14 面は、弥生時代中期前葉の遺構面で、第 13 － 2 層を除去して検出した。標高は T.P. ＋ 2.2 m ～ T.P. ＋ 2.7 mである。地形的には 691 流路の北西側と 717 溝の南東部に微高地が広がり、691 流路と 717 溝の間は鞍部となって微低地が南西－北東方向に延びる。検出した遺構は、流路 1 条 (691)、溝 6 条 (692・693・695・716・717・718)、土坑 2 基 (696・697)、溝状土坑 1 基 (719)、落ち込みなどである。また、第 14 面の直上、X= － 150,019、Y= － 33,970 地点で弥生時代中期前葉の甕 (234) を検出した (図 151)。検出した高さは T.P. ＋ 2.4 mを測る。

692・693 溝 (図 152　05 － 2 調査区 406 溝)　691 流路の西側微高地の上を、691 流路と並行してはしる。 2 条の溝は切り合い関係にあり、692 溝が 693 溝を切る。溝は調査区西端付近で別れるが、X= － 150,030 ライン付近から北へは重複してはしる。規模はどちらも幅 0.3 m、深さ 0 .15 mを測る。692・693 溝共に遺物の出土はなかった。

695・696 溝 (図 152)　20 A -2d・e 区で検出した。691 流路西肩部の縁辺をはしる。695 溝と 696 溝は切り合い関係にある。695 溝は幅 0.3 m、深さ 0.1 m、長さ 5 mを測る。696 溝は落ち込み状の溝で幅 1.4 m、深さ 0.3 m、長さ 5 mを測る。いずれも遺物の出土はなかった。

716 溝 (図 151、152)　691 流路の右岸側の自然堤防東側裾部をはしる。規模は幅約 2 m、深さ 0.4 m を測るが、溝は浅い皿状に掘削した後、溝の底を幅 0.3 m、深さ 0.2 mの箱溝状に掘削する 2 段おちの構造をもつ。溝から結晶片岩製の打欠石錘 (235) が出土した。

718 溝 (図 152)　調査区の北東隅 20 A -6b･c 区で検出した。南東－北西方向にはしる溝で、規模は幅 0.9 m、深さ 0.2 mを測る。遺物の出土はなかった。

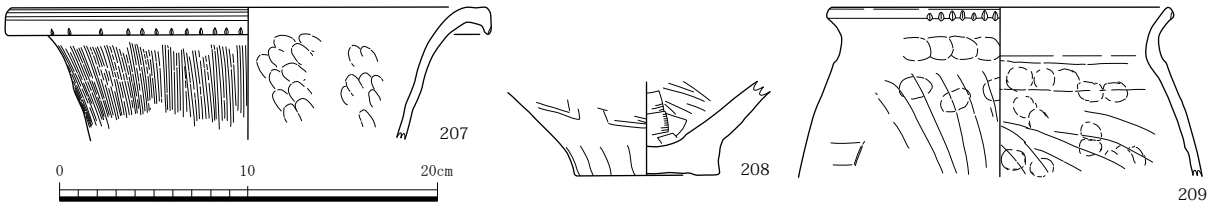


図142　第13－ 1 面　646流路出土遺物実測図（S＝1：4）

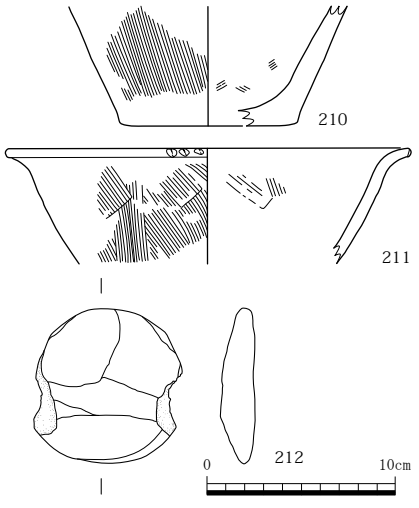
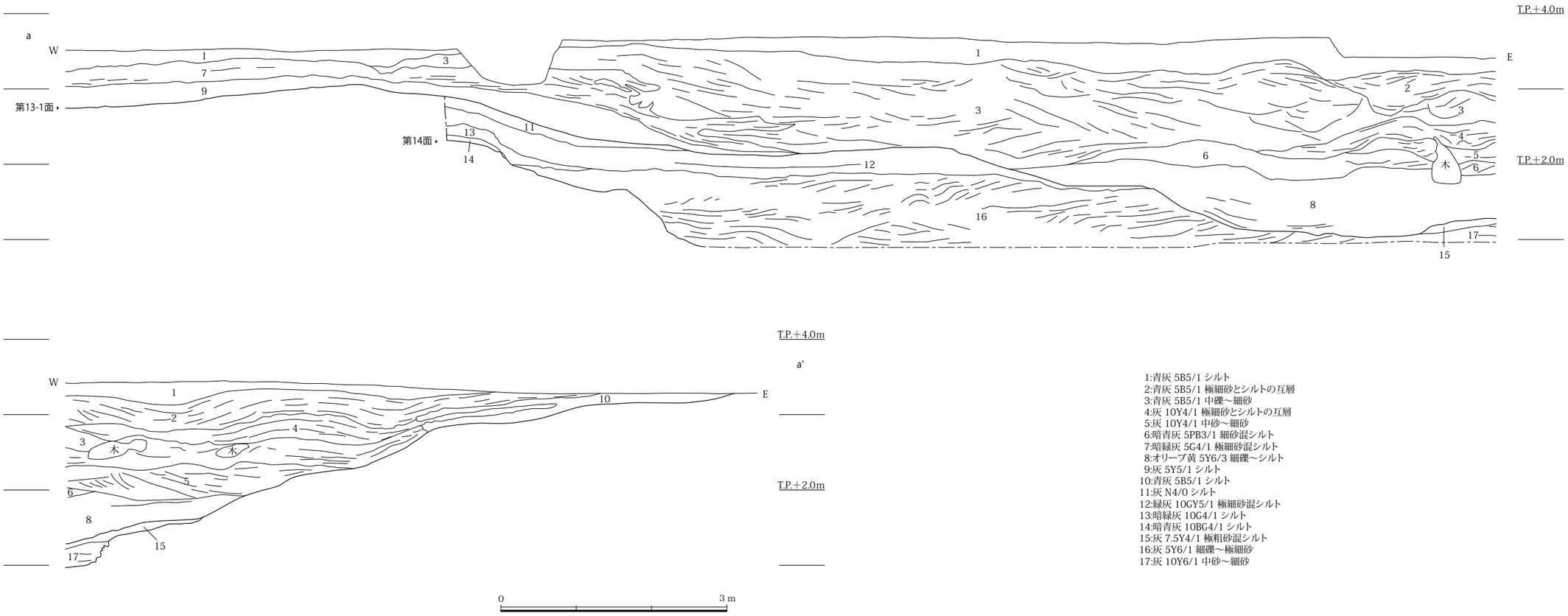


図143　第13－ 1 層出土遺物実測図（S＝1：4）

721 溝 (図 151、152)　調査区の南東部 20 A -6i ～ 20 A -8h 区にかけて検出した。南東－北西方向にはしるが、途中蛇行しており、埋土も第 13 － 2 層の極細砂～細砂混じりシルトであったことから、721 溝は第 13 － 2 層が堆積する際に埋没した溝である。規模は幅 1.7 ～ 3.0 m、深さ 0.15 mを測る。溝内から弥生土器壺底部 (238・239)、甕 (240) と石庖丁 (241) が出土した。土器はいずれも弥生時代前期のもので混入と考えられる。

723 溝 (図 151、152)　20 A -8h 区の 721 溝の南約 1 mに位置する。溝の形状や埋土から考えて

646 流路



1:青灰 5B5/1 シルト
2:青灰 5B5/1 極細砂とシルトの互層
3:青灰 5B5/1 中礫～細砂
4:灰 10Y4/1 極細砂とシルトの互層
5:灰 10Y4/1 中砂～細砂
6:暗青灰 5PB3/1 細砂混シルト
7:暗緑灰 5G4/1 極細砂混シルト
8:オリーブ黄 5Y6/3 細礫～シルト
9:灰 5Y5/1 シルト
10:青灰 5B5/1 シルト
11:灰 N4/0 シルト
12:緑灰 10GY5/1 極細砂混シルト
13:暗緑灰 10G4/1 シルト
14:暗青灰 10BG4/1 シルト
15:灰 7.5Y4/1 極粗砂混シルト
16:灰 5Y6/1 細礫～極細砂
17:灰 10Y6/1 中砂～細砂

図144　第13－１面　646流路 断面図（S＝１:60）

721 溝と同じ性格の溝と考えられる。遺物は弥生時代前期の壺 (236) と甕 (237) である。同じく混入と考えられる。

当該面ではこの時期までは水田開発は及んでおらず、下流域に拡がると推測される水田域に水を供給する用水路が主として検出された。

717 溝 (図 152 ～ 154・図版 38)　調査区の東半部、20 A -9i ～ 20 A -6d 区間を南西－北東方向にはしる。規模は違うが 716 溝と同様の 2 段おちの構造を呈しており、断面すり鉢状に掘削した後、溝底部を幅 1.2 m、深さ 0.3 ～ 0.5 mの箱溝状に掘削する。溝の規模は、幅 5.0 ～ 6.6 m、深さ 1.1 mを測る。溝の肩は 20 A -7g 区で大きく膨らむが、これはこの下層に第 15 面 835 溝が存在するため、落ち込み状に窪んだからである。溝埋土は最下層には掘削直後の崩落土である偽礫混じり細砂 (12) が堆積し、その上層には流水堆積層である中砂・シルト混じり極細砂 (11) が堆積し、その直上には植物遺体を多く含むシルト層 (9) や極粗砂層 (10) が堆積する。なお、断面図にある (1) ～ (8) 層は第 13 － 1 面 665 溝埋土である。溝埋土から弥生時代中期前葉の鉢口縁部片 (242) や石庖丁片 (260)、弥生時代前期の土器 (243 ～ 259) などが出土した (図 153、154・図版 38)。(242) は鉢で櫛描き直線紋を巡らす。(243 ～ 247) は壺蓋である。(247) には放射状のヘラ描き直線紋が入る。(248) はミニチュア壺の口縁部である。(249 ～ 254) は壺で、(251) には頸部と体部上半にヘラ描き沈線をそれぞれ 3 条巡らせ、その間に対向重弧紋を施す。(255・256) は甕蓋、(257・258) は甕、(259) は鉢である。

なお、この溝の 20 A -7・8g・h 区から多量の弥生時代前期中～新段階の遺物が出土したが、これは第 15 面の状況や調査区南壁の断面観察を行った結果 (図 155)、第 15 面の 835 溝埋土を誤認して掘削してしまったと考えられることから、同地区から出土した弥生時代前期の遺物については第 15 面検出の 835 溝の出土遺物とした方が妥当であると判断し、そちらに掲載した (図 203 ～ 210)。

691 流路 (図 150)　調査区の西半部を、第 15 面検出の 725 流路から継続して存在する。幅 26 mで、深さは流路の底が調査限界の T.P. ＋ 0.9 mを超えるため掘削できなかったが 1.4 m以上を測る。埋土は極粗砂からシルトまでが重層的に堆積する。遺物はほとんど出土せず、甕 (261) のみ図示できた (図 156)。弥生時代前期の所産で混入と考えられる。

第 14 層出土遺物 (図 157 ～ 159・図版 38)　20 A -8f 区、717 溝の西肩部付近から弥生時代前期に属するミニチュア土器 (262・263) や壺底部 (264) が出土した。(262) はほぼ完形のミニチュア壺で、底部に紐掛けのための穿孔が 2 箇所みられる。(263) はミニチュアの甕蓋である。

また、第 14 層中より弥生土器 (265 ～ 281)、突帯紋土器 (282 ～ 285)、管状土錘 (286)、打欠石錘 (287 ～ 294)、サヌカイト製の大形の刃器 (295) などが出土した。弥生土器は壺 (265 ～ 274)、甕 (275 ～ 280)、鉢 (281) である。打欠石錘は (287 ～ 291) は花崗岩製、(292 ～ 294) は結晶片岩製である。

(後藤)

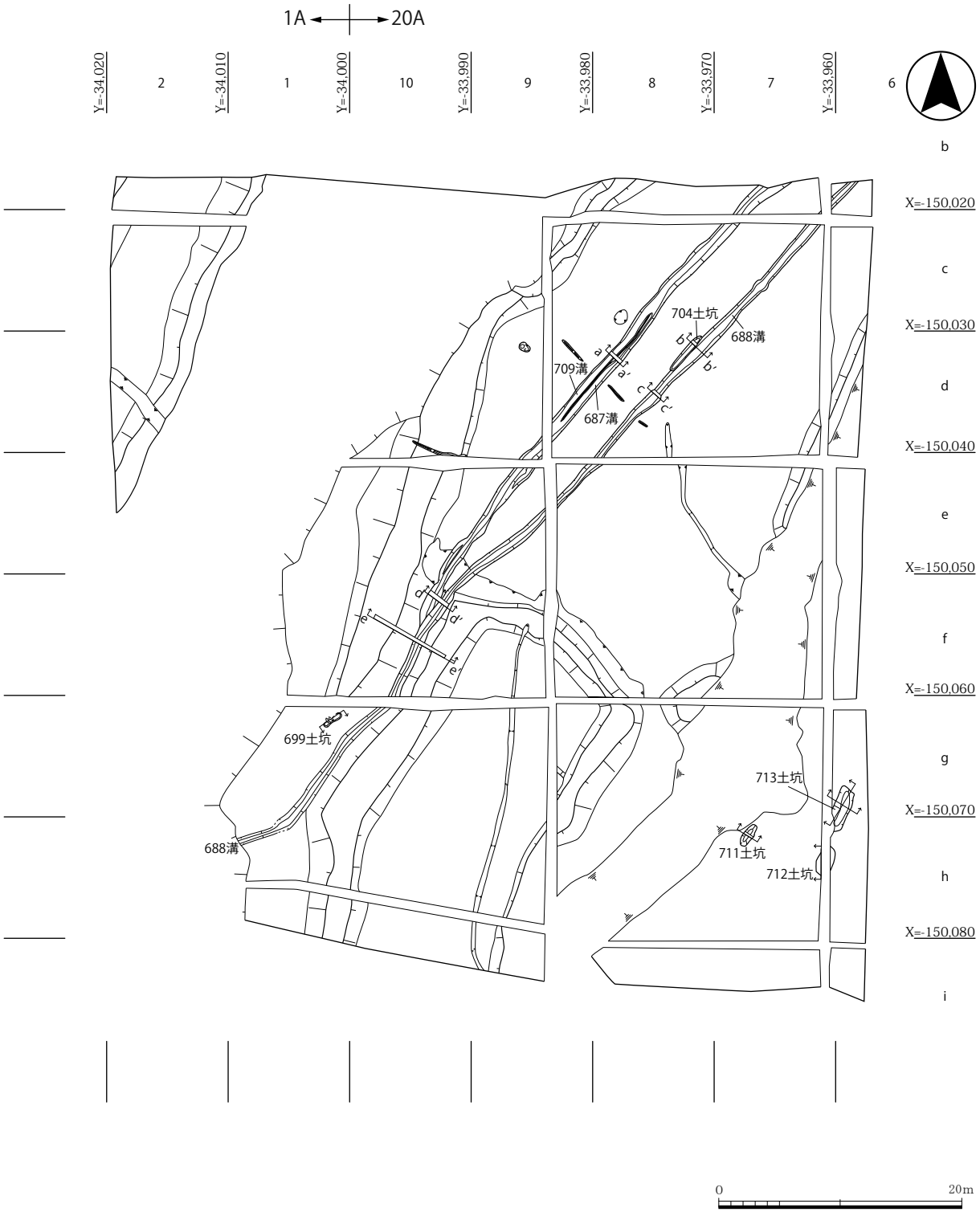
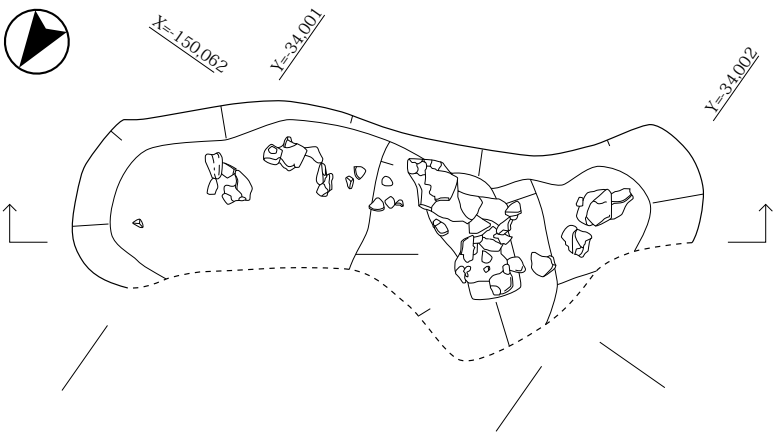
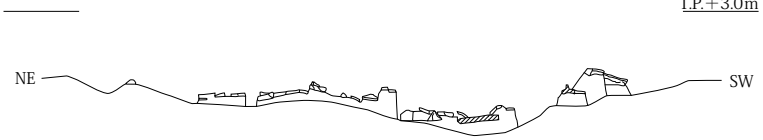
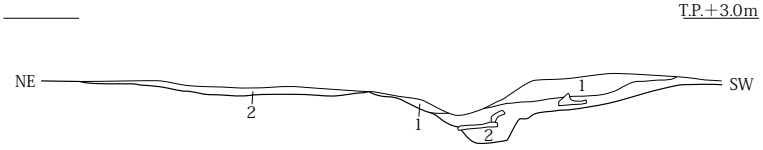


図145　第13－２面　全体図（S＝1：500）

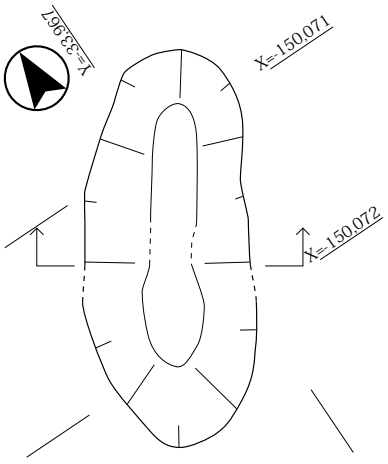


699土坑(1:20)

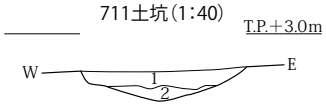




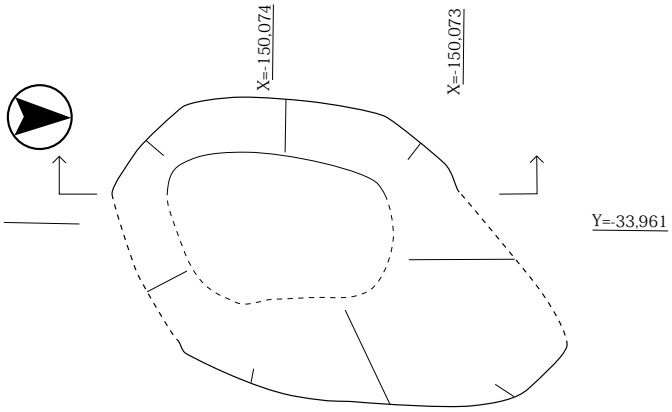
1:灰 10Y5/1 細砂～中砂混シル　炭粒僅かに含む。
2:にぶい黄橙～灰黄褐 10YR6/4～6/2 シルト～中砂
被熱土。炭粒多く含む。下部に炭沈着。



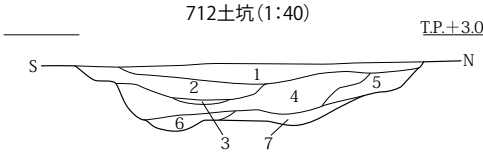
711土坑(1:40)



1:灰～緑灰 N5/0～7.5GY5/1
極細砂～中砂混シルト
炭粒多く含む。焼土若干入る。
2:灰～暗緑灰 N4/0～7.5GY4/1
極細砂～細砂粘質混シルト
炭粒含む。

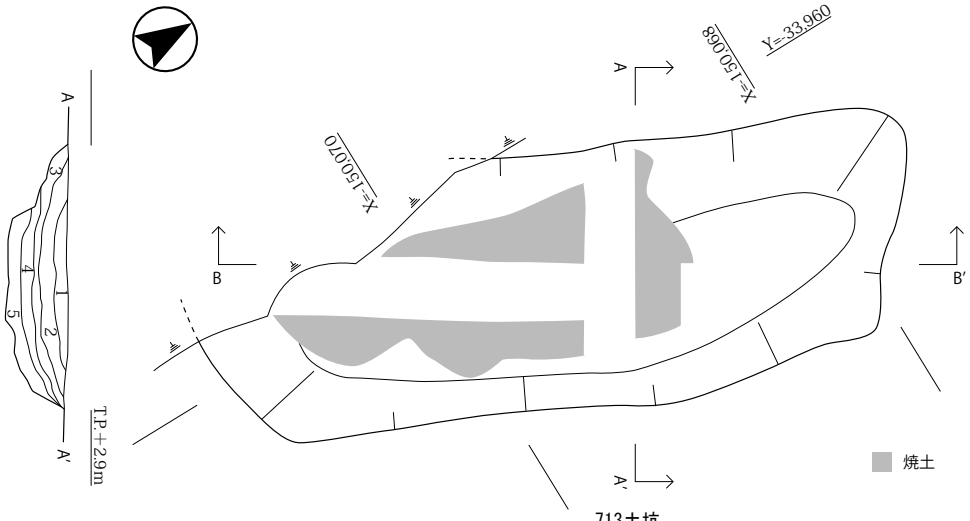


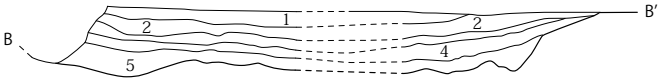
712土坑(1:40)



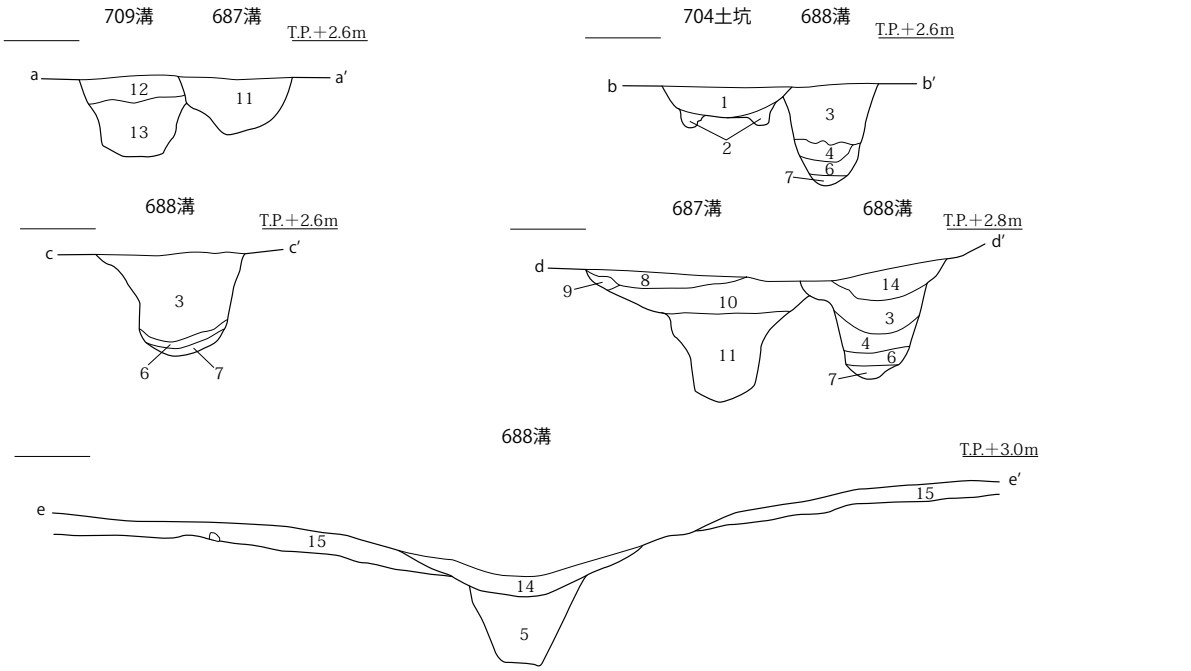
1:灰～赤灰 N4/0～5R5/1 極細砂～中砂混シルト
第13層に由来。第13層より中砂多く含む。
2:緑灰 10GY5/1 極細～細砂混シルト　ビビアナイト含む。
3:緑灰～オリーブ黄 10GY5/1～5Y6/3 細砂～細砂混シルト
焼土、炭含む。
4:暗緑灰 10GY4/1 極細砂混シルト
5:緑灰 10GY5/1 極細砂～細砂混シルト
6:暗緑灰～暗灰 10GY3/1～N3/0 シルト～粗砂
7:暗緑灰 10GY3/1 細砂～中砂混粘質シルト

図146　第13－２面　699・711・712土坑平・断・立面図(S＝1:20・1:40)





1:灰 10Y4/1～N4/0 極細砂混シルト 焼土、炭少量含む。
2:オリーブ黄～オリーブ黒 5Y6/3～3/1 シルト～中砂　焼土、炭多量に含む。
3:緑灰 5G5/1 極細砂～細砂混粘質シルト
4:暗青灰～暗灰 5BG4/1～N3/0 極細砂～細砂混粘質シルト
　3より砂粒多く含む 炭化物をラミナ状に含む。
5:灰～青黒 N4/0～5PB2/1 細砂～中砂混シルト
　第15層由来のブロックを多く含む(加工時形成層)。



1:オリーブ灰～黒 7.5GY4/1～N2/0 極細砂～細砂混シルト　3よりカルシウム多い。
2:オリーブ灰 7.5GY4/1 極細砂混粘質シルト　加工時形成層。
3:オリーブ灰～黒 7.5GY5/1～N2/0 極細砂～細砂混シルト
　偽礫(第13b～15b層由来)入る。
4:オリーブ灰 7.5GY5/1 極細砂～細砂混シルト(第14・15層由来)
5:灰 7.5Y4/1 極細砂～細砂混シルト
　木片等有機物を多く含む。688溝埋土。
6:オリーブ灰～暗青灰 7.5GY4/1～5PB3/1 細砂～中砂混シルト　水成堆積。
7:黒～暗青灰 N2/0～5PB3/1 細砂～中砂混シルト　水成堆積。
8:青灰～緑灰 5B5/1～7.5GY5/1 極細砂混シルト　しまり強い。
9:青灰～暗青灰 5B5/1～5PB3/1 極細砂～細砂混シルト　第14層の崩落土。
10:青灰～暗青灰 5B5/1～4/1 極細砂～細砂混シルト
11:黒～暗緑灰 N2/0～7.5GY4/1 シルト～中砂
　偽礫(第13b～15b層由来)入る。
12:灰～緑灰 N4/0～10G5/1 極細砂～中砂混シルト
　偽礫(第13b～15層由来)入る。カルシウム入る。埋め戻し土。
　1に比べ第13b層の偽礫少ない。
13:灰～緑灰 N4/0～10G5/1 極細砂混シルト
　偽礫(第14～15層由来)入る。埋め戻し土。3より砂礫少ない。
14:オリーブ灰 7.5GY5/1/ 粘質シルト　第13面648溝埋土。有機物ラミナ入る。
15:灰 N4/0～5/ シルト　第13層。

図147　第13－２面　704・713土坑・687・688・709溝平・断面図（S＝1：40）

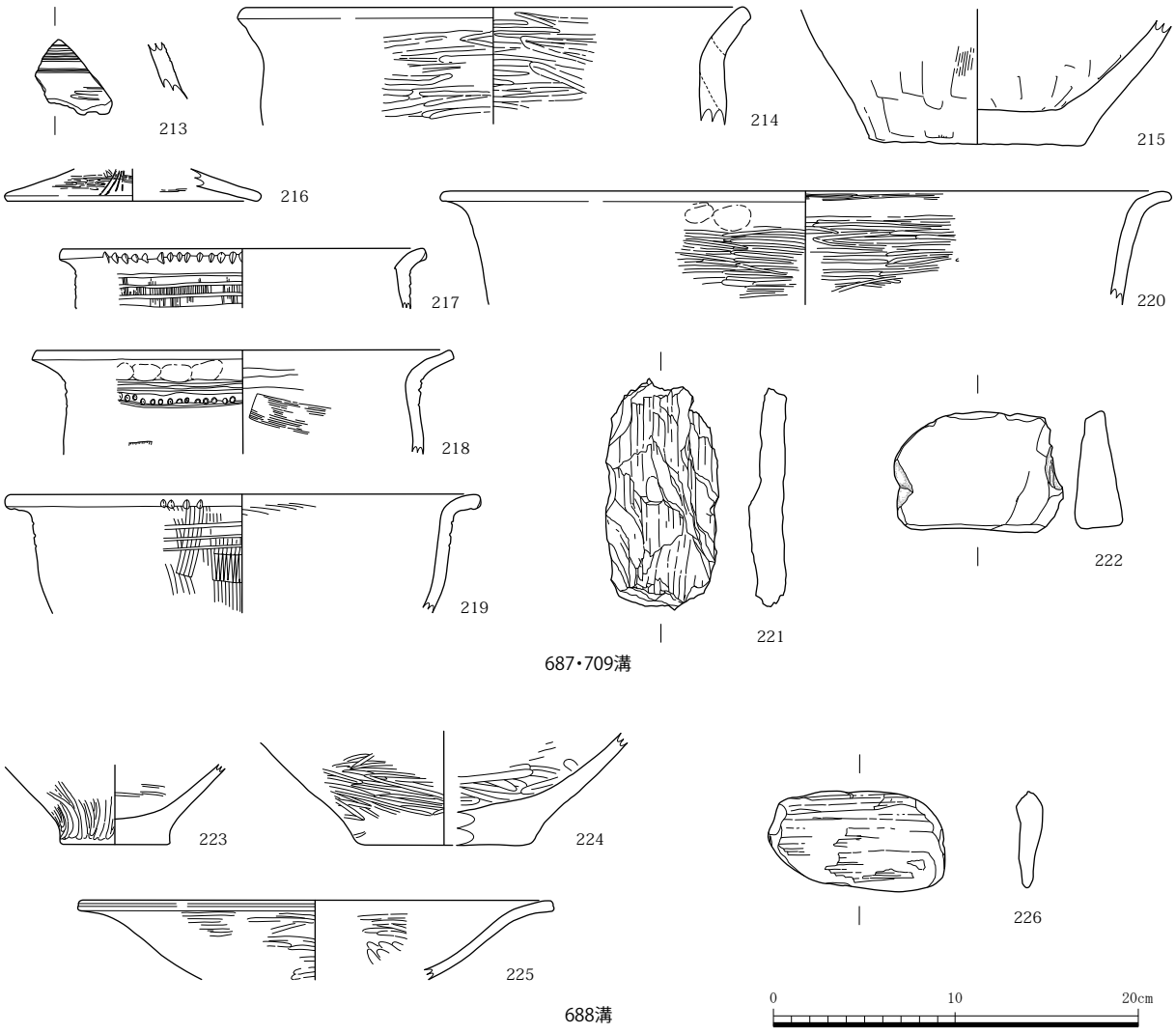


図148　第13－２面　687・688・709溝出土遺物実測図（S＝1：4）

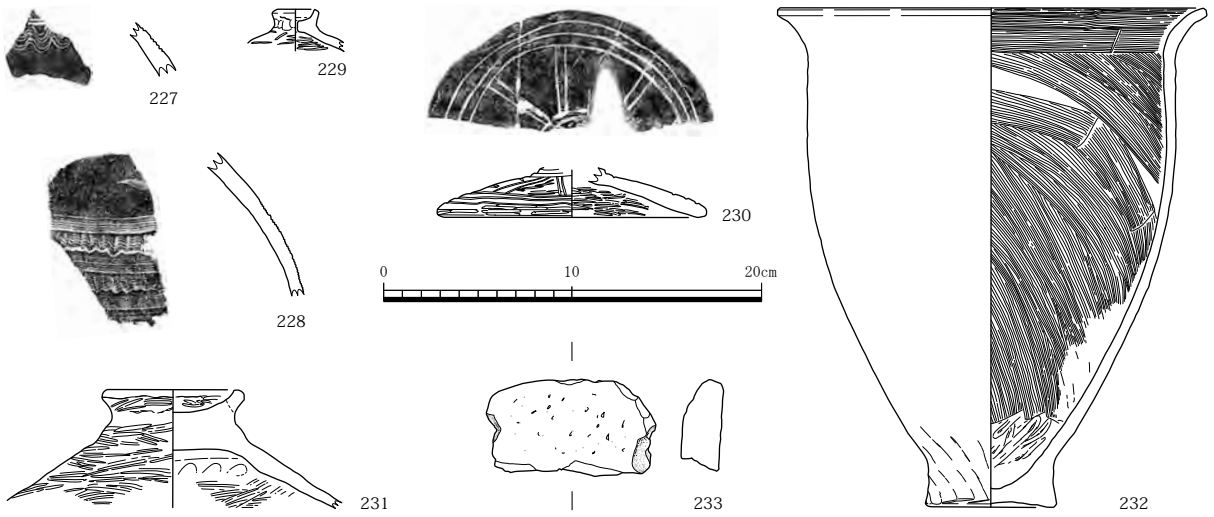


図149　第13－２層出土遺物実測図（S＝1：4）

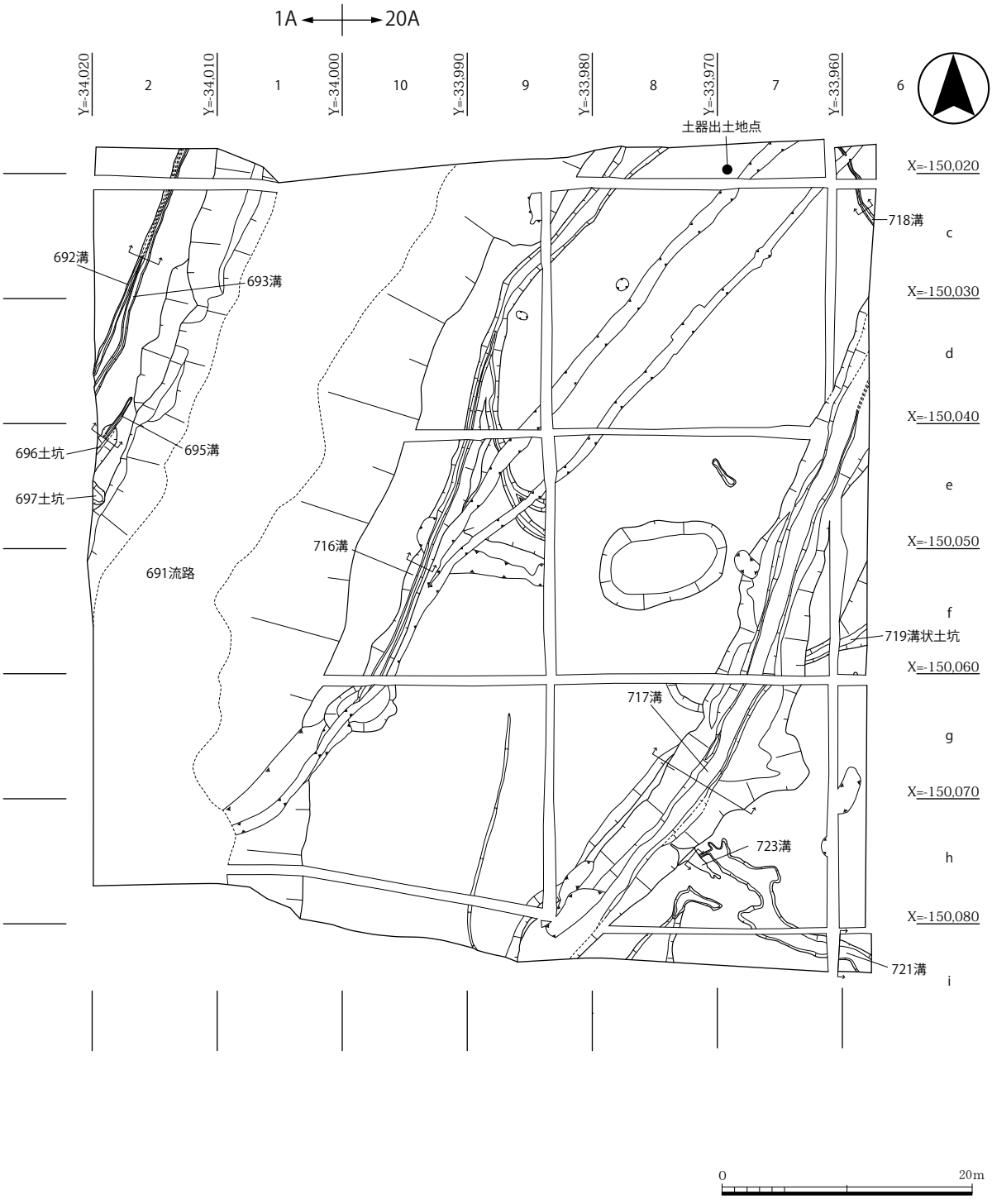


図150　第14面　全体図（S＝1：500）

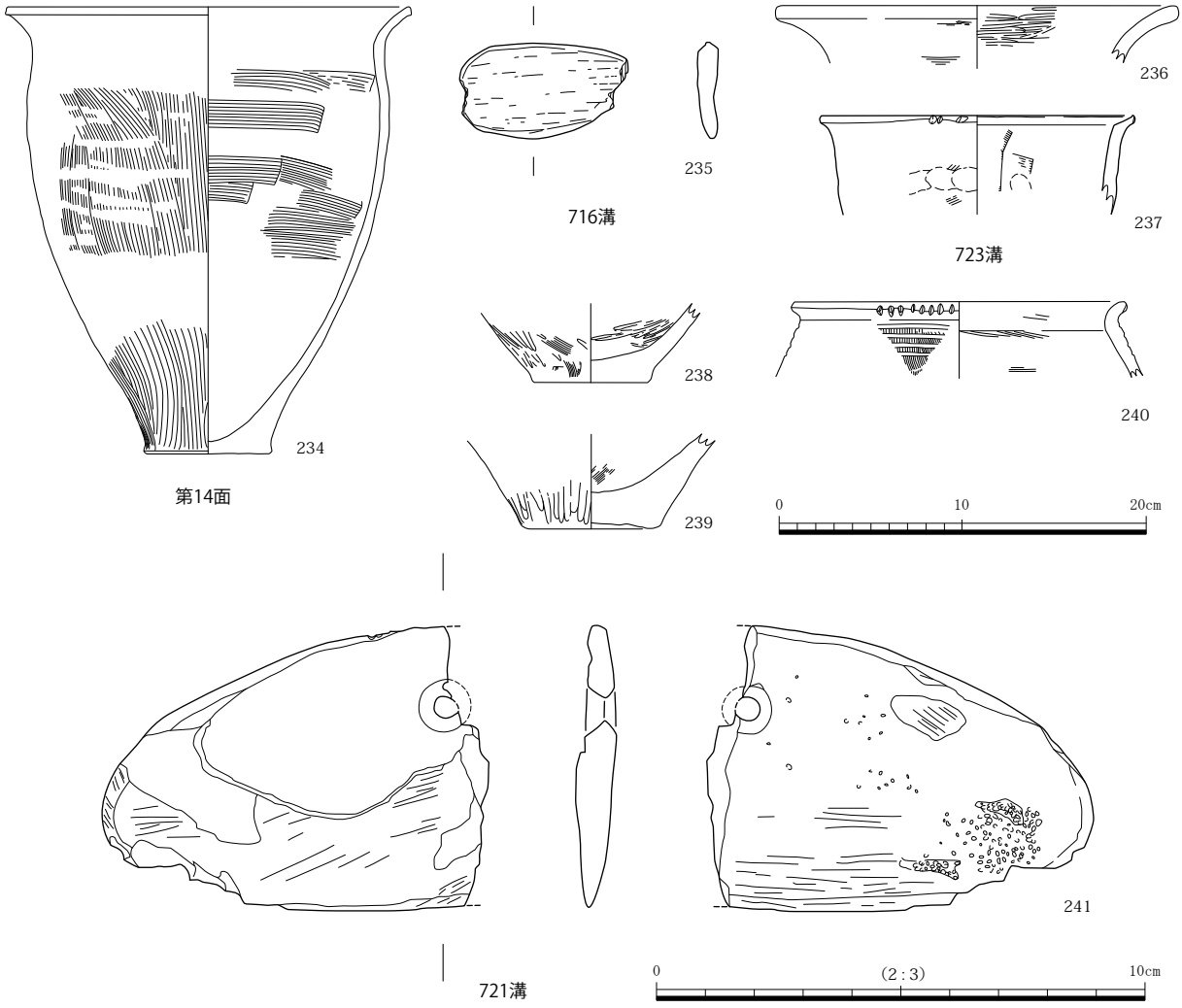
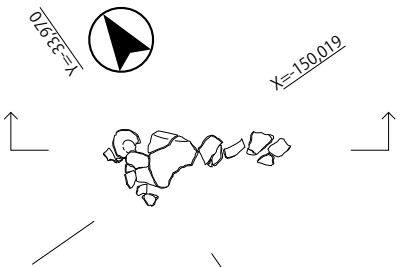
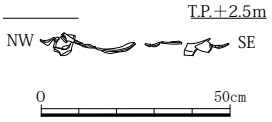


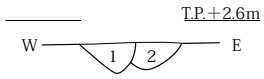
図151　第14面　面上、716・723・721溝出土遺物実測図（S＝1：4・2：3）



土器(234)（1：20）

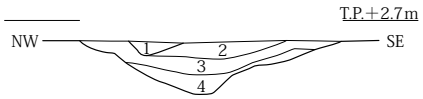


692・693溝（1：40）



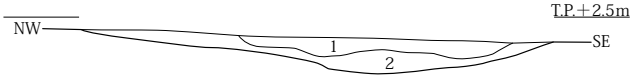
1:緑灰 10G5/1 極細砂～細砂混シルト
2:青灰 5BG5/1 極細砂混シルト
第14層偽礫含む。

695・696溝（1：40）



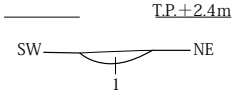
1:灰オリーブ～灰 5Y6/2～4/1
極細砂～細砂混シルト　695埋土。
2:オリーブ黄～灰 5Y6/3～4/1 極細砂～中砂
3:灰 7.5Y5/1 極細砂～細砂混シルト
4:オリーブ黄 10Y3/1 極細砂～細砂混シルト
有機物含む。
} 696埋土

716溝（1：40）



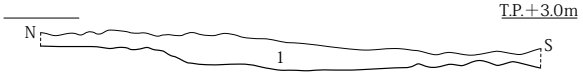
1:青灰 10BG5/1 細砂混シルト　炭酸カルシウムの結核やビビアナイト含む。
2:緑灰 10GY5/1 極細砂混シルト　炭酸カルシウムの結核を多く含む。

718溝（1：40）



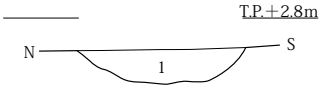
1:緑灰 10G5/1に暗緑灰 5G3/1
極細砂混シルト

721溝（1：40）



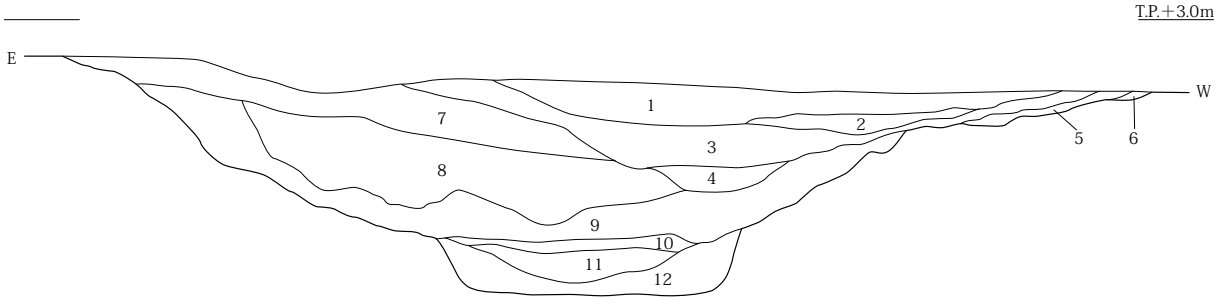
1:暗灰 N3/ 極細砂～細砂混シルト

723溝（1：40）



1:暗灰 N3/ 極細砂～細砂混シルト

717溝（1：40）



1:灰オリーブ 5Y5/2 極細砂混細砂
2:灰 5Y4/1 極粗砂混極細砂
3:灰 5Y5/1 粗砂～極粗砂　7の偽礫含む。植物遺体含む。
4:灰 10Y4/1 粗砂混シルト　植物遺体含む。
5:灰 7.5Y4/1 極細砂～中砂
6:灰10Y5/1 細砂混極細砂
7:灰 N/0 極粗砂混シルト　炭含む。
8:青灰 5PB5/1 シルト
9:褐灰 10YR5/1 極粗砂～細砂混シルト　植物遺体多く含む。
10:灰 N5/0 極粗砂・粗砂混極粗砂　植物遺体多く含む。
11:暗灰 N3/0 中砂・シルト混極細砂
12:暗灰 N3/0 細砂混偽礫
明緑灰 10GY7/1 極粗砂偽礫(第15層)
灰白 5Y8/1 細礫偽礫層(第15－2層)

0　1 m

図152　第14面　土器（234）・692・693・695・696・716～718・721・723溝平・断面図（S＝1：20・1：40）

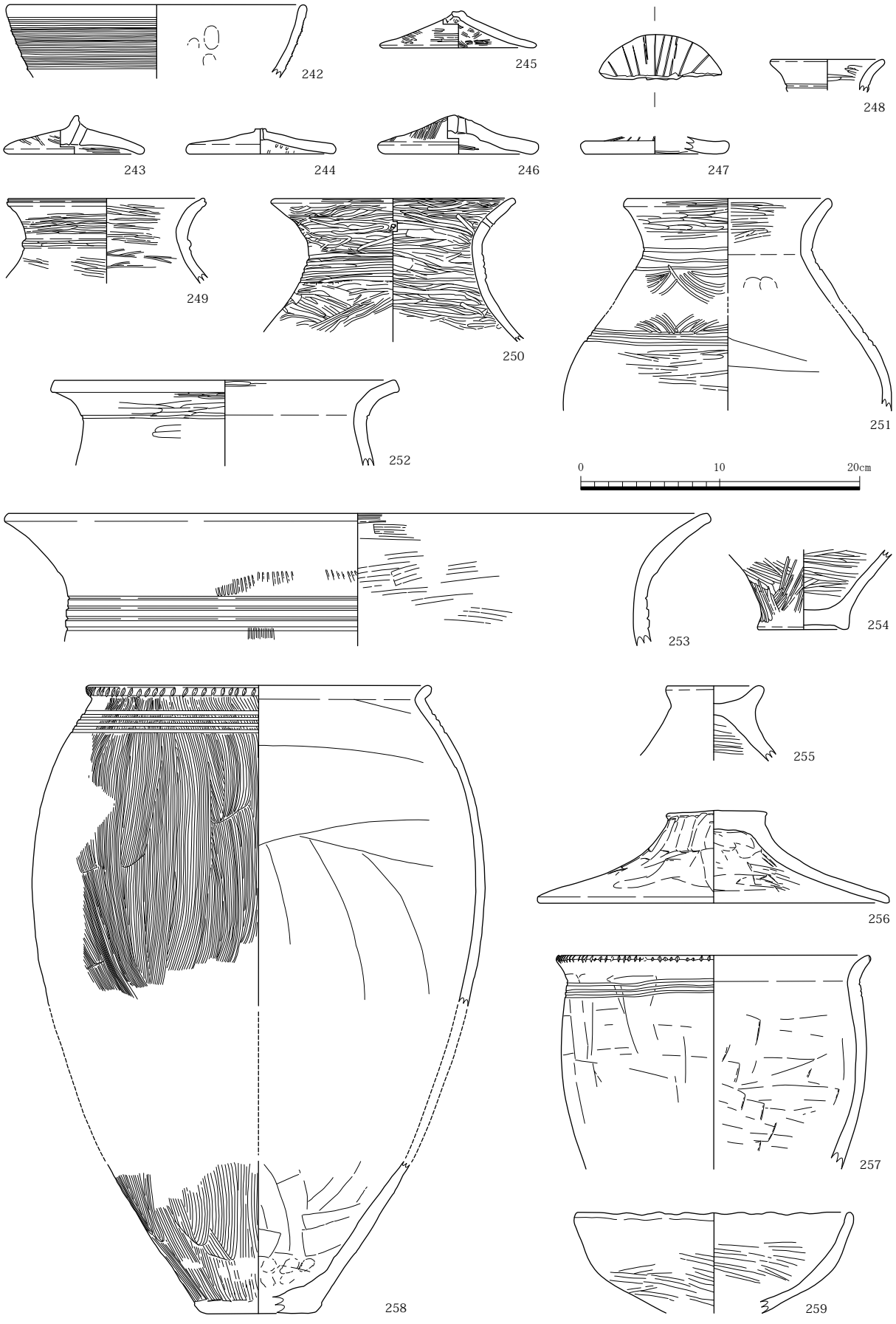


図153　第14面　717溝出土遺物実測図（1）（S＝1：4）

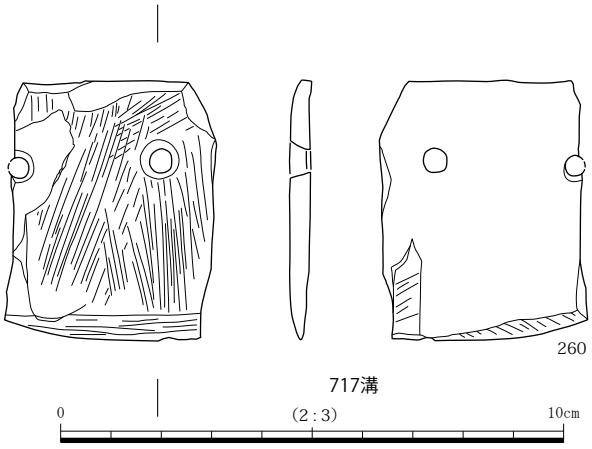
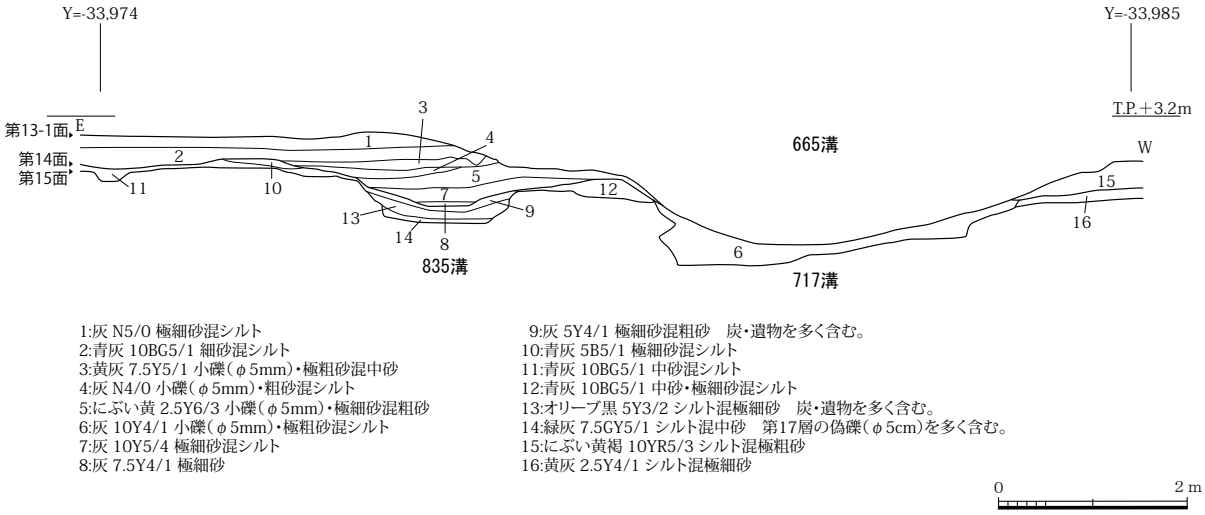


図154　第14面　717溝出土遺物実測図（2）（S＝2：3）



1:灰 N5/0 極細砂混シルト
2:青灰 10BG5/1 細砂混シルト
3:黄灰 7.5Y5/1 小礫（φ5mm）・極粗砂混中砂
4:灰 N4/0 小礫（φ5mm）・粗砂混シルト
5:にぶい黄 2.5Y6/3 小礫（φ5mm）・極細砂混粗砂
6:灰 10Y4/1 小礫（φ5mm）・極粗砂混シルト
7:灰 10Y5/4 極細砂混シルト
8:灰 7.5Y4/1 極細砂
9:灰 5Y4/1 極細砂混粗砂　炭・遺物を多く含む。
10:青灰 5B5/1 極細砂混シルト
11:青灰 10BG5/1 中砂混シルト
12:青灰 10BG5/1 中砂・極細砂混シルト
13:オリーブ黒 5Y3/2 シルト混極細砂　炭・遺物を多く含む。
14:緑灰 7.5GY5/1 シルト混中砂　第17層の偽礫（φ5cm）を多く含む。
15:にぶい黄褐 10YR5/3 シルト混極粗砂
16:黄灰 2.5Y4/1 シルト混極細砂

図155　第14面　665・717・835溝南壁断面図（S＝1：80）

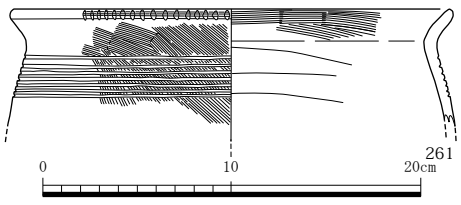


図156　第14面　691流路
出土遺物実測図
（S＝1：4）

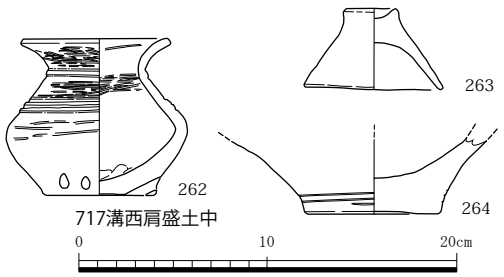


図157　第14層出土遺物実測図（1）（S＝1：4）

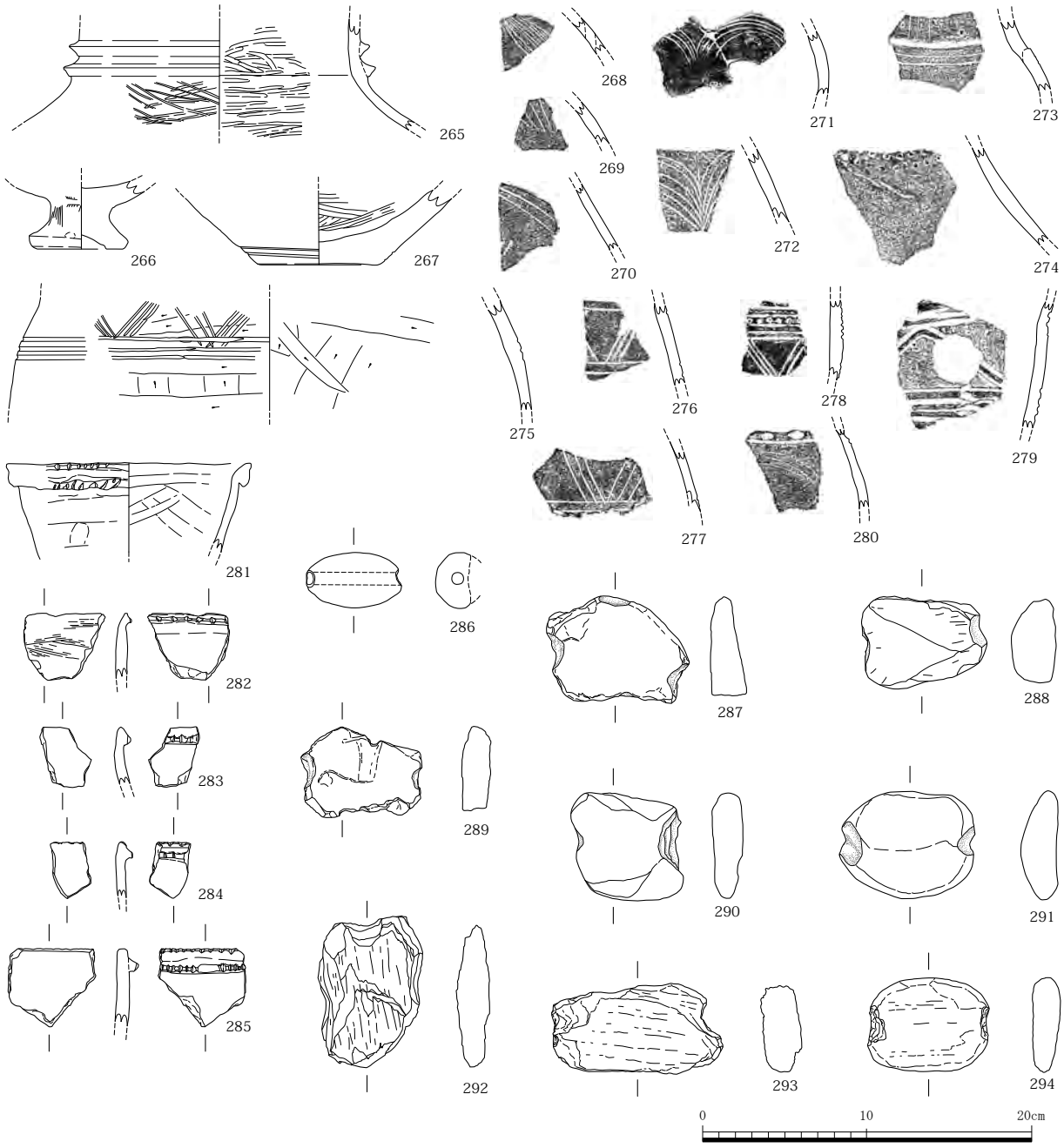


図158　第14層出土遺物実測図（2）（S＝1：4）

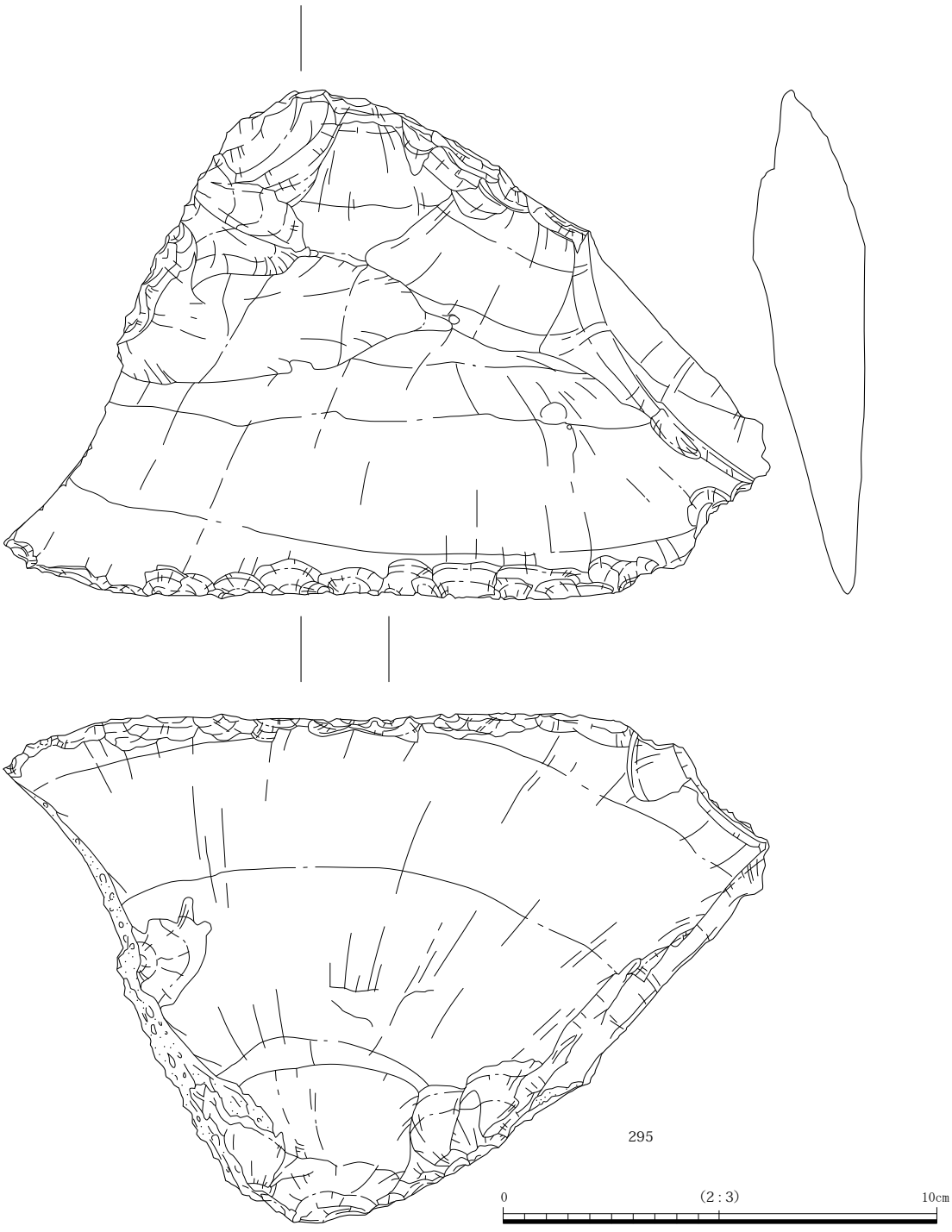


図159　第14層出土遺物実測図（3）（S＝2：3）

第 15 面（図 160・図版 17、18）

弥生時代前期の遺構面で、第 14 層 (弥生時代中期前葉の遺物包含層) を除去して検出した面である。当該面は既往の調査で確認されている基本層序においていわゆる「第 4 黒色土層」上面に相当する面であるが、本調査区においては、この「 第 4 黒色土層 」が 2 層に分層できた。これら 2 層の各上面が遺構面であることが確認されたため、第 15 層上面 (黒色シルト混じり中砂層・弥生時代前期中から新段階遺物包含層) を第 15 面、第 15 層下面・第 16 層 (黒色シルト～極細砂層) 上面を第 16 面とした。ただし本調査区の遺構面は弥生時代前期でも中段階から新段階に帰属し、従来の前期古段階の遺構面とは若干の時期差が生じる。

通常、池島・福万寺遺跡では、南北東西に縦横するトレンチが国土座標に合わせて 20 m間隔で設定されている。本遺構面の調査に入る前にトレンチを掘削した際、南東部 (20 Ａ - ６～８ｆ～ｉ区) のトレンチでは他地区のトレンチに比して多くの遺物の出土がみられた。よって当該地区のトレンチは遺構面を残すため第 15 面上面でとめた。最終的に第 16 面に帰属すると判断した掘立柱建物 7 の柱穴 5 基はこのトレンチ掘削時に確認されたものである。遺構がトレンチ内でおさまっていたため、第 15 面の調査時には本遺構面に属すると考え、建物を構成するほかの柱穴を検出するよう努めたが検出するにはいたらなかった。再度詳細にトレンチ内の断面観察を行った結果、遺構埋土、堆積状況から判断して、遺構の切り込み面は第 16 面の遺構であると判断した。

第 15 面での遺構検出は、遺構埋土が同質の土層からなることに起因し、非常に検出しにくい状況であった。遺構の集中している地区に関しては 5 m毎の断面観察用のセクションを設定し、遺構がどの遺構面に帰属するのかの検証に努めたが、見落としている遺構があることは否めない。第 17 面で検出された柱穴も含め、整理作業の段階で遺構の埋土による相違と平面・断面形状などから帰属時期を判断して報告している。

本遺構面検出時、南東から北西方向 (座標北から西へ 85 ～ 60°) に向かう溝状遺構が数条にも及んで検出された (図 161)。これらの溝状遺構の埋土は、調査区東側に存在していた河川の氾濫堆積であろう。埋土は主として灰～灰黄褐色を呈する粗砂及び細砂である。これらの溝状遺構の痕跡は本調査区で検出された集落が遺棄される契機であったとの可能性が指摘されよう。

本遺構面の時期は、出土した遺物の土器形式の変化から時間幅を想定することは可能であるが、弥生時代前期の範疇におさまる。本調査区内で検出された集落跡は、長期間にわたり展開することはなかったようである。

本遺構面の南東部は標高 T.P. ＋ 2.7 mを測る微高地が形成され、北西方向に向けて地形は下がっていき、725 流路右岸側の標高は T.P. ＋ 2.2 ～ 2.3 mである。特筆される遺構として、使用された痕跡が残る完形の木製竪杵や加工途中の鍬などが検出された木製品水漬け遺構 (803・835) があげられる。また本遺構上層埋土からは多量の弥生時代の土器が出土した。他には炭層及び焼土層が確認された炉、建物を構成するものではないが直線的に並んでいた柱穴や旧地形の影響を受けた落ち込み、地震による墳砂の痕跡などが確認された。

本遺構面では大量の弥生時代前期の遺物が出土した。コンテナ数にして約 150 箱にも及ぶ。調査中から遺構の時期を確定するためも含め土器の洗浄・注記・接合を並行して実施していたが、整理期間の制約もありすべての土器を報告するにはいたらなかった。

以下、主要な遺構および遺物が出土した遺構を中心に記述する。

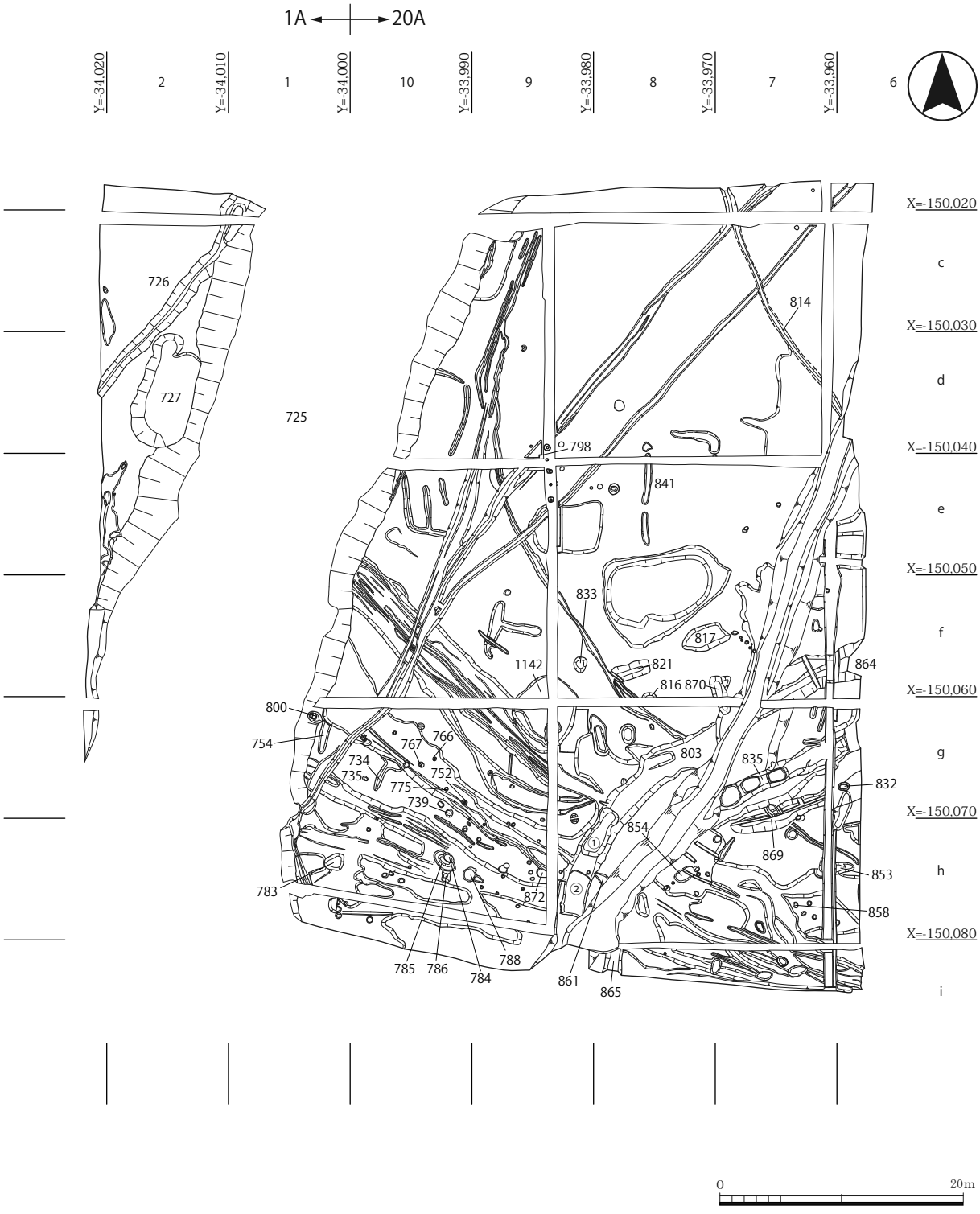


図160　第15面　全体図（S＝1：500）

【溝状遺構】（図 161）　南東から西・北西方向をとり 725 流路へ向かう溝状遺構が数条検出された。調査区東側にある河川からの氾濫に起因する痕跡で人為的に掘削された溝ではない。

20 A -6 ～ 9f ～ i 区で検出された。主軸方向は座標北から西へ 85 ～ 60° 振っており、西側は 725 流路に流れ込む。溝底面の形状は若干の凹凸がみられ、１条の溝の幅は約 0.2 ～ 0.4 mを測る。断面観察から幾条もの溝が切りあっている状況が観察され、最終的に幅約２～４mの広がりをもって埋没して

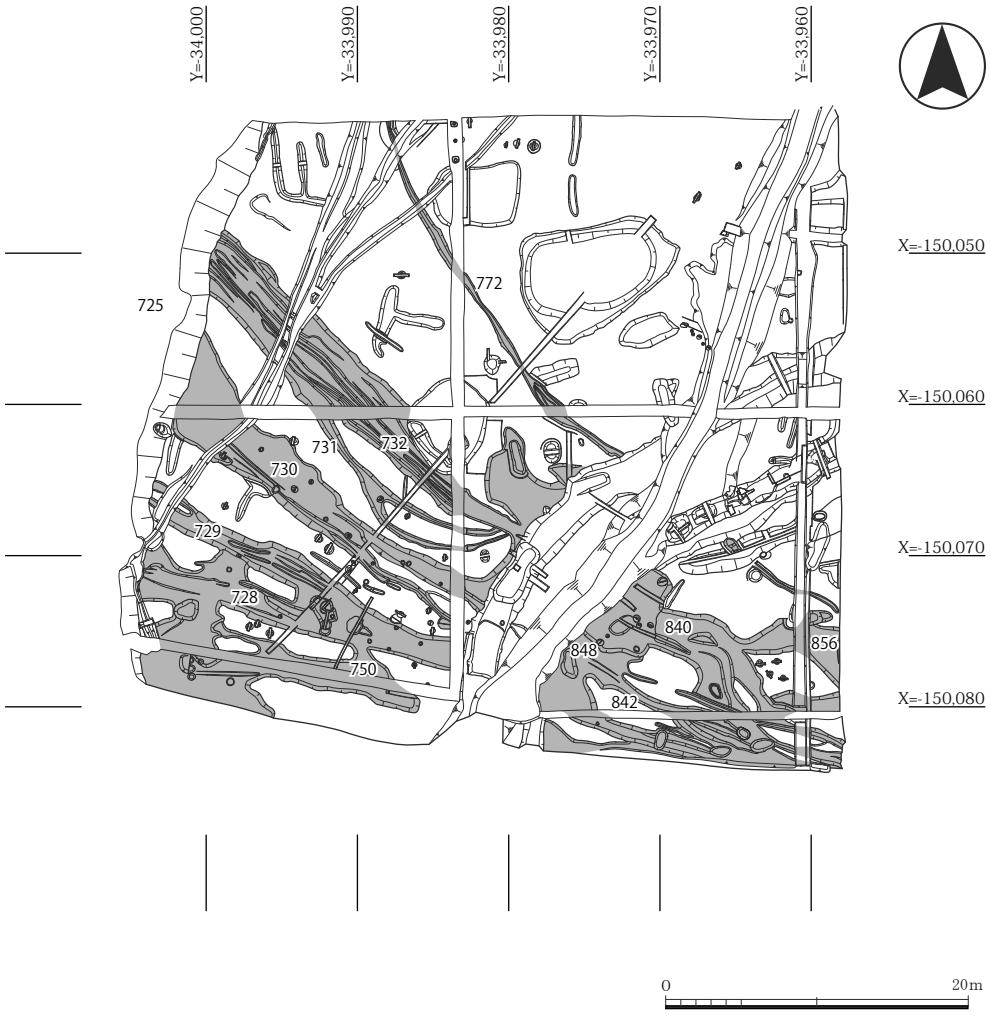


図161　第15面　溝状遺構全体図（S＝1：500）

いるものもある。埋土はいずれも灰～灰黄褐色を呈する粗砂及び細砂であり、短時間での堆積が認められた。深さは約 0.3 ～ 0.5 mを測る。772 溝のみ検出位置と平面形状から人為的に掘削された溝である可能性も考えられたが、幅約 0.2 m、深さ 0.07 mを測り、断面形状と埋土が暗オリーブ色細砂と他の溝状遺構と同質であることから、人為的な溝ではなく河川の氾濫によるものと判断した。溝内の遺物量はさほど多くはない。いずれの土器も強くローリングを受けていないので、本調査区に続く東側で展開していると推測される集落から運ばれてきたものであろう。

728 溝から壺の口頸部 (296)、甕の底部 (297) が出土した。(297) の底はドーナツ状を呈する。(図 162・図版 39)。

729 溝からは甕の口縁部 (298)、壺の底部 (299)、土製紡錘車 (300) が出土した。 (298) は口縁部を作り出すための粘土紐の下端をナデつけ段を作り出している。 (300) は直径 4.3cm、最大厚 0.9cm、孔径 0.5cm、重さ 21.5g を測る (図 163・図版 39)。

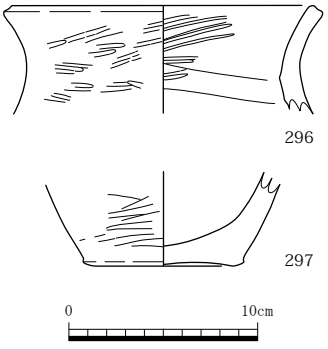


図162　第15面　728溝出土遺物
実測図（S＝1：4）

730 溝からは壺蓋 (301)、甕 (302・303)、管状土錘 (304) が出土した。(301) は環状のつまみ部をもち、その中心に穿孔を施す。(302) は口縁端部に刻み目を施し、体部に３条のヘラ描き沈線を巡らす (図 164・図版 39)。

731 溝からはサヌカイト製の石匙 (305) が出土した (図 165・図版 39)。

732 溝からは壺の体部 (306)、甕の口縁部から体部 (307)、甕の底部 (308)、鉢の口縁部から体部 (309)、土製紡錘車 (310)、管状土錘 (311)、サヌカイトの二次加工のある剥片 (312) が出土した。(306) は横方向に３条のヘラ描き沈線を施した後、縦方向に６条のヘラ描き沈線を施す。(307) は口縁端部に刻み目を施す。(310) は直径 5.5cm、最大厚 1.2cm、孔径 0.5cm、重さ 42.5g を測る (図 166・図版 39)。

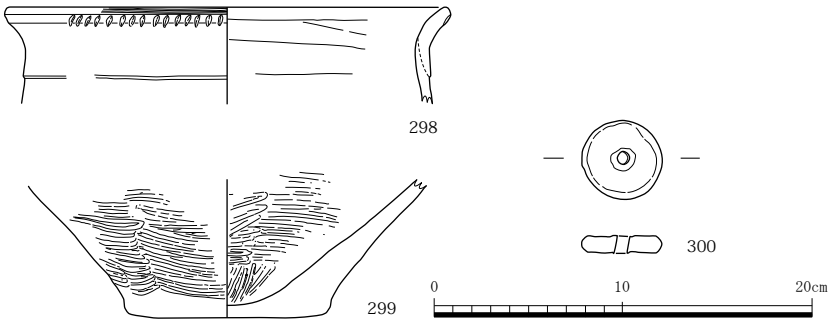


図163　第15面　729溝出土遺物実測図（S＝1：4）

750 溝からは甕の底部 (313) と壺の底部 (314) が出土した (図 167)。

772 溝からは甕の底部 (315) が出土した (図 168)。

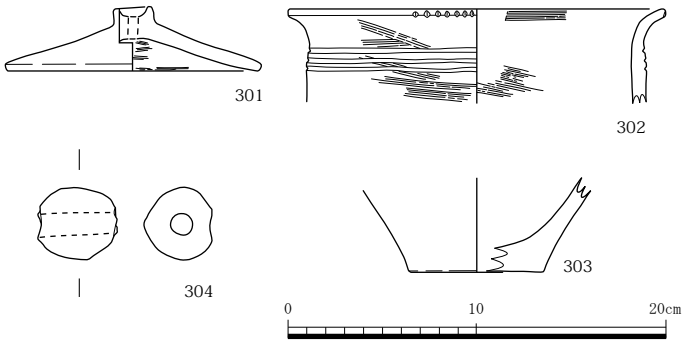


図164　第15面　730溝出土遺物実測図（S＝1：4）

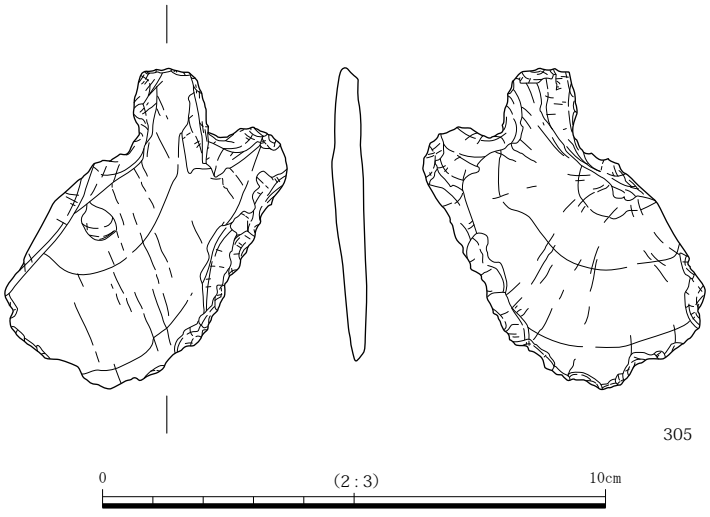
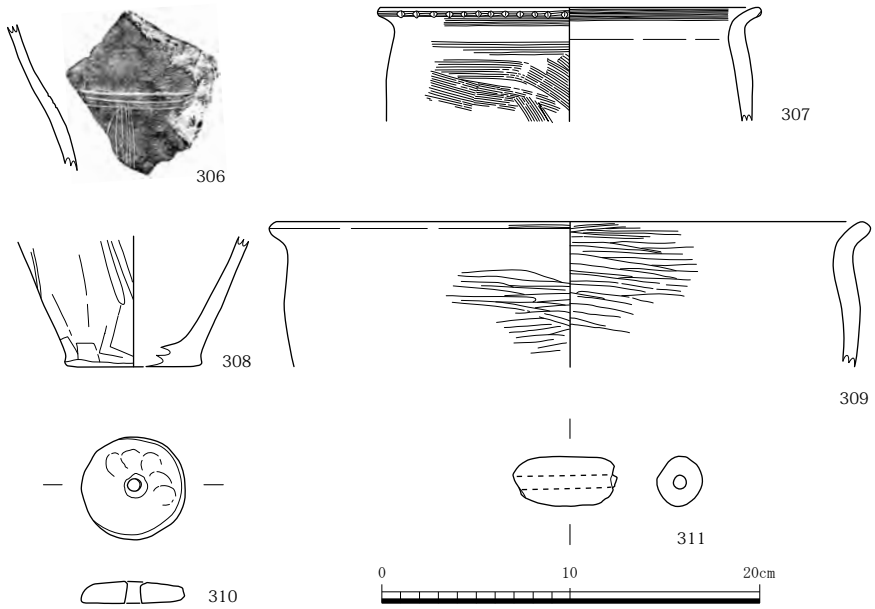


図165　第15面　731溝出土遺物実測図（S＝2：3）

840 溝からは壺蓋 (316)、壺の口縁部から体部 (317・318)、大型壺 (319・319')、甕 (320 ～ 322)、鉢の口縁部から体部 (323) が出土した。(316) は外面に２条のヘラ描き沈線を一単位として十字形に施紋していたと考えられる。(317) は口縁端部に面を作り、頸部と肩部との境に削り出し突帯を巡らし突帯上に沈線を施す。(318) は口縁端部にヘラ描き沈線を１条巡らせ、刻み目を施す。頸部に削り出し突帯を巡らせ、突帯上に断面Ｖ字状の沈線を１条施す。内から外に向けて焼成前に紐穴を設ける。(319・319′) は胎土や焼成から同一個体であると判断したが、接合する点はなかった。(320) の体部は内弯して立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁端部に刻み目を施す。(321) は底部中央に焼成後外から内に穿孔する。(322) の口縁部はさほど外反せず、端部はやや



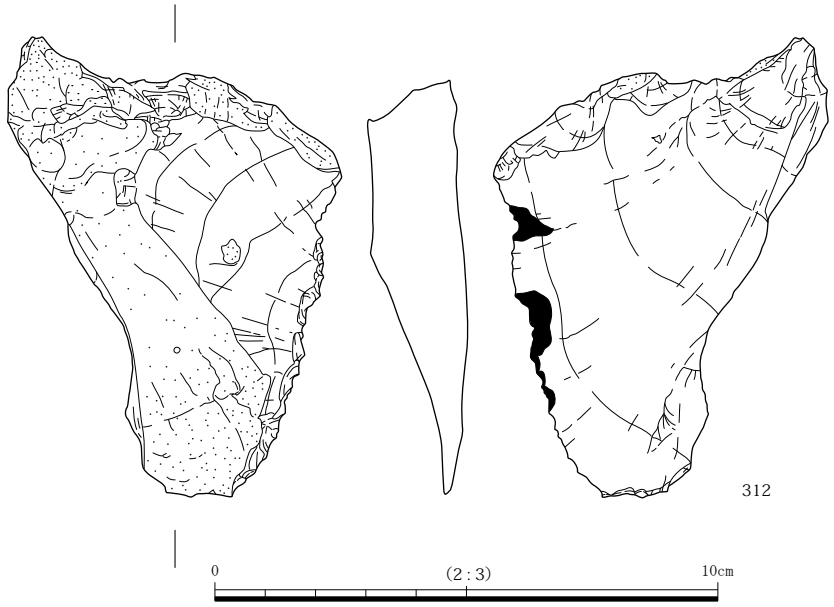


図166　第15面　732溝出土遺物実測図（S＝1：4・2：3）

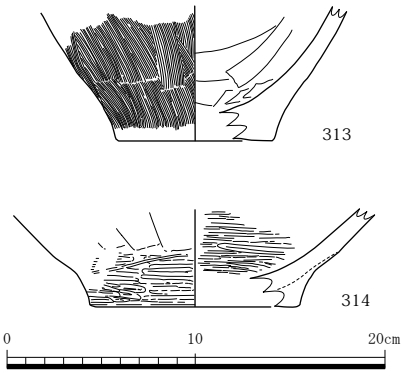


図167　第15面　750溝出土遺物実測図（S＝1：4）

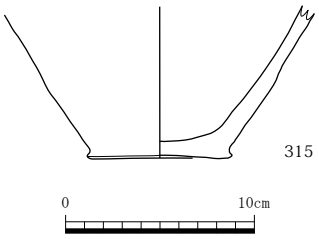


図168　第15面　772溝出土遺物実測図（S＝1：4）

波打った状態になっている。(323) は緩やかに内弯して立ち上がる体部から口縁部は短くほぼ垂直方向に外反する。口縁直下に 5 条のヘラ描き沈線を施し、その 2.3cm 下に 4 条のヘラ描き沈線を巡らせている (図 169・図版 39)。

842 溝から甕の底部 (324) と緑泥片岩製の石庖丁の破片 (325) が出土した (図 170・図版 39)。

848 溝から甕の口縁部から体部 (326) が出土した。口縁端部に刻み目を施し、体部に 3 条のヘラ描き沈線を巡らす (図 171)。

856 溝からは口縁部が外反する鉢 (327) とサヌカイト製の刃器 (328) が出土した (図 172・図版 39)。

【炉】 平面形がほぼ円形で床面が熱を受けて変色している遺構、埋土に多量の炭・焼土塊を含む土坑を

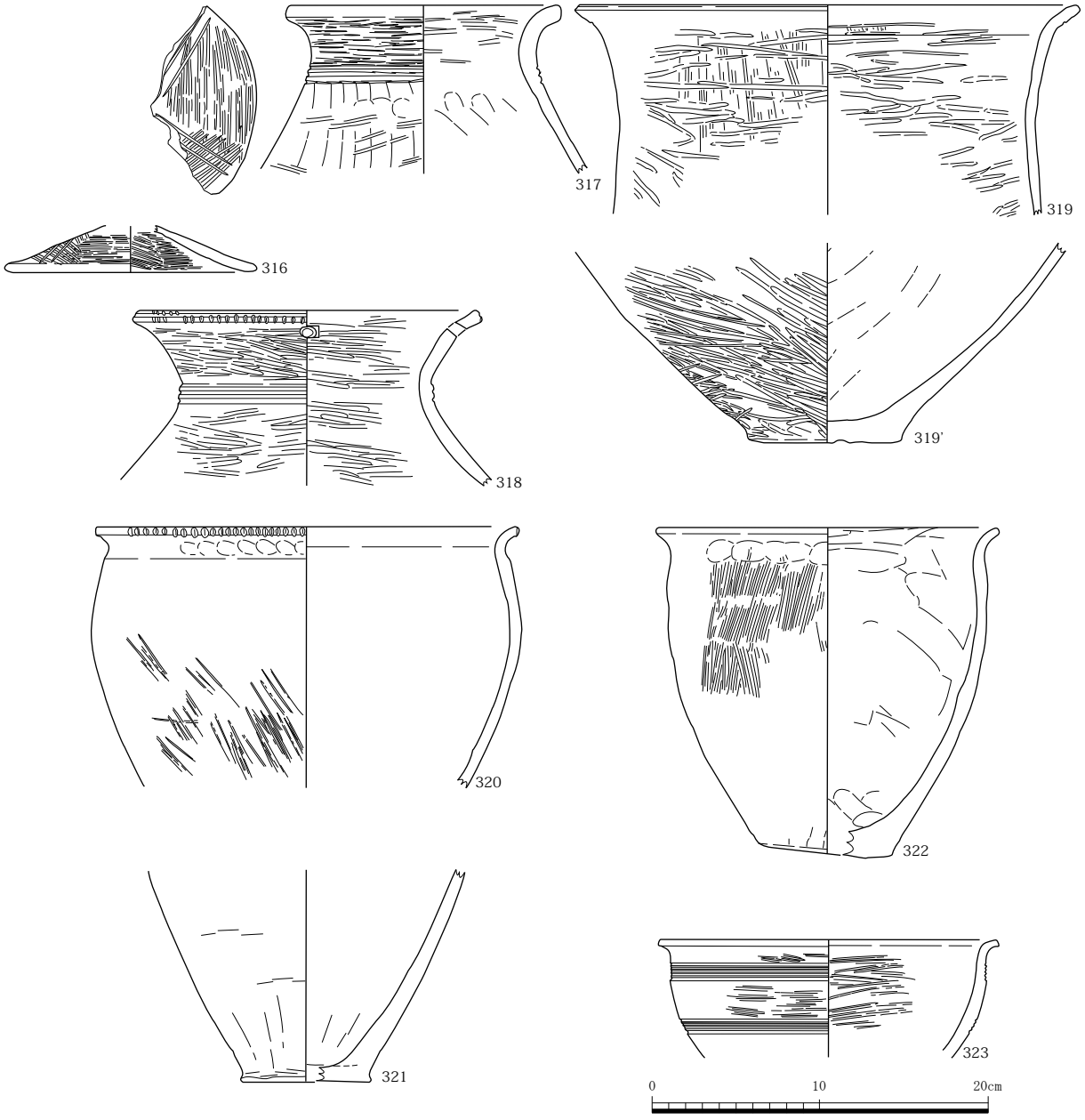


図169　第15面　840溝出土遺物実測図（S＝1：4）

炉として報告する。調査区南半部で６基、X= － 150,040、Y= － 33,980 より西へ約５ｍで１基の計７基が検出された。また平面形が隅丸長方形で埋土に炭・焼土などを含む土坑２基 (821 土坑・853 土坑) も合わせて記述する。

784・786 土坑、785 炉 (図 173)　20 Ａ -9・10h 区で検出した遺構で、３基の遺構が切りあっていた。炭・焼土層を含むのは 785 炉である。上面は 728 溝状遺構の埋土で覆われており、いずれの遺構もそれらの層を除去した後で確認された。785 炉の検出時すでに最終堆積層である暗灰色中砂・シルト混じり極細砂層 (2) とその下層の焼土層 (3) が確認されており、上面は削平されていた。平面形は不整長方形で長軸 2.0 m、短軸 1.2 m、主軸は座標北から 26° 西へ振っている。断面形は二段落ちになっており外側は皿形、中央部分は碗形を呈する。外側の深さが約 0.05 m、中央の最も深いところで深さ 0.22 mを測る。下層 (4) は第 17 層由来の偽礫が多く含まれる中砂混じりシルト層である。784 土坑は 785 炉を切っている。平面形は楕円形で長軸約１m、短軸 0.6 m、

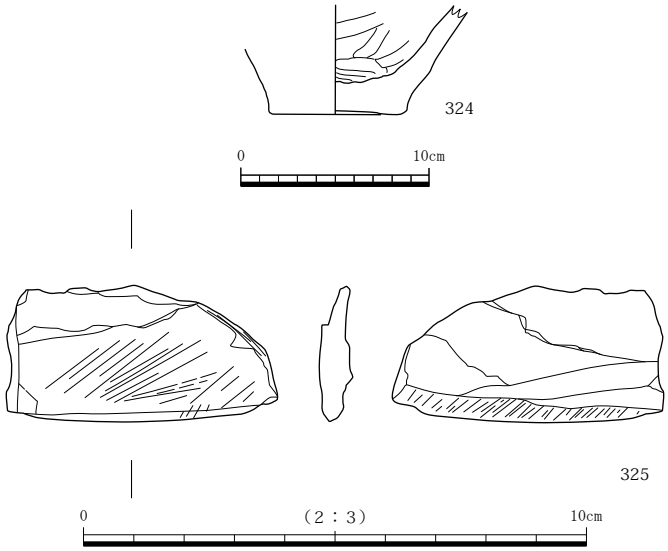


図170　第15面　842溝出土遺物実測図（Ｓ＝１：４・２：３）

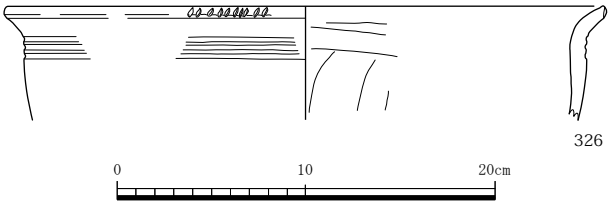


図171　第15面　848溝出土遺物実測図（Ｓ＝１：４）

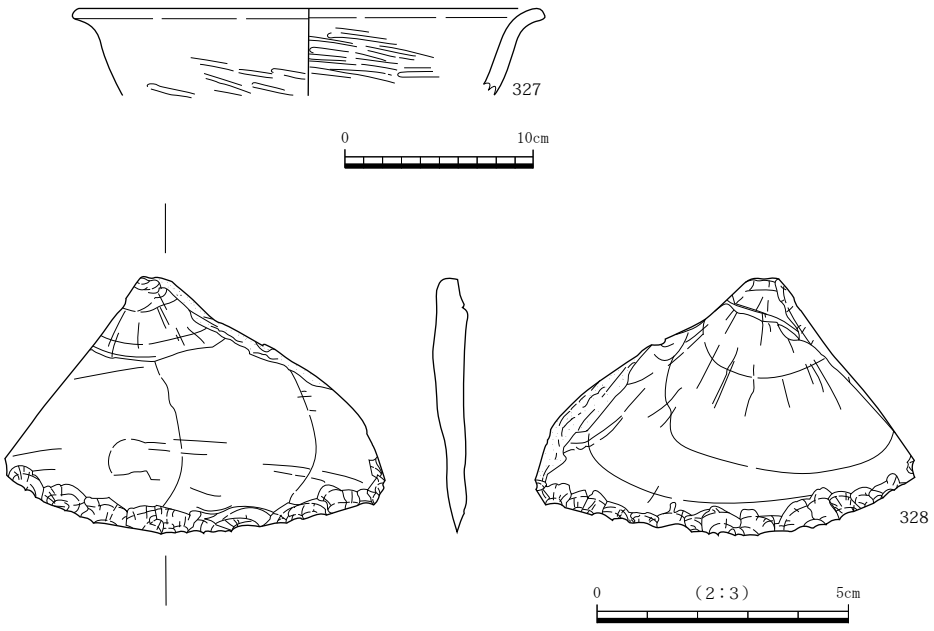


図172　第15面　856溝出土遺物実測図（Ｓ＝１：４・２：３）

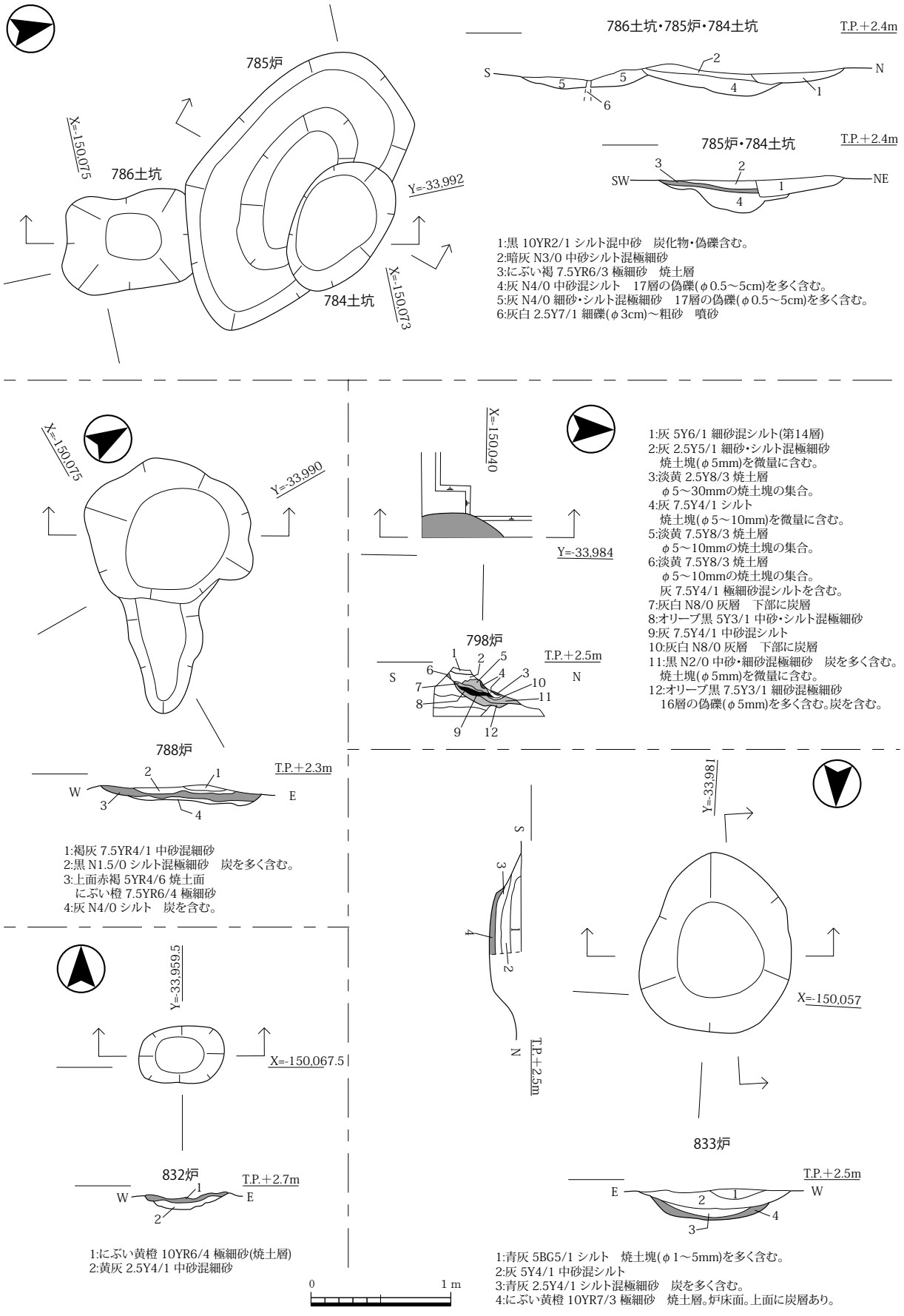


図173　第15面　785・788・798・832・833炉、784・786土坑平・断面図（S＝1:40）

深さ 0.04 mを測る。埋土は黒色シルト混じり中砂の 1 層である。遺物の出土はなかった。786 土坑は 785 炉に切られている。平面形は隅丸長方形で長軸 0.8 m以上、短軸 0.68 mを測る。埋土は灰色細砂・シルト混じり極細砂の 1 層で、層中に第 17 層由来の偽礫が多く確認された。遺物の出土はなかった。

788 炉 (図 173、174・図版 26)　20 A -9・10h 区で検出した。785 炉より東へ 2 mに位置する。上面は 785 炉と同様に 728 溝状遺構の埋土で覆われており削平を受けている。平面形は不整円形で直径は最も長い部分で 1.3 m、その他は約 1 mで、深さは 0.12 mを測る。埋土は 4 層に細分でき最下層 (4) の灰色炭混じりシルト層は炉を造るために敷かれた粘土の可能性が指摘される。(4) の上面は熱を受けておりにぶい橙 (7.5Y6/4) に変色していた (3)。その上面に炭化物を多く含む層 (2) が認められ、最終堆積層 (1) は溝状遺構に由来する層である。(2) 層を洗浄したところ炭化米や魚類・植物遺存体、土器の細片が出土した。その中で図化しえたものは甕の底部 (329) のみである。

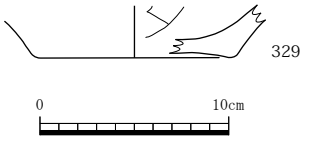


図174　第15面　788炉出土遺物
実測図（S＝1：4）

798 炉 (図 173)　20 A -9d 区で検出した。東側と南側を確認トレンチで北西側を第 13 － 2 面で検出した遺構によって切られており、全体の形状は不明である。断面観察から少なくとも 2 回の造り替えが認められた。最下層 (12) はオリーブ黒色細砂混じり極細砂で第 16 層由来の偽礫と炭を多量に含んでいる。(11) は (12) を炉床として使用した時に堆積した、焼土塊及び炭を多く含む黒色中砂・細砂混じり極細砂層である。その上層に熱を受けた土層 (8) が確認され、それらの上層には炭を多く含む層 (5 ～ 7) が堆積する。その時に底面に敷かれていた粘土層は (10) の灰白色土層である。最終段階で (3・4) 層を埋土とする遺構が切り込んでいた。最上層に堆積していた (1) は基本層序第 14 層である。南側トレンチの断面を観察することによって本遺構の切り込み面は第 14 面までは上がらないことが確認された。しかし遺構の大半が削平されていたことから詳細は不明である。遺物の出土はなかった。

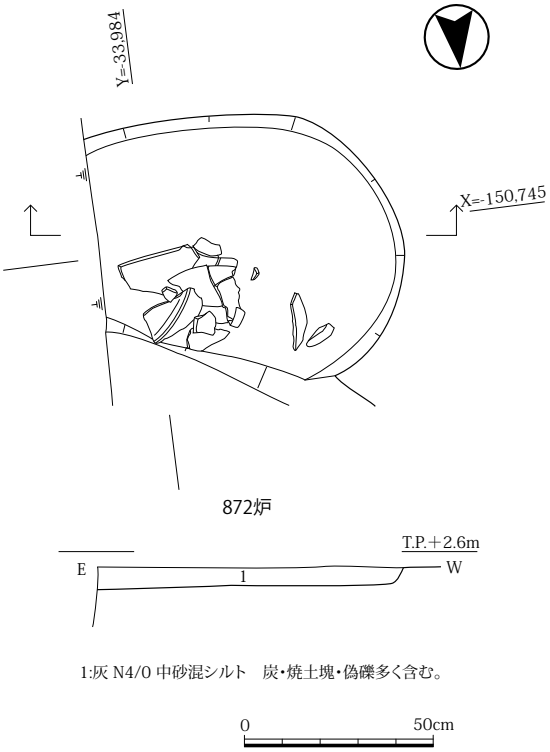


図175　第15面　872炉平・断面図（S＝1：20）

832 炉 (図 173)　20 A -6g 区で検出した。平面形は隅丸方形で、主軸方向は東西方向である。長軸 0.6 m、短軸 0.4 m、検出面からの深さ 0.03 mを測る。遺構全体が熱を受け黄灰色に変色していた。遺構上面で土器の細片が出土したが図化しえなかった。

833 炉 (図 173・図版 26)　20 A -9f 区で検出した。平面形は不整円形を呈し、直径は長径 1.4 m、短径 1.1 m、深さは

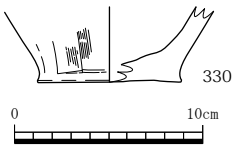


図176　第15面　861炉出土遺物
実測図（S＝1：4）

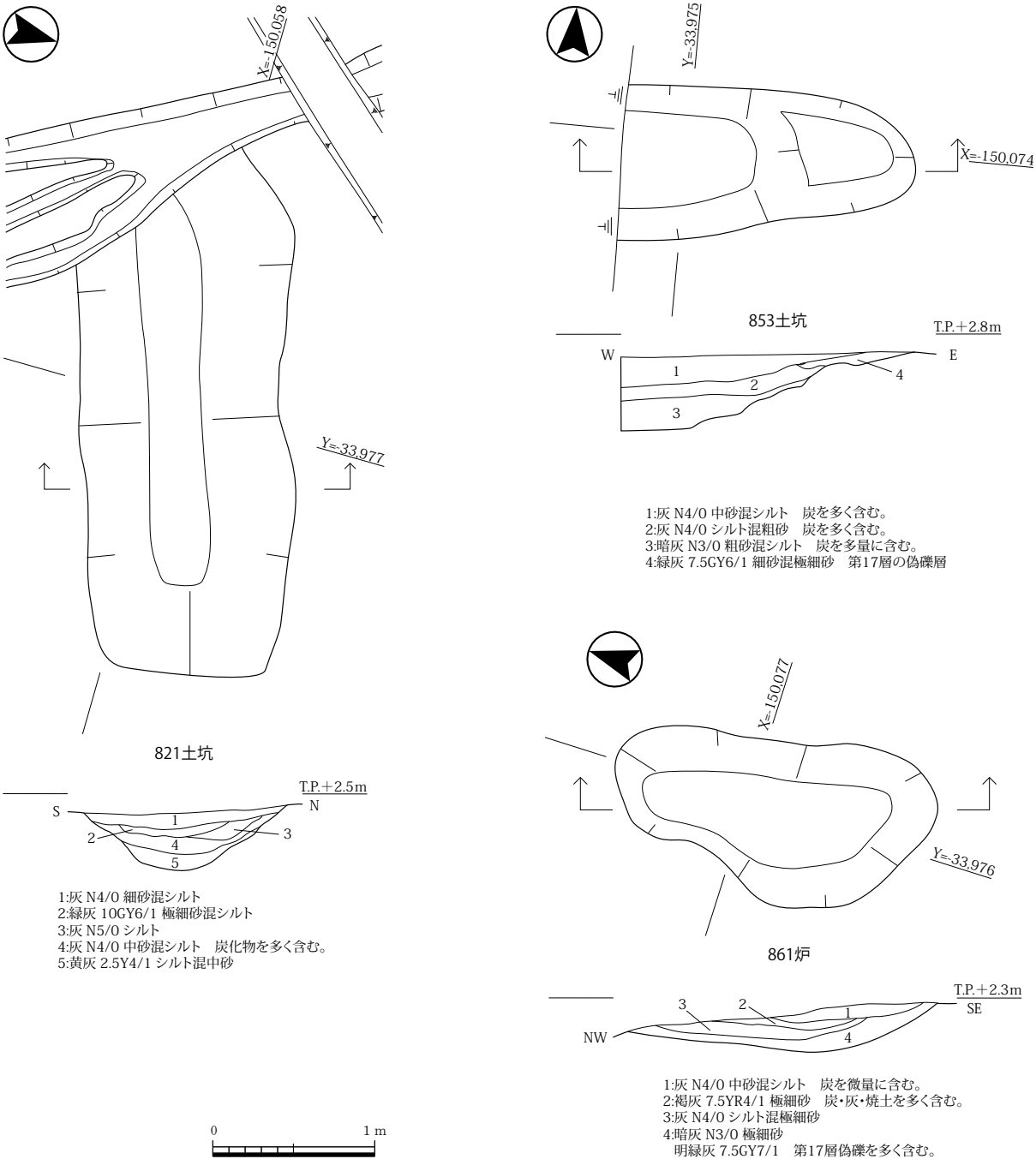


図177　第15面　861炉・821・853土坑平・断面図（S＝1：40）

0.18 mである。炉床面は熱を受けてにぶい黄橙色に変色し (4)、その上面に炭を多量に含む青灰色シルト混じり極細砂層が堆積していた。遺物の出土はなかった。

861 炉 (図 176、177)　20 A -8h 区で検出した。上面は 842 溝状遺構に切られている。床面が熱を受けて変色している痕跡は見られなかったが、(2) 層には多量に炭・焼土塊が含まれていた。平面形は不整形で主軸方向は南北方向である。長軸 1.9 m、短軸 0.8 ～ 1.1 m、深さ 0.3 mを測る。埋土は 4 層に細分される。遺物は甕の底部 (330) が出土した。

872 炉 (図 175、178)　20 A -9h 区で検出した。東側を確認トレンチで、北側を 730 溝状遺構に切られ、遺構底面まで削平されていた。規模は 0.8 × 0.7 mを測り、平面形は不整円形に復原できる。深さ

図178　第15面　872炉出土遺物実測図（S＝1：4）

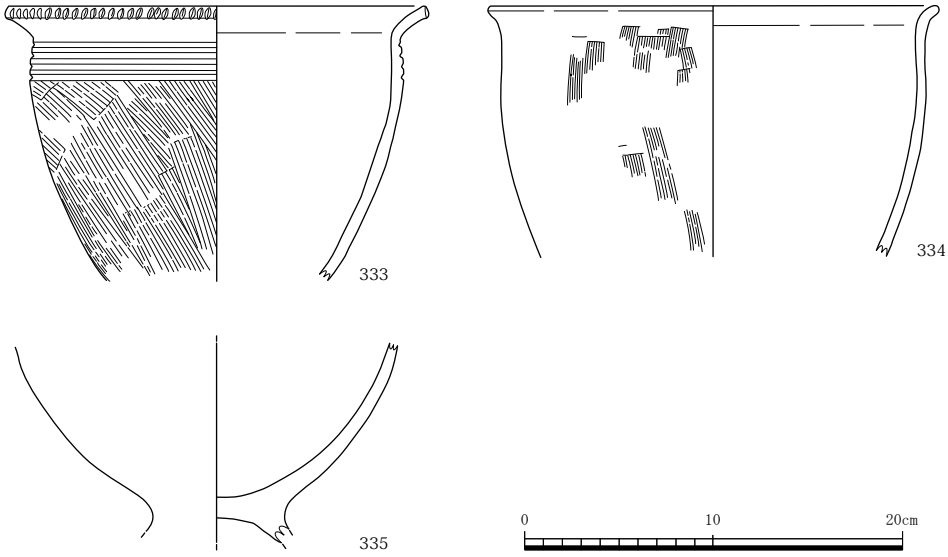


図179　第15面　821土坑出土遺物実測図（S＝1：4）

0.05 m、埋土には炭・焼土塊が多量に含まれていた。遺物は埋土の最上層上面で確認され、大型壺の体部 (331)、甕の口縁部から体部 (332) が出土した。(332) は口縁部の屈曲から 3.4cm 下に貼り付けによる段を作る甕である。

821 土坑 (図 177、179・図版 40)　20 A -8f 区で検出した。主軸をほぼ東西方向にもつ長方形で西側

を 772 溝状遺構に切られ、遺構底面まで削平されていた。長軸の検出長は 3 m、短軸 1.3 mを測る。断面形は碗形で、埋土は 5 層に細分される。(4) 層には多量の炭化物が含まれていた。深さは 0.35 m である。遺物は甕の口縁部から体部 (333・334)、高坏 (335) が出土した。(333) は口縁部を強く外反させる甕で、口縁端部に刻み目を施しており、体部にはヘラ描き沈線を 4 条巡らす。(334) の口縁部は、短く端部は丸く仕上げている。(335) は高坏である。口縁端部と脚部が欠損する。

853 土坑 (図 175、180)　20 A -6・7h 区で検出した。確認トレンチを掘削した際の断面観察では断面形は方形を呈し、約 0.05 mの層厚をもつ炭層が確認された。断面形から方形の土坑もしくは柱穴であると推定して平面プランを確認したところ東側に延び、長軸を東西にもつ隅丸長方形であった。確認トレンチより西側に遺構は続かないので長軸は最大で 2.5 m、検出長 1.8m、短軸は 1.0m を測る。断面形は南北断面で方形、東西断面では遺構の外側から緩やかな傾斜でおちていき西へ 0.7 mの位置で二段落ちになっている。最深部で 0.48 m、一段目の落ちは 0.01 ～ 0.02m を測る。埋土は 4 層に細分され (4) は第 17 層の偽礫を含んでおり、埋没時に土が垂れ込んだものと考えられる。(1 ～ 3) 層はいずれの層にも炭が含まれていたが最下層の (3) で最も多くの炭が確認された。遺物は甕の口縁部から体部 (336)、鉢の口縁部から体部 (337) が出土した。(336) は口縁端部に刻み目を施し、体部にヘラ描き沈線を 1 条巡らす。(337) は弱い如意形口縁の鉢である。

【土坑】 調査区全体で 5 基の土坑を確認した。すべて南東部の微高地上で検出された。

783 土坑 (図 181)　1 A -1h 区で検出した。上面は 728 溝状遺構に削平されている。平面形は 1.6 × 1.4 mを測る不整形を呈し、断面形は浅い皿形で深さ 0.08m を測る。埋土は 3 層に細分され (3) 層は基本層序第 16 層由来の偽礫を含み、(2) 層は若干の炭化物が包含されていた。遺物の出土はなかった。

800 土坑 (図 181)　1 A -1g 区で検出した。南東部分以外、遺構の大半が 725 流路によって削平されていた。南東部の検出レベルは T.P. ＋ 2.3 mであり、このレベルから底面までは深さ 0.8 mを測る。平面形は底面の形状から復原すると卵形を呈する。埋土は 11 層に細分され主としてシルトから細砂で構成される。遺物の出土はなかった。

816 土坑 (図 181、182・図版 40)　20 A -8f 区で検出した。南側半分を確認トレンチによって削平される。断面形は逆台形を呈し、埋土は 4 層に細分される。(2) ～ (4) 層には第 17 層由来の緑灰色極細砂がブロックで含まれていた。主としてシルトから細砂によって構成される。深さは 0.53 mである。遺物は甕の口縁部から体部 (338)、鉢の口縁部から体部 (339)、壺の底部 (340) が出土した。(338) は口縁部を短くほぼ垂直方向に屈曲させる。

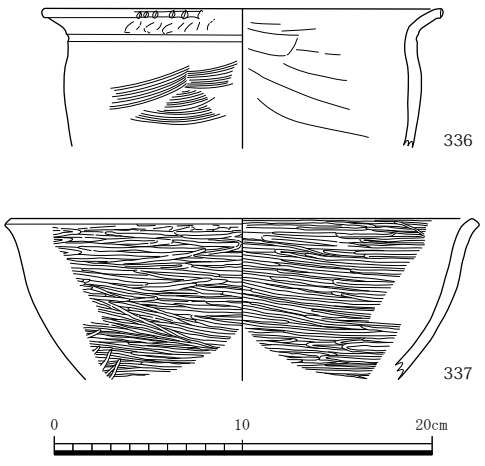


図180　第15面　853土坑出土遺物実測図（S＝1：4）

870 土坑 (図 181)　20 A -7・8f・g 区で検出した。南側を確認トレンチによって削平されている。平面形は長方形で長軸復原長 3.3 m、短軸 1 m、主軸方向は座標北から 17° 西に振っている。断面形は逆台形で埋土は五層に細分され、主として細砂層か

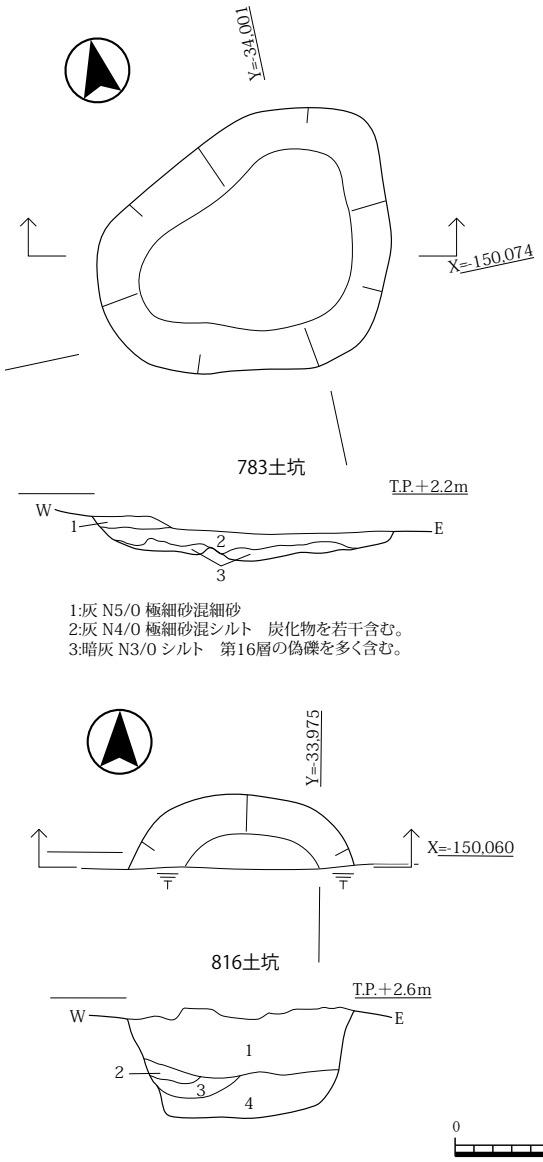


図181　第15面　783・800・816・870土坑平・断面図（S＝1：40）

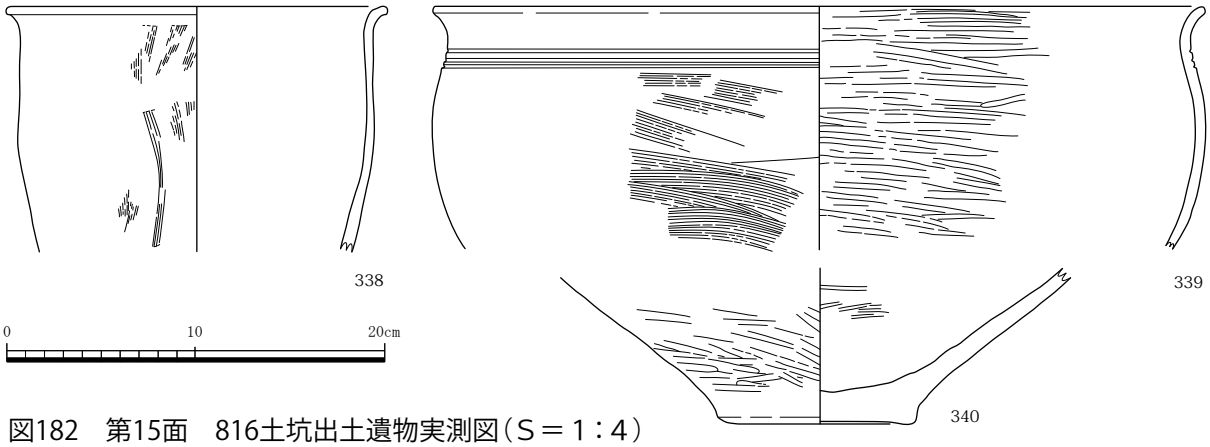


図182　第15面　816土坑出土遺物実測図（S＝1：4）

らなる。形状及び埋土から判断すると木製品水漬け遺構である可能性も指摘しておきたい。遺物の出土はなかった。

【木製品水漬け遺構】 調査区の南東微高地部で検出された。未成品も含め数点の木製品が出土したこと、遺構の位置が湧水地であること、遺構が機能していた時は木製品以外の遺物がほとんど包含されていなかったことなどから本遺構を木製品水漬け遺構として報告する。

本遺構は第 15 面を検出した際、まず溝として認識した。２条の溝 (803 溝・864 溝、835 溝・865 溝) はともに第 14 面で検出した 717 溝に切られるがほぼ並行して掘削され、調査区南側端 (20 A -9i 区) から調査区東側端 (20 A -6f・g 区) に向かい、北西側にやや張り出す弧状を呈している。これらの溝が本遺構を目的として掘削されたものなのか、東側に展開すると推測される集落を画する溝なのかは、本調査段階では推測の域をでない。東側断面観察からはさらに東へと溝が延びていたことだけを記して、今後の調査に期待したい。本遺構の最上層には多量の弥生時代前期の土器が包含されていた。土坑内に木製品の未成品が残存していたことから、これらの遺構はなんらかの理由で遺棄せざる得なかったものと推測される。

木製品の名称・用語、別記していない類例に関しては、奈良国立文化財研究所　1993 年『木器集成図録　近畿原始篇 (解説)』に拠る。樹種鑑定は当センター主査　山口誠治が行った。

以下、各遺構の詳細について記述する。

803 溝 (図 183 ～ 191・図版 19、20、40 ～ 43、49)　20 A -6 ～ 9f ～ i 区で検出した。上面は溝状遺構によって削平され、途中第 14 面 717 溝に切られる。調査時においては 717 溝より東側を 864 溝、西側を 803 溝として図面作成、遺物の取上げを行った。現場作業での再検討及び整理作業も含め最終的にこれらの溝は同一の溝であると判断したため、ここで合わせて報告する。ただし 864 溝内では木製品水漬け遺構は検出していない。検出総延長は途中 717 溝によって切られるが約 35 m、幅約 2.5 m を測る。溝内 20 A -8・9h 区で２基の土坑 (①・②) を検出した。

本遺構埋土上層から多量の弥生時代前期の土器、片岩製の石棒 (390)、サヌカイト製の石錐 (391)、打欠石錘 (392・393)、土製投弾 (394・395) が出土した。土器の器種は壺蓋 (342 ～ 346)、ミニチュア壺蓋 (347)、壺 (341・348 ～ 356・359)、ミニチュア壺 (357・358)、大型壺 (360 ～ 362)、甕蓋 (363)、甕 (364 ～ 366・368 ～ 378)、小型甕 (367)、鉢 (379 ～ 383) である。

(342・343) は環状のつまみ部を作り、その中心に穿孔を施す。(344・347) は二股に枝分かれした角状の突起を作り、その間に穿孔を施す。(345) は頂部が欠損しているが、笠形の壺蓋であったと考えられる。(346) は突起状のつまみ部を作る壺蓋で、つまみ部の側面に穿孔を施す。(341) の口縁部は緩やかに屈曲し、端部は丸く仕上げる。頸部にヘラ描き沈線を２条巡らす。 (348) は頸部にヘラ描き沈線が３条残存している。(349) は肩部から頸部が直線的に立ち上り、口縁部は外反する。頸部に削り出し突帯、肩部にヘラ描き沈線を３条巡らす。(350) は頸部に貼り付け突帯を巡らせた後、刻み目を施す。内面に粘土紐の継ぎ目が明瞭に観察される。(351) は頸部に削り出し突帯を巡らせた後、突帯上にヘラ描き沈線を４条巡らす。(352) は頸部から口縁部への粘土帯を貼り付ける際に、口縁下端にナデを施し、段を作り出している。肩部に削り出し突帯を巡らせた後、ヘラ描き沈線を２条施す。(353) は口縁端部にヘラ描き沈線を巡らした後、刻み目を施す。頸部はヘラ描き沈線が５条残存する。(357) はミニチュアの壺で、頸部と肩部にヘラ描き沈線を２条ずつ巡らす。内外面にナデを施し、粘土紐の継ぎ目が

図183　第15面　803溝平面図（S＝1：40）

明瞭に観察される。 (361) はほぼ完形に復原できた大型壺である。口径 36.4cm、底径 13.1cm、器高 54.3cm、胴部最大径 48.0cm を測る。体部下半は横方向のハケメの後縦方向のヘラミガキ、体部上半から口縁部まで横方向のヘラミガキを施す。これは分割成形の結果と考えられる。頸部には削り出しによる段を作り、段の下と体部にヘラ描き沈線を２条巡らせる。(364・365) はほぼ直線的に立ち上がる体部から口縁部は短く屈曲する。 (364) はヘラ描き沈線を２条施す甕である。(366・368 ～ 372) はやや内弯気味に立ち上がる体部から口縁部は短く屈曲する。(367) は小型甕である。口縁端部に刻み目を施すものは (364 ～ 366・369 ～ 372) で、ヘラ描き沈線を２条施すものは (364・366) である。(365)

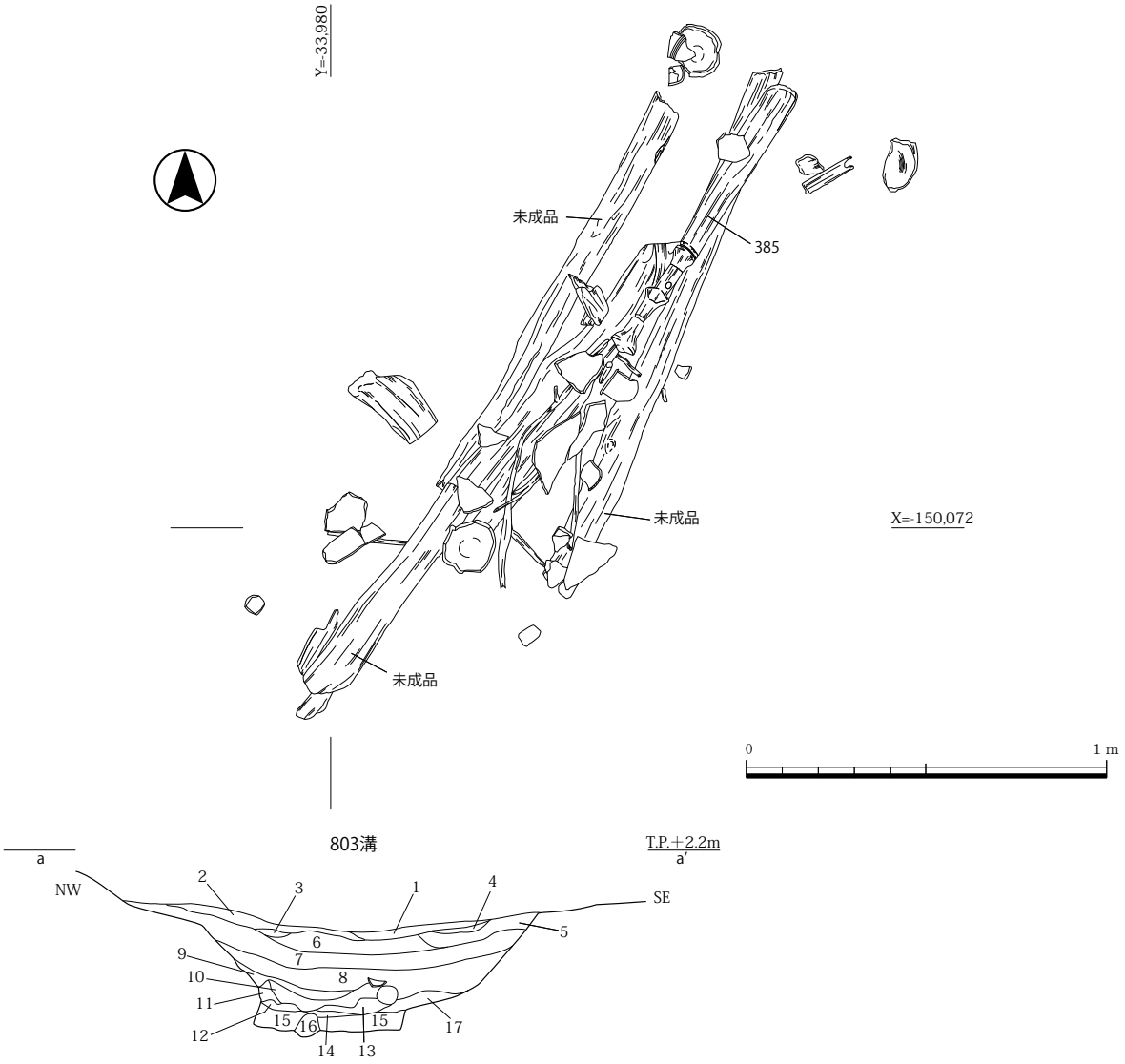


図184　第15面　803木製品水漬け遺構-①遺物出土状況図（S＝1：20）・断面図（S＝1：40）

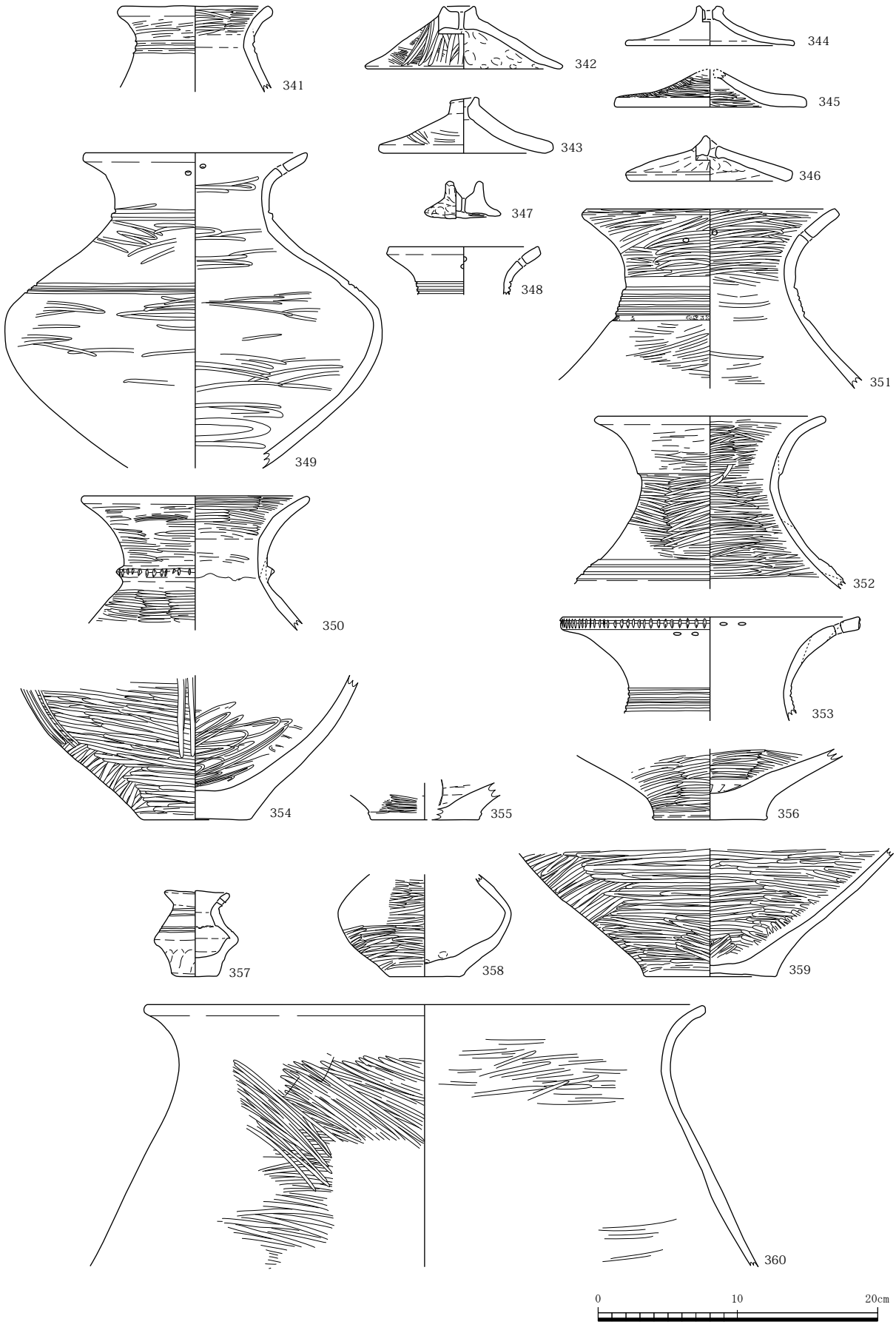


図185　第15面　803溝出土遺物実測図（1）（S＝1：4）

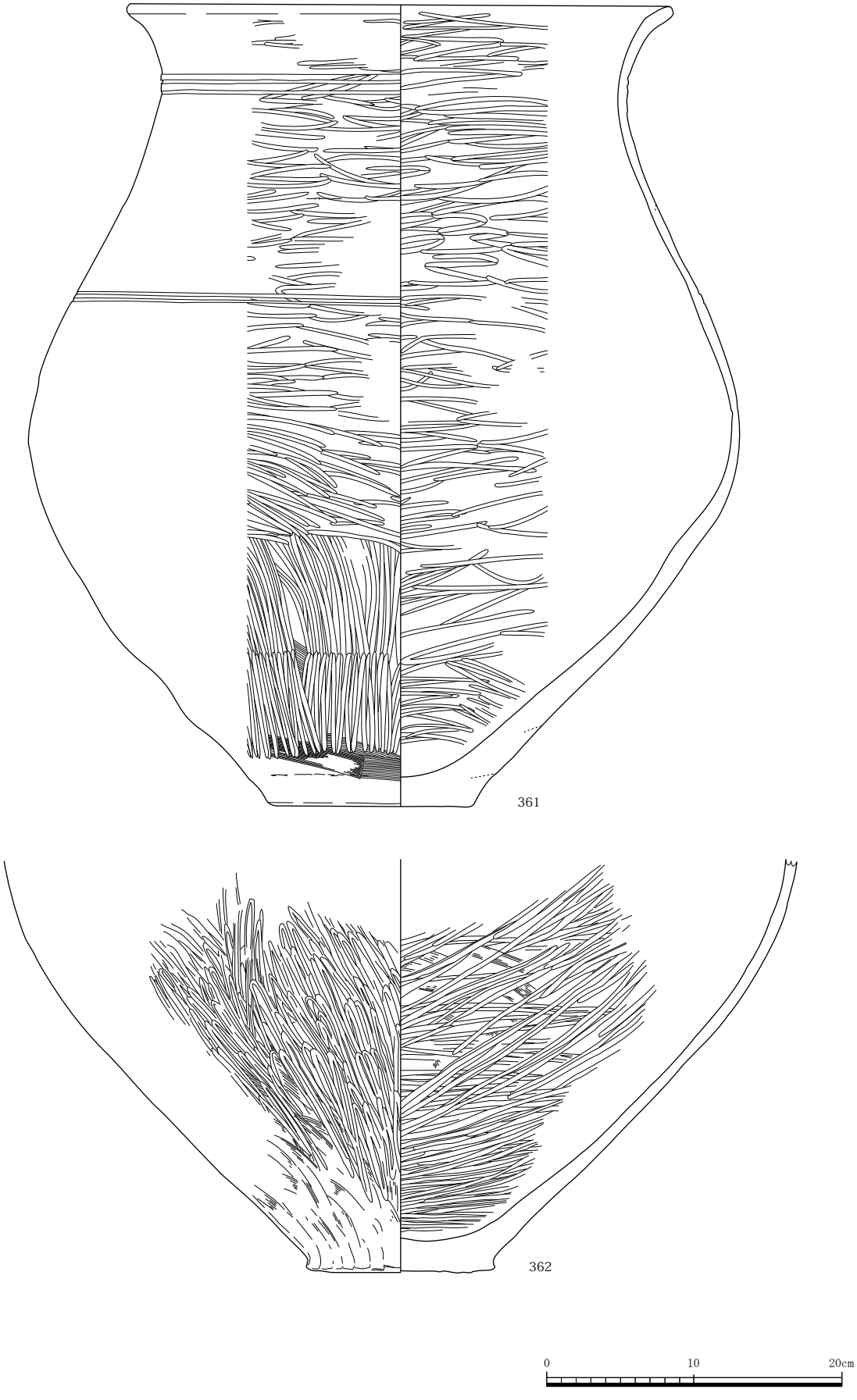


図186　第15面　803溝出土遺物実測図（2）（S＝1：4）

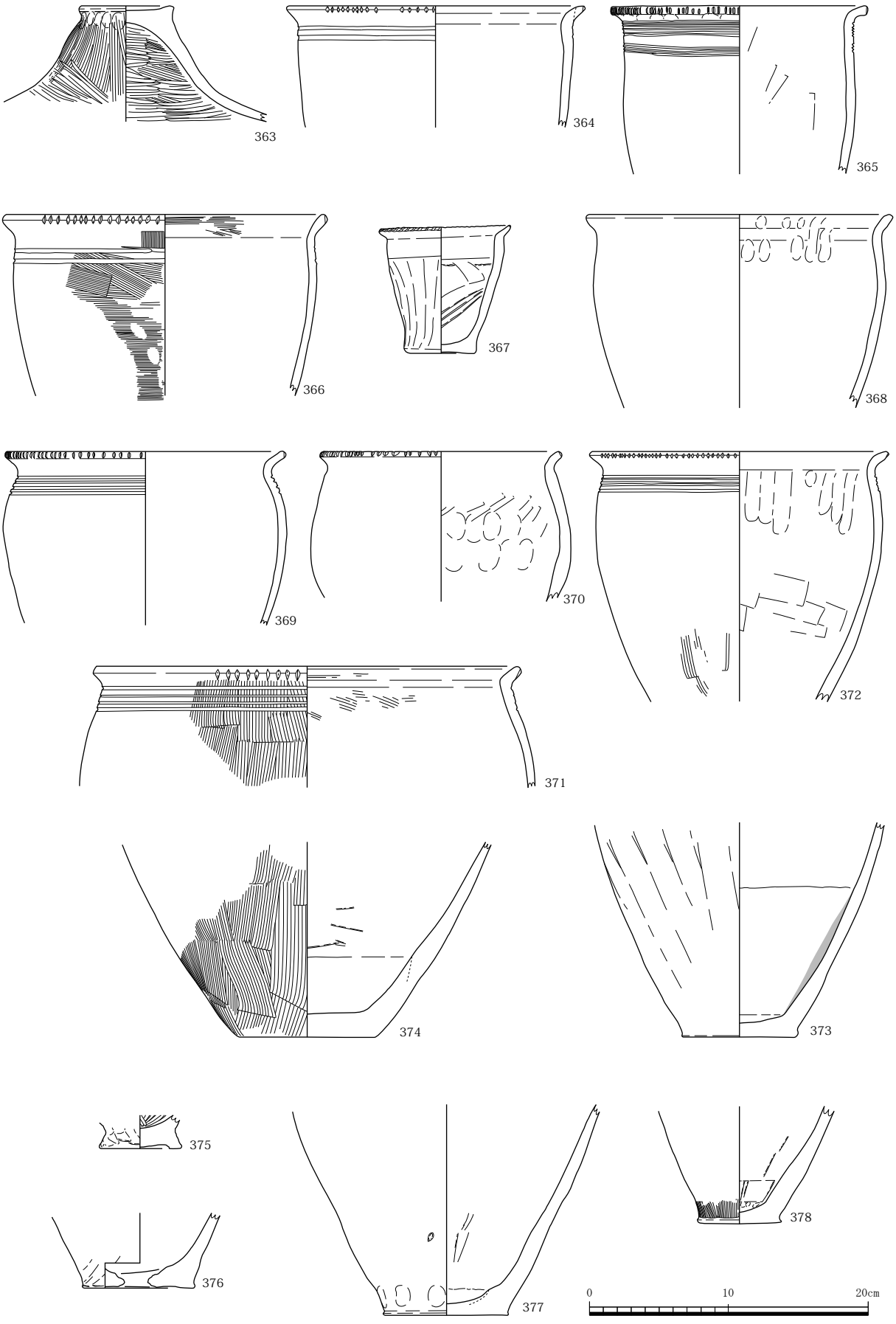


図187　第15面　803溝出土遺物実測図（3）（S＝1：4）

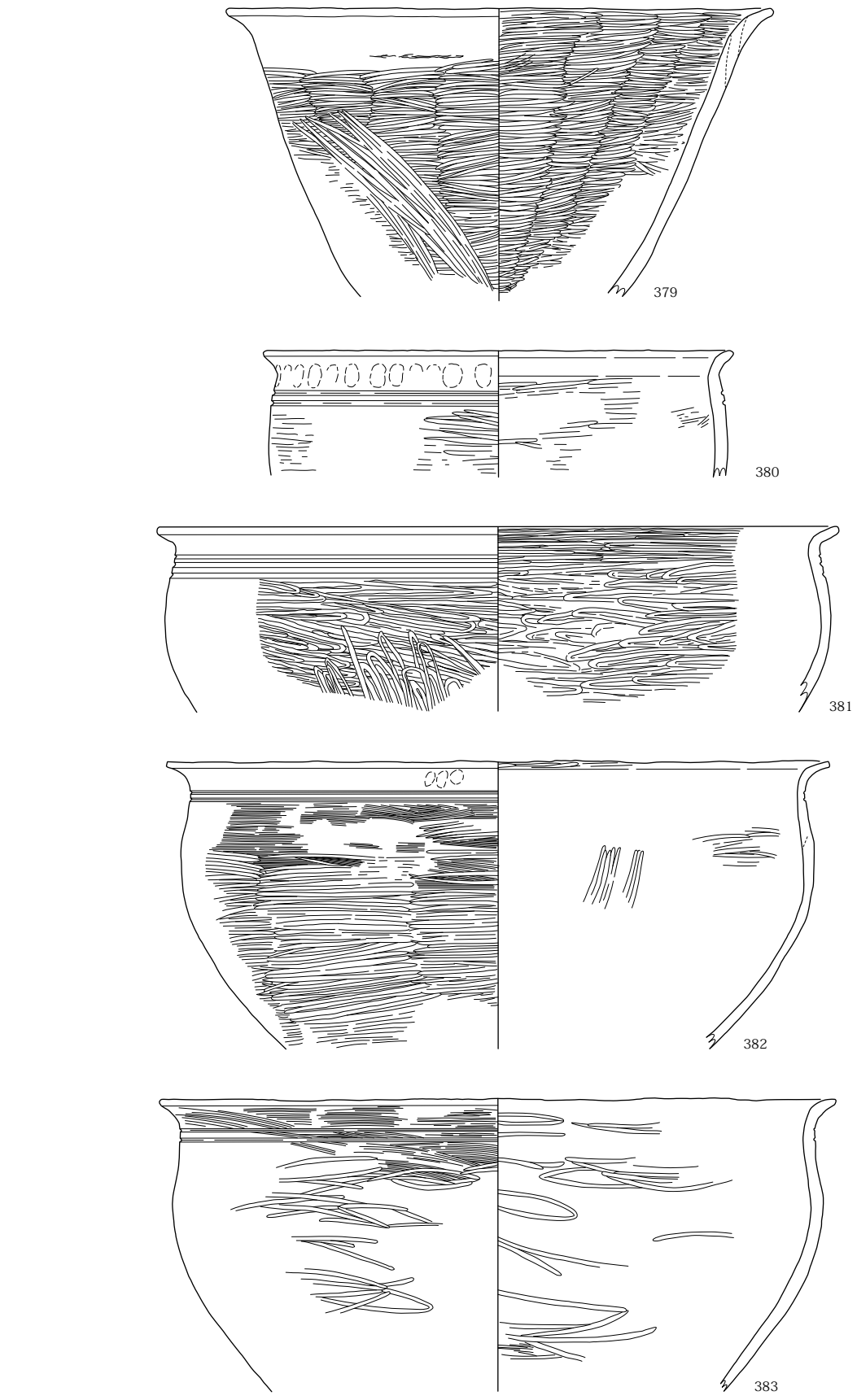


図188　第15面　803溝出土遺物実測図（4）（S＝1：4）

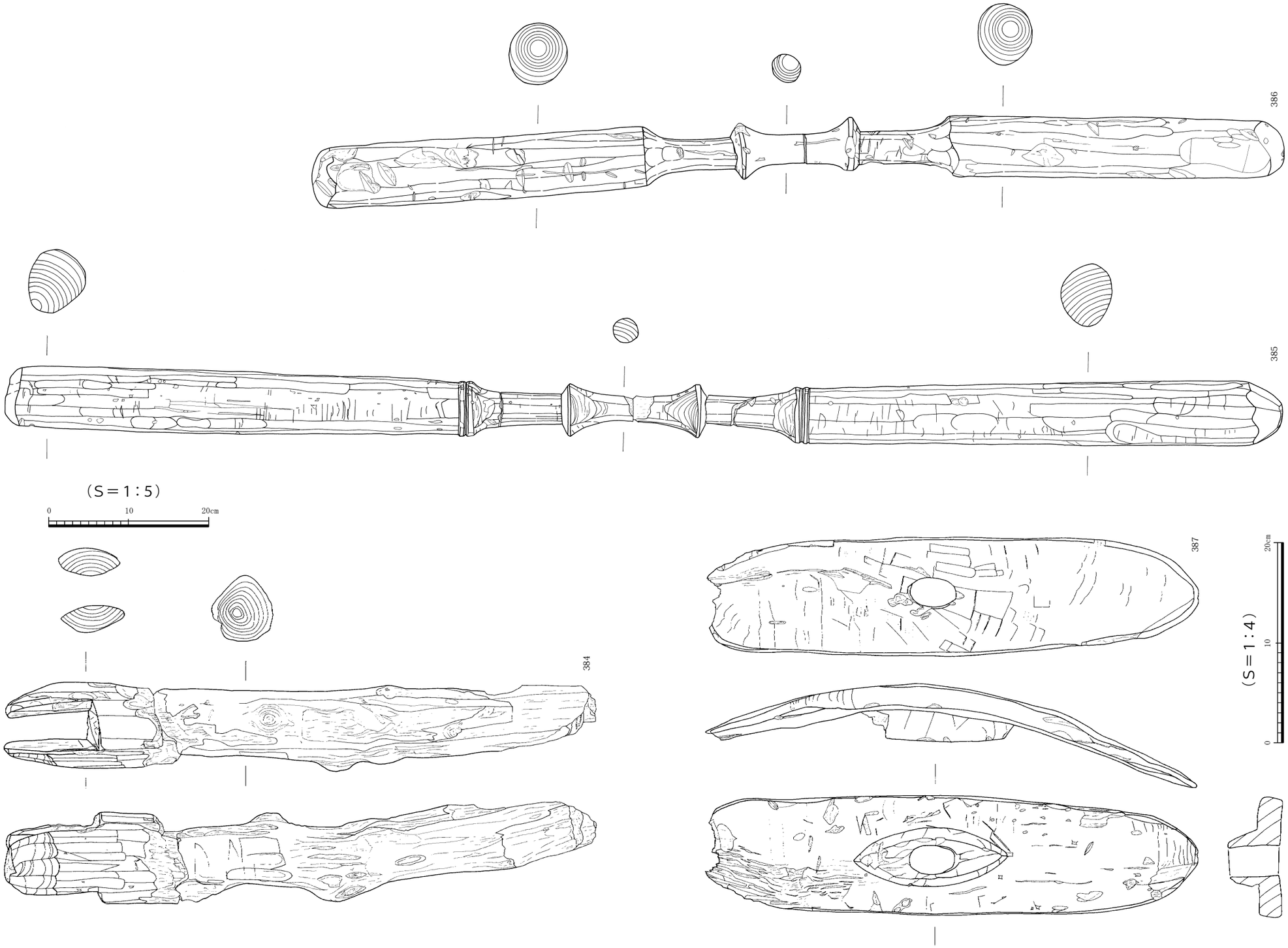


図189　第15面　803木製品水漬け遺構-①(385)・835木製品水漬け遺構-④(384・386)・-⑤(387)出土遺物実測図(S＝1：5・1：4)

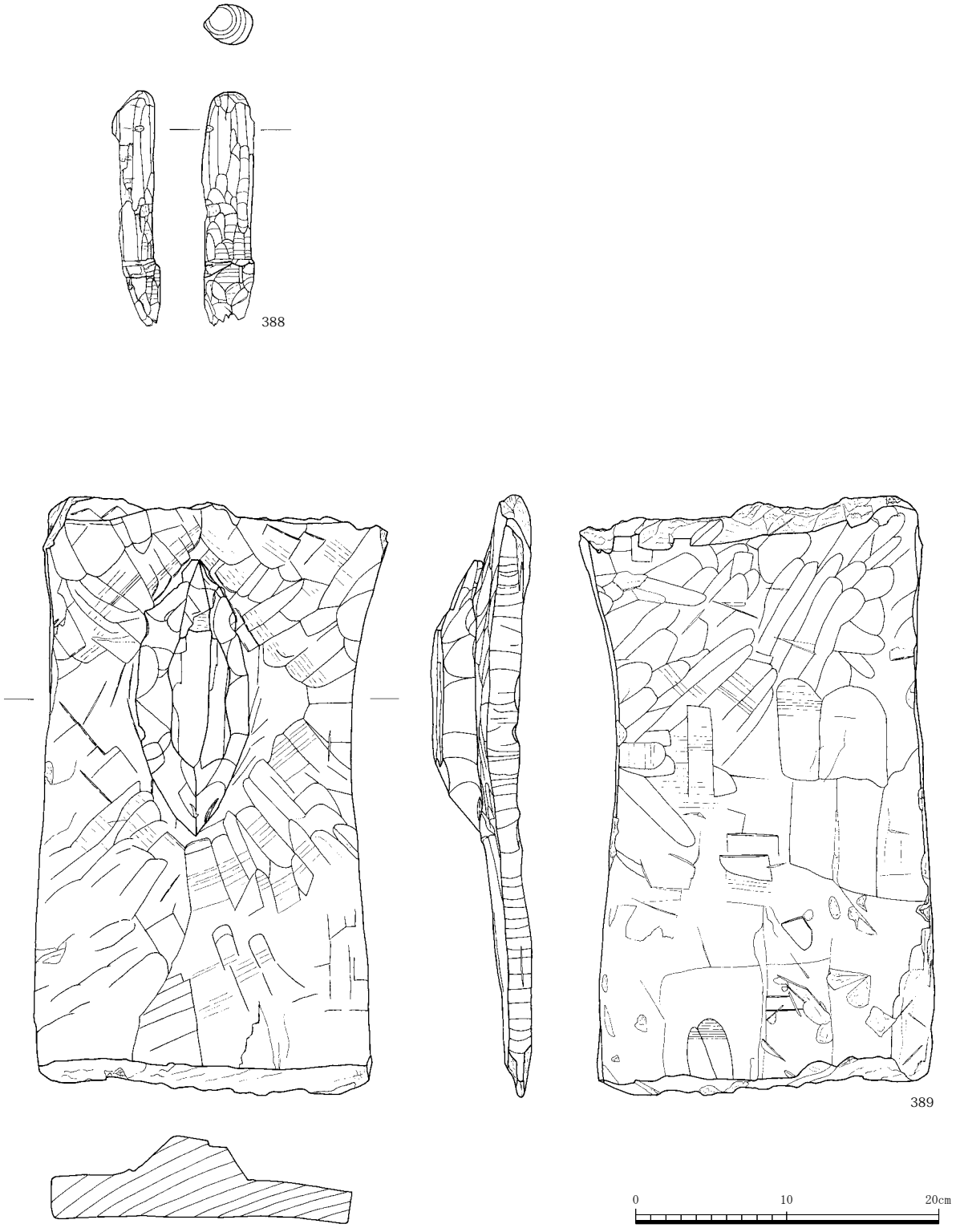


図190　第15面　803溝(388)、835木製品水漬け遺構-⑤(389)出土遺物実測図(S＝1：4)

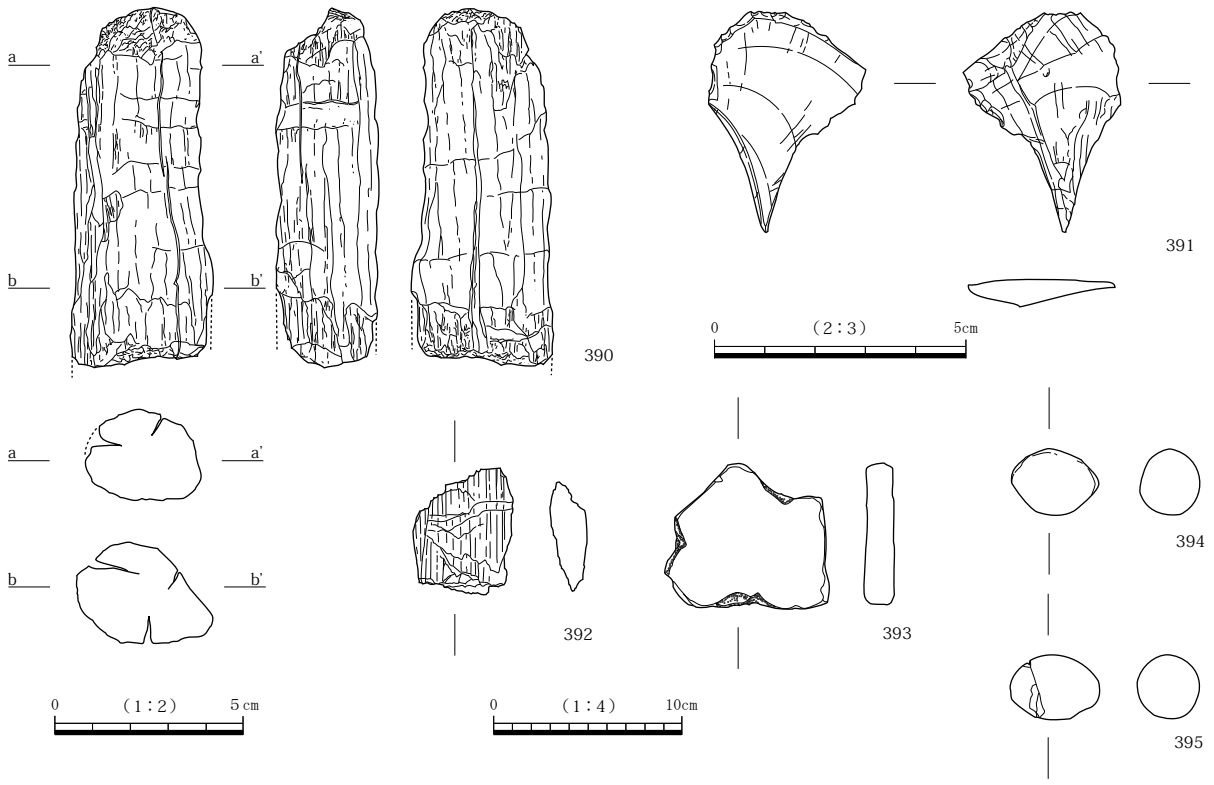


図191　第15面　803溝出土遺物実測図(5)(S＝1:2・1:4・2:3)

は5条及び3条、(369・371・372) は4条のヘラ描き沈線を施す。(375) の底部はドーナツ状を呈する。(376) は底部中央を内から外へ穿孔しており、甑として使用された可能性がある。(379) の鉢は体部が外傾しながら立ち上がり、口縁部をやや外反させる。(380) は体部がやや内弯しながら立ち上がり、口縁部は短く外反する。(381 ～ 383) はほぼ同様の形態をしており、内弯気味に立ち上がる体部から口縁部を外反させる。(380・382・383) はいずれも肩部にヘラ描き沈線を2条施す。(390) は結晶片岩製の石棒である。基部は欠損する。(392・393) は打欠石錘である。(392) は結晶片岩製の破片である。(393) は花崗岩製で、3箇所の打ち欠きが認められた。(394・395) は紡錘状を呈する土製の投弾である。(394) は完形品である。規模は長さ 4.6 ㎝、幅 3.5 ㎝、重さ 36.1 g である。(395) は一部欠損する。規模は長さ 4.2 ㎝、幅 3.45 ㎝、残存する重さ 37.8 g である。

木製品水漬け遺構－①　平面形は不整長方形を呈し、長軸 4.2 m、短軸 1.3 ～ 1.8 mを測る。断面形は北西側が 803 溝から一段段差をもって掘り込まれ、南東側は緩やかにおちる。下層は碗形に掘削された後、角度をもってほぼ垂直におち、底面が平らとなる箱状を呈する。埋土は 17 層に細分されるが大きくは2層、木製品が出土した層 (10 ～ 17：主として極細砂混じりシルト層) と上層 (1 ～ 9 ：主として細砂から中砂層) である。遺物は (8) 層内で検出され、弥生時代前期の土器を含め、竪杵などの木製品、竪杵製作のためと推定される原木、イノシシの下顎骨 (図版 20) などが出土した。

木製品水漬け遺構－②　平面形は長方形を呈し、東西の肩は溝と同一であり、南北のおちだけが確認された。長軸 3.6 m、短軸 1.8 m、深さは 0.2 mを測る。埋土は5層に細分されオリーブ黒色中砂から粗砂層で溝の最終堆積層である。上面から多量の土器や木材が出土した。

出土木製品　本遺構内より、完形の木製品の竪杵が出土した。木製品は製品・未成品も含め6点、原木

などが確認されている。木製品については、835 木製品水漬け遺構で出土したものも含めここでまとめて報告する。

竪杵 (385) は 803 木製品水漬け遺構－①から出土した。握り部２箇所に節帯を有する A 類に相当し、握り部との境近くに沈線が 1 条巡る。搗き部端片側は丸く仕上げ、もう一方端は平坦に仕上げている。丸く仕上げている側は使用痕が確認される。全長 159.2 ㎝、搗き部の直径は 7.9 ㎝、握り部の長さ 40.4 ㎝、節帯間の長さ 16.5 ㎝、直径 3.5 ㎝を測る。大きさでは大阪府池上曽根遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡のものと同様であるが、握り部との境近くに沈線を巡らすものとしては大阪府東奈良遺跡で類例が確認されている。樹種はコナラ亜属である。他に竪杵を製作するために水漬けされていたと推測されるコナラ亜属 (２本) とアカガシ亜属 (１本) の原木が本遺構から出土した。(384・386・388) は 835 木製品水漬け遺構－④から出土した。(384) は用途不明木製品で建築部材である可能性が指摘される。残存長 73.9 ㎝、幅 10 ～ 11 ㎝を測る。先端から約 10 ㎝下の部分を約 1.3 ㎝外側から垂直に削りおとした後、凹型状の刳り込みを施す。刳り込みの長さは約 10 ㎝、幅は 3.7 ㎝を測り、底面は平坦に仕上げている。両側面ともに長さ約 7 ㎝、先端に向かって加工が施され端部を細くしている。片側端は欠損している。樹種はヤマグワである。竪杵 (386) は握り部２箇所に節帯を有する A 類である。搗き部端片側は丸く仕上げ、片側は平坦に仕上げている。丸く仕上げている側は使用痕が確認される。全長 121 ㎝、搗き部の直径は 7.7 ㎝、握り部の長さ 38.4 ㎝、節帯間の長さ 14 ㎝、直径 3.6cm を測る。大きさ・形態とも奈良県唐古・鍵遺跡のものと類似する。樹種はヤブツバキである。(388) は上層の溝から出土した陽物形木製品である。先端部分は欠損する。残存長 15.4 ㎝、最大幅 3.35 ㎝、最大厚 2.7 ㎝を測る。弥生時代前期の陽物形木製品の類例としては奈良県唐古・鍵遺跡 (田原本町教育委員会　奈良県立橿原考古学研究所編 1973 年『唐古・鍵遺跡発掘調査概報』) と香川県中の池遺跡 (丸亀市教育委員会 (財) 元興寺文化財研究所　2004 年『中の池遺跡』第９・10 次調査　総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書) で確認されている。(387・389) は 835 木製品水漬け遺構－⑤から出土した。(387) は直柄平鍬で、側面から見て隆起のある面を内弯面として弓形に反る狭鍬Ⅰ式である。平面形は長楕円形で上端は欠損しているが、下端には刃部が確認される。長さは 49.2 ㎝、身幅 11.7cm、厚さ 2.4cm を測る。隆起部の長さは 15.3cm、最大幅 6.0cm、厚みは 3.0cm を測る。柄孔は楕円形で 4.4 × 3.0cm を測り、着柄角度は身に対してほぼ直角である。奈良県唐古・鍵遺跡に類例が見られる。樹種はクヌギである。(389) は直柄平鍬で、側面から見て隆起のある面を外弯面として若干弓形に反る広鍬Ⅰ式の未成品である。平面形は長方形で長軸中心線よりやや上部の側面にくびれをもつ。くびれ部とほぼ同じ高さに柄孔を造り出す隆起が存する。柄孔が穿たれない段階での未成品であり、根岸修氏のいう第 4 段階、整形段階にあたる (根岸修　1976 年『木製農耕具の意義』考古学研究)。長さ 39.5cm、上・下端幅 22 ㎝、くびれ部幅 19.2 ㎝、厚み 3.0cm、隆起部長さ 17.8 ㎝、最大幅 7.4 ㎝、高さ 2.6 ㎝を測る。樹種はクヌギである。この段階での未成品の類例としては大阪府瓜破遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡などで確認されている。

864 溝 (図 192 ～ 196・図版 21、25、53、54)　第 14 面 717 溝に切られた東側部の 864 溝は、803 溝に繋がる溝であると判断しここで記述する。幅約 1.8 mを測る。断面は二段落ちになっており、皿状に掘削されたのちほぼ垂直に掘削される。深さは最も深い部分で 0.75 m、一段目の落ちでは 0.42 m を測る。堆積状況から遺構の切り合いと２回の埋没時期が確認された。最下層 (16) はオリーブ灰色中砂混じりシルト層で第 17 層由来の偽礫を多く含む層であり人為的に埋め戻された可能性が高い。(5 ～

図192　第15面　864溝遺物出土状況図（1）（S＝1：40）

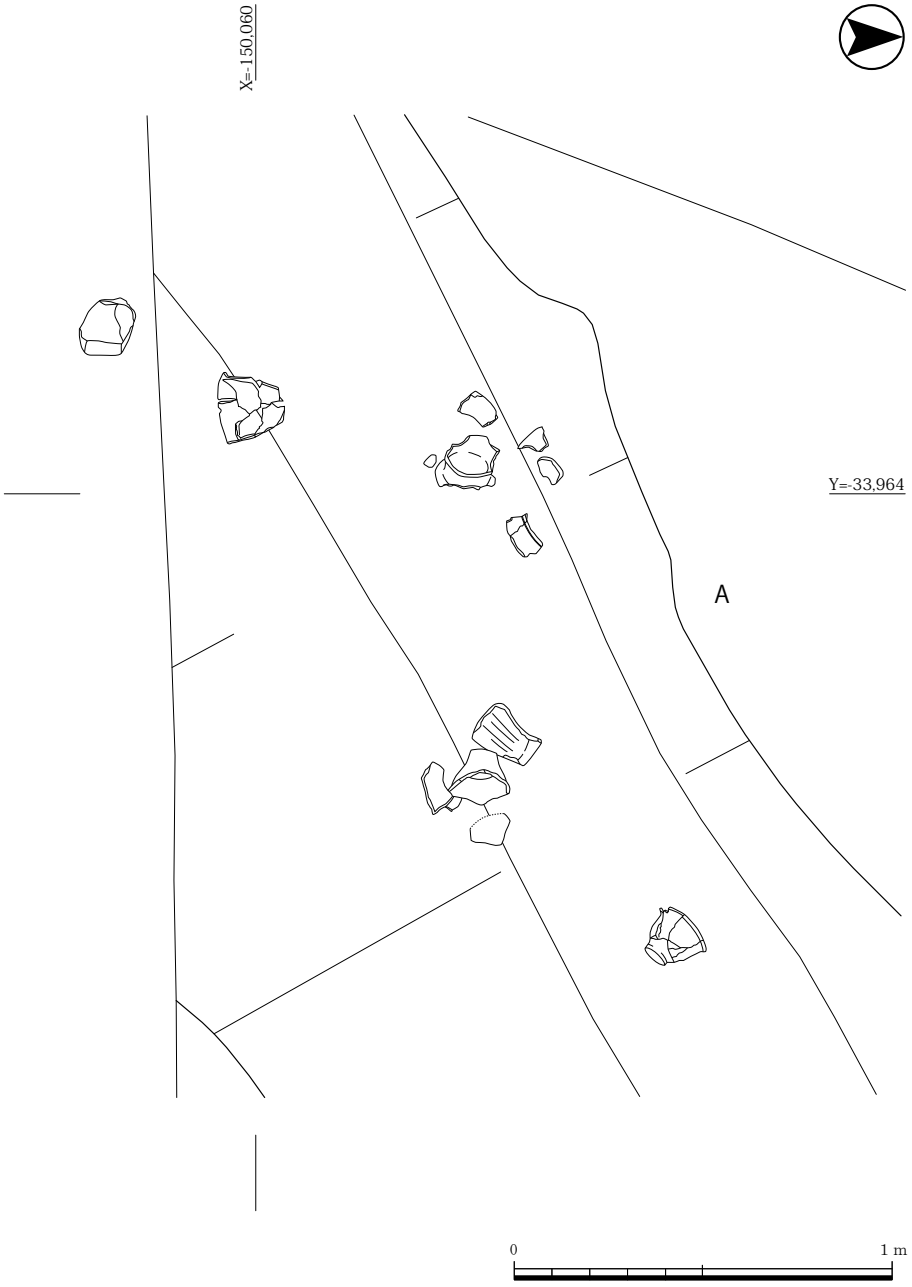
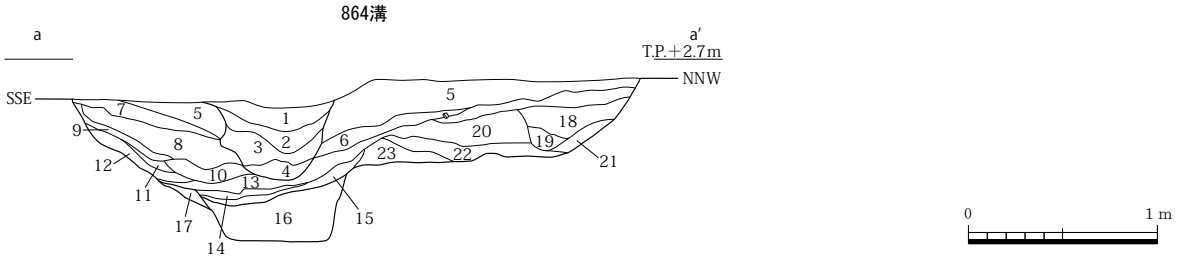


図193　第15面　864溝遺物出土状況図（2）（S＝1：20）

17) 層は砂層を主体とする層で、溝に流水があった状況が確認される。(1 ～ 4) 層は粗砂混じりのシルト層で溝が埋没した後に切り込まれた遺構である。下層の断面形状が木製品水漬け遺構との類似性が高いことから同様の土坑が掘削されていた可能性が指摘される。調査区の端であることから平面形全体は検出できなかった。東側の調査に期待したい。

遺物としては壺 (396 ～ 402・407)、甕蓋 (403)、甕 (404 ～ 406・408 ～ 411)、鉢 (412・413)、管状土錘 (414) が出土した。(396) は 6 条の櫛描き紋を 2 帯施す壺の肩部の破片と考えられる。弥生時代中期の遺物である。(397 ～ 400) はやや内弯する頸部から口縁部が外反する。(398) の口縁端部はヘラ描き沈線を 1 条巡らせた後刻み目を施す。口縁部内面には竹管紋を 4 段巡らす。頸部には貼り付け

図194　第15面　864溝遺物出土状況図（3）(S＝1：20)



1:灰 N5/0 粗砂混シルト
2:灰 N6/0 粗砂・シルト混細砂
3:灰 N5/0 細砂混シルト
4:灰 10Y5/1 シルト・極細砂混中砂　炭含む。
5:暗青灰 5B4/1 シルト
6:灰 N5/0 粗砂・細砂混中砂
7:暗灰 N3/0 粗砂混極細砂
8:浅黄 5Y7/3 細礫(φ1～5mm)～細砂　最下層に第17層の偽礫(φ5～30mm)含む。
9:灰 N4/0 中砂混細砂
10:灰 N4/0 中砂・極細砂混細砂　9と同一層か。炭含む。
11:暗灰 N3/0 シルト混極細砂　炭含む。
12:オリーブ灰 5GY6/1　シルト混極細砂
13:黒 N2/0 細砂混シルト
14:暗灰黄 2.5Y5/2 極細砂混中砂
15:灰 N4/0 シルト混細砂　炭含む。
16:オリーブ灰　5GY6/1 中砂混シルト　第17層の偽礫(φ5～30mm)含む。
17:オリーブ灰 2.5GY6/1 細砂・シルト混極細砂
18:暗灰 N3/0 極細砂混シルト
19:灰 N4/0 シルト混極細砂
20:黒 10Y2/1 極細砂混シルト
21:黒 7.5Y2/1 極細砂混シルト　20と同一層か。
22:緑灰 7.5GY5/1 シルト混極細砂
23:オリーブ灰 5GY5/1 極細砂

図195　第15面　864溝断面図（S＝1：40)

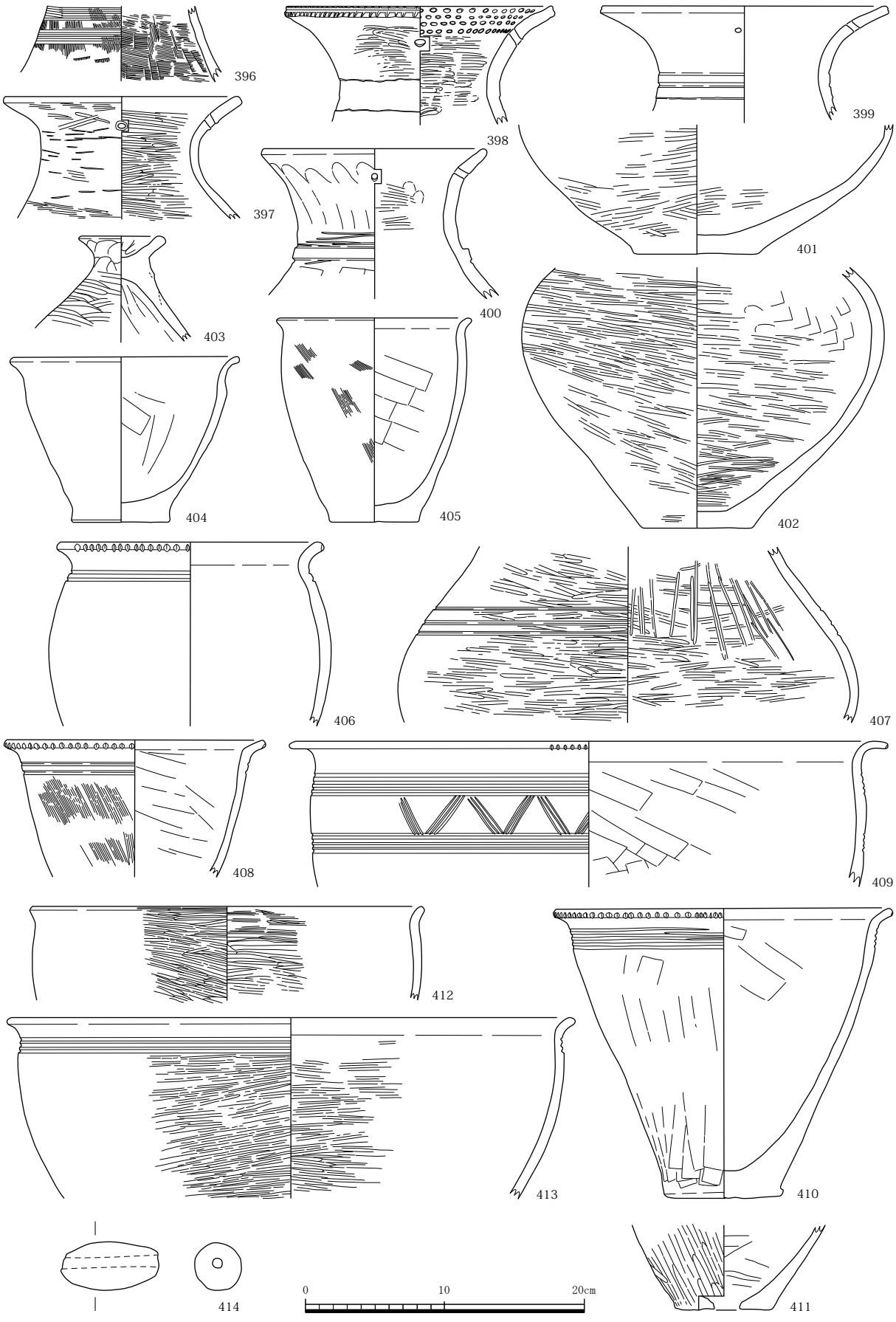


図196　第15面　864溝出土遺物実測図（S＝1：4）

突帯剥離痕が見られる。剥離痕の下にヘラ描き沈線が１条巡っており、突帯を貼り付けるときに、粘土が貼り付きやすくするためであると考えられる。(399) は頸部に削り出し突帯を巡らす壺である。突帯上にヘラ描き沈線を１条巡らす。(400) は頸部に高く削り出した幅約８㎜の突帯を巡らす壺である。(401・402) は壺の体部から底部である。(403) は甕蓋であり、受け皿状のつまみ部を作る。(404) の甕は底部からやや内弯気味に外傾し、口縁部を外弯させる。ほぼ完形に復原できた甕で、器表面剥離のため調整が不明瞭だが、体部内面は板ナデを施している。(405) は底部からやや内弯しながら立ち上がり、口縁部は短く外反させる。(407) は壺の体部片で、ヘラ描き沈線を３条巡らせる。いずれの沈線も段を意識して施しているように見うけられる。 (408) は口縁部直下にヘラ描き沈線を２条巡らす。(409) はほぼ直線的に立ち上がる口縁部を垂直方向に屈曲させる。体部にヘラ描き沈線を４条ずつ２帯巡らせ、その間にヘラ描き沈線３条からなる山形紋を施す。(410) の体部は底部からほぼ直線的に外傾して立ち上がり、口縁部を短く外反させる。ほぼ完形に復原できた甕である。屈曲部下にヘラ描き沈線を４条巡らす。(411) は甕の底部である。外面に縦方向のヘラミガキを施している。底部は焼成後に内から外へ穿孔しており、甑として使用された可能性がある。 (412) は口縁部を弱く外反させる鉢である。(413) は (412) と比べ口縁部を強く外反させる鉢で、口縁部直下にヘラ描き沈線を３条巡らす。

835 木製品水漬け遺構・865 溝　20 A -7g・h 区で検出した。南側を第 14 面 717 溝に切られる。地形は緩やかに北西方向に下がっており、基本層序第 14 層の堆積がこの地区では厚くなっていた。第 14 層を除去した後、微高地上を北西方向にはしる溝状遺構の堆積層を除去し本遺構を検出した。検出時は溝と認識し掘削を始めたため上層溝の縦断面は部分的にしか残せなかった。本遺構南西部の木製品水漬け遺構④・⑤の上面は第 14 面 717 溝の機能時に大きく削平を受けていた。木製品水漬け遺構⑤の上面からは後述する人形土製品 (558) が出土した。詳細は第４章にて記述した。また 865 溝は 835 溝と同一の溝である可能性が高いのでここで合わせて報告する。

835 溝 (図 197 ～ 214・図版 21 ～ 24、43 ～ 53、59)　検出長 12.5 m、幅 1.6 ～ 1.7 m、深さ 0.4 mを測る。木製品水漬け遺構が埋没した後の遺構である。埋土は６層に細分されるが、３層に大別され下層 (6) はオリーブ黒色中砂混じりシルト層で炭をわずか含んでいた。遺物の出土はなかった。中層 (３～ 5) は流水堆積であり中砂から細砂、少量の遺物が出土した。上層 (1・2) は主として黒褐色極細砂の混じるシルト層からなり、多量の弥生時代前期の遺物が包含されていた。出土した土器を取り上げた後、木製品水漬け遺構４基を検出した。木製品水漬け遺構－①と③の間隔は約４mを測り、本遺構を掘削した土が盛り上げられていることが確認された。その盛土および下層で流水堆積の確認される溝の埋土は、木製品水漬け遺構－③が埋没した上にのってきていたことから、木製品水漬け遺構－①を掘削した土が③の埋め戻しに使われるとともに、①の南西部分にも土が盛られていたことが確認された。木製品水漬け遺構－③の埋土 (10・11) 層は②の盛土を構成する土質と極めて近い土質であった。よって遺構の掘削順として③→①が想定される。埋土が人為的な埋め戻しであることも含め、木製品水漬け遺構－③内に木製品が検出されなかったこともその傍証となろう。木製品水漬け遺構－④・⑤に関しては未成品のものが存在していることと人為的に埋め戻した状況は確認できなかった。よって、木製品水漬け遺構－④・⑤が木製品水漬け遺構－①と同時に機能していたのか、時期差をもつのかは不明である。いずれの遺構も切り合い関係はない。

②の盛土の下層からは弥生時代前期の完形の壺 (425)、鉢、甕蓋が出土した。また、管状土錘は紐で繋がれた状態で置かれていたような状況が、２箇所で確認された。地点 A で 33 点 (507 ～ 517、527

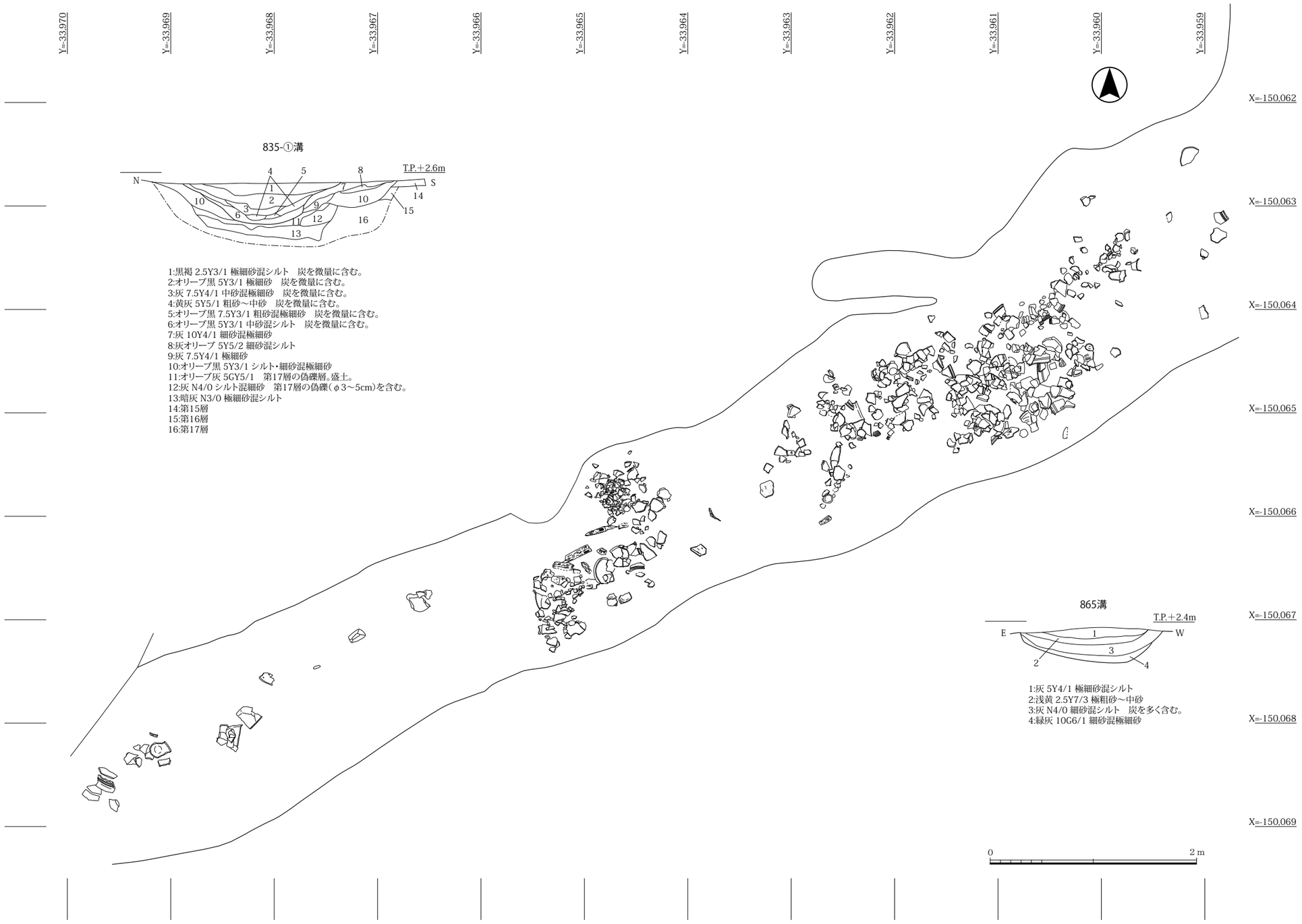


図197　第15面　835溝遺物出土状況図・835木製品水漬け遺構-①・865溝断面図（S＝1：40）

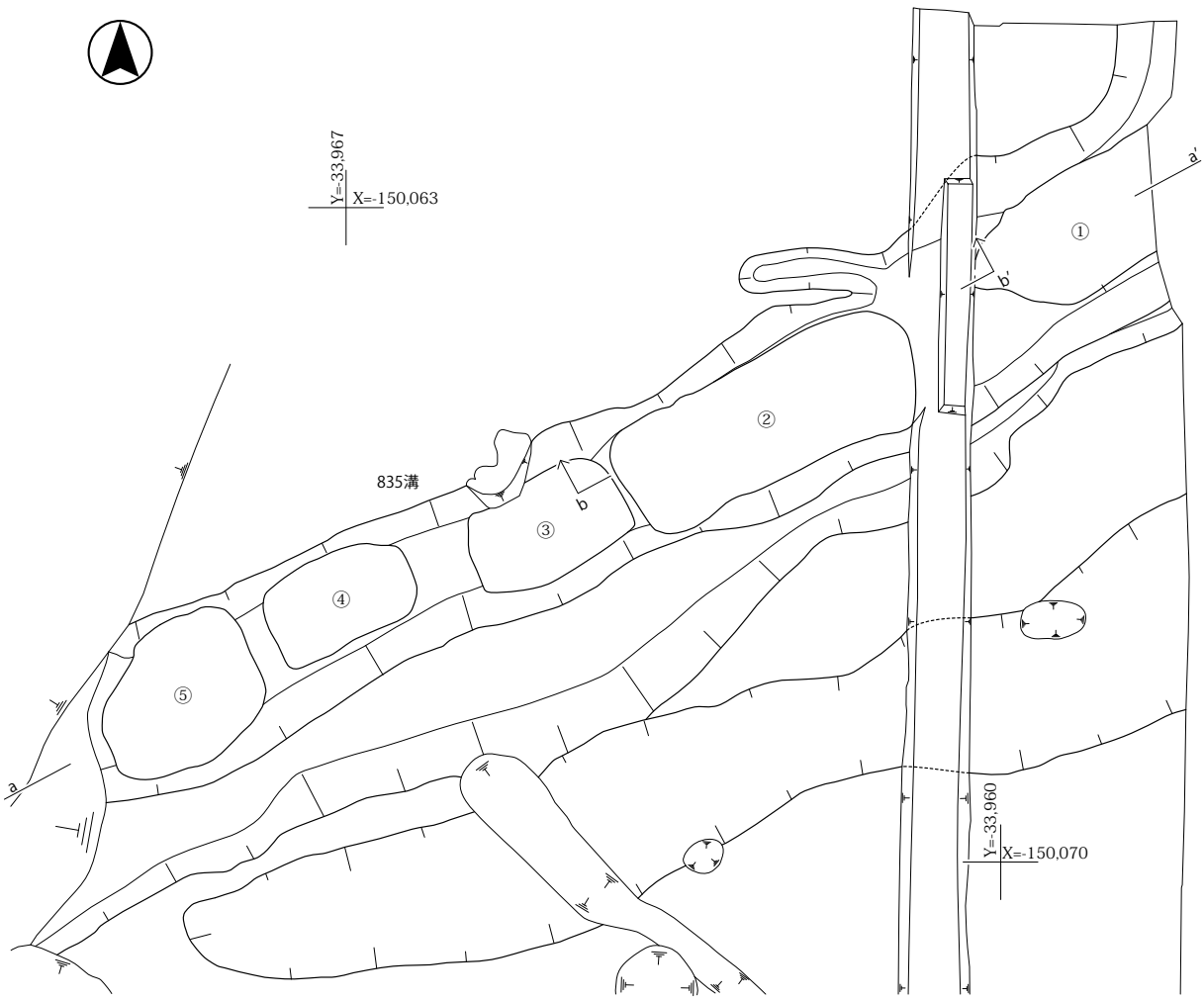
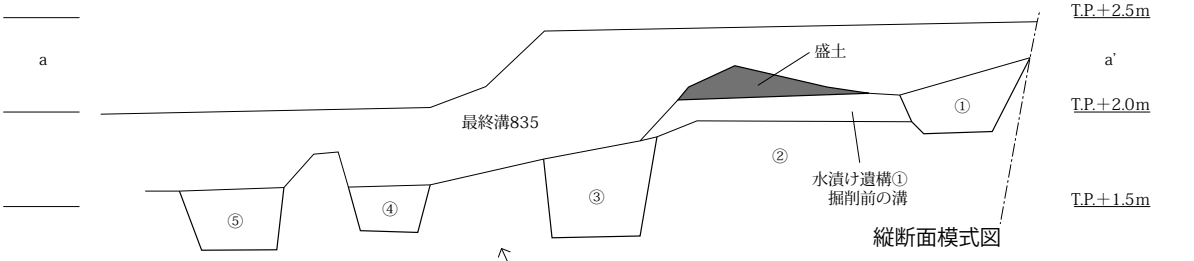
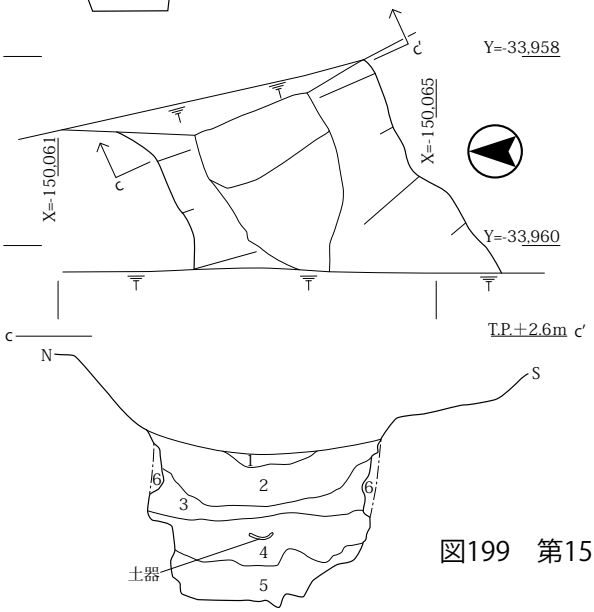


図198　第15面　835木製品水漬け遺構平・断面図（S＝1：80）



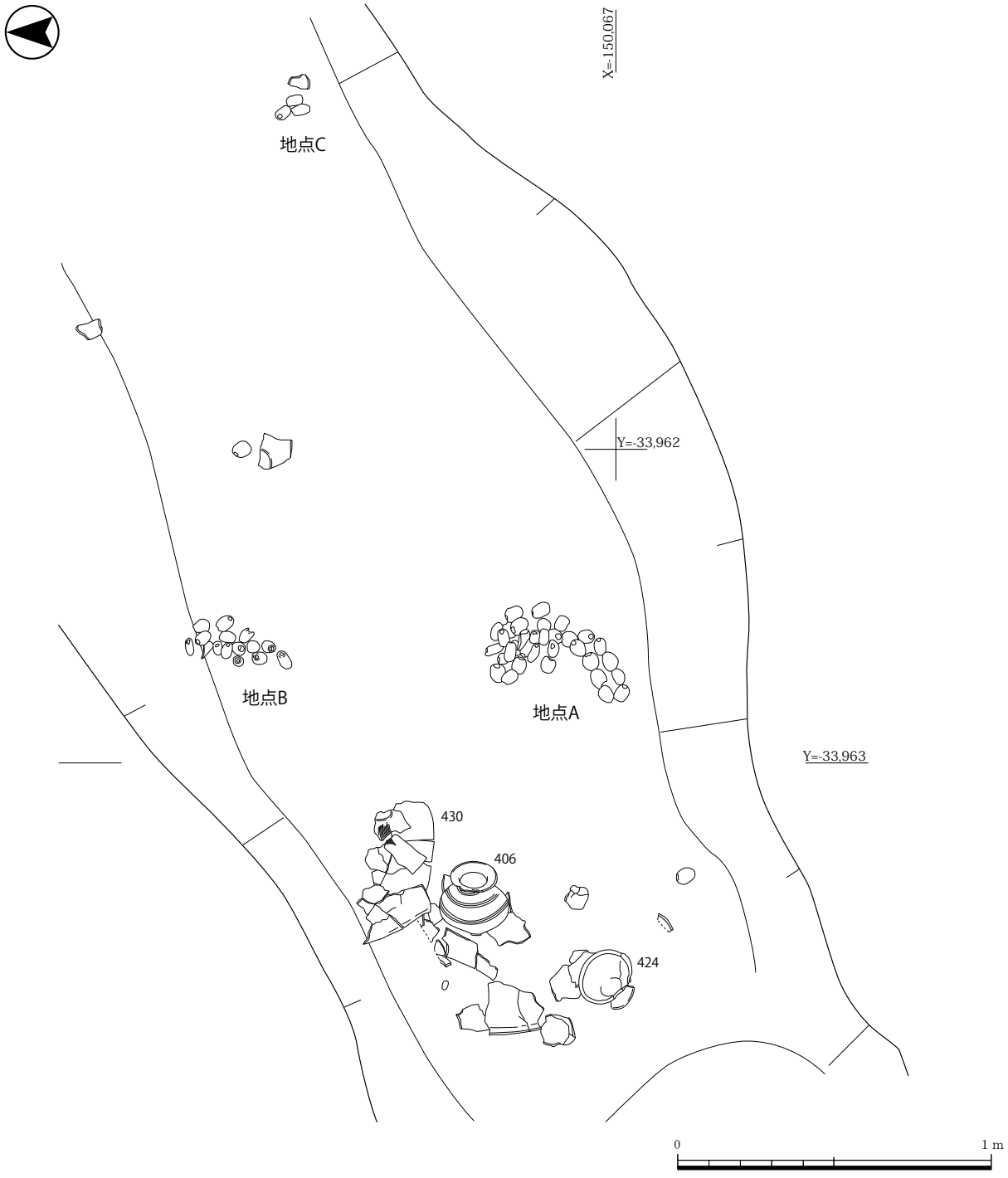
縦断面模式図

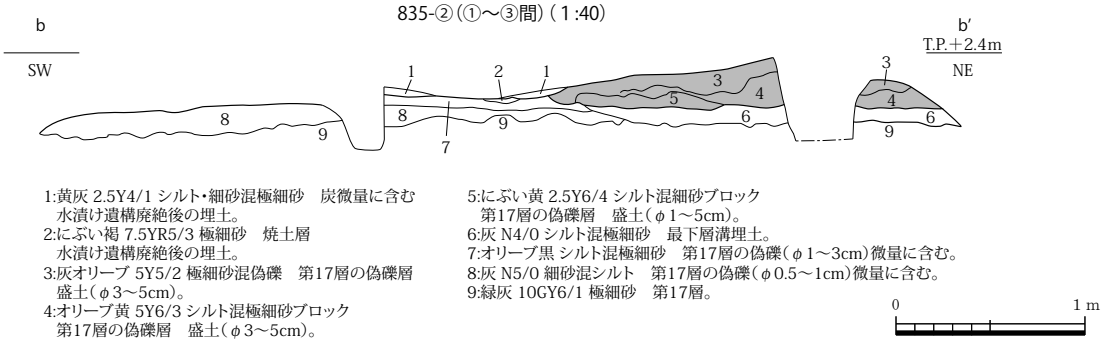


1:灰黄褐 10YR5/2 極粗砂～細砂
2:暗灰 N3/0 極細砂混シルト
3:黒 N2/0 極細砂混シルト
　緑灰 7.5GY6/1 シルト混極細砂の
　偽礫（φ1～5cm）含む。
4:緑灰 10GY6/1 極細砂
　黄灰 2.5Y4/1 シルトの偽礫（φ3～20cm）。
　黒 N2/0 シルトの偽礫（φ1～3cm）多く含む。
5:黄灰 2.5Y4/1 極細砂混シルト
　黒 10YR7/1 シルトの偽礫（φ1～5cm）。
　明緑灰 10GY7/1 シルト混極細砂の偽礫（φ1～5cm）含む。
6:明緑灰 10GY7/1 シルト混極細砂（第17層）

0　2 m

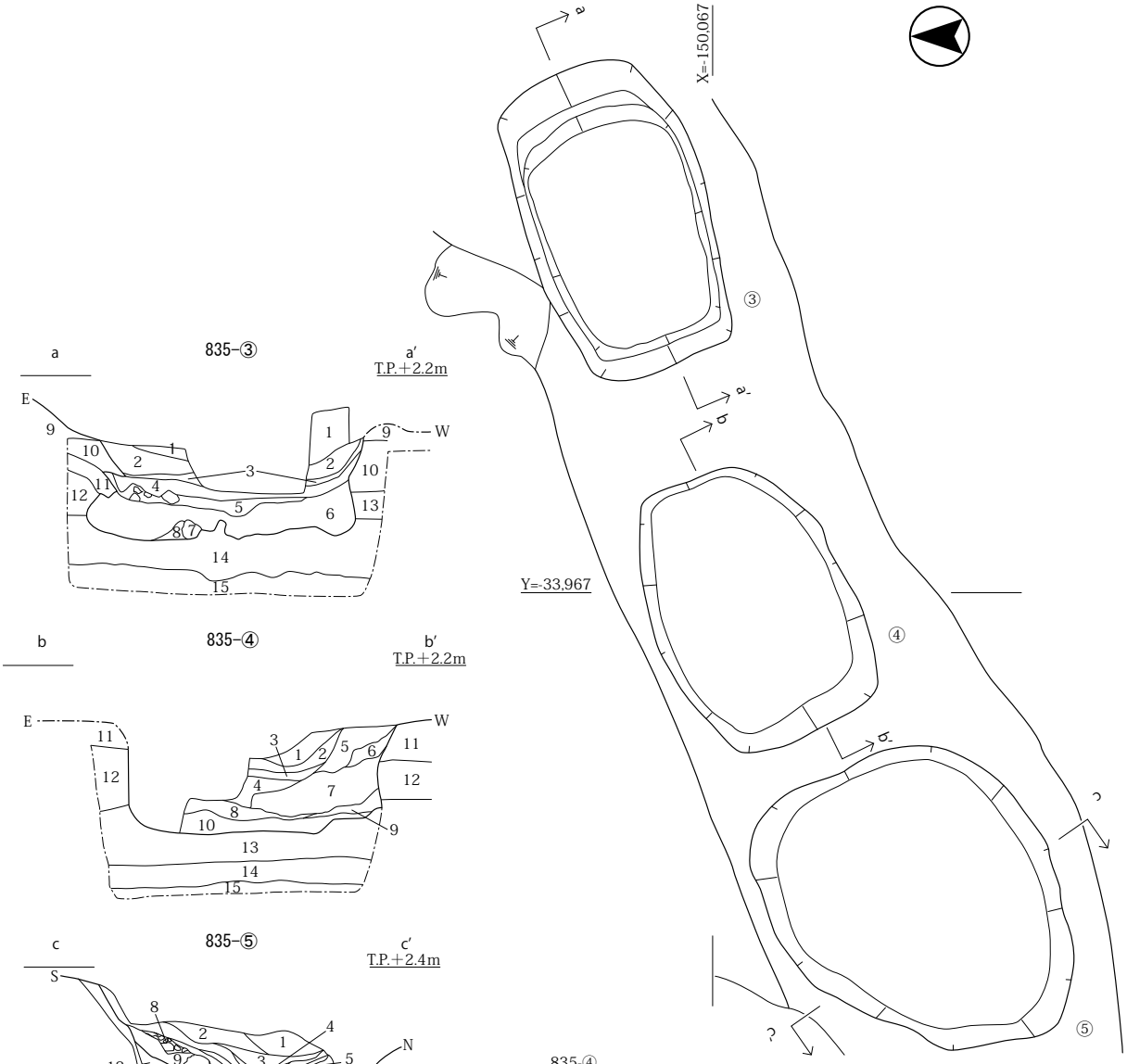
図199　第15面　835木製品水漬け遺構-①
平・断面図（S＝1：40）





1:黄灰 2.5Y4/1 シルト・細砂混極細砂　炭微量に含む
　水漬け遺構廃絶後の埋土。
2:にぶい褐 7.5YR5/3 極細砂　焼土層
　水漬け遺構廃絶後の埋土。
3:灰オリーブ 5Y5/2 極細砂混偽礫　第17層の偽礫層
　盛土(φ3～5cm)。
4:オリーブ黄 5Y6/3 シルト混極細砂ブロック
　第17層の偽礫層　盛土(φ3～5cm)。
5:にぶい黄 2.5Y6/4 シルト混細砂ブロック
　第17層の偽礫層　盛土(φ1～5cm)。
6:灰 N4/0 シルト混極細砂　最下層溝埋土。
7:オリーブ黒 シルト混極細砂　第17層の偽礫(φ1～3cm)微量に含む。
8:灰 N5/0 細砂混シルト　第17層の偽礫(φ0.5～1cm)微量に含む。
9:緑灰 10GY6/1 極細砂　第17層。

図200　第15面　835-②平面図・土器出土状況図(S＝1:20)・断面図(S＝1:40)



835-③
1:オリーブ黒 5Y3/1 中砂・極細砂混シルト　炭多く含む。
2:オリーブ黒 7.5Y3/1 極細砂混シルト
3:黒褐 7.5YR3/2 植物遺体層
4:黒褐 2.5Y3/2 シルト混極細砂
5:灰黄褐 10YR5/2 シルト　第17層の偽礫(φ3～10cm)含む。
6:暗灰黄 2.5Y4/2 中砂・シルト混細砂
7:黄灰 2.5Y5/1 シルトと第17層の偽礫層
8:黄灰 10YR4/1 細砂混シルト　第17層の崩落土。
9:浅黄 2.5Y7/3 細砂　ラミナあり。
10:明緑灰 7.5GY7/1 シルト
11:暗灰黄 2.5Y5/2 極粗砂
12:褐灰 10YR5/1 極細砂と細砂の互層　ラミナあり。
13:褐灰 7.5YR4/1 シルトと極細砂の互層　ラミナあり。
14:灰黄褐 10YR5/2 シルト　植物遺体、カルシウムの結核含む。
15:黒 10YR1.7/1 シルト　第18層。

835-④
1:黄灰 2.5Y5/1 細砂・シルト混極細砂　第17層の偽礫(φ1～5cm)含む。
2:褐灰 10YR5/1 細砂混極細砂　植物遺体含む。ラミナあり。
3:褐灰 10YR4/1 シルト混極細砂　ラミナあり。
4:灰黄褐 10YR4/2 シルト混細砂　第17層の偽礫(φ1～10cm)含む。
5:灰白 10Y7/2 極細砂　第17層の偽礫(φ1～3cm)多く含む。
6:浅黄 7.5Y7/3 細砂と第17層の偽礫層(φ0.5～5cm)
7:明緑灰 10GY7/1 極細砂と第17層の偽礫層(φ0.5～10cm)
8:灰 10Y4/1 極細砂とシルトの互層　ラミナあり。
9:灰 7.5Y4/1 シルト混極細砂　第17層の偽礫(φ0.5～1cm)多く含む。
10:黄灰 2.5Y4/1 極細砂混シルト　第17層の偽礫(φ1～3cm)含む。
11:浅黄 2.5Y7/3 細砂　第17層。ラミナあり。
12:明緑灰 7.5GY7/1 極細砂とシルトの互層　ラミナあり。
13:灰黄褐 10YR5/2 シルト　植物遺体、カルシウムの結核含む。
14:黒 10YR1.7/1 シルト
15:灰 N5/0 シルト

835-⑤
1:褐灰 10YR4/1 粗砂混細砂　炭化物微量に含む。
2:黒褐 10YR3/2 粗砂・極細砂混中砂　炭化物微量に含む。
3:灰黄 2.5Y6/2 中砂
4:灰 N5/ シルト混極細砂
5:褐灰 7.5YR4/1 中砂・極細砂混シルト
6:灰褐 5YR4/2 植物層
7:褐灰 7.5YR5/1 中砂混シルト　緑灰 7.5GY6/1 緑灰 シルト混極細砂。第17層の偽礫。
8:明オリーブ灰 細砂混シルト　第17層の偽礫層。
9:黒褐 10YR3/1 中砂・シルト混極細砂　第17層の偽礫(φ3～10cm)多く含む。
10:褐灰 10YR5/1 中砂混シルト　第17層の偽礫(φ1～3cm)含む。
11:黒褐10YR3/2 粗砂・シルト混中砂
12:黒褐10YR3/1 中砂・シルト混粗砂
13:褐灰10YR2/1 粗砂・シルト混極細砂
14:褐灰 10YR5/1 細砂・シルト混極細砂
15:褐灰 7.5YR5/1 極細砂混シルト　第17層最下層の偽礫(φ3～5cm)多く含む。
褐灰 7.5YR4/1 シルト　植物遺体多く含む。

図201　第15面　835木製品水漬け遺構-③～⑤平・断面図(S＝1:40)

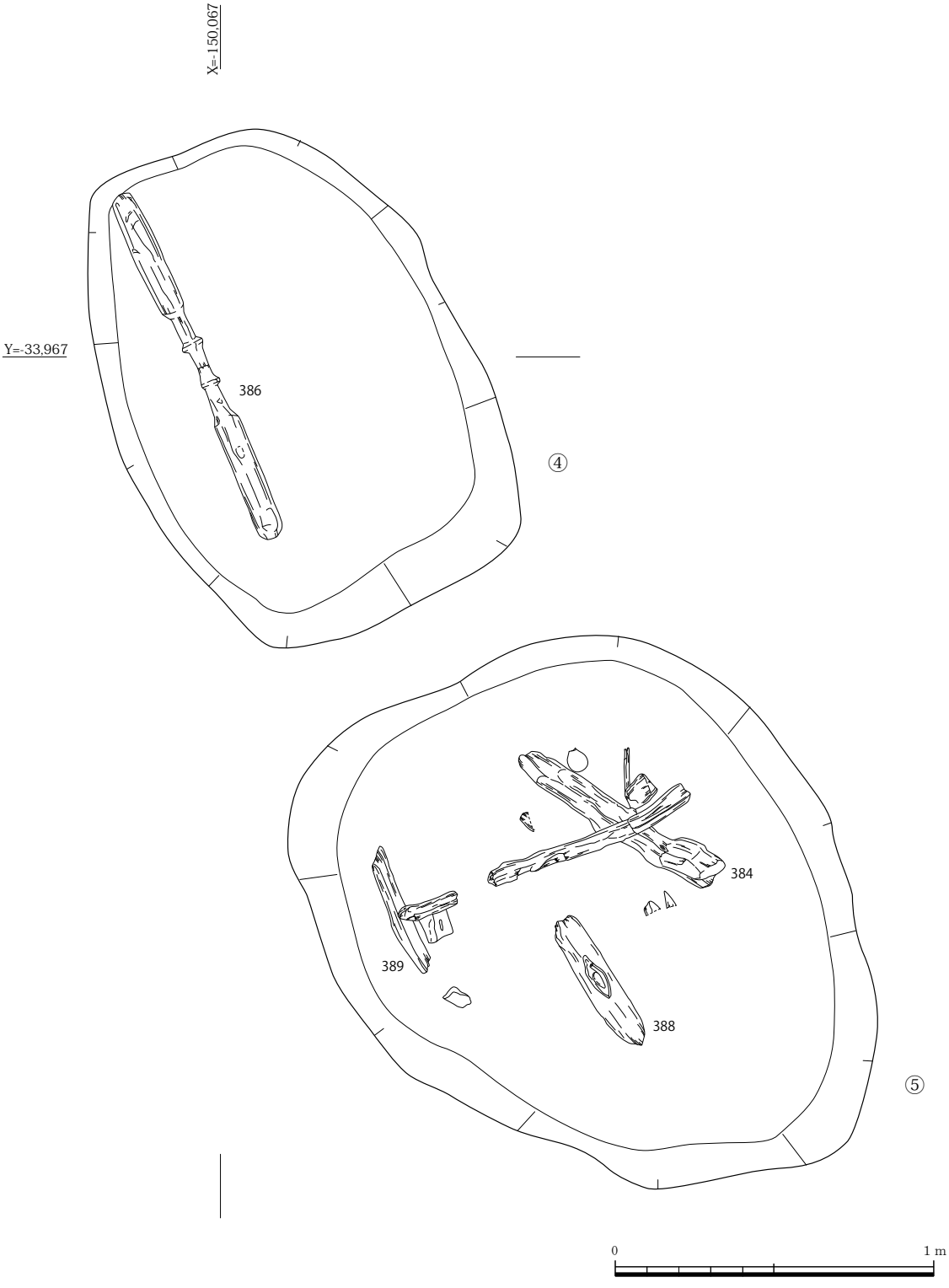


図202　第15面　835木製品水漬け遺構-④・⑤平面図・遺物出土状況図（S＝1：20）

～ 548)、地点 B で 12 点 (518 ～ 522、549 ～ 555)、地点 C で 3 点 (523 ～ 525)、他 1 点 (556) を数える。本遺構内では木製品水漬け遺構－④からも 2 点 (526・557) 出土しており総数で 51 点を数える。管状土錘についての詳細は第 4 章で後述する。

また本溝の上層埋土から多量の弥生時代前期の遺物が出土した。器種は突起状のつまみ部を作る壺蓋 (415 ～ 417)、壺 (418 ～ 437・441・442)、無頸壺 (438)、大型壺 (439・440)、甕蓋 (443 ～ 445)、甕 (446 ～ 490)、小型甕 (491 ～ 493)、鉢 (494 ～ 499)、ミニチュア鉢 (500) である。その他にも縄紋時代晩期の突帯紋土器 (501 ～ 504)、土製紡錘車 (505)、土製投弾 (506)、管状土錘 (507 ～ 557)、人形土製品 (558)、片岩製の石棒 (559) である。

(418・419) は色調・胎土の類似性から同一個体の可能性があるが接合点はなかった。口縁部は頸部から外弯して立ち上がる。肩部にヘラ描き沈線を 4 条巡らす。(420) の口縁部は肩部から大きく外弯しながら立ち上がり、口縁端部に面を作る。丁寧なつくりの土器で、貼り付け突帯を頸部に 2 条、肩部に 1 条巡らせ、突帯上には刻み目を施す。肩部にはヘラ描き沈線を 4 条巡らせる。(421) の外面は縦方向の板ナデの後ヘラミガキを施す。頸部に削り出し突帯を巡らせ、突帯上にヘラ描き沈線を 2 条巡らす。肩部にヘラ描き沈線 5 条を 2 箇所に巡らせる。 (422 ～ 424) はいずれも頸部に削り出し突帯を巡らす。(422) は突帯上にヘラ描き沈線を 2 条、(423) はヘラ描き沈線を 1 条巡らせる。(423・424) の口縁部には焼成前の穿孔を施す。(424) は、突帯に刻み目を施してからヘラ描き沈線を 3 条巡らせている。(425) は完形で出土した壺である。全体にヘラミガキを施した後、肩部に削り出しによる段を作る。ヘラ描き沈線を口縁端部に 1 条、頸部に 4 条、肩部の段直下と体部にヘラ描き沈線を 3 条巡らせている。焼成前に紐孔 (2 箇所) を内から外へ穿つ。(427) ～ (430) は頸部が発達した壺である。(427) は頸部に削り出し突帯を巡らせ、突帯上にヘラ描き沈線を 1 条巡らす。 (428・429) は頸部に削り出し突帯を巡らせ、ヘラ描き沈線を口縁端部に 1 条、突帯上に 2 条巡らす。(428) は焼成前に紐孔を内から外へ穿つ。(429) の紐孔は直径 3 ㎜と非常に小さく、焼成前に内から外へ穿つ。(430) の頸部には段を作り、段の下位にはヘラ描き沈線を 3 条巡らすが、中央の沈線は全周しない。また、頸部と体部との境にも段を作り、その下に 2 条の沈線を巡らす。 (431・432) は肩部付近まで残存している壺である。(431) は肩部が 5 分の 3 近くしか残存しておらず推定の域を出ないが、 3 条のヘラ描き沈線を螺旋状に巡らす。(432) は肩部に削り出し突帯を巡らせた後、突帯上にヘラ描き沈線を 3 条巡らす。底部が上げ底状になっている。(441・442) は調整などから、壺の体部片と考えられる。外面に赤色塗彩が見られる。(433 ～ 436) は壺の底部である。(437) は壺の体部である。ヘラ描き沈線を頸部に 3 条以上、肩部に 4 条巡らす。比較的小型の壺である。(438) はほぼ完形の無頸壺である。外面は横方向のヘラミガキ、内面は底部から体部下半にかけて縦方向のヘラミガキ、体部上半に横方向のヘラミガキを施す。外から内へ焼成前の穿孔を 2 箇所に施す。(439・440) は大型壺の口縁部である。(439) は口縁部を作る粘土帯を貼り付ける際に段を作り出している。胎土は乳灰色を呈し紀伊産と考えられる。(443 ～ 445) はほぼ完形に復原できた甕蓋である。(443) は頂部を少しくぼませ、裾部を外反させる。頂面は板ナデを施す。外面は縦方向の板ナデの後ヘラミガキを施している。内面はヘラミガキを施す。内面にはコゲが観察される。(444) は受け皿状のつまみを作り出し、裾部はやや直線的にのびる。内面にコゲは付着していない。外面は縦方向のヘラミガキの後、裾部に横方向のヘラミガキを、内面はナデの後横方向のヘラミガキを施す。(445) の頂部は平坦で、裾部は直線的である。内面にはコゲが観察される。つまみ部付近をナデの後横方向のヘラミガキを施す。裾部はナデを施す。内面は横方向のヘラミガキの後、端部付近にナデ

を施す。

本遺構で口縁部から体部にかけて残存し図化しえた甕は合計で 38 点を数える。これらの甕の中で口縁部径に比して体部最大径が小さいものは 29 点 (446 ～ 467・469・471・475・477 ～ 479・481)、口縁部径と体部最大径がほぼ同じものは 2 点 (468・470)、口縁部径に比して体部最大径が大きいものは 7 点 (472 ～ 474・476・480・482・483) の 3 タイプに分けることができる。さらに、口縁部径に比して体部最大径の小さい甕は体部の形態から 3 タイプに分かれる。まず、底部から体部が直線的に外傾するもの (446 ～ 452)、底部から体部が内弯しながら立ち上がるもの (454 ～ 460・462 ～ 464・478・479・481)、同様に底部から体部が内弯しながら立ち上がるが、体部上半が直線的にのびるもの (467・469) である。口縁部径と体部最大径がほぼ等しいタイプは、(464) の形態と非常に類似しているが、(464) に比して体部の張った形態である。口縁部径に比して体部最大径の大きいものは口縁部径の大小でさらに 2 タイプに分類できる。口縁部径が 28 ～ 36cm を測るもの (472 ～ 474・482) と、約 22cm 前後のもの (476・480・483) である。

次に施紋について見ていくと、口縁部径に比して体部最大径がほぼ同じか口縁部径のほうが大きい甕のうち口縁端部に刻み目を施すものは 87%、一方、口縁部径に比して体部最大径が大きい甕のうち口縁端部に刻み目を施すものは 29%である。またヘラ描き沈線の有無に着目すると、前者の甕は 65%の個体が 1 条から 4 条の沈線を施し、先にタイプ分けをした底部から体部が直線的に外傾するタイプの 42%、底部から体部が内弯しながら立ち上がるタイプの 69%が沈線を施し、体部上半が直線的にのびるタイプと口縁部径と体部最大径がほぼ同じタイプの個体はすべてで沈線が確認される。ヘラ描き沈線の条数は 3 条を上回らない個体が多いが、底部から体部が内弯しながら立ち上がるタイプの甕と体部上半が直線的に延びるタイプの甕でヘラ描き沈線を 4 条施すものがある。またこれらの甕で刻み目とヘラ描き沈線の双方を施す個体は 55%である。体部にヘラ描き沈線を施すもので、口縁端部に刻み目を施さないものは (477) の 1 点だけである。口縁部径に比して体部最大径が大きい甕でヘラ描き沈線を施す個体は 29%、(482・474) の 2 点のみで、いずれの個体も口縁端部に刻み目を施している。これらの甕は口縁部径が大きいものである。

以上のことから考えると、本遺構で検出された甕は、口縁部径と体部最大径比で 3 タイプ、さらに形態によって 5 タイプに細分され計 6 タイプが認識できる。各タイプごとに施紋方法に差異が見られることも含め、弥生時代前期の範疇におさまる土器群ではあるが、ある程度の時間幅を想定することは可能であろう。今後、成形技法、調整、胎土も含めての分類と他器種の分類を含め、本遺跡の土器様相についての検討を進めることを課題としたい。以下、各個体について記述する。

(446) はほぼ完形に復原できた甕である。底部から体部まで縦方向の板ナデを施している。口縁部直下にはユビオサエが残る。内面は横方向の板ナデを施す。(447) は外面ハケメ、内面板ナデを施し、口縁部内面にユビオサエが残る。ヘラ描き沈線を 1 条巡らせている。 (448) は外面板ナデ、内面ユビオサエの後ハケメを施す。ヘラ描き沈線を 3 条巡らす。(449) は内外面ともに板ナデの後ハケメを施す。内面の口縁部と体部の境に横方向のハケメを施す。 (450) は外面ハケメ、内面板ナデを施す。体部内面にはユビオサエが残る。ヘラ描き沈線を 2 条巡らす。(451) は外面にハケメ、内面に指ナデの後、内外面にハケメを施す。(452) は内外面ともに板ナデを施し、口縁端部に刻み目を施す。(453・454) は外面にハケメ、内面に指ナデを施す。ヘラ描き沈線を 3 条巡らす。(455) は外面にハケメ、内面に指ナデの後板ナデを施す。(456) はほぼ完形に復原できた甕である。外面は縦方向のハケメの後、口縁部と底

部にナデを施し、内面には板ナデの痕跡が残る。内面に粘土紐の継ぎ目が明瞭に観察される。(457) は口縁部外面にユビオサエが残る。外面ハケメ、内面板ナデを施す。(458) は内外面ともハケメを施し、口縁部外面にユビオサエが残る。(459) は内外面とも板ナデ、内面の体部上位にはユビオサエが残る。(460) は外面ナデ、内面は指ナデの後横方向のハケメを施す。体部外面には吹きこぼれの痕が確認される。 (461) は外面板ナデ、内面指ナデの後板ナデを施す。ヘラ描き沈線４条を施す。２条の間に突帯を作り出しているかのようにも見える。(462) は内外面ともヘラミガキを施している。(463) はほぼ完形に復原できた甕である。体部外面は縦方向のハケメの後口縁部にヨコナデ、体部にヘラ描き沈線、口縁端部に刻み目を施している。内面は底部にナデ、体部に縦方向の板ナデ、口縁部にヨコナデを施している。(464) はほぼ完形に復原できた甕である。外面は縦方向の板ナデの後、体部上半に横方向のナデを施す。口縁部直下に削り出しによる段を作り、段の下にヘラ描き沈線を２条巡らす。口縁端部には刻み目を施す。内面は板ナデを施す。底部には外から内へ焼成後の穿孔を施す。(465) は内外面ナデを施す。(466) の外面はハケメ、内面は板ナデを施す。(467) は体部内外面ともに板ナデの後ハケメを施し、体部内面にはユビオサエが残る。(468) は内外面とも板ナデの後ハケメ、外面にヘラ描き沈線を３条施す。(469) は外面板ナデ、内面板ナデの後ハケメを施す。 (470) はほぼ完形に復原できた甕である。外面底部付近に縦方向の板ナデを施し、体部上半には横方向のハケメの痕跡が残る。口縁部をユビオサエの後ヘラ描き沈線を３条巡らし、端部に刻み目を施す。内面は底部付近に板ナデの痕跡が残る。(471) はほぼ完形に復原できた甕である。体部外面に縦方向のハケメ、口縁部付近に横方向のハケメを施した後、口縁部にヨコナデを施す。口縁端部には刻み目を施す。内面は横方向のハケメの後口縁部にヨコナデを施す。(472) は外面ハケメ、内面板ナデを施す。(473) は外面ハケメ、内面の体部に板ナデ、頸部に横方向のハケメを施す。(474) は外面をやや粗い原体でハケメを施した後、目の細かい工具による削り出しの段を作り、段の下には細かいハケメのような痕跡が残る。口縁部直下にヘラ描き沈線を２条巡らす。体部内面上半から口縁部を経て体部外面上半にかけて幅５㎝の粘土を薄く貼り付けている箇所が一部見られる。 内面は体部板ナデ、上位に横方向のハケメを施す。(475) はほぼ完形に復原された甕で、外面を縦方向のハケメの後口縁部にヨコナデ、体部にナデを施している。内面は体部にナデ、口縁部にヨコナデを施している。(476) は外面体部ハケメを施す。口縁部にはユビオサエが残る。内面ユビオサエの後板ナデを施す。(477) は外面ナデ、内面板ナデを施し、口縁部直下にはユビオサエが残る。内外面とも粘土紐の継ぎ目が明瞭に観察される。外面にヘラ描き沈線を３条施す。(478) は内外面とも板ナデを施す。体部外面にヘラ描き沈線を３条、口縁端部に刻み目を施す。(479) は外面ハケメ、内面ユビオサエの後ハケメを施す。外面にヘラ描き沈線を３条、口縁端部に刻み目を施す。(480) はほぼ完形に復原された甕である。体部外面を縦方向のハケメの後、口縁部にヨコナデを施している。底部付近にユビオサエが残る。内面は斜め方向の板ナデを施す。(481) はほぼ完形に復原された甕である。体部外面を板ナデの後、口縁部にヨコナデを施す。体部にヘラ描き沈線を２条、口縁端部に刻み目を施す。ヘラ描き沈線２条のうち、口縁部寄りの１本は始点と終点が一致しておらず、沈線がクロスしている。内面は摩滅のため調整が不明瞭だが、体部外面中程に帯状に煤が付着している。(482) は削り出し突帯を巡らす。突帯上にヘラ描き沈線を３条、口縁端部に刻み目を施す。外面にハケメを施し、内面にユビオサエが残る。(483) は体部外面を縦方向のハケメの後、体部上半の一部にヘラミガキを施している。内面は体部下半に縦方向の板ナデ、体部上半から口縁部に横方向のハケメの後、口縁部にヨコナデを施す。(484) は甕もしくは鉢の体部であろう。摩滅しているため外面の調整は不明瞭だが、ヘラ描き沈線を４条施した後、

３条１帯の山形紋を施紋している。(485) は外面を縦方向のハケメの後に板ナデを施している。内面はナデを施す。(486) は底部外面に縦方向のハケメ、内面はナデを施す。(485・486) の底部外面にはヘソ状の突起が見られる。これは底面となる粘土塊の外側に粘土紐を貼り付けて、体部を立ち上げる成形方法によるものだと考えられる。(488) は外面及び底面にヘラミガキを施している。底部には外から内へ焼成後に穿孔を施す。(489・490) は甕の体部から底部で外面板ナデの後ハケメ、内面板ナデを施す。(491) はほぼ完形に復原できた小型甕である。口径 10.8cm、底径 5.3cm、器高 7.6cm を測る。内外面ともヘラミガキを施している。口縁部は弱く外反する。(494 ～ 499) は鉢である。(494) は口縁部が直立気味の鉢で、外面にヘラミガキ、内面にユビオサエを施す。体部内面には粘土紐の継ぎ目が明瞭に観察される。(495) は口縁部を外反させる鉢で、外面にヘラ描き沈線を２条巡らせた後、沈線以下の体部上半にヘラミガキを施している。(496) は口縁部を外反させる鉢である。工具を押しつけるようにして削り出し突帯を作り出した後ヘラミガキを施す。(497) は鉢の体部である。体部上半に削り出し突帯を巡らす。(498) はほぼ完形に復原できた鉢で、口縁部は直立する。外面は剥離が激しく調整が不明瞭だが､ナデと思われる痕跡が残る｡口縁端部はナデにより面を作る｡内面はナデを施し､ユビオサエが残る。(499) は鉢の体部から底部である。外面にヘラ描き沈線を３条施す。(500) は手づくねで造られたミニチュアの鉢である。(501 ～ 504) は縄紋晩期の突帯紋土器である。(501 ～ 503) は突帯上に小 O 字形の刻み目を施す。(505) は土製紡錘車である。直径 5.05cm、最大幅 5.3cm、孔径 0.7cm、重さ 34.4g を測る。(506) は紡錘形を呈する土製投弾である。最大長 3.95cm、最大幅 2.9cm、最大厚 2.6cm、重さ 24.4g を測る。

木製品水漬け遺構－①　東側が調査区外である。検出長 0.9 m、幅 1.1 m、深さ 0.7 mを測る。埋土は５層に細分され上層 (１～４) は砂層を主体とし、下層 (５) は黄灰色極細砂混じりシルトである。(２) および (４) 層内から弥生時代前期の土器が出土した。

木製品水漬け遺構－③　平面形は長方形を呈し、長軸 1.8 m、短軸 1.06 mを測る。断面形は箱形を呈し、深さ 0.6 mを測る。埋土は８層に細分され、下層 (５・６) は第 17 層由来の偽礫を多く含み、(５) 層までが本遺構の埋土である。上層は溝に切られる。埋土の堆積状況から人為的に埋め戻された可能性が高い。埋土内には木製品をはじめ遺物の出土は見られなかった。

木製品水漬け遺構－④　溝が埋没した後、円形 (直径 0.65 m) の土坑に切られていた。平面形は長方形を呈し、長軸 1.6 m、短軸 1.1 m。断面形は箱形を呈し、深さ 0.6 mを測る。埋土は 10 層に細分され黄灰～褐灰色シルト混じり極細砂～細砂である。(２・３) 層は植物遺体を多く含む層で層間にラミナが観察された。(８) 層上面で先述した木製品 (図 189　384・386、図 190　388) や土器の小片が出土した。

木製品水漬け遺構－⑤　上面を溝状遺構に南側を第 14 面 717 溝に切られており、平面形は不正確である。長軸 1.8 m、短軸 1.6 mを測り、残存していた深さは 0.4 mである。埋土は 10 層に細分でき、主として灰～黒褐色シルト～細砂である。下層 (９・10) 層から木製品 (図 189　387、図 190　389) と少量の土器が出土した。上層はラミナが確認される流水堆積である。本遺構上面で人形土製品 (558) が出土した。詳細は第４章にて記述する。

865 溝 (図 197、215・図版 54)　20 A -8i 区で検出した。南側は調査区外に延び、北側は第 14 面 717 溝に切られる。遺構調査時には 835 溝と同一の溝になると認識していなかったが、調査区南壁面の断面観察の結果、恐らく 835 溝に繋がる遺構と考えられるためここで記述する。検出長 1.8 m、幅

1.3 m、深さ 0.33 mを測る。埋土は 4 層に細分され主としては灰色シルト～細砂である。(4) は第 17 層由来の層である。(1 ・ 2) 層から小型壺蓋 (560)、壺蓋 (561)、小型壺 (562)、壺 (563・564)、大型壺 (565)、甕 (566)、管状土錘 (567) が出土した。(560) は突起状のつまみ部を作り、その中心に焼成前に穿孔を施している。(561) は笠形の壺蓋である。頂部に穿孔を施す。(563) は頸部に貼り付け突帯を巡らし、突帯上に刻み目を施している。口縁端部にヘラ描き沈線を施す。(564) は頸部に削り出し突帯を巡らし、突帯上にヘラ描き沈線を 1 条施す。(565) は頸部にヘラ描き沈線を 2 条施す。内外面ともヘラミガキを施す。 (566) は体部外面に横方向の板ナデの後、口縁部にヨコナデを施す。内面はナデの後ヘラミガキを施す。

ここで本遺構の性格について簡単にふれておきたい。土坑の壁面がほぼ垂直に掘られ、底面は平坦面をつくる。土坑の位置は、下層から水が沁みだす場所でもあり、地形が下がってきて上方から水が流れこんでくる位置でもあることから常に水が蓄えられていた状況が窺える。また比較的良好な遺存状態で木製品が出土したことも加味し、本土坑が木製品を貯木するために掘削された土坑であると判断した。各土坑は④と⑤間が約 0.3 m、③と④間は約 0.7 m、と距離をもち切り合い関係は見られない。①と③間の距離が約 4 mありその間に盛土が確認されること、①を掘削する時には③が埋め戻されていたことから考えると③→①の順で掘削され、④･⑤は同時期に機能していた可能性が指摘される。③→①と④･⑤の先後関係は不明である。これらの遺構が木製品を貯木するために掘削された遺構であるとすると、未成品も含め、原木、完成品を残した状態で遺棄されるというのは考えがたいことになる。おそらく使用途中で遺棄せざる得ない状況があったものと推定される。上層で確認された遺物がさほど時期差をもたずに、多量の土砂とともに堆積している状況がそれを物語っているのではないだろうか。

次に木製品が完成品・未成品・原木と製作過程それぞれのものが同時に貯蔵されていた状況についてふれておきたい。今回完成品として検出されたものは木製品水漬け遺構 803 －①で検出された竪杵 (385) と木製品水漬け遺構 835 －④で検出された竪杵 (386)、835 －⑤で検出された直柄平鍬 (387) がある。いずれの資料も使用された痕跡がある。当センター山口氏によると「広葉樹は樹脂分のため堅固な材となり製品へと加工される。その後、使用時において水漬け・乾燥を繰り返すと製品にヒビ割れやネジレを生じさせる」との有益な指摘をえることができた。それによると使用しながら水漬けをおこなうというのは現実的なことではない。また、黒須氏は久宝寺遺跡の井戸状遺構、瓜生堂遺跡の大型土坑 (いずれも弥生時代前期) での木製品の出土状態から、破損した木製品の再利用を指摘している (黒須亜希子　2009 年『木製品の再利用－弥生時代・古墳時代の木製品転用に関する覚書－』大阪文化財研究第 35 号　財団法人大阪府文化財センター)。本遺構で検出された完成品である資料は、「削りなおし」もしくは「再利用」のために水に漬けられていた可能性が最も高いことを指摘しておきたい。

【溝】 先述したが、南東部で検出された多くの溝は人為的に掘削されたものではない。また 20 A -9・10, c ・ d 区で検出した南北方向をとる数条の溝は断面観察の結果、地震によって地割れが生じその中にシルト～砂層が堆積したものであった。人為的に掘削された溝としては調査区北西部 05 － 2 調査区から続く 726 溝、南東から北に向かう 814 溝などを含め 7 条の溝を検出した。その中で遺物が出土した溝を中心に報告する。

726 溝 (図 216 ～ 218、221・図版 54)　(05 － 2 調査区第 14 － 2 面 406 溝)　1 A -1・2b ～ d 区で検出した南西から北東方向に直線的に延びる溝である。主軸方向は座標北から 44° 東に振っている。

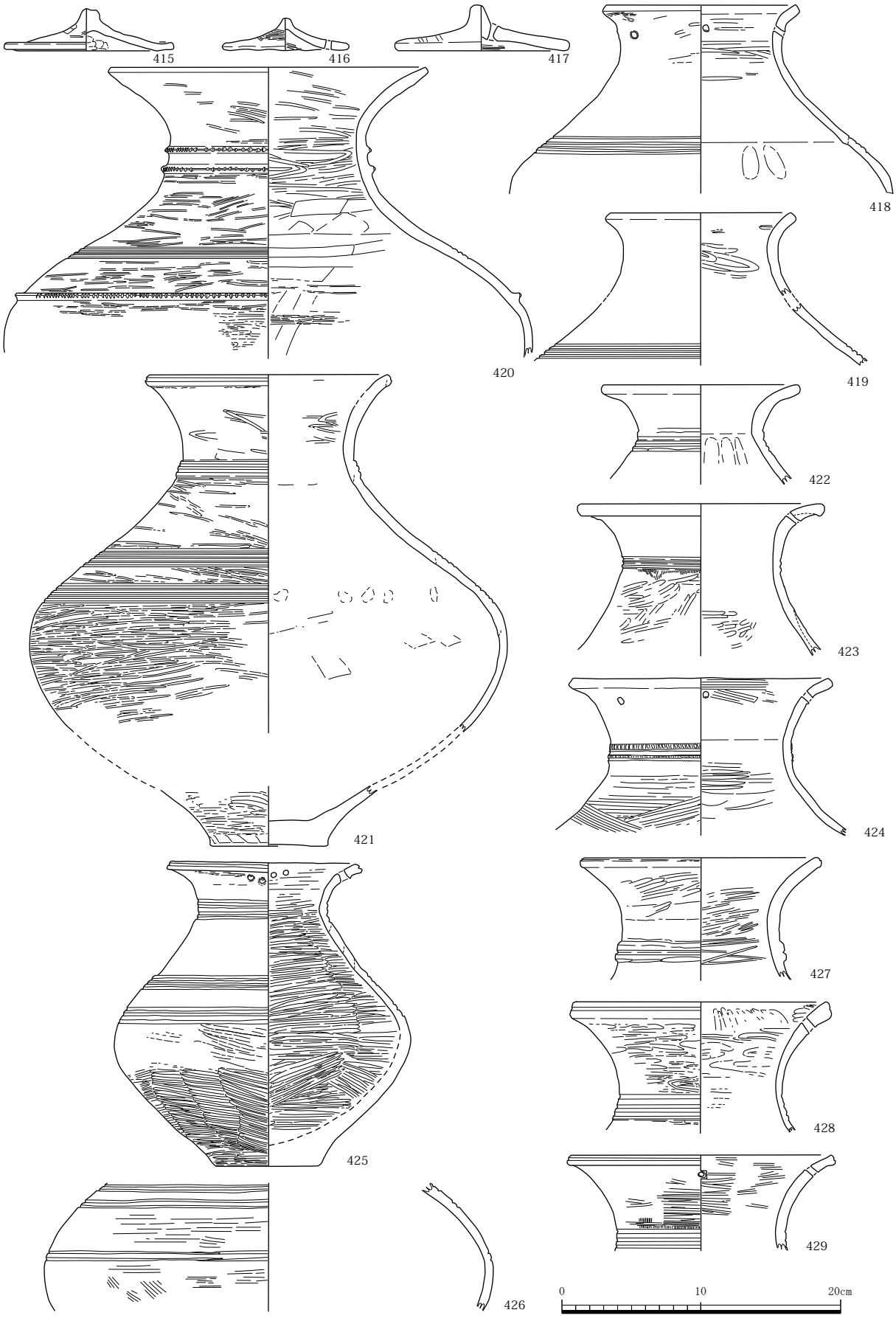


図203　第15面　835溝出土遺物実測図（1）（S＝1：4）

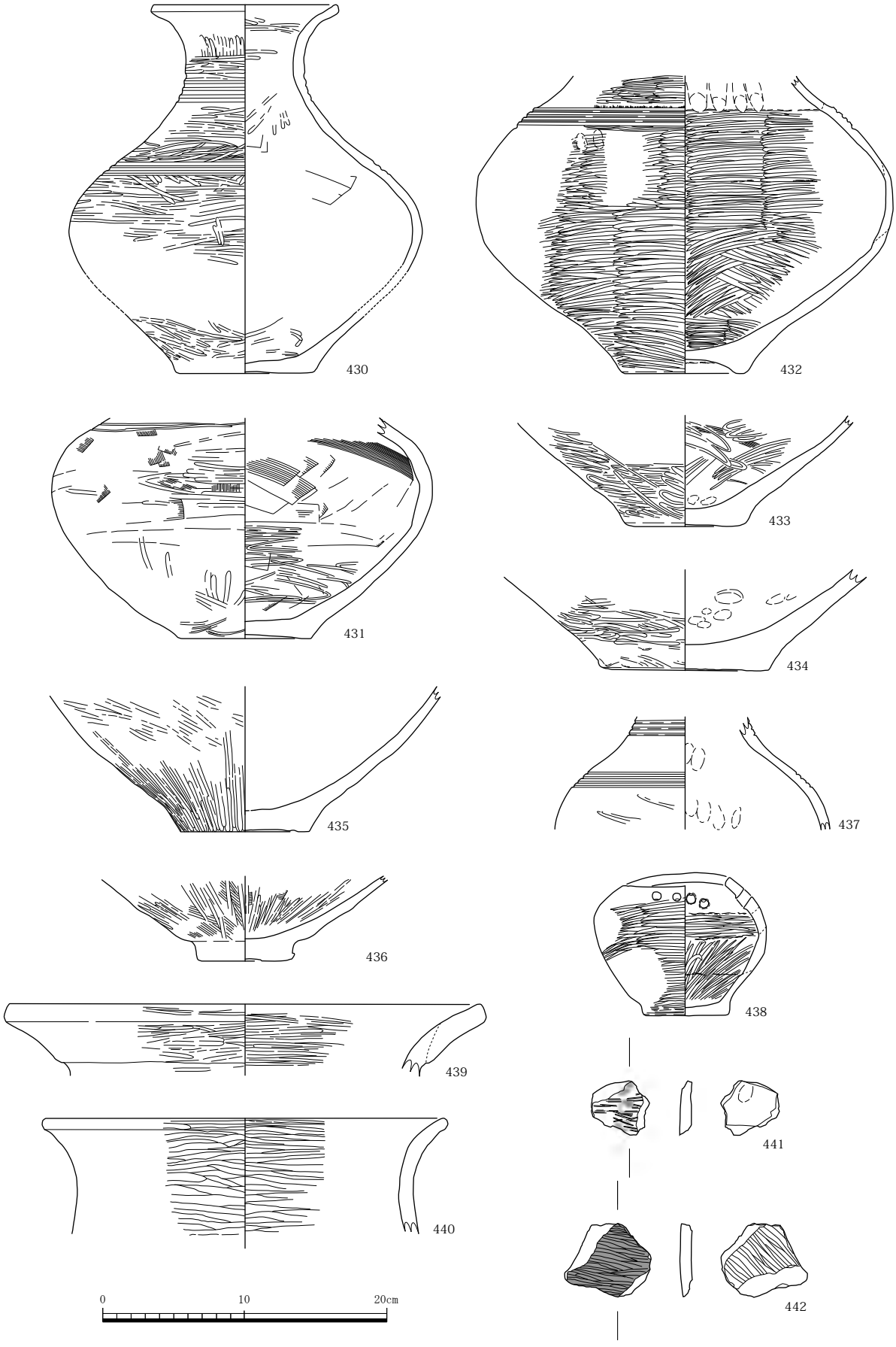


図204　第15面　835溝遺構出土遺物実測図（2）（S＝1：4）

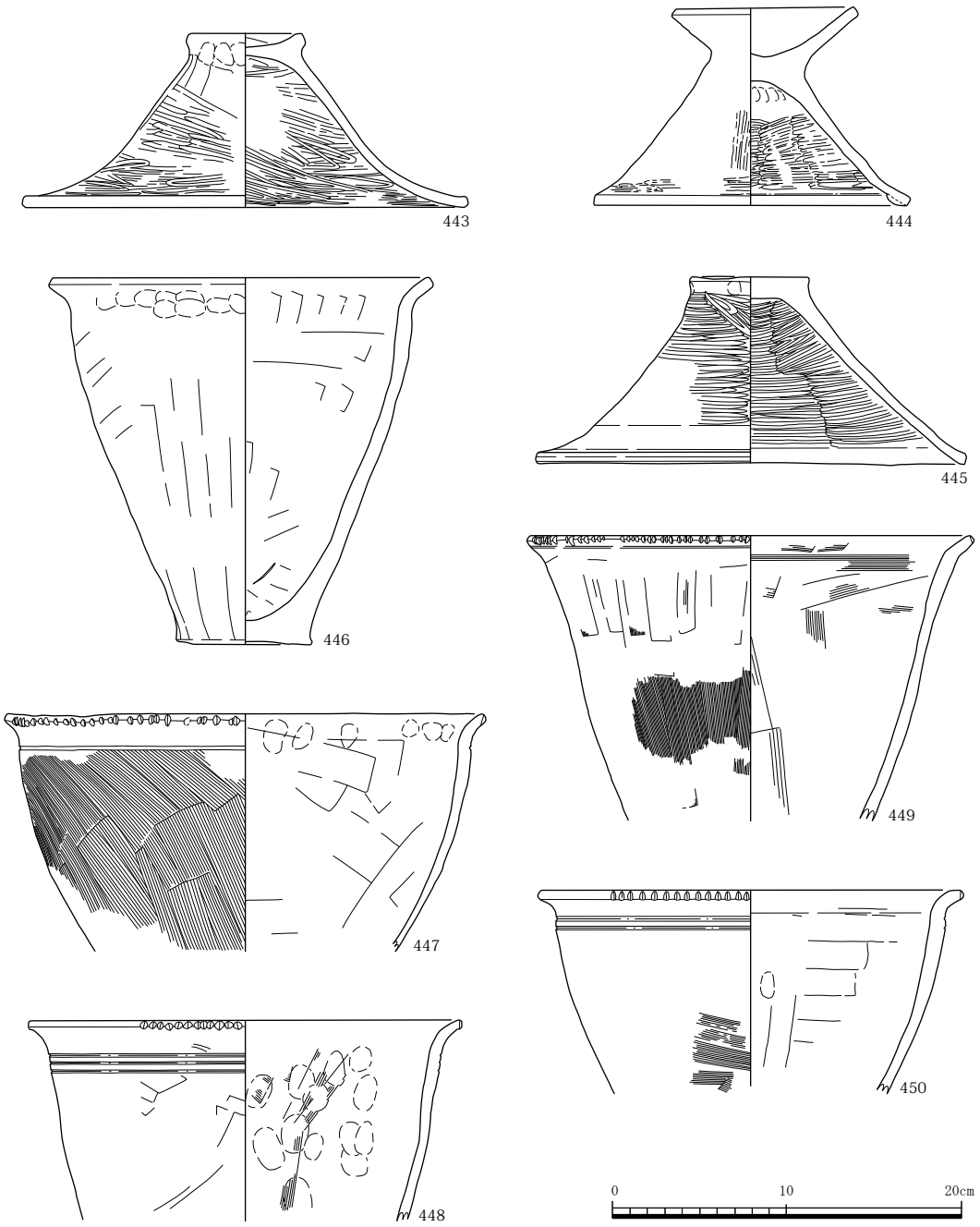


図205　第15面　835溝出土遺物実測図（3）（S＝1：4）

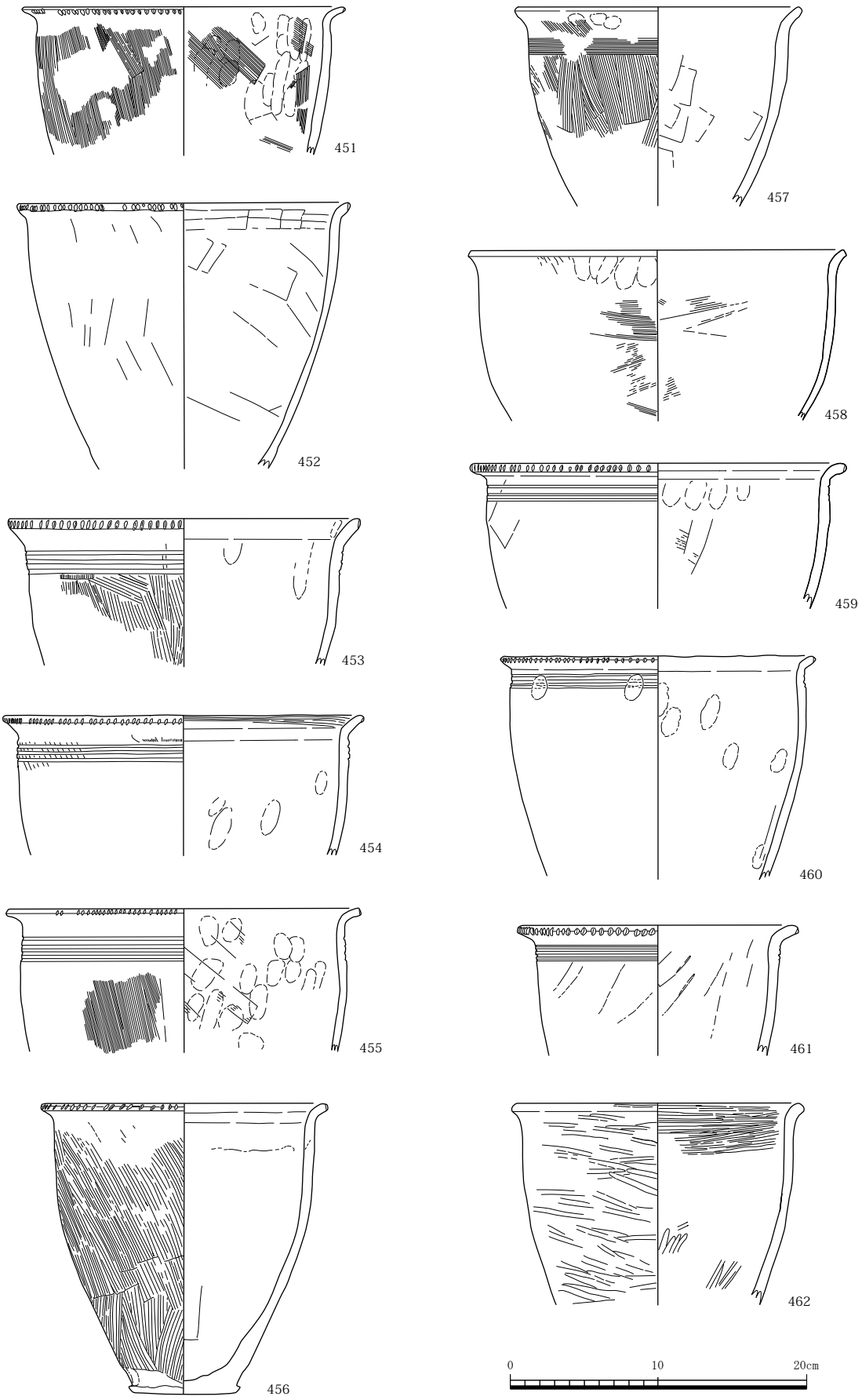


図206　第15面　835溝出土遺物実測図（4）（S＝1：4）

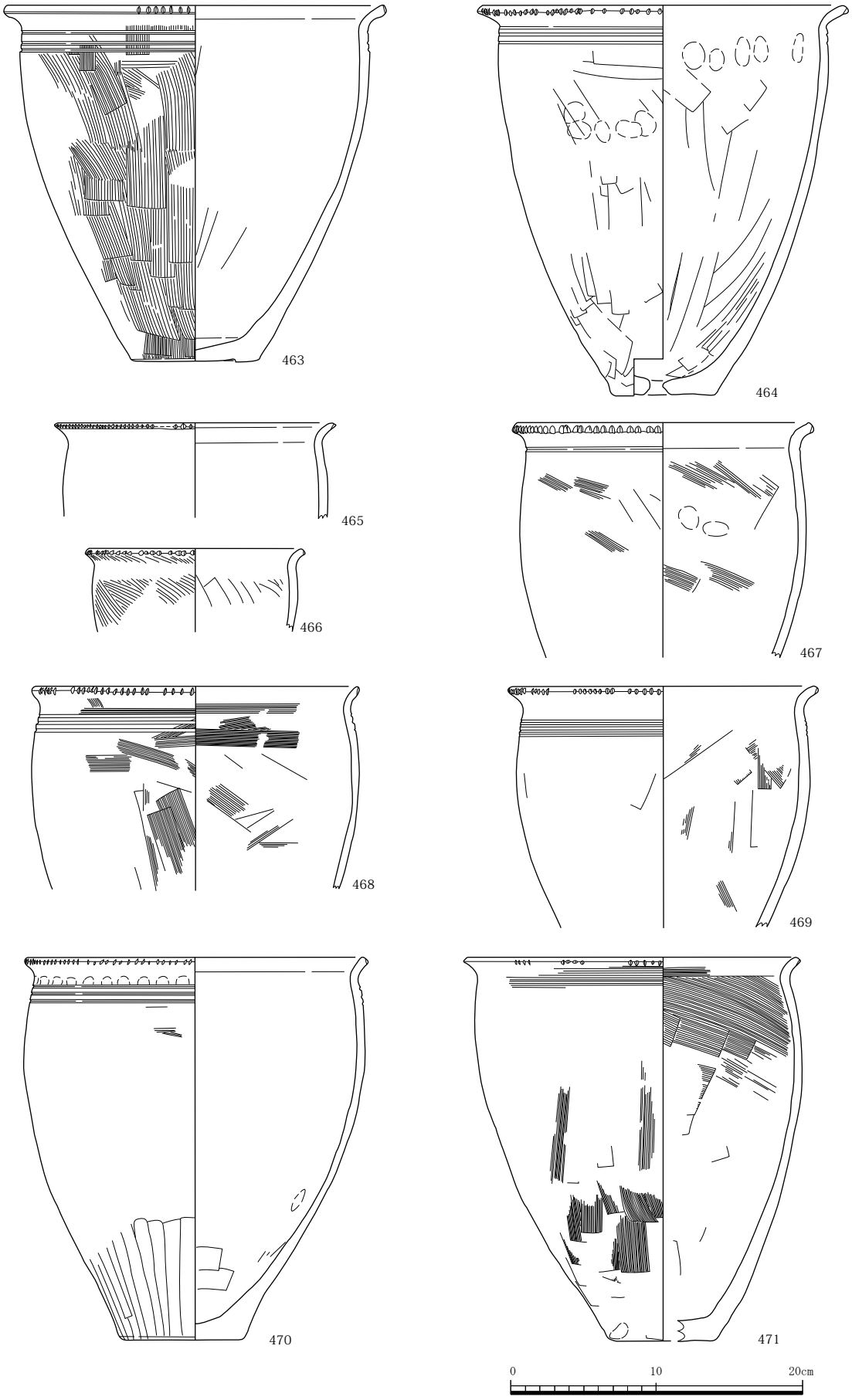


図207　第15面　835溝出土遺物実測図(5)(S＝1：4)

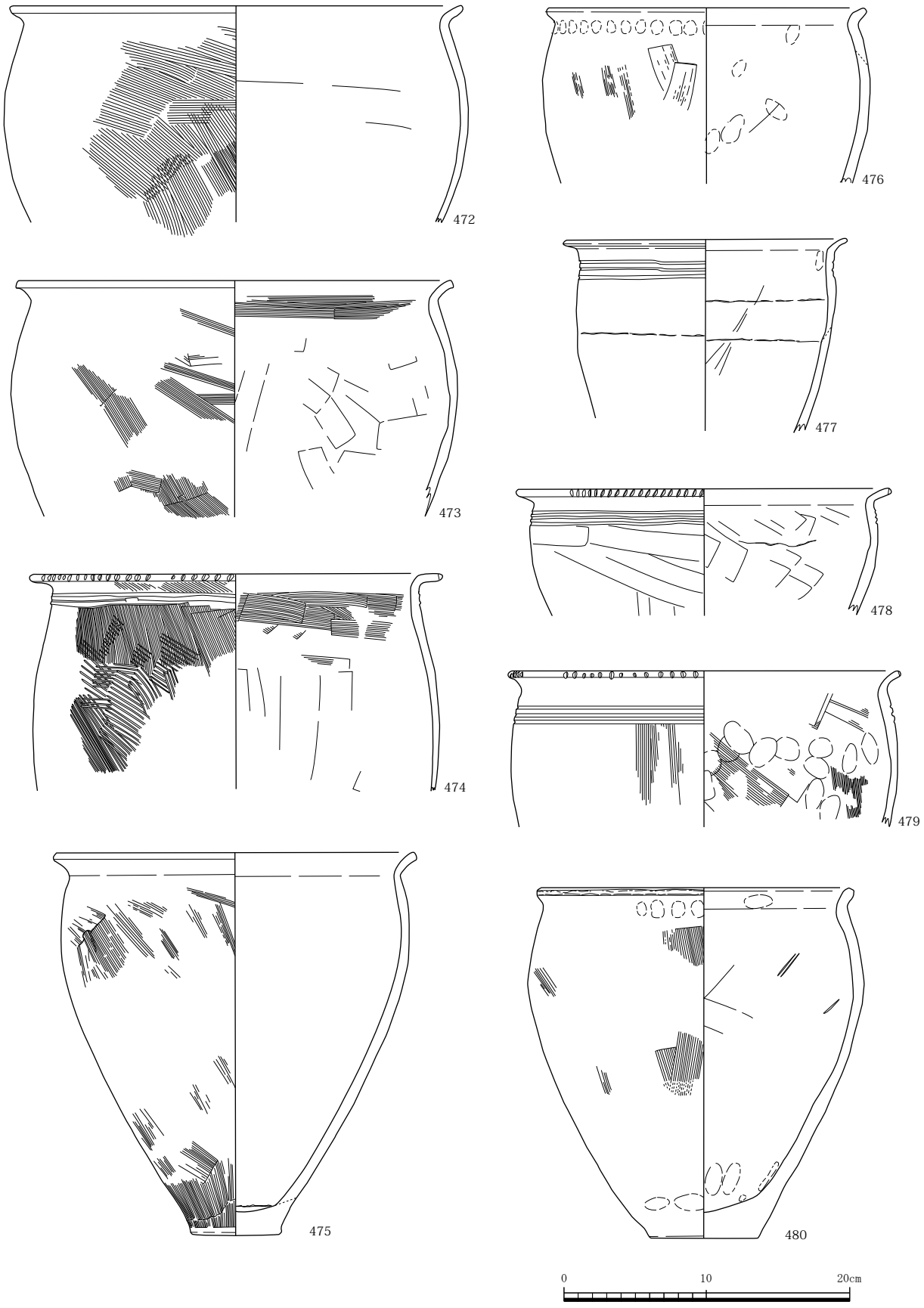


図208　第15面　835溝出土遺物実測図（6）（S＝1：4）

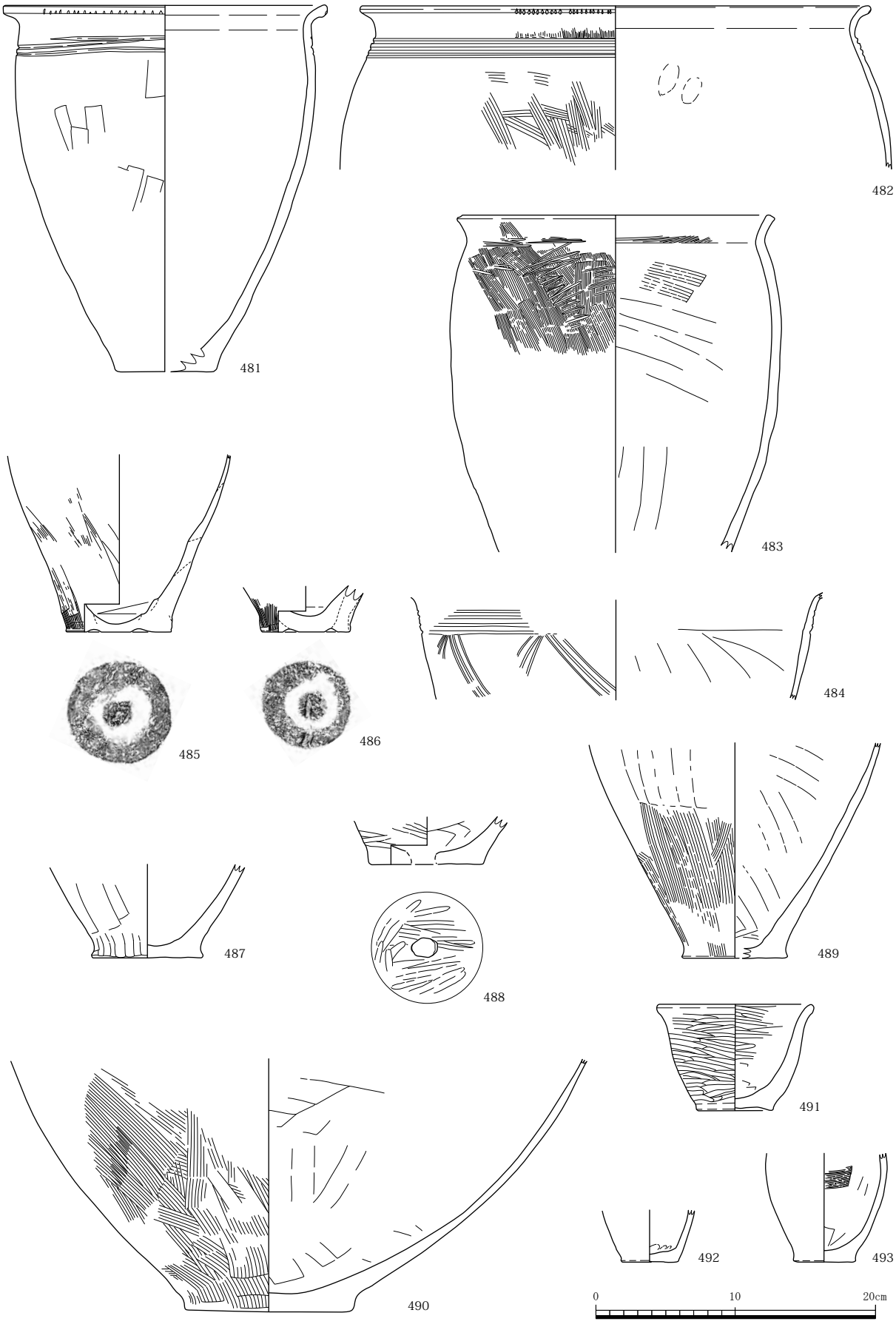


図209　第15面　835溝出土遺物実測図（7）（S＝1：4）

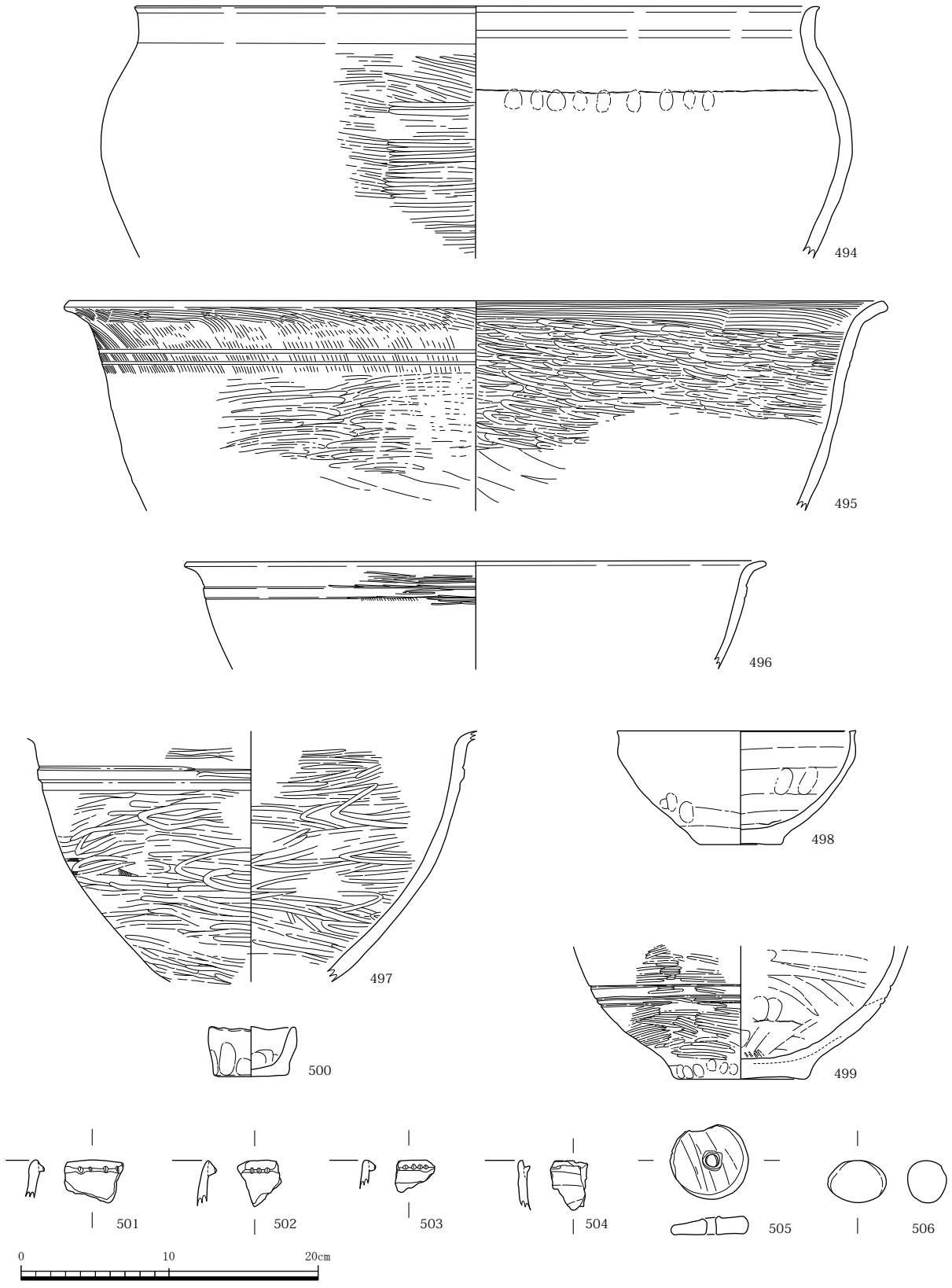


図210　第15面　835溝出土遺物実測図（8）（S＝1：4）

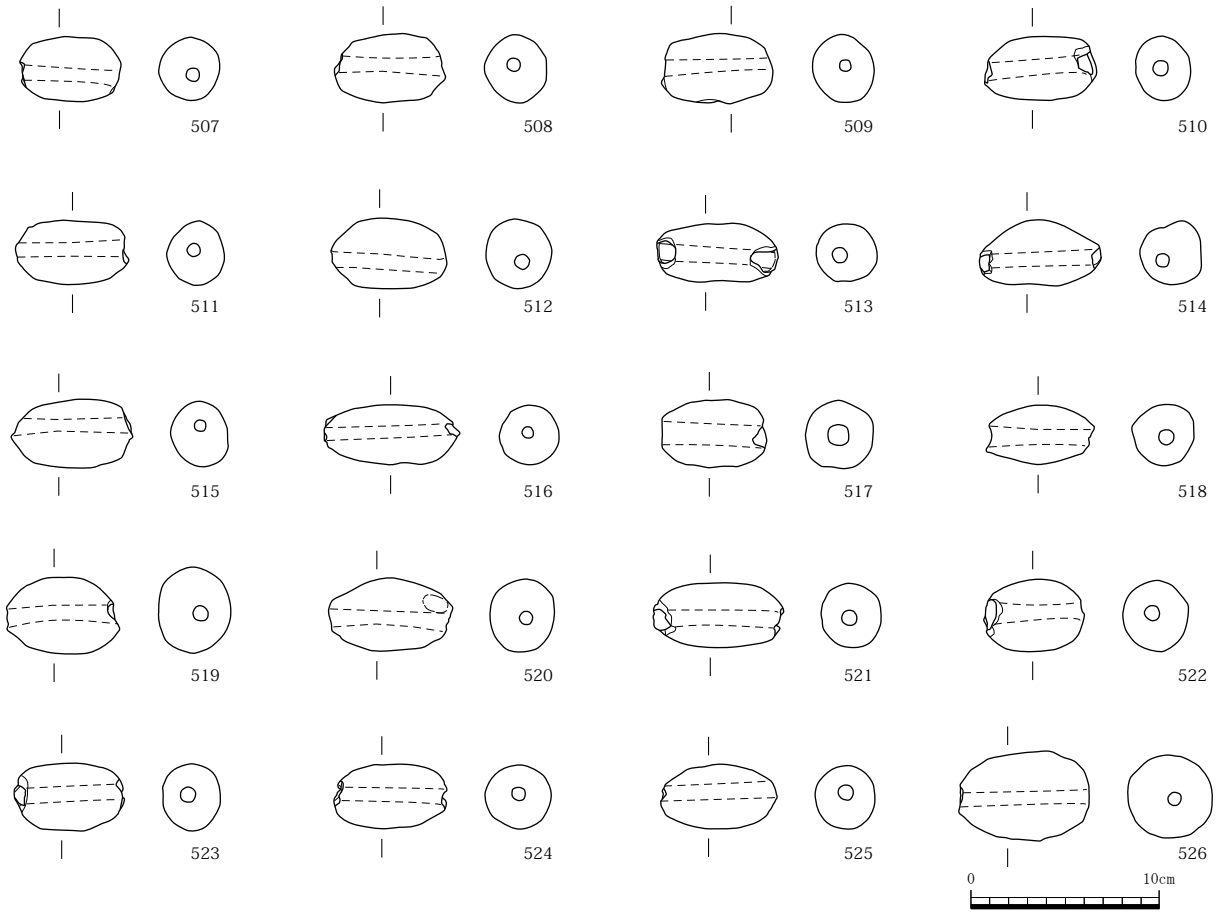


図211　第15面　835溝出土遺物実測図（9）（S＝1：4）

北側は調査区外である。検出長約 20 m、幅 1.1 ～ 1.6 m、深さ 0.35 mを測る。断面形は擂鉢状を呈し、埋土は暗灰色極細砂混じりシルト層と緑灰色シルト層が互層に堆積し、(2 ～ 4) 層は炭を含み、(4) から弥生時代前期の土器が比較的まとまって出土した。

大型壺 (568)、甕 (569) である。(568) は頸部に粘土紐の接合による段を作った後、外面をヘラミガキ、内面を斜め方向のハケメの後ヘラミガキを施している。(569) はほぼ完形に復原された甕である。外面は、底部付近にヘラケズリの後体部に縦方向のハケメ、口縁部にヨコナデを施している。頸部よりやや下がった位置にヘラ描き沈線を３条巡らす。体部内面は板ナデ、口縁部はヨコナデを施していると考えられる。

734 溝 (図 222、223)　20 A -10g 区で検出した。北側を溝状遺構によって切られている。検出長約３m、幅 0.5 m、深さ 0.07 mを測る。断面形は皿形で埋土は３層に細分される。鉢 (570) が出土した。

754 溝 (図 222)　1 A -1g 区で検出した、ほぼ南北方向に延びる溝である。北側は溝状遺構によって切られる。検出長 2.6 m、幅 0.7 m、深さ 0.06 mを測る。断面形は皿形を呈し、埋土は 1 層である。

814 溝 (図 222、224・図版 54)　20 A -6・7b ～ d 区で検出した。遺構検出時には明瞭な切り込みが確認されなかったため、数箇所にトレンチを設定し断面観察を実施しながら平面を検出するよう努めた。しかし、第 17 面まで掘り下げたところ本溝の底面が確認され、上面での肩とは齟齬をきたすことが判明した。よって第 15 面での肩は推定線として図化した。北西から南東方向、南西側にやや膨らむ曲線を呈する。主軸方向は座標北から 27° 西に振っている。北側、東側ともに調査区外である。検出長は

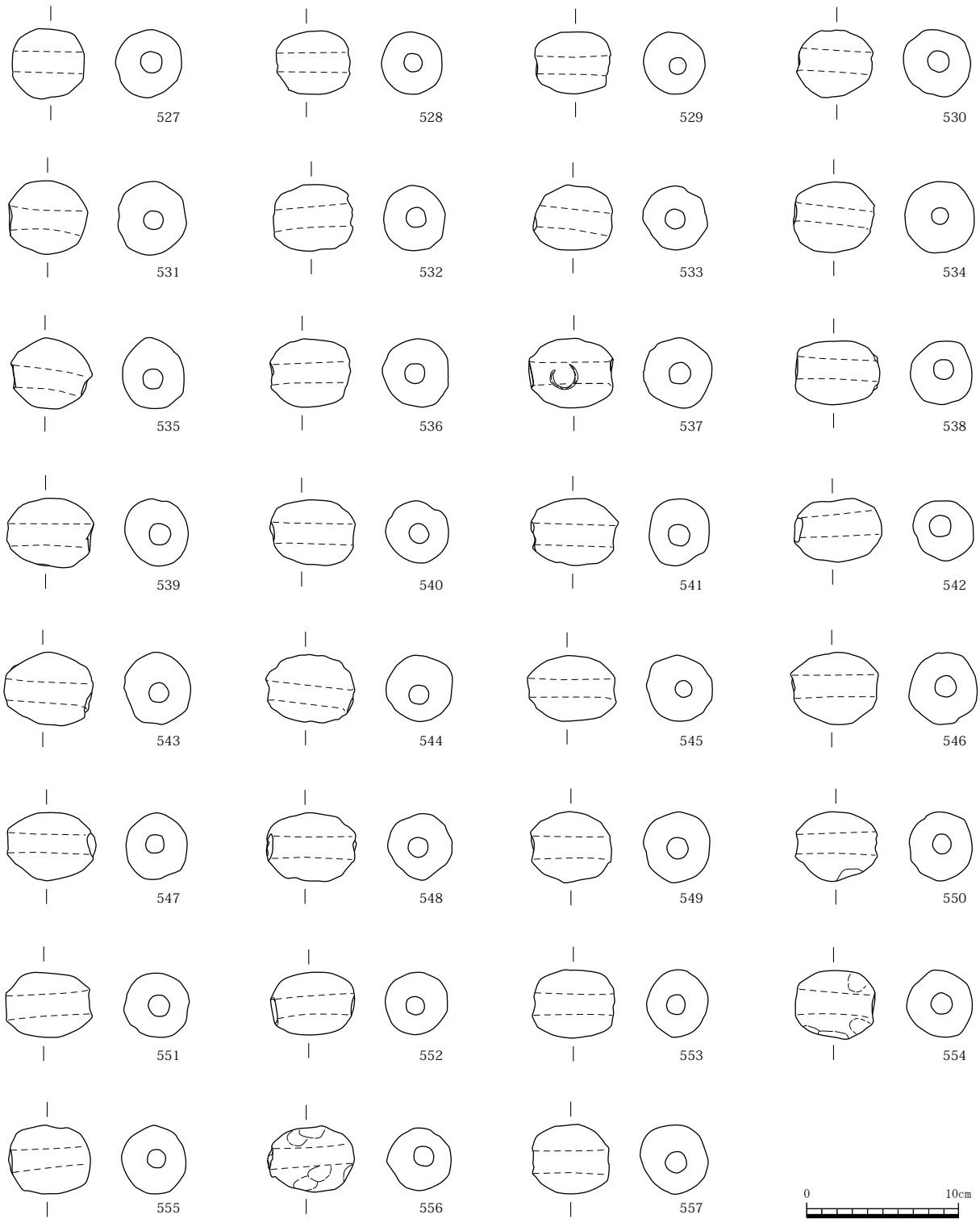


図212　第15面　835溝出土遺物実測図(10)(S＝1：4)

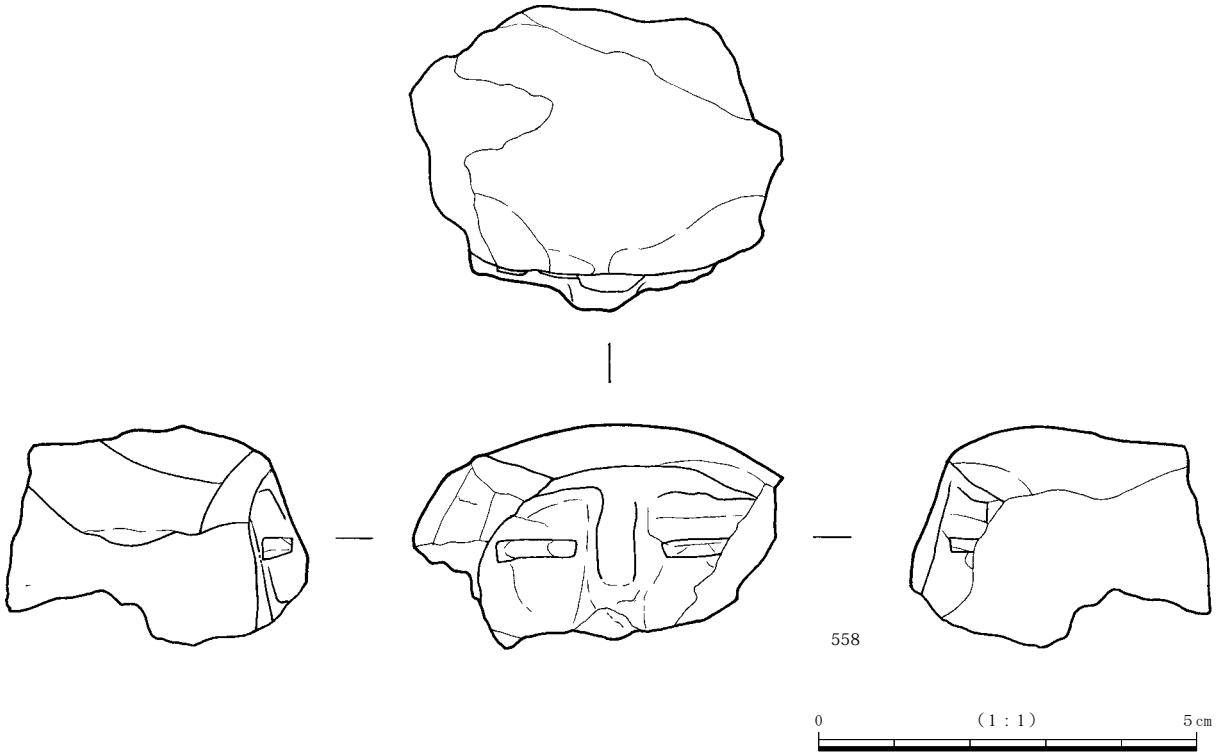


図213　第15面　835溝人形土製品実測図（S＝1：1）

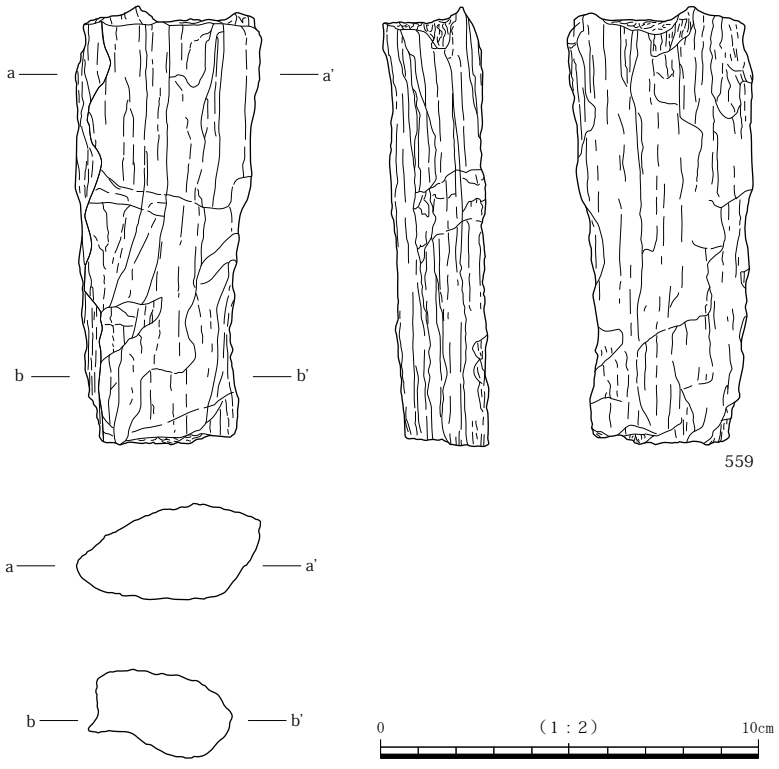


図214　第15面　835溝出土遺物実測図(11)（S＝1：2）

21 m、幅 0.5 ～ 0.9 m、深さ 0.5 mを測る。埋土は灰～黒色シルトを基本として３層に細分される。

遺物は壺 (571・572)、甕 (573 ～ 577) が出土した。(571) は口縁部が外弯し、頸部に粘土紐の接合による段を作り、段上に刻み目を施す。 (573) は甕の口縁部である。粘土紐の接合による段を作った後、工具でおさえて段を整えている。(575) はヘラ描き沈線を２条巡らす。(576)・(577) は甕の底部である。

841 溝 (図 222、225)　20 A -8d・e 区で検出した。ほぼ南北方向をとり、途中途切れるが検出長 8.5 m、幅 0.8 m、深さ 0.1 mを測る。埋土は１層である。小型壺 (578) が出土した。体部外面をヘラミガキの後、ヘラ描き沈線を２条巡らす。底部外面中央部のみヘラミガキを施す。内面は底部付近をナデの後、体部下半に横方向のハケメ、体部上半に縦方向のハケメを施している。

869 溝・1120 土坑 (図 226 ～ 228・図版 21、25、54、55)　20 A -6・7g・h 区で検出した。中央部分を溝状遺構に切られ、東側は調査区外である。835 溝とほぼ併行する。縦断面観察の結果、２基の遺構の切り合いと底面に別遺構があることが確認された。検出長 11.2 m、幅 1.1 ～ 1.9 mを測る。埋土は緑褐～黒色砂層を主体とする。弥生時代前期の土器がまとまって出土した。最終堆積層がオリーブ黒色極細砂混じり中砂 (13) で、上面の溝状遺構の埋土と同様である。上層を掘り下げた後、平面形が長方形を呈する 1120 土坑 (1.2 × 0.9 m) を検出した。深さ 0.1 mと上面を別遺構に切られているため詳細は不明である。平面形状から木製品水漬け遺構の可能性だけを指摘しておきたい。遺物は壺蓋 (579)、壺 (580 ～ 584)、甕 (585 ～ 587)、鉢 (588・589)、甑 (590) が出土した。(579) は突起状のつまみ部を作り、中心に焼成前に穿孔を施す。(580) は頸部に粘土紐の接合による段を作る壺の口縁部である。 (582) は頸部に断面Ｖ字状のヘラ描き沈線を４条巡らす。２箇所に焼成前の穿孔を施す。(583)

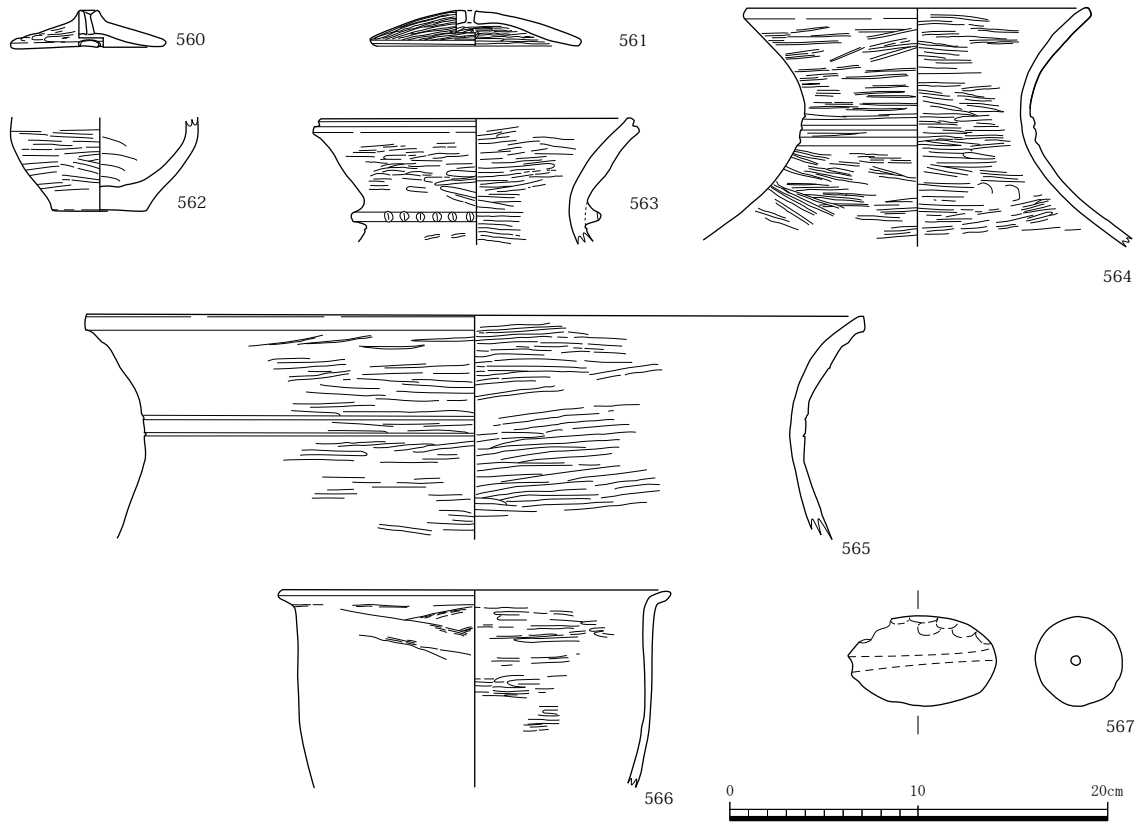


図215　第15面　865溝出土遺物実測図（Ｓ＝１：４）

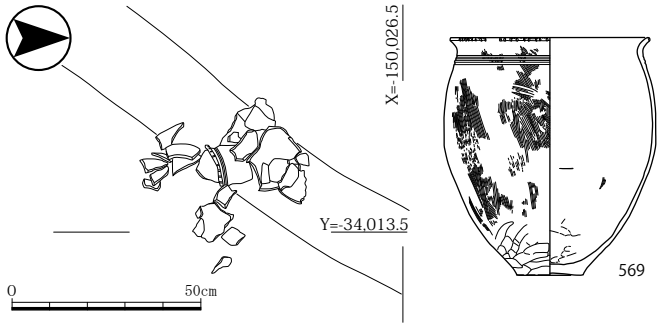


図216　第15面　726溝土器出土状況図（S＝1：20）

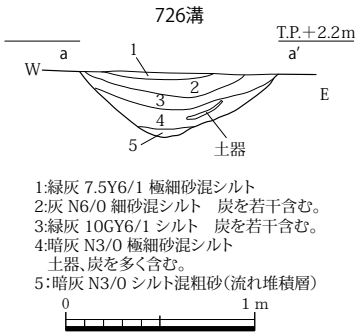


図217　第15面　726溝断面図（S＝1：40）

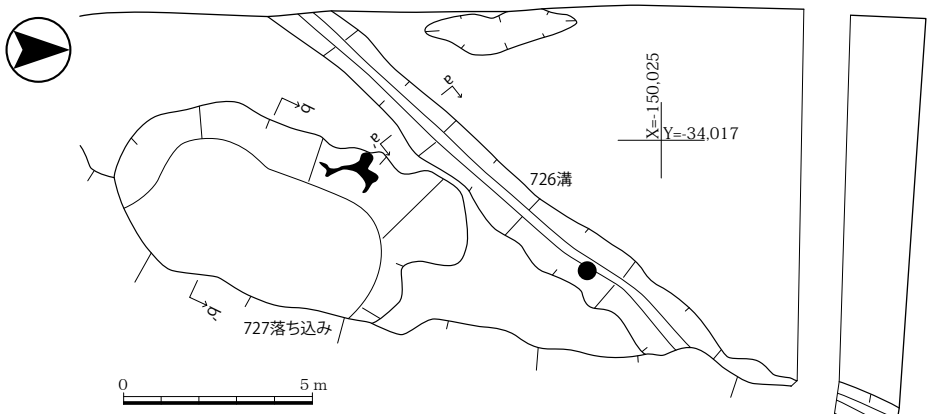


図218　第15面　726溝・727落ち込み平面図（S＝1：200）

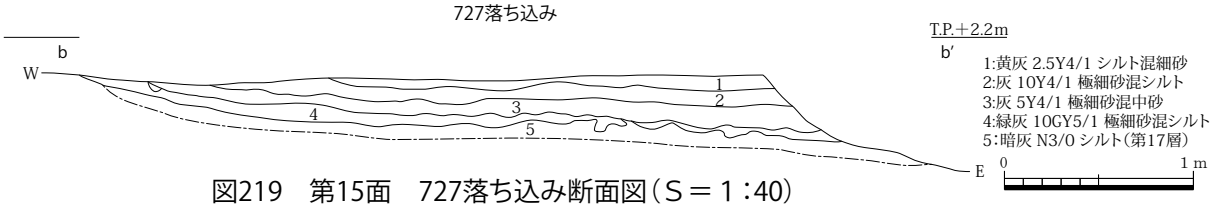


図219　第15面　727落ち込み断面図（S＝1：40）

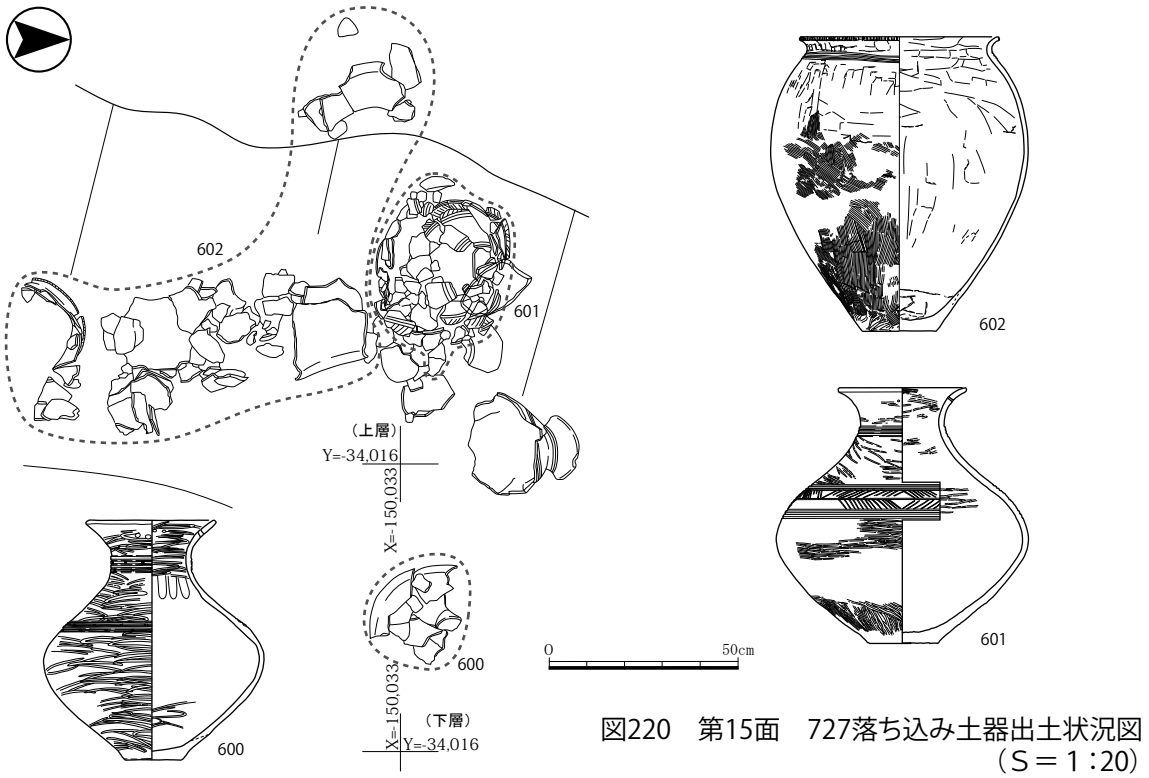
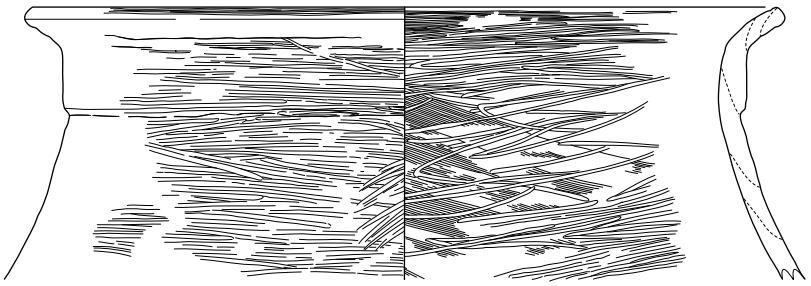
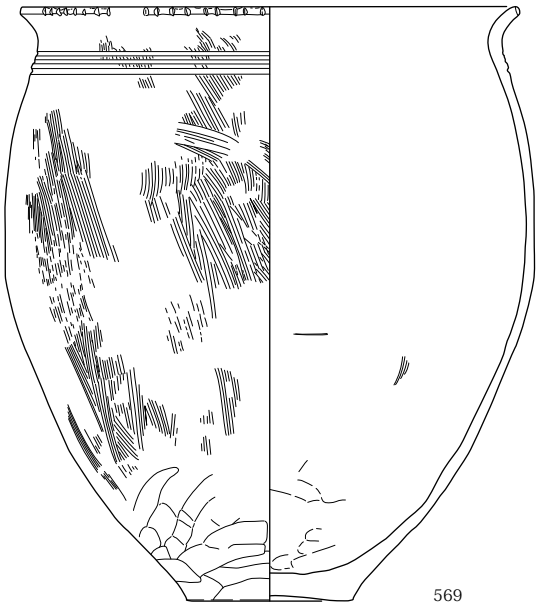


図220　第15面　727落ち込み土器出土状況図（S＝1：20）



568



569

0 10 20cm

図221　第15面　726溝出土遺物実測図（S＝1：4）

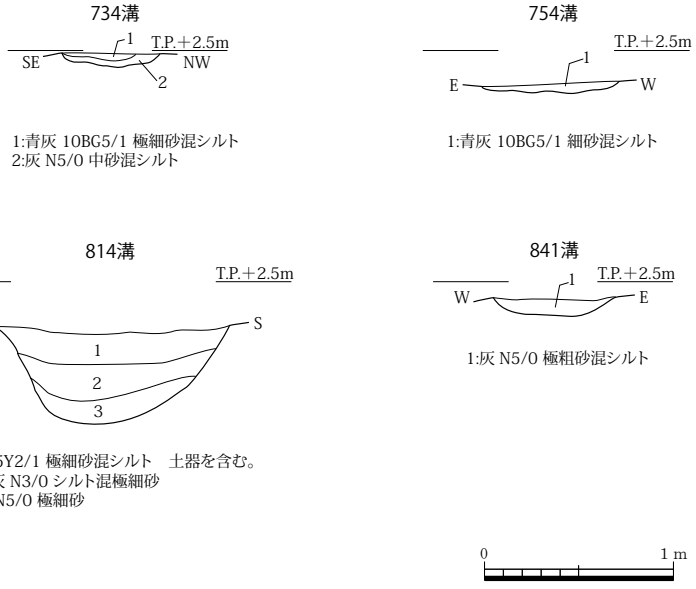


図222　第15面　734・754・814・841溝断面図（S＝1：40）

は頸部に削り出し突帯を巡らせ、突帯上にヘラ描き沈線を３条施紋している。突帯より下の頸部にはヘラミガキ、突帯より上の口縁部には横方向の板ナデを施す。口縁部に焼成前の穿孔による紐孔を設ける。(584) は壺の底部である。縦方向の板ナデの後ヘラミガキを施す。底面から 2.9cm 上に浅い沈線を巡らす。底面にも直径 7.7cm 程の反時計回りの沈線を施す。内面は底部をナデの後、底部以外にはヘラミガキを施す。(585) は屈曲部に貼り付け突帯を巡らす。体部外面をナデの後、屈曲部に貼り付け突帯を巡らす。突帯の上下をヘラケズリすることで突帯を整えている。内面は体部をナデの後口縁部にヨコナデを施す。(586) はヘラ描き沈線を３条巡らす。体部内面中ほどには一部赤色顔料が塗布されている。(587) はほぼ完形に復原できた甕で、体部は内弯する。体部外面に縦方向のハケメの後ナデを施す。屈曲部直下にヘラ描き沈線を２条巡らす。口縁端部に刻み目を施す。内面は体部をナデの後口縁部にヨコナデを施す。底部付近にコゲが付着している。(588) は内弯する体部の鉢である。外面をヘラミガキ、内面はナデの後ヘラミガキを施す。(589) は口縁部が弱く外反する鉢である。内外面は板ナデの後ヘラミガキを施している。(590) は甑の底部である。底部に板ナデの痕跡が残る。焼成後

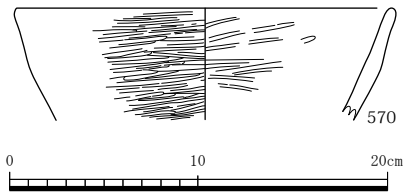


図223　第15面　734溝出土遺物
実測図（S＝1：4）

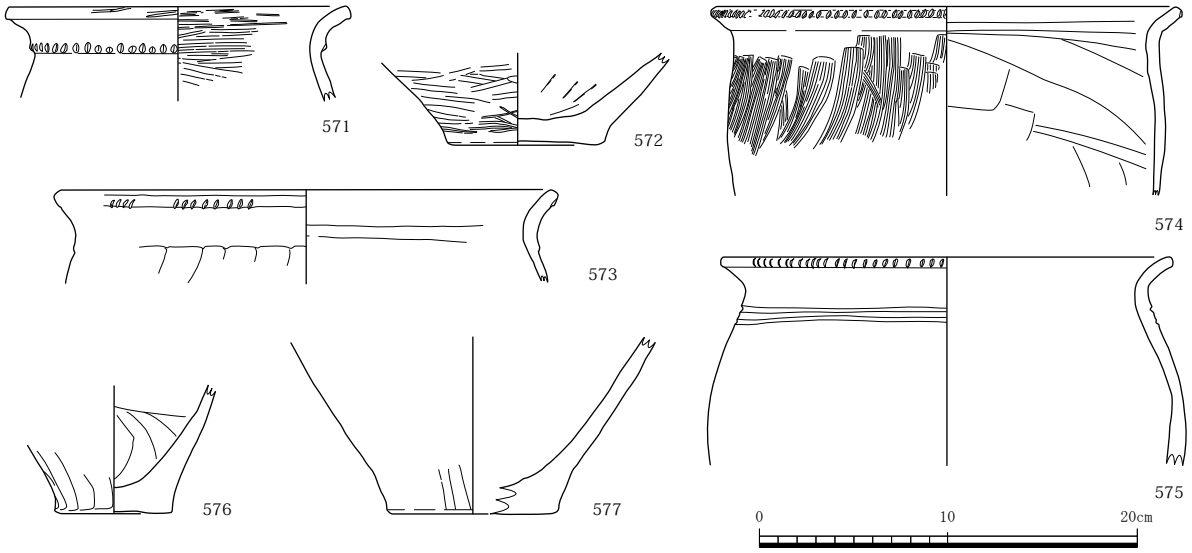


図224　第15面　814溝出土遺物実測図（S＝1：4）

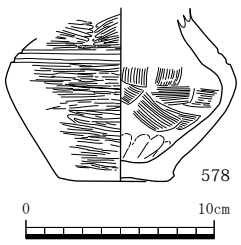
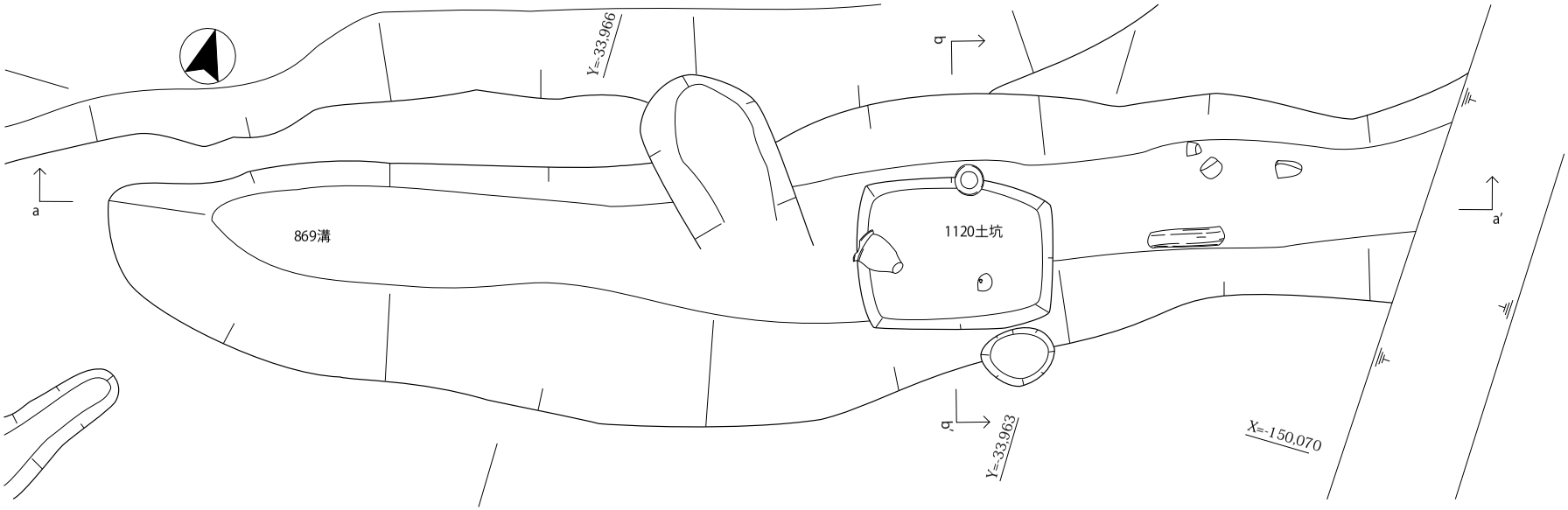
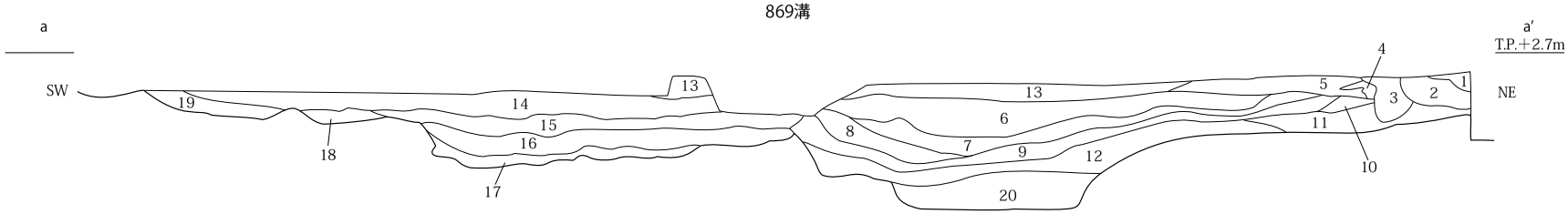


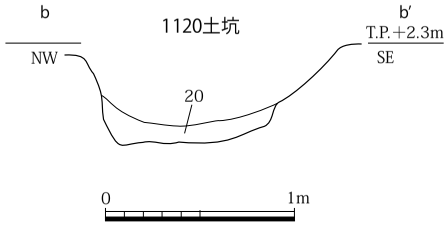
図225　第15面　841溝出土遺物
実測図（S＝1：4）

に穿孔を施す。

【ピット】(図 229)　調査区南東部を中心に多数のピットを検出した。明確に建物を構成するピットはなかった。切り合い関係のあるもの、検出面が溝状遺構によってすでに第 17 面まで削平されているものもあり、確実に本遺構面に帰属するかどうかの判断は困難であった。ここでは遺物の出土したもの、確実に本遺構面に帰属するものを中心に記述する。







1:黒褐 10YR3/2 粗砂混極細砂
2:黒褐 2.5Y3/2 粗砂混中砂
3:灰 N5/0 細砂混極細砂
　炭・17層の偽礫(φ5～30mm)を含む。
4:暗灰黄 2.5Y4/2 細砂混中砂
5:オリーブ灰 5GY6/1 中砂・極細砂混シルト
6:緑灰 7.5GY6/1 極細砂混細砂
7:暗灰 N3/0 中砂混シルト　土器を含む。
8:黒褐 10YR3/1 粗砂・細砂混中砂
9:灰白 7.5Y7/2 細礫(φ1～5mm)・粗砂混中砂
10:灰黄褐 10YR4/2 粗砂混中砂
11:灰 N5/0シルト混中砂　炭・焼土塊を含む。
12:黒 2.5Y2/1 中砂・極細砂混粗砂
13:オリーブ黒 5Y2/2 極細砂混中砂
14:緑灰 7.5GY6/1 中砂・シルト混極細砂
15:黒 N2/0 極細砂混粗砂
16:暗灰 N3/0 中砂混粗砂
17:黒 N1.5/0 中砂・粗砂混極粗砂
18:黒 2.5Y2/1 極粗砂・粗砂混中砂
19:緑黒 10GY2/1 粗砂・極細砂混中砂
20:明オリーブ灰 5GY7/1 極粗砂～中砂　第17層。

図226　第15面　869溝平・断面図(1)(S＝1:40)

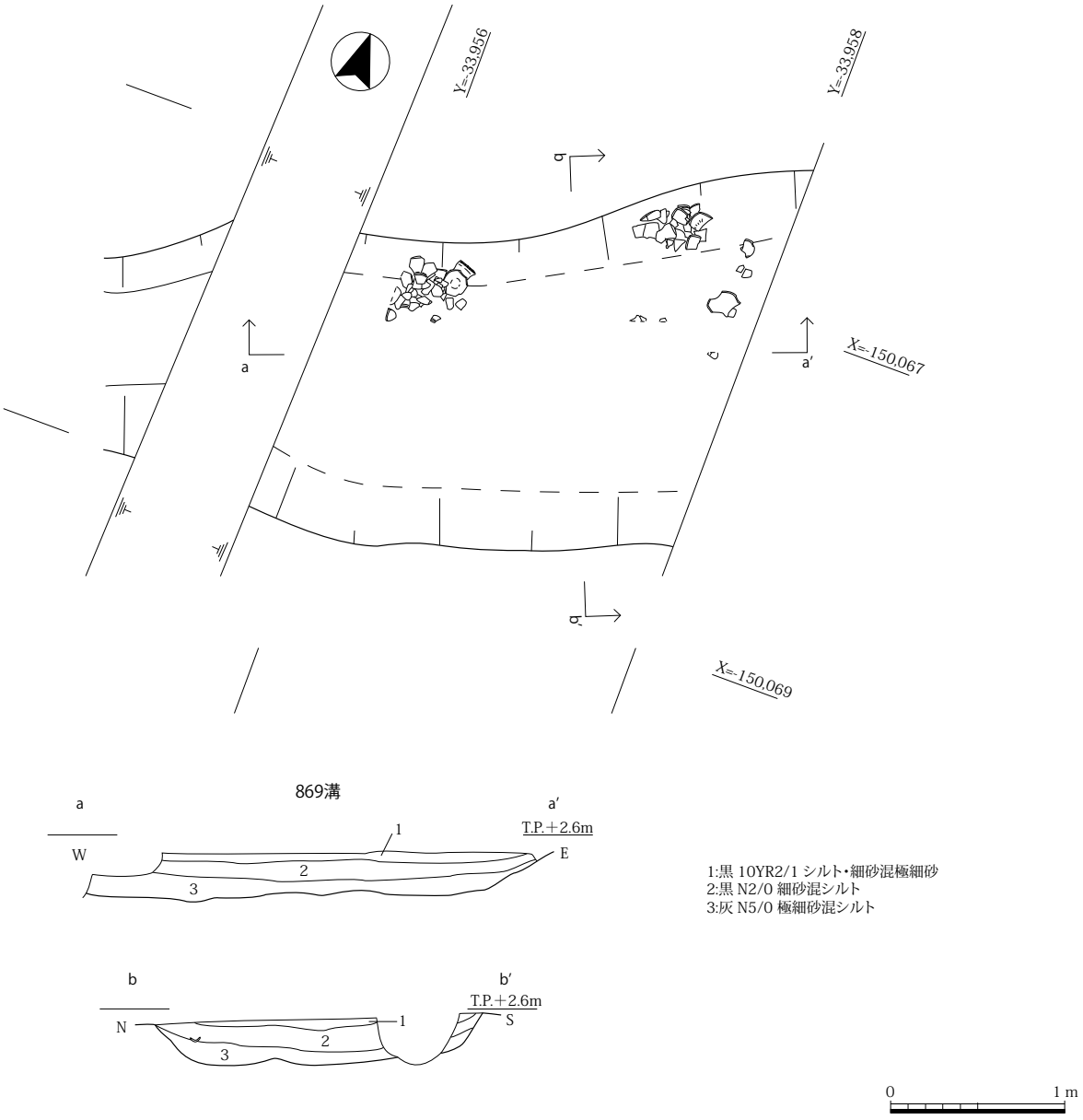


図227　第15面　869溝平・断面図（2）（S＝1：40）

735 ピット　20 A -10g 区で検出した。平面形はほぼ円形で直径 0.25 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は２層に分層され灰色シルト層を主体とする。下層は第 16 層由来の偽礫が混じる。

739 ピット　20 A -10g 区で検出した。平面形はほぼ円形で直径 0.6 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は 2 層に分層され青灰色細砂混じりシルト層を主体とする。

752 ピット (図 230)　20 A -10g 区で検出した。平面形はほぼ円形で直径 0.3 m、深さ 0.4 mを測る。埋土は 5 層に分層され灰色シルト層を主体とする。縄紋時代晩期の突帯紋土器 (591) が出土した。突帯刻み目形状は小 D 字形である。

766 ピット　20 A -10g 区で検出した。平面形はほぼ円形で直径 0.3 m、深さ 0.3 mを測る。埋土は 3 層に分層され暗灰色シルト層を主体とする。

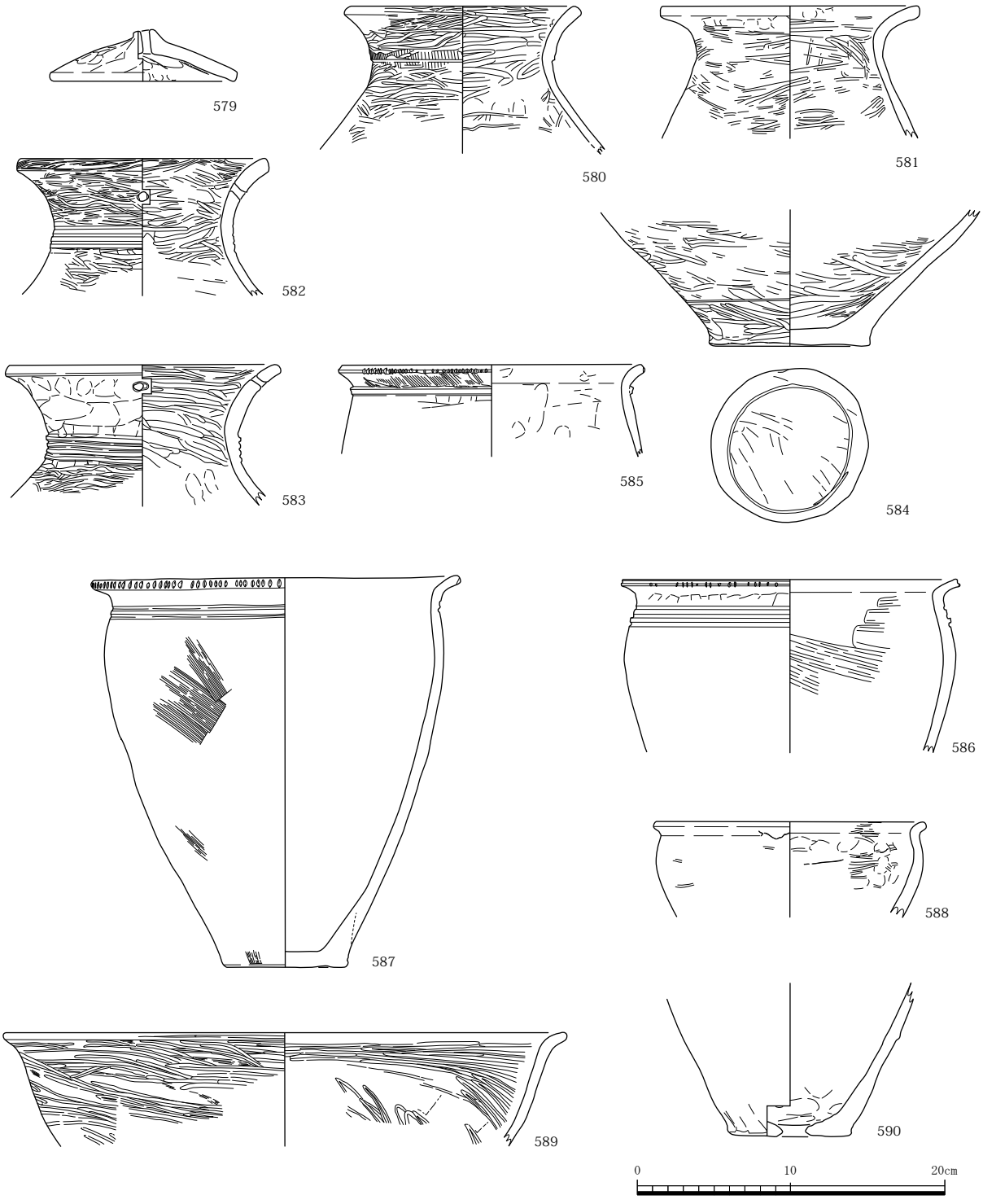


図228　第15面　869溝出土遺物実測図（S＝1：4）

767 ピット　20 A -10g 区で検出した。平面形はほぼ円形で直径 0.4 m、深さ 0.5 mを測る。埋土は３層に分層され暗灰色シルト層を主体とする。

775 ピット　20 A -10g 区で検出した。平面形はほぼ円形で直径 0.25 m、深さ 0.3 mを測る。埋土は３層に分層され暗灰色細砂層を主体とする。

【流路】

725 流路 (図 160、231・図版 55、56)　調査区西側をほぼ南北に流れる流路である。主軸方向は座標北から 15°東に振っている。第 12 面で埋没する流路の前身流路部である。流心は第 13 － 1 面で検出

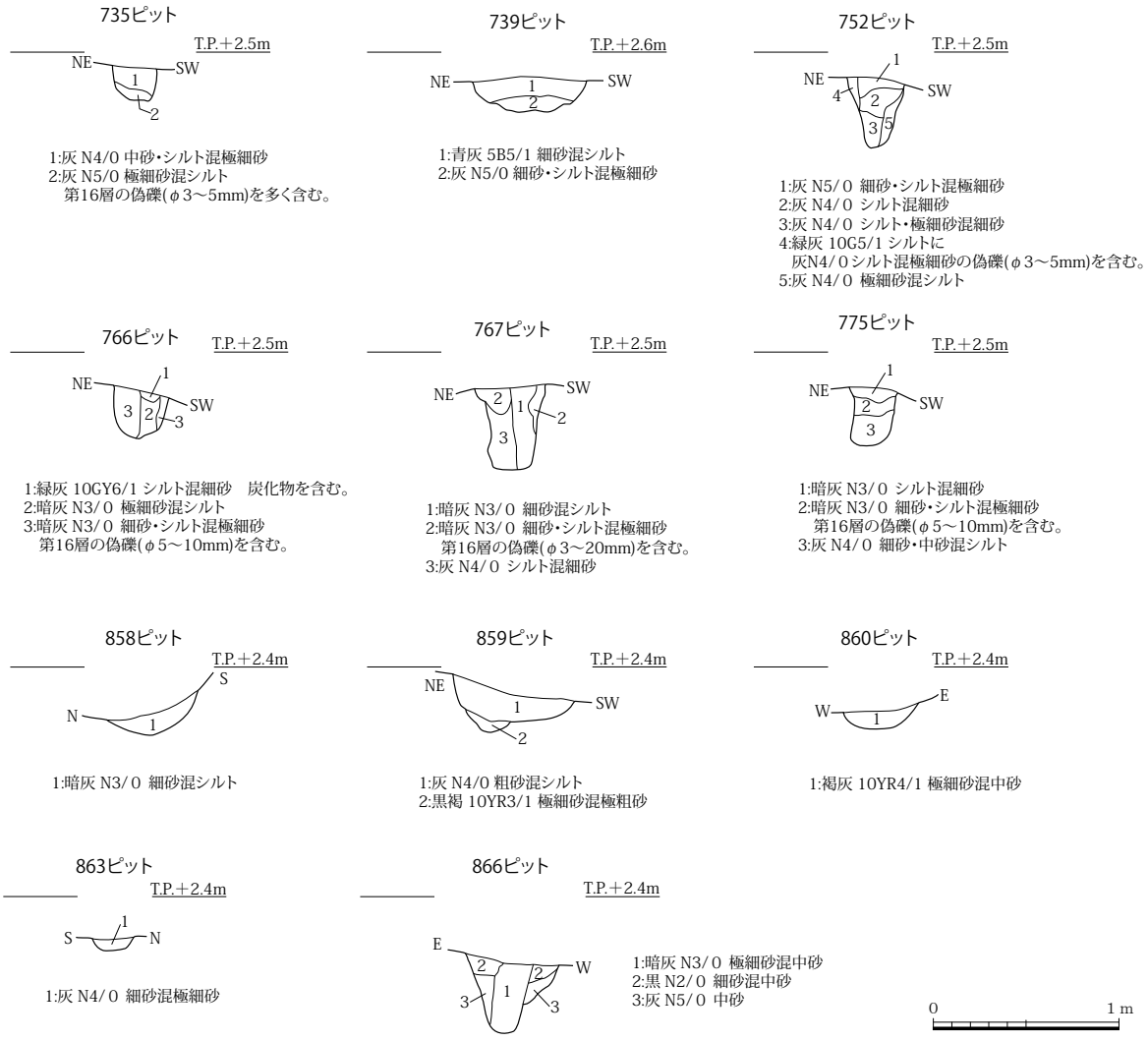


図229　第15面　735・739・752・766・767・775・858～860・863・866ピット断面図（S＝1：40）

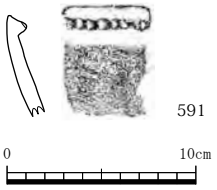


図230　第15面　752ピット
出土遺物実測図（S＝1：4）

された 646 流路へと継続するが、本遺構面では東側肩部が広がりを見せた。検出幅約 16 mである。東側からは溝状遺構が流れ込み、西側では流路に向かって地形が下がっている位置に 727 落ち込みが存在する。遺物は壺蓋 (592)、小型壺 (593)、壺底部 (594・596・597)、甕底部 (595)、甕蓋 (598)、縄紋土器 (599) が出土した。(592) は内外面ともヘラミガキを施している。焼成前の穿孔が 1 箇所残存している。(593) は体部外面にヘラミガキを施した後、ヘラ描き沈線を 2 帯巡らす。ヘラ描き沈線帯間に斜格子紋を施紋している。内面はナデを施す。(594) は壺の底部である。 (595) は甕の底部である。底部中央に焼成後の穿孔を施すが、内面までは貫通しない。(596) は壺の底部で、外面に縦方向の板ナデ、内面にヘラミガキを施している。(597) も壺の底部で、外面に縦方向のハケメ、内面にヘラミガキを施す。(598) は甕蓋の裾部と考えられる。外面にコゲがわずかに付着している。 (599) は縄紋土器の深鉢の口縁部である。外面に LR の縦位帯状紋を施している。口縁端部にも縄紋を施す。縄紋時代中期末の遺物である。

【落ち込み】 自然地形によって地形に凹凸があり、落ち込んでいる部分からまとまって遺物が出土した。落ち込みの範囲が明確なものを中心に記述する。

727 落ち込み (図 218 ～ 220、232・図版 26、56)　1 A -1・2d 区で検出した。725 流路の左岸側、流路に向かって下がり窪んでいるところにまとまった状態で弥生時代前期の土器が出土した。検出長 9.5 m、幅 4.8 m、深さ 0.35 mを測る。埋土は 4 層に細分されシルト層を主体とする。

遺物は壺 (600・601)、甕 (602) が出土した。(600) はほぼ完形に復原された壺である。外面を全体的にヘラミガキを施した後、頸部に削り出し突帯を巡らす。肩部にヘラ描き沈線を 4 条、頸部突帯上にヘラ描き沈線を 3 条施した後、沈線間に刻み目を施す。口縁部には焼成前の穿孔による紐孔を 2 個設ける。内面はナデの後ヘラミガキを施す。(601) はほぼ完形に復原された壺である。外面は縦方向のヘラミガキの後横方向のヘラミガキを施している。頸部に削り出し突帯を巡らせた後、突帯上にヘラ描き沈線を 2 条、体部にヘラ描き沈線を 3 条ずつ 2 帯巡らせており、体部のヘラ描き沈線帯間に有軸羽状紋を施紋している。口縁部に焼成前の穿孔による紐孔を設ける。内面はヘラミガキを施す。(602) はほぼ完形に復原された甕である。外面を縦方向の板ナデの後縦方向のハケメを施す。底部付近は縦方向のハケメの後ヘラケズリを施す。屈曲部にヘラ描き沈線を 3 条、口縁端部に刻み目を施している。内面は縦方

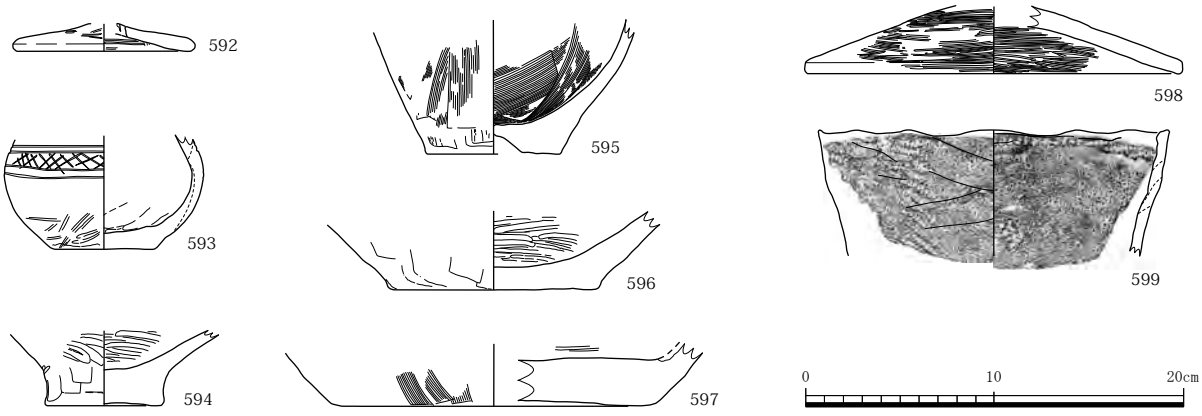


図231　第15面　725流路出土遺物実測図（S＝1：4）

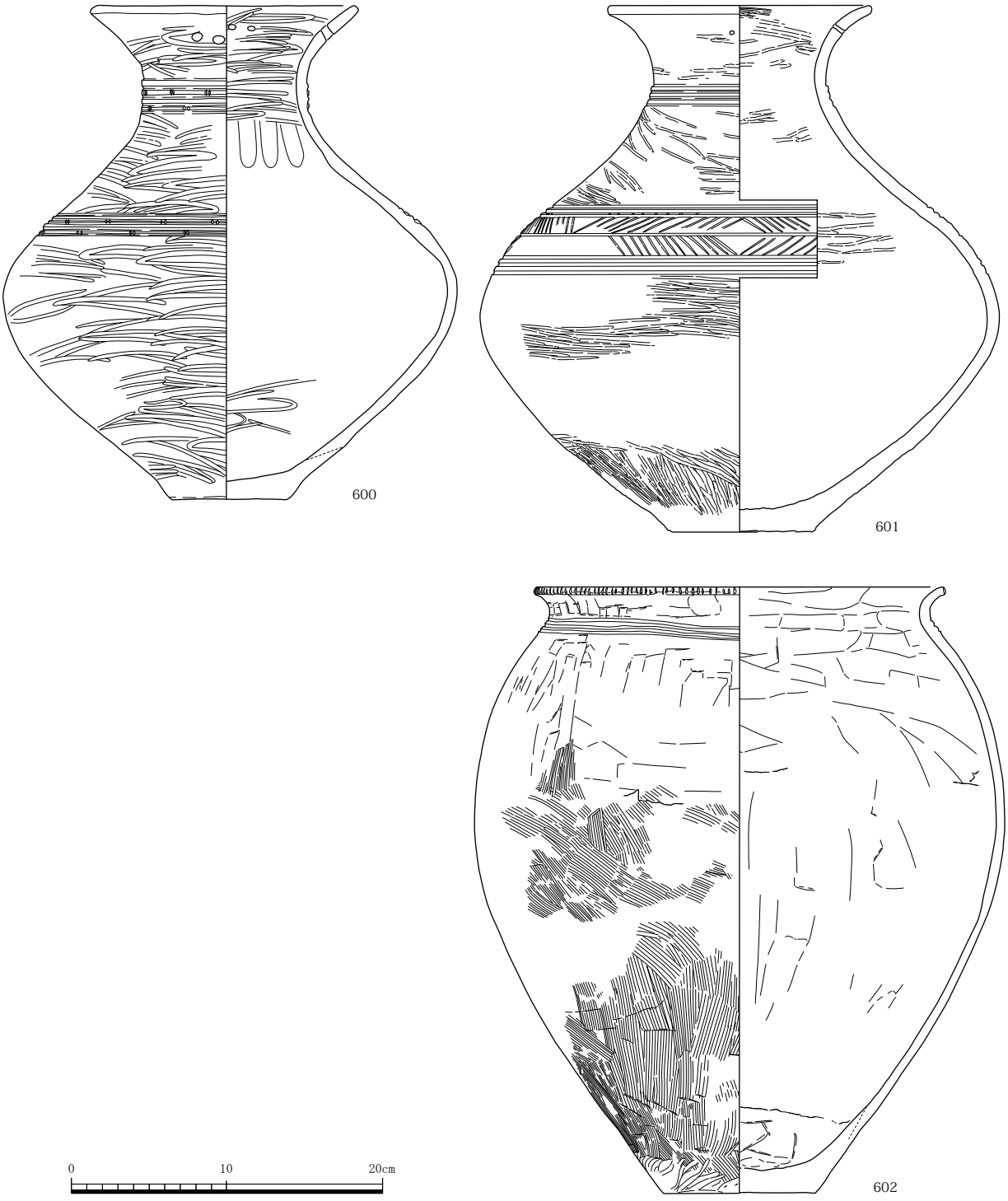


図232　第15面　727落ち込み出土遺物実測図（S＝1：4）

向の板ナデの後横方向の板ナデを施す。

817 落ち込み (図 233)　20 A -7・8f 区で検出した。長軸 3.7 m、幅 2 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は 2 層に細分され、シルト層が主体である。

遺物は甕 (603) が出土した。口縁部直下に削り出しによる段を作り出しており、段の下にヘラ描き沈線が 2 条以上残存している。

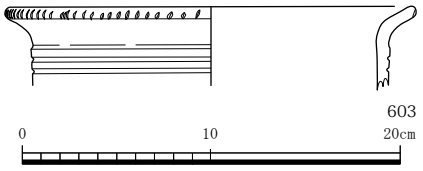


図233　第15面　817落ち込み出土遺物
実測図（S＝1：4）

854 落ち込み (図 229・234 ～ 239・図版 26、55、56)　10A － 8h 区で検出した。平面は不整形な長方形を、断面は皿状を呈する落ち込みであるが、上層を溝状遺構に西半部を第 14 面 717 溝に切られる。残存する規模は長軸 6.6 m、短軸 5.0 m、深さ 0.2 ～ 0.35 mを測る。断面図の (1) ～ (3) 層は溝状遺構の埋土で、(4) ～ (8) 層が 854 落ち込み埋土である。埋土中より弥生時代前期に属する土器 (604 ～ 610) が出土した。器種別にみると、壺 (604・605)、甕 (606 ～ 608)、鉢 (609・610) となる。(604) は底部外面付近に縦方向のヘラミガキの後、体部に横方向のヘラミガキを施していたと考えられる。頸部及び体部には削り出し突帯を巡らし、頸部突帯上にはヘラ描き沈線を 1 条、体部突帯上にはヘラ描き沈線を 3 条施す。内面はヘラミガキを施す。(606) は外面に縦方向のハケメの後ナデを施している。屈曲部直下にヘラ描き沈線を 4 条、口縁端部に刻み目を施す。(607) はほぼ完形に復原された個体で、体部が張り、頸部を絞ることで口縁部を強く屈曲させる。体部外面に縦方向の板ナデの後、屈曲部直下にヘラ描き沈線を 3 条、口縁端部には刻み目を施す。内面は口縁部をヨコナデの後、体部に縦方向の板ナデを施す。(608) はほぼ完形に復原された個体である。体部外面を縦方向の板ナデの後、口縁部にヨコナデを施す。屈曲部にヘラ描き沈線を 3 条施す。口縁端部には刻み目を施す。内面は体部下半をヘラミガキ、体部上半を縦方向の板ナデの後、口縁部にヨコナデを施す。(609) の鉢の口縁は内弯して立ち上がる。内外面とも摩滅しており、調整は不明瞭である。(610) の鉢の口縁部は外反する。内外面とも摩滅が激しく調整は不明瞭である。

なお、落ち込みの底でピット 7 基を検出した。**857 ピット**は落ち込みの南東隅で検出した。直径 0.4 m、深さ 0.25 mを測る。埋土は細砂混じりシルトの単層で、弥生時代前期に属する完形の小形壺 (611) が出土した。頸部と体部の境に粘土紐接合による段を設け、口縁部外面に横方向のナデの後、頸部と体部にはヘラミガを施す。内面には口縁部から頸部上半に横方向のナデ、頸部下半にはユビオサエの後ナデを施す (図版 26)。

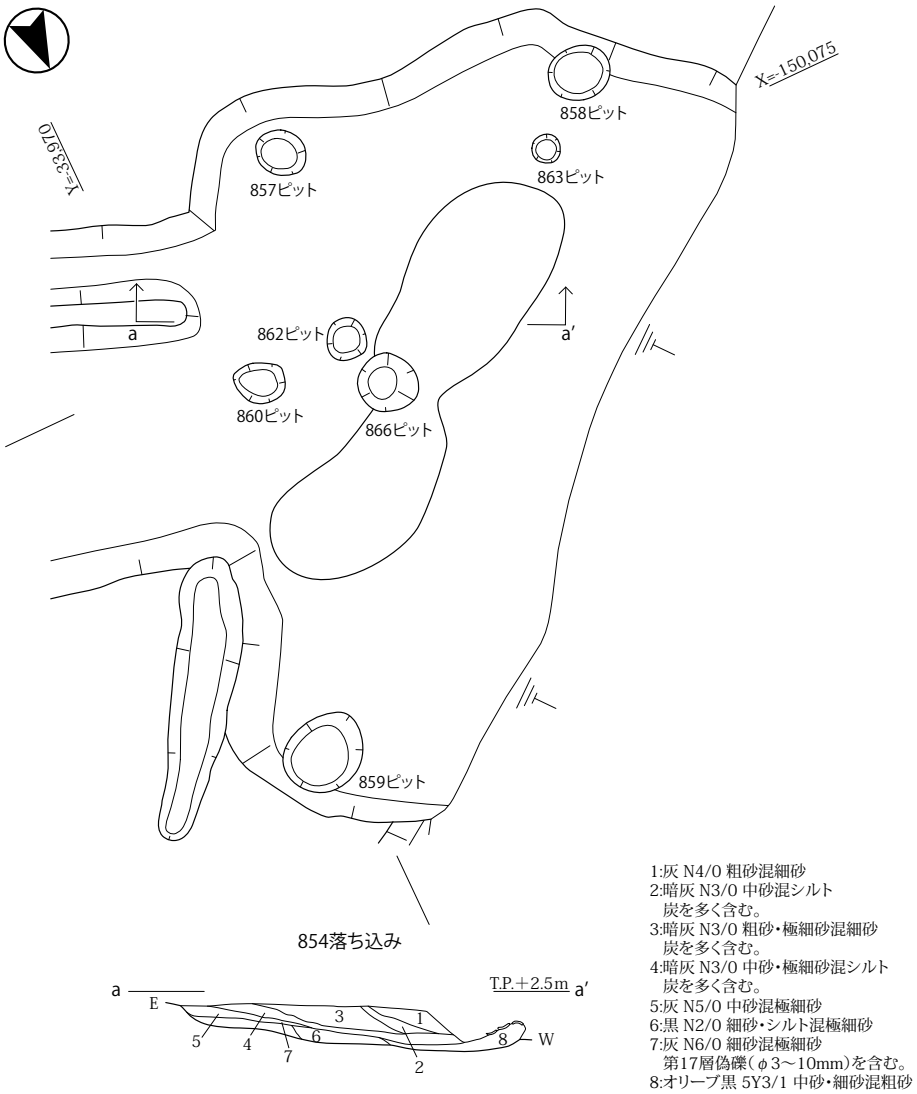
858 ピットは落ち込みの南西肩部で検出した。直径 0.5 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は細砂混じりシルトの単層で、弥生土器の細片が出土したが図示しえなかった。

859 ピットは落ち込み北東隅で検出した。直径 0.6 × 0.7 mの楕円形を呈し、深さ 0.35m を測る。埋土は上下 2 層で上層の粗砂混じりシルト層から弥生時代前期の甕口縁部 (612) が出土した。

860 ピットは落ち込み中央東辺で検出した。直径 0.3m、深さ 0.15m を測る。埋土は極細砂混じり中砂の単層で弥生土器の細片が出土したが図示しえなかった。

862 ピットは落ち込み中央部で検出した。規模は直径 0.35 m、深さ 0.25 mである。遺物の出土はなかったが、直径 0.2 mを測る柱根が残る。柱根の樹種はニレ属である (図版 26)。

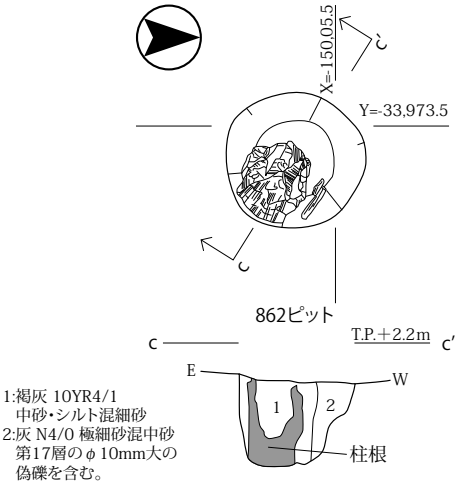
863 ピットは 858 ピットの北側 0.5 mで検出した。直径 0.25 m、深さ 0.05 mを測る。埋土は細砂混じり極細砂の 1 層で弥生土器の細片が出土したが図示しえなかった。



1:灰 N4/0 粗砂混細砂
2:暗灰 N3/0 中砂混シルト
炭を多く含む。
3:暗灰 N3/0 粗砂・極細砂混細砂
炭を多く含む。
4:暗灰 N3/0 中砂・極細砂混シルト
炭を多く含む。
5:灰 N5/0 中砂混極細砂
6:黒 N2/0 細砂・シルト混極細砂
7:灰 N6/0 細砂混極細砂
第17層偽礫(φ3～10mm)を含む。
8:オリーブ黒 5Y3/1 中砂・細砂混粗砂

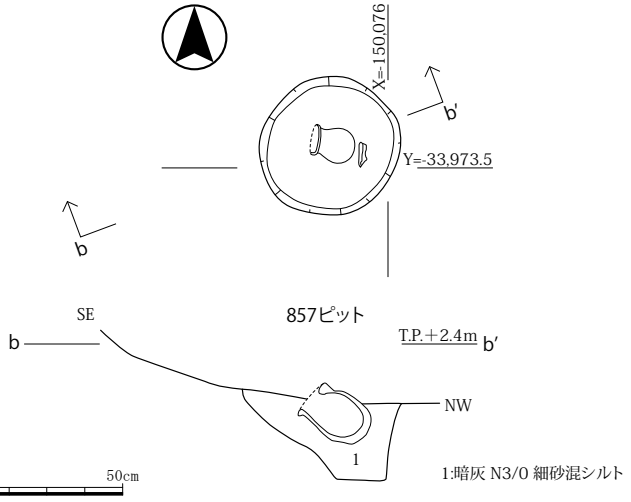
図234　第15面　854落ち込み断面図(S＝1:60)

0　1 m



1:褐灰 10YR4/1
中砂・シルト混細砂
2:灰 N4/0 極細砂混中砂
第17層のφ10mm大の
偽礫を含む。

図235　第15面　862ピット
平・断面図(S＝1:20)



0　50cm

1:暗灰 N3/0 細砂混シルト

図236　第15面　857ピット
平・断面図(S＝1:20)

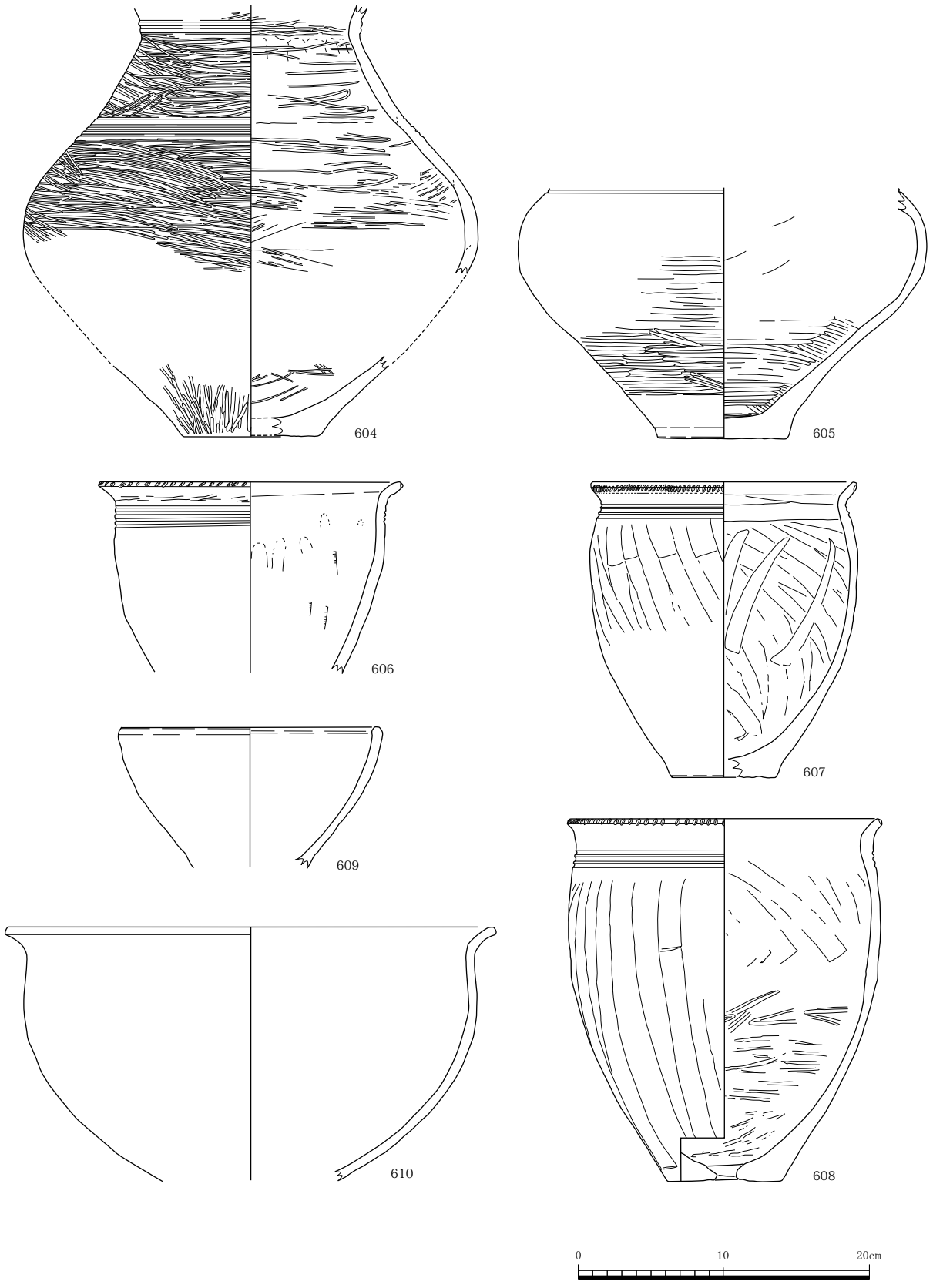


図237　第15面　854落ち込み出土遺物実測図（S＝1：4）

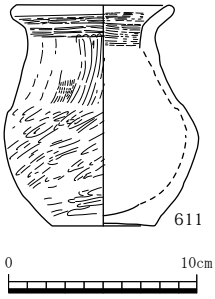


図238　第15面　857ピット出土遺物
実測図（S＝1：4）

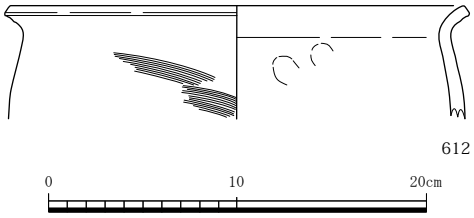


図239　第15面　859ピット出土遺物
実測図（S＝1：4）

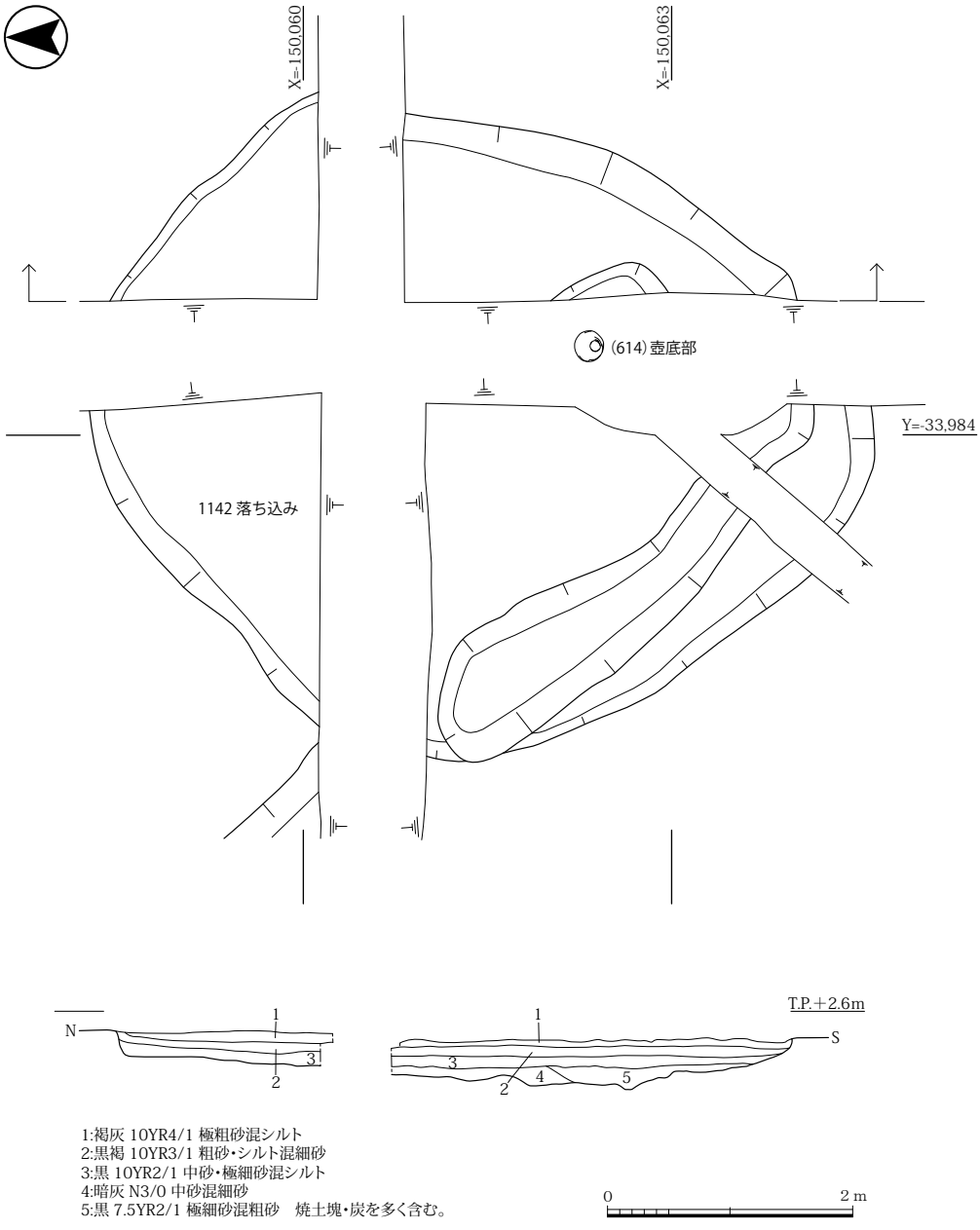


図240　第15面　1142落ち込み平・断面図（S＝1：60）

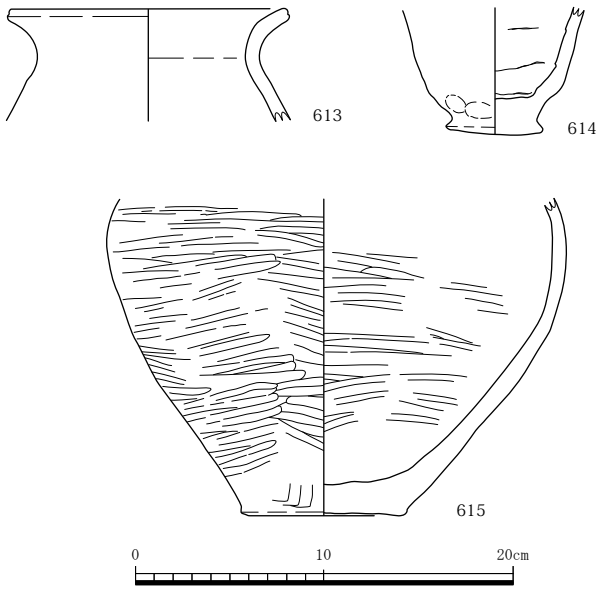


図241　第15面　1142落ち込み出土遺物実測図（S＝1：4）

866 ピットは落ち込み中央部、862 ピットの北側で検出した。直径 0.5 m、深さ 0.4m を測り、柱当たりが残る。ピット内から弥生土器の細片が出土したが図示しえなかった。

1142 落ち込み (図 240、241・図版 54)　10A － 9f・g 区で検出した。平面は不整形な台形を、断面は皿状を呈する。南西部の上層は溝状遺構によって、また、遺構の中央を十文字に土層観察のための側溝によって削平を受ける。規模は一辺 4.0 ～ 5.5 m、深さ 0.3m を測る。埋土は 4 層だが、遺構の南辺部には (4) を切り込んで (5)(黒色極細砂混じり粗砂層) が堆積する。この (5) は断面観察時に焼土塊および炭を多く含む層であったため、竪穴建物に伴う炉跡の可能性も考えられたが、掘り下げた結果、焼土塊および炭を含む層は溝状に流れ込んだような状態で検出された。さらに、柱穴や壁溝が検出されなかったことや周辺で類似する落ち込みが検出されたことなどから、この遺構は落ち込みであると判断した。側溝の中から弥生時代前期の壺口縁部 (613)、壺底部 (615) や小型甕底部 (614) が出土した。

第 15 層出土遺物 (図 242 ～ 249・図版 26、57 ～ 59)

第 15 層内からは多量の弥生時代前期の土器が出土した。とりわけ地形の窪みが生じている地区、20A-7 ～ 9e・f 区、20A-7・8d 区に集中していた。これらの窪みは明確な肩をもたず遺物の集中している範囲のみ層が変化していた。包含層遺物として報告する。

石錘出土地点からは打欠石錘 (616 ～ 631)、サヌカイト製石鏃 (632)、サヌカイト製石匙 (633)、結晶片岩製石棒 (634・635) が出土した。打欠石錘のうち、(616) ～ (619)、(621)、(625) ～ (628) は花崗岩製、(620)、(622)、(623)、(629) ～ (631) は結晶片岩製、(624) が砂岩製である。

包含層からは壺蓋 (636 ～ 638)、壺 (639 ～ 663)、甕蓋 (664 ～ 666)、甕 (667 ～ 682)、ミニチュア甕蓋 (683)、鉢 (686 ～ 688)、突帯紋土器 (684・685)、板状土錘 (689・690)、打欠石錘 (691 ～ 694)、砂岩製の砥石 (695)、サヌカイト製の大形刃器 (696)、サヌカイト製の剥片 (697) が出土した。(636 ～ 638) は笠形の壺蓋である。(636) は焼成前の穿孔による紐孔を 2 個ずつ 2 箇所に設ける。

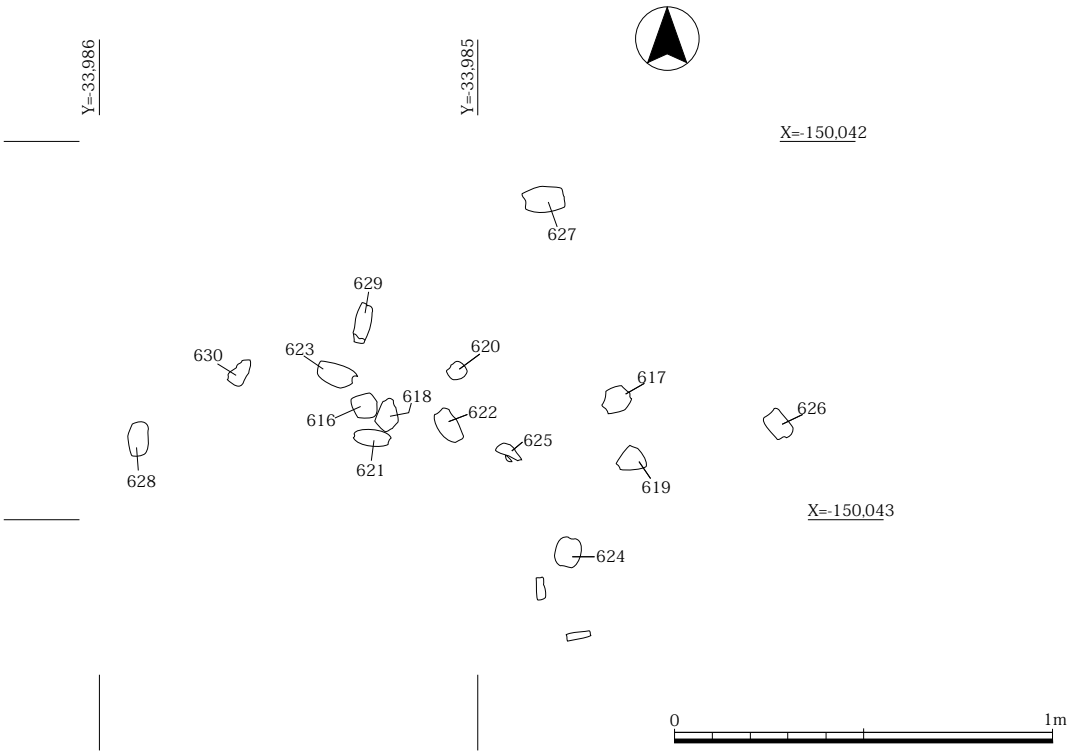


図242　第15面　石錘出土状況図（S＝1：20）

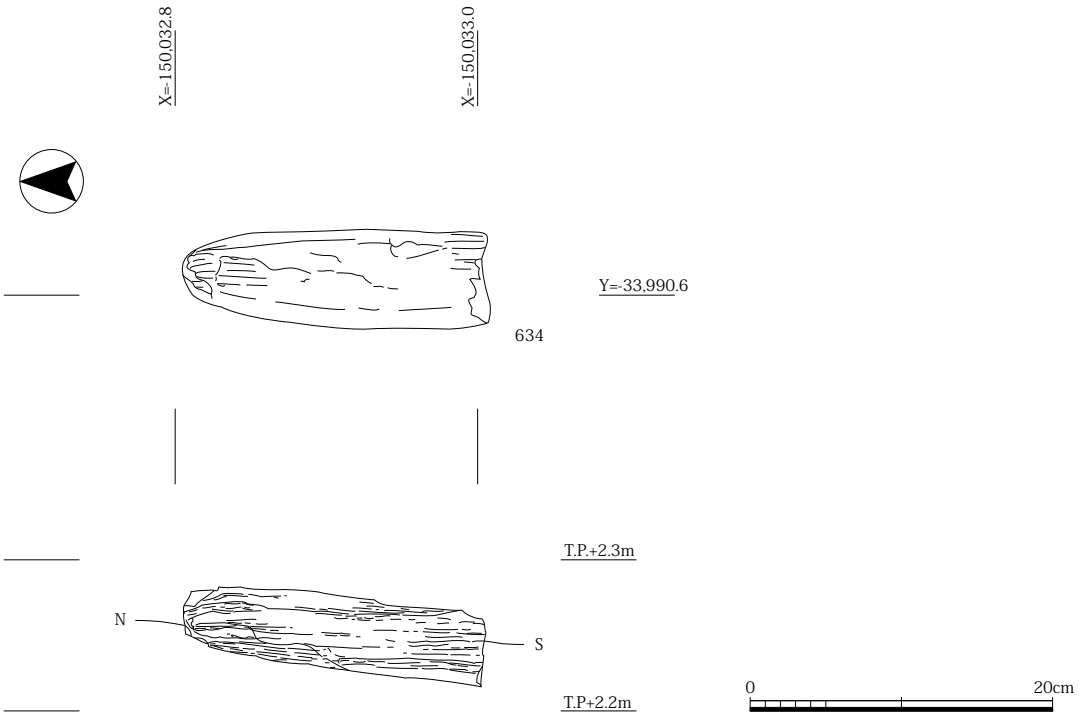


図243　第15面　石棒出土状況図（S＝1：5）

(639) は小型の壺である。口縁部の外反は弱い。口縁部､頸部､体部にヘラ描き沈線を２条巡らす。また、２箇所に紐孔を設ける。(640) は口縁部がやや発達した壺である。頸部に削り出し突帯を巡らせ、突帯上にヘラ描き沈線を２条施す。(641) はほぼ完形に復原された壺である。底部付近に縦方向のヘラミガキを施し、頸部以下にはさらに横方向のヘラミガキを施している。頸部と体部にヘラ描き沈線を４条ずつ巡らす。内面は縦方向の板ナデの後ヘラミガキを施している。(642･643) は大型壺である。(642) は、口縁部外面に縦方向の細かなハケメの後ヨコナデまたはヘラミガキを施す。頸部には幅が狭く浅い沈線を１条施し、その下端をハケ状工具による強いナデを施す。(643) は粘土紐接合による段を頸部と体部の境に設ける。(644 ～ 646) は壺の底部から体部である。(646) は底部外面に縦方向のヘラミガキを施した後、ヘラ描き沈線を２条巡らす。内面にはナデを施す。(647 ～ 663) は壺の体部片である。(664 ～ 666) は甕蓋である。 (666) はほぼ完形に復原された甕蓋で、外面に縦方向のヘラミガキの後横方向のヘラミガキを施している。内面は横方向のヘラミガキを施す。(667 ～ 682) は甕である。(671) はヘラ描き沈線を螺旋状に２条施し、始点と終点は一致しない。 (667) は屈曲部にヘラ描き沈線を１条巡らす。口縁端部には刻み目を施す。 (668) は口縁部をヨコナデの後、板ナデを施している。ヘラ描き沈線を４条､口縁端部に刻み目を施す。口縁部に焼成後の穿孔がみられる。内面は横方向のハケメの後ナデ、ヘラミガキを施している。 (669) はヘラ描き沈線を３条、口縁端部に刻み目を施している。(670) は頸部にヘラ描き沈線を１条施し、口縁端部には刻み目を施す。(672) は粘土紐の接合による段を設け、段の上下にヘラ描き沈線を２条巡らす。内面は板ナデを施す。(673) は屈曲部直下に削り出し突帯を巡らせ、突帯上にはヘラ描き沈線を２条施す。 (674) は粘土紐の接合による段を設け、段の上位に３条以上のヘラ描き沈線を螺旋状に施し、口縁端部に刻み目を施す。(676) は貼り付け突帯を巡らせ、その上下にヘラ描き沈線を１条ずつ施す。突帯下沈線の下４条１帯の山形紋を施す。(677) はほぼ完形に復原された甕である。口縁部外面は横方向の板ナデを施している。体部は摩滅のため調整が不明瞭だが、斜方向の板ナデを施していると考えられる。口縁端部に刻み目を施す。底部に焼成後に外から内へ穿孔する。内面はナデを施す。(678) は粘土紐の接合による段を設ける。(680 ～ 682) は甕の体部から底部である。(680) は体部外面に縦方向の板ナデの後、底部付近にヘラミガキを施している。内面は縦方向の板ナデを施す。(681) は断面の観察の結果、まず幅 2.5cm、高さ 1.8cm の粘土塊をおき、その外側に粘土帯を貼り付けた後、底部内面に粘土を継ぎ足していることが確認された。(683) はミニチュアの甕蓋である。内外面ともナデを施す。

(686) はほぼ完形に復原された、口縁部の外反が弱い鉢である。体部外面は縦方向のハケメの後ヘラミガキを施している。底面にもヘラミガキを施している。内面は全面ヘラミガキを施している。(687) はヘラ描き沈線を３条巡らせ、沈線間に刺突紋を施す。 (688) は粘土紐接合による段をもつ鉢である。段には工具で段を整えた痕跡が残る。(684) は縄紋時代晩期の突帯紋土器で突帯上に小Ｖ字形の刻み目を施す。(685) は縄紋時代晩期の突帯紋土器で突帯上に小Ｄ字形の刻み目を施す。

(遺構　井西　遺物　柴田)

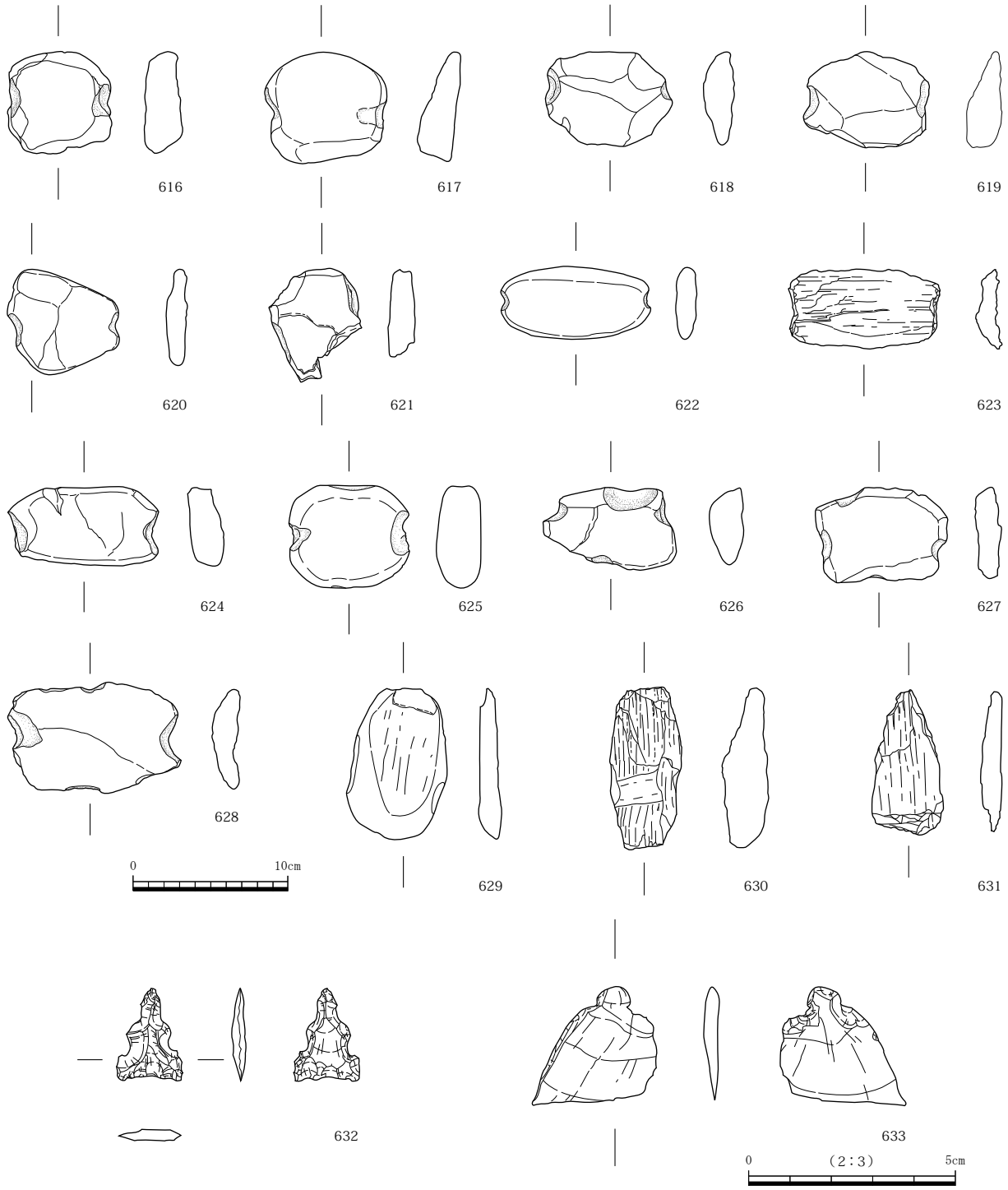


図244　第15面　石錘・石鏃・石匙実測図（S＝1：4・2：3）

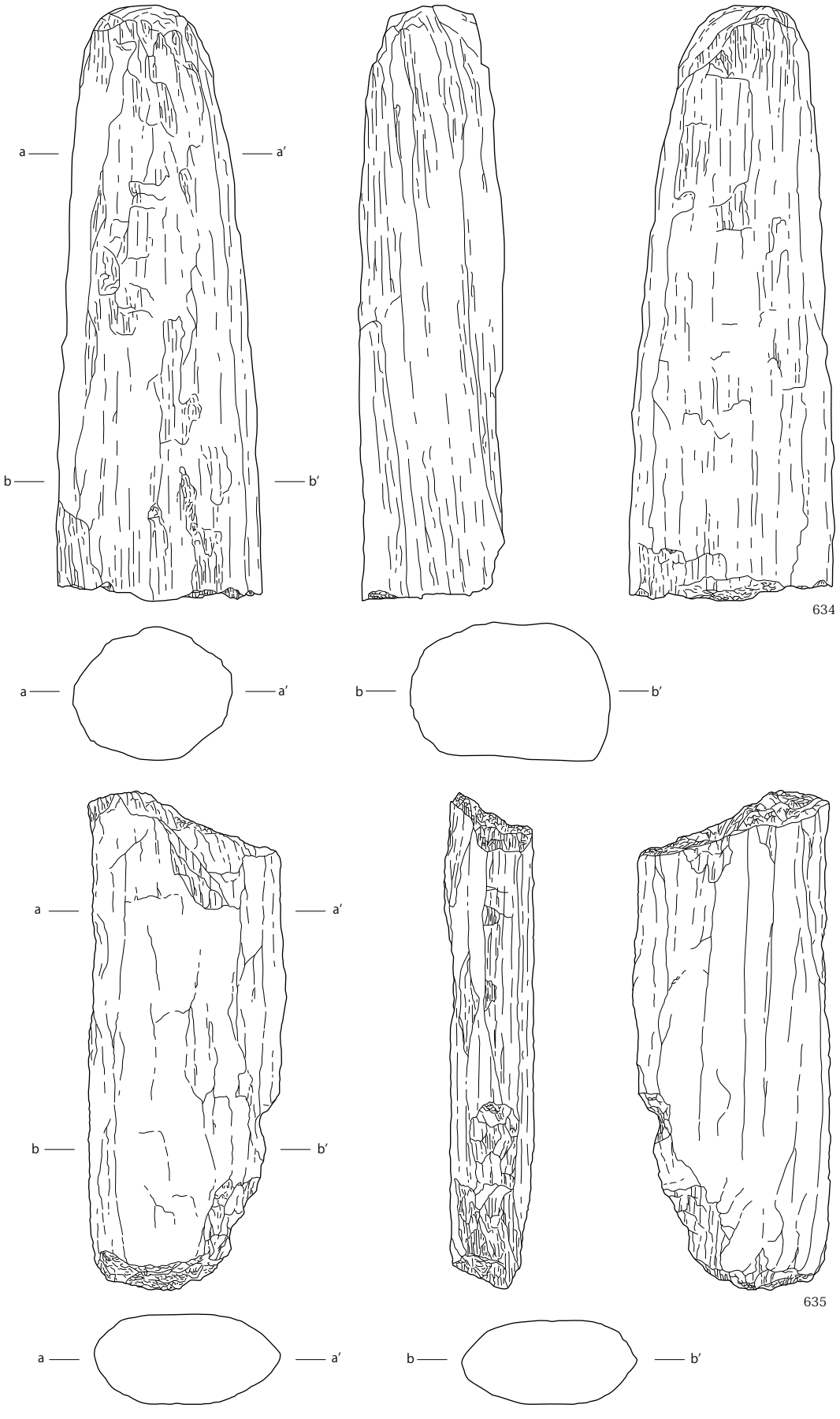


図245　第15面　石棒実測図（S＝1：2）

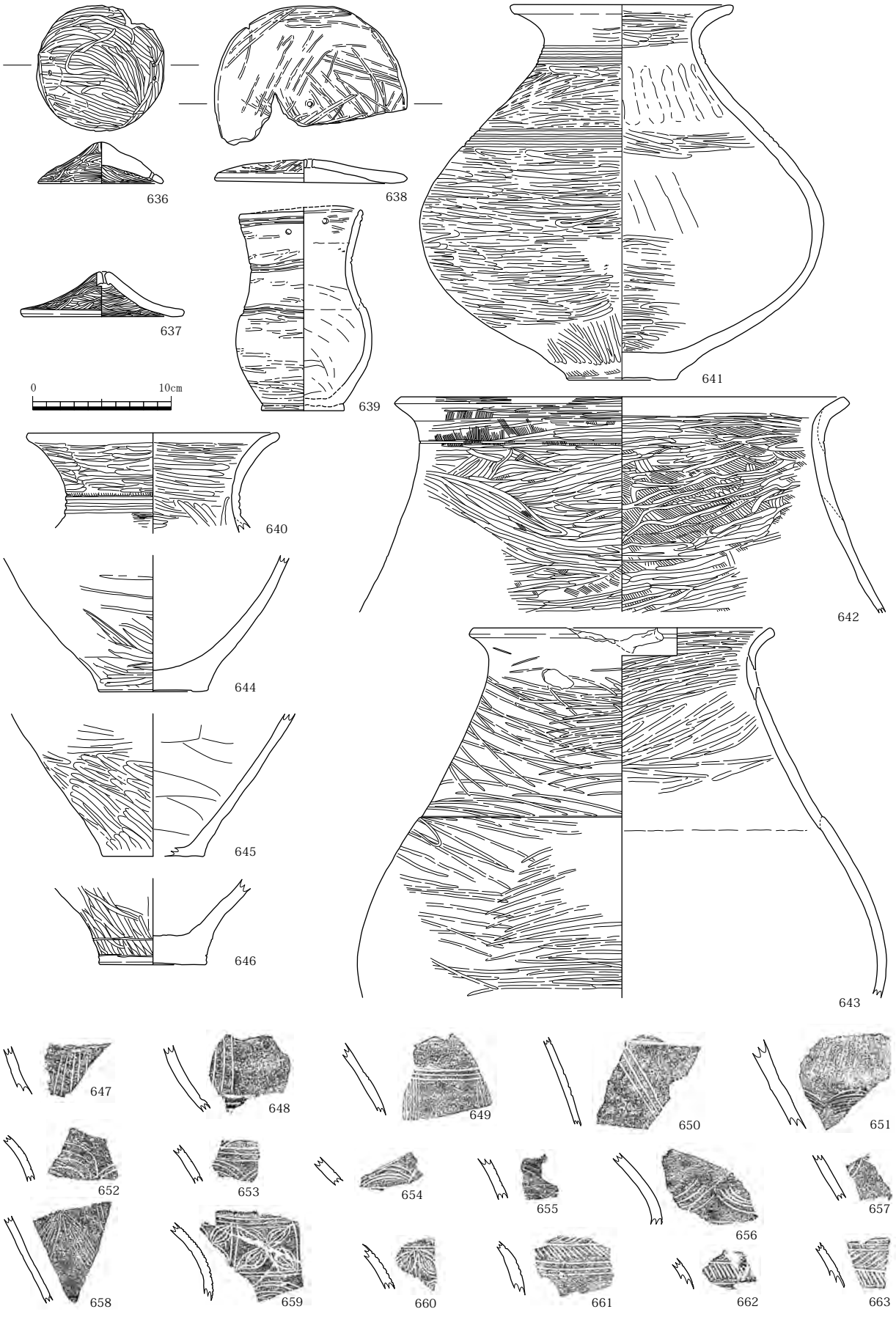


図246　第15面　包含層出土遺物実測図（1）（S＝1：4）

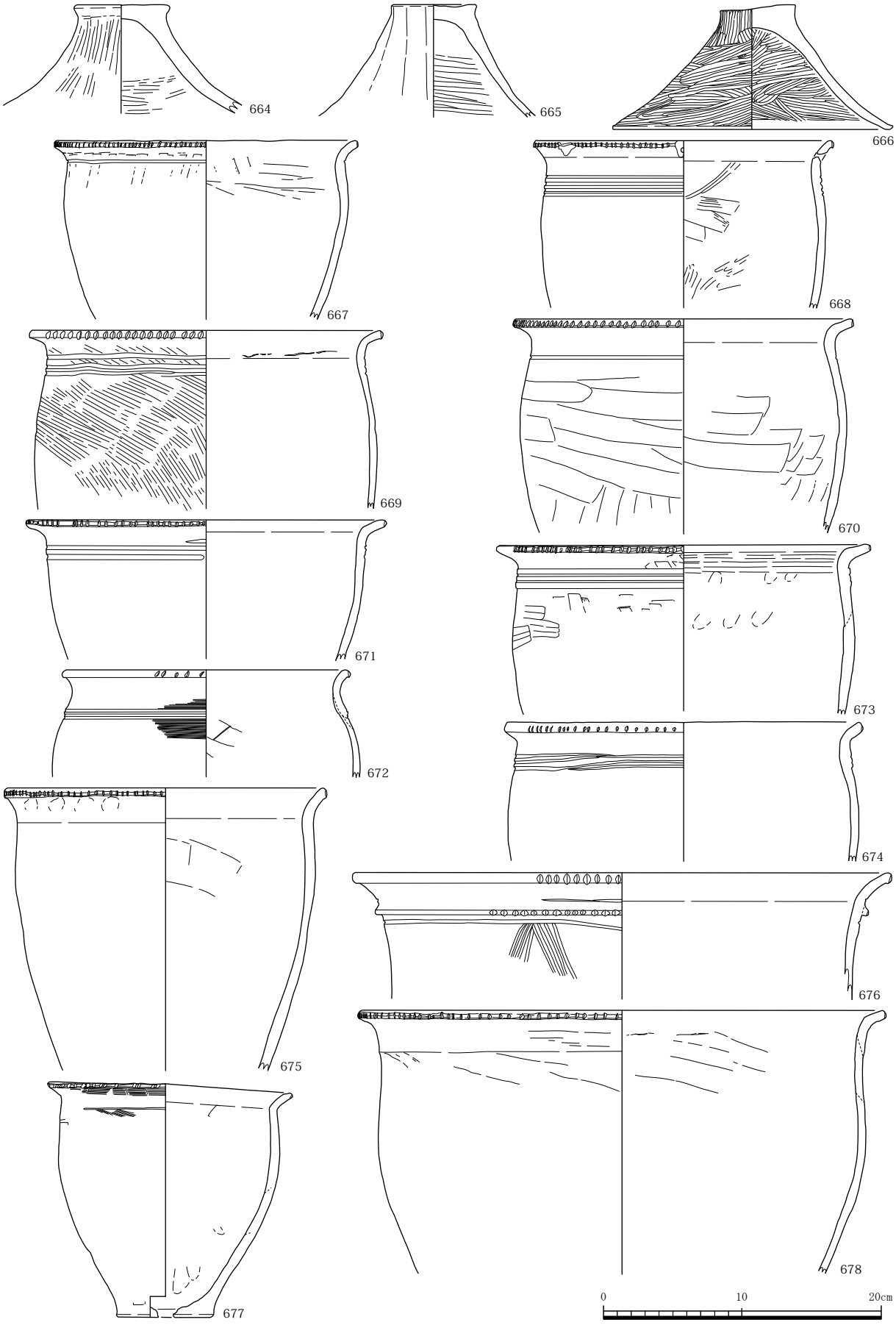


図247　第15面　包含層出土遺物実測図（2）（S＝1：4）

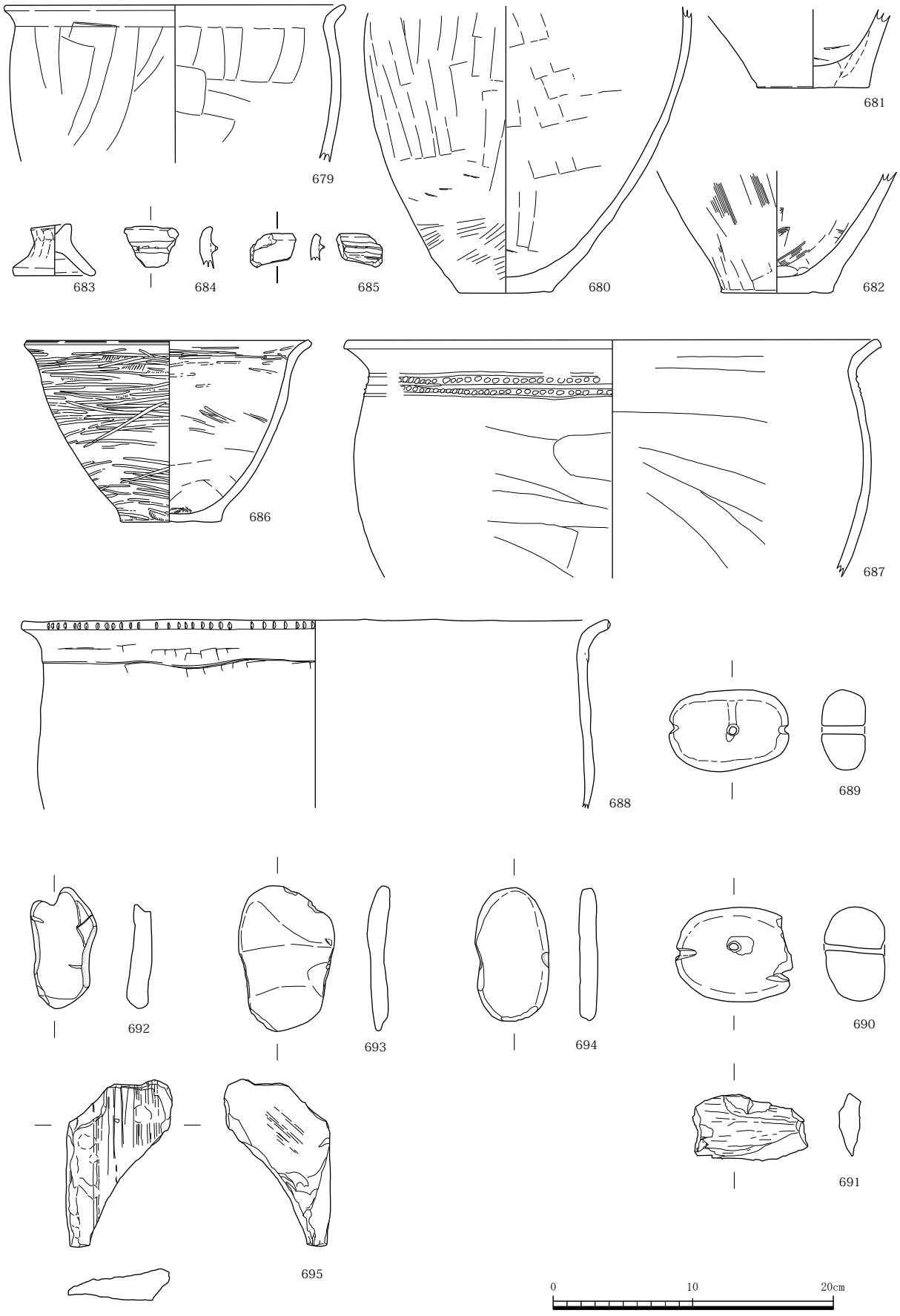


図248　第15面　包含層出土遺物実測図（3）（S＝1：4）

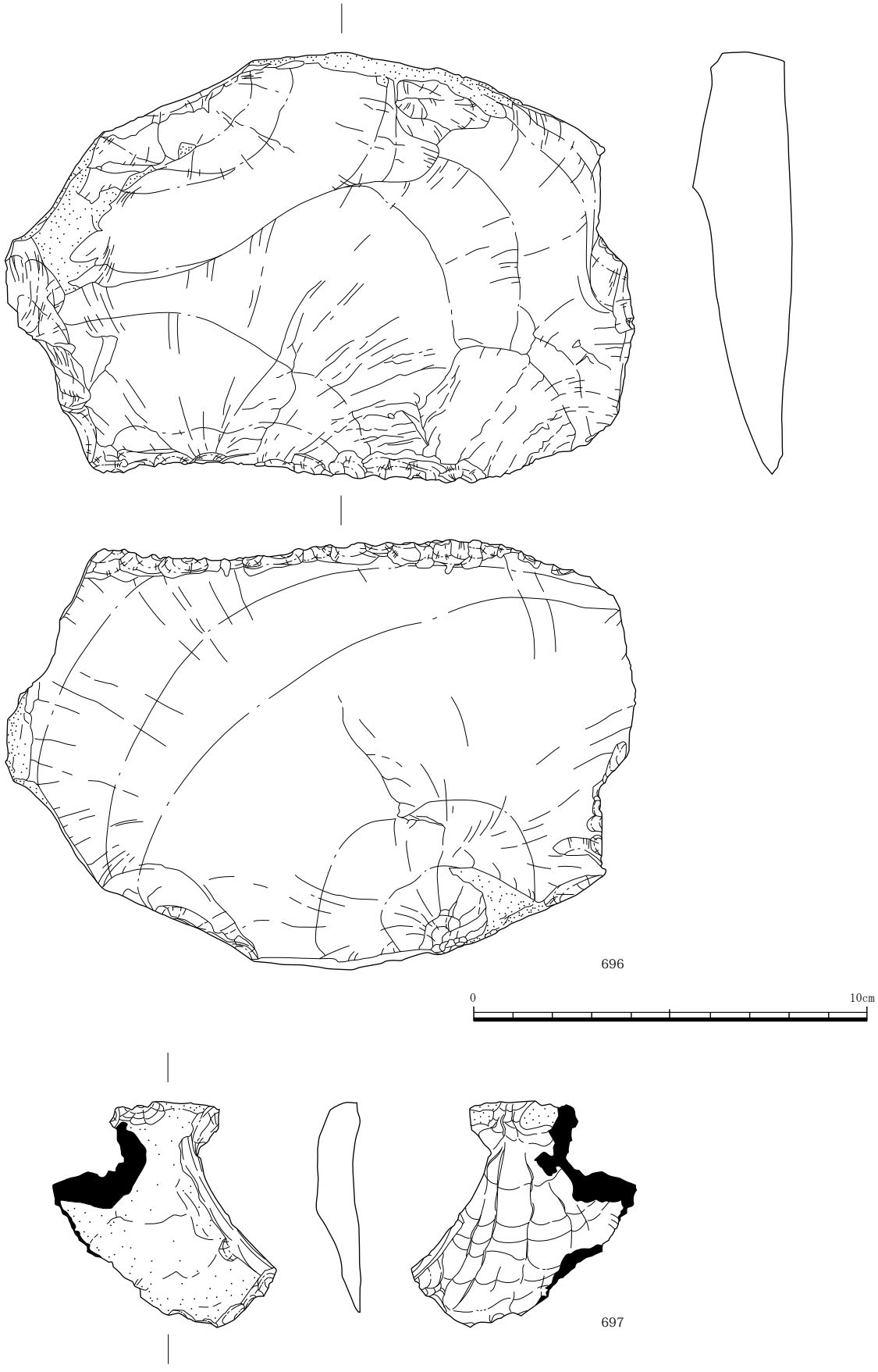


図249　第15面　包含層出土遺物実測図（4）（S＝2：3）

第 16 面（図 250・図版 27）

第 15 層を除去して検出した。当該面は既往の調査でのいわゆる「第 4 黒色土層上面」である。地形は南東部が高く北西方向に向かって低くなるが、北東方向へも下がっており、調査区南東隅から北西方向に舌状に張り出す微高地の先端部分にあたる。微高地は調査区の西半部をはしる流路で途切れる。検出した遺構は、掘立柱建物・土坑・溝・ピット・流路などである。掘立柱建物は微高地の先端部分で検出した。遺構面の標高は T.P. ＋ 1.9 ～ 2.5 mである。

掘立柱建物 7（図 251・図版 27）　掘立柱建物 7 は 20 A -9・10d・e 区の微高地の先端部に位置する。

図250　第16面　全体図（S＝1：500）

検出された建物の標高は T.P. ＋ 2.1 ～ 2.2 mである。建物の主軸は座標西から２° 南へ振っており、ほぼ東西方向に向く。北側桁行６間 (9.6 m)、南側桁行７間 (9.35 m)、東側梁行４間 (4.35 m)、西側梁行残存３間 (4.35 m) を測る。柱間は 0.95 ～ 1.85 mである。西側柱列はピット 891 ～ 893 との切り合いが認められる。面積は約 41 ㎡を測る。柱穴は円形もしくは隅丸方形を呈する。規模は円形のもので直径 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.15 ～ 0.4 m、隅丸方形のもので一辺 0.3 ～ 0.55 m、復原深さ 0.3 mを測る。柱穴のうち 895 柱穴と 896 柱穴には柱根が残存しており、樹種は 895 柱穴の柱根はニレ属で、896 柱穴の柱根はケヤキである。

958 土坑 (図 252、253・図版 60)　20 A -7・8e 区で検出した。平面楕円形で長径 1.65 m、短径 0.85 m、深さ 0.25 mを測る。大きくは３層に分層され、土坑西端部の最上層 (1) は焼土層である。遺物は弥生土器 (698) 甕の他に壺体部片、結晶片岩片などが出土した。土器はいずれも弥生時代前期に属する。

967 土坑 (図 252、254・図版 60)　20 A -7e 区で検出した溝状の土坑であるが、遺構の東側を第 14 面 717 溝に切られる。土坑の南側は細くなっており幅 0.6 mを測るが、717 溝に切られている北側では残存する最大幅 1.4 m、深さ 0.15 mを測る。土坑の南半部には長径 1.3 m、短径 0.95 m、深さ 0.5 mの楕円形に窪む箇所がある。土坑からはミニチュア壺 (699)、壺 (700)、小型甕 (701)、甕 (702 ～ 704) の他に、図示できなかったが下向き重弧紋が施された壺体部片や結晶片岩片などが出土した。ミニチュア壺 (699) は口縁部と底部を欠く。体部外面に縦位のヘラ描き沈線を施す。壺 (700) は体部下半を欠く。小型甕 (701) は外面頸部付近に工具痕跡が残る。第 16 面出土の小型甕 (715) と似ており、同一個体の可能性も残る。甕 (702) は内面に指オサエの痕跡が残る。甕 (703) は体部上半部に段を有する。(704) は甕底部である。これらの土器はいずれも弥生時代前期に属する。

977 溝 (図 252、255・図版 60)　20 A -8i 区で検出した。東西方向に延びる溝で、検出長 4.2 m、幅 0.3 m、深さ 0.1 mを測る。埋土は１層で極細砂混じりシルトに第 17 層の偽礫 (直径 0.5 ～ 1 ㎝) を含む。遺物は弥生土器 (705 ～ 708) が出土した。(705・706) は壺、(707) は高坏、(708) は鉢である。壺 (705) は粘土紐接合痕が残る。壺 (706) は外面ヘラミガキを施し、体部最大径の位置にヘラ描き沈線を巡らす。高坏 (707) は碗形の坏部を有し、口縁端部に面を作る。坏部と脚部の境に突帯を巡らす。鉢 (708) は体部をやや内弯させながら立ち上がり口縁部は大きく外反し、口縁端部に面を作る。いずれの土器も弥生時代前期のものである。

942 ピット (図 256)　20 A -7e 区で検出した。規模は直径 0.3 m、深さ 0.45 mを測る。土器の出土はなかったが柱根が残存していた。柱根は直径 0.1 m、長さ 0.4 mを測り、樹種はコナラ亜属である。

950・951 ピット (図 256)　20 A -8e 区で検出した。950 ピットと 951 ピットは切り合い関係にあり、950 ピットが 951 ピットを切る。950 ピットの規模は直径 0.35 m、深さ 0.27 mを測る。土器の出土はなかったが柱根が残存していた。柱根は直径 0.1 m、長さ 0.2 mを測り、樹種はヤマグワである。951 ピットの規模は直径 0.35 m、深さ 0.26 mを測る。遺物の出土はなかった。

1015 ピット (図 256、257)　20 A -7e 区で検出した。規模は直径 0.17 m、深さ 0.05 mを測る。遺物は弥生土器甕底部 (713) が出土した。底部に焼成後穿孔が認められる。

1046 ピット (図 256、257)　20 A -9g 区で検出した平面楕円形のピットである。規模は長径 0.56 m、短径 0.45 m、深さ 0.35 mを測る。埋土は１層で、灰色シルト混じり細砂で第 17 層由来の直径 0.5 ～ ３㎝の偽礫を多く含む。ピットの底から甕 (714) の他に、一辺 10 ㎝前後の被熱した花崗岩片・砂岩片が各１点出土した。甕 (714) は弥生時代前期の所産である。

図251　第16面　掘立柱建物７平･断面図（S＝1：60）

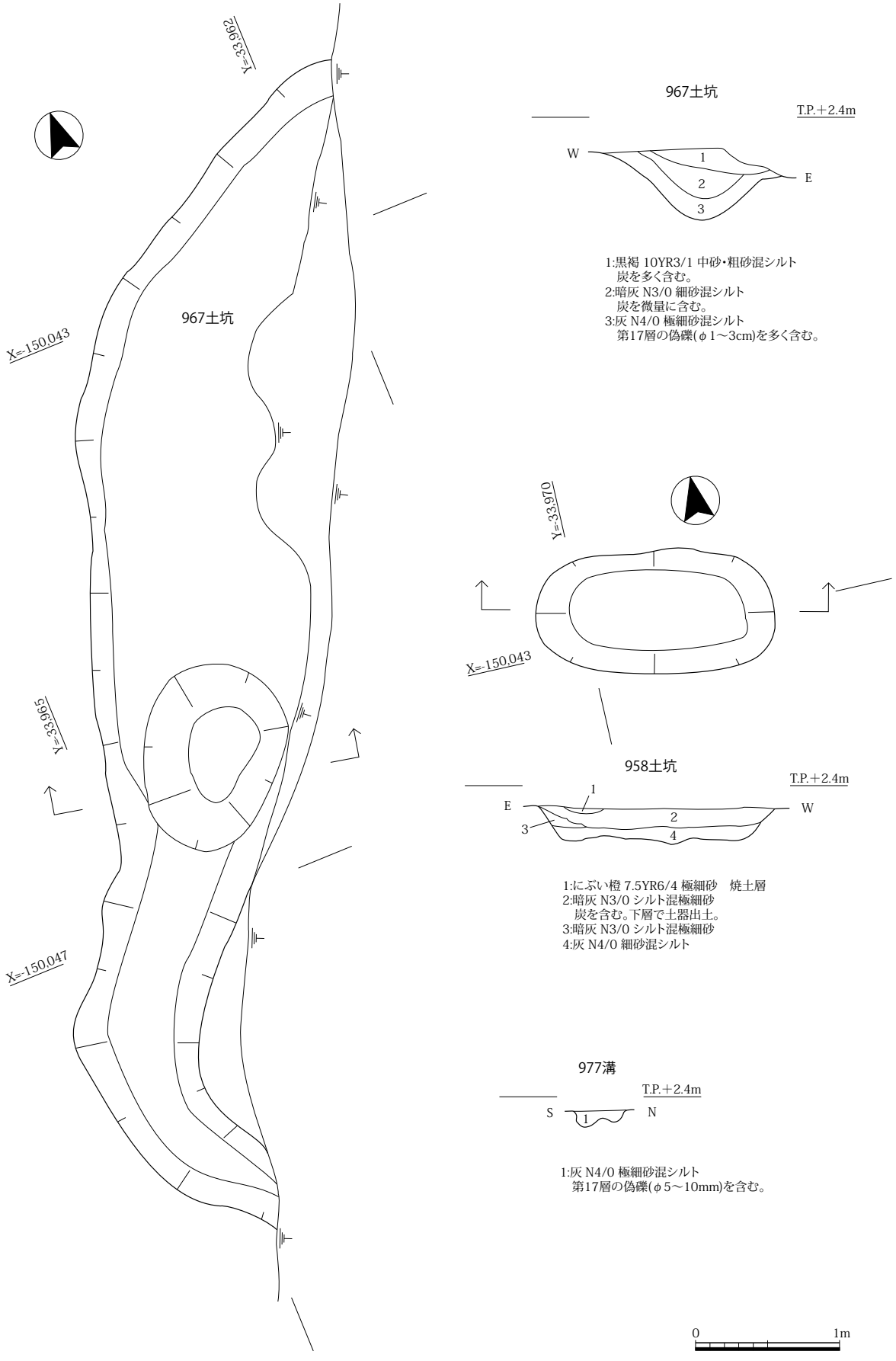


図252　第16面　958・967土坑・977溝平・断面図（S＝1：40）

1091 ピット (図 256)　20 A -7h 区で検出した。規模は直径 0.4 m、深さ 0.65 mを測る。埋土は２層で、上層が黒色細砂混じりシルト、下層は灰色極細砂混じりシルトで第 17 層由来の直径３～５㎝の偽礫を多く含む。遺物の出土はなかった。

1100 ピット (図 256)　20 A -8h 区で検出した。規模は直径 0.4 m、深さ 0.4 mを測る。土器の出土はなかったが、柱根が残存していた。柱根は断面三角形を呈しており、幅 0.2 m、奥行き 0.1 m、長さ 0.23 mを測る。みかん割り材若しくは板材を使用した可能性も残る。樹種はニレ属である。

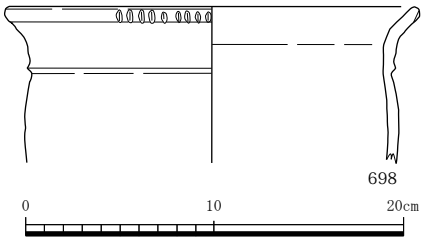


図253　第16面　958土坑出土遺物実測図（S＝1：4）

1101 ピット (図 256、257)　20 A -8h 区で検出した。規模は直径 0.35 m、深さ 0.35 mを測る。柱痕跡を確認した。遺物は弥生土器甕底部 (711) が出土した。弥生時代前期に属する。

1105 ピット (図 256、257)　20 A -7h 区で検出した。規模は直径 0.35 m、深さ 0.15 m

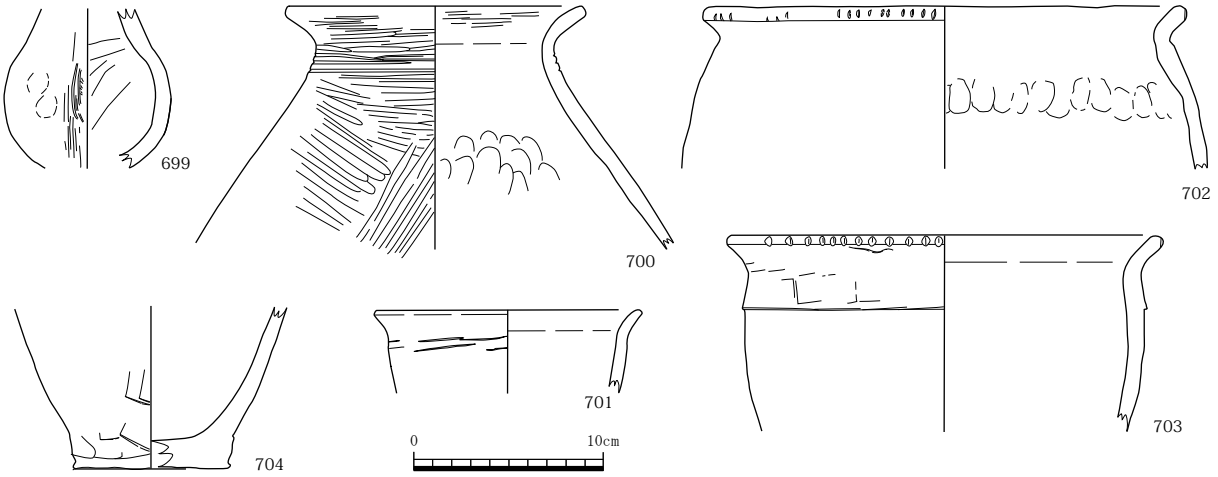


図254　第16面　967土坑出土遺物実測図（S＝1：4）

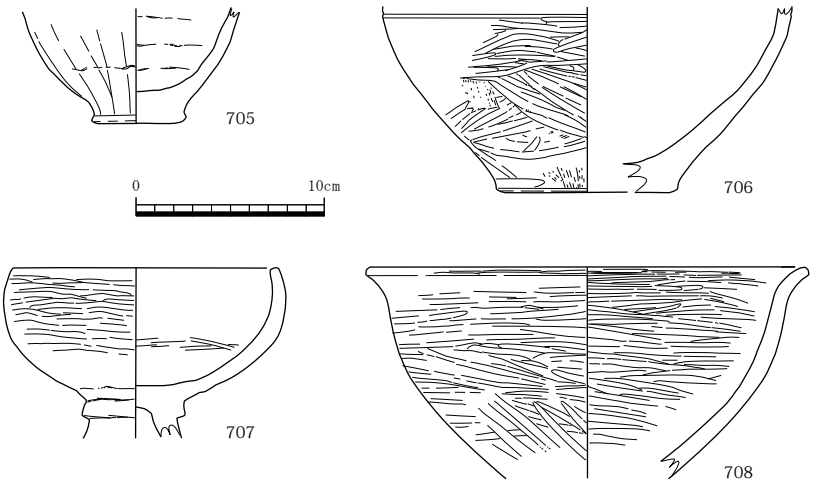
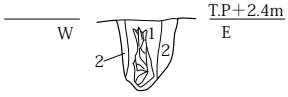


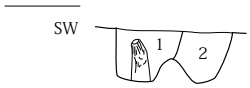
図255　第16面　977溝出土遺物実測図（S＝1：4）

942ピット



1:暗灰 N3/ シルト
2:灰 N4/ シルト混極細砂
第17層の偽礫(φ1cm大)を多く含む。

950・951ピット

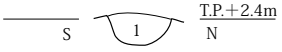


1:灰 N4/ 粗砂・シルト混細砂
17層の偽礫(φ1～3cm)を含む。
2:暗灰 N3/ 粗砂・細砂混シルト

1015ピット

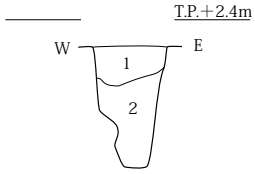
1:黒 10YR2/1 細砂混極細砂

1105ピット



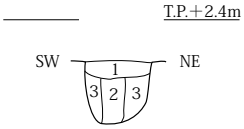
1:黒 10YR1.7/1 細砂混粗砂

1091ピット



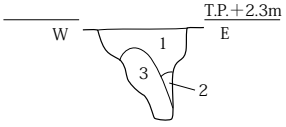
1:黒 N2/ 細砂混シルト
2:灰 N4/ 極細砂混シルト
第17層の偽礫(φ3～5cm)を
多く含む。

1101ピット



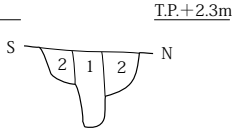
1:黒 10YR1.7/1 細砂混極細砂
2:灰 5Y4/1 極細砂混シルト
3:オリーブ黒 5Y3/1 細砂・極細砂混シルト

1132ピット

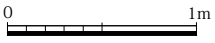


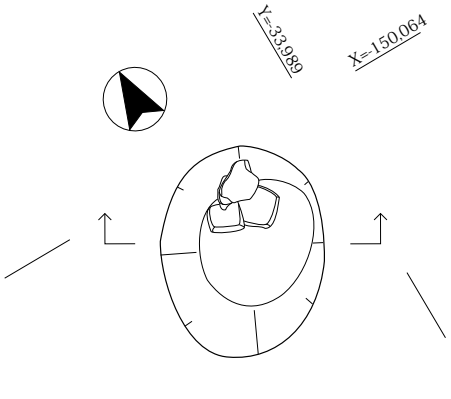
1:暗灰 N3/ 中砂・極細砂混細砂
2:緑灰 2.5GY6/1 中砂混細砂
3:黒 N2/ 中砂・シルト混細砂

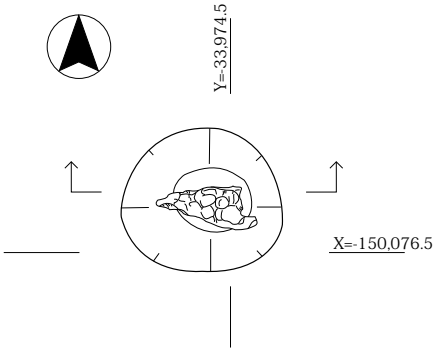
1139ピット



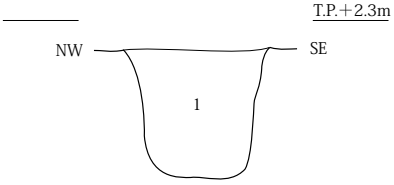
1:黒 N2/ 細砂混極細砂
2:暗灰 N3/ 中砂混極細砂





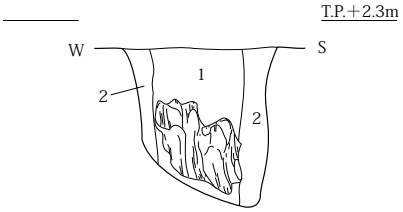


1046ピット



1:灰 N4/ シルト混細砂
第17層の偽礫(φ5～30mm)を多く含む。

1100ピット



1:灰 5Y4/1 極細砂混シルト
2:オリーブ黒 5Y3/1 細砂・極細砂混シルト
炭多く含む。

図256　第16面　942・950・951・1015・1046・1091・1100・1101・1105・1132・1139ピット平・断面図
（S＝1：40・S＝1：20）

を測る。埋土は黒色細砂混じり粗砂の1層である。弥生土器甕底部 (712) が出土した他に弥生土器片が1点出土した。甕 (712) は弥生時代前期に属する。

1132 ピット (図 256、257・図版 60)　20 A -7h 区で検出した。規模は直径 0.45 m、深さ 0.47 mを

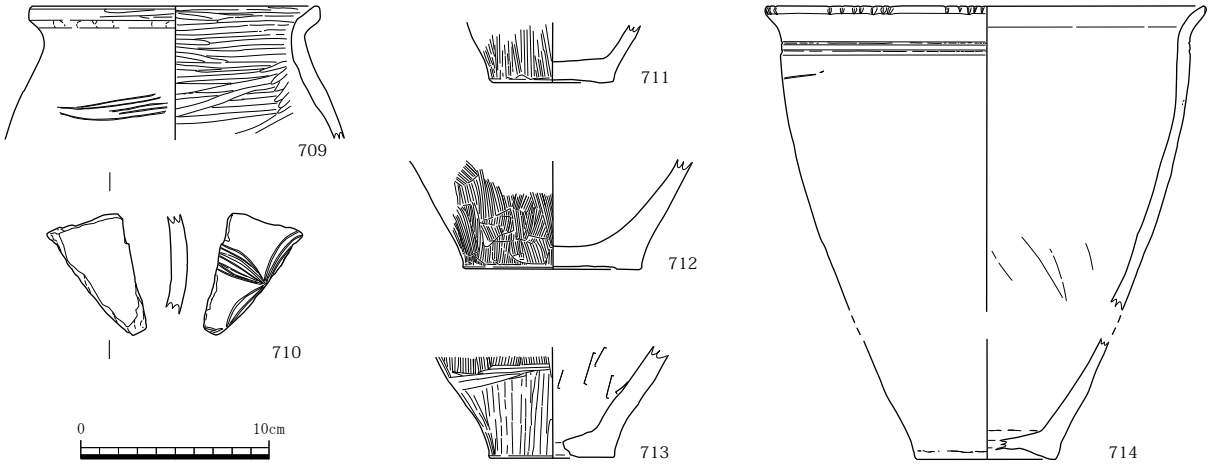


図257　第16面　1015・1046・1101・1105・1132ピット出土遺物実測図（S＝1：4）

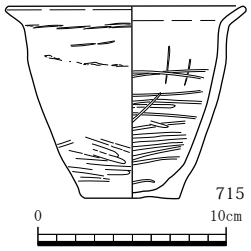


図258　第16面　上面出土遺物実測図（S＝1：4）

測る。柱痕跡を確認した。遺物は弥生土器壺 (709・710) が出土した。(709) は体部外面にヘラ描きの下向き重弧紋を施す。(710) は壺体部片で外面にヘラミガキの後、ヘラ描きの有軸X木葉紋を施す。弥生時代前期に属する。

1139 ピット (図 256)　20 A -7h 区で検出した。規模は直径 0.55 m、深さ 0.4 mを測る。柱痕跡が残る。遺物の出土はなかった。

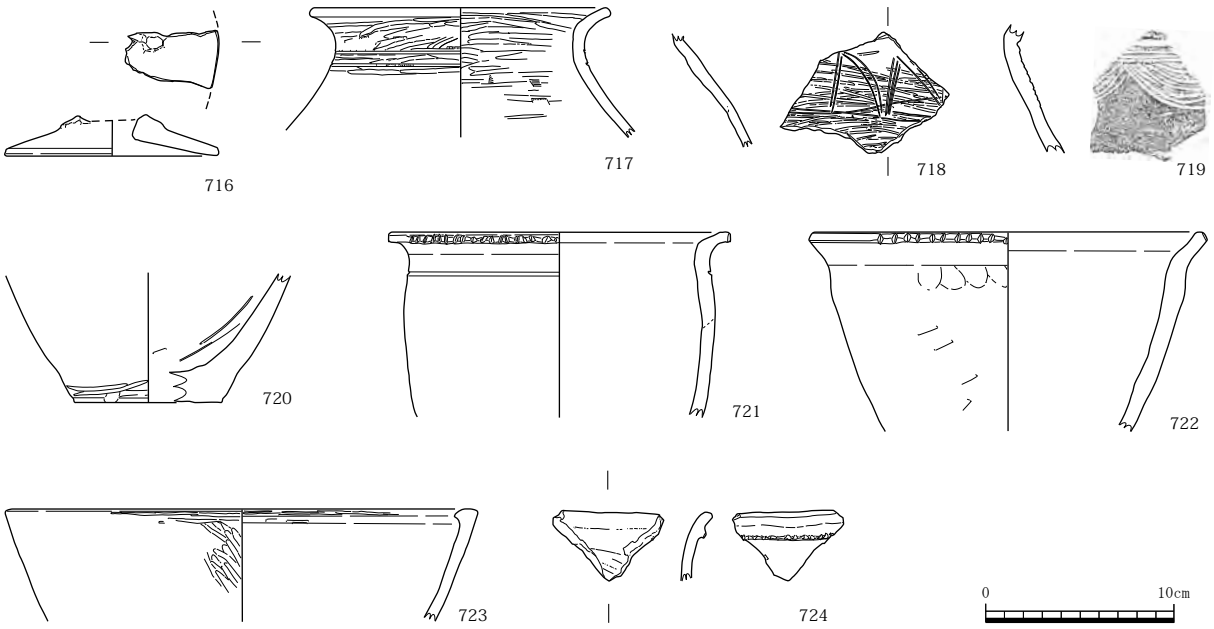


図259　第16層出土遺物実測図（S＝1：4）

第 16 面・第 16 層出土遺物（図 258、259・図版 60）

第 16 面から小型甕 (715) が出土した。第 16 層は第 16 面の基盤層である。基本層序でも述べたが、既往の調査で「第 4 黒色土層」と呼称される層で、暗青灰～灰色のシルト～極細砂層で層厚は 0.1 ～ 0.3 mを測る。層中より弥生土器 (716 ～ 723)、突帯紋土器 (724) などが出土した。(716) は壺蓋である。つまみの横に棒状工具による焼成前の穿孔を施す。(717 ～ 720) は壺である。(717) は頸部に 2 条のヘラ描き沈線を巡らす。(718) と (719) は壺体部でヘラ描きの沈線や重弧紋を施す。(720) は壺底部である。(721) は甕である。(722・723) は鉢である。弥生土器はいずれも弥生時代前期に属する。(724) は縄紋時代晩期長原式の甕である。

第 17 面（図 260・図版 28）

第 16 層を除去して検出した。当該面は第 18 面上を覆う灰色シルト～細礫層とその上層に堆積する灰白～緑白色シルト層が 0.1 ～ 0.6 mの厚さで堆積する。地形は南東部が高く北西方向に向かって減じ、遺構面の標高は T.P. ＋ 1.7 ～ 2.4 mである。検出した遺構は、木棺墓、土坑、ピットなどである。なお、当該面は自然堆積層である第 17 層を基盤層とする遺構面であることから、当該面で検出された遺構については第 16 面に帰属する可能性も捨てきれない。

今回の調査では計 3 基の弥生時代前期に帰属する木棺墓が検出された。

971 木棺墓 (図 261、262、265・図版 28、61)　20 A -9h 区で検出した。平面形は東西方向に長い楕円形である。墓壙の規模は長軸長 3.2 m、短軸長 1.4 m、検出面からの深さは中央部で 0.4 mであり、その中に木棺痕跡を確認した。木棺痕跡は主軸を座標北から 73° 東とし、底板の法量は長側部で最大残存長 1.36 m、短側部で最大残存長 0.5 mを測る。小口部は残存状況が非常に悪く、最大で残存長 0.2 mしか確認することができなかった。また検出面からの深さは 0.32 mである。木棺の棺材は大部分が腐朽によって失われていたが、底板の一部は残存しており、木棺の材質はアカガシ亜属である。木棺の底板は墓壙の掘削ののちに直接墓壙内に設置されるのではなく、部分的に一度土を入れて底面を整えたのちに木棺を設置している。また両小口板は土圧によって外側へと倒れかけている。当木棺の裏込め土はシルト混じり細～中砂を主体とする。

971 木棺墓の覆土からは弥生土器の壺 (725 ～ 727)、甕 (728 ～ 730)、鉢 (731) や、突帯紋土器片 (732)、さらに図示できなかったがサヌカイト剥片などが出土した。そのうち弥生土器についてはその特徴から弥生時代前期中から新段階にあたると考えられる。

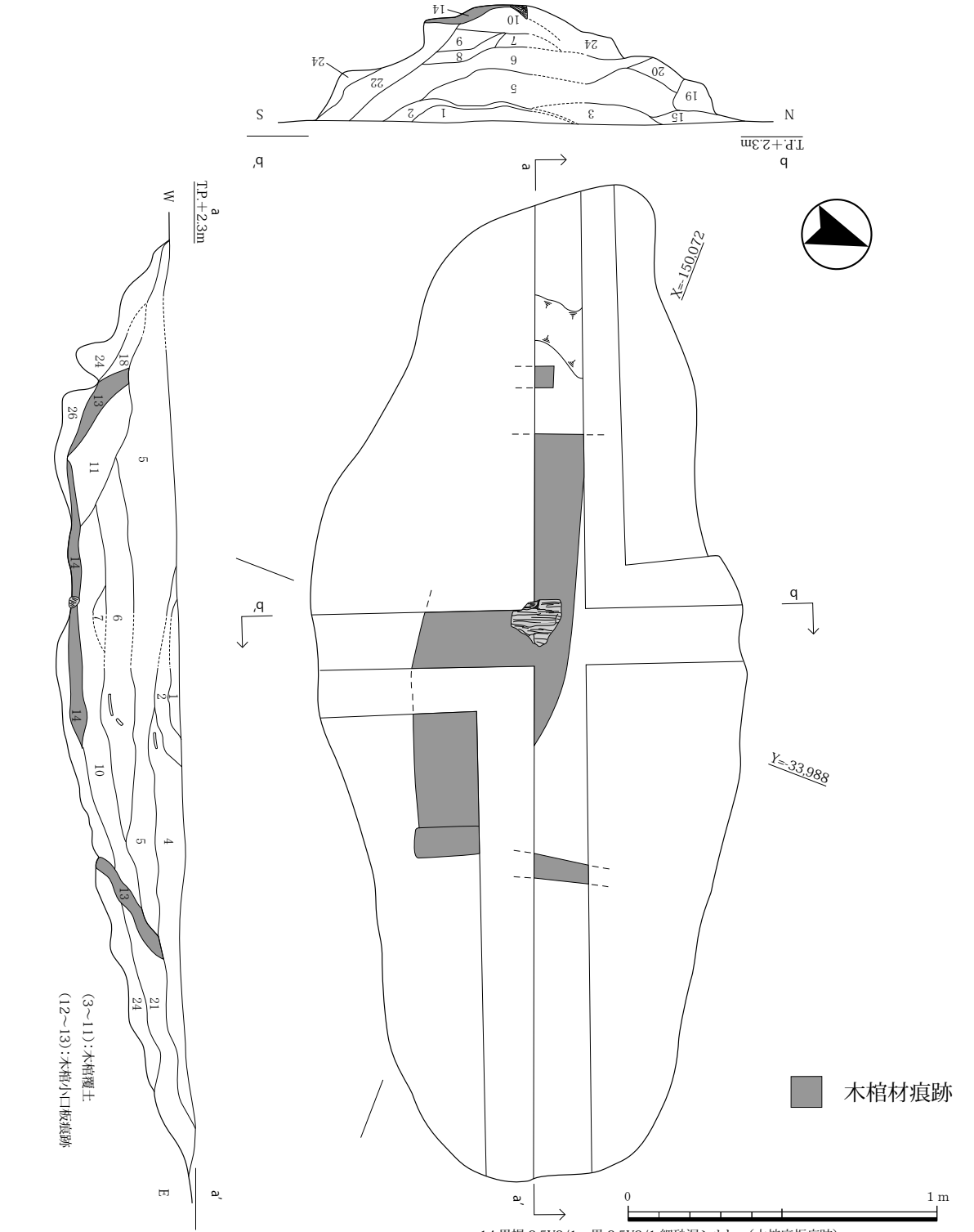
972 木棺墓 (図 263、267・図版 28・61)　20 A -10g 区で検出した。平面形は北東－南西方向に長い隅丸方形である。墓壙の規模は長辺 1.84 ～ 2.02 m、短辺 0.58 ～ 0.66 m、検出面からの深さは中央部で 0.13 mであり、その中に木棺痕跡を確認した。木棺痕跡は主軸を座標北から 40° 東とし、床板の法量は長側部 1.00 ～ 1.07 m、小口部 0.42 ～ 0.44 mを測る。また検出面からの深さは 0.06 mである。北東側の小口部の幅が南西側よりも広いことから、こちら側を埋葬頭位としていたものと考えられる。木棺の棺材は腐朽によって失われており、木棺痕跡と考えられる粘質土が確認されたのみである。972 木棺墓も木棺の底板は墓壙の掘削ののちに直接墓壙内に設置されるのではなく、971 木棺墓とも異なり、一度墓壙底部全面に土を入れて底面を整えたのちに木棺を設置している。当木棺墓は、上部は大きく削平を受けており、底板付近しか木棺痕跡を確認することはできなかった。当木棺の裏込め土はシルト混じり細砂を主体とする。

図260　第17面　全体図（S＝1：500）

972 木棺墓の木棺設置前埋土からは弥生土器の壺体部と甕底部などが出土している (734・736)。(734) 壺体部の外面には縦位のヘラ描き沈線を施す。(736) 甕底部は内外面ともナデを施す。また、底板上覆土内から弥生土器の壺体部 (733・735) が出土した。(733) は頸・体部境に段を作る。(735) は外面に縦位のヘラ描き沈線がみられる。これらの遺物は弥生時代前期の所産であると考えられる。

使用された木棺の構造であるが、これはより多くの情報を得ることができた 972 木棺墓から説明する。

972 木棺墓では木棺材は遺存していないが、その痕跡からある程度の木棺の形状を復原することができる。小口板の痕跡から、墓壙床面の短辺部に小口板を固定させるための溝状掘り込み (小口穴) を



1:黒褐 2.5Y3/2 細砂～中砂混シルト　炭を含む。
2:黒褐 2.5Y3/1～3/2 焼土・細砂混シルトを含む。
3:黒褐 2.5Y3/2 シルト混細砂～中砂
4:黒褐 2.5Y3/1 シルト混細砂に明オリーブ灰 2.5GY7/1 細砂混シルトブロック
5:黒褐 2.5Y3/1 細砂混シルト
6:黄灰 2.5Y4/1～黒褐 2.5Y3/1 細砂混シルト
7:暗灰黄 2.5Y4/2 に灰オリーブ7.5Y6/2 ブロック状に混じり極細砂～細砂混シルト
8:黒褐 2.5Y3/1 ～黒 2.5Y2/1 細砂～中砂混シルト
9:黒褐 2.5Y3/1 ～黒 2.5Y2/1 細砂混シルト
10:オリーブ黒 5Y3/1 極細砂～細砂混シルト
11:オリーブ黒 5Y3/1～3/2 シルト多混細砂～中砂　炭含む。
12:オリーブ黒 5Y3/1～黒 5Y2/1 細砂混シルト
13:黒褐 2.5Y3/1～黒 2.5Y2/1 細砂～中砂混シルト
14:黒褐 2.5Y3/1～黒 2.5Y2/1 細砂混シルト　(木棺底板痕跡)
15:黒褐 2.5Y3/1 シルト混細砂～中砂
16:黒褐 2.5Y3/1～3/2 シルト混細砂～中砂
17:黒褐 2.5Y3/1～3/2 細砂～中砂混シルト
18:オリーブ黒 5Y3/2 シルト混細砂　炭わずかに含む。
19:黒褐 2.5Y3/1 に明緑灰 10GY7/1 浅黄 5Y7/4 細砂混シルト
20:明緑灰 7.5GY7/1 に黒褐 2.5Y3/1～黒 2.5Y2/1 シルト混細砂
21:黒褐 2.5Y3/1～3/2 にオリーブ黄 5Y6/3 ブロックが混じる。シルト混細砂～中砂
22:黒褐 2.5Y3/1 シルト混細砂～中砂に明緑灰 7.5GY7/1 シルトわずかに混じる。
23:灰オリーブ7.5Y6/2～オリーブ黄 7.5Y6/3 に黒褐 2.5Y3/1 細砂混シルト
24:緑灰 10G6/1 に黒褐 2.5Y3/1 混じる。細砂混シルト
25:黒褐 2.5Y3/1～黒 2.5Y2/1 に緑灰 7.5GY6/1 ブロック　細砂混シルト
26:黒褐 2.5Y3/1～黒 2.5Y2/1 細砂～中砂混シルトに明緑灰 10GY7/1 シルトブロック

図261　第17面　971木棺墓平・断面図(S＝1:20)

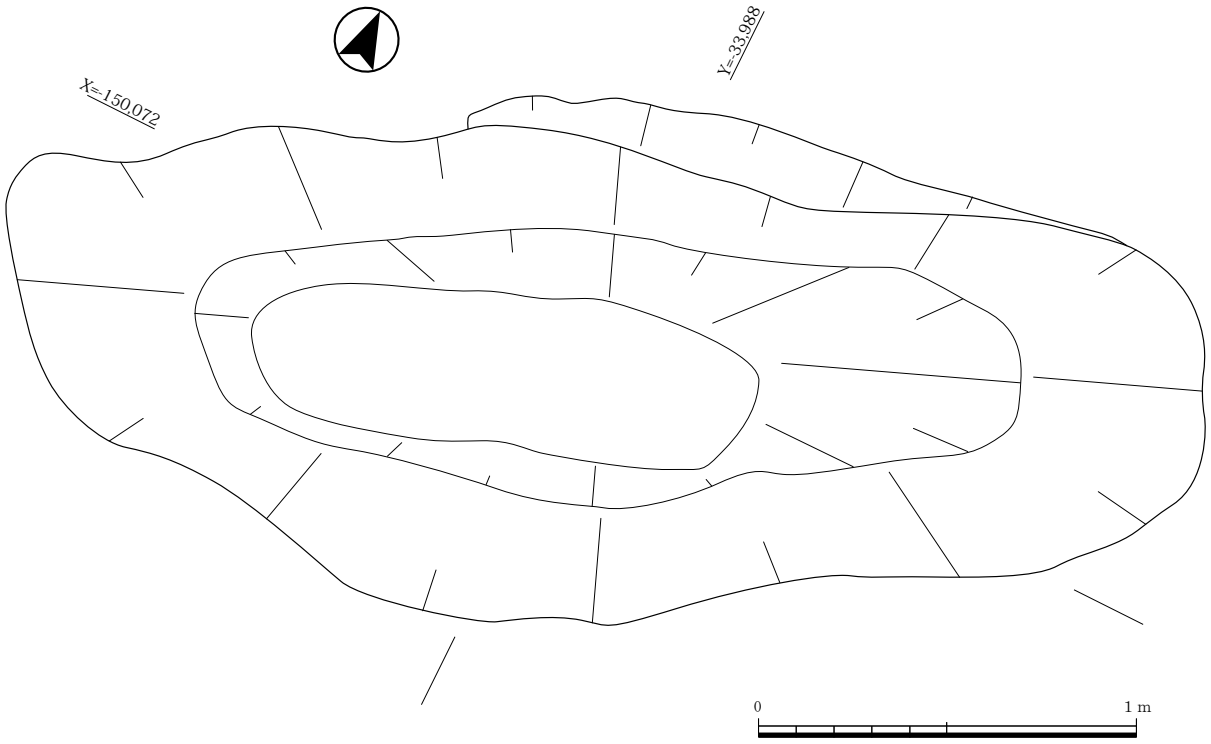


図262　第17面　971木棺墓完掘状況平面図（S＝1：20）

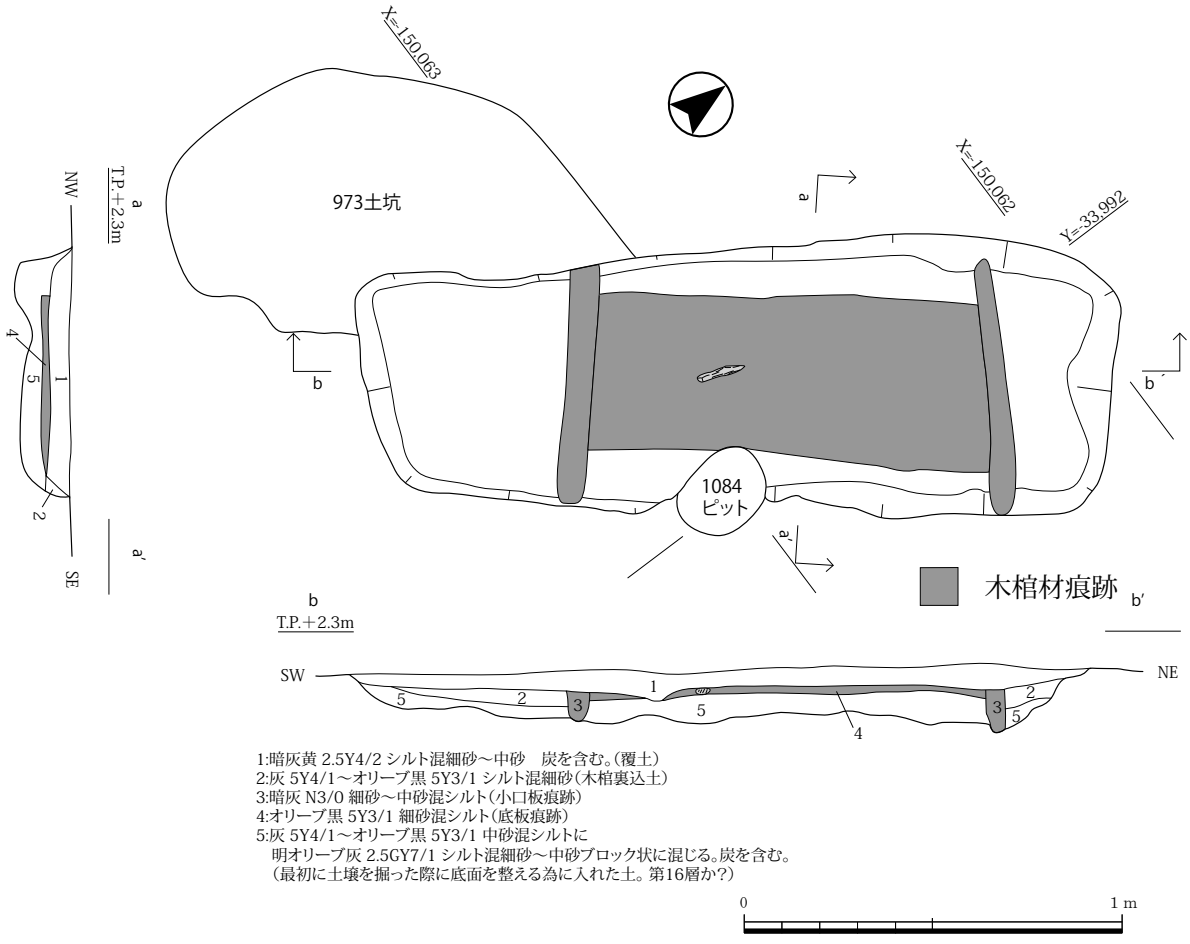


図263　第17面　972木棺墓・973土坑平・断面図（S＝1：20）

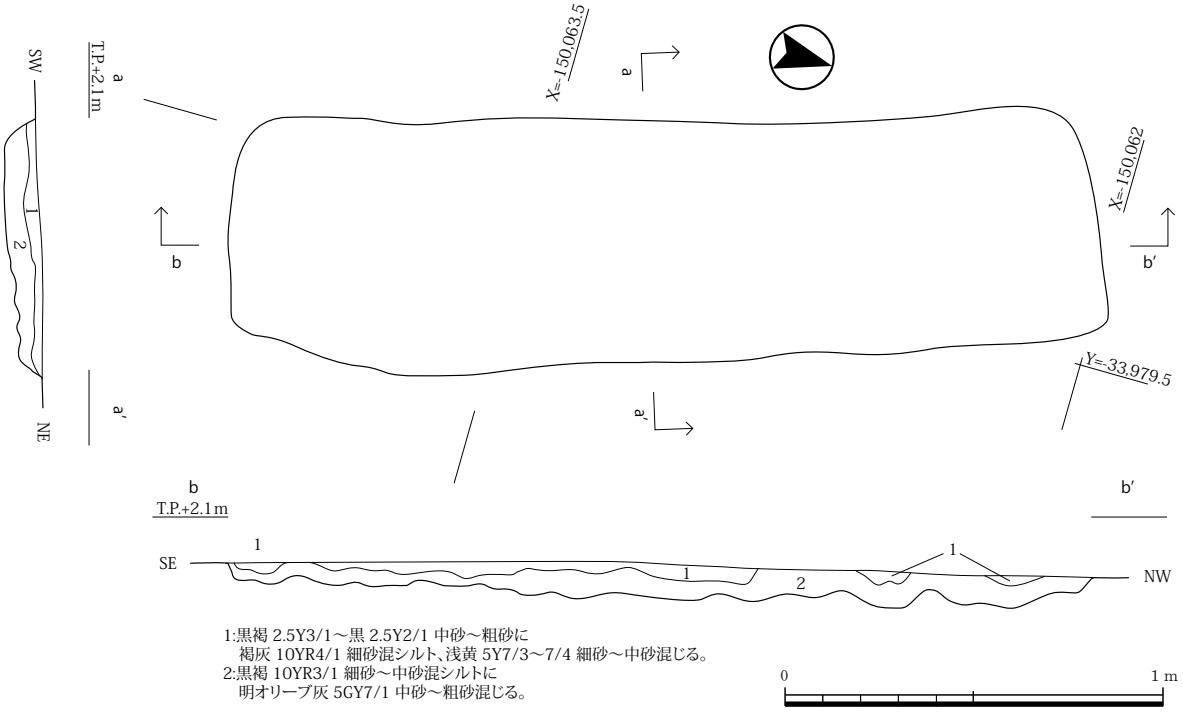


図264　第17面　975木棺墓平・断面図（S＝1：20）

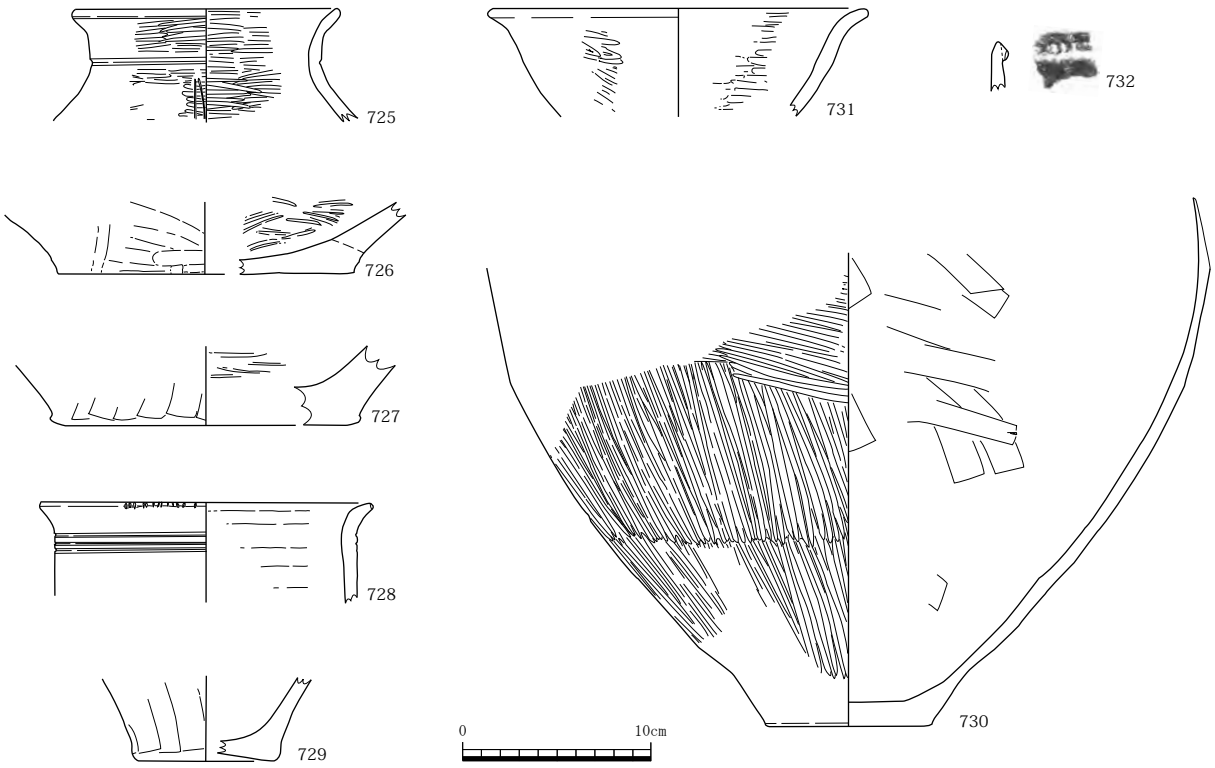


図265　第17面　971木棺墓出土遺物実測図（S＝1：4）

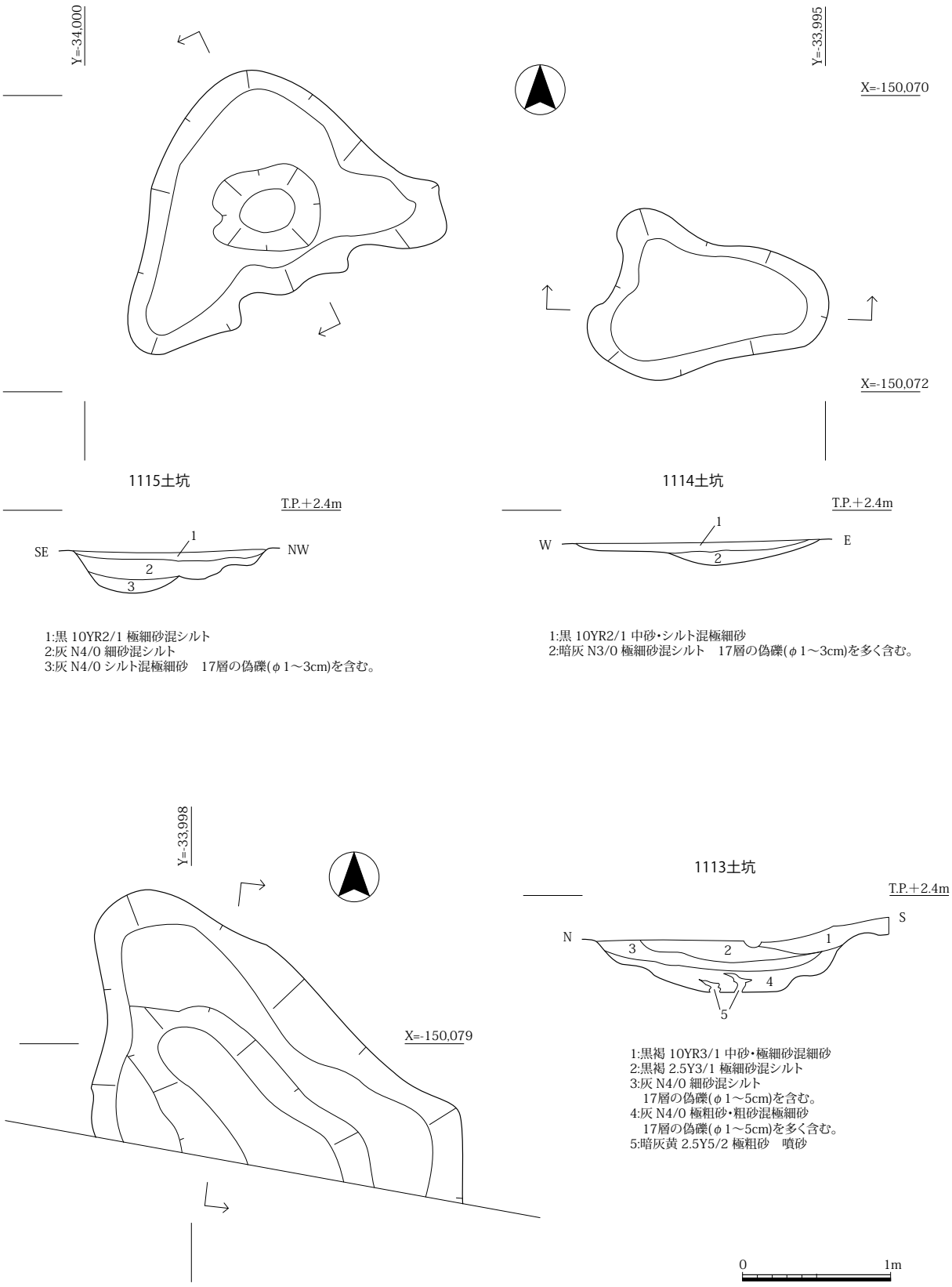


図266　第17面　1113～1115土坑平・断面図（S＝1：40）

設けてそこに小口板を埋め込んでいたと考えられる。そしてその小口板を支えにして、底板の上に側板を立てていたものと考えられる。また小口板と側板の関係であるが、両小口板が側板を挟んで棺の短軸方向に突出していたことが確認された。なお蓋板については今回の調査では痕跡などを確認することができなかったため、その形状などについては不明である。

971 木棺墓は 972 木棺墓と比べると限定的な情報しか得ることができなかったが、確認できる情報から判断すると 971 木棺墓で使用された木棺も 972 木棺墓と同様の構造であった可能性が高い。

975 木棺墓 (図 264、268・図版 28・61)　20 A -8g 区で検出した。平面形は南北方向に長い隅丸方形である。墓壙の規模は長辺 2.30 m、短辺 0.56 ～ 0.60 m、検出面からの深さは中央部で 0.10 mである。棺材は腐朽して遺存しておらず、断面等の観察においても木棺の痕跡を確認することはできなかったが、平面的な形状や規模から木棺墓と判断した。この場合、北側の掘方の短側部の幅が南側よりも広いことから、北頭位の墓であった可能性がある。

975 木棺墓からは弥生土器の甕の底部が出土している (737)。内外面ともナデを施し、外面に籾痕が認められる。弥生時代前期に属する。

以上木棺墓と断定できるものは２基で、木棺墓と想定できるものを含めると計３基が今回の調査で確認できた。池島・福万寺遺跡ではこれまでの調査でも木棺墓が確認されている。池島Ⅱ期地区 04 － 2 調査区では合計 4 基の木棺墓が確認されており、これらからは突帯紋土器が出土している。池島・福万寺遺跡では縄紋時代晩期から弥生時代前期にかけて木棺墓をはじめとする墓が営まれ続けていたことが今回の調査で明らかとなった。　(前田)

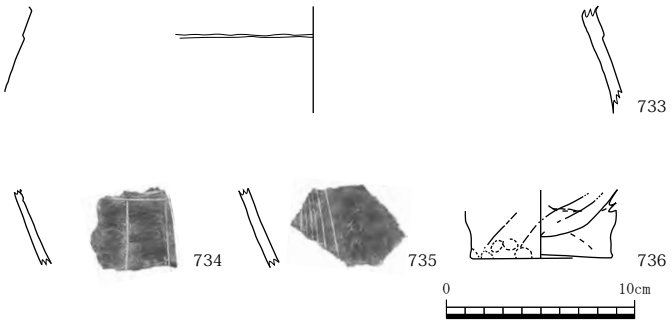


図267　第17面　972木棺墓出土遺物実測図（S＝1：4）

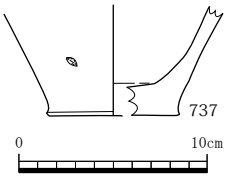


図268　第17面　975木棺墓出土遺物実測図（S＝1：4）

973 土坑 (図 263、269・図版 28)　20 A -10g 区で検出した。972 木棺墓に切られる。平面不整形な楕円形を呈し、規模は長径 1.3 m、短径 0.7 m、深さ 0.15 mを測り、埋土は黒褐色細砂・シルト混じり極細砂層で第 17 層の偽礫を多く含む。遺物は管状土錘 (743) が 1 点出土した。

1113 土坑 (図 266、269)　20 A -10h 区、調査区南端部に位置する。検出された平面は不整

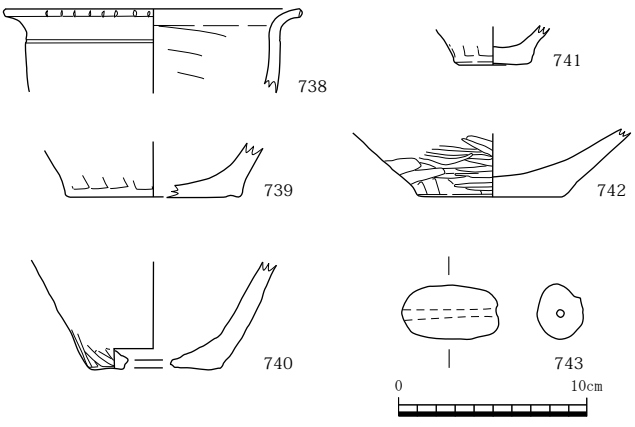


図269　第17面　973・1113～1115土坑出土遺物実測図（S＝1：4）

形を呈し、土坑の南側は調査区外に延びる。壁は二段落ちにになっており、規模は検出長3.0 m、幅1.8 m、深さ 0.4 mを測る。埋土は 4 層に分層され、最下層では噴砂が認められた。遺物は弥生土器の甕 (738 ～ 740) の他に壺体部片が出土した。遺物は弥生時代前期に属する。

1114 土坑 (図 266、269)　20 A -10h 区で検出した。1113 土坑の北約 7 mに位置する。土坑の平面形は東西方向に長軸をもつ不整形を呈する。規模は全長 1.64 m、最大幅 1.16 m、深さ 0.15 mを測る。埋土は 2 層で下層には第 17 層の偽礫を多く含む極細砂混じりシルトが堆積する。遺物は弥生土器ミニチュア壺底部 (741) の他に壺や甕の細片が出土した。

1115 土坑 (図 266、269)　20 A -10h 区、1114 土坑の西約 2 mの地点に位置する。平面は不整形な三角形状を呈し、土坑中央部は二段に落ちる。長辺 2.4 m、短辺 1.5 m、深さ 0.3 mを測る。埋土は 3 層に分層でき、中・下層には第 17 層の偽礫が多く含まれる。遺物は弥生土器壺底部 (742) の他に壺や甕の細片が出土したが、いずれの土器も弥生時代前期に属する。

第 17 層

当該層は第 17 面の基盤層である。上層が灰白～緑灰色シルト層、下層が灰色シルト～細礫層で層厚 0.4 ～ 1.0 m以上堆積する。遺物の出土はなかった。

第 18 面

当該面はほぼ調査限界である標高 T.P. ＋ 0.9 mから T.P. ＋ 1.15 mで検出した。遺構面は第 18 層である黒色シルト層および細砂層 (既往の調査の「第 5 黒色土層」) を基盤層とする。当該面上で顕著な遺構は検出されなかったが、調査区内を網目状流路がはしる。流路の底は調査限界の T.P. ＋ 0.9 mを超えているため、規模等詳細については不明である。

第 18 層

当該層は第 18 面を形成する黒色シルト層および細砂層と、その下層に堆積する灰 (N5/0) 中砂混じりシルト層や、やや土壌化が認められる灰 (N4/0) 中砂・極細砂混じりシルト層、さらにその下層で灰 (N6/0) 極細砂混じりシルト層などの堆積が確認できた。遺物の出土はなかった。　(後藤)

遺物観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 / 遺構 / 層	時期	種類 / 器種	法量(cm)( )は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
1	6	29	第1b層	近世	陶器 / 甕	29		残存5.0	口縁部内外面ともにヨコナデ。体部外面ハケメ（6～7本/1cm）、内面ナデ。	内)	5YR5/4	にぶい赤褐	石英・長石・雲母	良好
										外)	5YR5/4	にぶい赤褐		
										断)	5YR5/4	にぶい赤褐		
2	6	29	第1b層	18世紀後半	陶器 / すり鉢 / 堺	(35)		残存5.0	口縁端部、内面ヨコナデ。口縁・体部外面ナデ、内面すり目。口縁外面２条、内面１条の沈線が巡る。	内)	10YR5/1	褐灰	密　石英・長石・雲母	良好
										外)	10YR5/1	褐灰		
										断)	5YR4/3	にぶい赤褐		
3	6	29	第1～1b層	近世	陶器 / 塊 / 瀬戸		5.0	残存3.0	内外面ともに施釉。	内)	2.5Y8/2	灰白	密	良好
										外)	2.5Y8/2	灰白		
										断)	2.5Y8/1	灰白		
4	6	29	第1層	18世紀	磁器 / 碗 / 染付		(4)	残存4.0	内外面ともに施釉。呉須は鈍い発色。	内)	10Y7/1	灰白	密　石英・長石	良好
										外)	10Y7/1	灰白		
										断)	N7/1	灰白		
5	6	29	1b土坑	18世紀	磁器 / 碗 / 染付	(15)		残存3.0	内外面ともに施釉。	釉)		青	密	良好
										釉)		青		
										断)	N8/0	灰白		
6	6	29	第1b層	14世紀	磁器 / 碗 / 青磁		4.8	残存3.0	内外面ともに施釉。底部外面ヘラケズリ。	内)	10Y6/2	オリーブ灰	密	良好
										外)	10Y6/2	オリーブ灰		
										断)	N7/0	灰白		
7	6	29	第1b層	18世紀後半	磁器 / 碗 / 青磁染付		4.2	残存2.0	内外面ともに施釉。	内)	7.5GY7/1	明緑灰青	密	良好
										外)	7.5GY7/1	明緑灰青		
										断)	N8/0	灰白		
8	14		第2-1層	近世	陶器 / 皿 / 瀬戸	(11)	(6)	1.8	内外面ともに施釉。体部内外面ともにヘラケズリ。	内)	5Y6/3	オリーブ黄	密	良好
										外)	5Y6/3	オリーブ黄		
										断)	5Y7/1	灰白		
9	14		第2-1層	16世紀	瓦質土器 / 火鉢	(16)		残存7.0	口縁端部ヨコナデ。外面横方向ナデ、内面ユビオサエの後ナデ。	内)	N5/0	灰	長石	良好
										外)	N5/0	灰		
										断)	N7/0	灰白		
10	14		第2-1層	16世紀	瓦質土器 / 火鉢	(15)		残存10.0	口縁端部ヨコナデ。外面横方向ナデ、内面ユビオサエの後ナデ。	内)	5Y8/1	灰白	石英・長石・雲母	良好
										外)	N3/0	暗灰		
										断)	5Y8/1	灰白		
11	14	29	第2-2層	18世紀	陶器 / 塊 / 瀬戸	(9)		残存4.0	内外面とも施釉。	内)	2.5Y8/2	灰白	密	良好
										外)	2.5Y8/2	灰白		
										断)	2.5Y7/1	灰白		
12	14	29	第2-2層	17世紀	磁器 / 碗 / 染付	(12)		残存4.0	内外面とも施釉。「福福」	内)	N8/0	灰白・青	密	良好
										外)	N8/0	灰白・青		
										断)	N8/0	灰白		
13	14	30	第2-2層	16世紀後半	土製品 / 犬	体長 4.2cm	体高 4.0cm		手づくね。江浦分類Ai類。同ＩＡに類似。	内)	2.5Y8/2	灰白	密	良好
										外)	2.5Y8/2	灰白		
										断)	2.5Y8/2	灰白		
14	14	29	第2-3層	16～17世紀	陶器 / 皿 / 瀬戸	(11)	(7)	2.1	内外面とも施釉。内面底部ナデ。底部内外面ともトチン痕あり。	釉)	5Y5/3	灰オリーブ	密	良好
										内)	7.5YR5/3	にぶい褐		
										断)	5Y7/1	灰白		
15	14		第2-3層	17～18世紀	磁器 / 碗 / 青磁	(16)		残存3.0	内外面とも施釉。	内)	7.5Y6/2	灰オリーブ	密	良好
										外)	7.5Y6/2	灰オリーブ		
										断)	N8/0	灰白		
16	14	29	第2-3層	近世	陶器 / 皿 / 美濃鉄釉	(10)	(7)	2.1	内外面とも施釉。外面底部未調整。底部内外面ともトチン痕。	内)	7.5YR5/2	灰褐	密	良好
										外)	7.5YR5/3	にぶい褐		
										断)	2.5Y8/2	灰白		
17	14	29	第2-3層	17世紀	陶器 / 塊 / 唐津		5.0	残存3.0	内外面とも施釉。高台部ヘラケズリ。高台部外面沈線３条。	内)	5Y8/1	灰白	密	良好
										外)	5Y8/1	灰白		
										断)	5Y6/1	灰		
18	14	29	第2-4層	16世紀	陶器 / すり鉢 / 備前	(26)		残存5.0	口縁端部ヨコナデ。内外面ナデ。内面すり目。口縁端部外面沈線３条。	内)	5YR5/3	にぶい赤褐	密　長石・石英	良好
										外)	7.5YR5/1	褐灰		
										断)	5YR6/1	褐灰		
19	14		第2-4層		石製品 / 砥石 / 砂岩	最大長 5	最大幅 3.7	最大厚 1.2			2.5Y7/1	灰白		良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
20	14	29	第2-4層	近世	瓦 巴紋軒丸瓦			瓦当厚 残存3.1		内） 外） 断）	N5/0 N5/0 N5/0	灰 灰 灰	石英・長石	良好
21	14		第2-5層	16世紀	瓦質土器 すり鉢	(21)		残存4.0	口縁端部ヨコナデ。内面すり目。外面は剥離が著しく調整不明。	内） 外） 断）	2.5Y7/2 5YR6/6 5YR6/4	灰黄 橙 にぶい橙	石英・長石・雲母・チャート	良好
22	14		第2-5b層		瓦質土器転用 円板	長軸 5.1	短軸 4.7	厚 1.2	側面打ち欠き。瓦質土器転用。	内） 外） 断）	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	灰白 灰白 灰白	石英・長石・雲母・黒色粒	良好
23	14		第2-5層	16世紀	瓦質土器 羽釜	(25)		残存5.0	口縁端部ヨコナデ。内外面・鍔部ナデ。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 2.5Y6/2 2.5Y7/1	黒褐 灰黄 灰白	石英・長石	良好
24	14		第2-5層	14世紀	瓦質土器 すり鉢	(29)		残存5.0	口縁端部ヨコナデ。外面ナデ、内面剥離が著しく調整不明。	内） 外） 断）	N4/0 N4/0 7.5Y8/1	灰 灰 灰白	石英・長石・雲母	良好
25	14	30	第2-5層	15世紀	瓦質土器 すり鉢	(25)		残存6.0	口縁端部ヨコナデ。外面ユビオサエの後ナデ、内面ナデ、すり目。	内） 外） 断）	N4/0 N4/0 7.5YR5/4	灰 灰 にぶい褐	石英・長石	良好
26	14	30	2-5b層		瓦質土器 火鉢	(32)		残存4.0	口縁端部ヨコナデ。内外面ナデ、外面２条の突帯とその間に刻印。	内） 外） 断）	N4/0 N4/0 2.5Y7/2	灰 灰 灰黄	長石・石英	良好
27	15	30	第2-3面		古銭	直径 2.5		厚み 0.1	銭名不明					
28	15	30	第2-3面		古銭 天禧通寶	直径 2.6		厚み 0.15	初鋳造　1017年　北宋銭					
29	15	30	第4面		古銭 皇宋通寶	直径 2.5		厚み 0.15	初鋳造　1038年					
30	20		第3層	14～15世紀	陶器 壺 備前	(35)		残存6.0	内外面ともヨコナデ。	内） 外） 断）	10YR3/1 10YR4/1 5YR5/3	黒褐 褐灰 にぶい赤褐	密　石英・長石・雲母	良好
31	20		第3層	14世紀	瓦質土器 すり鉢	(30)		残存3.0	内面・口縁端部ヨコナデ。外面ハケメ。	内） 外） 断）	N2/0 N2/0 7.5Y7/1	黒 黒 灰白	石英・長石・雲母	良好
32	20	30	第3層	14～15世紀	瓦質土器 火鉢		(32)	残存8.0	外面体・底部横方向ナデ。内面ユビオサエ＋ナデ。	内） 外） 断）	N3/0 N3/0 N7/0	暗灰 暗灰 灰白	密　石英・長石・雲母	良好
33	21	30	第4面 49島畠	14世紀	土師質土器 皿	7.0		1.3	口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面ユビオサエ。底部内外面ともナデ。	内） 外） 断）	10YR5/2 2.5Y7/2 7.5YR5/6	灰黄褐 灰黄 明褐	石英・長石・雲母	良好
34	23	30	第4面 60島畠		真鍮製品 桿秤鉤	全長 4.2	最大幅 0.5	最大厚 0.3	孔径0.3㎝、重さ：6.4ｇ。					
35	26		第4層	13～14世紀	磁器 碗 白磁	(15)		残存3.0	内外面とも施釉。	内） 外） 断）	7.5Y8/1 7.5Y8/1 7.5Y8/1	灰白 灰白 灰白	密	良好
36	26		第4層	14世紀	陶器 壺 備前	(25)		残存6.0	内外面ともヨコナデ。内外面とも灰かぶり。	内） 外） 断）	N7/0 N7/0 N7/0	灰白 灰白 灰白	石英・長石	良好
37	26	30	第4層	14世紀	瓦質土器 火鉢	(38)		残存8.0	口縁端部ヨコナデ。内外面ナデ。外面２条の突帯とその間に刻印。	内） 外） 断）	N4/0 N4/0 N7/0	灰 灰 灰白	長石・石英・雲母	良好
38	26	30	第4層		鉄製品 釘	最大長 7.4	最大幅 0.8	最大厚 0.8	重さ：12.2ｇ。					

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
39	27		第5面 62坪境畦畔・64島畠	14世紀	土師質土器 小皿	(11)		残存1.3	口縁部・内面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ。	内) 外) 断)	2.5Y7/2 2.5Y7/2 2.5Y7/2	灰黄 灰黄 灰黄	長石・石英・赤色粒子	良好
40	27	30	第5面 64島畠	14世紀	瓦質土器 火鉢	(14)		残存3.5	口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。内面ユビオサエ。	内) 外) 断)	2.5Y8/2 2.5Y8/2 2.5Y8/1	灰白 灰白 灰白	石英・長石	良好
41	27		第5面 64島畠	14世紀	瓦質土器 すり鉢	(22)		残存5.0	口縁部ヨコナデ。内面すり目。外面横方向ハケメの後縦方向のハケメ。混入。	内) 外) 断)	N6/0 N3/0 N8/0	灰 暗灰 灰白	長石・石英	良好
42	27		第5面 64島畠	14世紀	瓦器 埦		3.0	残存2.2	外面ユビオサエ。内面ナデの後ミガキ。台部内側ナデ、高台部ヨコナデ。和泉型（Ⅳ-2）	内) 外) 断)	5Y7/1 N3/0 5Y7/1	灰白 暗灰 灰白	石英・長石	良好
43	27		第5面 64島畠	13世紀中	瓦器 埦		(5)	残存1.1	外面高台部ヨコナデ、他ナデ。内面見込みの暗文螺旋状。和泉型（Ⅲ）	内) 外) 断)	N3/0 N3/0 N8/0	暗灰 暗灰 灰白	密	良好
44	27		第5面 62坪境畦畔・64島畠	7世紀	須恵器 坏身	(11)		2.7	内外面とも回転ナデ。底部外面回転ヘラケズリ。底部に直線２本のヘラ記号。	内) 外) 断)	N6/0 N6/0 N6/0	灰 灰 灰	石英・長石・雲母	良好
45	27	30	第5面 62坪境畦畔	古墳時代	土師器 移動式竈	最大長 9.3	最大幅 7.1	最大厚 1.0	内外面ナデ。庇部のみ残存。混入。	内) 外) 断)	10YR6/3 2.5Y7/2 2.5Y7/2	にぶい黄橙 灰黄 灰黄	長石・石英・角閃石・雲母	良好
46	29	30	第5面 61島畠	14世紀	瓦器 埦	(13)		2.5	口縁部内外面ともヨコナデ。内面横方向ミガキ、外面体部下半から底部にかけてユビオサエ。和泉型（Ⅳ-4）	内) 外) 断)	N4/0 N4/0 N7/0	灰 灰 灰白	石英・長石	良好
47	30		第5面 66島畠	9世紀中	土師器 皿	(16)		残存2.8	口縁部内外面ともヨコナデ。内面剥離が著しく調整不明。外面中位ユビオサエ、下位ナデ。混入。	内) 外) 断)	7.5YR5/6 7.5YR5/6 N3/0	明褐 明褐 暗灰	石英・長石・赤色粒	良好
48	30		第5面 66島畠	14世紀	磁器 碗 青磁	(13)		残存3.5	内外面とも施釉。	釉) 断)	10Y6/2 N8/0	オリーブ灰 灰白	密	良好
49	31		第5面 69島畠	5世紀後半	須恵器 坏蓋		(13)	4.6	天井部内面同心円当て具痕あり。天井部外面回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。混入。	内) 外) 断)	N7/0 N6/0 N7/0	灰白 灰 灰白	石英・長石	良好
50	32	30	第5面 70島畠	12世紀	瓦器 小皿	(10)		1.2	口縁部外面ヨコナデ。内面ミガキ。底部外面ユビオサエの後ナデ、内面暗文。見込みの暗文格子状。	内) 外) 断)	N4/0 N4/0 N7/0	灰 灰 灰白	密	良好
51	33	30	第5面 71島畠	13世紀	磁器 碗 青磁	(16)		残存4.3	内外面とも施釉。	釉) 断)	10Y6/2 N8/0	オリーブ灰 灰白	密	良好
52	34		第5層	13世紀	磁器 碗 白磁	(14)		残存2.9	内外面とも施釉。輪花紋。	釉) 断)	2.5Y6/3 10YR7/3	にぶい黄 にぶい黄橙	密	良好
53	34		第5層	13世紀	磁器 碗 青磁		(5)	残存1.9	内外面とも施釉。高台部外面ヘラケズリ。	釉) 断)	5GY7/1 N8/0	明オリーブ灰 灰白	密　石英・長石	良好
54	34	30	第5層	13世紀	磁器 皿 青磁	9.7	3.0	2.5	内外面とも施釉。底部外面ヘラケズリ。同安窯。	釉) 断)	10Y6/2 N7/0	オリーブ灰 灰白	密	良好
55	34		第5層	14世紀	瓦質土器 甕	(30)		残存5.8	口縁部内外面ともヨコナデ。外面タタキ、内面ナデ。	内) 外) 断)	N4/0 N3/0 N8/0	灰 暗灰 灰白	石英・長石	良好
56	34		第5層	14世紀	瓦質土器 すり鉢	(32)		残存3.7	口縁部内外面ともヨコナデ。外面ケズリ、内面すり目残存。	内) 外) 断)	N4/0 N4/0 5Y8/1	灰 灰 灰白	石英・長石	良好
57	34		第5層	14世紀	瓦質土器 羽釜	(19)		残存2.3	口縁部内外面ともヨコナデ。鍔部ナデ。内面ハケメ。	内) 外) 断)	N4/0 N4/0 7.5Y7/1	灰 灰 灰白	石英・長石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
58	34		 第5層	7世紀	須恵器 坏身	(10)		残存2.3	内外面とも回転ナデ。混入。	内) 外) 断)	N7/0 N7/0 N7/0	灰白 灰白 灰白	石英・長石	良好
59	34		 第5層	古墳時代	須恵器 器台		(25)	残存12.0	内外面ともナデ。三方透かし。混入。	内) 外) 断)	N5/0 N6/0 2.5YR4/2	灰 灰 灰赤	石英・長石	良好
60	36		第6面 79鋤溝 	平安時代	土師器 鉢	(15)		残存2.7	外面剥離が著しく調整不明。内面ナデ。	内) 外) 断)	7.5YR5/6 7.5YR5/6 7.5YR5/6	明褐 明褐 明褐	石英・長石	良好
61	36		第6面 79鋤溝 	平安時代	土師器 高坏		3.6	残存2.9	手づくね。内外面ともナデ。	内) 外) 断)	5YR5/6 5YR5/6 5YR5/6	明赤褐 明赤褐 明赤褐	石英・長石・赤色粒	良好
62	38		第6面 103鋤溝 	中世	瓦器 小皿	(9)		残存1.4	口縁部内外面ともヨコナデ。外面ナデ、内面ミガキ。	内) 外) 断)	N4/0 N4/0 N8/0	灰 灰 灰白	密	良好
63	39		第6面 111鋤溝 	13世紀後半～14世紀	土師器 皿	(13)		残存2.0	内外面とも剥離が著しく調整不明。	内) 外) 断)	10YR6/2 7.5YR7/4 7.5YR7/4	灰黄褐 にぶい橙 にぶい橙	石英・長石	良好
64	40		 第6層	14世紀	瓦器 塊	(12)		残存1.9	口縁部内外面ともヨコナデ。外面ユビオサエの後ナデ、内面ミガキ。	内) 外) 断)	N4/0 N4/0 N7/0	灰 灰 灰白	密	良好
65	40		 第6層	14世紀	瓦器 皿	(9)		残存1.3	口縁部内外面ともヨコナデ。外面ユビオサエ、内面ナデの後暗文。	内) 外) 断)	N8/0 N4/0 N8/0	灰 灰 灰	密	良好
66	40		 第6層	6世紀後半	須恵器 坏蓋		(15)	4.1	口縁部内外面ともナデ。天井部内面回転ナデの後仕上げのナデ。外面回転ヘラケズリ。混入。	内) 外) 断)	N7/0 N7/0 N7/0	灰白 灰白 灰白	石英・長石	良好
67	40		 第6層	6世紀後半	須恵器 坏蓋		(13)	3.4	口縁部内外面ともナデ。天井部内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。混入。	内) 外) 断)	N7/0 N7/0 N7/0	灰白 灰白 灰白	石英・長石	良好
68	40		 第6層	7世紀	須恵器 坏身	(11)		2.8	内面回転ナデの後ナデ、外面回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。底部外面直線１条のヘラ記号。混入。	内) 外) 断)	5Y7/1 5Y7/1 5Y7/1	灰白 灰白 灰白	石英・長石	良好
69	47		 第7層	布留式期	土師器 壺	(19)		残存6.0	内外面とも横方向ナデ。	内) 外) 断)	2.5YR6/2 10YR6/4 10YR5/3	灰黄 にぶい黄橙 にぶい黄褐	長石・石英・チャート	良好
70	47		 第7層	布留式期	土師器 壺	(18)		残存8.0	内外面とも剥離が著しく調整不明。	内) 外) 断)	10YR6/4 10YR8/3 2.5Y5/1	にぶい黄橙 浅黄橙 黄灰	石英・長石	良好
71	47		 第7層	後期	弥生土器 甕		4.6	残存2.4	外面タタキ、内面ヘラケズリ＋ユビオサエ。	内) 外) 断)	10Y4/1 10YR6/3 10Y4/1	褐灰 にぶい黄橙 褐灰	長石・石英・雲母	良好
72	47		 第7層	庄内式期	土師器 鉢	(16)		残存5.0	口縁部内外面ともヨコナデ。外面上位横方向ナデの後ヘラミガキ。外面下位および内面剥離が著しく調整不明。	内) 外) 断)	5YR6/6 5YR6/6 5YR6/6	橙 橙 橙	密	良好
73	47		 第7層	6世紀	須恵器 壺	(10)		残存6.0	内外面とも回転ナデ。	内) 外) 断)	N7/0 N7/0 N7/0	灰白 灰白 灰白	密	良好
74	53		第10面 建物２（465柱穴）	後期	弥生土器 壺	(13)		残存5.0	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部外面ハケメ。内面板状工具によるナデ。	内) 外) 断)	7.5YR5/6 7.5YR5/6 5B3/1	明褐 明褐 暗青灰	長石・雲母・石英	良好
75	53		第10面 建物３（490柱穴）	庄内式期	土師器 甕	(19)		残存2.5	口縁部内面ハケメ、外面ヨコナデ。肩部内面ヘラケズリ。	内) 外) 断)	2.5Y7/2 2.5Y7/2 2.5Y7/2	灰黄 灰黄 灰黄	長石・雲母・石英	良好
76	53		第10面 建物３（343柱穴）	庄内式期	土師器 甕	(20)		残存2.4	口縁部内面ハケメ、外面ヨコナデ。肩部内面ヘラケズリ。	内) 外) 断)	10YR6/4 10YR5/6 10YR6/4	にぶい黄橙 黄褐 にぶい黄橙	長石・雲母・石英	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
77	60		第10面 156井戸	庄内式期	土師器 甕	(16)		残存3.6	内外面ともヨコナデ。	内) 外) 断)	5YR6/8 5YR6/8 2.5Y8/2	橙 橙 灰白	長石・雲母	良好
78	60		第10面 156井戸	庄内式期	土師器 甕	(18)		残存3.8	口縁部内面ハケメ、外面ヨコナデ。肩部内面ヘラケズリ。	内) 外) 断)	10YR4/3 10YR5/4 7.5YR6/6	にぶい黄褐 にぶい黄褐 橙	長石・雲母・角閃石	良好
79	60	31	第10面 156井戸	庄内式期	土師器 甕	頸部径 11.4	胴部径 17.3	残存15.3	外面タタキの後ハケメ、下半はハケメをナデで摩り消し、底部近くはユビオサエ。内面ヘラケズリ。	内) 外) 断)	2.5Y6/1 7.5YR3/1 2.5Y6/1	黄灰 黒褐 黄灰	石英・長石	良好
80	60	31	第10面 156井戸	庄内式期	土師器 甕	19.2		27.7	口縁部内外面ともヨコナデ。外面タタキの後ハケメ。内面ヘラケズリ。外面煤付着。	内) 外) 断)	10YR4/2 10YR2/1 10YR4/1	灰黄褐 黒 褐灰	石英・長石・雲母・チャート	良好
81	60	31	第10面 156井戸	庄内式期	土師器 高坏		(10)	残存5.7	裾端部内外面ともヨコナデ。外面上位板状工具によるナデ、下位ヘラミガキ。内面ハケメ、シボリメ。三方透かし	内) 外) 断)	10YR7/3 10YR8/3 10YR8/3	にぶい黄橙 浅黄橙 浅黄橙	長石・雲母	良好
82	60		第10面 156井戸	後期	弥生土器 壺もしくは甕		5.1	残存3.5	内外面ともハケメ。底部内面クモの巣状ハケメ、外面ナデ。	内) 外) 断)	2.5Y5/4 10YR6/6 2.5Y5/4	黄褐 明黄褐 黄褐	長石・雲母	良好
83	60		第10面 156井戸	庄内式期	土師器 壺		3.6	残存4.0	内外面ともハケメ。底部内面クモの巣状ハケメ。外面ナデ。	内) 外) 断)	10YR4/1 10YR7/3 10YR8/1	褐灰 にぶい黄橙 灰白	長石・雲母	良好
84	62		第10面 234井戸	布留式期	土師器 二重口縁壺	(23)		残存8.5	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	内) 外) 断)	10YR5/8 10YR6/6 10YR7/4	黄褐 明黄褐 にぶい黄橙	長石・石英・雲母・角閃石	良好
85	62		第10面 234井戸	庄内式期	土師器 甕	(14)		残存6.5	口縁部内外面ともヨコナデ。外面ハケメ、内面ユビオサエの後ナデ。	内) 外) 断)	7.5YR6/6 5YR7/8 5YR7/8	橙 橙 橙	長石・雲母	良好
86	62		第10面 234井戸	庄内式期	土師器 高坏	(18)		残存6.0	摩耗のため調整不明。	内) 外) 断)	5YR6/8 5YR6/6 10Y5/1	橙 橙 灰	長石	やや軟
87	62		第10面 234井戸	庄内式期	土師器 小型器台	(11)		残存3.0	口縁端部内外面ともヨコナデ。体部内外面ともヘラミガキ。	内) 外) 断)	2.5YR7/8 2.5YR7/6 2.5YR7/6	橙 橙 橙	長石・雲母	良好
88	65	31	第10面 310井戸	庄内式期	土師器 甕	17	4.2	27.9	口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面肩部タタキ痕、中位・下位タタキの後ハケメ。体部内面ハケメ、底部ナデ。外面下半煤付着。	内) 外) 断)	2.5Y4/1 2.5Y4/1 7.5Y7/2	黄灰 黄灰 明褐灰	石英・長石・角閃石・雲母	良好
89	65	31	第10面 310井戸	布留式期	土師器 甕	14.6		22.9	口縁部内外面ともヨコナデ。外面ハケメ。内面肩部ユビオサエ、中位横方向ヘラケズリ、下位ナデ。粘土紐の継ぎ目１箇所。	内) 外) 断)	2.5Y6/3 2.5Y7/3 2.5YR7/3	にぶい黄橙 浅黄　明赤褐	石英・雲母・角閃石	密
90	65	31	第10面 310井戸	布留式期	土師器 甕	14		23.9	口縁部内外面ともヨコナデ。外面上位ハケメ、下位ハケメの後ナデ。内面肩部ユビオサエ、中位下から上方向ヘラケズリ。肩部粘土紐の継ぎ目。	内) 外) 断)	2.5Y5/1 2.5Y3/1 10YR6/4 5Y5/2	黄灰　黒褐 にぶい黄橙 灰オリーブ	長石・雲母・石英・角閃石・クサリ礫	良好
91	65	31	第10面 310井戸	布留式期	土師器 甕	11.8		16.8	口縁部内外面ともヨコナデ。外面ハケメ、内面ナデ。	内) 外) 断)	10YR3/1 2.5Y6/3	黒褐 にぶい黄	長石・チャート	良好
92	65	32	第10面 310井戸	布留式期	土師器 甕	13.4		20.1	口縁部内外面ともヨコナデ。外面ハケメ、内面上位ナデ、下位縦方向ハケメ。	内) 外) 断)	2.5Y7/2 上半2.5Y7/2 下半10YR3/1 5Y6/1	灰黄 黒褐 灰	長石・角閃石・クサリ礫・雲母	良好
93	65	32	第10面 310井戸	布留式期	土師器 甕	14.3		22.8	口縁部内外面ともヨコナデ。外面肩部８本歯による横方向ハケメ、中位縦方向ハケメ、下位縦方向ハケメ。内面上位横方向ユビナデ、下位ハケメの後ナデ、底部内面ユビオサエ。	内) 外) 断)	7.5YR4/2 7.5YR7/3 7.5YR7/4	灰褐 にぶい橙 にぶい橙	石英・長石	良好
94	65		第10面 310井戸	布留式期	土師器 甕	(14)		残存7.8	口縁部内外面ともヨコナデ。外面横方向ハケメの後斜方向ハケメ。内面肩部ヘラケズリ。	内) 外) 断)	10YR7/2 7.5YR7/4 10YR6/3	にぶい黄橙 にぶい橙 にぶい黄橙	石英・長石・角閃石	良好
95	65		第10面 310井戸	布留式期	土師器 甕	(15)		残存4.0	口縁部内外面ヨコナデ。	内) 外) 断)	2.5Y7/3 2.5Y7/3 7.5YR7/4	浅黄 浅黄 にぶい橙	石英・長石・赤色粒・黒色粒	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
96	65		第10面 310井戸	布留式期	土師器 甕	(15)		残存5.0	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケメ。体部内外面ともナデ。口縁部粘土紐の継ぎ目。	内） 外） 断）	7.5YR7/3 10YR7/3 7.5YR7/3	にぶい橙 にぶい橙 にぶい橙	密	良好
97	65		第10面 310井戸	布留式期	土師器 小型壺	(10)		残存3.3	口縁部内外面ともヨコナデ。粘土紐の継ぎ目２箇所。	内） 外） 断）	10YR6/2 10YR6/2 10YR6/2	灰黄褐 灰黄褐 灰黄褐	石英・長石・赤色粒・雲母	良好
98	65	32	第10面 310井戸	布留式期	土師器 小形丸底壺	7.6		8.7	口縁部内外面ともヨコナデ。内面体部ナデ、底部ユビオサエ。外面体部上位ナデ、下位ヘラミガキか？	内） 外） 断）	7.5YR7/4 2.5Y8/2 2.5Y7/2	にぶい橙 灰白 灰黄	長石・石英・クサリ礫	良好
99	65	32	第10面 310井戸	布留式期	土師器 高坏	20.5		残存7.8	口縁端部内外面ともヨコナデ。外面ハケメの後ヘラミガキ、下位縦方向ハケメ、坏底部外面ヘラミガキ、内面ハケメの後ヘラミガキ。	内） 外） 断）	7.5YR7/6 5YR4/3 7.5YR7/4	橙 にぶい赤褐 にぶい橙	石英・長石	良好
100	65		第10面 310井戸	布留式期	土師器 高坏	(16)		残存5.1	外面口縁端部ヨコナデ、下半部縦方向ハケメ（9～10本/1cm）。内面剥離が著しく調整不明。	内） 外） 断）	10YR6/1 10YR4/1 10YR6/1	褐灰 褐灰 褐灰	石英・長石・赤色粒	良好
101	65		第10面 310井戸	布留式期	土師器 高坏	(16)		残存4.0	口縁端部ヨコナデ、外面ハケメ。内面上半ハケメ、下半ヘラミガキ。	内） 外） 断）	7.5YR7/4 7.5YR7/4 2.5Y7/1	にぶい橙 にぶい橙 灰白	石英・長石・赤色粒	良好
102	65	32	第10面 310井戸		土師器 高坏		10	残存7.6	脚部内面しぼり目、裾部端面ヨコナデ。脚部外面ナデ、裾部端面ヨコナデ。	内） 外） 断）	7.5YR7/4 7.5YR7/4 7.5YR7/3	にぶい橙 にぶい橙 にぶい橙	石英・長石・赤色粒・雲母	良好
103	66	32	第10面 310井戸		石製品 双孔円板	直径 2.7	厚み 0.4	孔径 0.2	滑石製 重さ：6.0g					
104	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.4	厚み 0.39	孔径 0.2	滑石製 重さ：0.2g					
105	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.4	厚み 0.28	孔径 0.15	滑石製 重さ：0.3g					
106	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.4	厚み 0.3	孔径 0.15	滑石製 重さ：0.3g					
107	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.3	厚み 0.2	孔径 0.15	滑石製 重さ：0.3g					
108	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.45	厚み 0.31	孔径 0.2	滑石製 重さ：0.4g					
109	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.3	厚み 0.2	孔径 0.15	滑石製 重さ：0.4g					
110	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.45	厚み 0.25	孔径 0.15	滑石製 重さ：0.5g					
111	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.4	厚み 0.29	孔径 0.15	滑石製 重さ：0.5g					
112	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.4	厚み 0.3	孔径 0.15	滑石製 重さ：0.6g					
113	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.4	厚み 0.3	孔径 0.15	滑石製 重さ：0.6g					
114	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.4	厚み 0.2	孔径 0.15	滑石製 重さ：0.5g					

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
115	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.4	厚み 0.15	孔径 0.15	滑石製 重さ：0.6g					
116	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.4	厚み 0.2	孔径 0.15	滑石製 重さ：0.7g					
117	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.4	厚み 0.2	孔径 0.15	滑石製 重さ：0.8g					
118	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.45	厚み 0.15	孔径 0.2	滑石製 重さ：0.8g					
119	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.4	厚み 0.2	孔径 0.15	滑石製 重さ：0.8g					
120	67	32	第10面 310井戸		石製品 臼玉	直径 0.3	厚み 0.15	孔径 0.1	滑石製 重さ：0.8g					
121	68	50	第10面 310井戸		木製品 木錘	最大長 13.2	a 6.1	b 4.9	アカガシ亜属					
122	70	33	第10面 402井戸	布留式期	土師器 甕	12.2		18.9	口縁部内外面ともヨコナデ。外面ハケメ、頸部のみハケメの後ヘラミガキ。内面ヘラケズリ、底部ユビオサエ。外面全体に煤付着。	内) 外) 断)	2.5Y5/1 10YR7/2	黄灰 にぶい黄橙	石英・長石・赤色粒・雲母	良好
123	70	32	第10面 402井戸	布留式期	土師器 甕	15.4	最大胴部径 14.3	11.2	口縁部内外面ともヨコナデ。外面ハケメ、頸部のみハケメの後ヘラミガキ。内面ヘラケズリ、底部ユビオサエ。外面全体に煤付着。	内) 外) 断)	10YR5/3 N5/0 7.5YR6/1	にぶい黄褐 黒 褐灰	石英・長石・角閃石・雲母	良好
124	70	33	第10面 402井戸	布留式期	陶質土器 広口壺	13.9		16.9	口縁部内外面ともヨコナデ。外面肩部タタキの後ハケメ、下位タタキの後ナデ。内面タタキの後ナデ、上・中位にのみ当て具痕。底部粘土板充填後内面より叩き出して丸底に仕上げる。	内) 外) 断)	N7/0 2.5Y6/2 5YR5/2	灰白 灰黄 灰褐	密	良好
125	73		第10面 221土坑	飛鳥Ⅳ	土師器 坏身	(11)		残存3.5	口縁部内外面ともヨコナデ。内面放射状暗文、外面ナデの後ユビオサエ。	内) 外) 断)	5YR6/8 5YR6/8 5YR6/8	橙 橙 橙	長石	良好
126	76	32	第10面 272土坑	布留式期	土師器 小型丸底壺	10.5		10.8	口縁端部内外面ともヨコナデ。外面ハケメ、内面ナデ。内面底部ユビオサエの後ナデ。体部中位粘土紐痕。体部下半に外から内へ焼成後穿孔。	内) 外) 断)	7.5YR6/6 7.5YR6/6	橙 橙	長石・雲母	良好
127	76		第10面 272土坑	庄内式期	土師器 小型器台			残存1.7	内外面ともナデ。	内) 外) 断)	7.5YR5/6 10YR5/3 5Y4/1	明褐 にぶい黄橙 灰	長石・雲母・角閃石	良好
128	79	33	第10面 485土坑	布留式期	土師器 甕	16.6		26.2	口縁部内外面ともヨコナデ。外面ハケメ（7～8本/ｃｍ）。内面上半ナデ、下半ユビオサエの後ナデ。	内) 外) 断)	10YR7/2 10YR7/2 N4/0	にぶい黄橙 にぶい黄橙 灰	長石・石英・雲母	良好
129	82	33	第10面 493土坑	布留式期	土師器 甕	11.8		18.35	口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面ハケメ（6～７本/ｃｍ）。内面上半ヘラケズリ、下半ユビオサエの後ナデ。	内) 外) 断)	5YR7/6 5YR7/6 5YR7/6	橙 橙 橙	石英・長石	良好
130	88	33	第10面 A区　160ピット	平安時代	土師器 坏身	13.4		3.9	口縁部内外面ともにヨコナデ。外面ユビオサエの後ナデ。内面剥離が著しく調整不明。底部外面に墨書。	内) 外) 断)	5YR6/8 5YR6/8 5YR5/8	橙 橙 明赤褐	長石・雲母	良好
131	88	33	第10面 A区　164ピット	平安時代	土師器 坏身	15.2		3.65	口縁部内外面ともヨコナデ。外面ユビオサエの後ナデ。内面ナデ。底部外面に針状工具による記号。	内) 外) 断)	5YR6/8 5YR6/8	橙 橙	長石・雲母	良好
132	89	33	第10面 B区　232ピット	飛鳥	土師器 坏身	10.8		3.1	口縁部内外面ともヨコナデ。外面ユビオサエの後ナデ。内面放射状暗文。内面に針状工具による記号。	内) 外) 断)	2.5YR8/2 2.5YR7/2 2.5YR7/2	灰白 灰黄 灰黄	長石・石英	良好
133	89		第10面 B区　226ピット	庄内式期	土師器 甕	(16)		残存3.2	口縁部内面ハケメ。外面ヨコナデ。肩部内面ヘラケズリ。	内) 外) 断)	2.5Y4/3 10YR4/3 2.5Y5/3	オリーブ褐 にぶい黄褐 黄褐	長石・雲母	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
134	89		第10面 B区　218ピット	後期	弥生土器 甕		(5)	残存6.4	外面タタキ。底部外面・内面ナデ。	内) 外) 断)	7.5YR6/6 5YR6/8 5Y6/2	橙 橙 灰オリーブ	長石・雲母	良好
135	92		第10面 C区　255ピット	6世紀	土師器 壺	(13)		残存6.0	口縁端部・内面・口頸部外面ヨコナデ。口頸部内面・外面ハケメ。	内) 外) 断)	2.5Y5/1 7.5Y4/4 2.5Y4/1	黄灰 褐 黄灰	長石・雲母	良好
136	93	33	第10面 D区　315ピット	庄内式期	土師器 高坏	15.1		残存5.0	坏部上半内外面ともヨコナデ。下半外面ハケメ、内面ナデ。	内) 外) 断)	2.5YR6/8 2.5YR6/8 2.5YR6/8	橙 橙 橙	長石・石英・雲母	良好
137	94		第10面 E区　337ピット	6世紀後半	須恵器 坏蓋	(16)		残存4.0	天井部外面回転ヘラケズリ。他回転ナデ。	内) 外) 断)	5PB6/1 N6/0 N6/0	青灰 灰 灰		
138	96	33	第10面 547落ち込み	6世紀	須恵器 坏身	10.0		4.7	底部外面回転ヘラケズリ。他回転ナデ。ロクロ回転右方向。	内) 外) 断)	N7/0 N7/0	灰白 灰白	長石・石英・黒色粒	良好
139	100		第10面 460溝	布留式期	土師器 二重口縁壺	19.8		残存7.8	口縁部上位内外面ともヨコナデ、下位内外面ともナデ。外面肩部ナデ、内面ユビオサエ＋ナデ。	内) 外) 断)	2.5Y7/2 2.5Y7/2 2.5Y7/2	灰黄 灰黄 灰黄	石英・長石	良好
140	100		第10面 460溝	布留式期	土師器 高坏	15		残存5.4	外面上位ナデ、下位ハケメ。内面ハケメの後ヘラミガキ。	内) 外) 断)	7.5YR7/6 7.5YR7/7 7.5YR7/8	橙 橙 橙	長石・雲母・石英	良好
141	100	33	第10面 460溝	古墳時代中期	須恵器 壺	10.4		13.6	外面底部タタキの後板ナデ、内面底部ユビオサエの後ナデ。頸部２条の波状紋、突帯２条。肩部波状紋１条、沈線１条。	内) 外) 断)	N7/0 N7/0	灰白 灰白	長石・石英・黒色粒	
142	102		第10面		石製品 砥石	最大長 13.6	最大幅 8.5	最大厚 4.5	重さ：1104.7g。砂岩					
143	103		第10層	布留式期	土師器 壺	頸部径 (10.4)		残存5.9	内面頸部上位ハケメ。他摩滅が著しく調整不明。	内) 外) 断)	7.5YR6/4 7.5YR7/4 10YR7/3	にぶい橙 にぶい橙 にぶい黄橙	石英・長石・雲母	良好
144	103		第10層	布留式期	土師器 壺	(13)		残存5.0	剥離が著しく調整不明。	内) 外) 断)	5YR6/6 5YR6/6 N4/0	橙 橙 灰	長石・石英・黒色粒	良好
145	103		第10層	布留式期	土師器 鼓形器台			残存3.8	外面横方向のナデ。内面上位ナデ、下位ヘラケズリ。	内) 外) 断)	7.5YR7/4 10YR7/3 5Y7/1	にぶい橙 にぶい黄橙 灰白	長石・石英	良好
146	103		第10層	布留式期	土師器 高坏	(17.4)		残存5.6	外面ハケメがかすかに観察される。	内) 外) 断)	5YR5/6 7.5YR6/6 10YR8/3	明赤褐 橙 浅黄橙	石英・長石・黒色粒	良好
147	103		第10層	布留式期	土師器 高坏	(17)		残存5.6	外面端部ヨコナデ、他ナデ。内面ハケメ。	内) 外) 断)	10YR7/3 7.5YR6/4 7.5YR4/4	にぶい黄橙 にぶい橙 褐	石英・長石	良好
148	103		第10層	布留式期	土師器 小型器台	(10)		残存3.5	内面一部にヘラミガキが確認されるが、全体的に摩滅が著しく調整不明。	内) 外) 断)	10YR3/1 10YR5/1 7.5YR5/4	黒褐 褐灰 にぶい褐	密	良好
149	103		第10層	布留式期	土師器 手焙り形土器	最大長 (7.6)	最大幅 (3.8)	最大厚 (0.8)	内外面ともナデ。	内) 外) 断)	2.5Y8/2 7.5YR6/6 N3/0	灰白 橙 暗灰	石英・長石	良好
150	103		第10層	後期	弥生土器 甕もしくは鉢	(28)		残存5.0	外面口縁部が立ち上がる位置に工具痕。外面かすかにハケメが観察される。	内) 外) 断)	7.5YR6/4 7.5YR6/4 7.5YR5/6	にぶい橙 にぶい橙 明褐	石英・長石・赤色粒・雲母	良好
151	103		第10層	布留式期	土師器 小形丸底壺	(10.8)		残存3.7	口縁部内外面、外面肩部ハケメ。	内) 外) 断)	10YR7/3 10YR7/3 10YR7/2	にぶい黄橙 にぶい黄橙 にぶい黄橙	石英・長石・赤色粒	良好
152	103		第10層	6世紀前半	須恵器 坏身	(11.8)		残存3.4	内外面とも回転ナデ。外面縦方向沈線１条。ヘラ記号か？	内) 外) 断)	N7/0 N7/0 N7/0	灰白 灰白 灰白	石英・長石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
153	104		10b層	庄内式期	土師器 甕	(15)		残存3.0	内外面ともナデ。外面ナデの後沈線５条。吉備系。	内) 外) 断)	10YR7/2 10YR7/3 N4/0	にぶい黄褐 にぶい黄褐 灰	石英・長石・雲母	良好
154	104		10b層	庄内式期	土師器 甕	17.6		残存3.1	内外面ともヨコナデ。口縁端部つまみ上げ。	内) 外) 断)	10YR5/4 10YR6/3 10YR5/4	にぶい黄褐 にぶい黄橙 にぶい黄褐	石英・長石・角閃石・雲母	良好
155	104		10b層	布留式期	土師器 壺			残存3.4	内外面ともナデ。	内) 外) 断)	7.5YR7/3 7.5YR7/3 7.5YR7/3	にぶい橙 にぶい橙 にぶい橙	石英・長石・雲母	良好
156	104		10b層	布留式期	土師器 台付甕		4.9	残存3.0	外面煤付着。内外面とも摩滅が著しく調整不明。生駒山西麓産。	内) 外) 断)	5Y2/1 5Y4/1 5Y4/1	黒 灰 灰	石英・長石・角閃石	良好
157	105	35	第10～11層		石製品 勾玉	長さ 2.1	厚み 0.8	重さ 3.7g	穿孔　上径3.5㎜、下径2.0㎜。翡翠。	外)		薄緑白色		
158	108	34	第11面 367井戸	後期	弥生土器 壺	14.2		残存8.5	外面頸部縦方向ハケメ（9～10本/1cm）、肩部ヘラミガキ。内面頸部ヨコナデ、頸部から肩部への屈曲部横方向ヘラミガキ、肩部ハケメ。口縁端部円形浮紋。頸部下端貼付け突帯、突帯の下３本歯の波状紋。外面に縦方向弧状のヘラ記号１本あり。生駒山西麓産。	内) 外) 断)	10YR5/3 2.5Y5/2 2.5Y5/2	にぶい黄褐 暗灰黄 暗灰黄	石英・長石・角閃石・赤色粒	良好
159	108		第11面 367井戸	後期	弥生土器 壺	(12)		残存5.1	外面口縁部ナデ、肩部ヘラミガキ。内面口縁部ヘラミガキ、肩部ユビオサエ。粘土紐の継ぎ目明瞭。生駒山西麓産。	内) 外) 断)	2.5Y5/3 2.5Y6/2 2.5Y5/1	黄褐 灰黄 黄灰	長石・雲母・石英・角閃石	良好
160	108	34	第11面 367井戸	後期	弥生土器 長頸壺	14.9	4.2	24.1	外面頸部から体部上半ハケメ、体部下半ハケメの後板ナデ。内面頸部から体部上半ナデ、体部下半ハケメ、底部内面未調整。口縁端部に２条のヘラ描き沈線。生駒山西麓産。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 2.5Y5/2	暗灰黄 暗灰黄	長石・角閃石・石英	良好
161	108	34	第11面 367井戸	後期	弥生土器 壺	13.3		残存21.3	口縁端部内外面ともヨコナデ。外面口縁部・体部ともにハケメ（8～9本/1cm）。内面口縁部ハケメ、体部上半ナデ、下半ハケメ（7～9本/1cm）。外面肩部に横方向６条、縦方向２条の記号紋（ヘラ描き）。	内) 外) 断)	10YR6/4 10YR6/4 10YR6/4	にぶい黄橙 にぶい黄橙 にぶい黄橙	石英・長石・雲母	良好
162	108	34	第11面 367井戸	後期	弥生土器 壺	12.3	5	24.7	口縁端部・口縁部内面・頸部外面ハケメ。口縁部外面ハケメの後ナデ。体部内外面ともハケメ。外面に沈線12条のヘラ記号。	内) 外) 断)	7.5YR5/3 10YR5/3 5Y6/1	にぶい褐 にぶい黄褐 灰	石英・長石・角閃石・金雲母	良好
163	110	34	第11面 598井戸	後期	弥生土器 壺	14.3	2.6	24.6	口縁部内外面ともヨコナデ、外面摩滅が著しく調整不明、内面ナデ。粘土紐の継ぎ目明瞭。	内) 外) 断)	2.5Y5/1 2.5Y5/1 2.5Y5/1	黄灰 黄灰 黄灰	石英・長石・雲母	良好
164	110	34	第11面 598井戸	後期	弥生土器 小型壺	8	3.6	15.7	口縁端部ヨコナデ。外面頸部・体部上半ハケメ、下半ハケメの後ナデ。内面頸部上半ハケメの後ナデ、下半ハケメ、体部調整不明。底部外面ナデ。外面体部下半に黒斑。	内) 外) 断)	10YR5/4 10YR5/4 10YR4/2	にぶい黄褐 にぶい黄褐 灰黄褐	石英・長石・雲母	良好
165	110		第11面 598井戸	庄内式期	土師器 甕	(16)		残存3.8	口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面ハケメ。内面ヘラケズリ。生駒山西麓産。	内) 外) 断)	7.5YR7/6 10YR8/2 7.5YR8/4	橙 灰白 浅黄橙	長石・雲母・石英・角閃石	良好
166	113	34	第11面 612土坑	庄内式期	土師器 甕	12.3		12.2	口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面ハケメ（8～9本/1cm）。内面中央部ヘラケズリ、他ナデ。	内) 外) 断)	10YR7/2 10YR7/2 10YR6/2	にぶい黄橙 にぶい黄橙 灰黄褐	石英・長石・雲母	良好
167	115		第11面 347溝	後期	弥生土器 壺			残存3.3	竹管紋。波状紋。	内) 外) 断)	7.5YR5/4 7.5YR4/4 7.5YR4/3	にぶい褐 褐 褐	長石・石英・角閃石	良好
168	115		第11面 347溝	後期	弥生土器 壺			残存3.5	絵画紋か？	内) 外) 断)	5YR5/8 5YR5/9 5YR5/10	明赤 明赤 明赤	長石・石英・雲母	良好
169	116		第11面 599溝	後期	弥生土器 壺		5.4	残存4.1	外面板ナデ、内面ハケメ。	内) 外) 断)	10YR3/1 10YR4/2 7.5YR4/3	黒褐 灰黄かつ 褐	石英・長石・赤色粒・雲母	良好
170	117		第11面 603溝	後期	弥生土器 壺	(15)		残存4.6	外面ハケメ、内面ナデ。口縁端部凹線１条。生駒山西麓産。	内) 外) 断)	5YR6/6 5YR6/8 5YR6/6	橙 橙 橙	長石・雲母・石英・角閃石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 / 遺構 / 層	時期	種類 / 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考		色調		胎土	焼成
171	117		第11面 603溝	後期	弥生土器 壺	(15)		残存5.0	外面ハケメ、内面ナデ。口縁端部に円形浮紋１周。	内) 外) 断)	5YR5/8 5YR5/6 5YR5/8	明赤褐 明赤褐 明赤褐	長石・雲母・石英・角閃石	良好
172	117		第11面 603溝	後期	弥生土器 壺	(15)		残存4.1	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部内面ハケメ。	内) 外) 断)	5YR6/8 5YR6/6 5YR5/6	橙 橙 明赤褐	長石・雲母・石英	良好
173	117		第11面 603溝	後期	弥生土器 壺	(10)		残存3.4	内外面ともヨコナデ。上位にヘラ描き沈線１周。	内) 外) 断)	7.5YR5/8 7.5YR5/8 7.5YR5/8	明褐 明褐 明褐	長石・雲母	良好
174	117		第11面 603溝	後期	弥生土器 甕	(13)		残存5.8	口縁部外面ナデ、内面ハケメ。肩部外面タタキ、内面ヘラケズリ。生駒山西麓産。	内) 外) 断)	7.5YR5/4 7.5YR4/4 7.5YR4/3	にぶい褐 褐 褐	長石・石英・角閃石	良好
175	117		第11面 603溝	後期	弥生土器 甕	(16)		残存4.1	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部内面ヘラケズリ。口縁端部つまみ上げ。生駒山西麓産。	内) 外) 断)	10YR5/6 10YR5/6 10YR5/6	黄褐 黄褐 黄褐	長石・雲母・石英・角閃石	良好
176	117		第11面 603溝	庄内式期	土師器 甕	(17)		残存3.7	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部内面ヘラケズリ。生駒山西麓産。	内) 外) 断)	2.5Y6/3 2.5Y6/3 2.5Y6/3	にぶい黄 にぶい黄 にぶい黄	長石・雲母・角閃石	良好
177	117		第11面 603溝	後期	弥生土器 甕		5.4	残存5.4	外面タタキ、内面底部クモの巣状ハケメ。生駒山西麓産。	内) 外) 断)	7.5YR5/6 7.5YR5/6 7.5YR5/6	明褐 明褐 明褐	長石・雲母・石英・角閃石	良好
178	117		第11面 603溝	後期	弥生土器 甕		4.4	残存4.1	外面タタキ、内面ナデ。生駒山西麓産。	内) 外) 断)	10YR5/8 2.5YR5/8 10YR3/1	黄褐 明赤褐 黒褐	長石・雲母・石英・角閃石	良好
179	117		第11面 603溝	後期	弥生土器 高杯	(17)		残存3.7	外面ヘラミガキ、内面ナデ。生駒山西麓産。	内) 外) 断)	10YR5/4 10YR5/6 10YR5/6	にぶい黄褐 黄褐 黄褐	長石・雲母・石英・角閃石	良好
180	117	34	第11面 603溝	後期	弥生土器 台付甕		(10)	残存4.4	内外面ともハケメ。天井部内面に粘土紐の継ぎ目、ユビオサエ。生駒山西麓産。	内) 外) 断)	7.5YR6/6 7.5YR5/6 10YR3/1	橙 明褐 黒褐	長石・雲母・石英・角閃石	良好
181	117		第11面 603溝		石製品 砥石	最大長 5.4	最大幅 1.6	最大厚 1.0	粘板岩					
182	119		第11面 614溝	後期	弥生土器 甑		(3)	残存3.3	外面ハケメ、内面ナデ。底部焼成前穿孔。	内) 外) 断)	10YR8/2 10YR8/2 5Y4/1	灰白 灰白 灰白	長石・石英・雲母・チャート	良好
183	120		第11面 632溝	後期	弥生土器 壺	(19.6)		残存4.8	体部内外面ともハケメ。口縁端部内外面とも櫛状工具による列点紋１周。東海系。	内) 外) 断)	2.5Y7/1 7.5YR7/6 2.5Y7/1	灰白 橙 灰白	石英・長石・黒色粒・	良好
184	120		第11面 632溝	後期	弥生土器 甕	(15)		残存2.1	口縁端部内外面ともヨコナデ。内面剥離が著しく調整不明。外面口縁端部・頸部にヘラ状工具による左下がりの刺突紋１周。近江系。	内) 外) 断)	10YR5/2 10YR6/3 10YR5/2	灰黄褐 にぶい黄橙 灰黄褐	石英・長石・角閃石・赤色粒・雲母	良好
185	120		第11面 632溝	後期	弥生土器 鉢	(19)		残存6.8	口縁部内外面ともヨコナデ。外面ユビオサエ。内面剥離が著しく調整不明。	内) 外) 断)	5YR5/6 5YR5/6 5YR5/6	明赤褐 明赤褐 明赤褐	石英・長石	不良
186	120		第11面 632溝	後期	弥生土器 甕	(19)		残存4.0	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部内外面ともナデ。	内) 外) 断)	7.5YR5/6 7.5YR5/6 10YR5/2	明褐 明褐 灰黄褐	石英・長石	良好
187	127		 第11層	庄内式期	土師器 高杯	(21)		残存7.0	内外面ともハケメ。	内) 外) 断)	10YR5/2 10YR4/2 5YR5/6	灰黄褐 灰黄褐 明赤褐	石英・長石	良好
188	130		第12-1面 637落ち込み	後期	弥生土器 壺	頸部径 8	最大部径 15	残存8.5	頸部外面ヨコナデ、体部外面ハケメ（8本/1㎝）。内面上位ハケメ、ユビオサエ、下位ヘラケズリ。	内) 外) 断)	10YR3/2 10YR4/2 7.5YR7/3	黒褐 灰黄褐 にぶい橙	石英・長石	良好
189	130	35	第12-1面 637落ち込み	後期	弥生土器 壺	頸部径 6.8	最大部径 18	残存14.8	頸部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラミガキ、内面ハケメ（7本/1㎝）。底部外面ナデ。	内) 外) 断)	 2.5Y7/2 	 灰黄 	石英・長石・角閃石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
190	130		第12-1面 637落ち込み	後期	弥生土器 甕	20		残存7.2	口縁部内外面ともヨコナデ。外面タタキ（2本/1cm）。内面上位ユビオサエ、下位板ナデ。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 7.5Y2/1 10YR4/3	灰黄 黒 にぶい黄褐	石英・長石・角閃石	良好
191	130		第12-1面 637落ち込み	後期	弥生土器 甕	15.4		残存12.7	口縁部内外面ともヨコナデ。外面タタキ（3～4本/1cm）の後ハケメ。内面板ナデ。	内） 外） 断）	10YR8/2 2.5Y7/1 2.5Y7/1	灰白 灰白 灰白	石英・長石	良好
192	130		第12-1面 637落ち込み	後期	弥生土器 甕	14.8		残存6.0	口縁部内外面ともヨコナデ。外面タタキ（2本/1cm）の後ハケメ（8本/１cm）、内面ハケメ（10～11本/１cm）。	内） 外） 断）	10YR7/3 10YR6/3 10YR7/1	にぶい黄橙 にぶい黄橙 灰白	石英・長石・角閃石・雲母	良好
193	130		第12-1面 637落ち込み	後期	弥生土器 甕		3.4	残存7.6	外面ユビオサエ、粘土紐の接合痕。内面ハケメ（7～9本/１cm）。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 5Y6/1 10YR3/4	灰黄 灰 暗褐	石英・長石・角閃石・雲母	良好
194	130	35	第12-1面 638落ち込み	後期	弥生土器 壺	15		残存10.0	口縁端部内外面ともヨコナデ。体部外面ハケメ（7本/1cm）、内面ユビオサエ。	内） 外） 断）	5YR5/6 5YR6/6 7.5YR7/4	明赤褐 橙 にぶい橙	石英・長石・角閃石	良好
195	130		第12-1面 638落ち込み	後期	弥生土器 甕	16		残存7.1	口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面タタキ（2～3本/1cm）、内面ハケメ（6本/1cm）。	内） 外） 断）	10YR4/1 10YR7/3 7.5YR5/4	褐灰 にぶい黄橙 にぶい褐	石英・長石・雲母	良好
196	130		第12-1面 638落ち込み	後期	弥生土器 甕	14		残存7.2	口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面タタキ（2本/1cm）、内面ナデ。	内） 外） 断）	7.5YR4/2 7.5YR4/3 7.5YR4/3	灰褐 褐 褐	石英・長石・角閃石・雲母	良好
197	130	35	第12-1面 638落ち込み	後期	弥生土器 甕	15	4.2	15.2	口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面タタキ（2～3本/1cm）、内面ハケメ（5本/1cm）。	内） 外） 断）	10YR4/1 5YR5/6 10YR4/1	褐灰 明赤褐 褐灰	石英・長石	良好
198	130		第12-1面 638落ち込み	後期	弥生土器 甕		5.5	残存19.0	口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面タタキ（2～3本/1cm）の後ハケメ（8本/1cm）、内面ハケメ（7本/1cm）。体部粘土紐の接合痕。	内） 外） 断）	10YR4/1 10YR7/3 7.5YR5/4	褐灰 にぶい黄橙 にぶい褐	石英・長石・雲母	良好
199	134	36	第13 - 1面 658高まり内	弥生中期後葉	石製品 石庖丁	最大長 19.4	最大幅 5.7	最大厚 0.9	重さ：145.6ｇ。結晶片岩					
200	134		第13 - 1面 658高まり内	弥生中期後葉	石製品 石庖丁	最大長 11.8	最大幅 3.7	最大厚 0.8	重さ：46.9ｇ。緑泥片岩					
201	135	36	第13－1面 658高まり内	弥生中期？	石製品 石棒	最大長 10.0	最大幅 4.3	最大厚 2.5	重さ：142.5ｇ。結晶片岩					
202	137	35	第13－1面 663高まり上	中期後葉	弥生土器 鉢	18	5.5	9.5	口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面ヘラミガキ、内面ハケメ（10～11本/1cm）の後暗文状ヘラミガキ。底部外面ヘラミガキ。	内） 外） 断）	10YR3/1 7.5YR5/2	黒褐 灰褐	石英・長石・角閃石	良好
203	139	35	第13－1面 665溝	中期後葉	弥生土器 無頸壺	11.2		残存5.9	口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面摩耗のため調整不明、交互に櫛描き波状紋と直線紋。内面上位ユビオサエの後ナデ、下位ハケメの後ナデ。	内） 外） 断）	2.5Y7/2	灰黄	石英・長石・角閃石・赤色粒	良好
204	139		第13－1面 665溝	中期後葉	弥生土器 壺（底部）		4.0	残存2.9	内外面ともハケメ、底部外面板ナデ。	内） 外） 断）	2.5Y76/2	灰黄	石英・長石・雲母	良好
205	139		第13－1面 665溝	弥生中期？	石製品 刃器	最大長 12.1	最大幅 4.4	最大厚 1.2	重さ：118.3ｇ。サヌカイト	外） 断）	5PB4/1	暗青灰		
206	139	36	第13－1面 665溝	弥生中期？	石製品 刃器	最大長 9.4	最大幅 3.1	最大厚 1.0	重さ：32.4ｇ。サヌカイト	内） 外） 断）	N3/0	暗灰		
207	142	35	第13－1面 646流路	中期後葉	弥生土器 長頸壺	25		残存6.9	口縁部内外面ともヨコナデ。口縁上端部櫛描き直線紋３条、下端部刻み目。頸部外面ハケメ（7本/1cm）、内面ユビオサエ。	内） 外） 断）	7.5YR5/4 7.5YR6/4 N4/0	にぶい褐 にぶい橙 灰	石英・長石・雲母	良好
208	142		第13－1面 646流路	中期後葉	弥生土器 壺（底部）		7.4	残存4.9	外面板ナデ、内面ハケメ（8本/1cm）。底部外面板ナデ。	内） 外） 断）	5Y3/1 10YR6/2 10YR6/2	オリーブ黒 灰黄褐 灰黄褐	石英・長石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
209	142		第13－1面 646流路	中期後葉	弥生土器 甕	17.8		残存8.9	口縁部内外面ともヨコナデ。端部刻み目。頸部外面ユビオサエ。体部内外面ともユビオサエの後板ナデ。	内） 外） 断）	10YR3/4 10YR5/2 10YR5/2	暗褐 灰黄褐 灰黄褐	石英・長石・角閃石・雲母	良好
210	143		第１３－1層 687溝上付近	前期	弥生土器 壺（底部）		9	残存6.3	内外面ともハケメ（5本/1㎝）。底部外面ヨコナデ。	内） 外） 断）	2.5Y3/1 10YR6/3 2.5Y6/3	黒褐 にぶい黄橙 にぶい黄	長石・石英・雲母	良好
211	143		第13－1層 688溝上付近	前期	弥生土器 鉢	(21)		残存6.1	口縁部ヨコナデ、端部刻み目。内外面ともハケメ（5本/1㎝）。	内） 外） 断）	10YR5/3 10YR5/3 10YR5/3	にぶい黄褐 にぶい黄褐 にぶい黄褐	長石・雲母・角閃石	良好
212	143		第13－1層 687溝付近	弥生前期	石製品 打欠石器	最大長 7.6	最大幅 8.25	最大厚 1.85	重さ182.5ｇ。花崗岩。打欠き２箇所。					
213	148		第13 - 2面 687溝	中期後葉	弥生土器 壺（体部）			残存3.0	外面ヘラミガキ、櫛描き直線紋。内面ナデ。	内） 外） 断）	10YR6/4 10YR5/4 5GY6/1	にぶい黄橙 にぶい黄褐 オリーブ灰	長石・石英・角閃石・雲母	良好
214	148		第13－2面 687･709溝	前期	弥生土器 広口壺	(27.1)		残存6.4	口縁端部ヨコナデ。内外面ともヘラミガキ。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 7.5YR5/4 2.5Y3/1	灰黄 にぶい褐 黒褐	長石・雲母	良好
215	148		第13－2面 687･709溝	中期後葉	弥生土器 壺（底部）		11.2	残存7.5	内外面ともハケメ、底部外面未調整。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 10YR6/4 5Y7/1	灰黄 にぶい黄橙 灰白	長石・雲母・石英・角閃石	良好
216	148		第13－2面 687･709溝	前期	弥生土器 壺蓋		13.7	残存1.8	口縁端部ヨコナデ、内外面ともヘラミガキ。ヘラ描き直線紋４条。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 2.5Y6/2 2.5Y6/2	灰黄 灰黄 灰黄	長石・雲母・石英・角閃石	良好
217	148		第13－2面 687･709溝	前期	弥生土器 甕	(19.6)		残存3.2	口縁部ヨコナデ、下端部刻み目。外面ハケメ、ヘラ描き沈線４条。内面剥離のため調整不明。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 2.5Y5/1 2.5Y6/2	灰黄 黄灰 灰黄	長石・雲母・角閃石	良好
218	148		第13－2面 687･709溝	前期	弥生土器 甕	(22.6)		残存5.7	口縁部ヨコナデ。内面上位板ナデ、内外面ともハケメ。外面ヘラ描き沈線３条、沈線間に竹管紋。	内） 外） 断）	7.5YR5/4 5Y5/1 5Y6/1	にぶい褐 灰 灰	長石・石英･雲母・角閃石	良好
219	148		第13－2面 687･709溝	前期	弥生土器 甕	(25.4)		残存6.5	口縁部ヨコナデ、端部刻み目。外面ハケメ、ヘラ描き沈線３条。内面上位ハケメ、下位ナデ。	内） 外） 断）	10YR5/2	灰黄褐	長石・石英･角閃石・赤色粒	良好
220	148		第13－2面 687･709溝	前期	弥生土器 鉢	(39)		残存6.2	口縁部ヨコナデ、内外面ともヘラミガキ。	内） 外） 断）	10YR2/1 10YR6/3	黒 にぶい黄橙	長石・雲母	良好
221	148		第13－2面 687溝	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 12.6	最大幅 6.2	最大厚 2.1	重さ：219.3ｇ。結晶片岩。打欠き２箇所。					
222	148		第13－2面 687溝	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 6.4	最大幅 9.3	最大厚 2.6	重さ：236.5ｇ。花崗岩。打欠き２箇所。					
223	148		第13－2面 688溝	中期後葉	弥生土器 壺（底部）		5.7	残存4.4	内外面ともヘラミガキ。	内） 外） 断）	10YR5/3 10YR6/4	にぶい黄褐 にぶい黄橙	長石・雲母・石英・角閃石	良好
224	148		第13－2面 688溝	中期後葉	弥生土器 壺（底部）		8.5	残存6.2	内外面ともヘラミガキ。底部外面未調整。	内） 外） 断）	10YR6/3 2.5Y6/2 5Y6/2	にぶい黄橙 灰黄 灰オリーブ	長石・石英･雲母・角閃石	良好
225	148		第13－2面 688溝	前期	弥生土器 鉢	(25.6)		残存4.4	口縁部ヨコナデ、端部ヘラ描き沈線１条。内外面ともヘラミガキ。	内） 外） 断）	7.5YR4/3 10YR6/4 5YR6/4	褐 にぶい橙 にぶい橙	長石・雲母	良好
226	148		第13-2面 698石錘出土地点	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 9.7	最大幅 5.5	最大厚 1.5	重さ：126ｇ。結晶片岩。					
227	149		 第13-2層	中期中葉	弥生土器 壺（体部）			残存2.8	外面ヘラミガキ、櫛描き直線紋３条以上、波状紋５条。内面ナデ。	内） 外） 断）	5YR5/4 10YR3/1 10YR5/2	にぶい赤褐 黒褐 灰黄褐	長石・石英・角閃石・雲母	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
228	149			中期 中葉	弥生土器 壺（体部）			残存7.6	内外面とも摩耗により調整不明。外面櫛描き直線紋７条と波状紋６条を交互に配置。	内） 外） 断）	10YR4/1 2.5YR4/4 7.5YR5/3	褐灰 にぶい赤褐 にぶい褐	石英・長石・角閃石・赤色粒・雲母	良好
229	149		第13-2層	前期	弥生土器 壺蓋	つまみ径 0.2		残存2.2	つまみ部ナデ、ユビオサエ。内外面ともヘラミガキ。	内） 外） 断）	2.5Y6/1 7.5YR5/4 2.5Y7/1～6/1	黄灰 にぶい褐 灰白～黄灰	長石・黒色礫・雲母	良好
230	149		第13-2層	前期	弥生土器 壺蓋		14.2	残存2.6	内外面ともヘラミガキ。ヘラ描き沈線重弧紋、直線紋。	内） 外） 断）	2.5Y7/3　5YR6/6 2.5Y7/3　5YR6/6 10YR6/1	浅黄　橙 浅黄　橙 褐灰	長石・石英・雲母	良好
231	149		第13-2層	前期	弥生土器 甕蓋	つまみ径 (7.4)		残存6.3	つまみ端部ナデ。内外面ともヘラミガキ。内面上位ユビオサエ。	内） 外） 断）	10YR5/1 10YR6/4 2.5Y7/1	褐灰 にぶい黄橙 灰白	長石・雲母	良好
232	149		第13-2層	前期	弥生土器 甕	22.4	7.0	26.4	口縁端部ヨコナデ。外面上位剥離のため調整不明、下位板ナデ。内面上位ハケメ、下位ヘラミガキ、底部外面ナデ。	内） 外） 断）	 2.5Y4/1 	 黄灰 	石英・長石・雲母	良好
233	149		第13-2層	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 8.9	最大幅 4.8	最大厚 2.1	重さ：150ｇ。安山岩。打欠き２箇所。					
234	151		第14面	中期 前葉	弥生土器 甕	(21.8)	6.6	残存 24.3	口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面ハケメ。内面上位ハケメ、下位剥離著しい。	内） 外） 断）	2.5Y4/1 2.5Y4/1 	黄橙 黄橙 	長石・石英・角閃石	良好
235	151		第14面 716溝	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 5.2	最大幅 9.2	最大厚 1.1	重さ：88.4ｇ。結晶片岩。打欠き２箇所。					
236	151		第14面 723溝	前期	弥生土器 壺	(21.2)		残存3.1	口縁端部ヨコナデ。外面ハケナデ、内面ヘラミガキ。	内） 外） 断）	10YR5/4 10YR5/4 5Y7/3	にぶい黄褐 にぶい黄褐 浅黄	長石・雲母・石英・角閃石	良好
237	151		第14面 723溝	前期	弥生土器 甕	(17)		残存5.4	口縁端部ヨコナデ、端部外面刻み目。内外面ともハケメ、ユビオサエ。	内） 外） 断）	10YR6/3 10YR5/1 2.5Y5/1	にぶい黄橙 褐灰 黄灰	長石・石英・雲母・角閃石	良好
238	151		第14面 721溝	前期	弥生土器 壺（底部）		6.2	残存4.3	外面ハケメの後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。底部外面ナデ一部ヘラミガキ。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 2.5Y6/2 2.5Y6/2	灰黄 灰黄 灰黄	長石・石英・雲母・角閃石	良好
239	151		第14面 721溝	前期	弥生土器 壺（底部）		7.4	残存5.2	外面ヘラミガキ、内面ハケメ。底部外面未調整。	内） 外） 断）	5Y6/1 5YR6/6 5Y6/1	灰 橙 灰	長石・石英・雲母	良好
240	151		第14面 721溝	前期	弥生土器 甕	(18)		残存4.1	口縁端部ヨコナデ、端部外面刻み目。内外面ともハケメ。沈線４条。	内） 外） 断）	10YR6/4 2.5Y6/3 2.5Y6/1	にぶい黄橙 にぶい黄 黄灰	長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
241	151		第14面 721溝	弥生中期前葉	石製品 石庖丁	最大長 7.9	最大幅 5.7	最大厚 0.8	重さ：42.6ｇ。緑泥片岩					
242	153	38	第14面 717溝	中期 前葉	弥生土器 鉢	２１．０		残存5.2	口縁端部ヨコナデ。内面ユビオサエの後ナデ、外面櫛描き直線紋（７条４連）。	内） 外） 断）	10YR5/3 	にぶい黄褐 	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
243	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 壺蓋		9.4	2.7	口縁端部ヨコナデ。内外面ともヘラミガキ。つまみ部ナデ、穿孔１箇所（径6㎜）。	内） 外） 断）	5Y2/1 5Y3/1 5Y5/1	黒 オリーブ黒 灰	石英・長石・雲母・角閃石	良好
244	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 壺蓋		10.2	1.8	外面摩滅により調整不明。内面ハケメの後ヘラミガキ。穿孔１箇所（径5㎜）。	内） 外） 断）	10YR6/3 	にぶい黄橙 	石英・長石・雲母・角閃石	良好
245	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 壺蓋		10.8	2.6	内外面ともヘラミガキ。つまみ部ナデ。穿孔１箇所（径4㎜）。	内） 外） 断）	10YR5/2 10YR4/1 10YR5/2	灰黄褐 褐灰 灰黄褐	石英・長石・角閃石	良好
246	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 壺蓋		10.5	2.75	口縁端部ヨコナデ。内外面ともヘラミガキ。穿孔１箇所（径6㎜）。	内） 外） 断）	2.5Y７/2 5Y3/1	灰黄 オリーブ黒	石英・長石・角閃石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
247	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 壺蓋		10.0	1.2	内外面ともヘラミガキ。つまみ部ナデ。外面に放射状にヘラ描き沈線。穿孔１箇所（径4㎜）。	内) 外) 断)	2.5Y6/1 10YR4/2	黄灰 灰黄褐	石英・長石・角閃石	良好
248	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 ミニチュア壺	8.0		残存2.35	口縁端部、外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ。頸部外面ヘラ描き沈線１条。	内) 外) 断)	10YR4/2	灰黄褐	石英・長石・角閃石	良好
249	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 壺		14.0	残存6.05	内外面ともヘラミガキ。口縁端部ヘラ描き沈線１条。頸部外面削り出し突帯。	内) 外) 断)	2.5Y4/1 7.5YR5/4	黄灰 にぶい褐	石英・長石	良好
250	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 壺	17.1		残存10.4	内外面ともヘラミガキ。口縁部下位に穿孔１箇所（径3㎜）。頸部外面削り出し突帯４条。	内) 外) 断)	10YR6/2 10YR6/3 2.5Y6/2	灰黄褐 にぶい黄橙 灰黄	長石・角閃石	良好
251	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 壺	14.4		残存15.1	口縁部内外面ともヘラミガキ。外面ヘラミガキ。肩部に重弧紋、頸部と体部上半にヘラ描き沈線（各３条）。内面上位ユビオサエ、下位ナデ。	内) 外) 断)	5YR5/6 2.5Y6/2	明赤褐 灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
252	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 壺	24.4		残存6.1	口縁端部ヨコナデ。外面ヘラミガキ。頸部ヘラ描き沈線１条。内面上位ヘラミガキ、下位は剥離ため調整不明。	内) 外) 断)	2.5Y7/1	灰白	石英・長石・雲母	良好
253	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 壺	50		残存9.5	内外面ともヘラミガキ。口縁端部ヘラ描き沈線１条。頸部外面削り出し突帯。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR6/3 2.5Y6/1	にぶい黄褐 にぶい黄橙 黄灰	石英・長石・雲母・赤色粒	良好
254	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 壺（底部）		6.4	残存5.65	底部外面ヘラミガキ、底端部ナデ。体部内外面ともヘラミガキ。	内) 外) 断)	10YR6/4 2.5Y6/2	にぶい黄橙 灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
255	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 甕蓋	つまみ径 6.6		残存5.4	外面剥離のため調整不明。内面ヘラミガキ。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 10YR3/3	暗灰黄 暗褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
256	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 甕蓋	つまみ径 7.2	25.0	6.65	天井部未調整、口縁部ヨコナデ、外面板ナデ。内面上位ナデ、ユビオサエ、下位板ナデ。	内) 外) 断)	10YR6/3 10YR6/3 10YR6/2	にぶい黄橙 にぶい黄橙 灰黄褐	角閃石・長石・雲母	良好
257	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 甕	(22.2)		残存15.3	口縁端部ヨコナデ、刻み目。外面縦方向の板ナデ。内面横方向の板ナデ。頸部外面ヘラ描き沈線３条。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 2.5Y5/2 2.5Y5/2	暗灰黄 暗灰黄 暗灰黄	長石・雲母・角閃石・チャート	良好
258	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 甕	24	7.3	33以上	口縁端部ヨコナデ、刻み目。外面ハケメ（上位1㎝/8本　下位1㎝/6本）。内面板ナデ、底部内面ユビオサエの後板ナデ。体部外面ヘラ描き沈線４条。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR5/4 2.5Y6/2	にぶい黄褐 にぶい黄褐 灰黄	石英・長石・角閃石・赤色粒	良好
259	153		第14面 717溝	前期	弥生土器 鉢	19.6		残存7.2	口縁端部ヨコナデ。内外面ともヘラミガキ。	内) 外) 断)	2.5Y6/1	黄灰	石英・長石・雲母・角閃石	良好
260	154		第14面 717溝	弥生中期前葉	石製品 石庖丁	最大長 5.1	最大幅 4.1	最大厚 0.4	重さ：18.3ｇ。粘板岩					
261	156		第14面 691流路	前期	弥生土器 甕	23		残存6.2	口縁部ハケメ（10本/1㎝）、端部刻み目。外面ハケメ（10本/1㎝）、内面板ナデ。体部外面ヘラ描き沈線７条。	内) 外) 断)	10YR5/2 10YR3/1 10YR5/2	灰黄褐 黒褐 灰黄褐	石英・長石・角閃石	良好
262	157	38	第14層 717溝西肩盛土中	前期	弥生土器 ミニチュア壺	7.6		8.3	口縁端部ヨコナデ。外面ヘラミガキ、削り出し突帯頸部１条、体部上位２条、体部下半から底部にかけて焼成前穿孔２箇所。内面上位ヘラミガキ、下位ナデ、底部ユビオサエ。	内) 外) 断)	10YR5/4	にぶい黄褐	長石・角閃石・雲母	良好
263	157	38	第14層 717溝西肩盛土中	前期	弥生土器 ミニチュア甕蓋	つまみ径 2.4	7.2	4.3	内外面ともナデ。	内) 外上) 外下)	10YR4/2 N2/0 10YR5/3	灰黄褐 黒 にぶい黄褐	石英・長石・角閃石・雲母	良好
264	157		第14層 717溝西肩盛土中	前期	弥生土器 壺（底部）		6.8	残存4.0	内外面ともナデ。外面下位ヘラ描き沈線２～３条。	内) 外) 断)	5YR6/4 10YR6/3	にぶい橙 にぶい黄橙	石英・長石・雲母	良好
265	158		第14層	前期	弥生土器 壺（頸部）			残存6.7	内外面ともヘラミガキ。断面三角形の突帯２条。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR5/3 2.5Y6/1	にぶい黄褐 にぶい黄褐 黄灰	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒	やや軟

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
266	158		第14層	前期	弥生土器 脚付壺		5.7	残存4.1	外面ハケメの後ナデ。内面・底部ともにナデ。	内) 外) 断)	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒	良好
267	158		第14層	前期	弥生土器 壺（底部）		7.4	残存4.5	外面ナデ、下位ヘラ描き沈線２条。内面ヘラミガキ。	内) 外) 断)	10YR5/4 10YR5/3	にぶい黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・角閃石・雲母	良好
268	158		第14層	前期	弥生土器 壺（体部）			残存2.2	外面ヘラミガキ、内面板ナデ。有軸X木葉紋。	内) 外) 断)	2.5Y4/2 2.5Y3/1	暗灰黄 黒褐	長石・雲母・石英・角閃石	良好
269	158		第14層	前期	弥生土器 壺（体部）			残存2.6	内外面ともヘラミガキ。有軸X木葉紋もしくは平行斜線紋。	内) 外) 断)	7.5YR5/4 10YR5/3	にぶい褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母	良好
270	158		第14層	前期	弥生土器 壺（体部）			残存4.0	外面ヘラミガキ。内面上位ヘラミガキ、下位板ナデ。上向重弧紋。	内) 外) 断)	10YR4/2	灰黄褐	石英・長石・雲母	良好
271	158		第14層	前期	弥生土器 壺（体部）			残存3.0	外面ヘラミガキ、内面ハケメ。上向重弧紋。	内) 外) 断)	10YR4/2	灰黄褐	石英・長石・雲母	良好
272	158		第14層	前期	弥生土器 壺（体部）			残存4.4	外面ヘラミガキ、内面板ナデ。縦位ヘラ描き沈線、上向重弧紋。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR5/4	にぶい黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母	良好
273	158		第14層	前期	弥生土器 壺（体部）			残存4.2	内外面ともヘラミガキ。段上位に縦位ヘラ描き沈線３条、段下位にヘラ描き沈線２条。	内) 外) 断)	10YR5/4 10YR5/3	にぶい黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母	良好
274	158		第14層	前期	弥生土器 壺（体部）			残存5.9	外面ヘラミガキ。内面上位ヘラミガキ、下位板ナデ。竹管紋２列。	内) 外) 断)	2.5Y5/3 2.5Y5/2 2.5Y5/3	黄褐 暗灰黄 黄褐	長石・石英・角閃石	良好
275	158		第14層	前期	弥生土器 甕（体部）			残存6.7	内外面とも板ナデ。上位沈線３条、山形平行斜線紋３条。	内) 外) 断)	10YR5/3	にぶい黄褐	石英・長石・角閃石・雲母	良好
276	158		第14層	前期	弥生土器 甕			残存5.0	外面ヘラミガキ、内面板ナデ。上帯１条、下帯ヘラ描き沈線２条、沈線間に山形平行斜線紋３条。	内) 外) 断)	10YR5/2 10YR5/3 2.5Y6/1	灰黄褐 にぶい黄褐 黄灰	長石・石英・角閃石	良好
277	158		第14層	前期	弥生土器 甕			残存4.3	内外面とも板ナデ。ヘラ描き沈線２条、山形平行斜線紋３条。	内) 外) 断)	7.5YR5/4 7.5YR5/4 7.5YR5/4	にぶい褐 にぶい褐 にぶい褐	石英・長石・赤色粒	良好
278	158		第14層	前期	弥生土器 甕（体部）			残存4.8	内外面ともナデ。ヘラ描き直線紋５条、竹管紋、山形平行斜線紋３条。	内) 外) 断)	10YR5/2 2.5Y5/2	にぶい黄褐 暗灰黄	角閃石・長石・石英・雲母	良好
279	158		第14層	前期	弥生土器 甕			残存7.6	外面ハケメ、内面板ナデ。上位に沈線２条、下位に沈線４条。沈線間に山形平行斜線紋２条。	内) 外) 断)	10YR4/2 10YR2/1 5Y5/1	灰黄褐 黒 灰	石英・長石・雲母・角閃石	良好
280	158		第14層	前期	弥生土器 壺（体部）			残存4.7	内外面ともヘラミガキ。上位に沈線２条。沈線間に刺突紋、下位に上向重弧紋。	内) 外) 断)	5Y6/1 10YR7/2 10YR8/2	灰 にぶい黄橙 灰白	石英・長石	良好
281	158		第14層	前期	弥生土器 鉢	14.4		残存5.4	内外面ともナデ。口縁部刻み目２段。	内) 外) 断)	10YR5/1～5/2 5Y5/2	褐灰～灰黄褐　黒 灰オリーブ	長石・雲母	良好
282	158		第14層	縄紋晩期	縄紋土器 深鉢？ （突帯紋）			残存4.1	口縁部ヨコナデ。内面板ナデ。突帯に刻み目。	内) 外) 断)	10YR4/3 10YR4/1 10YR4/2	にぶい黄褐 褐灰 灰黄褐	長石・角閃石・雲母・赤色粒	良好
283	158		第14層	縄紋晩期	縄紋土器 深鉢？ （突帯紋）			残存3.7	口縁部ヨコナデ。外面調整不明。内面ナデか。突帯に刻み目。	内) 外) 断)	10YR4/3 10YR5/3 10YR4/1	にぶい黄褐 にぶい黄褐 褐灰	石英・長石・角閃石・雲母	やや軟
284	158		第14層	縄紋晩期	縄紋土器 深鉢？ （突帯紋）			残存3.4	口縁部ヨコナデ。内外面とも摩滅により調整不明。口縁端部と突帯に刻み目。	内) 外) 断)	10YR6/2 7.5YR6/4 10YR6/2	灰黄褐 にぶい橙 灰黄褐	長石・石英・赤色粒	やや軟

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
285	158		第14層	縄紋晩期	縄紋土器 深鉢？ （突帯紋）			残存4.8	口縁部ヨコナデ。外面摩滅により調整不明。 内面ヨコナデ。口縁端部と突帯に刻み目。	内） 外） 断）	10YR5/3 10YR4/1～7.5YR5/3 10YR5/2	にぶい黄褐 褐灰～にぶい褐 灰黄褐	石英・長石・角閃石・雲母	やや軟
286	158	38	第14層	弥生中期	土製品 管状土錘	最大長 5.75	最大幅 3.4	孔径 0.6	重さ：41.3ｇ。手づくね、ナデ。	内） 外） 断）	10YR5/2～5/3	灰黄褐～にぶい黄褐	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒	良好
287	158	38	第14層	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 8.7	最大幅 6.1	最大厚 2.2	重さ：182ｇ。花崗岩。打欠き４箇所。					
288	158	38	第14層	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 5.7	最大幅 7.7	最大厚 2.7	重さ：160.8ｇ。花崗岩。打欠き２箇所。					
289	158	38	第14層	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 7.35	最大幅 5.1	最大厚 1.75	重さ：116.5ｇ。花崗岩。打欠き４箇所。					
290	158	38	第14層	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 6.9	最大幅 6.5	最大厚 1.9	重さ：148.1ｇ。花崗岩。打欠き２箇所。					
291	158	38	第14層	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 6.6	最大幅 8.2	最大厚 2.2	重さ：203.4ｇ。花崗岩。打欠き２箇所。					
292	158	38	第14層	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 9.2	最大幅 6.4	最大厚 2.0	重さ：159.8ｇ。結晶片岩。打欠き３箇所。					
293	158	38	第14層	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 10.4	最大幅 5.2	最大厚 2.5	重さ：183.2ｇ。結晶片岩。打欠き２箇所。					
294	158	38	第14層	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 7.4	最大幅 5.7	最大厚 1.7	重さ：126.2ｇ。結晶片岩。打欠き２箇所。					
295	159	38	第14層	弥生前期	石製品 刃器	最大長 17.6	最大幅 11.5	最大厚 2.55	重さ：461.7ｇ。サヌカイト					
296	162		728溝	前期	弥生土器 壺	（16）		残存5.7	口縁端部ヨコナデ。外面ヘラミガキ、内面板ナデの後ヘラミガキ。	内） 外） 断）	10YR6/3 10YR6/3 10YR6/3	にぶい黄橙 にぶい黄橙 にぶい黄橙	石英･長石･雲母	良好
297	162	39	第15面 728溝	前期	弥生土器 甕（底部）		8.6	残存5.0	外面ヘラミガキ。底部外面及び内面ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	7.5YR5/4 7.5YR5/4 7.5YR5/4	にぶい褐 にぶい褐 にぶい褐	石英･長石･雲母･角閃石	良好
298	163	39	第15面 729溝	前期	弥生土器 甕	（23）		残存5.1	外面　口縁端部横方向のハケメ、端部下半刻み目。頸部に段、段以下板ナデ。 内面　口縁端部ヨコナデ、頸部以下板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y5/2 7.5YR5/3 2.5Y5/2	暗灰黄 にぶい褐 暗灰黄	長石・角閃石	良好
299	163	39	第15面 729溝	前期	弥生土器 壺（底部）		5.2	残存7.3	内外面ともにヘラミガキ。底部外面未調整。 生駒山西麓産胎土	内） 外） 断）	10YR5/3 10YR3/2 10YR3/2	にぶい黄褐 黒褐 黒褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
300	163	39	第15面 729溝		土製品 紡錘車	最大径 4.3	最大厚 0.9	孔径 0.5	ナデ。重さ：21.5g。	裏） 表） 断）	10YR4/2 10YR5/4	灰黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母	良好
301	164	39	第15面 730溝	前期	弥生土器 壺蓋	つまみ径 1.8	（13.2）	3.4	内外面ともにヘラミガキ。 口縁端部ヨコナデ。ツマミ部ナデ。中心に焼成前穿孔。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/2 10YR4/1 10YR5/2	灰黄褐 褐灰 灰黄褐	石英･長石･角閃石	良好
302	164		第15面 730溝	前期	弥生土器 甕	（20）		残存4.95	外面　口縁端部刻み目。口縁部から体部横方向のハケメ。ヘラ描き沈線３条。 内面　横方向のハケメ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y3/2 2.5Y3/2 2.5Y3/2	黒褐 黒褐 黒褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
303	164		第15面 730溝	前期	弥生土器 甕（底部）		（7.0）	5.0	外面　ナデ。 内面　剥離著しく調整不明。	内） 外） 断）	2.5Y2/1 7.5YR4/3 7.5YR4/3	黒 褐 褐	石英･長石･雲母	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
304	164		第15面 730溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 4.2	最大幅 3.9	孔径 1.1	手づくね、ナデ。重さ：50.7g。	外)	7.5YR5/4	にぶい褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
305	165	39	第15面 731溝	弥生前期	石製品 石匙	最大長 6.5	最大幅 5.6	最大厚 0.75	重さ：22.1ｇ。サヌカイト	外)	N3/0	暗灰		
306	166		第15面 732溝	前期	弥生土器 壺			残存7.8	外面　ヘラミガキ。体部上位に横方向のヘラ描き沈線３条、その下に縦方向のヘラ描き沈線６条。 内面　ナデ。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 2.5Y3/1 2.5Y5/3	暗灰黄 黒褐 黄褐	長石・石英	良好
307	166		第15面 732溝	前期	弥生土器 甕	(20.0)		残存6.0	口縁端部刻み目。 外面　ハケメ。煤付着。 内面　口縁部内面ハケメ、体部ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 10YR4/2 2.5Y4/1	暗灰黄 灰黄褐 黄灰	長石・角閃石	良好
308	166		第15面 732溝	前期	弥生土器 甕（底部）		(7.0)	残存 6.85	外面　底部外面ナデの後ヘラミガキ。 内面　ナデ。	内) 外) 断)	10YR3/1 10YR6/3 10YR3/1	黒褐 にぶい黄橙 黒褐	長石・雲母	良好
309	166		第15面 732溝	前期	弥生土器 鉢	(31.0)		残存7.7	外面　ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。 内面　ヨコナデの後ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	7.5YR5/4 10YR7/3 10YR7/3	にぶい褐 にぶい黄橙 にぶい黄橙	長石・雲母・角閃石・赤色礫	良好
310	166	39	第15面 732溝	弥生前期	土製品 紡錘車	最大径 5.5	最大厚 1.2	孔径 0.5	ユビオサエ、ナデ。重さ：42.5g。	裏) 表) 断)	10YR4/3 10YR5/4	にぶい黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・角閃石	良好
311	166		第15面 732溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.5	最大幅 2.7	孔径 0.7	手づくね、ナデ。重さ：35.6g。	外)	2.5Y5/2	暗灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
312	166		第15面 732溝	弥生前期	石製品 二次加工のある剥片	最大長 9.2	最大幅 6.6	最大厚 1.8	重さ：96.3g。サヌカイト					
313	167		第15面 750溝	前期	弥生土器 甕（底部）		(8.2)	残存7.1	外面　縦方向のハケメ。底部外面未調整。 内面　板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR5/4 2.5Y5/2	にぶい黄褐 にぶい黄褐 暗灰黄	石英・長石・角閃石・赤色粒	良好
314	167		第15面 750溝	前期	弥生土器 壺（底部）		(10.6)	残存5.2	外面　上位板ナデ、下位ヘラミガキ。 内面　ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y4/2 10YR5/3 5Y6/1	暗灰黄 にぶい黄褐 灰	石英・長石・角閃石	良好
315	168		第15面 772溝	前期	弥生土器 甕（底部）		7.2	残存8.0	外面　ハケメの後ナデ。底部外面に工具痕。 内面　ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR6/4 7.5YR5/3 10YR5/4	にぶい黄橙 にぶい褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
316	169	39	第15面 840溝	前期	弥生土器 壺蓋		(15.0)	残存 2.75	外面　ヘラミガキの後十字形に２条１単位のヘラ描き沈線。 内面　ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR4/2 10YR4/2 10YR4/2	灰黄 灰黄 灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
317	169	39	第15面 840溝	前期	弥生土器 壺	(16.0)		残存 10.0	外面　口縁部ヘラミガキ。頸部と肩部の境に２条の削り出し突帯。体部ナデの後ヘラミガキ。 内面　口縁部ヘラミガキ、体部ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR3/1 10YR3/1 10YR3/1	黒褐 黒褐 黒褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
318	169		第15面 840溝	前期	弥生土器 壺	(20.0)		残存 10.4	外面　口縁端部ヘラ描き沈線１条の後刻み目。口縁部ヘラミガキ。内から外へ焼成前穿孔の紐孔１箇所。頸部削り出し突帯２条。体部ヘラミガキ。 内面　ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR4/1 10YR4/1 10YR4/1	褐灰 褐灰 褐灰	石英・長石・雲母・角閃石	良好
319	169		第15面 840溝	前期	弥生土器 大型壺	(29.4)	7.5		外面　ハケメの後ヘラミガキ。口縁部に工具痕。 内面　口縁部ヨコナデ、体部ナデの後ヘラミガキ。底部付近板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	7.5YR6/4 5YR5/4 5YR64	にぶい橙 にぶい赤褐 にぶい橙	石英・長石・雲母・角閃石 黒色粒・赤色粒	良好
320	169		第15面 840溝	前期	弥生土器 甕	(25.0)		残存 15.5	外面　口縁端部刻み目。屈曲部にユビオサエ、体部ハケメの後ヘラミガキ。 内面　口縁部ヨコナデ、体部縦方向の板ナデ。	内) 外) 断)	2.5Y6/3 2.5Y2/1 2.5Y6/3	にぶい黄 黒 にぶい黄	石英・長石・雲母	良好
321	169		第15面 840溝	前期	弥生土器 甕(底部)		(7.6)	残存 12.5	内外面とも板ナデ。 底部に外から内へ焼成後穿孔。	内) 外) 断)	10YR5/3 7.5YR5/3 10YR5/3	にぶい黄褐 にぶい褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母・赤色粒	良好
322	169	39	第15面 840溝	前期	弥生土器 甕	(20.0)	8.0	19.6	外面　口縁部ヨコナデ、体部縦方向のハケメ。 内面　板ナデ、底部付近ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR6/2 10YR5/3	にぶい黄褐 灰黄褐 にぶい黄褐	長石・角閃石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考		色調		胎土	焼成
323	169		第15面 840溝	前期	弥生土器 鉢	(20.0)		残存7.0	外面　ヘラミガキ。ヘラ描き沈線５条と４条。 内面　口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y7/2 2.5Y3/2 2.5Y6/2	灰黄 黒褐 灰黄	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
324	170	39	第15面 842溝	前期	弥生土器 甕(底部)		6.6	5.8	外面　剥離著しく調整不明。 内面　板ナデ、底部ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/3 10YR5/4 10YR6/2	にぶい黄褐 にぶい黄褐 灰黄褐	石英・長石・角閃石	良好
325	170		第15面 842溝	弥生前期	石製品 石庖丁	最大長 (5.4)	最大幅 (2.7)	最大厚 (0.6)	重さ：16.0g。緑泥片岩					
326	171		第15面 848溝	前期	弥生土器 甕	(31.4)		残存6.0	外面　口縁部ヨコナデ、端部刻み目。体部ヘラ描き沈線３条。体部調整不明。 内面　口縁部ヨコナデ、体部板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y5/2 10YR4/1 5Y6/1	暗灰黄 褐灰 灰	石英・長石・角閃石	良好
327	172		第15面 856溝	前期	弥生土器 鉢	(24.4)		残存4.6	口縁部ヨコナデ、体部内外面ともにヘラミガキ。	内） 外） 断）	7.5YR5/4 7.5YR5/4 7.5YR5/4	にぶい褐 にぶい褐 にぶい褐	石英・長石・雲母	良好
328	172	39	第15面 856溝		石製品 刃器	最大長 5	最大幅 7.5	最大厚 (0.6)	重さ：25.3g。サヌカイト					
329	174		第15面 788炉	前期	弥生土器 甕（底部）		(10.0)	残存2.8	外面　摩滅著しく調整不明。底部板ナデ。 内面　板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	7.5YR6/4 7.5YR4/3 7.5YR6/4	にぶい橙 褐 にぶい橙	石英・長石・角閃石	良好
330	176		第15面 861炉	前期	弥生土器 甕（底部）		(7.6)	残存4.0	外面　縦方向のハケメ、底部外面ナデ。 内面　ナデの後ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y5/2 2.5Y5/2 2.5Y5/2	暗灰黄 暗灰黄 暗灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
331	178		第15面 872炉	前期	弥生土器 大型壺			残存 34.2	外面　ハケメの後ヘラミガキ。頸部に１条以上のヘラ描き沈線。体部にヘラ描き沈線３条。 内面　板ナデの後ヘラミガキ。ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR6/3 10YR6/2 10YR6/2	にぶい黄橙 灰黄褐 灰黄褐	長石・角閃石	良好
332	178		第15面 872炉	前期	弥生土器 甕	(19.4)		残存9.0	外面　粘土紐貼り付けによる段。口縁部ヨコナデ、体部ナデ。 内面　口縁部ヨコナデ、体部剥離著しく調整不明。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR4/2 10YR3/1 10YR4/2	灰黄褐 黒褐 灰黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
333	179		第15面 821土坑	前期	弥生土器 甕	(22.0)		残存 14.5	外面　口縁部ヨコナデ、端部刻み目。ヘラ描き沈線４条。体部縦方向のハケメ。 内面　口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	内） 外） 断）	10YR5/2 7.5YR4/3 10YR5/2	灰黄褐 褐 灰黄褐	石英・長石・雲母	良好
334	179		第15面 821土坑	前期	弥生土器 甕	(23.6)		残存 13.3	外面　口縁部ヨコナデ、体部縦方向のハケメ。 内面　口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	内） 外） 断）	10YR6/3 2.5Y3/1 10YR6/3	にぶい黄橙 黒褐 にぶい黄橙	石英・長石・雲母	良好
335	179	40	第15面 821土坑	前期	弥生土器 高坏			残存 10.5	内外面とも剥離が著しく調整不明。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 2.5Y6/2 2.5Y6/2	灰黄 灰黄 灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
336	180		第15面 853土坑	前期	弥生土器 甕	(21.0)		残存7.4	外面　口縁端部刻み目。口縁部ユビオサエ。横方向のハケメ。ヘラ描き沈線１条。 内面　口縁部ヨコナデ、体部板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/2 10YR4/2 10YR4/2	灰黄褐 灰黄褐 灰黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
337	180		第15面 853土坑	前期	弥生土器 鉢	(24.6)		残存8.5	口縁部にヨコナデの後ヘラミガキ。体部内外面ともにヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR6/3 10YR6/4 10YR6/3	にぶい黄橙 にぶい黄橙 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・角閃石	良好
338	182		第15面 816土坑	前期	弥生土器 甕	(19.8)		残存 13.0	外面　口縁部ヨコナデ、体部ハケメ。 内面　口縁部ヨコナデ、体部ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y5/3 10YR5/3 10YR6/2	黄褐 にぶい黄褐 灰黄褐	長石・雲母・角閃石	良好
339	182		第15面 816土坑	前期	弥生土器 鉢	(40.8)		残存 12.9	外面　口縁部ヨコナデ。ヘラ描き沈線３条。横方向のハケメ。 内面　ヘラミガキ。	内） 外） 断）	7.5YR5/4 10YR6/4 7.5YR5/4	にぶい褐 にぶい褐 にぶい褐	石英・長石・雲母・赤色粒	良好
340	182	40	第15面 816土坑	前期	弥生土器 壺（底部）		8.8	残存7.7	外面　ヘラミガキ。 内面　剥離著しく調整不明、ヘラミガキか?。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y4/1 10YR5/3 10YR5/3	黄灰 にぶい黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
341	185		第15面 803溝	前期	弥生土器 壺	(10.5)		残存5.8	外面　ヘラミガキ。頸部ヘラ描き沈線２条。体部のヘラミガキは不明瞭。 内面　口縁部ヘラミガキ、体部ナデ。	内） 外） 断）	10YR3/1 10YR4/1 5Y5/6	黒褐 灰白 オリーブ	石英・長石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
342	185		第15面 803溝	前期	弥生土器 壺蓋	つまみ径 2.15	(13.8)	4.45	外面　ハケメの後ヘラミガキ。つまみ部の中心に焼成前穿孔。 内面　ナデ、ユビオサエ多く残る。口縁部縁辺に沿って帯状の黒斑。	内) 外) 断)	10YR1.7/1 10YR8/3 10YR8/1	黒 浅黄橙 灰白	長石・赤色粒	良好
343	185	40	第15面 803溝	前期	弥生土器 壺蓋	つまみ径 1.6	11.55	4.0	外面　ヘラミガキ、つまみ部ナデ。中心に焼成前穿孔。 内面　ナデ。	内) 外) 断)	5YR5/8 2.5YR4/8 10YR6/1	明赤褐 赤褐 褐灰	石英・長石・雲母	良好
344	185		第15面 803溝	前期	弥生土器 壺蓋	つまみ径 1.25	(12.0)	3.8	内外面とも摩滅のため調整不明。中心に焼成前穿孔。	内) 外) 断)	7.5YR3/4 5YR6/6 5YR6/6	にぶい褐 橙 橙	石英・長石・赤色粒	良好
345	185		第15面 803溝	前期	弥生土器 壺蓋	つまみ径	(13.2)	残存2.5	内外面ともヘラミガキ。	内) 外) 断)	10YR3/4 10YR5/4 10YR6/1	暗褐 にぶい黄褐 褐灰	石英・長石・雲母・赤色粒	良好
346	185	40	第15面 803溝	前期	弥生土器 壺蓋	穿孔径 0.5	11.9	3.2	外面　板ナデ、つまみ部ユビオサエ。穿孔１箇所。 内面　板ナデ、ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	5YR4/4 7.5YR5/4	にぶい赤褐 にぶい褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
347	185	40	第15面 803溝	前期	弥生土器 ミニチュア壺蓋	つまみ径 2.15	5.4	2.7	外面　不整方向のナデ、端部ユビオサエ。外から内への穿孔。 内面　ヘラミガキ、端部ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR4/2 10YR5/3	灰黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
348	185		第15面 803溝	前期	弥生土器 壺	(10.6)		残存3.4	内外面とも摩滅のため調整不明。 頸部に３条以上のヘラ描き沈線。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y6/2 10YR6/3 2.5Y7/2	灰黄 にぶい黄橙 灰黄	長石・雲母・角閃石	やや不良
349	185	40	第15面 803溝	前期	弥生土器 壺	(15.8)		残存22.5	外面　ヘラミガキ。削り出し突帯、ヘラ描き沈線３条。焼成前穿孔の紐孔１箇所。 内面　ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR3/1 2.5Y2/1 10YR6/1	黒褐 黒 褐灰	長石・角閃石・赤色粒	良好
350	185	40	第15面 803溝	前期	弥生土器 壺	(16.0)		残存9.6	外面　口縁部ハケメの後ヘラミガキ。体部ヘラミガキの後貼り付け突帯。突帯上に刻み目。 内面　ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	5YR5/6 10YR5/4 7.5YR6/4	明赤褐 にぶい黄褐 にぶい橙	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
351	185		第15面 803溝	前期	弥生土器 壺	(17.8)		残存12.2	外面　口縁端部から体部までヘラミガキ。後削り出し突帯、突帯上にヘラ描き沈線４条。焼成前穿孔の紐孔１箇所。 内面　ヘラミガキ。	内) 外) 断)	2.5Y2/1 2.5Y2/1 2.5Y5/1	黒 黒 黄灰	石英・長石・雲母	良好
352	185		第15面 803溝	前期	弥生土器 壺	(16.0)		残存12.0	外面　ヘラミガキ。口縁部から頸部に段。肩部に削り出し突帯、突帯上にヘラ描き沈線２条。 内面　ヘラミガキ。	内) 外) 断)	2.5Y6/2 2.5Y5/2 5Y5/3	灰黄 暗灰黄 灰オリーブ	長石・雲母・赤色粒	良好
353	185		第15面 803溝	前期	弥生土器 壺	(21.2)		残存6.75	外面　口縁端部ヘラ描き沈線の後刻み目。紐孔２箇所、５条以上のヘラ描き沈線。 内外面摩滅のため調整不明。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR5/1 10YR5/4 10YR6/1	褐灰 にぶい黄褐 褐灰	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
354	185	40	第15面 803溝	前期	弥生土器 壺(底部)		7.5	残存10.3	外面　横方向のヘラミガキの後縦方向のヘラミガキ。 内面　ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 2.5Y5/3 2.5Y6/2	暗灰黄 黄褐 灰黄	長石・雲母・角閃石	良好
355	185		第15面 803溝	前期	弥生土器 壺(底部)		(7.6)	残存2.6	外面　ヘラミガキ。 内面　板ナデ。	内) 外) 断)	N1.5 1/1 10YR2/2 5Y6/1	黒 黒褐 灰	長石・雲母	良好
356	185		第15面 803溝	前期	弥生土器 壺(底部)		7.9	残存5.1	外面　ヘラミガキ。 内面　ヘラミガキ、底部横方向のハケメ。	内) 外) 断)	10YR6/2 10YR1.7/1 10YR6/1	灰黄褐 黒 褐灰	石英・雲母	良好
357	185	40	第15面 803溝	前期	弥生土器 ミニチュア壺	4.2	2.8	6.2	内外面ともナデ。頸部・体部にヘラ描き沈線２条。底部外面未調整。口縁部に内から外へ穿孔１箇所。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 2.5Y5/2 2.5Y5/2	暗灰黄 暗灰黄 暗灰黄	石英・長石・角閃石	良好
358	185		第15面 803溝	前期	弥生土器 ミニチュア壺		5.05	残存7.3	外面　ヘラミガキ。 内面　ナデ、底部にユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y6/1 10YR4/3 10YR7/2	黄灰 にぶい黄褐 にぶい黄橙	長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
359	185		第15面 803溝	前期	弥生土器 壺(底部)		9.2	残存9.1	外面　ヘラミガキ。 内面　ヘラミガキ、底部ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR5/2 10YR4/3 10YR5/2	灰黄褐 にぶい黄褐 灰黄褐	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
360	185		第15面 803溝	前期	弥生土器 大型壺	(39.6)		残存18.7	外面　口縁部ヨコナデ、体部横方向のヘラミガキの後、縦方向のヘラミガキ。 内面　摩滅のため不明瞭。横方向ヘラミガキか?。	内) 外) 断)	5YR6/8 7.5YR7/6 10YR4/4	橙 橙 褐	長石・石英・雲母	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
361	186	41	第15面 803溝	前期	弥生土器 大型壺	36.4	13.1	54.3	外面　体部下半横方向のハケメの後縦方向のヘラミガキ。他は横方向ヘラミガキ。頸部に削り出しによる段。ヘラ描き沈線２条を２帯。 内面　横方向のヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/4 7.5YR5/6 10YR8/1	にぶい黄褐 明褐 灰白	長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
362	186		第15面 803溝	前期	弥生土器 大型壺(底部)		12.3	残存28.0	内外面とも板ナデの後縦方向のヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y5/3 10YR4/6 10YR6/3	黄褐 褐 にぶい黄橙	長石・石英・雲母・角閃石	良好
363	187	41	第15面 803溝	前期	弥生土器 甕蓋	つまみ径 6.2		残存8.25	外面　縦方向ハケメの後ヘラミガキ。つまみ部にユビオサエ。 内面　横方向のハケメの後ヘラミガキ。	内） 外） 断）	7.5YR4/6 10YR6/4 10YR6/4	褐 にぶい黄橙 にぶい黄橙	長石・雲母・赤色粒	良好
364	187		第15面 803溝	前期	弥生土器 甕	21.0		残存8.7	外面　口縁部ヨコナデ、端部に刻み目。ヘラ描き沈線２条、体部ナデ。 内面　口縁部ヨコナデ、体部ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/3 10YR4/2 10YR5/4	にぶい黄褐 灰黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
365	187	41	第15面 803溝	前期	弥生土器 甕	18.1		残存12.1	外面　口縁部ヨコナデ、端部に刻み目。屈曲部にユビオサエ。ヘラ描き沈線５条１帯とヘラ描き沈線３条１帯。 内面　口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエの後板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y5/2 2.5Y2/1 2.5Y5/2	暗灰黄 黒 暗灰黄	長石・雲母・角閃石	良好
366	187	41	第15面 803溝	前期	弥生土器 甕	(22.8)		残存13.0	外面　口縁部ヨコナデ、一部縦方向ハケメ、端部刻み目。横方向のハケメの後ヘラ描き沈線２条。 内面　口縁部ヨコナデの後横方向のハケメ、体部横方向のヘラミガキ。煤付着。	内） 外） 断）	10YR8/2 10YR8/3 10YR8/3	灰白 浅黄橙 浅黄橙	石英・長石・雲母	やや不良
367	187	41	第15面 803溝	前期	弥生土器 小型甕	9.1	4.5	9.2	外面　口縁部ナデの後端部に刻み目。体部板ナデ、底部ヘラケズリ。 内面　口縁部ナデ、体部板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	7.5YR6/2 10YR3/1 2.5Y5/2	灰褐 黒褐 暗灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
368	187		第15面 803溝	前期	弥生土器 甕	(21.5)		残存13.9	内外面とも口縁部ヨコナデ。体部ナデ。内面口縁部から肩部ユビナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR6/3 10YR3/1 2.5Y7/2	にぶい黄橙 黒褐 灰黄	長石・角閃石・赤色粒	良好
369	187	41	第15面 803溝	前期	弥生土器 甕	19.6		残存12.3	内外面とも口縁部ヨコナデ、端部に刻み目。体部ナデ。体部にヘラ描き沈線４条。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR4/2 10YR3/3 10YR5/2	灰黄褐 暗褐 灰黄褐	長石・角閃石	良好
370	187		第15面 803溝	前期	弥生土器 甕	(17.0)		残存10.8	外面　口縁部ヨコナデ、端部刻み目。体部摩滅のため調整不明。 内面　口縁部ヨコナデ、体部板ナデの後ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR4/2 10YR4/2 2.5Y4/2	灰黄褐 灰黄褐 暗灰黄	長石・石英・角閃石	良好
371	187	41	第15面 803溝	前期	弥生土器 甕	(30.2)		残存8.6	外面　口縁端部刻み目、ヘラ描き沈線４条。体部縦方向のハケメ。 内面　口縁部横方向ハケメの後ヨコナデ、体部横方向ハケメの後ナデ。	内） 外） 断）	10YR6/3 5YR5/6 10YR6/3	にぶい黄橙 明赤褐 にぶい黄橙	長石・雲母・赤色粒	良好
372	187	41	第15面 803溝	前期	弥生土器 甕	(21.1)		残存18.0	外面　口縁部ヨコナデ、端部刻み目。ヘラ描き沈線４条、縦方向ハケメの後ナデ。外面煤付着。 内面　口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ、下半板ナデの後ヘラミガキ。	内） 外） 断）	10YR7/4 10YR5/4 10YR5/3	にぶい黄橙 にぶい黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母・赤色粒	良好
373	187	42	第15面 803溝	前期	弥生土器 甕		7.9	残存15.2	外面　板ナデ。 内面　コゲが大量に付着のため調整不明瞭。ナデか。	内） 外） 断）	10YR5/2 2.5Y4/1 10YR1.7/1	灰黄褐 黄灰 黒	長石・角閃石・赤色粒	良好
374	187	41	第15面 803溝	前期	弥生土器 甕		9.7	残存13.8	外面　縦方向ハケメ。 内面　板ナデ、底部ナデ。	内） 外） 断）	10YR1.7/1 10YR6/4 10YR6/4	黒 にぶい黄橙 褐灰	石英・長石・雲母・赤色粒	良好
375	187	42	第15面 803溝	前期	弥生土器 甕（底部）		5.7	残存2.4	外面　板状工具による調整。底部ナデ、底部窪み内ヘラケズリ。 内面　ヘラミガキ。	内） 外） 断）	10YR4/2 10YR6/3 10YR7/2	灰黄褐 にぶい黄橙 にぶい黄橙	石英・長石・雲母	良好
376	187	42	第15面 803溝	前期	弥生土器 甕（底部）		(7.9)	残存5.4	外面　板ナデ、底部ナデ。焼成後穿孔。 内面　摩滅のため調整不明。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y5/2 2.5Y5/2 2.5Y6/2	暗灰黄 暗灰黄 灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
377	187	42	第15面 803溝	前期	弥生土器 甕		8.7	残存15.1	外面　ナデ、ユビオサエ。モミの圧痕。 内面　板ナデ。底部ナデ。	内） 外） 断）	2.5YR5.8 10YR5/1 N1.5/1	明赤褐 褐灰 黒	石英・長石	良好
378	187	42	第15面 803溝	前期	弥生土器 甕		7.8	残存8.45	外面　ナデ、縦方向ハケメ。 内面　板ナデ、底部ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/3 10YR7/4 2.5Y5/4	にぶい黄褐 にぶい黄橙 黄褐	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 / 遺構 / 層	時期	種類 / 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
379	188	42	第15面 803溝	前期	弥生土器 鉢	35.2		残存 18.7	外面　口縁部ナデ、体部横方向のヘラミガキの後縦方向のヘラミガキ。 内面　横方向のヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y7/1 10YR4/4 2.5Y6/2	灰白 褐 灰黄	石英・長石・角閃石・赤色粒	良好
380	188	42	第15面 803溝	前期	弥生土器 鉢	(30.0)		残存 8.25	外面　屈曲部ユビオサエ。ヘラ描き沈線２条。横方向のヘラミガキ。 内面　口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/2 7.5YR4/2 7.5YR6/4	灰黄褐 灰褐 にぶい橙	長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
381	188		第15面 803溝	前期	弥生土器 鉢	(44.0)		残存 12.1	外面　口縁部ヨコナデ、体部横方向のヘラミガキの後縦方向のヘラミガキ。ヘラ描き沈線３条。 内面　横方向のヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/3 10YR5/3 2.5Y5/2	にぶい黄褐 にぶい黄褐 暗灰黄	長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
382	188	42	第15面 803溝	前期	弥生土器 鉢	43.0		残存 18.7	外面　口縁部ヨコナデ、ユビオサエ。ヘラ描き沈線２条。体部横方向ハケメの後横方向のヘラミガキ。 内面　横方向のヘラミガキ。黒斑。	内） 外） 断）	10YR6/3 10YR5/4 10YR7/6	にぶい黄橙 にぶい黄褐 明黄褐	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
383	188		第15面 803溝	前期	弥生土器 鉢	(43.8)		残存 19.0	外面　ヘラ描き沈線２条。横方向のハケメの後、体部のみ横方向のヘラミガキ。 内面　横方向のハケメの後横方向のヘラミガキ。	内） 外） 断）	10YR5/8 2.5Y4/4 2.5Y6/3	黄褐 オリーブ褐 にぶい黄	石英・長石・雲母	良好
390	191	43	第15面 803溝		石製品 石棒	残存長 9.5	最大幅 3.6	最大厚 2.7	重さ：126.2g。結晶片岩					
391	191	43	第15面 803溝		石製品 石錐	最大長 4.3	最大幅	最大厚 0.6	重さ：5.1g。サヌカイト					
392	191		第15面 803溝		石製品 打欠石錘	最大長 7.7	最大幅 8.5	最大厚 1.7	重さ：183.2g。花崗岩。打欠き３箇所。					
393	191		第15面 803溝		石製品 打欠石錘	最大長 6.85	最大幅 5.3	最大厚 1.85	重さ：66.2g。結晶片岩					
394	191	43	第15面 803溝		土製品 投弾	最大長 4.6	最大幅 3.5	最大厚 3.15	重さ：36.1g。	外）	2.5Y7/1	灰白	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	
395	191	43	第15面 803溝		土製品 投弾	最大長 4.2	最大幅 3.45	最大厚 3.3	重さ：37.8g。	外）	2.5Y6/2	灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	
396	196		第15面 864溝	中期	弥生土器 壺			残存4.7	外面　縦方向のハケメの後６条の櫛描き紋を２帯。 内面　縦方向のヘラミガキの後横方向のハケメ。	内） 外） 断）	10YR5/2 10YR5/2 1YR7/2	灰黄褐 灰黄褐 にぶい黄橙	石英・長石	良好
397	196	53	第15面 864溝	前期	弥生土器 壺	16.7		残存8.7	外面　横方向の板ナデの後ヘラミガキ、口縁端部ヨコナデ。紐孔１箇所。 内面　ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/2 7.5YR5/2 10YR5/2	灰黄褐 にぶい橙 灰黄褐	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
398	196	53	第15面 864溝	前期	弥生土器 壺	(19.0)		残存8.5	外面　口縁部から頸部ヘラミガキの後貼り付け突帯。突帯剥離痕の下にヘラ描き沈線１条。口縁端部刻み目の後ヘラ描き沈線。紐孔１箇所。 内面　口縁部に４段の竹管紋。頸部ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/3 7.5YR5/4 10YR7/3	にぶい黄褐 にぶい褐 にぶい黄橙	石英・長石・角閃石・赤色粒	良好
399	196		第15面 864溝	前期	弥生土器 壺	(20.4)		残存6.5	外面　ナデ。口縁部ヨコナデの後頸部に削り出し突帯。突帯上にヘラ描き沈線１条。紐孔１箇所。 内面　ナデ、口縁部ヨコナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	5Y2/1 5Y2/1 2.5Y5/2	黒 黒 暗灰黄	石英・長石・角閃石・チャート	良好
400	196	53	第15面 864溝	前期	弥生土器 壺	15.8		残存 10.8	外面　口縁端部ヨコナデ。口縁部以下ナデの後頸部に削り出し突帯。紐孔１箇所。 内面　口縁部ヨコナデ、頸部ユビオサエの後ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y3/1 2.5Y4/1 2.5Y4/1	黒褐 黄灰 黄灰	石英・長石・雲母・角閃石	良好
401	196		第15面 864溝	前期	弥生土器 壺		9.0	残存9.3	外面　ヘラミガキ、底部ナデ。 内面　ヘラミガキ。	内） 外） 断）	10YR6/2 7.5YR2/1 10YR6/2	灰黄褐 黒 灰黄褐	石英・長石・雲母	良好
402	196	53	第15面 864溝	前期	弥生土器 壺		8.0	残存 18.7	外面　ヘラミガキ、底部ナデ。 内面　板ナデの後ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y5/2 10YR6/4 10YR6/4	暗灰黄 にぶい黄橙 にぶい黄橙	石英・長石・角閃石・赤色粒	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 / 遺構 / 層	時期	種類 / 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
403	196		第15面 864溝	前期	弥生土器 甕蓋	つまみ径 5.2		残存 7.55	外面　つまみ部ユビオサエの後体部ヘラミガキ。 内面　つまみ部ユビオサエ、体部ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR6/2 10YR6/2 10YR6/2	灰黄褐 灰黄褐 灰黄褐	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
404	196	54	第15面 864溝	前期	弥生土器 甕	16.1	6.8	11.9	外面　剥離著しく調整不明。底部未調整。 内面　口縁部・底部剥離著しく調整不明。体部板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR5/2	にぶい黄褐 灰黄褐	石英・長石・角閃石	良好
405	196	54	第15面 864溝	前期	弥生土器 甕	13.5	6.0	14.65	外面　口縁部ヨコナデ、体部縦方向のハケメ。 内面　口縁部ヨコナデ、体部板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	7.5YR5/4 10YR4/2 7.5YR5/4	にぶい褐 灰黄褐 にぶい褐	石英・長石・角閃石・赤色粒	良好
406	196	53	第15面 864溝	前期	弥生土器 甕	18.6		残存 13.2	外面　口縁部ヨコナデ、端部刻み目。体部ナデ。屈曲部直下にヘラ描き沈線２条。 内面　口縁部ヨコナデ、体部ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y4/2 10YR3/1 2.5Y4/2	暗灰黄 黒褐 暗灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
407	196		第15面 864溝	前期	弥生土器 壺			残存 12.6	外面　ヘラミガキ。肩部にヘラ描き沈線３条。 内面　ナデの後横方向のヘラミガキ。肩部縦方向のヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y6/3 2.5Y3/1 2.5Y6/2	にぶい黄 黒褐 灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
408	196	54	第15面 864溝	前期	弥生土器 甕	18.4		9.85	外面　口縁部ヨコナデの後体部縦方向のハケメ。ヘラ描き沈線２条、口縁端部に刻み目。 内面　口縁部ヨコナデ、体部板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR4/2 10YR4/2 2.5Y5/1	灰黄褐 灰黄褐 黄灰	石英・長石・角閃石	良好
409	196	53	第15面 864溝	前期	弥生土器 甕	(43.0)		残存 10.45	外面　口縁部ヨコナデの後端部刻み目。肩部に４条のヘラ描き沈線を２帯、その間にヘラ描き沈線３条からなる山形紋。 内面　口縁部ヨコナデ、体部板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR6/3 10YR4/3 10YR6/3	にぶい黄橙 にぶい黄褐 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
410	196		第15面 864溝	前期	弥生土器 甕	(24.0)	8.0	20.8	外面　口縁部ヨコナデ後端部刻み目。ハケメの後ヘラ描き沈線４条。 内面　板ナデ、口縁部ヨコナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR6/3 10YR3/2 10YR6/3	にぶい黄橙 黒褐 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・角閃石	良好
411	196		第15面 864溝	前期	弥生土器 甕（底部）		7.0	残存6.1	外面　ヘラミガキ。 内面　ナデ。底部に焼成後外から内へ穿孔。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 2.5Y5/2 2.5Y5/2	暗灰黄 暗灰黄 暗灰黄	石英・長石・雲母	良好
412	196		第15面 864溝	前期	弥生土器 鉢	(28.0)		残存6.7	内外面ともヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR4/1 10YR5/2 10YR5/2	褐灰 灰黄褐 灰黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
413	196		第15面 864溝	前期	弥生土器 鉢	(40.2)		残存 13.0	外面　口縁部ヨコナデ。体部ヘラミガキの後口縁部直下にヘラ描き沈線３条。 内面　ヘラミガキ。	内) 外) 断)	10YR5/2 10YR4/2 10YR5/2	灰黄褐 灰黄褐 灰黄褐	清栄・長石・雲母	
414	196		第15面 864溝	前期	土製品 管状土錘	最大長 7	最大幅 3.5	孔径： 0.7	手づくね、ナデ。重さ：81.9ｇ。	内) 外) 断)	10YR5/3	にぶい黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
415	203		第15面 835溝	前期	弥生土器 壺蓋	つまみ径	12.2	3.0	外面　ナデの後ヘラミガキ、つまみ部ナデ。 内面　端部ヨコナデ、体部ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	5Y2/1 10YR6/3 10YR6/3	黒 にぶい黄橙 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・角閃石	良好
416	203		第15面 835溝	前期	弥生土器 小型壺蓋	つまみ径	8.8	2.3	外面　ヘラミガキ、つまみ部ナデ。紐孔２箇所。端部ヨコナデ。 内面　ナデの後ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	5Y3/1 2.5Y5/2 2.5Y5/2	オリーブ黒 暗灰黄 暗灰黄	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
417	203	43	第15面 835溝	前期	弥生土器 壺蓋	つまみ径	12.4	3.3	外面　ヘラミガキ、つまみ部ナデ。端部ヨコナデ。つまみ部付近に紐孔１箇所。 内面　ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y4/1 10YR4/2 2.5Y3/2	黄灰 灰黄褐 黒褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
418	203		第15面 835溝	前期	弥生土器 壺	(13.0)		残存 11.1	外面　口縁端部ヨコナデ。頸部剥離著しく調整不明。体部ヘラ描き沈線４条。口縁部に紐孔１箇所。 内面　口縁端部ヨコナデ、口頸部ヘラミガキ。肩部剥離著しく調整不明。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	7.5YR6/3 7.5YR5/4 7.5YR6/2	にぶい褐 にぶい褐 灰褐	石英・長石・角閃石・赤色粒	やや不良
419	203		第15面 835溝	前期	弥生土器 壺	(13.6)		残存 13.6	外面　摩滅著しい。体部ヘラ描き沈線４条。 内面　口頸部ヘラミガキ、体部ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5YR5/8 2.5YR6/8 2.5YR7/6	明赤褐 橙 橙	長石・角閃石・赤色粒	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
420	203	43	第15面 835溝	前期	弥生土器 壺	(22.6)		残存 20.9	外面　口縁部ヨコナデの後ヘラミガキ。頸部に２条、肩部に１条の貼り付け突帯、突帯上に刻み目。肩部にヘラ描き沈線４条。 内面　口縁部ヨコナデ、口頸部ヘラミガキ。肩部剥離著しく調整不明。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y6/3 10YR5/3 2.5Y6/3	オリーブ黄 にぶい黄褐 オリーブ黄	長石・雲母・角閃石	良好
421	203	43	第15面 835溝	前期	弥生土器 壺	(17.2)	(8.2)	復元 33.9	外面　口縁端部にヘラ描き沈線１条、頸部に削り出し突帯、突帯上にヘラ描き沈線２条。体部と肩部にヘラ描き沈線５条。縦方向の板ナデの後横方向のヘラミガキ。 内面　摩滅著しいが、口縁部に横方向のヘラミガキ、体部ユビオサエ、板ナデ。	内) 外) 断)	2.5Y7/3 10YR5/2 2.5Y7/3	浅黄 灰黄褐 浅黄	石英・長石・雲母・赤色粒・チャート	やや不良
422	203		第15面 835溝	前期	弥生土器 壺	(14.0)		残存 7.15	外面　剥離のため調整不明。頸部に削り出し突帯、突帯上にヘラ描き沈線２条。 内面　口縁部調整不明。頸部ナデ、ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 2.5Y5/2 2.5Y5/2	暗灰黄 暗灰黄 暗灰黄	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
423	203	43	第15面 835溝	前期	弥生土器 壺	17.4		残存 10.9	外面　口縁部ヨコナデの後ヘラミガキ。削り出し突帯、突帯上にヘラ描き沈線１条。紐孔１箇所。 内面　口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ。	内) 外) 断)	7.5YR6/6 7.5YR6/4 10YR8/2	橙 にぶい橙 灰白	石英・長石・雲母	良好
424	203		第15面 835溝	前期	弥生土器 壺	(18.4)		残存 11.3	外面　口縁部摩滅著しく調整不明。頸部削り出し突帯、突帯上に刻み目施紋後ヘラ描き沈線３条。体部横方向のヘラミガキ。紐孔１箇所。 内面　口縁部横方向のハケメの後ナデ、頸部ナデ、体部ヘラミガキ。	内) 外) 断)	7.5YR5/2 7.5YR7/4 10YR8/4	灰褐 にぶい橙 浅黄橙	長石・雲母・角閃石・赤色粒・チャート	良好
425	203	43	第15面 835溝	前期	弥生土器 壺	13.2	7.4	21.8	外面　ヘラミガキ。口縁端部ヘラ描き沈線１条。紐孔２箇所。頸部にヘラ描き沈線４条、肩部に削り出しによる段。体部と肩部にヘラ描き沈線３条。 内面　ヘラミガキ。生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5YR6/8 2.5YR7/6	橙 橙	石英・長石・角閃石・赤色粒	良好
426	203		第15面 835溝	前期	弥生土器 壺			残存9.2	外面　ハケメの後ヘラミガキ。２条以上の沈線１帯、ヘラ描き沈線２条２帯。 内面　ナデ。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR3/1 10YR5/3	にぶい黄褐 黒褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
427	203	43	第15面 835溝	前期	弥生土器 壺	(16.8)		残存8.8	外面　口縁端部ヨコナデ、口縁部板ナデの後ヘラミガキ。頸部に削りだし突帯、突帯上にヘラ描き沈線１条。肩部ナデ。 内面　口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR6/2 10YR6/2 5YR4/6	灰黄褐 灰黄褐 赤褐	石英・長石・雲母・角閃石・チャート	良好
428	203		第15面 835溝	前期	弥生土器 壺	(18.0)		残存9.4	外面　ヘラミガキ。口縁端部ユビナデの後ヘラ描き沈線１条。頸部削り出し突帯、突帯上にヘラ描き沈線２条。口縁部に内から外へ穿孔。 内面　板ナデ後横方向のヘラミガキ。	内) 外) 断)	10YR3/2 10YR3/2 5YR4/4	黒褐 黒褐 にぶい赤褐	石英・長石・雲母	良好
429	203		第15面 835溝	前期	弥生土器 壺	(18.8)		残存6.9	外面　ハケメの後ヘラミガキ。頸部に削り出し突帯、突帯上にヘラ描き沈線２条。口縁端部ヨコナデの後ヘラ描き沈線１条。内から外へ穿孔１箇所。孔径3mm。内面　ヘラミガキ。	内) 外) 断)	7.5YR6/4 10YR5/2 10YR7/2	にぶい橙 灰黄褐 にぶい黄橙	石英・長石・赤色粒・チャート	良好
430	204		第15面 835溝	前期	弥生土器 壺	(12.8)	8.9	残存 26.0	外面　縦方向のヘラミガキの後横方向のヘラミガキ。頸部に削り出しによる段、その下にヘラ描き沈線３条、体部にヘラ描き沈線２条。底部外面ナデ。 内面　板ナデの後ヘラミガキ。	内) 外) 断)	10YR8/2 10YR8/3 10YR5/1	灰白 浅黄橙 褐灰	長石・石英・チャート	良好
431	204	44	第15面 835溝	前期	弥生土器 壺		9.4	残存 15.5	外面　ハケメの後ヘラミガキ。ヘラ描き沈線１条。ヘラ描き沈線を接いだ痕が明瞭に観察される。底部外面ナデ。 内面　体部上半横方向のハケメ、体部下半ハケメの後ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y6/3 10YR6/3 2.5Y6/3	にぶい黄 にぶい黄橙 にぶい黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
432	204	44	第15面 835溝	前期	弥生土器 壺		8.4	残存 20.9	外面　横方向のヘラミガキ。削り出し突帯、突帯上にヘラ描き沈線３条。体部にユビオサエ。底部外面ナデ。 内面　横方向のヘラミガキ、頸部縦方向のナデ。	内) 外) 断)	2.5YR8/2 2.5YR8/2 10YR8/3	灰白 灰白 浅黄橙	長石・赤色粒	良好
433	204	44	第15面 835溝	前期	弥生土器 壺（底部）		(7.0)	残存7.3	外面　ヘラミガキ。 内面　ヘラミガキ、底部にユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 10YR5/3 2.5Y5/2	暗灰黄 にぶい黄褐 暗灰黄	石英・長石・角閃石・赤色粒	良好
434	204	44	第15面 835溝	前期	弥生土器 壺（底部）		11.5	残存7.1	外面　板ナデの後ヘラミガキ。底部外面中央から半径3.7cmの範囲をヘラミガキ。 内面　ナデ、ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y6/3 10Y6/3 2.5Y6/2	にぶい黄 にぶい黄橙 灰黄	長石・角閃石	良好
435	204		第15面 835溝	前期	弥生土器 壺（底部）		(9.0)	残存 10.15	外面　縦方向のヘラミガキの後体部横方向のヘラミガキ。底部外面ナデ。 内面　ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y5/1 10YR4/3 10YR4/3	黄灰 にぶい黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・角閃石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 / 遺構 / 層	時期	種類 / 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
436	204	44	第15面 835溝	前期	弥生土器 壺（底部）		6.6	残存6.1	内外面ともハケメの後ヘラミガキ。底部外面未調整。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y2/1 2.5Y6/3 2.5Y6/3	黒 にぶい黄 にぶい黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
437	204		第15面 835溝	前期	弥生土器 壺			残存9.9	外面　ヘラミガキの後、頸部に３条以上、肩部に４条のヘラ描き沈線。 内面　ナデ。ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR4/2 10YR3/2 10YR4/2	灰黄褐 黒褐 灰黄褐	石英・長石・角閃石	良好
438	204	44	第15面 835溝	前期	弥生土器 無頸壺	7.6	5.8	9.5	外面　横方向のヘラミガキ。外から内へ穿孔２箇所。 内面　口縁端部ヨコナデ、体部下半縦方向のヘラミガキの後体部上半横方向のヘラミガキ。	内） 外） 断）	2.5Y5/2 5YR7/6	暗灰黄 橙	長石・雲母・チャート	良好
439	204		第15面 835溝	前期	弥生土器 大型壺	(33.2)		残存5.1	内外面ともヘラミガキ。頸部に粘土紐貼り付けによる段。口縁端部もヘラミガキ。紀伊産。	内） 外） 断）	2.5Y8/2 2.5Y8/2 2.5Y8/2	灰白 灰白 灰白	石英・長石・角閃石・赤色粒・結晶片岩	良好
440	204		第15面 835溝	前期	弥生土器 大型壺	(28.0)		残存8.1	内外面ともヘラミガキ。口縁端部もヘラミガキ。	内） 外） 断）	5Y6/2 5Y6/2 5Y6/2	灰オリーブ 灰オリーブ 灰オリーブ	石英・長石・角閃石	良好
441	204		第15面 835溝	前期	弥生土器 壺			残存4.0	外面　ヘラミガキ。赤彩。 内面　ナデ、ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y4/1 2.5Y2/1 2.5Y4/1	黄灰 黒 黄灰	石英・長石・角閃石	良好
442	204		第15面 835溝	前期	弥生土器 壺			残存6.1	内外面ヘラミガキ。外面に赤彩。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR6/3 2.5Y5/6 10YR6/3	にぶい黄橙 明赤褐 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
443	205	44	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕蓋	つまみ径 6.4	(25.1)	9.95	外面　縦方向の板ナデの後横方向のヘラミガキ。つまみ部にユビオサエ。つまみ部頂面板ナデ。 内面　ヘラミガキ。煤付着。	内） 外） 断）	10YR5/3 10YR5/3 10YR7/3	にぶい黄褐 にぶい黄褐 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・チャート	良好
444	205	44	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕蓋	つまみ径 10.2	17.9	10.2	外面　つまみ部摩滅著しく調整不明。体部縦方向のヘラミガキの後、口縁部横方向のヘラミガキ。 内面　つまみ部摩滅著しく調整不明。体部頂部にユビオサエ。ナデの後横方向のヘラミガキ。煤は付着していない。	内） 外） 断）	10YR4/1 5YR6/6 7.5YR6/3	橙 褐灰 にぶい褐	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
445	205	44	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕蓋	つまみ径 6.6	24.0	10.7	外面　つまみ部付近ナデの後横方向のヘラミガキ、体部横方向のヘラミガキ。裾部付近ナデ。 内面　横方向のヘラミガキ、口縁部付近ナデ、口縁部付近に煤付着。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR3/1 10YR6/6 7.5YR6/6	黒褐 明黄褐 橙	長石・角閃石・チャート	良好
446	205	44	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(21.5)	7.6	21.0	外面　板ナデの後、口縁部ヨコナデ、口縁部直下ユビオサエ。底部外面ナデ。体部下半にわずかに煤付着。 内面　横方向の板ナデ。生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	5YR5/6 10YR6/2 5YR5/6	明赤褐 灰黄褐 明赤褐	石英・長石・角閃石	良好
447	205	44	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(27.2)		残存13.6	外面　ハケメ、口縁部ヨコナデの後ヘラ描き沈線１条、口縁端部ナデの後刻み目。煤付着。 内面　口縁部ヨコナデ、ユビオサエ。体部板ナデ。生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y6/3 10Y5/3 2.5Y6/3	にぶい黄 にぶい黄褐 にぶい黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
448	205		第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(24.8)		残存11.5	外面　板ナデの後口縁部ヨコナデ、端部刻み目。ヘラ描き沈線３条。口縁部付近に煤付着。 内面　口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエの後ハケメ。生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	7.5YR4/4 7.5YR4/2 7.5Y6/4	褐 灰褐 にぶい橙	石英・長石・雲母・角閃石	良好
449	205	45	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(25.2)		残存16.3	内外面とも縦方向の板ナデの後ハケメ。内面屈曲部は横方向のハケメ。口縁端部に刻み目。外面にわずかに煤付着。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	7.5YR4/6 2.5YR6/8 2.5YR6/1	褐 橙 黄灰	石英・長石・雲母・角閃石・チャート	良好
450	205		第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(24.0)		残存11.7	外面　横方向のハケメ。口縁部ヨコナデ。ヘラ描き沈線２条、口縁端部刻み目。 内面　板ナデの後口縁部ヨコナデ。ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 2.5Y6/2 2.5Y6/2	灰黄 灰黄 灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
451	206		第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(21.5)		残存10.0	外面　縦方向のハケメ。口縁部ヨコナデ、端部下端に刻み目。煤付着。 内面　ユビナデの後ハケメ、口縁部ヨコナデ。	内） 外） 断）	10YR6/3 5YR3/1 10YR6/3	にぶい黄橙 黒褐 にぶい黄橙	石英・長石・雲母	良好
452	206	47	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(22.2)		残存18.0	内外面ともに板ナデ。口縁端部に刻み目。外面に煤付着。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 10YR3/1 10YR6/3	灰黄 黒褐 にぶい黄橙	長石・雲母・角閃石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 / 遺構 / 層	時期	種類 / 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
453	206		第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(23.7)		残存9.9	外面　縦方向のハケメ。口縁部ヨコナデ、端部刻み目。ヘラ描き沈線３条。煤付着。 内面　ユビナデ。	内) 外) 断)	10YR7/3 10YR6/4 10YR6/2	にぶい黄橙 にぶい黄橙 灰黄褐	長石・雲母・赤色粒	良好
454	206	47	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(24.0)		残存9.5	外面　ハケメ。屈曲部に削り出しによる段、ヘラ描き沈線３条。口縁部ヨコナデ、端部刻み目。 内面　体部ユビナデ、口縁部横方向のハケメ。	内) 外) 断)	10YR6/2 10YR6/3 10YR7/4	灰黄褐 にぶい黄褐 にぶい黄橙	雲母・角閃石・赤色粒	良好
455	206		第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(24.0)		残存9.8	外面　縦方向のハケメ。口縁部ヨコナデ、端部刻み目。屈曲部下4cm程ナデ。ヘラ描き沈線４条、煤付着。 内面　ユビオサエの後板ナデ。口縁部ヨコナデ。	内) 外) 断)	10YR6/4 7.5YR6/4 10YR7/4	にぶい黄橙 にぶい橙 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・チャート	良好
456	206	47	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(18.6)	(7.2)	19.7	外面　縦方向のハケメ。口縁部ヨコナデ、端部刻み目。底部ナデ。煤がわずかに付着。 内面　板ナデ。粘土紐の継ぎ目が明瞭。	内) 外) 断)	10YR6/6 10R6/8 5YR8/4	明黄褐 赤橙 淡橙	雲母・・角閃石・赤色粒	良好
457	206	47	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(19.0)		残存13.5	外面　縦方向のハケメの後屈曲部下５㎜横方向のハケメ。口縁部ユビオサエの後ハケメ。煤付着。 内面　板ナデ。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR4/2 10YR6/3	にぶい黄褐 灰黄褐 にぶい黄橙	長石・雲母	良好
458	206		第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(24.9)		残存11.5	内外面ともハケメ。口縁部外面にユビオサエ。	内) 外) 断)	2.5Y6/2 10YR5/3 10YR5/3	灰黄 にぶい黄褐 にぶい黄褐	石英･長石・雲母・角閃石	良好
459	206		第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(25.0)		残存9.2	内外面とも板ナデ。体部内面上位にユビオサエ。ヘラ描き沈線３条。口縁端部に刻み目。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR6/4 10YR5/4 10YR7/2	にぶい黄橙 にぶい黄褐 にぶい黄橙	長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
460	206	47	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(22.8)		残存14.9	外面　ナデの後ヘラ描き沈線３条。口縁部ヨコナデ、端部刻み目。吹きこぼれの痕が観察される。 内面　ユビナデの後ハケメ。	内) 外) 断)	10YR6/3 10YR4/2 2.5Y6/1	にぶい黄橙 灰黄褐 黄灰	石英・長石･雲母	良好
461	206	47	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(18.4)		残存8.8	外面　板ナデ。口縁部ヨコナデの後体部にヘラ描き沈線４条、口縁端部刻み目。 内面　ナデの後板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR4/1 10YR3/3 10YR6/1	褐灰 暗褐 褐灰	長石・雲母・角閃石	良好
462	206	47	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(19.0)		残存13.6	内外面ともヘラミガキ。外面に煤付着。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y4/1 2.5Y4/1 10YR4/3	黄灰 黄灰 にぶい黄褐	石英・長石・雲母･角閃石	良好
463	207	46	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(25.8)	8.4	24.4	外面　縦方向のハケメの後口縁部ヨコナデ、端部刻み目。刻み目内に木目痕。ヘラ描き沈線３条。煤付着。 内面　口縁部ヨコナデ、体部板ナデ、底部ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR4/2 7.5YR6/4 10YR5/1	灰黄褐 にぶい橙 褐灰	石英･雲母・角閃石・赤色粒	良好
464	207	46	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(24.7)	8.7	26.7	外面　体部板ナデの後体部上半ヨコナデ。屈曲部直下に削り出しによる段。ヘラ描き沈線２条。口縁端部に刻み目。底部に外から内へ焼成後穿孔。 内面　板ナデ。	内) 外) 断)	10YR7.2 10YR7.3 10YR8/3	にぶい黄橙 にぶい黄橙 浅黄橙	石英・長石	良好
465	207	45	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	19.2		残存6.5	内外面ともナデ、口縁端部に刻み目。	内) 外) 断)	7.5YR5/6 7.5YR8/6 7.5YR7/6	明褐 浅黄橙 橙	石英・長石・角閃石	良好
466	207	46	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(14.6)		残存5.7	外面　ハケメの後体部上半ヨコナデ。口縁端部下端刻み目。吹きこぼれの痕跡残る。 内面 板ナデの後口縁部ヨコナデ。	内) 外) 断)	10YR3/2 10YR4/2 10YR3/2	黒褐 灰黄褐 黒褐	石英・長石・雲母・チャート	良好
467	207	46	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(10.0)		16.1	内外面とも板ナデの後ハケメ。内面ユビオサエ。体部外面にヘラ描き沈線１条、口縁端部下端に刻み目。	内) 外) 断)	2.5Y3/1 2.5Y3/1 2.5Y3/1	黒褐 黒褐 黒褐	石英・長石・角閃石	良好
468	207	46	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(22.0)		残存13.9	内外面とも板ナデの後ハケメ。体部外面にヘラ描き沈線３条、口縁端部に刻み目。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5YR6/8 7.5YR7/6 5YR7/6	橙 橙 橙	石英・長石・雲母・角閃石・チャート	良好
469	207		第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(21.2)		残存16.5	外面　体部板ナデ。ヘラ描き沈線４条。口縁端部刻み目。煤が大量に付着。 内面　体部板ナデの後ハケメ。	内) 外) 断)	2.5Y5/3 2.5Y4/1 2.5Y5/3	黄褐 黄灰 黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
470	207	46	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(23.0)	8.1	26.2	外面　口縁部にユビオサエ、口縁端部刻み目。体部上半にハケメ。ヘラ描き沈線３条。底部付近板ナデ。 内面　底部付近に板ナデの痕跡。ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5YR4/4 2.5YR4/4	にぶい赤褐 にぶい赤褐	長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考		色調		胎土	焼成
471	207	46	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(22.5)	(6.4)	26.3	外面　体部縦方向のハケメ。口縁部付近横方向のハケメの後口縁部ヨコナデ、端部刻み目。 内面　横方向のハケメの後口縁部ヨコナデ。	内） 外） 断）	10YR5/3 7.5YR6/4 10YR5/3	にぶい黄褐 にぶい橙 にぶい黄褐	石英・長石・雲母	良好
472	208		第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(31.4)		残存15.2	外面　ハケメ。口縁部ヨコナデ。 内面　板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR7/4 10YR6/4 10YR8/1	にぶい黄橙 にぶい黄橙 灰白	石英・長石・雲母・角閃石	良好
473	208	45	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(30.3)		残存16.6	外面　ハケメ。口縁部ヨコナデ。 内面　体部板ナデの後屈曲部横方向のハケメ、口縁部ヨコナデ。	内） 外） 断）	10YR7/3 10YR7/3 2.5Y7/2	にぶい黄橙 にぶい黄橙 灰黄	石英・長石・雲母・角閃石・チャート・礫	良好
474	208		第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(28.4)		残存15.3	外面　縦方向の粗いハケメの後削り出しによる段。ヘラ描き沈線２条、口縁端部に刻み目。わずかに煤が付着。 内面　体部板ナデの後体部上半横方向のハケメ。	内） 外） 断）	10YR6/4 10YR6/4 10YR6/4	にぶい黄橙 にぶい黄橙 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・角閃石	良好
475	208	45	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(25.0)	6.2	26.9	外面　体部から底部縦方向のハケメの後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。口縁部に煤が付着。 内面　口縁部ヨコナデ、体部ナデ。底部付近に粘土紐の継ぎ目。	内） 外） 断）	2.5Y6/1 10YR6/3 2.5Y6/3	黄灰 にぶい黄橙 にぶい黄	長石・角閃石	良好
476	208		第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(22.0)		残存12.3	外面　体部ハケメ。口縁部にユビオサエ。吹きこぼれの痕が残る。 内面　体部ユビオサエの後板ナデ、口縁部ヨコナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	7.5YR4/4 2.5Y2/1 10YR7/2	褐 黒 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
477	208	45	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(19.6)		残存8.6	外面　体部ナデ。口縁部ヨコナデ。ヘラ描き沈線３条。屈曲部にユビオサエ。 内面　横方向の板ナデ、屈曲部付近ユビオサエ、口縁部ヨコナデ。内外面とも粘土紐の継ぎ目。	内） 外） 断）	10YR5/6 10YR7/4 7.5YR8/6	黄褐 にぶい黄橙 浅黄橙	長石・雲母	良好
478	208	45	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(26.0)		残存8.9	内外面とも板ナデ。体部外面にヘラ描き沈線３条、口縁端部に刻み目。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5YR5/4 7.5YR6/4 7.5YR6/4	にぶい赤褐 にぶい橙 にぶい橙	石英・長石・角閃石	良好
479	208	45	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(27.6)		残存10.95	外面　縦方向のハケメ。口縁部ヨコナデ、端部刻み目。ヘラ描き沈線３条。 内面　ユビオサエの後ハケメ。口縁部ヨコナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR6/3 10YR7/3 10YR8/2	にぶい黄橙 にぶい黄橙 灰白	石英・長石・雲母・角閃石・チャート	良好
480	208	45	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(21.7)	9.4	24.6	外面　体部縦方向のハケメ。口縁部ヨコナデ。底部付近と屈曲部にユビオサエ。 内面　底部ユビオサエ、体部板ナデの後口縁部ヨコナデ。	内） 外） 断）	5YR6/8 2.5YR5/8 10R5/8	橙 明赤褐 赤	石英・長石・角閃石	良好
481	209	47	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(23.0)	(7.0)	26.3	外面　板ナデの後口縁部ヨコナデ、端部に刻み目。体部にヘラ描き沈線２条。 内面　口縁部ヨコナデ。体部摩滅著しく調整不明。口縁から13cm～19.2cm下に帯状に煤付着。	内） 外） 断）	10YR4/1 10YR8/3 2.5Y8/1	褐灰 浅黄橙 灰白	長石・雲母	良好
482	209		第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(36.4)		11.7	外面　ハケメの後ナデ。口縁部ヨコナデ、端部下端に刻み目。屈曲部下1.2cmから削り出し突帯、突帯上にヘラ描き沈線３条。 内面　ナデ、口縁部ヨコナデ。ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR6/3 10YR7/3 10YR7/1	にぶい黄橙 にぶい黄橙 灰白	長石・角閃石・チャート	良好
483	209		第15面 835溝	前期	弥生土器 甕	(22.0)		残存24.1	外面　体部にハケメ、体部上半に一部ヘラミガキ。口縁部に煤付着。 内面　体部下半板ナデ、体部上半横方向のハケメ、口縁部横方向のハケメの後ヨコナデ。	内） 外） 断）	2.5Y5/2 10YR3/1 5YR6/3	暗灰黄 黒褐 にぶい橙	石英・長石・赤色粒	良好
484	209		第15面 835溝	前期	弥生土器 鉢もしくは甕			残存7.6	外面　摩滅著しく調整不明。ヘラ描き沈線４条施紋後３条１帯の山形紋。 内面　板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/3 10YR5/3 10YR5/3	にぶい黄褐 にぶい黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・角閃石	良好
485	209	48	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕（底部）		7.55	残存12.5	外面　縦方向のハケメの後板ナデ。底部外面中央にヘソ状の突起。 内面　ナデ。内外面とも煤付着。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR6/6 10YR7/3 10YR7/4	明黄褐 にぶい黄橙 にぶい黄橙	長石・雲母・角閃石・チャート	良好
486	209	48	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕（底部）		6.2	残存3.3	外面　縦方向のハケメ。底部外面中央にヘソ状の突起。 内面　ナデ。	内） 外） 断）	5Y2/1 2.5Y6/2 2.5Y7/2	黒 灰黄 灰黄	石英・長石・雲母・チャート	良好
487	209	48	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕（底部）		(7.8)	残存6.7	外面　板ナデ。底部外面は剥離のため調整不明。 内面　剥離のため調整不明。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR3/1 10YR5/3 10YR3/1	黒褐 にぶい黄褐 黒褐	石英・長石・角閃石	良好
488	209	48	第15面 835溝	前期	弥生土器 甕（底部）		8.0	残存3.4	外面　ヘラミガキ。焼成後穿孔。底面ヘラミガキ。 内面　板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR6/3 2.5Y6/2 2.5Y6/2	にぶい黄橙 灰黄 灰黄	石英・長石・角閃石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
489	209		第15面 835溝	前期	弥生土器 甕		(7.4)	残存 15.4	外面　板ナデの後ハケメ。わずかに煤付着 内面　板ナデ。	内） 外） 断）	5YR4/3 7.5YR5/3 5YR4/3	にぶい赤褐 にぶい褐 にぶい赤褐	石英・長石・雲母	良好
490	209		16面 836溝	前期	弥生土器 甕		12.0	残存 18.2	外面　板ナデの後ハケメ。 内面　板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	7.5YR5/2 10YR6/4 10YR7/2	灰褐 にぶい黄橙 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・角閃石・チャート	良好
491	209	48	第15面 835溝	前期	弥生土器 小型甕	(10.8)	5.3	7.6	内外面ともヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 2.5Y6/2 5Y6/1	灰黄 灰黄 灰	石英・長石・雲母・角閃石	良好
492	209	48	第15面 835溝	前期	弥生土器 小型甕底部		(4.0)	残存 3.75	内外面ともナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	5Y7/1 5Y7/1 5Y7/1	灰白 灰白 灰白	石英・長石・雲母・角閃石	良好
493	209	48	第15面 835溝	前期	弥生土器 小型甕		4.4	残存7.8	外面　剥離のため調整不明。底面ナデ。 内面　横方向のハケメ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR6/3 2.5Y5/1 2.5Y5/1	にぶい黄橙 黄灰 黄灰	石英・長石・角閃石・赤色粒	良好
494	210		第15面 835溝	前期	弥生土器 鉢	(45.8)		残存 17.0	外面　ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。 内面　ナデ、口縁部ヨコナデ。ユビオサエと粘土紐の継ぎ目が明瞭。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	7.5YR5/2 10YR5/3 10YR4/4	灰褐 にぶい黄褐 褐	長石・角閃石・赤色粒	良好
495	210		第15面 835溝	前期	弥生土器 鉢	(54.8)		残存 14.2	外面 体部上半縦方向のハケメ、下半板ナデ。ヘラ描き沈線２条。沈線以下体部上半ヘラミガキ。口縁端部ヨコナデ。 内面　体部板ナデ。口縁部横方向のハケメの後体部ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	7.5YR5/3 2.5YR5/8 2.5Y7/1	にぶい褐 明赤褐 灰白	石英・長石・角閃石・赤色粒	良好
496	210		第15面 835溝	前期	弥生土器 鉢	(39.0)		残存7.7	外面　剥離のため調整不明瞭。削り出し突帯後ヘラミガキ。 内面　摩滅しているが、ヘラミガキのような痕跡。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR6/3 10YR6/3 10YR6/3	にぶい黄橙 にぶい黄橙 にぶい黄橙	石英・長石・角閃石・赤色粒	良好
497	210		第15面 835溝	前期	弥生土器 鉢			16.9	外面　ハケメの後ヘラミガキ。削り出し突帯。 内面　ヘラミガキ。	内） 外） 断）	2.5Y5/3 2.5Y5/3 2.5Y6/2	黄褐 黄褐 灰黄	長石・雲母・角閃石・チャート	良好
498	210	48	第15面 835溝	前期	弥生土器 鉢	(16.1)	5.6	7.7	外面　剥離著しく調整不明瞭。ユビオサエ。底部外面未調整。ナデにより口縁端部に面。 内面　ナデ、ユビオサエ。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 2.5Y5/2 2.5Y6/2	灰黄 暗灰黄 灰黄	長石・雲母・黒色礫	良好
499	210	48	第15面 835溝	前期	弥生土器 鉢		9.0	残存9.0	外面　底部付近ユビオサエ、体部ヘラミガキ。ヘラ描き沈線３条。 内面　板ナデの後底部ヘラミガキ。一部ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	N3/0 10YR6/3 5Y6/1	暗灰 にぶい黄橙 灰	石英・長石・雲母・角閃石	良好
500	210	48	第15面 835溝	前期	弥生土器 ミニチュア鉢	5.85	5.0	3.35	外面　ユビオサエ。口縁端部ヨコナデ。底部外面ナデ。 内面　ヨコナデ、底部ユビオサエ。	内） 外） 断）	5Y2/1 5Y3/1 5Y6/1	黒 オリーブ黒 灰	石英・長石角閃石	良好
501	210	48	第15面 835溝	縄紋晩期	縄紋土器 突帯紋			残存2.9	内外面ともナデ。突帯上に刻み目。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 10YR4/1 2.5Y6/2	灰黄 褐灰 灰黄	石英・長石・雲母	良好
502	210		第15面 835溝	縄紋晩期	縄紋土器 突帯紋			残存3.1	内外面ともナデ。突帯上に刻み目。	内） 外） 断）	2.5Y5/3 2.5Y5/3 2.5Y5/3	黄褐 黄褐 黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
503	210		第15面 835溝	縄紋晩期	縄紋土器 突帯紋			残存1.9	内外面ともナデ。突帯上に刻み目。	内） 外） 断）	10YR6/3 10YR6/3 10YR6/3	にぶい黄橙 にぶい黄橙 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・角閃石	良好
504	210		第15面 835溝	縄紋晩期	縄紋土器 突帯紋	残存幅 2.4	残存長 (3.4)		内外面ともナデ。	内） 外） 断）	5YR6/4 10YR1.7/1 7.5YR6/4	にぶい黄橙 黒 にぶい橙	長石	良好
505	210	48	第15面 835溝	弥生前期	土製品 紡錘車	直径 5.05	最大幅 5.3	孔径 0.7	ナデ、板ナデ。重さ：34.4ｇ。	裏） 表） 断）	2.5Y4/1 10YR7/3 2.5Y7/1	黄灰 にぶい黄橙 灰白	石英・長石・角閃石	良好
506	210	48	第15面 835溝	弥生前期	土製品 投弾	最大長 3.95	最大幅 2.9	最大厚 2.6	手づくね。ナデ。重さ：24.4ｇ	外）	7.5YR6/2	灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
507	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.3	最大幅 3.5	孔径 0.7	手づくね、ナデ。重さ：56.3ｇ。	外）	2.5Y8/3	淡黄	石英・長石・角閃石	良好
508	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.9	最大幅 3.6	孔径 0.7	手づくね、ナデ。重さ：67.8ｇ。	外）	2.5Y5/1	黄灰	石英・長石・角閃石	良好
509	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.9	最大幅 3.7	孔径 0.6	手づくね、ナデ。重さ：66.7ｇ。	外）	2.5Y7/3	浅黄	石英・長石・角閃石	良好
510	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.9	最大幅 3.4	孔径 0.8	手づくね、ナデ。重さ：57.5ｇ。	外）	2.5Y7/3	浅黄	石英・長石・角閃石	良好
511	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 6	最大幅 3.4	孔径 0.7	手づくね、ナデ。重さ：59.2ｇ。	外）	2.5Y8/3	浅黄	石英・長石・角閃石	良好
512	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 6.2	最大幅 3.7	孔径 0.8	手づくね、ナデ。重さ：78.7ｇ。	外）	2.5Y8/3	浅黄	石英・長石・角閃石	良好
513	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 6.3	最大幅 3.1	孔径 0.8	手づくね、ナデ。重さ：59.7ｇ。	外）	2.5Y7/3	浅黄	石英・長石・角閃石	良好
514	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 6.4	最大幅 3.4	孔径 0.7	手づくね、ナデ。重さ：62.7ｇ。	外）	2.5Y8/2	灰白	石英・長石・角閃石	良好
515	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 6.4	最大幅 3.7	孔径 0.6	手づくね、ナデ。重さ：69.3ｇ。	外）	2.5Y7/3	浅黄	石英・長石・角閃石	良好
516	211	51 59	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 7.2	最大幅 3.2	孔径 0.6	手づくね、ナデ。重さ：72.3ｇ。	外）	10YR6/4	にぶい黄橙	石英・長石・角閃石	良好
517	211	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.5	最大幅 3.6	孔径 1.1	手づくね、ナデ。重さ：73.0ｇ。	外）	2.5Y5/2	暗灰黄	石英・長石・角閃石	良好
518	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.8	最大幅 3.2	孔径 0.8	手づくね、ナデ。重さ：46.1ｇ。	外）	2.5Y7/2	灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
519	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 6	最大幅 4	孔径 0.8	手づくね、ナデ。重さ：88.5ｇ。	外）	2.5Y5/1	黄灰	石英・長石・雲母・角閃石	良好
520	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.3	最大幅 3.8	孔径 0.8	手づくね、ナデ。重さ：66.2ｇ。	外）	2.5Y7/3	浅黄	石英・長石・角閃石	良好
521	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 6.9	最大幅 3.45	孔径 0.8	手づくね、ナデ。重さ：73.0ｇ。	外）	2.5Y5/2	暗灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
522	211	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.3	最大幅 3.8	孔径 0.8	手づくね、ナデ。重さ：66.2ｇ。	外）	2.5Y7/3	浅黄	石英・長石・角閃石	良好
523	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.8	最大幅 3.6	孔径 0.8	手づくね、ナデ。重さ：62.4ｇ。	外）	2.5Y8/3	浅黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
524	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 6	最大幅 3.4	孔径 0.7	手づくね、ナデ。重さ：69.6ｇ。	外）	2.5Y7/3	浅黄	石英・長石・角閃石	良好
525	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 6.1	最大幅 3.4	孔径 0.8	手づくね、ナデ。重さ：60.5ｇ。	外）	2.5Y7/3	浅黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
526	211	51	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 6.9	最大幅 4.8	孔径 0.7	手づくね、ナデ。重さ：158.0ｇ。	外）	10YR4/2	灰黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
527	212	52 59	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 4.7	最大幅 4.5	孔径 1.4	手づくね、ナデ。重さ：96.0ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
528	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 4.9	最大幅 4.1	孔径 1.2	手づくね、ナデ。重さ：82.5ｇ。	外）	2.5Y5/2	暗灰黄	石英・長石・角閃石	良好
529	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5	最大幅 4	孔径 1.1	手づくね、ナデ。重さ：85.2ｇ。	外）	2.5Y5/2	暗灰黄	石英・長石・角閃石	良好
530	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5	最大幅 4.4	孔径 1.4	手づくね、ナデ。重さ：90.7ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
531	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.2	最大幅 4.8	孔径 1.2	手づくね、ナデ。重さ：105.7ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
532	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.2	最大幅 4.3	孔径 1.3	手づくね、ナデ。重さ：97.7ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
533	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.2	最大幅 4.2	孔径 1.3	手づくね、ナデ。重さ：90.0ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
534	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.3	最大幅 4.7	孔径 1.1	手づくね、ナデ。重さ：116.2ｇ。	外）	2.5Y4/2	暗灰黄	石英・長石・角閃石	良好
535	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.3	最大幅 4.6	孔径 1.3	手づくね、ナデ。重さ：88.9ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
536	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.3	最大幅 4.5	孔径 0.8	手づくね、ナデ。重さ：103.4ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
537	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.5	最大幅 4.6	孔径 1.4	手づくね、ナデ、竹管紋。重さ：110.0ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
538	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.5	最大幅 4.2	孔径 1.3	手づくね、ナデ。重さ：97.6ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
539	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.6	最大幅 4.5	孔径 1.4	手づくね、ナデ。重さ：104.3ｇ。	外）	10YR6/3	にぶい黄橙	石英・長石・角閃石	良好
540	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.6	最大幅 4.3	孔径 1.3	手づくね、ナデ。重さ：98.4ｇ。	外）	10YR5/3	にぶい黄褐	石英・長石・角閃石	良好
541	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.7	最大幅 4.4	孔径 1.4	手づくね、ナデ。重さ：99.0ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
542	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.7	最大幅 4	孔径 1.4	手づくね、ナデ。重さ：89.6ｇ。	外）	2.5Y5/2	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
543	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.8	最大幅 4.8	孔径 1.3	手づくね、ナデ。重さ：113.4ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
544	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.8	最大幅 4.4	孔径 1.3	手づくね、ナデ。重さ：107.9ｇ。	外）	10YR5/3	にぶい黄褐	石英・長石・角閃石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
545	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.8	最大幅 4.3	孔径 1.1	手づくね、ナデ。重さ：105.9ｇ。	外）	10YR5/2	灰黄褐	石英・長石・角閃石	良好
546	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.8	最大幅 4.7	孔径 1.4	手づくね、ナデ。重さ：118.7ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
547	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.9	最大幅 4.45	孔径 1.2	手づくね、ナデ。重さ：98.9ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
548	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.9	最大幅 4.4	孔径 1.3	手づくね、ナデ。重さ：105.5ｇ。	外）	10YR5/3	にぶい黄褐	石英・長石・角閃石	良好
549	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.3	最大幅 4.7	孔径 1.4	手づくね、ナデ。重さ：100.9ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
550	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.4	最大幅 4.6	孔径 1.3	手づくね、ナデ。重さ：98.0ｇ。	外）	2.5Y5/2	暗灰黄	石英・長石・角閃石	良好
551	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.7	最大幅 4.3	孔径 1.4	手づくね、ナデ。重さ：99.0ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
552	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.5	最大幅 4.1	孔径 1.2	手づくね、ナデ。重さ：89.9ｇ。	外）	2.5Y4/2	暗灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
553	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.4	最大幅 4.5	孔径 1.3	手づくね、ナデ。重さ：98.0ｇ。	外）	10YR5/3	にぶい黄褐	石英・長石・角閃石	良好
554	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.2	最大幅 4.5	孔径 1.4	手づくね、ナデ。重さ：97.5ｇ。	外）	10YR5/3	にぶい黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
555	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.4	最大幅 4.5	孔径 1.2	手づくね、ナデ。重さ：103.1ｇ。	外）	10YR5/4	にぶい黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
556	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5.7	最大幅 4.3	孔径 1.3	手づくね、ナデ。重さ：96.7ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
557	212	52	第15面 835溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 5	最大幅 4.6	孔径 1.4	手づくね、ナデ。重さ：101.1ｇ。	外）	2.5Y5/3	黄褐	石英・長石・角閃石	良好
558	213	53	第15面 835溝	弥生前期	土製品 人形土製品	縦 残存2.9	横 残存4.9	奥行 残存4.0	ユビナデ。目はヘラ状工具で描く。生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y5/3 2.5Y4/1	黄褐 黄灰	長石・石英・角閃石	良好
559	214	51	第15面 835溝	弥生前期	石製品 石棒	残存長 11.6	最大幅 4.9	最大厚 2.5	重さ：228.8ｇ。片岩					
560	215	54	第15面 865溝	前期	弥生土器 小型壺蓋	穿孔径 0.3	8.2	2.1	外面　ヘラミガキ、つまみ部ユビオサエ、端部ナデ。つまみ部の中心に穿孔。 内面　摩滅のため調整不明。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/3 10YR5/3	にぶい黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
561	215		第15面 865溝	前期	弥生土器 壺蓋	穿孔径 0.5	(10.4)	1.9	内外面ともヘラミガキ。頂部に穿孔。	内） 外） 断）	10YR5/3 2.5Y5/2 10YR6/3	にぶい黄褐 暗灰黄 にぶい黄橙	石英・長石・角閃石	良好
562	215		第15面 865溝	前期	弥生土器 小型壺		4.8	4.95	外面　体部ヘラミガキ、底部及び底部ナデ。 内面　ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y7/2 10YR5/2 2.5Y7/2	灰黄 灰黄褐 灰黄	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
563	215		第15面 865溝	前期	弥生土器 壺	(16.3)		残存6.5	外面　ヘラミガキの後口縁部ヨコナデ。口縁端部にヘラ描き沈線１条。頸部貼り付け突帯１条、突帯上に刻み目。 内面　ヘラミガキ。	内） 外） 断）	2.5Y3/1 10YR3/1 2.5Y3/1	黒褐 黒褐 黒褐	石英・長石・雲母	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 / 遺構 / 層	時期	種類 / 器種	法量(cm)( )は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
564	215	54	第15面 865溝	前期	弥生土器 壺	(18.0)		残存 12.7	外面　ヘラミガキの後頸部削り出し突帯、突帯上にヘラ描き沈線１条。 内面　ヘラミガキ。ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR4/1 10YR6/3 10YR5/4	褐灰 にぶい黄橙 にぶい黄褐	石英・長石・角閃石	良好
565	215		第15面 865溝	前期	弥生土器 大型壺	(41.2)		残存 11.9	内外面ともヘラミガキ。口縁端部ヨコナデ。頸部外面にヘラ描き沈線２条。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y6/2 5Y2/1 2.5Y6/2	灰黄 黒 灰黄	石英・長石・雲母・角閃石赤色粒	良好
566	215		第15面 865溝	前期	弥生土器 甕	(20.4)		残存 10.5	外面　板ナデの後口縁部ヨコナデ。 内面　ナデの後ヘラミガキ。わずかに煤付着。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 2.5Y3/1 2.5Y5/3	暗灰黄 黒褐 黄褐	長石・雲母・角閃石	良好
567	215		第15面 865溝	弥生前期	土製品 管状土錘	最大長 7.9	最大幅 4.8	孔径 0.5	手づくね、ナデ。重さ：162.1ｇ。	外)	2.5Y4/3	オリーブ褐	石英・長石・角閃石	良好
568	221		第15面 726溝	前期	弥生土器 大型壺	(39.4)		残存 14.4	外面　ヘラミガキ。頸部に段。 内面　ハケメの後ヘラミガキ。	内) 外) 断)	2.5Y6/3 5YR6/6 2.5Y6/1	にぶい黄 橙 黄灰	長石・雲母	良好
569	221	54	第15面 726溝	前期	弥生土器 甕	(25.9)	(8.8)	31.45	外面　底部ヘラケズリの後体部縦方向のハケメ。口縁部ヨコナデ、端部刻み目。ヘラ描き沈線３条、口縁部付近に煤付着。 内面　摩滅及び剥離のため調整不明。体部に工具痕。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR4/3 10YR5/3 10YR4/3	にぶい黄褐 にぶい黄褐 にぶい黄褐	長石・角閃石	良好
570	223		第15面 734溝	前期	弥生土器 鉢	(20.0)		残存5.9	内外面ともヘラミガキ。	内) 外) 断)	10YR5/2 10YR5/2 10YR5/2	灰黄褐 灰黄褐 灰黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
571	224		第15面 814溝	前期	弥生土器 壺	(18.0)		残存5.0	外面　口縁部ヨコナデ、体部ナデ。粘土紐接合による段、段に刻み目。 内面　口縁部ヘラミガキ、体部ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR5/3 10YR5/3	にぶい黄褐 にぶい黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・角閃石	良好
572	224	54	第15面 814溝	前期	弥生土器 壺（底部）		8.3	残存 4.85	外面　ヘラミガキ。底部外面ヘラミガキ。 内面　ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR5/4 10YR5/4 10YR5/4	にぶい黄褐 にぶい黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
573	224		第15面 814溝	前期	弥生土器 甕	(26.0)		残存 4.95	外面　摩滅により調整不明。粘土紐接合による段。口縁端部下端に刻み目。 内面　口縁部ユビナデ、体部板ナデ。	内) 外) 断)	5YR7/6 10YR6/1 5YR6/6	橙 褐灰 橙	石英・長石・雲母	やや不良
574	224		第15面 814溝	前期	弥生土器 甕	(24.4)		残存 10.0	外面　口縁部ヨコナデ、端部に刻み目。体部縦方向のハケメ。 内面　体部板ナデ、口縁部ヨコナデ。	内) 外) 断)	2.5Y4/2 7.5YR4/2 2.5Y5/1	暗灰黄 灰褐 黄灰	石英・長石・雲母・角閃石	良好
575	224		第15面 814溝	前期	弥生土器 甕	(23.8)		残存 11.1	外面　体部ナデ、口縁部ヨコナデ、端部刻み目。ヘラ描き沈線２条、 内面　口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	内) 外) 断)	2.5Y5/3 2.5Y5/2 2.5Y5/3	黄褐 暗灰黄 黄褐	石英・長石・雲母	良好
576	224		第15面 814溝	前期	弥生土器 甕(底部)		6.3	残存6.8	内外面とも板ナデ。	内) 外) 断)	2.5Y5/3 2.5Y5/2 2.5Y5/2	黄褐 暗灰黄 暗灰黄	石英・長石・雲母	良好
577	224		第15面 814溝	前期	弥生土器 甕(底部)		(8.6)	残存9.4	内外面とも剥離のため調整不明。外面底部付近にわずかにナデの痕跡。	内) 外) 断)	2.5Y4/2 2.5Y4/2 2.5Y4/2	暗灰黄 暗灰黄 暗灰黄	石英・長石・雲母	良好
578	225		第15面 841溝	前期	弥生土器 小型壺		4.7	残存9.2	外面　ヘラミガキの後ヘラ描き沈線２条。底部外面中央部ヘラミガキ。 内面　ナデ後体部下半横方向のハケメ、体部上半縦方向のハケメ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR4/3 5Y4/2	にぶい黄褐 にぶい黄褐 灰オリーブ	石英・長石・角閃石	良好
579	228	54	第15面 869溝	前期	弥生土器 壺蓋	つまみ径 1.3	11.7	3.4	外面　端部ヨコナデの後板ナデ、体部中位にユビオサエ。つまみ部中央に穿孔１箇所。 内面　ユビオサエ、板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR5/3 10YR6/2	にぶい黄褐 にぶい黄褐 灰黄褐	長石・角閃石	良好
580	228	55	第15面 869溝	前期	弥生土器 壺	(14.4)		残存9.6	外面　頸部に段。縦方向のハケメの後ヘラミガキ。 内面　ナデの後横方向のヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y5/1 2.5Y4/1 2.5Y5/2	黄灰 黄灰 暗灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
581	228		第15面 869溝	前期	弥生土器 壺	(16.6)		残存8.6	内外面ともヘラミガキ。口縁部にユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR6/3 10YR5/2 10YR5/3	にぶい黄橙 灰黄褐 にぶい黄褐	長石・角閃石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
582	228		第15面 869溝	前期	弥生土器 壺	15.85		残存 8.95	外面　口縁端部まで横方向のハケメの後口縁端部以外ヘラミガキ。頸部に断面Ｖ字状のヘラ描き沈線４条。２箇所に紐孔。 内面　横方向のハケメの後ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR6/2 7.5YR6/4 10YR7/3	灰黄褐 にぶい橙 にぶい黄橙	長石・角閃石	良好
583	228	55	第15面 869溝	前期	弥生土器 壺	(17.3)		残存9.2	外面　頸部削り出し突帯、突帯上にヘラ描き沈線３条。突帯より上横方向の板ナデ、突帯より下ヘラミガキ。紐孔２箇所。 内面　体部ナデ、口縁部から頸部にかけてヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/2 10YR6/3 10YR6/2	灰黄褐 にぶい黄橙 灰黄	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
584	228	55	第15面 869溝	前期	弥生土器 壺（底部）		10.4	残存8.9	外面　板ナデの後ヘラミガキ。底部より2.9cm上に浅い沈線。底部外面にも直径7.7cmの円状の沈線を反時計回りに施紋。 内面　ヘラミガキ、底部ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR6/3 10YR6/3 5Y7/1	にぶい黄褐 にぶい黄褐 灰白	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
585	228		第15面 869溝	前期	弥生土器 甕	(19.0)		残存6.0	外面　横方向のナデの後屈曲部に貼り付け突帯、突帯の上下をヘラケズリ。 内面　口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	内） 外） 断）	10YR6/3 10YR6/3 10YR6/3	にぶい黄橙 にぶい黄橙 にぶい黄橙	長石・雲母	良好
586	228		第15面 869溝	前期	弥生土器 甕	(21.8)		残存 11.3	外面　縦方向の板ナデ。ヘラ描き沈線３条。口縁端部刻み目。煤付着。 内面　横方向の板ナデ。一部赤色顔料塗布。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y4/2 7.5Y2/1 10YR6/4	暗灰黄 黒 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・角閃石	良好
587	228	55	第15面 869溝	前期	弥生土器 甕	23.6	7.6	25.4	外面　縦方向のハケメの後ナデ。口縁部ヨコナデ、端部刻み目。ヘラ描き沈線２条、 内面　口縁部ヨコナデ、体部ナデ。底部付近にコゲ付着。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	7.5YR4/6 10YR3/2 10YR7/8	褐 黒褐 黄橙	長石・角閃石・赤色粒	良好
588	228	55	第15面 869溝	前期	弥生土器 鉢	(17.4)		残存6.2	外面　ヘラミガキ。 内面　横方向ナデの後ヘラミガキ。ユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR6/2 10YR6/2 2.5YR6/2	灰黄褐 灰黄褐 灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
589	228		第15面 869溝	前期	弥生土器 鉢	(36.4)		残存7.4	内外面とも板ナデの後ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/3 10YR5/3 10YR5/3	にぶい黄褐 にぶい黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・角閃石	良好
590	228	55	第15面 869溝	前期	弥生土器 甑		7.6	残存 10.0	外面　摩滅著しい。底部付近に縦方向の板ナデの痕跡。底部外面ナデ。焼成後穿孔。 内面　底部にナデ、ユビオサエ。	内） 外） 断）	10YR6/4 10YR6/3 10YR5/2	にぶい黄橙 にぶい黄橙 灰黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	やや不良
591	230		第15面 752ピット	縄紋晩期	縄紋土器 突帯紋			残存5.4	内外面ともナデ。突帯上に刻み目。	内） 外） 断）	7.5YR4/4 10YR4/2 10YR5/4	褐 灰黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
592	231		第15面 725流路	前期	弥生土器 壺蓋		(9.6)	残存 1.45	内外面ともヘラミガキ。紐孔１箇所残存。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y5/3 2.5Y5/2 5Y6/1	黄褐 暗灰黄 灰	石英・長石・雲母・角閃石	良好
593	231	55	第15面 725流路	前期	弥生土器 小型壺		5.2	残存6.0	外面　ヘラミガキの後ヘラ描き沈線２条２帯。沈線帯間に斜格子紋。 内面　ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR7/2 10YR5/3 5Y7/1	にぶい黄橙 にぶい黄褐 灰白	石英・長石・雲母・角閃石	良好
594	231		第15面 725流路	前期	弥生土器 壺（底部）		6.0	残存4.0	外面　板ナデの後ヘラミガキ。底部ナデ。 内面　ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	7.5YR5/6 2.5Y6/3 2.5Y7/2	明褐 にぶい黄 灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
595	231	55	第15面 725流路	前期	弥生土器 甕（底部）		(6.9)	残存7.1	外面　縦方向のハケメ、底部外面ナデ。底部焼成後穿孔。 内面　縦方向のハケメ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	7.5YR5/6 10YR7/3 10YR7/3	明褐 にぶい黄橙 にぶい黄橙	石英・長石・角閃石	良好
596	231		第15面 725流路	前期	弥生土器 壺（底部）		(10.4)	残存4.2	外面　板ナデ。底部未調整。 内面　ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	5YR6/4 10YR7/3 5Y6/1	にぶい橙 にぶい黄橙 灰	石英・長石・雲母・角閃石	良好
597	231		第15面 725流路	前期	弥生土器 壺（底部）		(15.4)	残存3.3	外面　縦方向のハケメ。 内面　ヘラミガキ。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 2.5Y6/2 2.5Y6/2	灰黄 灰黄 灰黄	石英・長石・角閃石	良好
598	231		第15面 725流路	前期	弥生土器 甕蓋		(21.0)	残存 3.55	内外面ともヘラミガキ。外面にわずかに煤付着。	内） 外） 断）	10YR3/1 10YR3/1 2.5YR4/3	黒褐 黒褐 にぶい赤褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
599	231	56	第15面 725流路	縄紋中期末	縄紋土器 深鉢	18.4		残存6.7	内外面ともナデ。LRの縦位帯状紋。北白川C式。	内) 外) 断)	10YR5/2 10YR5/2 10YR2/1	灰黄褐 灰黄褐 黒	長石・石英	良好
600	232	56	第15面 727落ち込み	前期	弥生土器 壺	16.8	7.1	31.7	外面　ヘラミガキ。頸部削り出し突帯、突帯上にヘラ描き沈線３条。沈線間に２連１単位の刻み目。肩部ヘラ描き沈線４条。沈線間に２連１単位の刻み目。口縁部に内から外へ焼成前穿孔２箇所。 内面　ナデの後ヘラミガキ。	内) 外) 断)	10YR3/1 10YR3.2 10YR5/2	黒褐 黒褐 灰黄褐	長石・角閃石・チャート	良好
601	232	56	第15面 727落ち込み	前期	弥生土器 壺	(16.7)	(9.0)	33.8	外面　縦方向のヘラミガキの後横方向のヘラミガキ。頸部削り出し突帯、突帯上にヘラ描き沈線２条。体部にヘラ描き沈線３条が２帯。体部沈線帯間に有軸羽状紋。口縁部に紐孔１箇所。 内面　口縁部ハケの後ヘラミガキ。体部板ナデか。	内) 外) 断)	10YR6/3 5YR6/6 2.5Y7/2	にぶい黄橙 橙 灰黄	石英・長石	やや不良
602	232		第15面 727落ち込み	前期	弥生土器 甕	(26.0)	(9.8)	39.9	外面　板ナデ後縦方向のハケメ、底部ヘラミガキ。ヘラ描き沈線３条。口縁端部刻み目。体部最大径付近に煤付着。 内面　縦方向の板ナデの後横方向の板ナデ。底部にユビオサエ。粘土紐接合痕。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y6/2 10YR6/2 2.5Y6/2	灰黄 灰黄褐 灰黄	石英・長石・角閃石	良好
603	233		第15面 817落ち込み	前期	弥生土器 甕	(21.4)		残存4.2	外面　口縁部ヨコナデ。口縁部直下に削り出しによる段。段の下に２条以上のヘラ描き沈線。わずかに煤が付着。 内面　口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	内) 外) 断)	10YR8/2 10YR4/2 10YR8/2	灰白 灰黄褐 灰白	石英・長石	良好
604	237		第15面 854落ち込み	前期	弥生土器 壺		(9.0)		外面　ヘラミガキの後頸部・体部に削り出し突帯、頸部突帯上に１条、体部突帯上には３条のヘラ描き沈線。底部縦方向のヘラミガキ。 内面　ヘラミガキ。ユビオサエ。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 10YR4/2 2.5Y5/3	暗灰黄 灰黄褐 黄褐	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
605	237	56	第15面 854落ち込み	前期	弥生土器 壺		(8.6)	残存17.2	外面　ヘラミガキ、底部付近ナデ。体部に１条以上の沈線。 内面　ヘラミガキ。上半部は板ナデか。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR5/2 10YR3/1 10YR7/2	灰黄褐 黒褐 にぶい黄橙	長石・角閃石・赤色粒	良好
606	237	56	第15面 854落ち込み	前期	弥生土器 甕	20.4		残存13.2	外面　縦方向のハケメの後ナデ。屈曲部直下にヘラ描き沈線４条。口縁端部刻み目。 内面　ナデの後横方向のハケメ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y6/1 10YR2/1 10YR5/6	黄灰 黒 黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
607	237	56	第15面 854落ち込み	前期	弥生土器 甕	(17.8)	(7.0)	20.3	外面　板ナデの後ヘラ描き沈線３条、口縁端部刻み目。 内面　口縁部ヨコナデの後板ナデ。帯状に煤付着。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	7.5YR4/2 7.5YR5/3 7.5YR4/2	灰褐 にぶい褐 灰褐	石英・長石・角閃石・赤色粒	良好
608	237	56	第15面 854落ち込み	前期	弥生土器 甕	(21.0)	(7.8)	24.9	外面　縦方向の板ナデの後、口縁部ヨコナデ、端部刻み目。体部ヘラ描き沈線３条。底部焼成後穿孔。 内面　体部下半ヘラミガキ、体部上半板ナデの後口縁部ヨコナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	5Y5/2 10YR4/2 5Y5/2	灰オリーブ 灰黄褐 灰オリーブ	石英・長石・雲母・角閃石	良好
609	237		第15面 854落ち込み	前期	弥生土器 鉢	(18.8)		残存9.7	内外面とも摩滅著しく調整不明。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR5/3 10YR7/3	にぶい黄褐 にぶい黄褐 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
610	237		第15面 854落ち込み	前期	弥生土器 鉢	(33.2)		残存17.5	内外面とも摩滅著しく調整不明。	内) 外) 断)	7.5YR4/4 7.5YR4/6 7.5YR4/4	褐 褐 褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
611	238	55	第15面 857ピット	前期	弥生土器 小型壺	8.2	5.4	6.7	外面　口縁部横方向のナデの後、頸部以下縦・斜方向のヘラミガキ。体部下半に黒斑。 内面　口縁部・頸部上半に横方向の強いナデ。頸部下半ユビオサエの後ナデ。体部ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 2.5Y5/2 2.5Y5/2	暗灰黄 暗灰黄 暗灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
612	239		第15面 859ピット	前期	弥生土器 甕	(24.0)		残存6.0	外面　口縁部ヨコナデ、体部横方向のハケメ。 内面　ナデ、体部にユビオサエ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR5/2 10YR6/3 10YR5/2	灰黄褐 にぶい黄橙 灰黄褐	石英・長石・角閃石	良好
613	241		第15面 1142落ち込み	前期	弥生土器 壺	(14.6)		残存6.0	内外面とも口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR5/3 10YR5/3	にぶい黄褐 にぶい黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母	良好
614	241		第15面 1142落ち込み	前期	弥生土器 小型甕底部		4.8	残存6.8	外面　底部付近ユビオサエ。体部摩滅のため調整不明。 内面　ナデ。粘土紐の継ぎ目。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR3/1 10YR3/2 10YR3/1	黒褐 黒褐 黒褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
615	241		第15面 1142落ち込み	前期	弥生土器 壺		8.8	残存 16.8	外面　板ナデの後ヘラミガキ。 内面　ヘラミガキ。	内） 外） 断）	2.5Y7/2 10YR7/3 10YR7/3	灰黄 にぶい黄橙 にぶい黄橙	石英・長石	良好
616	244	57	第15面	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 6.6	最大幅 6.8	最大厚 2.5	重さ：165ｇ。花崗岩。打欠き２箇所。					
617	244	57	第15面	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 7.2	最大幅 7.9	最大厚 2.8	重さ：202.9ｇ。花崗岩。打欠き２箇所。					
618	244	57	第15面	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 6.1	最大幅 8.2	最大厚 2.0	重さ：147.5ｇ。花崗岩。打欠き２箇所。					
619	244	57	第15面	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 6.2	最大幅 8.1	最大厚 2.3	重さ：138.7ｇ。花崗岩。打欠き２箇所。					
620	244	57	第15面	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 10.4	最大幅 4.6	最大厚 2.9	重さ：200.1ｇ。結晶片岩。打欠き２箇所。					
621	244	57	第15面	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 5.8	最大幅 6.0	最大厚 1.7	重さ：73.7ｇ。花崗岩。打欠き１箇所。					
622	244	57	第15面	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 4.7	最大幅 9.6	最大厚 1.3	重さ：121.5ｇ結晶片岩。打欠き２箇所。					
623	244	57	第15面	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 5.1	最大幅 9.7	最大厚 1.5	重さ：115.6ｇ。結晶片岩。打欠き２箇所。					
624	244	57	第15面	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 5.1	最大幅 9.6	最大厚 2.1	重さ：171.3ｇ。砂岩。打欠き２箇所。					
625	244	57	第15面	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 6.6	最大幅 7.7	最大厚 2.9	重さ：242ｇ。花崗岩。打欠き４箇所。					
626	244	57	第15面	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 5.3	最大幅 8.6	最大厚 2.1	重さ：124ｇ。花崗岩。打欠き４箇所。					
627	244	57	第15面	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 6.1	最大幅 8.5	最大厚 1.7	重さ：148.3ｇ。花崗岩。打欠き４箇所。					
628	244	57	第15面	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 7.2	最大幅 11	最大厚 1.7	重さ：205.7ｇ。花崗岩。打欠き４箇所。					
629	244	57	第15面	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 9.8	最大幅 6.4	最大厚 1.5	重さ：146ｇ。結晶片岩。打欠き２箇所。					
630	244	57	第15面	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 10.4	最大幅 4.6	最大厚 2.9	重さ：200.1ｇ。結晶片岩。打欠き２箇所。					
631	244	57	第15面	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 9.4	最大幅 4.6	最大厚 1.4	重さ：71.4ｇ。結晶片岩。打欠き２箇所。					
632	244	57	第15面	弥生前期	石製品 石鏃	最大長 2.2	最大幅 1.6	最大厚 0.4	重さ：0.8ｇ。サヌカイト					
633	244	57	第15面	弥生前期	石製品 石匙	最大長 3.6	最大幅	最大厚 0.35	重さ：2.8ｇ。サヌカイト					

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
634	245	57	第15面	弥生前期	石製品 石棒	最大長 20.0	最大幅 6.9	最大厚 4.8	重さ：1176.9ｇ。結晶片岩					
635	245	57	第15面	弥生前期	石製品 石棒	最大長 16.7	最大幅 6.5	最大厚 3.0	重さ：580.4ｇ。結晶片岩					
636	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺蓋	穿孔径 0.4	9.2	5.0	外面　ヘラミガキ。口縁部付近に紐孔２連２箇所。 内面　ハケメの後ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR6/4 10YR3/2	にぶい黄橙 黒褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
637	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺蓋	穿孔径 0.35	(11.8)	3.3	内外面ともヘラミガキ。頂部に紐孔１箇所。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR4/3 7.5YR5/3 10YR5/2	にぶい黄褐 にぶい黄褐 灰黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
638	246		第15層	前期	弥生土器 壺蓋	穿孔径 0.45	(13.9)	1.7	内外面ともヘラミガキ。頂部に紐孔１箇所。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/2 10YR3/1 10YR5/2	灰黄褐 黒褐 灰黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
639	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺	8.7	(5.8)	13.4	外面　横方向のヘラミガキの後口縁部・頸部・体部にヘラ描き沈線を各２条。紐孔２箇所。 内面　ナデの後口縁部ヘラミガキ。口縁部にヘラ描き沈線１条。	内） 外） 断）	2.5Y5/2 2.5Y5/2 2.5Y5/1	暗灰黄 暗灰黄 黄灰	石英・長石・雲母・赤色粒	良好
640	246		第15層	前期	弥生土器 壺	(18.0)		残存7.2	外面　ヘラミガキ。頸部に削り出し突帯、突帯上にヘラ描き沈線２条。 内面　口縁部横方向のヘラミガキの後頸部縦方向のヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y4/2 2.5Y5/3 5Y5/2	暗灰黄 黄褐 灰オリーブ	石英・長石・雲母・角閃石	良好
641	246		第15層	前期	弥生土器 壺	(15.6)	(7.6)	27.1	外面　底部縦方向のハケメの後ヘラミガキ、体部全面横方向ヘラミガキ。頸部と体部にヘラ描き沈線４条。 内面　縦方向の板ナデの後口縁部、肩部、体部下半ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	5Y5/1 10YR5/3 5Y6/1	灰 にぶい黄褐 灰	石英・長石・雲母・角閃石	良好
642	246		第15層	前期	弥生土器 壺	(32.8)		残存15.5	外面　縦方向のハケメの後、頸部に段。横方向のヘラミガキ。頸部にヘラ描き沈線１条。 内面　左上がりのハケメの後ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	7.5YR4/4 10YR6/4 7.5YR7/4	褐 にぶい黄橙 にぶい橙	石英・長石・雲母・角閃石	良好
643	246		第15層	前期	弥生土器 壺	(21.4)		残存26.7	外面　口縁部ヨコナデの後ヘラミガキ。体部に粘土紐接合による段。 内面　体部下半ナデ、口縁部から体部上半ヘラミガキ。	内） 外） 断）	10YR5/3 10YR5/3 7.5YR5/3	にぶい黄褐 にぶい黄褐 にぶい褐	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
644	246		第15層	前期	弥生土器 壺（底部）		(8.0)	残存9.7	外面　横方向のヘラミガキ。 内面　摩滅のため調整不明。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	5YR4/3 10YR5/4	にぶい赤褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
645	246		第15層	前期	弥生土器 壺（底部）		(7.2)	残存10.3	外面　ヘラミガキ、底部周縁部ヘラミガキ、底部中央未調整。 内面　板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/3 10YR4/2 5Y6/1	にぶい黄褐 灰黄褐 灰	石英・長石・雲母・角閃石	良好
646	246		第15層	前期	弥生土器 壺（底部）		7.6	残存5.5	外面　縦方向のヘラミガキの後ヘラ描き沈線２条。ヘラ描き沈線を接いだ痕跡が明瞭。 内面　ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/4 7.5YR5/4 10YR5/2	にぶい黄褐 にぶい褐 灰黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
647	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存3.5	外面　ヘラミガキ。縦方向のヘラ描き沈線５条。 内面　ヘラミガキ。	内） 外） 断）	10YR6/4 10YR6/3 10YR7/2	にぶい黄橙 にぶい黄橙 にぶい黄橙	石英・長石・雲母	良好
648	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存4.85	外面　ヘラミガキの後削り出し突帯、突帯上に１条のヘラ描き沈線が残存。縦方向のヘラ描き沈線３条、 内面　ヘラミガキ。	内） 外） 断）	10YR7/4 10YR5/3 10YR8/2	明黄褐 にぶい黄褐 灰白	石英・長石・雲母	良好
649	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存5.15	外面　ヘラミガキの後ヘラ描き沈線３条、縦方向の沈線６条残存。 内面　ナデ。	内） 外） 断）	2.5Y5/2 2.5Y5/3 10YR4/3	暗灰黄 黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母	良好
650	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存6.4	外面　板ナデの後１条以上のヘラ描き沈線、沈線間に山形紋。 内面　板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/2 2.5Y5/2 2.5Y5/2	灰黄褐 暗灰黄 暗灰黄	石英・長石・雲母・角閃石	良好
651	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存6.5	外面　ヘラミガキの後上向重弧紋。 内面　横方向のハケメ。	内） 外） 断）	10YR5/3 2.5Y5/2 10YR5/3	にぶい黄褐 暗灰黄 にぶい黄褐	石英・長石・雲母	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
652	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存3.3	外面　ヘラミガキの後上向重弧紋。 内面　板ナデ。	内） 外） 断）	2.5Y5/3 10YR5/3 2.5Y5/3	黄褐 にぶい黄褐 黄褐	石英・長石・雲母	良好
653	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存2.75	外面　ヘラミガキの後ヘラ描き沈線３条。沈線の上位と下位に上向重弧紋。 内面　ヘラミガキ。	内） 外） 断）	2.5Y5/2 2.5Y5/2 2.5Y5/2	暗灰黄 暗灰黄 暗灰黄	石英・長石・雲母	良好
654	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存2.0	外面　ヘラミガキの後上向重弧紋。 内面　ヘラミガキ。	内） 外） 断）	2.5Y5/2 2.5Y5/2 2.5Y5/2	暗灰黄 暗灰黄 暗灰黄	石英・長石・雲母	良好
655	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存2.9	外面　摩滅のため調整不明。２条以上のヘラ描き沈線の後上向重弧紋。 内面　板ナデ。	内） 外） 断）	7.5YR5/4 10YR5/3 7.5YR7/2	にぶい褐 にぶい黄褐 明褐灰	石英・長石・雲母	良好
656	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存5.1	外面　ヘラミガキの後下向重弧紋。 内面　剥離のため調整不明。	内） 外） 断）	10YR5/3 2.5Y5//3 5YR5/3	にぶい黄褐 黄褐 灰オリーブ	石英・長石・雲母	良好
657	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存3.25	外面　ヘラミガキの後上向重弧紋。 内面　板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/3 2.5Y5//3 2.5Y5//3	にぶい黄褐 黄褐 黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
658	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存6.3	外面　ヘラミガキの後無軸木葉紋。 内面　ヘラミガキ。	内） 外） 断）	7.5YR5/4 10YR4/2 10YR6/2	にぶい褐 灰黄褐 灰黄褐	石英・長石・雲母	良好
659	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存5.6	外面　ヘラミガキの後、上位にヘラ描き沈線３条、下位にヘラ描き沈線２条。沈間に有軸木葉紋、下位の沈線帯の下に上向重弧紋。 内面　剥離のため調整不明。	内） 外） 断）	10YR5/3 2.5Y5//3 5YR5/3	にぶい黄褐 黄褐 灰オリーブ	石英・長石・雲母	良好
660	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存3.2	外面　ヘラミガキの後ヘラ描き沈線２条、有軸木葉紋。 内面　剥離のため調整不明。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y5/4 7.5YR5/4 2.5Y5/3	黄褐 にぶい褐 黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
661	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存3.9	外面　ヘラミガキの後ヘラ描き沈線３条、有軸羽状紋。 内面　ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y5/2 10YR3/2 10YR6/2	暗灰黄 黒褐 灰黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
662	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存2.1	外面　ヘラミガキの後有軸羽状紋。 内面　板ナデ。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 10YR4/3 2.5Y6/2	灰黄 にぶい黄褐 灰黄	石英・長石・雲母	良好
663	246	58	第15層	前期	弥生土器 壺			残存3.2	外面　ヘラミガキの後ヘラ描き沈線３条、有軸羽状紋。 内面　ヘラミガキ。	内） 外） 断）	2.5Y6/2 10YR5/3 2.5Y6/2	灰黄 にぶい黄褐 灰黄	石英・長石・雲母	良好
664	247		第15層	前期	弥生土器 甕蓋	つまみ径 6.4		残存7.8	外面　縦方向のヘラミガキ、つまみ頂部ナデ。 内面　ナデの後横方向のヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR4/2 10YR4/2 5YR4/3	灰黄褐 灰黄褐 にぶい赤褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
665	247		第15層	前期	弥生土器 甕蓋	つまみ径 6.0		残存8.1	外面　板ナデ、つまみ頂部ナデ。 内面　ナデの後横方向のヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	2.5Y5/3 2.5Y6/2 2.5Y6/1	黄褐 灰黄 黄灰	石英・長石・雲母・角閃石	良好
666	247		第15層	前期	弥生土器 甕蓋	つまみ径 5.4	(20.3)	9.0	外面　縦方向ヘラミガキの後横方向のヘラミガキ。 内面　横方向のヘラミガキ。口縁部に煤がわずかに付着。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	7.5YR6/4 10YR6/4 10YR7/4	にぶい橙 にぶい黄橙 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・角閃石	良好
667	247		第15層	前期	弥生土器 甕	(21.4)		残存12.9	外面　口縁部ヨコナデの後板ナデ。ヘラ描き沈線１条。口縁端部に刻み目。 内面　口縁部ヨコナデ、体部板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR5/3 10YR4/2 10YR7/3	にぶい黄褐 灰黄褐 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・角閃石	良好
668	247		第15層	前期	弥生土器 甕	(21.6)		残存12.0	外面　口縁部ヨコナデの後全体に板ナデ。ヘラ描き沈線４条。口縁端部刻み目。口縁部に焼成後穿孔。煤がわずかに付着。 内面　横方向のハケメの後ナデ後ヘラミガキ。 生駒山西麓産胎土。	内） 外） 断）	10YR4/3 10YR5/3 10YR5/4	にぶい黄褐 にぶい黄褐 にぶい黄褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
669	247		第15層	前期	弥生土器 甕	(25.5)		残存12.8	外面　口縁部ヨコナデの後体部縦方向のハケメ。ヘラ描き沈線３条。口縁端部に刻み目。わずかに煤付着。 内面　口縁部ヨコナデ、体部摩滅のため調整不明。	内） 外） 断）	7.5YR5/6 7.5YR5/6 7.5YR5/6	明褐 明褐 明褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
670	247		第15層	前期	弥生土器 甕	(24.0)		残存 15.45	外面　口縁部ヨコナデ、端部に刻み目。体部板ナデの後ヘラ描き沈線１条。体部最大径付近に帯状に煤が付着。 内面　口縁部ヨコナデ、体部板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 10YR5/2 2.5Y6/1	暗灰黄 灰黄褐 黄灰	石英･長石･雲母･角閃石	良好
671	247		第15層	前期	弥生土器 甕	(26.0)		残存 10.0	外面　ナデ、口縁部ヨコナデ、端部に刻み目。ヘラ描き沈線２条。 内面　口縁部ヨコナデ、体部ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	2.5Y4/2 2.5Y4/2 2.5Y6/2	暗灰黄 暗灰黄 灰黄	石英･長石･雲母･角閃石･赤色粒	良好
672	247		第15層	前期	弥生土器 甕	(20.2)		残存7.7	外面　口縁下2.8cmに粘土紐接合による段。横方向のハケメの後口縁部ヨコナデ。段の上下にヘラ描き沈線２条。沈線内にわずかに煤付着。 内面　板ナデ。	内) 外) 断)	10YR6/4 10YR2/1 2.5Y6/3	にぶい黄橙 黒 にぶい黄	石英・長石・雲母・チャート	良好
673	247		第15層	前期	弥生土器 甕	(27.0)		残存 12.1	外面　口縁部ヨコナデ。体部板ナデの後屈曲部直下に削り出し突帯、突帯上にヘラ描き沈線２条。一部ヘラミガキ。 内面　口縁部ハケメの後ナデ、体部ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR5/4 10YR3/2 2.5Y5/1	にぶい黄褐 黒褐 黄灰	石英･長石･雲母･角閃石･赤色粒	良好
674	247		第15層	前期	弥生土器 甕	(25.2)		残存 10.0	外面　屈曲部下1.9cmに粘土紐接合による段。口縁部ヨコナデ、端部に刻み目。体部ナデ。ヘラ描き沈線２条、 内面　口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	内) 外) 断)	7.5YR6/3 2.5Y6/2 10YR6/2	にぶい褐 灰黄 灰黄褐	石英･長石･雲母	やや不良
675	247		第15層	前期	弥生土器 甕	(22.6)		残存 20.3	内外面とも口縁部ヨコナデ、端部に刻み目。体部板ナデ。外面に煤付着。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR5/3 2.5Y7/2	にぶい黄褐 にぶい黄褐 灰黄	石英･長石･雲母･赤色粒	良好
676	247		第15層	前期	弥生土器 甕	(38.4)		残存9.1	外面　口縁部ヨコナデ、体部ナデ。屈曲部に貼り付け突帯、その上下にヘラ描き沈線を１条。沈線下に４条の山形紋。わずかに煤付着。 内面　口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR6/3 10YR5/3	にぶい黄橙 にぶい黄褐 にぶい黄橙	石英･長石･雲母	良好
677	247		第15層	前期	弥生土器 甕	(17.6)	6.8	11.9	外面　口縁部横方向のナデ、口縁端部に刻み目。体部摩滅のため調整不明。縦方向のハケメの後ナデか。底部に焼成後穿孔。 内面　横方向のハケメの後ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR4/3 10YR4/2 10YR6/3	にぶい黄褐 灰黄褐 にぶい黄橙	石英･長石･雲母･角閃石･赤色粒	良好
678	247		第15層	前期	弥生土器 甕	(38.0)		残存 18.9	外面　口縁端部下3cmに粘土紐接合による段。板ナデ、口縁部ヨコナデ、端部刻み目。わずかに煤付着。 内面　体部板ナデの後口縁部ヨコナデ。	内) 外) 断)	7.5YR5/4 7.5YR5/4 4.5YR4/4	にぶい褐 にぶい褐 褐	石英･長石･雲母	やや不良
679	248		第15層	前期	弥生土器 甕	(24.0)		残存 11.2	外面　口縁部ヨコナデ、体部板ナデ。 内面　口縁部ヨコナデ、体部板ナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR4/2 7.5YR5/3 2.5Y5/1	灰黄褐 にぶい褐 黄灰	石英・長石・雲母・角閃石	良好
680	248		第15層	前期	弥生土器 甕		6.6	残存 20.45	外面　板ナデの後底部付近ヘラミガキ。 内面　板ナデ。 内外面とも帯状に煤付着。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR4/2 7.5YR4/3	にぶい黄褐 灰黄褐 褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
681	248		第15層	前期	弥生土器 甕（底部）		(7.8)	残存 5.55	外面　剥離のため調整不明。 内面　板ナデ。 断面　粘土塊をおき、その外側に粘土帯を貼り付けていく過程が観察できる。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR6/3 7.5YR6/4 7.5YR6/4	にぶい黄橙 にぶい橙 にぶい黄褐	石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒	良好
682	248		第15層	前期	弥生土器 甕（底部）		7.4	残存8.7	外面　縦方向のハケメ。底部ナデ。 内面　縦方向のハケメ、底部ナデ。	内) 外) 断)	10YR6/4 10YR5/3 10YR6/4	にぶい黄橙 にぶい黄褐 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・角閃石	良好
683	248	58	第15層	前期	弥生土器 ミニチュア甕蓋	つまみ径 3.8	5.35	3.7	内外面ともナデ。 生駒山西麓産胎土。	内) 外) 断)	10YR5/4 10YR5/4	にぶい褐 にぶい褐	石英・長石・雲母・角閃石	良好
684	248	58	第15層	晩期	縄紋土器 突帯紋		残存幅 3.9	残存長 (2.9)	内外面ともヨコナデ。 貼り付け突帯、突帯上刻み目。	内) 外) 断)	10YR4/2 2.5Y3/1～2.5Y2/1 10YR4/2	灰黄褐 黒褐～黒 灰黄褐	長石・雲母	良好
685	248		第15層	晩期	縄紋土器 突帯紋			残存2.4	内外面ともヨコナデ。 貼り付け突帯、突帯上に刻み目。	内) 外) 断)	10YR6/3 10YR6/3 2.5Y4/1	にぶい黄橙 にぶい黄橙 黄灰	石英・長石	良好
686	248	58	第15層	前期	弥生土器 鉢	20.1	7.2	13.0	外面　縦方向のハケメの後ヘラミガキ、底部ヘラミガキ。 内面　板ナデの後ヘラミガキ。	内) 外) 断)	5Y2/1 10YR5/3 10YR4/2	黒 にぶい黄褐 灰黄褐	石英・長石・雲母	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
687	248		第15層	前期	弥生土器 鉢	(37.8)		残存17.0	外面　体部板ナデ、口縁部ヨコナデ後ヘラ描き沈線３条。沈線間に刺突紋。 内面　体部板ナデ、口縁部ヨコナデ。	内) 外) 断)	10YR4/3 10YR5/3 10YR5/1	にぶい黄褐 にぶい黄褐 褐灰	石英・長石・雲母・角閃石	良好
688	248		第15層	前期	弥生土器 鉢	(41.9)		残存13.5	外面　粘土紐接合による段、段を板状工具により整形。口縁端部に刻み目。 内面　摩滅著しく調整不明。	内) 外) 断)	7.5YR6/8 10YR6/4 5YR5/4	橙 にぶい黄橙 にぶい赤褐	石英・長石・雲母・赤色粒	良好
689	248	59	第15層	弥生前期	土製品 板状土錘	最大長 8.6	最大幅 5.8 最大厚：3.1	孔径 0.6	手づくね、ナデ。重さ：192.1ｇ。	外)	7.5YR5/4	にぶい褐	石英・長石・角閃石・黒色粒	良好
690	248	59	第15層	弥生前期	土製品 板状土錘	最大長 8.4	最大幅 6.8 最大厚：4.4	孔径 0.4	手づくね、ナデ。重さ：273.0ｇ。	内) 外) 断)	10YR6/3	にぶい黄橙	石英・長石・角閃石	良好
691	248		第15層	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 8.3	最大幅 4.7	最大厚 1.3	重さ：93.6ｇ。結晶片岩。打欠き２箇所。					
692	248	59	第15層	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 4.6	最大幅 8.7	最大厚 1.5	重さ：78.5ｇ。砂岩。打欠き２箇所。					
693	248	59	第15・16層	弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 10.4	最大幅 6.8	最大厚 1.4	重さ：125.8ｇ。砂岩。打欠き２箇所。					
694	248	59		弥生前期	石製品 打欠石錘	最大長 9.5	最大幅 5.3	最大厚 1.3	重さ：129.8ｇ。結晶片岩。打欠き２箇所。					
695	248		第15層	弥生前期	石製品 砥石				重さ：226.3ｇ。砂岩					
696	249		第15層	弥生前期	石製品 大形刃器	最大長 15.9	最大幅 9.8	最大厚 2.5	重さ：516.9g。サヌカイト					
697	249		第15層	弥生前期	石製品 剥片	最大長 6.1	最大幅	最大厚 1.0	重さ：24.0g。サヌカイト					
698	253	60	第16面 958土坑	前期	弥生土器 甕	21.4		残存8.3	口縁部ヨコナデ、端部刻み目。内外面ともナデ。外面段。	内) 外) 断)	10YR5/2 10YR3/1 10YR5/2	灰黄褐 黒褐 灰黄褐	長石・石英・雲母	良好
699	254		第16面 967土坑	前期	弥生土器 ミニチュア壺		胴部最大径 8.8	残存8.5	外面ユビオサエの後ヘラミガキ。ヘラ描き沈線。内面ナデ。	内) 外) 断)	5YR6/4 7.5YR6/4	にぶい橙 にぶい橙	長石・石英・雲母・角閃石	良好
700	254	60	第16面 967土坑	前期	弥生土器 壺	15.6		残存12.9	口縁端部ヨコナデ、口縁部内面ヘラミガキ。体部外面ヘラミガキ、内面ナデ。ユビオサエ。	内) 外) 断)	10YR3/1 10YR6/4 10YR5/2	黒褐 にぶい黄橙 灰黄褐	石英・長石・雲母	良好
701	254		第16面 967土坑	前期	弥生土器 小型甕	14.0		残存4.4	口縁部ヨコナデ。外面板ナデ、内面ナデ。	内) 外) 断)	10YR5/1 10YR3/1 10YR5/1	褐灰 黒褐 褐灰	長石・石英	良好
702	254	60	第16面 967土坑	前期	弥生土器 甕	25.0		残存8.6	口縁部ヨコナデ、端部刻み目。内外面ともナデ。内面ユビオサエ。	内) 外) 断)	2.5Y6/2 2.5Y6/3 7.5YR5/3	灰黄 にぶい黄 にぶい褐	長石・石英	やや不良
703	254	60	第16面 967土坑	前期	弥生土器 甕	22.6		残存10.5	口縁部ヨコナデ。体部外面板ナデ、内面ナデ。	内) 外) 断)	10YR4/1 10YR5/2 10YR6/3	褐灰 灰黄褐 にぶい黄橙	石英・長石・雲母・赤色粒	良好
704	254		第16面 967土坑	前期	弥生土器 甕（底部）		8.0	残存8.6	外面ハケメ、内面摩耗により調整不明。底部外面ナデ。	内) 外) 断)	10YR4/1 10YR5/2 10YR5/1	褐灰 灰黄褐 褐灰	長石・石英・雲母・角閃石	良好
705	255	60	第16面 977溝	前期	弥生土器 壺		5.0	残存6.1	内外面ともナデ。粘土紐の接合痕。	内) 外) 断)	10YR7/4 7.5YR7/4	にぶい黄橙 にぶい橙	長石・石英・雲母	良好

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
706	255		第16面 977溝	前期	弥生土器 壺（底部）		9.6	残存9.8	外面ハケメの後ヘラミガキ。ヘラ描き沈線１条。底部ハケメの後ナデ。内面摩耗のため調整不明。	内） 外） 断）	10YR5/1 10YR6/4 10YR5/1	褐灰 にぶい黄橙 褐灰	長石・石英・角閃石・雲母	良好
707	255	60	第16面 977溝	前期	弥生土器 高杯	14.0		残存9.0	口縁端部ヨコナデ。坏部内外面ともヘラミガキ。坏部に粘土紐接合痕。脚部内外面ともナデ。	内） 外） 断）	2.5Y5/2 2.5Y4/1	暗灰黄 黄灰	長石・石英・角閃石	良好
708	255	60	第16面 977溝	前期	弥生土器 鉢	23.0		残存11.2	内外面ともヘラミガキ。	内） 外） 断）	10YR4/2 10YR3/1	灰黄褐 黒褐	長石・石英・角閃石・雲母	良好
709	257	60	第16面 1132ピット	前期	弥生土器 壺	15.4		残存7.0	口縁部ヘラミガキ、外面ナデ。ヘラ描き沈線５条。内面ヘラミガキ。	内） 外） 断）	2.5YR5/4 2.5YR6/4 7.5YR7/3	にぶい橙 にぶい橙 にぶい橙	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒	良好
710	257		第16面 1132ピット	前期	弥生土器 壺（体部）			残存6.4	外面ヘラミガキ。有軸Ｘ木葉紋。内面ナデ。	内） 外） 断）	10YR7/2 2.5YR5/6 10YR7/2	にぶい黄橙 明赤褐 にぶい黄橙	長石・石英・赤色粒	やや硬
711	257		第16面 1101ピット	前期	弥生土器 甕（底部）		3.4	残存3.0	外面ハケメ、内面調整不明。	内） 外） 断）	10YR5/2 7.5YR5/3	灰黄褐 にぶい褐	長石・石英・角閃石・雲母	良好
712	257		第16面 1105ピット	前期	弥生土器 甕（底部）		9.6	残存5.6	外面ハケメ、内面ナデ。	内） 外） 断）	10YR5/4 5YR6/4	にぶい黄褐 にぶい橙	長石・石英・角閃石・雲母	良好
713	257		第16面 1015ピット	前期	弥生土器 甕（底部）		6.6	残存5.4	外面上位ハケメ、下位ヘラミガキ。内面ハケメの後ナデ。底部焼成後穿孔。	内） 外） 断）	2.5Y6/4 10YR6/4 2.5Y6/4	にぶい黄 にぶい黄橙 にぶい黄	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒	良好
714	257		第16面 1046ピット	前期	弥生土器 甕	23.0	7.3	推定24.0	口縁部ヨコナデ、端部刻み目。外面ヘラ描き沈線２条。端部から沈線付近まで煤付着。底部穿孔か。	内） 外） 断）	10YR4/2 10YR3/2 10YR5/3	灰黄褐 黒褐 にぶい黄褐	長石・石英・赤色粒	やや軟
715	258	60	第16面	前期	弥生土器 小型甕	12.4	5.0	11.5	口縁部ヨコナデ。内外面ともヘラミガキ。底部外面ナデ。	内） 外） 断）	10YR4/3 10YR4/2	にぶい黄褐 灰黄褐	長石・石英・雲母	良好
716	259		第16層	前期	弥生土器 壺蓋		11.25	残存2.15	内外面とも調整不明。つまみ部ユビオサエ。	内） 外） 断）	10YR5/3 10YR5/2 2.5Y5/2	にぶい黄褐 灰黄褐 暗灰黄	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒	やや硬
717	259		第16層	前期	弥生土器 壺	16.0		残存6.4	口縁端部ヨコナデ。内外面ともハケメの後ヘラミガキ。頸部ヘラ描き沈線２条。	内） 外） 断）	2.5Y3/2	黒褐	石英・長石・角閃石・雲母	良好
718	259		第16層	前期	弥生土器 壺（体部）			残存6.4	外面ヘラミガキ。ヘラ描き沈線、重弧紋か。内面ナデ。	内） 外） 断）	2.5Y5/2 10YR5/2	暗灰黄 灰黄褐	石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒	良好
719	259		第16層	前期	弥生土器 壺			残存6.8	外面ヘラミガキ。ヘラ描き沈線３条、下向重弧紋。内面上位ヘラミガキ、下位ナデ。	内） 外） 断）	2.5Y5/3 10YR5/4 2.5Y5/3	黄褐 にぶい黄褐 黄褐	長石・石英・角閃石・雲母	良好
720	259		第16層	前期	弥生土器 壺		7.8	残存6.7	内面板ナデ。	内） 外） 断）	10YR6/3 5YR6/4	にぶい黄橙 にぶい橙	石英・長石・角閃石・雲母	良好
721	259	60	第16層	前期	弥生土器 甕	18.0		残存9.8	口縁部ヨコナデ、端部刻み目。外面ハケメの後ナデ。ヘラ描き沈線１条。内面板ナデ。	内） 外） 断）	10YR5/3	にぶい黄褐	長石・石英・角閃石・雲母	良好
722	259		第16層	前期	弥生土器 鉢	21.0		残存10.5	口縁部ヨコナデ、端部刻み目。外面ヘラケズリの後ナデ。内面調整不明。	内） 外） 断）	5YR5/4 7.5YR4/4	にぶい赤褐 褐	石英・長石・角閃石・雲母	良好
723	259		第16層	前期	弥生土器 鉢	25.0		残存5.9	口縁部ヘラミガキ。外面ヘラミガキ。内面ハケメの後ナデ。	内） 外） 断）	10YR5/4 N1.5/0 10YR5/4	にぶい黄褐 黒 にぶい黄褐	石英・長石・角閃石・雲母	良好
724	259		第16層	縄紋晩期	縄紋土器 深鉢 （長原式）			残存3.6	内外面ともナデ。突帯上刻み目。	内） 外） 断）	10YR3/1 10YR4/2	黒褐 灰黄褐	長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒	やや軟

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構面 遺構 層	時期	種類 器種	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	成形・調整・特徴　備考	色調			胎土	焼成
725	265	61	第17面 971木棺墓	前期	弥生土器 広口壺	13.8		残存6.0	口縁端部ヨコナデ。内外面ともヘラミガキ。頸部削り出しによる段、縦位ヘラ描き沈線２条。	内) 外) 断)	5Y2/1～2.5Y4/4 10YR2/1 10YR4/1	黒～オリーブ褐 黒 褐灰	長石・石英・角閃石・雲母	良好
726	265		第17面 971木棺墓	前期	弥生土器 壺（底部）		15.8	残存3.8	外面ナデ。内面ナデの後ヘラミガキ。底部外面未調整。	内) 外) 断)	2.5Y5/3 N3/ 5Y5/1	黄褐 暗灰 灰	長石・石英・角閃石・雲母	良好
727	265		第17面 971木棺墓	前期	弥生土器 壺（底部）		14.8	残存4.2	外面板ナデ。内面ナデの後粗いヘラミガキ。底部外面未調整。	内) 外) 断)	5YR4/3 10YR5/3 7.5YR5/2	にぶい赤褐 にぶい黄褐 灰褐	石英・長石・赤色粒・雲母	良好
728	265	61	第17面 971木棺墓（覆土）	前期	弥生土器 甕	17.6		残存5.3	口縁部ヨコナデ。内外面ともナデ。ヘラ描き沈線３条。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 N3/ 2.5Y5/2	暗灰黄 暗灰 暗灰黄	長石・石英・角閃石・雲母	良好
729	265	61	第17面 971木棺墓	前期	弥生土器 甕（底部）		7.0	残存4.4	外面板ナデ、内面調整不明。底部外面板ナデ。	内) 外) 断)	2.5Y4/2	暗灰黄	石英・長石・角閃石	良好
730	265	61	第17面 971木棺墓	前期	弥生土器 甕		8.4	残存28.0	外面ヘラミガキ。煤付着。内面板ナデの後ナデ。底部外面未調整。外面煤付着。	内) 外) 断)	10YR6/4～10YR4/2 2.5Y6/3～10YR1.7/1 2.5Y7/1	にぶい黄橙～灰黄褐 にぶい黄～黒 灰白	長石・石英・角閃石・雲母	良好
731	265	61	第17面 971木棺墓	前期	弥生土器 鉢	19.8		残存5.7	口縁部ヨコナデ、内外面ヘラミガキ。	内) 外) 断)	10YR5/2 2.5Y5/2	灰黄褐 暗灰黄	石英・長石・角閃石・雲母	良好
732	265	61	第17面 971木棺墓 （木棺覆土）	縄紋晩期	縄紋土器 突帯紋			残存2.8	口縁部ヨコナデ、外面板ナデ。突帯貼り付け後刻み目。内面ナデ。	内) 外) 断)	10YR5/3	にぶい黄褐	石英・長石・角閃石	良好
733	267	61	第17面 972木棺墓 （木棺設置前埋土）	前期	弥生土器 壺（体部）			残存5.7	外面ヨコナデ、ナデか。内面板ナデ。	内) 外) 断)	10YR6/2 10YR7/1 5YR7/3	灰黄褐 灰白 にぶい橙	石英・長石	やや不良
734	267	61	第17面 972木棺墓 （底板上覆土）	前期	弥生土器 壺（体部）			残存4.0	外面ヘラミガキ。ヘラ描き沈線縦位３条横位２条。内面横方向ナデ。	内) 外) 断)	10YR5/3	にぶい黄褐	石英・長石・角閃石	良好
735	267	61	第17面 972木棺墓	前期	弥生土器 壺（体部）			残存4.3	外面ヘラミガキ。ヘラ描き沈線縦位６条。内面横方向ナデ。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 10YR5/2	暗灰黄 灰黄褐	石英・長石・角閃石	良好
736	267		第17面 972木棺墓	前期	弥生土器 甕（底部）		7.6	残存3.6	内外面ともナデ。底部外面未調整。	内) 外) 断)	10YR5/3 5YR6/4 10YR5/3	にぶい黄褐 にぶい橙 にぶい黄褐	長石・石英・角閃石	良好
737	268	61	第17面 975木棺墓	前期	弥生土器 甕（底部）		6.6	残存5.8	内外面ともナデ。体部外面籾圧痕。	内) 外) 断)	5Y6/1 2.5Y6/3 2.5Y7/3	灰～黒 にぶい黄 浅黄	長石・石英・角閃石・雲母	良好
738	269		第17面 1113土坑	前期	弥生土器 甕	15.5		残存4.4	口縁部ヨコナデ、端部刻み目。外面ナデ。ヘラ描き沈線１条。内面板ナデ。	内) 外) 断)	10YR5/3 10YR3/2 2.5Y5/2	にぶい黄褐 黒褐 暗灰黄	石英・長石・角閃石	良好
739	269		第17面 1113土坑	前期	弥生土器 甕（底部）		9.0	残存2.9	外面板ナデ。内面調整不明。底部外面未調整。	内) 外) 断)	2.5Y5/2 7.5YR5/3 10YR5/1	暗灰黄 にぶい褐 褐灰	石英・長石・角閃石	良好
740	269		第17面 1113土坑	前期	弥生土器 甕（底部）		7.0	残存5.5	外面上位板ナデ、下位ヘラミガキ。内面調整不明。底部焼成後内外両側から穿孔。	内) 外) 断)	10YR4/2 10YR5/2 10YR3/2	灰黄褐 灰黄褐 黒褐	長石・石英・角閃石・赤色粒	良好
741	269		第17面 1114土坑	前期	弥生土器 ミニチュア壺（底部）		4.1	残存2.0	外面板ナデの後ヘラミガキ。内面ナデ。底部外面ヘラミガキ。	内) 外) 断)	7.5YR8/3 10YR4/2 7.5YR8/3	浅黄橙 灰黄褐 浅黄橙	長石・石英	良好
742	269		第17面 1115土坑	前期	弥生土器 甕（底部）		8.0	残存3.3	外面板ナデの後ヘラミガキ。内面ナデ。底部外面未調整。	内) 外) 断)	10YR6/4 2.5Y6/2	にぶい黄橙 灰黄	長石・石英・角閃石・雲母	良好
743	269		第17面 973土坑	前期	土製品 管状土錘	最大長 5.1	最大径 2.8	孔径 0.4	手づくね。ナデ。重さ：36.4ｇ	外)	10YR5/4	にぶい黄褐	長石・石英・角閃石・雲母	良好

第４章　出土遺物の検討

土錘・石錘（図 270・表１～３・図版 59）

今回の調査で弥生時代前期の遺構および包含層中より土錘 58 点 (管状土錘 56 点、板状土錘２点)、が出土した。また、第 13 層～第 15 層において打欠石錘が 35 点出土した。これらの遺物について検討を加えてみる。

管状土錘は 56 点中 51 点が第 15 面 835 溝から出土しており、そのうち 50 点が 835 溝②と呼称した場所からの出土である。さらに、１点を除いては３点、６点、７点、33 点がまとまった状態で出土した。なかでも 33 点 (507 ～ 517、527 ～ 548) については紐のようなもので連結されていたと考えられる状態で出土した。これらの土錘の詳細な出土状況については本文中で述べたとおりであるが、835 溝が木製品水漬け遺構として 835 溝③を掘削した際に発生した掘削土の中から出土した。

今回出土した管状土錘は和田分類 (和田 1982) の a 類に属する。但し、今回出土した土錘は長さと幅の比率、孔径の大きさから２種類に大別できた。１類は、長さ 5.1 ～ 7.2 ㎝、幅 2.7 ～ 4.8 ㎝、孔径 0.4 ～ 1.1 ㎝、重さ 35.6 ～ 162.1 ｇ、長さ／幅の比率が 1：1.39 ～ 2.25 の細身で紡錘形を呈し、孔径が小さい。胎土は石英・長石の他に少量の角閃石を含む。また、雲母を含むものも 11 点みられる。色調は灰白色を呈するものが多い。１類は 24 点出土した。(526・566) の２点については重さは 160 ｇ前後を量るが、それ以外の 22 点については 90 ｇ未満で、その平均の重さは 64.54 ｇとなる。土錘の両端部は紐ずれによる欠損が認められるものもあり、使用されていたことがわかる。但し、体部表面の欠損は認められなかった。

２類は、長さ 4.2 ～ 5.9 ㎝、幅 3.8 ～ 4.8 ㎝、孔径 1.0 ～ 1.4 ㎝、重さ 50.7 ～ 118.7 ｇ、長さ／幅の比率が 1：1.04 ～ 1.43 のずんぐりしたタイプで孔径が大きい。重さも１類に比べて重いものが多い。胎土については１類と同様石英･長石･角閃石が含まれ、色調は生駒山西麓産土器と類似するチョコレート色を呈する。２類は 32 点出土した。２類のうち (304) は 50.7 ｇと軽量であるが、それ以外は 82.5 ～ 118.7 ｇを量り、平均の重さは 96.5 ｇである。両端部には僅かではあるが紐ずれの痕跡が残るものも確認できた。１類と同様体部の欠損は認められなかった。但し、(537) については体部に直径 1.7 ㎝の竹管状の圧痕がみられ、土錘製作時に竹が使用されたことを示す痕跡であると考えられる。今回連なった状態で出土した 33 点は、１類が 11 点 (507 ～ 517)、２類が 22 点 (527 ～ 548) を数えるが、混在した形で出土しており配列に規則性は認められなかった。このことは魚網の形態が不明なため断定することはできないが、網に装着された状態ではなく土錘のみが紐に通された状態であった可能性が高い。また、２類の孔径は１類の孔径に比して 1.1 ～ 1.6 ㎝と大きいことは、別々の魚網に取り付けられたもの、取り付け部位による紐の直径の違い、もしくは複数の紐を通すためと考えられるが、魚網の形態が不明である以上断定はできない。

しかし、愛知県一宮市博物館の久保禎子氏に実見していただいたところ、「個々の錘には使用痕が認められるものの、曳き網錘に残る引き擦り痕が認められないこと、比較的重いものがみられることから、定置製の高い底刺し網の可能性が考えられる。但し、網が使用された漁場の底の状況が不明なため土錘からだけで判断できない。」との所見をいただいた。

次に板状土錘についてであるが、本調査区において２点 (688・689) 確認された。なお、07 －２調査区でも１点 (07 －２調査区　図 120 －１) 出土しており、池島・福万寺遺跡では３点出土したことになる。この 07 －２調査区から出土した板状土錘も含めて記述する。

(688) は完形で、長さ 8.6 ㎝、幅 5.8 ㎝、厚さ 3.1 ㎝を測る。重さは 192.1 ｇを量る。平面は扁平な楕円形で長軸両端部に幅 0.7 ～ 1.0 ㎝の抉りをもつ。断面形は裏面は平らであるが表面中央部が厚くなる。また、土錘中央部を短軸方向に直径 0.6 ㎝の貫通孔が穿孔される。(689) は一部を欠損する。長さ 8.4 ㎝以上 (推定 8.6 ㎝)、幅 6.8 ㎝、厚さ 4.4 ㎝を測る。残存する重さは 273.0 ｇである。平面形は楕円体で断面は中央部が厚くなる。残存する重さは 273.0 ｇである。残存する長軸端部に幅 0.8 ㎝の抉りをもつ。また、土錘中央部を短軸方向に直径 0.4 ㎝の貫通孔が穿孔される。07 －２調査区で出土した板状土錘は完形で、長さ 8.5 ㎝、幅 6.1 ㎝、厚さ 4.2 ㎝を測る。重さは 262.8 ｇを量る。平面が扁平な楕円形で長軸両端部に幅 0.8 ㎝の抉りをもつ。また、土錘中央部を短軸方向に直径 0.7 ㎝の貫通孔が穿孔される。断面形は裏面は平らであるが表面中央部が厚くなる。また、土錘中央部を短軸方向に直径 0.5 ㎝の貫通孔が穿孔される。これら３点の土錘の胎土には角閃石が含まれており、在地で作られたものと考えられる。

本調査区から出土した板状土錘は、北九州から西部瀬戸内に分布しているものの、大阪湾岸では例がないと報告されていたものに類似する (下條 1993)。しかし、北九州から西部瀬戸内に分布するものと比較して、平面的にはやや小振りである。また、土錘表面は平らではなく中央部が厚く盛り上がっており、厚さは分厚い。ただ、長軸両端部に抉りを入れることや中央部に貫通孔をもつ点は共通することから、板状土錘の一種と考えられ、その分布が大阪湾岸まで広がっていたことを示す資料といえよう。

石錘は打欠石錘で 35 点出土した (表３)。これらの石錘のうち 16 点は第 15 面の 20A- 9e 区で面上に広がった状態で出土した。また、それ以外に 20A- 9e 区で第 14 層出土のもの (288・289・294) や第 13 －２面 687・688 溝出土の石錘 (221・222) についても、出土した位置や 687・688 溝が掘削されてすぐに埋め戻されていることなどから、第 15 面に広がっていた石錘の一部が捲き上げられたものと考えられる。これらも合わせると確実に弥生時代前期に属する石錘は 27 点を数える。

出土した打欠石錘の石材は花崗岩製が 18 点、結晶片岩製 15 点で大部分を占め、残りは砂岩製が３点、安山岩製１点である。抉りのある軸を横軸に配して報告を行ったが、抉りが３ヶ所以上あるものについては基本的に横方向を長軸とした。打欠石錘のうち完形品は 34 点を数え、横方向に長軸を有するものが 26 点、縦方向に長軸を有するものは８点である。また、抉りの数は長軸方向に２ヶ所をもつものが 19 点と多い。３ヶ所以上抉りをもつものは７点出土した。石錘の大きさは横方向に長軸をもつものは縦 4.7 ～ 7.7 ㎝、横 6.8 ～ 11.1 ㎝、縦方向に長軸をもつものについては縦 8.7 ～ 12.6 ㎝、横 4.6 ～ 6.8 ㎝で、抉り位置を気にしなければさほど大きさ

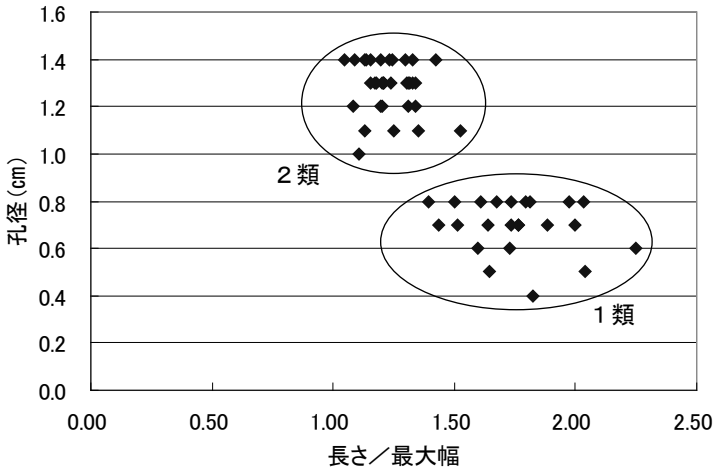


図 270　　管状土錘　長さ / 最大幅と孔径の関係図

に差はない。また、重さについても差は認められず、完形のもので 78.5 ～ 242.0 ｇ、平均の重さは 154.6 ｇであった。

以上､本調査において可能性のあるものも含めて弥生時代前期に属する管状土錘 56 点､板状土錘２点､石錘 37 点が出土したことは、788 炉跡から被熱して白色化したコイの腹椎骨が出土したこと、時期は少し下がるが 06 － 2 調査区の第 13 面 (弥生時代前期末～中期初頭) の土坑からも被熱したコイの咽頭歯やコイ科の腹椎、さらにウナギ目の椎骨といった淡水魚の魚骨が出土していることなどから、当時稲作とともに漁撈が行われていたことの証左となる遺物と考えられる。また、縄紋時代から使用されてきた石錘と弥生時代に出現する土錘が同一面から出土したことは、第 15 面が縄紋社会から弥生社会への移り変わりの最中にあったことを表す遺物であるといえる。 (後藤信義)

参考文献

秋山浩三・後藤理加　1998 「池上曽根遺跡の土錘・石錘とその評価」『みずほ』第 27 号　大和弥生文化の会

一宮市博物館　1994 『漁の技術史－木曽川から伊勢湾へ－』

一宮市博物館　2002 『川から海へ 1 －人が動く・モノが運ばれるー』

一宮市博物館　2010 『木曽川をめぐる人と文化～川とともに生きる～』

大野左千夫　1981 「石錘についての覚書」『古代学研究』第 95 号　古代學研究會

大野左千夫　1981 「７漁撈」『三世紀の考古学　中巻』學生社

下條信行　1993 「わが国初期稲作期における土錘の伝来と東伝」『考古論集－潮見　浩先生退官記念論文集－』潮見　浩先生退官記念事業会

乗松真也　2006 「漁業用の錘からみた地域間交流」『日本考古学協会 2006 年度愛媛大会研究発表資料集』 日本考古学協会 2006 年度愛媛大会実行委員会

平川敬治　1990 「網漁における伝統的沈子についての２, ３の問題」『九州考古学』第 65 号

松岡達郎・中田清彦・横山英介　1977 「礫石錘考」『考古学研究』第 24 巻第 1 号　考古学研究会

真鍋篤行　1993 「瀬戸内地方出土土錘の変遷」『瀬戸内地方出土土錘調査報告書 (Ⅱ)』 瀬戸内海歴史民俗資料館

真鍋篤行　1994 「弥生時代以降の瀬戸内地方の漁業の発展に関する考古学的考察」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第７号 瀬戸内海歴史民俗資料館

真鍋篤行　1995 「瀬戸内地方の土錘に関する一考察」『民具マンスリー』第 28 巻第６号　神奈川大学日本常民文化研究所

真鍋篤行　1995 「弥生・古墳時代の瀬戸内海の漁業」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第８号　瀬戸内海歴史民俗資料館

真鍋篤行　1996 「瀬戸内地方の網漁業技術史の諸問題」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第９号　瀬戸内海歴史民俗資料館

森　浩一　1964 「第一章　原始産業」「第二章　古代産業 (一)」『産業史Ⅰ』山川出版社

和田晴吾　1980 「漁具資料」『考古学メモワール　1980』 京都大学「考古学メモワール」編集委員会　學生社

和田晴吾　1982 「弥生・古墳時代の漁具」『小林行雄先生古希記念　考古学論考』 平凡社

和田晴吾　1985 「土錘・石錘」『弥生文化の研究５　道具と技術Ⅰ』雄山閣出版

渡辺　仁　1969 「所謂石錘について。先史学に於ける用途の問題。」『考古学雑誌』第 55 巻第２号

渡辺　誠　1973 『縄文時代の漁業』雄山閣出版

渡辺　誠　19785 「漁業の考古学」『講座・日本技術の社会史　第二巻　塩業・漁業』日本評論社

堺市博物館　1987 『漁具の考古学－さかなをとる－』

表1　管状土錘一覧表

員数	報告書番号	類型	長さ（cm）	最大幅（cm）	長さ／最大幅	孔径（cm）	重さ（g）	層　位	遺　構	胎土
1	311	1	5.5	2.7	2.04	0.5	35.6	第15面	732溝	石英・長石・角閃石・雲母
2	507	1	5.3	3.5	1.51	0.7	56.3	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
3	508	1	5.9	3.6	1.64	0.7	67.8	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
4	509	1	5.9	3.7	1.59	0.6	66.7	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
5	510	1	5.9	3.4	1.74	0.8	57.5	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
6	511	1	6.0	3.4	1.76	0.7	59.2	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
7	512	1	6.2	3.7	1.68	0.8	78.7	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
8	513	1	6.3	3.1	2.03	0.8	59.7	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
9	514	1	6.4	3.4	1.88	0.7	62.7	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
10	515	1	6.4	3.7	1.73	0.6	69.3	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
11	516	1	7.2	3.2	2.25	0.6	72.3	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石・雲母
12	517	1	5.5	3.6	1.53	1.1	73.0	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
13	518	1	5.8	3.2	1.81	0.8	46.1	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石・雲母
14	519	1	6.0	4.0	1.50	0.8	88.5	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石・雲母
15	520	1	6.6	3.8	1.74	0.7	76.5	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石・雲母
16	521	1	6.9	3.5	1.97	0.8	73.0	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石・雲母
17	522	1	5.3	3.8	1.39	0.8	66.2	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
18	523	1	5.8	3.6	1.61	0.8	62.4	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石・雲母
19	524	1	6.0	3.4	1.76	0.7	69.6	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
20	525	1	6.1	3.4	1.79	0.8	60.5	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石・雲母
21	526	1	6.9	4.8	1.44	0.7	158.0	第15面	835溝④	石英・長石・角閃石・雲母
22	414	1	7.0	3.5	2.00	0.7	81.9	第15面	864溝	石英・長石・角閃石・雲母
23	566	1	7.9	4.8	1.65	0.5	162.1	第15面	865溝	石英・長石・角閃石
24	743	1	5.1	2.8	1.82	0.4	36.4	第17面	973土坑	石英・長石・角閃石・雲母
25	304	2	4.2	3.8	1.11	1.0	50.7	第15面	730溝	石英・長石・角閃石・雲母
26	527	2	4.7	4.5	1.04	1.4	96.0	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
27	528	2	4.9	4.1	1.20	1.2	82.5	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
28	529	2	5.0	4.0	1.25	1.1	85.2	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
29	530	2	5.0	4.4	1.14	1.4	90.7	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
30	531	2	5.2	4.8	1.08	1.2	105.7	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
31	532	2	5.2	4.3	1.21	1.3	97.7	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
32	533	2	5.2	4.2	1.24	1.3	90.0	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
33	534	2	5.3	4.7	1.13	1.1	116.2	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
34	535	2	5.3	4.6	1.15	1.3	88.9	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
35	536	2	5.3	4.5	1.18	1.3	103.4	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
36	537	2	5.5	4.6	1.20	1.4	110.0	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
37	538	2	5.5	4.2	1.31	1.3	97.6	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
38	539	2	5.6	4.5	1.24	1.4	104.3	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
39	540	2	5.6	4.3	1.30	1.3	98.4	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
40	541	2	5.7	4.4	1.30	1.4	99.0	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
41	542	2	5.7	4.0	1.43	1.4	89.6	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
42	543	2	5.8	4.8	1.21	1.3	113.4	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
43	544	2	5.8	4.4	1.32	1.3	107.9	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
44	545	2	5.8	4.3	1.35	1.1	105.9	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
45	546	2	5.8	4.7	1.23	1.4	118.7	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
46	547	2	5.9	4.5	1.31	1.2	98.9	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石・雲母
47	548	2	5.9	4.4	1.34	1.3	105.5	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石・雲母
48	549	2	5.3	4.7	1.13	1.4	100.9	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
49	550	2	5.4	4.6	1.17	1.3	98.0	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
50	551	2	5.7	4.3	1.33	1.4	99.0	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
51	552	2	5.5	4.1	1.34	1.2	89.9	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石・雲母
52	553	2	5.4	4.5	1.20	1.3	98.0	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石
53	554	2	5.2	4.5	1.16	1.4	97.5	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石・雲母
54	555	2	5.4	4.5	1.20	1.2	103.1	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石・雲母
55	556	2	5.7	4.3	1.33	1.3	96.7	第15面	835溝②	石英・長石・角閃石・雲母
56	557	2	5.0	4.6	1.09	1.4	101.1	第15面	835溝④	石英・長石・角閃石

表２　板状土錘一覧表

員数	報告書掲載番号	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	孔径（cm）	重さ（g）	層　位	胎　土	備考
1	689	(8.4)	6.8	4.4	0.4	(273.0)	第15層	石英・長石・角閃石	
2	688	8.6	5.8	3.1	0.6	192.1	第15層	石英・長石・角閃石・黒色粒	
3	図120－	8.6	6.2	4.2	0.5	262.8	第14－2ａ層	石英・長石・角閃石	07－2調査区

※（　）数値は残存値

表３　石錘一覧表

員数	報告書番号	縦（cm）	横（cm）	厚　さ（cm）	抉りの幅（cm）	重　さ（g）	石　材	抉りの数	層　位	遺　構
1	212	7.6	8.3	1.9	1.9	182.5	花崗岩	2	第13－１面	658高まり
2	221	12.6	6.2	2.1	1.5	219.3	結晶片岩	2	第13－2面	687溝
3	222	6.4	9.3	2.6	2.1	236.5	花崗岩	2	第13－2面	687溝
4	226	5.5	9.7	1.5	1.3	126.0	結晶片岩	2	第13－2面	689溝上
5	233	8.9	4.8	2.1	1.5	150.0	安山岩	2	第13－2層	
6	235	5.2	9.2	1.1	1.3	88.4	結晶片岩	2	第14面	716溝
7	287	6.1	8.7	2.2	2.0	182.0	花崗岩	4	第14層	
8	288	5.7	7.7	2.7	1.0	160.8	花崗岩	2	第14層	
9	289	5.1	7.4	1.8	1.5	116.5	花崗岩	4	第14層	
10	290	6.5	6.9	1.9	2.0	148.1	花崗岩	2	第14層	
11	291	6.6	8.2	2.2	1.5	203.4	花崗岩	2	第14層	
12	292	9.2	6.4	2.0	1.4	159.8	結晶片岩	3	第14層	
13	293	5.2	10.4	2.5	1.6	183.2	結晶片岩	2	第14層	
14	294	5.7	7.4	1.7	1.6	126.2	結晶片岩	2	第14層	
15	393	7.7	8.5	1.7	2.6	183.2	花崗岩	3	第15面	803溝
16	615	6.6	6.8	2.5	1.7	165.0	花崗岩	2	第15面	
17	616	7.2	7.9	2.8	1.8	202.9	花崗岩	2	第15面	
18	617	6.1	8.2	2.0	1.5	147.5	花崗岩	2	第15面	
19	618	6.2	8.1	2.3	1.5	138.7	花崗岩	2	第15面	
20	619	6.8	7.2	1.4	1.6	100.4	花崗岩	2	第15面	
21	620	(5.8)	(6.0)	(1.7)	2.5	(82.3)	花崗岩	1	第15面	
22	621	4.7	9.6	1.3	1.2	121.5	結晶片岩	2	第15面	
23	622	5.1	9.7	1.5	1.9	115.6	結晶片岩	2	第15面	
24	623	5.1	9.6	2.1	1.6	171.3	砂岩	2	第15面	
25	624	6.6	7.7	2.9	1.8	242.0	花崗岩	4	第15面	
26	625	5.3	8.6	2.1	1.5	124.0	花崗岩	4	第15面	
27	626	6.1	8.5	1.7	1.8	148.3	花崗岩	4	第15面	
28	627	7.2	11.1	1.7	1.9	205.7	花崗岩	4	第15面	
29	628	9.8	6.4	1.5	2.4	146.0	結晶片岩	2	第15面	
30	629	10.4	4.6	2.9	1.8	200.1	結晶片岩	2	第15面	
31	630	(9.4)	(4.6)	(1.4)	1.8	(71.4)	結晶片岩	2	第15面	
32	690	4.7	8.3	1.3	1.8	93.6	結晶片岩	2	第15面	
33	691	8.7	4.6	1.5	3.2	78.5	砂岩	2	第15層	
34	692	10.4	6.8	1.4	3.3	125.8	砂岩	2	第15層	
35	693	9.5	5.3	1.3	1.5	129.8	結晶片岩	2	第15層	

※（　）数値は残存値

08 － 2 調査区出土弥生時代祭祀具について

ここでは今回の調査で出土した祭祀具のうち、弥生時代に帰属する人形土製品および石棒について記述する。

①人形土製品 (図 213)

人間の頭部を模した土製品である。第 15 面 835 溝からの出土。最大長 2.9cm、最大幅 4.9cm、最大厚 4.0cm を測る。顔の表現は、目は工具で描き、眉と鼻梁は指つまむようになでながら作り出す。口の表現は顔面の下半部が欠損しているため不明である。頭頂部に剝離痕跡とも考えられるものがみられることから､本来は頭部に何らかの装飾が施されていた可能性もある。なお黥面表現は認められない。また破断面の観察から、元来中空ではなく中実のものであったと考えられる。目の表現や全体の立体的表現などから、本資料は縄文時代の土偶ではなく、弥生時代の人形土製品とするべきであろう。なお胎土は生駒山西麓産のものである。

弥生時代の人形土製品の類例としては、近畿地方では東奈良遺跡 (大阪府茨木市)、目垣遺跡 (大阪府茨木市)、温江遺跡 (京都府与謝野町) などがあげられる。

②石棒 (図 271)

今回の調査では計 5 本の石棒が出土している。いずれの石棒も打製の片岩製で 1 ～ 3 は頭部、 4 ・ 5 は基部である。

1 は第 15 面から出土した大型の石棒である。頭部は自然に丸く仕上げている。断面形状は丸みを帯びた楕円形を呈する。長さ 20.0cm、幅 6.9cm、厚さ 4.8cm、重さ 1176.9 g を測る。頭部には被熱の痕跡がみとめられる。 2 は第 13 層の 658 高まり中から出土した。頭部はわずかにくびれ、先端は丸みを帯びていたものと考えられる。断面形状はやや扁平な楕円形を呈する。長さ 10.0cm、幅 4.3cm、厚さ 2.5cm、重さ 142.5 g を測る。 3 は第 15 面 803 溝から出土した。先端は丸みを帯びており、くびれさせることによって頭部を作り出す。断面形状は丸みを帯びた楕円形を呈する。長さ 9.5cm､幅 3.6cm、厚さ 2.7cm、重さ 126.2 g を測る。 4 は第 15 面から出土した。基部先端は丸みをもつ断面形状は扁平な楕円形を呈する。長さ 16.7cm、幅 6.5cm、厚さ 3.0cm、重さ 580.4 g を測り、大型の石棒の基部であるといえる。 5 は第 15 面 835 －②から出土した。基部先端は 4 とは異なり、直線的である。欠損が多いが、断面形状は扁平な楕円形と考えられる。長さ 11.6cm、幅 4.9cm、厚さ 2.5cm、重さ 228.8 g を測る。

池島・福万寺遺跡ではこれまでに計 7 本の石棒が出土している。いずれの石棒も片岩系の石材を用いる打製石棒であり、今回の調査区で出土したものと共通している。この石棒の出土量は周辺の遺跡と比較しても多いものである。池島･福万寺遺跡の周辺ではいくつかの遺跡で石棒の出土が確認されている。それらの遺跡の代表的な例としては長原遺跡 (大阪市) や田井中遺跡、久宝寺遺跡、亀井遺跡 (いずれも八尾市) などがあげられる。これらの遺跡の石棒の多くが突帯文土器と共伴する時期のものであり、これらの遺跡のなかでは亀井遺跡のみが突帯文土器を共伴しない時期のものである。今回の池島・福万寺遺跡の調査例も突帯文土器を共伴しない時期のものと考えられ、注目すべき事例である。弥生時代に

おける石棒の多数使用は池島・福万寺遺跡における弥生時代の人々の生活の在り方を考えていく上でも重要な手掛かりのひとつとなるであろう。

③弥生時代祭祀具の位置づけ

今回の池島・福万寺遺跡の調査では弥生時代の人形土製品と石棒が出土している。縄紋時代から弥生時代への移行期に土偶と石棒をともにもつ遺跡の存在はこれまでにもいくつか知られている。大阪府下では長原遺跡や田井中遺跡、久宝寺遺跡などがその代表的な例である。弥生時代における土偶や石棒の研究はこれまでにもなされてきている(秋山 2004a、b、寺前 2005 など)。しかし今回の調査で出土したものは土偶ではなく、縄紋時代の系譜を引くと考えるよりも新たに弥生時代に入って創出されたと考えられる人形土製品である。よって今回の調査例はあらたに位置づけられる必要があるであろう。

石棒と人形土製品が共伴している例は現在のところ、東奈良遺跡(茨木市)の1例のみである。東奈良例は弥生時代前期にあたるとされ、この点も本調査例との共通点である。今回の調査で確認された石棒と人形土製品の共伴の位置づけには東奈良遺跡との比較検討が必要不可欠であろう。そのためには遺物同士の比較にとどまらず、遺跡全体の構造についても検討をおこなう必要がある。池島・福万寺遺跡の弥生時代前期の集落の様相はようやくその一端が明らかとされたばかりである。今後さらなる調査の進展によって集落の全容が明らかとなれば、人々の生活の様相もより具体的なものとなり、精神世界についての解明も進んでいくものと考えられる。 (前田俊雄)

【参考文献】

秋山浩三　2004a「土偶・石棒の縄文・弥生移行期における消長と集団対応」『考古論集－河瀬正利先生退官記念論文集－』河瀬正利先生退官記念事業会

秋山浩三　2004b「縄文系呪術具の残存現象からみた弥生の始まり」『大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2002 年度共同研究成果報告書』大阪府文化財センター

寺前直人　2005「弥生時代における石棒の継続と変質」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』大阪大学考古学研究室

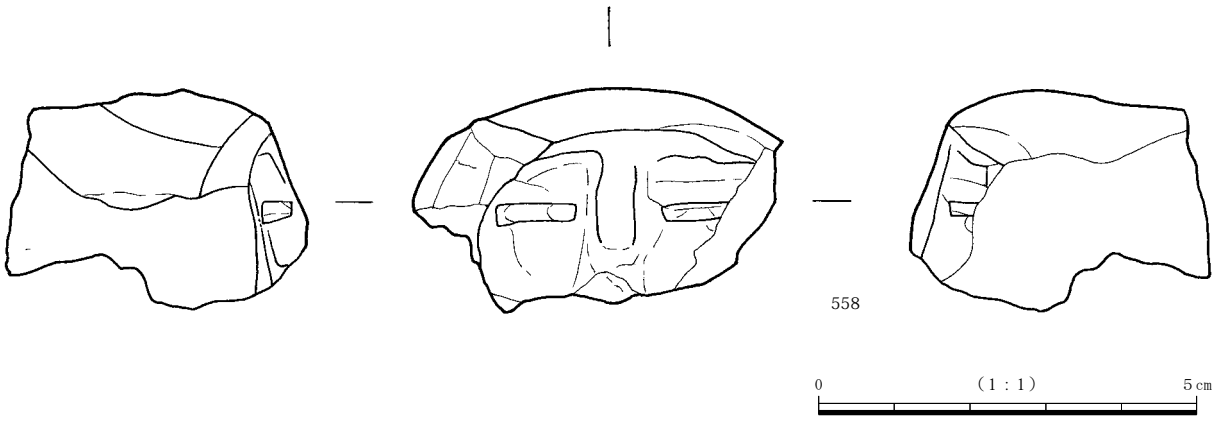


図213　第15面　835溝人形土製品実測図(S＝1:1)

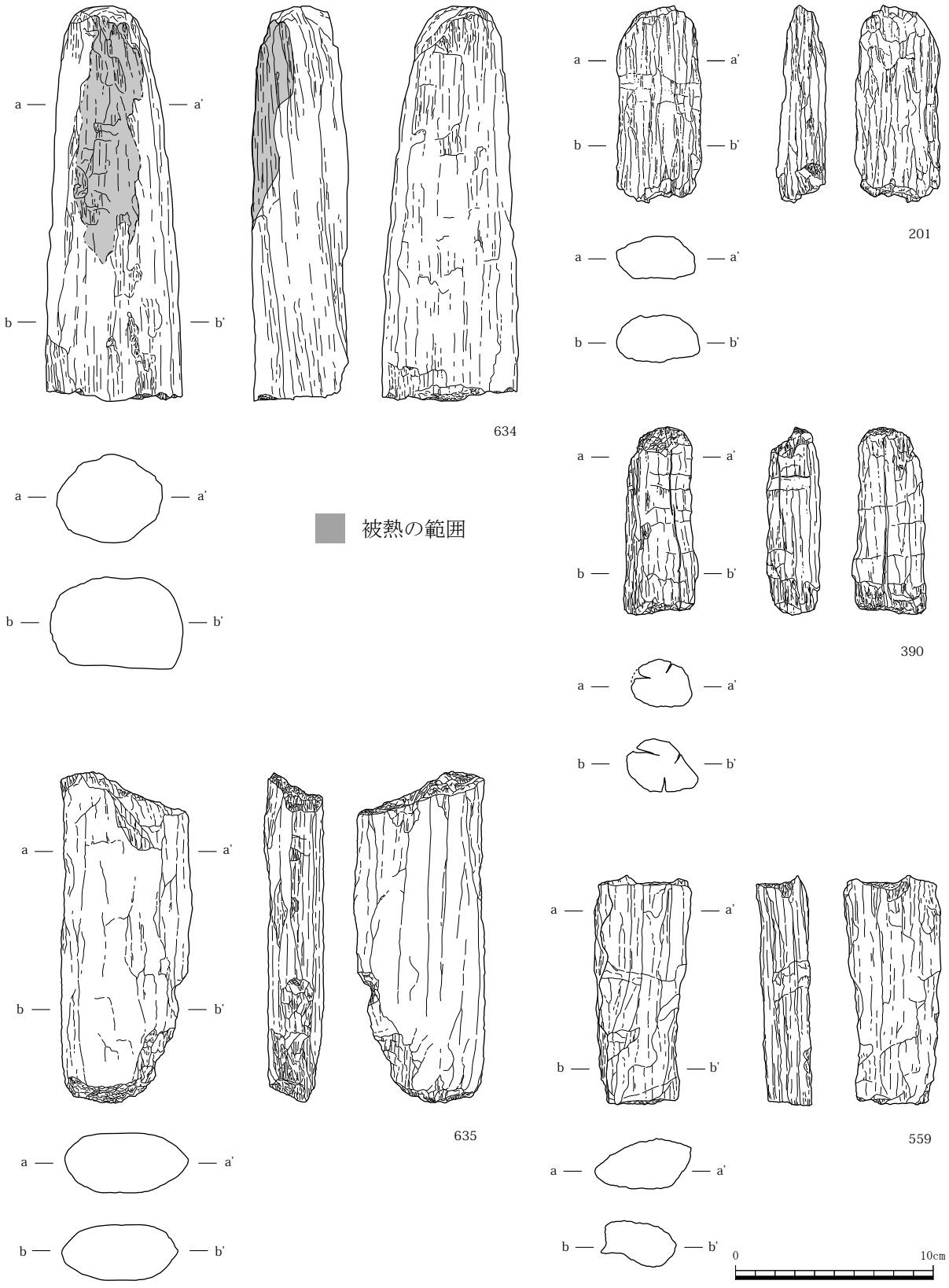


図271　出土石棒実測図（S＝1：3）

第５章　自然科学分析

池島・福万寺遺跡の炉跡から出土した魚類遺存体

山崎 健（奈良文化財研究所）

はじめに

大阪府池島・福万寺遺跡において、弥生時代前期の炉跡から魚類遺存体が検出された。河内潟周辺では弥生時代中期ごろまで貝塚が形成されており、漁獲対象である魚類遺存体は貝塚出土資料が中心であった。しかし、焼土層や灰層の土壌を水洗フルイ選別法やフローテーション法で選別することにより、今回の分析資料のように貝層が形成されない遺跡においても動植物遺存体が検出できる可能性がある。
炉跡出土の魚類遺存体は微細な資料ではあるが、池島・福万寺遺跡における水田稲作以外の生業活動や食生活を検討することができる貴重な資料である。本稿では、この炉跡から出土した魚類遺存体について報告する。

１．出土遺構

魚類遺存体は、池島・福万寺遺跡Ⅱ（その 10）調査区の第 15 面で検出された 788 炉から出土した。第 15 面は弥生時代前期中～新段階の遺構面である。788 炉は、長軸 1.3 m、短軸 1.0 m、深さ 0.12 mの不整楕円形を呈する。炉の埋土は 4 層からなり、第 2 層が強く焼けており、第 3 層では灰層が確認されている。

２．分析結果

788 炉の土壌を水洗選別した結果、2 ～ 4 層から合計 0.08g の微細な骨片が検出された。これらの骨片は、すべて焼けて白色化している。有機質遺物が残りにくい堆積環境であっても、骨が焼けて無機化したために、残りやすくなったものと考えられる。

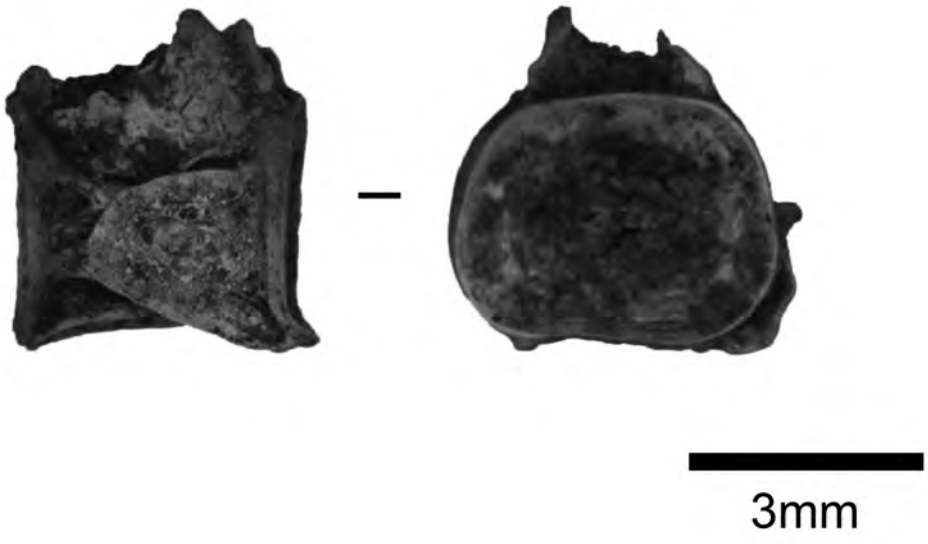


図１　788 炉跡から出土したコイ科魚類の腹椎

2層からコイ科(Cyprinidae sp.)の腹椎1点が検出された。腹椎の椎体横径は3.98mmである。ただし、この骨は焼けているため、計測値は火を受けて収縮した後の値と評価する必要がある。他に、4層から種は不明であるが、魚類の肋骨や鰭棘と考えられる棘の破片が、焼けて白色化した状態で出土している。

3．考察

788炉跡から出土した魚類遺存体は白色化するほど火を受けていることから、炉が機能した時期と関連性が強いと考えられ、池島・福万寺遺跡における弥生時代前期の食生活の一端が反映されたものと評価することができる。分析の結果、主に淡水域に生息するコイ科魚類が同定された。

これまでに池島・福万寺遺跡では、Ⅱ期地区06-2調査区の第13面（弥生時代前期末～中期初頭）で検出されたB342土坑からも焼けた骨片類が出土しており、丸山真史氏によりコイの咽頭歯やコイ科の腹椎、ウナギ目の椎骨が同定されている（飯田編2009）。

縄文時代晩期～弥生時代前期には、河内潟の湖岸線が急速に後退して、ヨシ原が発達するような低湿地が広がるような景観であった（地学団体研究会大阪支部編1999）。弥生時代前期における遺跡周辺の水域環境を検討すると、池島・福万寺遺跡からは旧大和川水系の分流路と思われる流路や水田、河川と水田をつなぐ水路などが検出されている。したがって、池島・福万寺遺跡では、漁場として遺跡至近の淡水域（河川や湖沼、水田など）を利用していたものと推測される。漁法としては出土遺物から網漁が想定される。

788炉と同じ遺構面である第15面（弥生時代前期中～新段階）からは、水漬け遺構が、第16面(弥生時代前期中～新段階)からは掘立柱建物1棟が検出されている。水漬け遺構のある溝内から管状土錘が49点、掘立柱建物付近から打欠石錘が16点出土している。

本稿の執筆にあたり、丸山真史氏からご教示を賜りました。記して感謝の意を表します。

引用文献

飯田浩光編2009『池島・福万寺遺跡9（池島Ⅱ期地区02-1調査区・06-2調査区）』（財）大阪府文化財センター調査報告書第196集
地学団体研究会大阪支部編1999『大地のおいたち』築地書館

池島・福万寺Ⅱヒスイ製勾玉産地同定分析

遺物材料研究所　藁科哲男

はじめに

玉類の観察は、一般的に肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のよう思われているのが実態である。岩石製では玉類の原材料として硬玉、滑石、軟玉（角閃石）、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉などが推測される。それぞれの岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求めるなどで、非破壊で命名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、どこの産地の原石が使用されているかの産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となる。遺跡から出土する勾玉、管玉など玉類の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何ケ所かあるヒスイ（硬玉、軟玉）とか碧玉の原産地うち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法１）および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光Ｘ線分析で行う元素比法２，３），４）が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究は蛍光Ｘ線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析より正確に行った例５）が報告されている。石鏃など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。（１）石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。（２）玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。今回分析を行った遺物は、東大阪市池島町に位置する池島・福万寺遺跡Ⅱ出土のヒスイ製勾玉１個で、産地分析結果が得られたので報告する。

１.非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析

で成功している４）非破壊で分析を行なう蛍光Ｘ線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光Ｘ線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はＥＳＲ法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した５）。

２.ヒスイの原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では (1) 新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頚城郡青海町から産出する糸魚川産、(2) 軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の日高産６）、(3) 鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、(4) 岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、(5) 長崎県長崎市三重町の長崎産であり、さらに (6) 西黒田ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐町の引佐産の原石、(7) 兵庫県養父郡大屋町からの原石、(8) 北海道旭川市神居町の神居コタン産、(9) 岐阜県大野郡丹生川村の飛騨産原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原材になったのではないかと考えられる (10) 長崎県西彼杵郡大瀬戸町雪浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地は、これでほぼ調査し尽くされていると思われる。これら原石の原産地を図１に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および韓国、春川産軟玉などのヒスイの分析も行われている。

３.ヒスイ試料の蛍光Ｘ線分析

ヒスイの主成分元素はナトリウム (Na)、アルミニウム (Al)、珪素 (Si) などの軽元素７）で、次いで比較的含有量の多いカルシウム (Ca)、鉄 (Fe)、ストロンチウム (Sr) である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム (K)、チタン (Ti)、クロム (Cr)、マンガン (Mn)、ルビジウム (Rb)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr)、ニオブ (Nb)、バリウム (Ba)、ランタン (La)、セリウム (Ce) の各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源のＸ線が試料によって散乱されたピークを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピークを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。Na 元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい、しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出きる方法が確立されるまでは、蛍光Ｘ線分析で Na 元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法にたよる他ないのではなかろうか。各原産地の原石のなかで、確実に Na 元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川、大屋、若桜、大佐、神居コタン、長崎の各原産地の原石でこれらは硬玉に属すると思われる。Na 元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高、引佐、飛騨の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産出する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高、飛騨、引佐の原石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイ原石は Sr のピークが Fe のピークに比べて相当大きく、また Zr の隣に非常に小さな Nb のピークが見られ、Ba のピークも大きく、糸魚川産では見られない La、Ce のピークが観測されている。この Ce のピークは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これら Ce を含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するときに有効な判定基準になる。長崎産ヒスイは、Ti の含有量が多く、Y のピークが見られるのが特徴的である。日高産、引佐産、飛騨産ヒスイ原石は、Ca ピー

クに比べて Ti とか K、また Fe ピークに比べて Sr などのピークが小さいのが特徴で糸魚川産のものと区別するときの判断基準になる。春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr、Zr のピークが全く見られないため、糸魚川産などの Sr、Zr を含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雪浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉、大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が 2.91 と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また 砒素（As）のピークが見られる個体が多いのも特徴である。これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系、コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の 3.2 ～ 3.4 の範囲のものと、3.2 に達しない軟玉に分類される原石もある。若桜産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑かかった乳白色のような原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産、大屋産の原石では比重が 3.20 に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は３個しか分析できなかったが良質である。このうち 1 個は濃い緑色で、他の２個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。ミャンマー産のヒスイ原石は、質、種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものが見られ肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質な原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し産地分析の指標とする。

４. ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行なうときの判断基準を原石の分析データから引き出すが、分析個数が少ないため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。表 1 に各原産地ごとの原石の比重と元素比量をまとめた。元素比量の数値は、その原産地の分析した原石の中での最小値と最大値の範囲を示し、判定基準 (1) とした。ヒスイで比重が 3.19 未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重が 3.19 未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が 3.17 未満であった。したがって、遺物の比重が 3.3 以上を示す場合は判定基準 (1) により大佐産のヒスイでないと言える。日高産、引佐産の両ヒスイでは Sr/Fe の比の値が小さくて、糸魚川産と区別する判定基準 (1) になる。表２の判定基準 (2) には Cr、Mn、Rb、Y、Nb、Ba、La、Ce の各元素の蛍光Ｘ線ピークが観測できた個体数を％で示した表である。例えば遺物を分析して Ba のピークが観測されなかったとき、その遺物は、若桜、大佐、長崎産のヒスイでないといえる。図２はヒスイ原石の Sr/Fe の比の値と Sr/Zr の比の値の分布を各原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。●は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。□はミャンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とミャンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、ミャンマーと糸魚川が区別される部分が Sr/Fe の値（横軸）2.5 以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればミャンマー産

と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考えられる。▲は大佐産の、△は若桜産の、▽は大屋産のヒスイの分布を示している。糸魚川と大佐、若桜、大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物に Ba の蛍光Ｘ線スペクトルのピークが見られなかた場合、表２の判定基準 (2) に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物の比重が 3.2 以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。■は長崎産ヒスイの分布で、独立した分布の範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。★印の日高産および＊印の引佐産ヒスイの分布の一部分が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca/Si 比と Sr/Fe 比を指標とすることにより（図３）、糸魚川産ヒスイは日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na/Si 比と Mg/Si 比を各原産地の原石について分布を示すことにより（図４）、遺物がどこの原産地の分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

５.池島・福万寺遺跡Ⅱ出土ヒスイ製勾玉の分析結果

分析したヒスイ製勾玉は頭部に黒い部分、側面に茶色の部分また背の部分には白と緑の部分があり、白と緑を中心に含む部分を背白緑部で分析番号 109648-1 とし、黒い部分を中心に頭黒色部を 109648-1、茶色を中心に側茶色部を 109648-3 として分析を行った。ヒスイは黒色、茶色、白色、緑色の各色が知られていて、緑色以外の部分がヒスイであるか否かは、色によって鉱物を区別出来ない。勾玉を水洗し非破壊状態でセイコ製 SEA2110L 型蛍光Ｘ線分析装置で３箇所を分析し、付属のソフトのスタンダードレスによるＦＰ（ファンダメンタルパラメータ）法を用い相対含有量 (Wt%) を計算した結果を表３に示した。比重はアルキメデス法で測定し表３に示した。計算された濃度は破壊して行う厳密な定量分析値ではなく、半定量分析で、得られた濃度には形の影響の誤差が相当含まれれる可能性がある。分析した勾玉の３箇所から Na、Al、SiO2 および少量元素の Ca、Mg、Fe が観測され、比重が 3.20 以上で , 硬玉製勾玉と推測できる。分析した玉の原産地を明らかにするために、分析された元素の含有量から求めた元素比（任意単位）の値を表４に示した。元素比値を各原産地の原石の元素比量の分布範囲と比較し産地判定の図とした。元素比 Zr/Sr 対 Sr/Fe の分布範囲の判定図では分析番号 106561-1 部は糸魚川、大屋産の重なる範囲に入るが、109648-2、-3 部は糸魚川産のみの範囲に入り、ミャンマー産の範囲から少しではあるが外れ、ミャンマー産の可能性が少ない結果であることを示した（図５）。次に元素比 Sr/Fe 対 Ca/Si の分布範囲の判定図では分析番号 109648-1、-2、-3 は糸魚川、大屋産の重なる範囲入り、入った原石の可能性を示した（図６）。また Na/Si 対 Mg/Si の図では分析番号 109648-1-3 部は糸魚川、若桜産の重なる範囲に入り、109648-2 部は糸魚川産の範囲にのみ入った（図７）。これら判定図と判定基準表１、表２の比重の範囲および蛍光Ｘ線スペクトル図 8-1 ～ 8-3 に示す Ba 元素の有無などの条件を考慮して、全ての条件を満たした産地の結果を総合判定として表５に示した。

６.考　察

遺跡から出土する鏡から中国との関係が論じられ、硬玉はミャンマー、中国を経由して日本に伝播したとする説があり、また、韓国を経由して日本に伝搬する可能性が推測される。日本産ヒスイが使用されていると言うには科学的に証明する必要がある。ノーベル賞を受賞された益川敏英博士の言を借りれ

ば、科学とは、仮説をたて正しいか否か、あらゆる可能性を否定することにある。と述べられていて、分析の結果糸魚川産原石と玉類の成分が一致したとする必要条件（仮説）以外に、ミャンマー産の可能性を否定（十分条件）する事が必要である。分析したヒスイ製勾玉には糸魚川・青海産硬玉が使用されていると判定した。分析した結果で、図５の元素比 Zr/Sr 対 Sr/Fe の分布範囲の判定図から、頭黒色部の 109648-2、側茶色部の 109648-3 の結果は、糸魚川、ミャンマ産が区別できる範囲ぎりぎりの入りミャンマー産の可能性が低いことを示している。糸魚川・青海産硬玉は縄文、弥生時代に多くみられ、使用遺跡を抜粋して示すと（図１）例えば北海道千歳市美々遺跡から青森県大石平遺跡、岩手県大日Ⅱ遺跡、山梨県石堂遺跡、岐阜県西田遺跡、愛知県白石遺跡、三重県森添遺跡、大分県ニ反田遺跡、熊本県ワクド石遺跡、宮崎県学頭遺跡、沖縄県糸満市、北谷町まで日本全国に、また、韓半島、林堂遺跡、上雲里１，２墳にも糸魚川産ヒスイが尊重される共通の基盤を持っていたと思われる。

参考文献

1) 茅原一也 (1964)、長者が原遺跡産のヒスイ (翡翠) について (概報)。長者ケ原 、
新潟県糸魚川市教育委員会 :63－73

2) 藁科哲男・東村武信 (1987)、ヒスイの産地分析 。富山市考古資料館紀要 6:1－
18

3) 藁科哲男・東村武信 (1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析 。
橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』,14:95－109

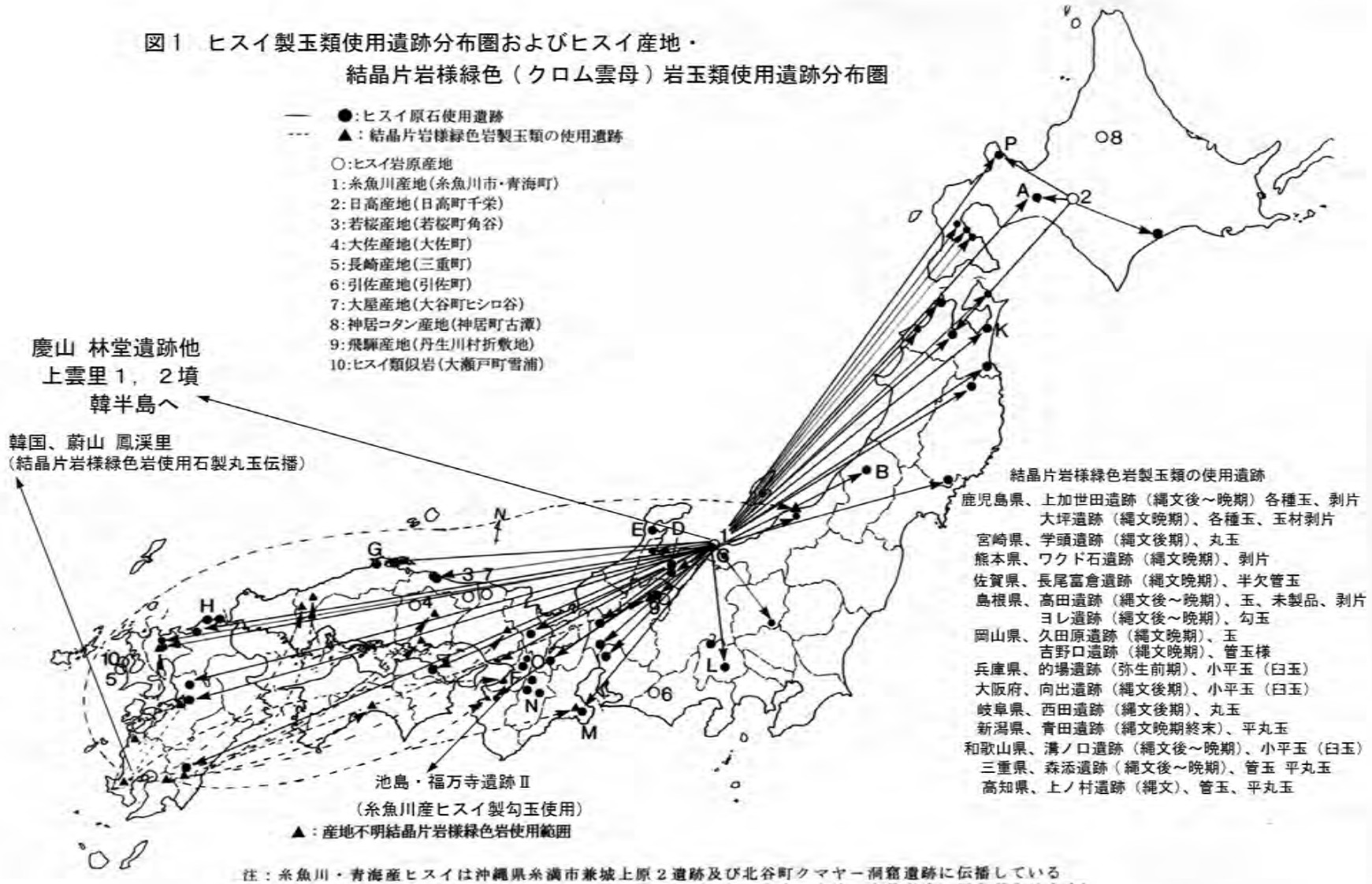
4) 藁科哲男・東村武信 (1983)、石器原材の産地分析 。考古学と自然科学 ,16:59
－89

5) Tetsuo Warashina(1992)、Alloction of Jasper Archeological
Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological
Science 19:357-373

6) 番場猛夫 (1967)、北海道日高産軟玉ヒスイ 。調査研究報告会講演要旨録
No.18:11－15

7) 河野義礼 (1939)、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質 。
岩石砿物鉱床学雑誌 22:195－201

図１　ヒスイ製玉類使用遺跡分布圏およびヒスイ産地・
結晶片岩様緑色（クロム雲母）岩玉類使用遺跡分布圏



注：糸魚川・青海産ヒスイは沖縄県糸満市兼城上原２遺跡及び北谷町クマヤー洞窟遺跡に伝播している
（他の分析方法の基準で推定した結果をこの使用圏に混ぜると、先史の交流、交易考察に混乱が生じます）

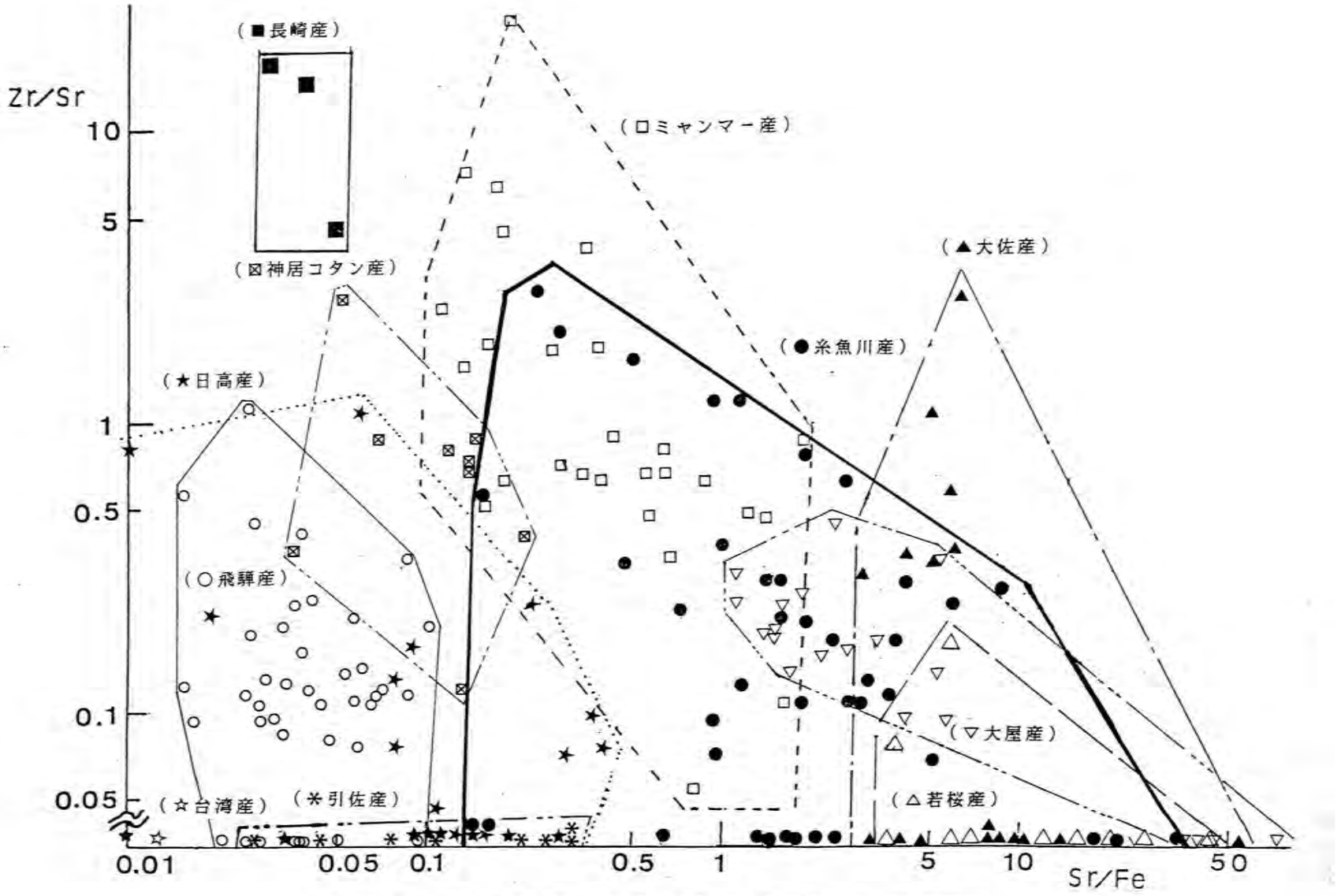


図２　ヒスイ原石の元素比値 Zr/Sr 対 Sr/Fe の分布および分布範囲

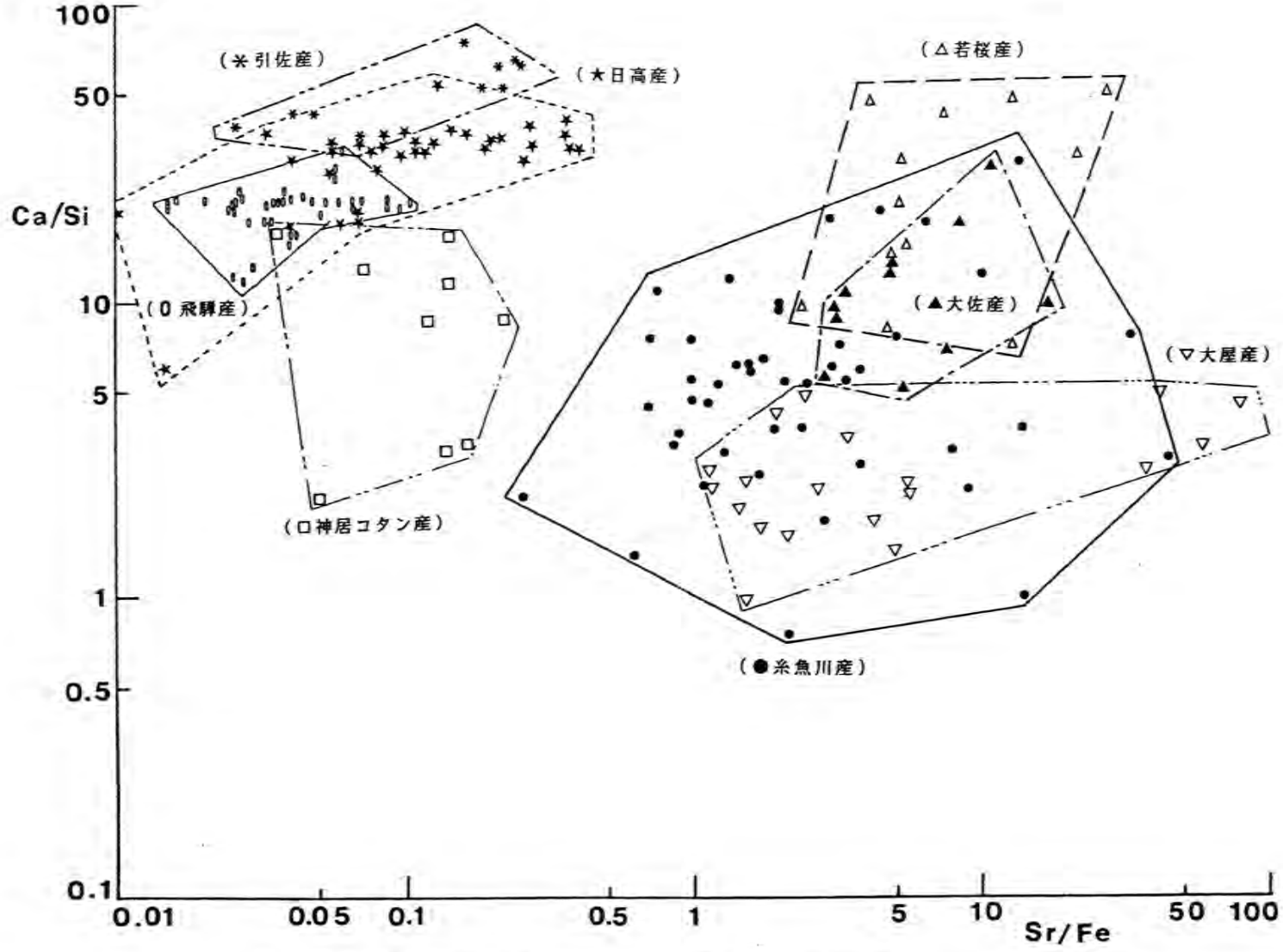


図３　ヒスイ原石の元素比値 Ca/Si 対 Sr/Fe の分布および分布範囲

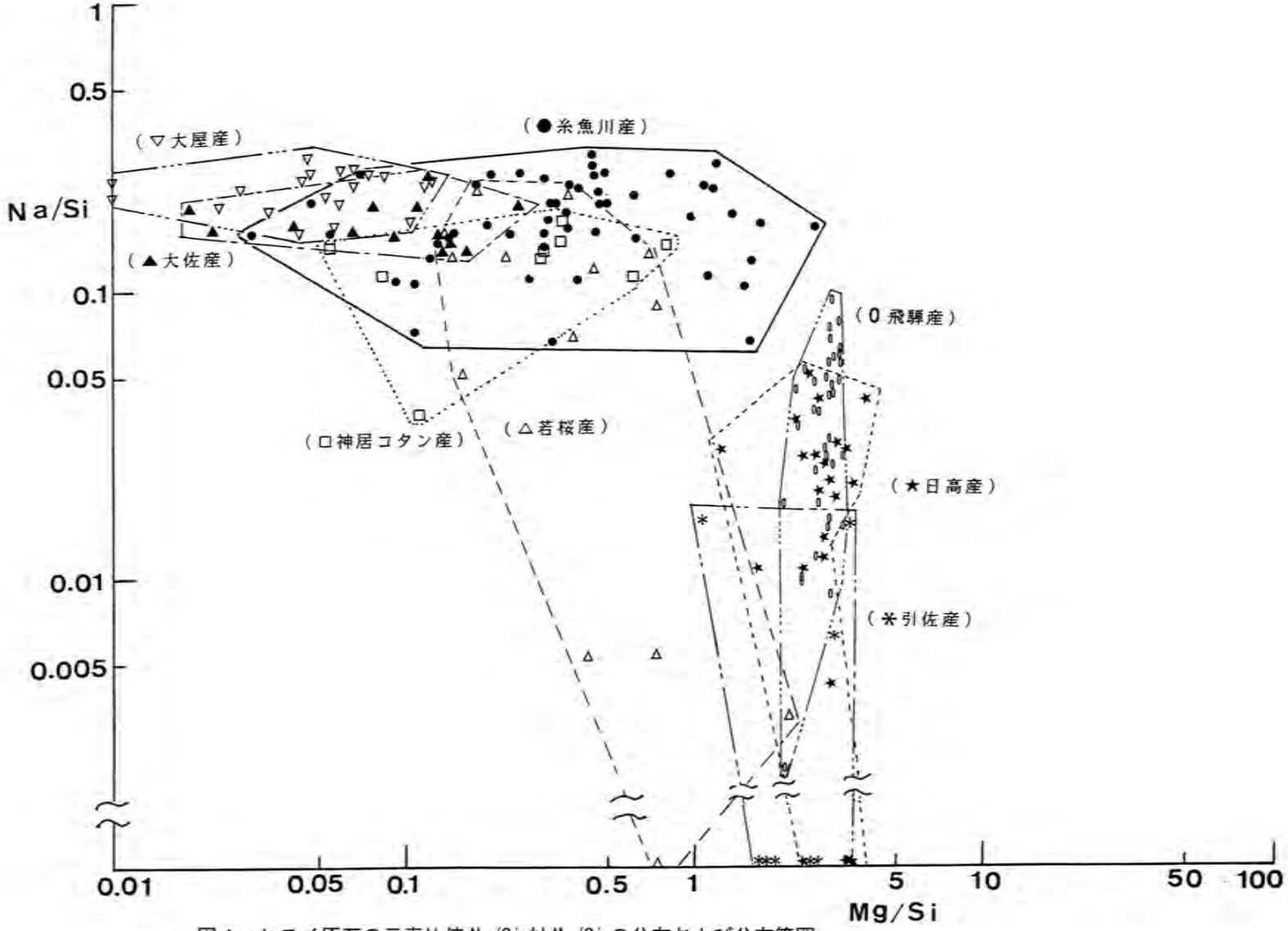


図４　ヒスイ原石の元素比値 Na/Si 対 Mg/Si の分布および分布範囲

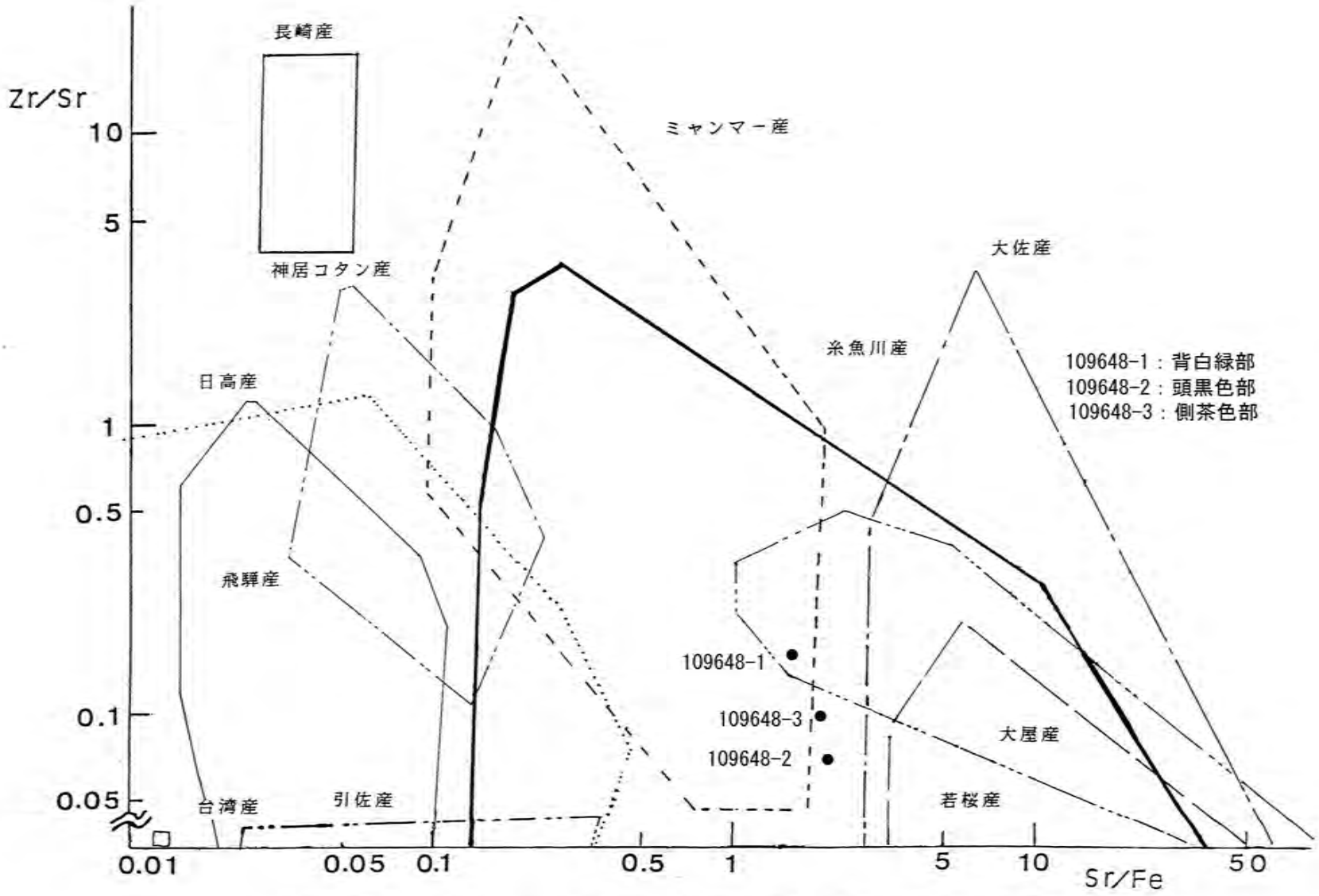


図５　池島・福万寺遺跡Ⅱ出土ヒスイ製勾玉（109648）の元素比値 Zr/Sr 対 Sr/Fe の分布

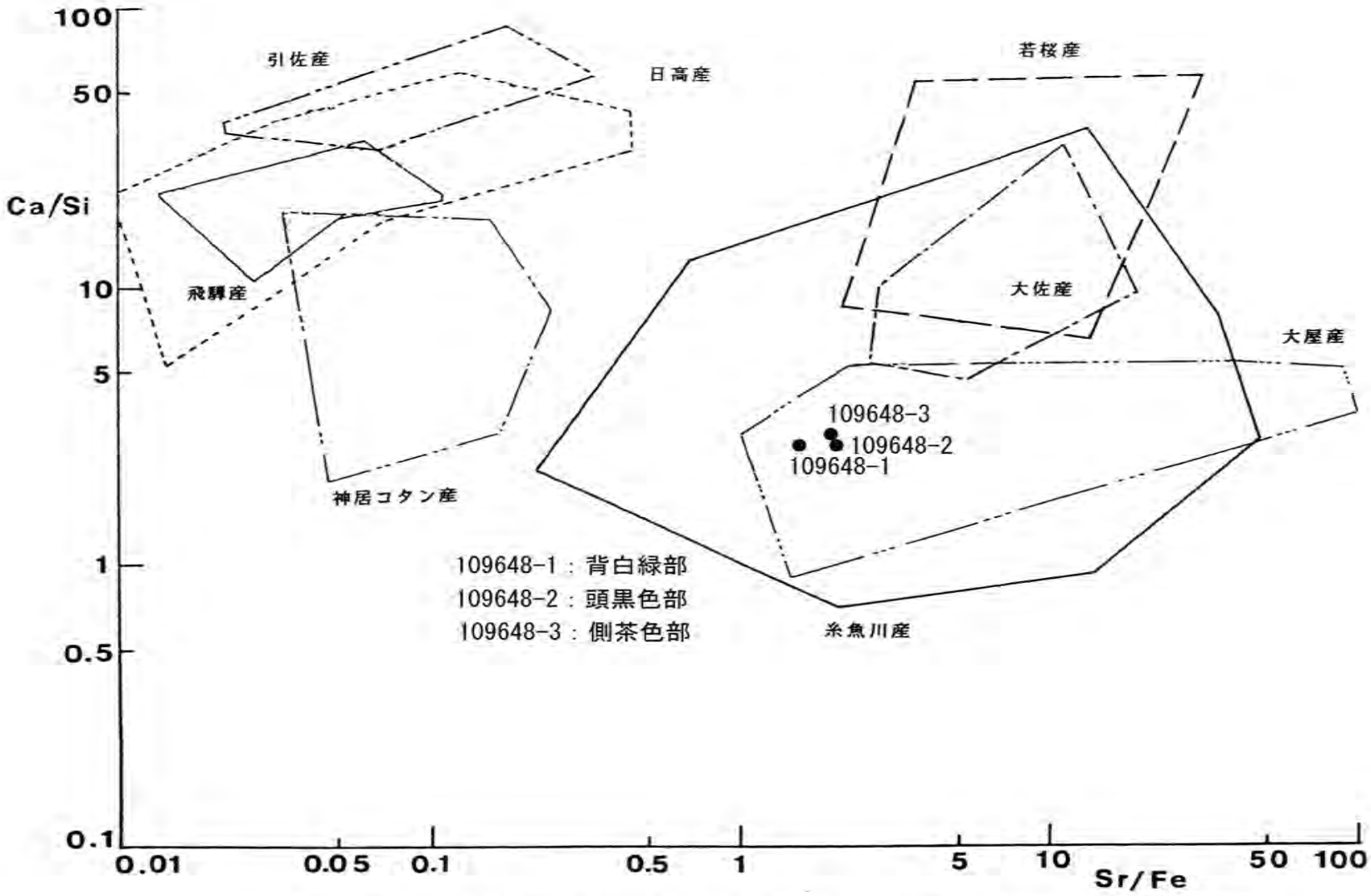


図６　池島・福万寺遺跡出土ヒスイ製勾玉（109648）の元素比値 Ca/Si 対 Sr/Fe の分布

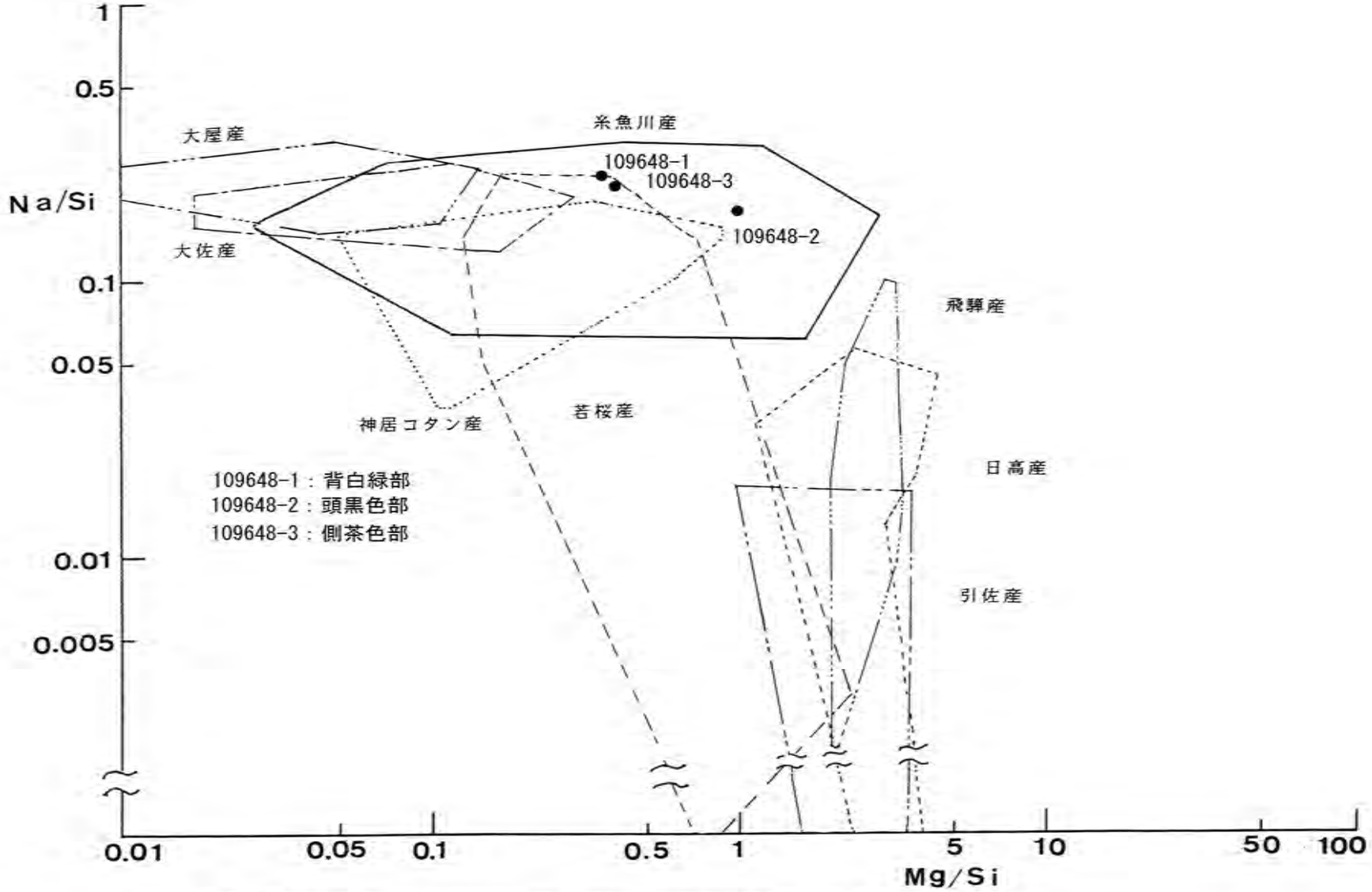


図７　池島・福万寺遺跡出土ヒスイ製勾玉（109648）の元素比値 Na/Si 対 Mg/Si の分布

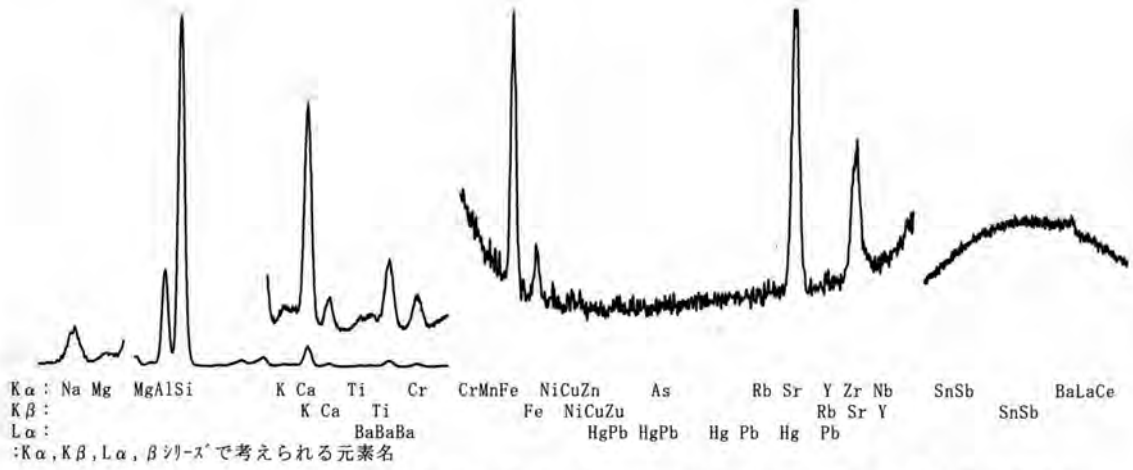


図8-1　池島・福万寺遺跡Ⅱヒスイ勾玉（背白緑部）(109648-1)の蛍光X線スペクトル

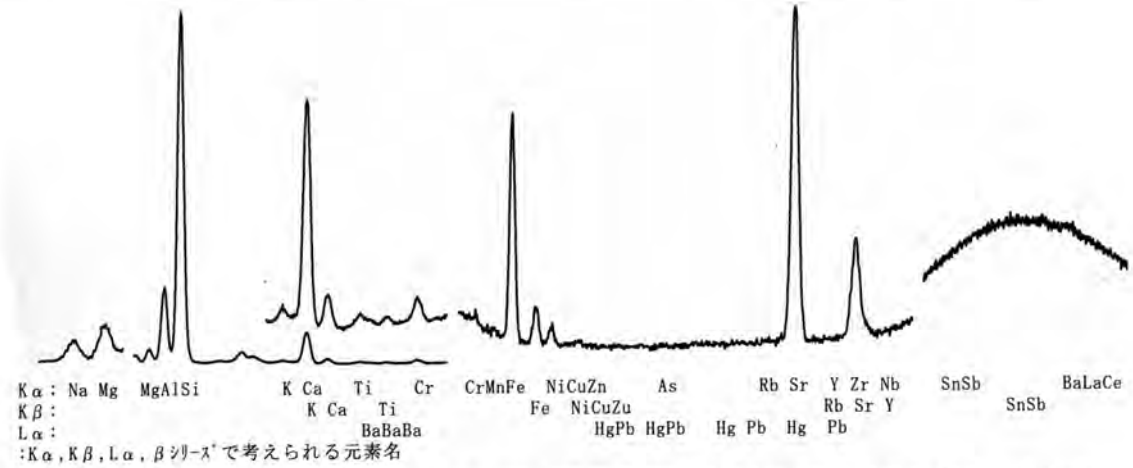


図8-2　池島・福万寺遺跡Ⅱヒスイ勾玉（頭黒色部）(109648-2)の蛍光X線スペクトル

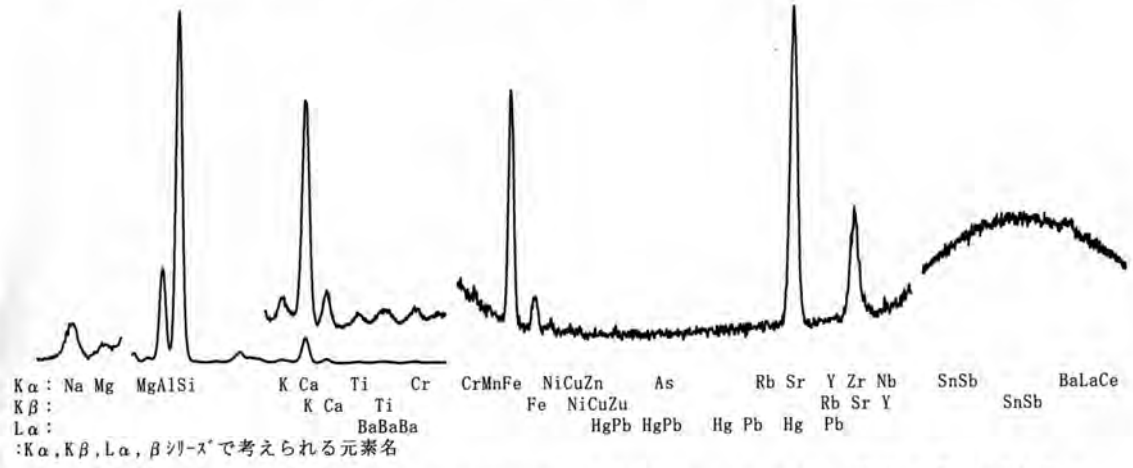


図8-3　池島・福万寺遺跡Ⅱヒスイ勾玉（側茶色部）(109648-3)の蛍光X線スペクトル

表1　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(1)

原産地名	分析個数	蛍光X線法による元素比の範囲					
		比重	K/Ca	Ti/Ca	Sr/Fe	Zr/Sr	Ca/Si
糸魚川産	41	3.00～3.35	0.01～0.17	0.01～0.56	0.15～30	0.00～2.94	0.72～27.6
若桜産	12	3.12～3.29	0.01～0.91	0.03～0.59	3.45～47	0.00～0.25	4.33～48.4
大佐産	20	2.85～3.17	0.01～0.07	0.00～1.01	3.18～61	0.00～12.4	3.47～28.6
長崎産	3	3.16～3.23	0.01～0.14	0.17～0.33	0.02～0.06	4.30～16.0	
日高産	22	2.98～3.29	0.00～0.01	0.00～0.02	0.00～0.37	0.00～0.063	5.92～51.6
引佐産	8	3.15～3.36	0.04～0.04	0.00～0.03	0.03～0.33	0.00～0.018	36.3～65.9
大屋産	18	2.96～3.19	0.03～0.08	0.04～0.16	1.08～79	0.02～0.48	0.95～4.81
神居コタン産	9	2.95～3.19	0.02～0.49	0.09～0.17	0.04～0.22	0.12～0.85	2.22～17.3
飛騨産	40	2.85～3.15	0.01～0.04	0.00～0.00	0.02～0.10	0.00～1.24	12.7～28.5
ミャンマ産	26	3.15～3.36	0.02～0.14	0.01～0.26	0.09～2.5	0.01～23	
台湾産	1	3.00	0.003	ND	ND	ND	

ND:検出限界以下の濃度

表2　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(2)

原産地名	蛍光X線法による分析元素(各元素が確認できた個体数の百分率)							
	Cr	Mn	Rb	Y	Nb	Ba	La	Ce
糸魚川産	26%	6%	20%	ND	13%	33%	ND	ND
若桜産	ND	ND	16%	ND	100%	100%	67%	67%
大佐産	ND	ND	44%	ND	33%	100%	67%	67%
長崎産	ND	ND	ND	100%	100%	100%	100%	100%
日高産	tr	tr	ND	ND	ND	tr	ND	ND
引佐産	88%	75%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
大屋産	tr	ND	31%	ND	6%	90%	100%	100%
神居コタン産	ND	100%	22%	100%	ND	55%	ND	ND
飛騨産	100%	100%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
ミャンマ産	13%	4%	ND	ND	ND	35%	ND	ND
台湾産	tr	tr	ND	ND	ND	ND	ND	ND

ND:検出限界以下　tr:検出確認

表3　池島・福万寺遺跡Ⅱ出土勾玉の非破壊分析化合物元素濃度

遺物品名	遺物品名	分析番号	化合物元素組成(%/wt)								
			Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	Cr	MnO
勾玉	背白緑部	109648-1	11.593	0.5442	16.6149	68.3007	0.2766	1.8944	0.0401	0.0056	0.0198
	頭黒色部	109648-2	9.2811	6.7185	11.5537	67.4317	0.4148	2.7806	0.0757	0.0211	0.0364
	側茶色部	109648-3	11.5391	0.4321	14.1239	70.213	0.2953	2.2993	0.0837	0.0074	0.0374

分析番号	化合物元素組成(%/wt)							重量gr	比重
	Fe_2O3	Ni	Rb	Sr	Y	Zr	Ba		
109648-1	0.6122	0.025	0.0001	0.0251	0	0.0032	0.0265	3.71481	3.241
109648-2	1.4726	0.1053	0.0004	0.0702	0.0001	0.0054	0.008		
109648-3	0.8779	0.0295	0	0.0389	0	0.004	0.0094		

表4　池島・福万寺遺跡Ⅱ出土ヒスイ製勾玉の元素比の値の結果

遺物品名	遺物品名	分析番号	元素分析値の比値									
			Na/Si	Mg/Si	Al/Si	K/Ca	Ca/Si	Ti/Ca	Cr/Fe	Mn/Fe	Ni/Fe	Sr/Fe
勾玉	背白緑部	109648-1	0.238	0.335	0.18	0.1	2.433	0.08	0.009	0.033	0.023	1.512
	頭黒色部	109648-2	0.18	0.936	0.14	0.05	3.85	0.07	0.006	0.019	0.056	2.044
	側茶色部	109648-3	0.225	0.393	0.18	0.07	3.044	0.06	0.005	0.027	0.047	1.863
JG-1			0.030	0.169	0.090	1.320	2.307	0.180	0.002	0.011	0.000	0.401

分析番号	元素分析値の比値							勾玉比重	重量gr
	Zr/Sr	Nb/Sr	Ba/Sr	La/Sr	Ce/Sr	Rb/Sr	Y/Sr		
109648-1	0.156	0	2.85	0	0	0	0	3.241	3.71481
109648-2	0.071	0	0.23	0	0	0	0		
109648-3	0.097	0	1.03	0	0	0	0		
JG-1	0.798	0.050	6.020	0.000	0.000	0.770	0.150		

a):標準試料、Ando,A., Kurasawa,H.,Ohmori,T. & Takeda,E.(1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference G eochem ical Journal, Vol.8 175-192.

表5　池島・福万寺遺跡Ⅱ出土ヒスイ製勾玉の原材産地分析結果

遺物品名	遺物品名	分析番号	各分類基準による判定				総合判定	勾玉比重
			図5判定	図6判定	図7判定	比重＆基準(2)		
勾玉	背白緑部	109648-1	IT,OY	IT,OY	IT,WK	IT,IN,HK,HD	糸魚川産	3.241
	頭黒色部	109648-2	IT	IT,OY	IT	IT,IN,HK,HD	糸魚川産(ミャンマー産でない)	
	側茶色部	109648-3	IT	IT,OY	IT,WK	IT,IN,HK,HD	糸魚川産(ミャンマー産でない)	

IT:糸魚川 WK:若桜 OS:大佐 NG:長崎 HK:日高 IN:引佐 OY:大屋
KM:神居コタン HD:飛騨 MY:ミャンマー
注:Ni/Fe比は日高産地および飛騨産地に同時に帰属された遺物の分類指標
(飛騨産原石、42個の平均値±標準偏差)Ni/Fe=0.091±0.030
(日高産原石、14個の平均値±標準偏差)Ni/Fe=0.065±0.028

大型植物遺体同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、東大阪市池島町５丁目地内に所在する池島・福万寺遺跡Ⅱ（その 10）08 － 2 調査区において、弥生時代前期の植生や植物利用に関する情報を得ることを目的として、大型植物遺体同定を実施する。

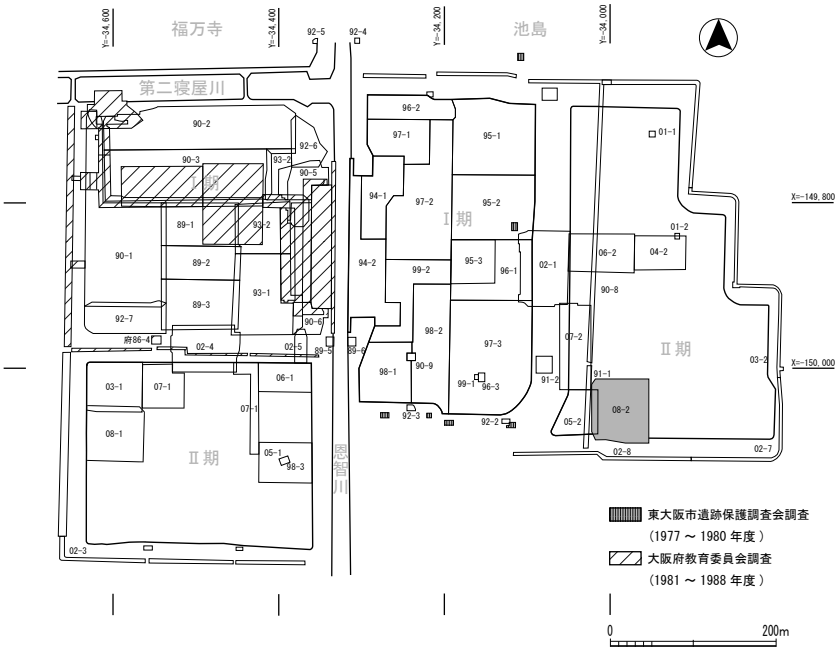


図１　調査区位置図

１. 試料

試料は、弥生時代前期の遺構検出面（第 15 面）の 788 土坑 (試料番号 1 ～ 4) から出土した大型植物遺体同定試料 1 点である。

788 土坑は調査区の南端中央部（20A-10h）に位置する焼土坑であり、埋土からは炭・焼土・灰が認められており、当時の人間活動を把握する上で貴重であると判断されたことから、埋土の水洗選別が行われ、大型植物遺体が抽出された（図 1)。なお、今回の試料では同時期の 803 溝 (登録番号 1618) から出土した種実についても同定を行う。

２. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な大型植物遺体を抽出する。大型植物遺体の同定は、現生標本および石川 (1994)、中山ほか (2000) 等との対照より実施し、個数を数えて一覧表で示す。

分析後は、大型植物を種類別に容器に入れ、70％程度のエタノール溶液で液浸し、保管する。

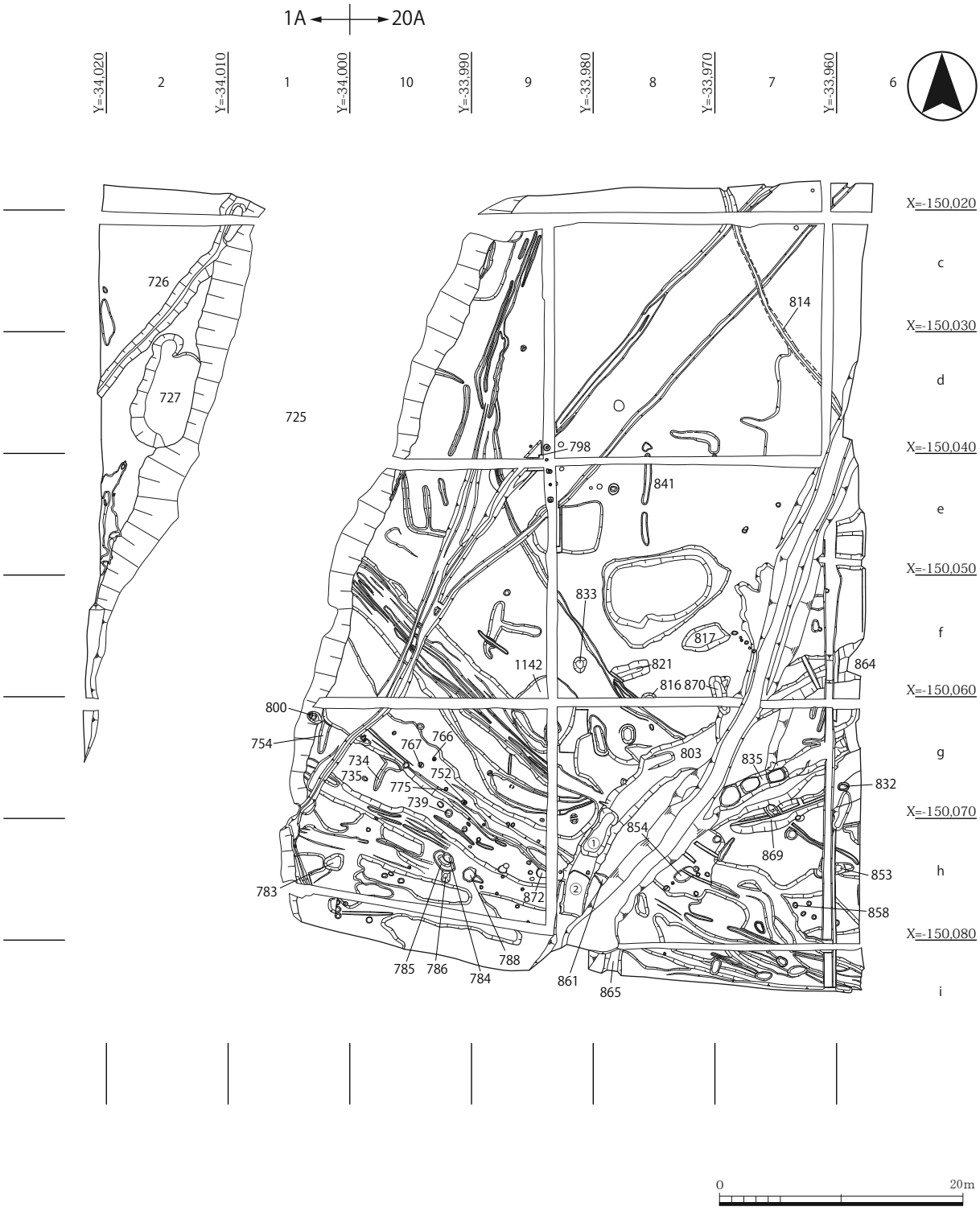


図160　第15面　全体図（S＝1：500）

3.結果

大型植物遺体同定結果を表1に示す。検出された種類（分類群）は、落葉広葉樹3分類群 (ムクノキ、ブドウ属、ブドウ科)80 個と、草本で栽培種のイネ 104 個である。

788 土坑では、高木のムクノキの炭化した核の破片が 76 個、籐本のブドウ属の炭化した種子が3個 (完

形 1 個、破片 2 個)、ブドウ科の炭化した種子の破片が 1 個、栽培種のイネの炭化した胚乳が 99 個 (完形 61 個、破片 38 個 (うち、1 個穎付着))、灰化した穎の破片が 2 個確認された。803 溝では、イネの穎が 3 個 (完形 1 個、破片 2 個) 確認された。以下に、各分類群の形態的特徴等を記す。

・ムクノキ (Aphananthe aspera (Thunb.) Planchon)　ニレ科ムクノキ属

核 (内果皮) は炭化しており黒色。核は、完形ならば長さ 8.0mm、幅 6.0mm、厚さ 4.0mm 程度の広卵体。一側面は狭倒卵形で他方は稜をなし薄い。頂部に淡褐色、長さ 1.5mm、幅 1.0mm 程度の楕円状突起がある。内果皮は厚く柔らかく脆い。表面には粒状網目模様があり、断面は柵状。破片は最大 5.2mm 程度 (図版 1-1)。

・ブドウ属 (Vitis)　ブドウ科

種子は炭化しており黒色。長さ 3.2mm、幅 2.5mm、厚さ 2mm 程度の広倒卵体、側面観は半広倒卵形。基部は細く嘴状に尖る核嘴がある。背面正中線の頂部から長さ 0.7mm 程度の部分に長さ 1.2mm、幅 0.7mm 程度の卵形の合点があり、細く浅い溝に囲まれる。腹面正中線は (鈍) 稜をなし、細い筋が走る。正中線の左右には、各 1 個の長さ 1.5mm、幅 0.3mm 程度の倒皮針形で深く窪む核窪がある。種皮は薄く硬く、表面は粗面。断面は柵状 (図版 1-2)。なお、種の同定根拠となる背面が欠損した破損個体をブドウ科 (Vitaceae) としている。

・イネ (Oryza sativa L.)　イネ科イネ属

穎 (果) は灰褐色、胚乳と一部の穎は炭化しており黒色。穎、胚乳は、やや偏平な長楕円体。胚乳は長さ 4-5mm、幅 2.5-3mm、厚さ 1.5mm 程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3 本の隆条が縦列する (図版 1-5)。表面に穎が付着する胚乳もみられる (図版 1-4)。胚乳 1 個を包む穎 (果) は、長さ 6.25mm、幅 3.23mm、厚さ 1.50mm。基部に斜切状円柱形の果実序柄と 1 対の護穎を有し、その上に外穎 (護穎と言う場合もある) と内穎がある。外穎は 5 脈、内穎は 3 脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する (図版 1-3)。

表1. 大型植物遺体同定結果

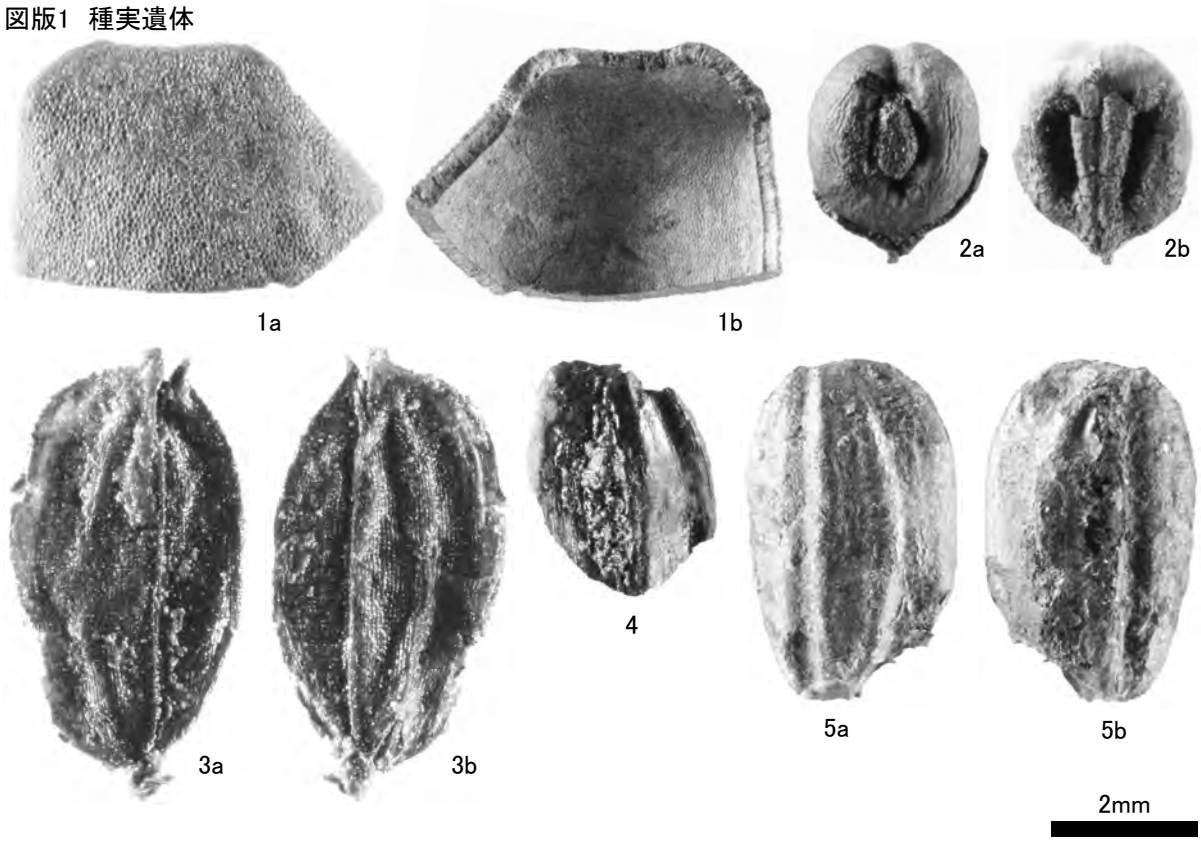
分類群	部位	状態	試料番号1						
			08-2	08-2	08-2	08-2	08-2	08-2	08-2
			788	788	788	788	788	788	803
			2010.07.06	2010.07.06	2010.07.06	2010.07.07	2010.07.06	2010.07.07	2010.05.31
			1	2	3	3	4	4	24 種子 20A 第15面 登録番号1618
木本									
ムクノキ	核	破片　炭化		12	41	22		1	
ブドウ属	種子	完形　炭化			2				
		破片　炭化			1				
ブドウ科	種子	破片　炭化				1			
草本									
イネ	胚乳	完形　炭化	10	6	15	29		1	
		破片　炭化	15	4	1	16	1		
	胚乳・穎	破片　炭化				1			
	穎	破片　灰化	1	1					
	穎	完形							1
		破片							2

4 . 考察

焼土坑である 788 土坑と、803 溝から出土した大型植物遺体には、栽培種のイネの頴・胚乳が確認された。弥生時代前期の池島・福万寺遺跡Ⅱ期区周辺域におけるイネの利用が推定される。803 溝より出土した頴には完形個体が確認されたことから、籾摺りを経ず、食用に利用されない状態で溝内に堆積したことが示唆される。

炭と焼土層をもつ 788 土坑より出土した大型植物遺体は、全て炭化 (一部灰化) していることから、燃料材として利用されたものの残滓であることが示唆される。出土分類群の種類構成は、炭化した栽培種のイネの胚乳を主体とし、灰化した頴をともなう。イネは当時利用された穀類と示唆され、胚乳表面が明瞭で頴付着個体もみられることから、頴がついた生米の状態で火を受けた可能性がある。栽培種を除いた分類群は、ムクノキの炭化した核と、ブドウ属 (科) の炭化した種子が確認された。ムクノキは河畔林要素の落葉高木で、ブドウ属 (科) は、森林の林縁部などの比較的明るい林地を好み、伐採地や崩壊地などに先駆的に侵入して他の樹木に絡み付く落葉籐本である。これらは当時の調査区近辺に生育していたものと考えられる。なお、ムクノキとブドウ属 (科) の果実は生食可能であることから、当時の住居内に持ち込まれ利用された可能性もある。

図版1　種実遺体



1 . ムクノキ 核(788;3)　　2 . ブドウ属 種子(788;3)
3 . イネ 頴(803)　　4 . イネ 胚乳・頴(788;3)
5 . イネ 胚乳(788;3)

引用文献

石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p.

池島・福万寺遺跡出土陶質土器の胎土分析

株式会社パレオ・ラボ

はじめに

本調査区は東大阪市池島町５丁目に所在する（図１）。近世から縄文時代後期までの複合遺跡で、18面以上の遺構面が存在する。今回、分析を行った陶質土器が出土したのは、弥生時代後期～古墳時代中期の遺構面（第 10 面）で検出した遺構からである（図２）。第 10 面は、調査区の北東隅に微高地が広がり、掘立柱建物６棟、井戸、土坑、溝などを検出した。また、調査区の南東から北西にかけては水田域となり、畦畔および溝を検出した。

陶質土器は、微高地の西端部に近い 20A-9d 区で検出された 402 井戸から、土師器甕２点と共に出土した。井戸の平面形はほぼ円形で、直径は 0.6 ～ 0.7m、検出面からの深さは 1.1 mを測る。時期は出土遺物から４世紀後半と考えられる。

ここでは､402 井戸から出土した陶質土器について薄片の偏光顕微鏡観察および蛍光Ｘ線分析を行い、粘土材料および元素組成から見た材料的な特徴を検討した。なお、韓国慶尚大学校博物館より御提供いただいた陶質土器についても蛍光Ｘ線分析を行った。陶質土器を御提供いただきました韓国慶尚大学校博物館趙榮濟氏、宋永鎭氏には感謝の意を表します。また、大谷大学の三辻利一博士には、陶質土器の産地推定に関する分析法についてご教授いただきました。ここに感謝の意を表します。

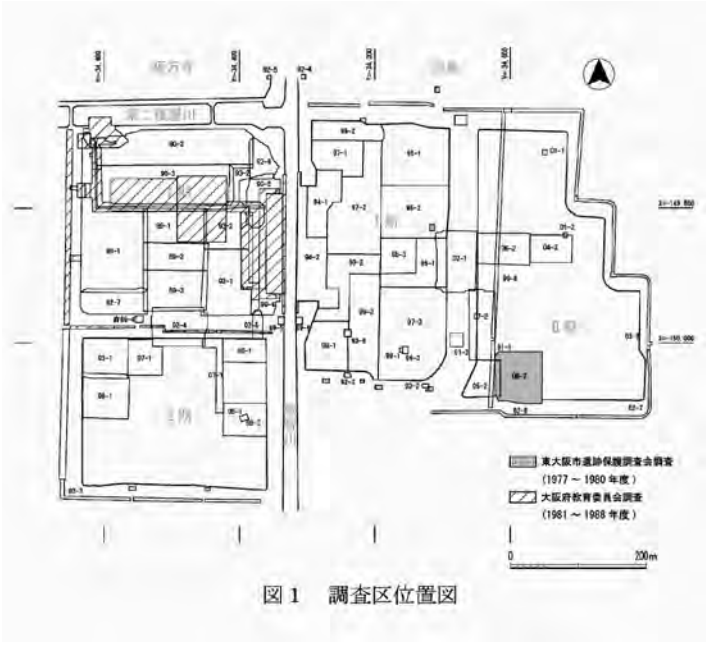


図１　調査区位置図

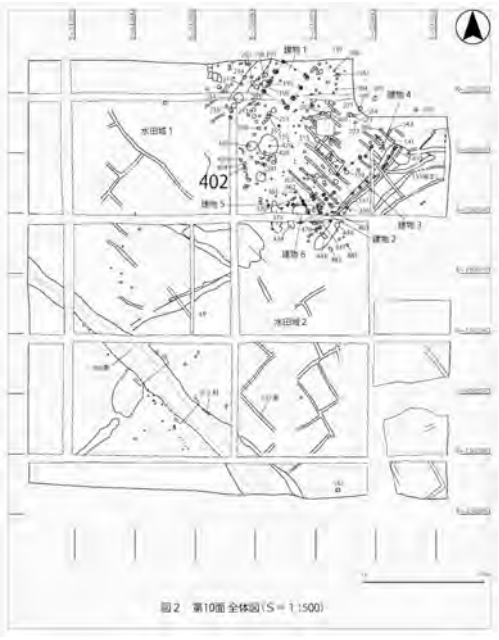


図２　第10面 全体図(S＝1:500)

１. 試料と方法

分析対象資料は、402 井戸より出土した陶質土器１点である。また、比較対象として慶南宜寧郡正谷面禮屯里山 150 番地に所在する禮屯里遺跡出土の陶質土器 11 点（4 世紀～ 6 世紀の伽耶時代の墳墓群）についても蛍光線Ｘ分析を行った（表 1、図版 1)。さらに、日本の基盤岩類についても同様に分析した（表 1)。

表1　陶質土器試料および標準岩石とその詳細

分析No.	種類	遺跡	所在地	時期	遺構	種別	備考
1	陶質土器	池島・福万寺	大阪府東大阪市池島町5丁目	4世紀中頃	402井戸	広口壷	実測図番号907
2		禮屯里	韓国慶南宜寧郡	4世紀～6世紀	墳墓群	短頸壷	UY-1
3						短頸壷	UY-2
4						短頸壷	UY-3
5						壷	UY-4
6						短頸壷	UY-5
7						短頸壷	UY-6
8						長頸壷	UY-7
9						壷	UY-8
10						台脚	UY-9
11						コップ形土器	UY-10
12						坏	UY-11
13	標準岩石	花崗閃緑岩	群馬県沢入	-	-	岩石標準試料JG-1a	地質調査総合センター配布
14		花崗岩	岐阜県（苗木花崗岩）	-	-	岩石標準試料JG-2	
15		花崗閃緑岩	島根県三刀屋	-	-	岩石標準試料JG-3	
16		はんれい岩	福島県（移ヶ岳）	-	-	岩石標準試料JGb-1	
17		玄武岩	長崎県佐世保	-	-	岩石標準試料JB-1a	
18		玄武岩	東京都大島（三原山）	-	-	岩石標準試料JB-2	
19		玄武岩	山梨県鳴沢村（富士山）	-	-	岩石標準試料JB-3	

最初に、試料 5mm 角程度を採取し、陶質土器の薄片を作製した。薄片は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面について微化石類（珪藻化石、骨針化石、植物珪酸体化石の有無）と大型粒子の特徴およびその他の混和物について観察と記載を行った。

蛍光Ｘ線分析に先立ち、各試料よりガラスビードを作製した。各試料は、岩石カッターで切り取り、胎土以外の影響を排除するため、表面を削った後、精製水にて超音波洗浄を行った。セラミック乳鉢で粉末にして、るつぼに入れ、電気炉で 750℃、6 時間焼成した後、デシケータ内で放冷し、1.8000g 秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウム Li2B4O7 と、リチウムメタボレイド LiBO2 を 8:2 の割合で調製した融剤 3.6000g と十分に混合し、白金製るつぼに入れ、ビードサンプラーにて約 750℃で 250 秒間予備加熱、約 1100℃で 150 秒間溶融させ、約 1100℃で 450 秒間揺動加熱してガラスビードを作製した。

分析は、フィリップス社製波長分散型蛍光Ｘ線分析装置 MagiX（PW2424 型）にて、検量線による定量分析を行った。なお、検量線は、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所（NIST）の岩石標準試料計 15 種類を用いた。定量元素は、酸化ナトリウム (Na2O)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化アルミニウム (Al2O3)、二酸化ケイ素 (SiO2)、五酸化二リン (P2O5)、酸化カリウム (K2O)、酸化カルシウム (CaO)、酸化チタン (TiO2)、酸化マンガン (MnO)、酸化鉄 (Fe2O3) の主成分 10 元素と、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr) の微量成分 2 元素の計 12 元素について行った。

2.結果

薄片の偏光顕微鏡観察では、平均粒径 30 ～ 130 μ m、最大粒径 210 μ m、石英･長石類が最も多く、その他に雲母類、斜方輝石、ジルコン、斜長石（双晶）、植物珪酸体化石やや多い、ムライト化した長石類が見られた（図版 2）。なお、水成粘土を指標する珪藻化石や骨針化石は、検出されなかった。

表 2 に、蛍光Ｘ線分析の測定結果を示す。分析の結果、陶質土器は Na2O が 0.38 ～ 0.93%、MgO が 0.66 ～ 1.53%、Al2O3 が 15.4 ～ 25.6%、SiO2 が 62.4 ～ 72.0%、P2O5 が 0.028 ～ 0.067%、K2O が 1.74 ～ 2.53%、CaO が 0.26 ～ 0.45%、TiO2 が 0.84 ～ 1.03%、MnO が 0.011 ～ 0.039%、Fe2O3 が 3.35 ～ 6.26%、Rb が 80 ～ 146ppm、Sr が 52 ～ 118ppm であった。図 3 に各元素の分布図を示す。

表２に、蛍光Ｘ線分析の測定結果を示す。分析の結果、陶質土器は Na2O が 0.38 ～ 0.93%、MgO が 0.66

～ 1.53%、Al2O3 が 15.4 ～ 25.6%、SiO2 が 62.4 ～ 72.0%、P2O5 が 0.028 ～ 0.067%、K2O が 1.74 ～ 2.53%、CaO が 0.26 ～ 0.45%、TiO2 が 0.84 ～ 1.03%、MnO が 0.011 ～ 0.039%、Fe2O3 が 3.35 ～ 6.26%、Rb が 80 ～ 146ppm、Sr が 52 ～ 118ppm であった 。図 3 に各元素の分布図を示す。

3.考察

図 4 に各元素の分布図を示す。池島・福万寺遺跡出土陶質土器は、禮屯里遺跡出土陶質土器と比較すると、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K2O)、ルビジウム (Rb) において禮屯里遺跡出土陶質土器の分布範囲より若干高い組成を示すものの、その他の元素は分布範囲に収まっており、比較的近い組成を示している。なお、日本の標準岩石との比較では、産地の指標元素とされる微量元素に注目すると、ルビジウム (Rb) では花崗岩類は陶質土器より広い分布範囲を示し、玄武岩類は低い値に集中する。

また、ストロンチウム (Sr) は、いずれも広い分布範囲を示す。日本の基盤岩類と比較した場合、微量元素において異なった組成を示している。

図 3 に Al2O3 -SiO2 分布図を示す。小村・藤根（2001）は、中世東海地方の山茶碗の材料的な検討において、粘土の化学組成は Al2O3 が比較的多く砂粒は SiO2 が多いため、Al2O3 と SiO2 の組成比の直線的変化は、同一材料の粘土と砂粒を用いた場合の混合割合を表すとしている。禮屯里遺跡出土陶質土器の№3 から№4 を結んだ直線上には複数の陶質土器が並んでいることから、これらの陶質土器は、同時期において同一材料を使用した可能性が高い。

なお、禮屯里遺跡から出土した陶質土器は、消費地遺跡出土試料であり、生産地遺跡出土試料との比較検討が今後の課題といえよう。

なお、402 井戸から出土した陶質土器は、ムライト化した長石類が一部見られたものの、珪酸体化石が確認されたことから、1200℃と言った高い温度で焼成されていないと推定される。また、水成粘土を指標する珪藻化石や骨針化石が検出されなかったことから､水成以外の粘土を用いたと考えられる。

表2　陶質土器および標準岩石の分析結果

分析No.	種別	Na_2O (%)	MgO (%)	Al_2O_3 (%)	SiO_2 (%)	P_2O_5 (%)	K_2O (%)	CaO (%)	TiO_2 (%)	MnO (%)	Fe_2O_3 (%)	Total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)
1	広口壷	0.50	1.53	23.3	69.2	0.059	2.53	0.44	1.02	0.039	5.44	104.1	146	78
2	短頸壷	0.77	1.37	21.2	65.4	0.046	2.42	0.39	0.97	0.033	5.64	98.2	137	118
3	短頸壷	0.38	1.40	25.6	62.4	0.045	2.44	0.38	0.98	0.014	4.37	98.0	129	67
4	短頸壷	0.46	0.89	15.4	71.3	0.049	1.86	0.36	1.03	0.024	5.67	97.0	92	107
5	壷	0.88	1.32	20.2	66.3	0.040	2.22	0.41	0.95	0.025	5.23	97.6	103	99
6	短頸壷	0.38	1.47	23.1	63.8	0.045	2.45	0.26	0.92	0.028	4.39	96.8	119	52
7	短頸壷	0.72	1.35	19.4	72.0	0.056	2.23	0.39	0.98	0.039	6.26	103.4	112	73
8	長頸壷	0.69	0.87	16.7	71.4	0.041	2.26	0.39	0.84	0.019	3.35	96.6	105	100
9	壷	0.64	1.28	18.3	67.1	0.067	2.12	0.36	0.95	0.039	6.12	97.0	100	69
10	台脚	0.70	0.66	18.7	68.9	0.065	1.74	0.45	0.93	0.027	4.92	97.1	80	76
11	コップ形土器	0.93	1.30	20.0	66.6	0.054	2.15	0.40	0.85	0.022	5.16	97.5	95	100
12	坏	0.46	1.17	24.3	65.0	0.028	1.80	0.31	0.94	0.011	4.06	98.1	82	58
最小値		0.38	0.66	15.4	62.4	0.028	1.74	0.26	0.84	0.011	3.35		80	52
最大値		0.93	1.53	25.6	72.0	0.067	2.53	0.45	1.03	0.039	6.26		146	118
13	JG-1a	3.37	0.70	14.5	74.3	0.086	4.05	2.18	0.25	0.058	1.94	101.4	172	174
14	JG-2	3.52	0.04	12.5	76.8	0.008	4.72	0.67	0.05	0.017	0.97	99.3	294	17
15	JG-3	3.98	1.78	15.5	67.4	0.128	2.60	3.74	0.48	0.071	3.64	99.3	65	371
16	JGb-1	1.29	7.84	17.4	43.0	0.052	0.24	11.65	1.59	0.184	14.37	97.6	1	299
17	JB-1a	2.81	7.91	14.6	53.1	0.260	1.42	9.42	1.32	0.147	9.24	100.2	48	444
18	JB-2	2.03	4.53	14.5	52.6	0.094	0.42	9.68	1.16	0.212	13.66	98.9	3	163
19	JB-3	2.78	5.05	17.2	52.8	0.307	0.81	10.30	1.54	0.193	12.24	103.2	20	401

4. おわりに

池島・福万寺遺跡 402 井戸から出土した陶質土器と韓国の禮屯里遺跡出土陶質土器について検討した。

蛍光X線分析では、池島・福万寺遺跡 402 井戸から出土した陶質土器と韓国の禮屯里遺跡出土陶質土器と近い化学組成を示していた。ただし、生産地が同じであるかについては明らかでない。

なお、池島・福万寺遺跡 402 井戸から出土した陶質土器の薄片観察では、植物珪酸体化石が確認されたが、水成粘土を指標する珪藻化石や骨針化石が検出されなかったことから、水成以外の粘土を用いたと考えられた。

引用・参考文献

小村美代子・藤根久（2001）須恵質土器胎土中の砂粒分の化学的評価．日本文化財科学会第 18 回大会研究発表要旨集，114-115.

小村美代子・藤根久（2002）山茶碗胎土の化学的評価．日本文化財科学会第 19 回大会研究発表要旨集，60-61.

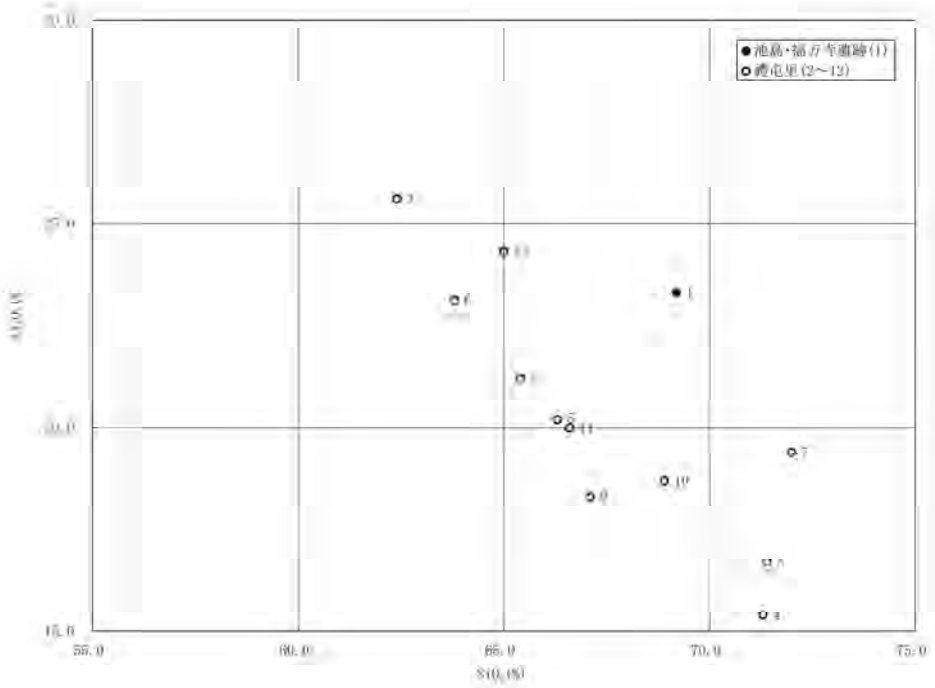


図 3　402 井戸出土陶質土器と禮屯里遺跡出土陶質土器の Al2O3-SiO2 分布図

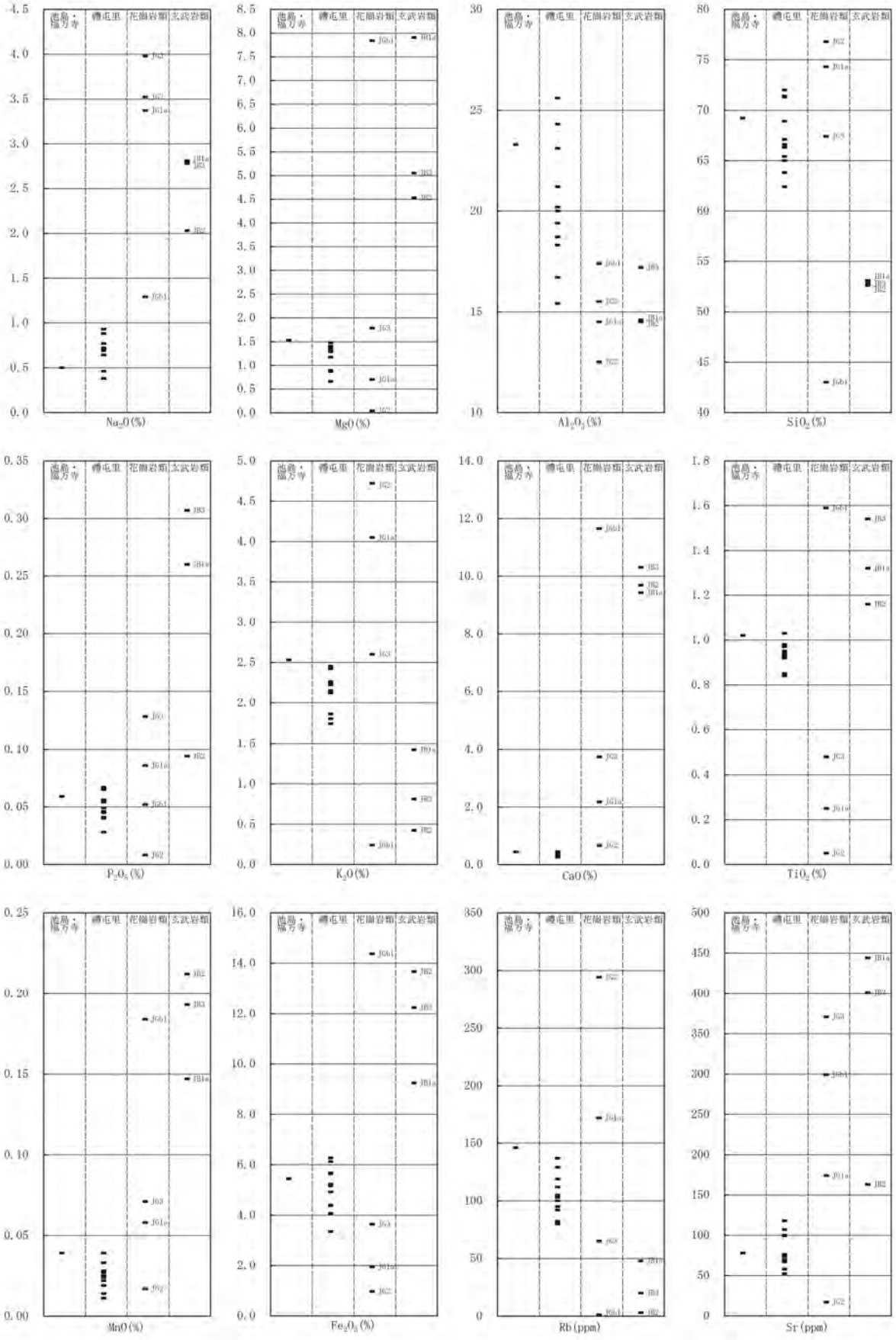


図 4　402 井戸出土陶質土器と禮屯里遺跡出土陶質土器および標準岩石の各元素分布図

第６章　総括

１．弥生時代前期以前の様相

今回の調査では、調査掘削限界深度である T.P. ＋ 0.9 m前後において第 18 面を検出した。当該面および当該面を覆う第 17 層からは遺物の出土がなかったため詳細な時期は不明であるが、既往の調査成果から勘案して縄紋時代後期の遺構面と考えられる。しかし、検出された遺構面は黒色の植物遺体が未分解のまま残る腐食土層で、遺構面上には網目状流路がはしる湿地帯であったと考えられる。積極的にヒトが活動した痕跡は確認できなかった。

２．弥生時代前期の集落

弥生時代前期中～後葉に属する第 15 ～ 17 面の調査成果は、これまでの池島・福万寺遺跡の調査の中で初めて本格的な集落域が検出されたことが今回の調査で特筆すべき点として挙げられる。第 18 面を覆う洪水堆積層（第 17 層）が厚さ 0.8 ～ 1.3 m堆積し、その上層にいわゆる「第４黒色土層」と呼称された土壌化層が形成される。この土壌化層は上下２層に細分でき、各層上面をそれぞれ第 15・16 面として、また、土壌化層の基盤層上面も第 17 面として調査を行った。その結果、弥生時代前期中～後葉に属する遺構・遺物を検出した。弥生時代前期の遺構面は地形的には第 17 層の堆積によって調査区の南東部から調査区中央部にかけて舌状に張り出す微高地が形成され、この微高地上で多くの遺構・遺物を検出した。また、調査区北半部においては調査区中央部の微高地から北方向へと標高を減じており、遺構は希薄であった。一方、調査区西半部は幅約 20m の流路が南から北へと流走する。この流路より西側は、調査区外に向かって西または北方向へと標高を減じ、既往の調査区（05 －２・07 －２調査区）の微低地部分で水田域が検出されている。

微高地上において検出された遺構は、最上面である第 15 面では土坑、ピット、溝、木製品水漬け遺構などが挙げられる。調査区の南東部において北東－南西方向に弧状に延びる溝が２条（803・835）巡る。その溝の底部に隅丸方形の土坑を掘削した木製品水漬け遺構が設けられ、竪杵や平鍬、またそれらの未成品などが出土した。この２条の溝内から多量の土器が出土した。土器は溝が水漬け遺構の機能をもたなくなった後廃棄されたものである。これらの土器の時期は殆どが弥生時代前期中～新段階に求められることから、集落域が機能していたのはきわめて短期間であったと考えられる。ただ、今回出土した土器の時期は従来弥生時代前期の遺構面に比定されていた時期より若干新しいことから、今回検出した集落域と水田遺構との関連性など詰めていく必要がある。この面では木製品水漬け遺構以外にも炉跡や土坑、ピットなどが検出された。なお、本調査区において水田遺構は検出されなかったが、近隣の調査区では前期の水田遺構が検出されている。さらに弥生時代前期に属すると考えられる土錘 56 点と石錘 37 点が出土した。このことは縄紋時代からの系譜を引く石錘と弥生時代になってから出現する土錘がともに出土したことや、縄紋時代祭祀の象徴ともいえる石棒と弥生時代に出現する人形土製品が出土しており、縄紋時代から弥生時代へと移り変わりを象徴する遺物といえる。

また、中位面の第 16 面では掘立柱建物が検出された。さらに最下面の第 17 面では推定分を含めて３基の木棺墓を検出した。本調査区の北北東約 200 mに位置する 04 － 2 調査区において縄紋時代晩期から弥生時代前期に属する木棺墓・土器棺墓・土壙墓が検出されており、今回の調査ではそれに次ぐ

時期の木棺墓が３基検出されたことは意義深い。さらに、調査区中央部で流路の東側、舌状に延びる微高地の先端部で掘立柱建物７は検出された。東西方向に主軸をもつ東側梁行４間（西側梁行３間）×北側桁行６間（南側桁行７間)、建物の床面積は（床面積約 41.2 ㎡）である。なお、類似する建物は巨摩・若江北遺跡でも検出されている。これらの３枚の遺構面から検出された遺構の帰属時期はいずれも弥生時代前期中～後葉に比定された。但し、各遺構および各包含層から出土した遺物に明確な時期差は認められなかったことから、本調査区内における集落の存続時期はかなり短期間であったと思われる。そして、本文中でも述べたが集落が短期間で遺棄された原因は、第 15 面上を覆う河川からの氾濫堆積と推定される溝状遺構によるものと指摘できる。

以上、今回検出したのは弥生時代前期の集落域の縁辺部分にあたると考えられ、木棺墓や大形の掘立柱建物、さらに木製品水漬け遺構を伴う溝や土坑、炉跡など多数の遺構が検出された。ただ、竪穴建物が検出されなかったことや地形的にみて、集落域の本体は本調査区外の東および南側にあると想定される。

３．弥生時代中期後葉から始まる水田開発

弥生時代前期中～後葉の集落が廃棄された後、弥生時代中期前半になると本調査区内においては調査区外の北東方向に展開すると推測される水田域に水を送り込むための取水施設としての溝が掘削される。溝は２条で、調査区の西半部を流れる 646 流路から取水し流路右岸の自然堤防脇を北東方向にはしる 716 溝と、調査区の東半部を南西－北東方向にはしる 717 溝が検出された。716 溝は第 13 － 1・２面で掘削された溝によって取水部分は削平を受けていたが、流路から取水されたものと推定される。また、717 溝は南端部が調査区外に延びるため断定は出来ないが、溝のはしる方向から勘案して 646 流路から取水するための溝であったと推測される。

このような状態は弥生時代中期後葉の遺構面である第 13 － 2 面においてもみられ、第 14 面と同様 646 流路から取水し、調査区を南西－北東方向に縦断する２条の箱溝（687・688・709）が掘削される。この３条の埋土は 646 流路からの取水部分では水成堆積層が確認できたが、北側３分の２は偽礫を多く含むもので人為的に埋め戻されたことが確認できた。

本調査区内においては第 13 － 1 面段階になってはじめて水田開発が及び、微低地部にあたる調査区内北東部で水田畦畔が検出されたほか、流路に堰を設けた取水施設を含め複数の溝（水路）によって水利形態が良好な状態で検出された。しかも、水田畦畔の幹線畦畔については第 13 － 2 面で検出した 688 溝が埋め戻された位置に構築されていることから、調査区外に展開していると推察される水田域の幹線畦畔がこの 688 溝の延長線上から延伸して本調査区部分にまで開発域が拡大した証左といえ、そのために 688 溝は埋め戻されたものと考えられる。本調査区にまで水田開発が及んだ原因として、本調査区外に展開していたと推察される水田域が洪水堆積物の供給によって遺構面のレベルが上がったことで開発が可能になったことや､何らかの要因でこの地を開発せざるを得ない状況が生じたためなど、現段階でいくつか挙げられるが断定はできない。

４．弥生時代後期から古墳時代中期の集落

弥生時代後期になれば本調査区の様相は一転する。弥生時代中期後葉の第 13 － 1 面を分厚い洪水砂層が堆積し、646 流路や 665 溝などは完全に埋積してしまう。その結果、第 13 － 1 面で微低地とし

て水田域であった調査区北東部分は氾濫体積物がレンズ状堆積をして安定した微高地となる。微高地上は氾濫堆積物の供給があまり行われなかったことから、古墳時代前期～中期に属する第 10 面と弥生時代後期～庄内期に属する第 11 面の遺構は一部を除いて同時に検出された。

第 11 面は調査区北東部分の微高地と微低地部の境目で井戸、土坑、ピット、溝といった遺構が検出されたが、同時期の建物は検出されなかったことから、集落域の縁辺部であったことを窺わせる。微低地部にあたる調査区南半部や西半部は水田域として利用されていたと考えられるが、第 11 面上には薄い氾濫堆積物の供給しかなかったため古墳時代の水田耕作による撹拌を受けており残りが悪く、調査区北西隅で数条の畦畔を検出したのみである。井戸は弥生時代後期から庄内期のものが３基検出されたが、中でも弥生時代後期の 367 井戸からは体部に線刻を施したものを含む壺が５点出土している。

第 10 面は南東－北西方向に延びる微高地上で、掘立柱建物、ピット、井戸、土坑、鋤溝を、微低地部では微高地の方向と軸を同じくする水田畦畔・溝を検出し、微高地上に展開する集落の周辺に生産域が広がる様子が確認できた。但し、遺構面の上面は中世の畠による耕作溝で削平を受けており、島畠の下面のみ遺構の残りは良好であった。

微高地上は北東－南西方向に主軸をもつ掘立柱建物が６棟検出された。今回検出された建物の中で掘立柱建物１は調査区内における微高地の最も標高の高い場所に建っており、床面積も 27 ㎡と卓越する。他の掘立柱建物２～６の５棟は掘立柱建物１の南東約 15 ｍの微高地縁辺部に近い位置に掘立柱建物１と対面する形で建つが、その床面積は 11 ～ 18 ㎡と小振りである。今回、井戸も５基検出されたが、そのうち古墳時代前期に属する 402 井戸から金海地域産と考えられる陶質土器壺が土師器甕・鉢と共に出土したことは、両者の遺物の編年観につながる貴重な資料となる。また、古墳時代中期に属する 310 井戸からは８点の甕をはじめ壺、小型丸底壺、高坏、木錘、滑石製双孔円板や臼玉が出土しており、井戸廃棄に伴う祭祀の一端が観察できた。

今回、弥生時代後期から古墳時代中期の集落域を検出し、掘立柱建物をはじめ多くの遺構・遺物を検出したが、集落域が広がるこの微高地は北西－南東方向に延びており、本調査区の南東約 100 ｍに位置する 02 －７調査区でも同時期の遺構・遺物が検出されていることから、微高地が本調査区の北および南東側に延び、集落域も同様に広がると推測される。

さらに、当該面では微高地上に広がる遺構を切る形で北西－南東方向にはしる鋤溝群を検出したが、鋤溝の方向や埋土、第７面（中世）上面の遺構に削平されていたことなどから、集落が廃絶したあと条里型地割が施工されるまでの間、微高地部分が畠地として利用されていたと考えられる。

一方、本調査区における第 10 面は既往の調査区のそれと比して標高が高く、氾濫堆積物の供給が少なかったため地層が収斂している。さらに、後世の削平を受けていたため既往の調査で検出されている第９層は遺存していなかった。しかし、第 10 面の古墳時代前期から中期の遺構面で古墳時代に属する遺構と共に飛鳥時代や平安時代に属する土器埋納ピットが検出されたことから、本来、本調査区内においても古代の遺構面が存在していたと推察される。

５．中世の畠と島畠

本調査区において条里型地割が確認できたのは第７面である。調査区の西寄りの Y=-34,000 ライン付近を南北方向に坪境がはしり、坪境を挟んで西側が二十二ノ坪、東側が十五ノ坪にあたる。そして、二十二ノ坪は東西方向の、十五ノ坪は南北方向の地割りをもつ長地型の地割りをもつが、これは近・現

代にいたるまで継続する。

第７面（中世段階）は十五ノ坪においては南北方向の鋤溝群がはしり、畠として利用されていた。これは本調査区における第７面の標高がT.P.＋3.7～4.1ｍと高いことから、水がかりが悪く水田開発が遅れたため畠地として利用されたものと考えられるが、このことは既往の調査成果においても指摘されていたことであり、これを追認する結果となった。また、当該面では条里型地割りに則った方向に軸を有する隅丸方形の土坑が７基検出されたが、既往の調査成果においても何らかの灌漑施設と考えられている。ほとんどの隅丸方形土坑から遺物は出土しなかったかしても細片であったため時期は不明である。さらに当該面で検出した遺構からは混入以外の遺物は出土しなかったため、第７面の詳細な時期を決められないが、既往の調査成果を参考にすれば、12～13世紀の遺構面と考えられる。第６面においても鋤溝群を検出したが、十五ノ坪内の一部で南北方向にはしる鋤溝群に切られる東西方向にはしる鋤溝群を検出したことから、第７面に引き続いて畠地として利用されていたと考えられる。遺構面の時期は13世紀後半から14世紀に属する。第５面になると本調査区において島畠が出現する。十五ノ坪において島畠は､67･71島畠を除いて長地型の島畠が構築され調査区内を南北方向に縦走する。そして、同様の様相は第４面においても認められた。第３面は15世紀後半の遺構面で坪境付近に島畠を検出した。この第３面は近世に属する層厚0.1～0.4ｍの氾濫堆積層（第２－５ｂ層）に覆われる。

６．近世以降

第２面は近世の遺構面で第２－１～２－５面まで確認できたが、第２－２面に関しては遺構を検出できなかった。近世に入っても中世からの地割りを踏襲しており、坪境畦畔より東側の十五ノ坪は南北方向の、西側の二十二ノ坪は東西方向の地割りが認められる。但し、第２－３～２－５面は十五ノ坪では島畠は検出されず、二十二ノ坪においてのみ東西方向にはしる島畠を検出した。しかし、第２－１面段階の近世末には本調査区において島畠は検出されず、水田面として利用されていたと考えられる。

第１ｂ面においては、いわゆる「１ｂ土坑」と呼称される溝状の土坑が中・近世からの地割りに則って調査区全域において検出された。この「１ｂ土坑」は洪水によって堆積した氾濫堆積物を除去して耕作地とするための災害復旧土坑（転地返し）との指摘があるほか、土取り穴であるとの指摘もある。しかし、いずれにしても埋土中に偽礫が含まれており、掘削されてすぐ人為的に埋め戻されたことが本調査区においても確認できた。

７．まとめ

今回の調査においても、弥生時代前期から近世まで重層的に遺構面が存在することが確認できた。その中で弥生時代前期と弥生時代後期～古墳時代中期の２枚の遺構面において集落域が検出されたこと、特に弥生前期の遺構面からは、漁撈具や祭祀具において縄紋時代から続く石錘や石棒が、弥生時代になって出現する土錘や人形土製品が共に出土したことは大変意義深い調査成果を得ることができたといえる。

今回検出した集落域はほんの一部分であり、さらに東側に広がるものと考えられる。また、今後調査を進めていくことによって前期集落の範囲や構造、また、生産域と集落域との関係がより具体的に把握され、多角的な観点から歴史環境を復原していくための成果が得られると思われ、今後の調査の進展に期待したい。

（後藤信義）

参考文献

磯貝富士男　2002 『中世の農業と気候－水田二毛作の展開－』 吉川弘文館

廣瀬時習編　2008 『池島・福万寺遺跡５』(財) 大阪府文化財センター

内田真雄　2008 『池島・福万寺遺跡７』(財) 大阪府文化財センター

廣瀬時習・飯田浩光編　2009 『池島・福万寺遺跡９』(財) 大阪府文化財センター

島崎久恵　2010 『池島・福万寺遺跡 11』(財) 大阪府文化財センター

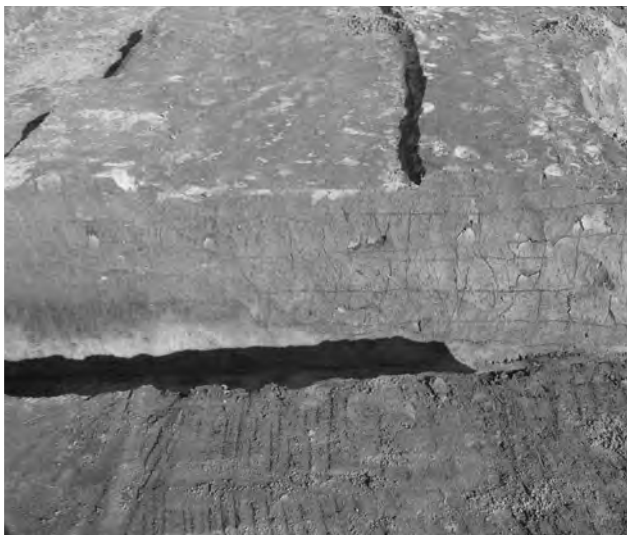
大阪府立弥生文化博物館　2007 『計る・量る・測る－度量衡の歴史展－』

内藤記念くすり博物館　2007 『薬と秤～重さをはかる～』くすり博物館収蔵資料集－⑤

三好孝一・市本芳三　1996 『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告－第５次－』(財) 大阪府文化財調査研究センター

写　真　図　版

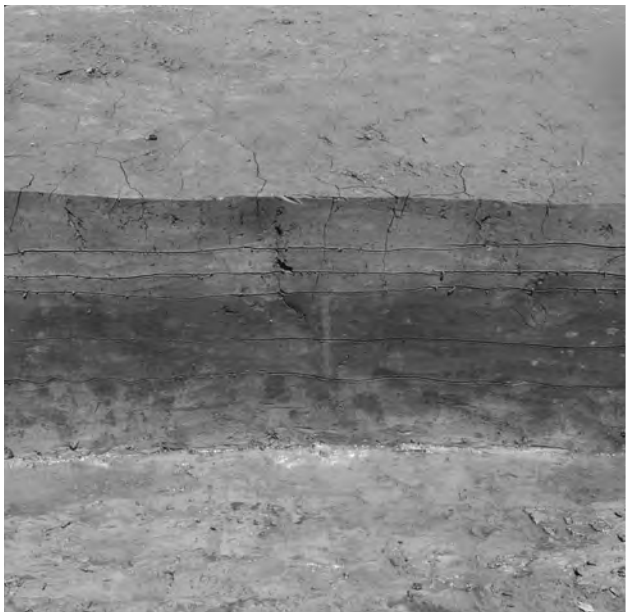
1．第 1 ～ 2 層（X=-150,020 ライン
Y=-33,960 ～ 33,970 間）（南から）



2．第 2 ～ 10 層（X=-150,020 ライン
Y=-33,960 ～ 33,970 間）（南から）

3．第 10 ～ 13 層（X=-150,020 ライン
Y=-33,960 ～ 33,970 間）（南から）

4．第 13 ～ 15 層（X=-150,020 ライン
Y=-33,960 ～ 33,970 間）（南から）



5．第 15 ～ 17 層（X=-150,020 ライン
Y=-33,960 ～ 33,970 間）（南から）

6．第 17 ～ 18 層（X=-150,020 ライン
Y=-33,960 ～ 33,970 間）（南から）

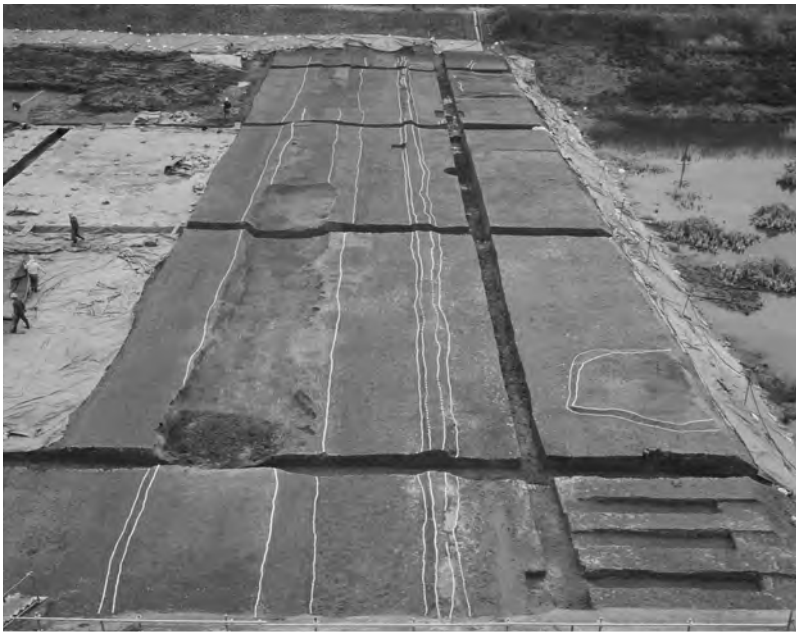
図版二　第二―一から第二―四面　全景

1．第２－１面
西半部　全景（北から）

2．第２－３面
西半部　全景（北から）

3．第２－４面
西半部　全景（北から）

図版三　第三面　全景



1．西半部　全景（北から）

2．西半部　全景（南から）

3．東半部　全景（北西から）

図版四　第四面・第五面　全景

1．第４面　東半部　全景（北西から）

2．第４面　60 島畠盛土内
棹秤鉤出土状況（東から）

3．第５面　北半部　全景（東から）

4．第５面　南半部　全景（東から）

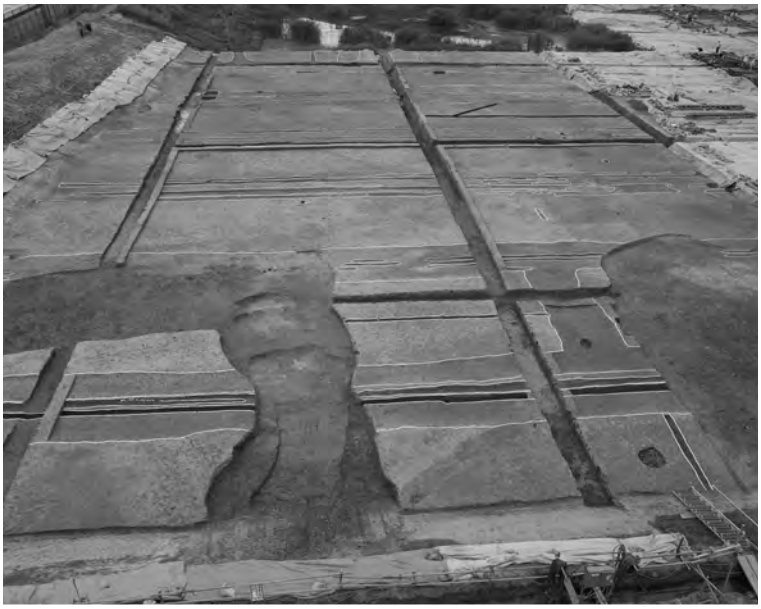
図版五　第六面・第七面　全景

1．第６面　北半部　全景（東から）

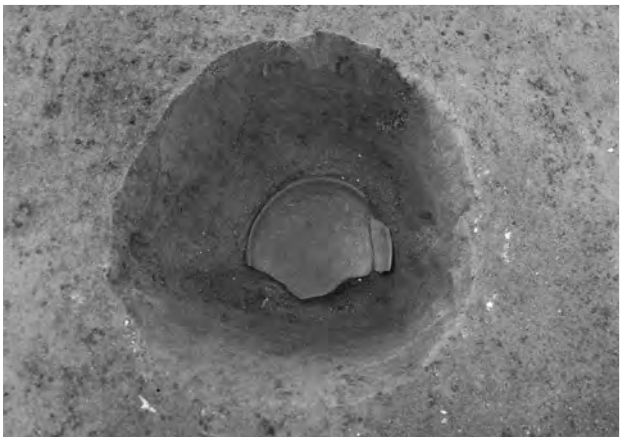
2．第６面　南半部　全景（東から）

3．第７面　北半部　全景（東から）

図版六　第七面　全景・遺構　第十面　遺構



1.（1段目）第7面
南半部　全景（南から）
2.（2段目左）第7面　120 土坑（南から）
3.（2段目右）第7面　132 土坑（東から）
4.（3段目左）第7面　137 土坑（東から）
5.（3段目右）第7面　143 土坑（南から）
6.（4段目左）第10面
164 ピット（西から）
7.（4段目右）第10面
232 ピット（南から）



図版七　第十面　全景（一）

1．北半部　全景（東から）

2．北東部　近景（北から）

図版八　第十面　全景（二）

1．北西部　近景（北から）

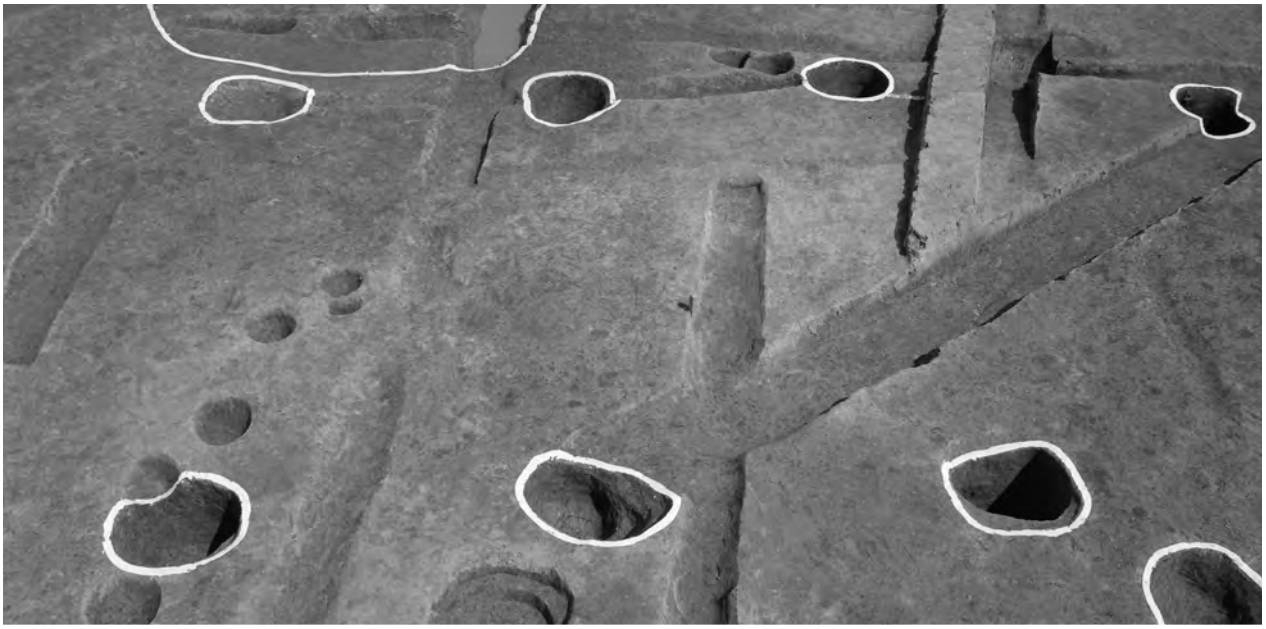
2．南半部　全景（東から）

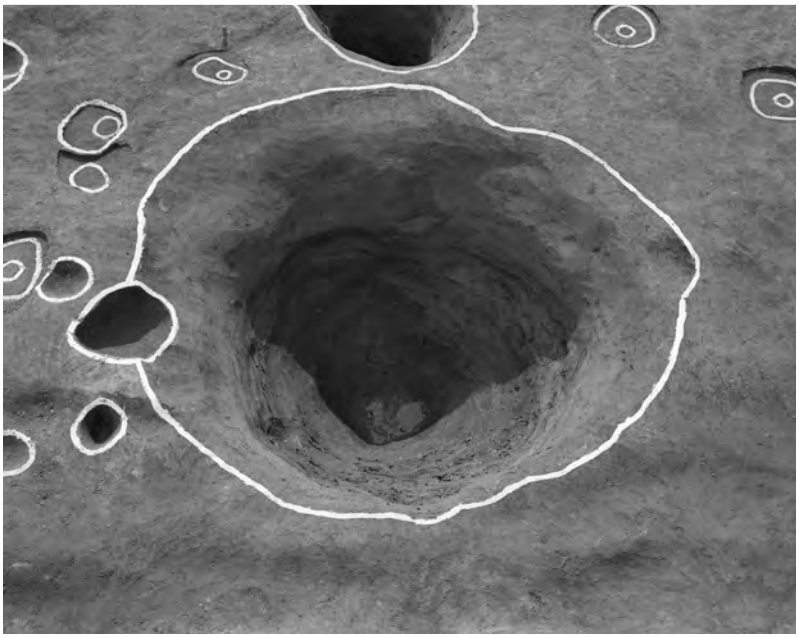
1．掘立柱建物１（南東から）

2．掘立柱建物２（北西から）

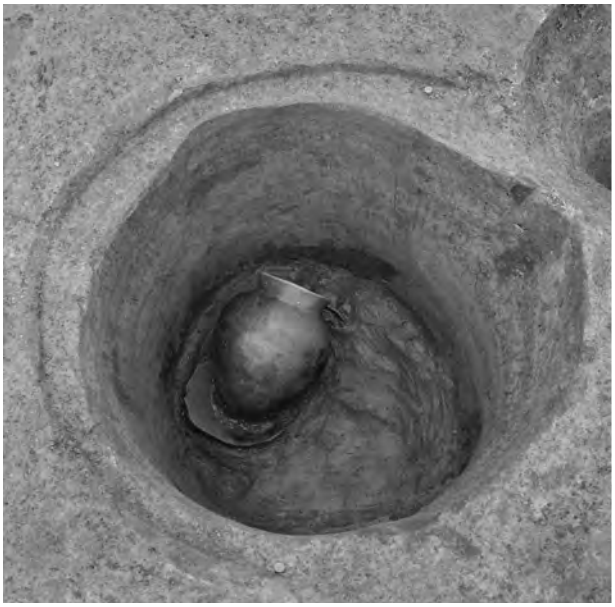
3．掘立柱建物３（北西から）

図版十　第十面　遺構（二）





1.（上）掘立柱建物４（北西から）
2.（中）掘立柱建物５・６（北西から）
3.（下）156 井戸完掘状況（北西から）

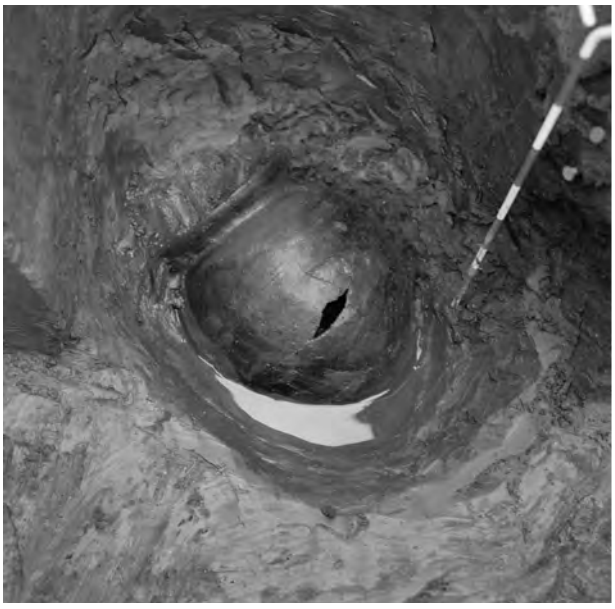


1．310 井戸遺物出土状況１（東から）

2．310 井戸遺物出土状況２（北から）

3．同上遺物出土状況３（北から）

4．同上遺物出土状況４（北から）



5．同上遺物出土状況５（北から）

6．同上完掘状況（北から）

図版十二　第十面　遺構（四）・第十一面　全景

1.（左上）第10面　402 井戸
遺物出土状況（南から）
2.（左中）第10面　402
井戸完掘状況（南から）
3.（左下）第11面
北東部　近景（北から）
4.（右上）第10面　272 土坑
遺物出土状況（南から）
5.（右中）第10面　485 土坑
遺物出土状況（南から）
6.（右下）第10面
460 溝（南東から）

図版十三　第十一面　遺構

1.（左上）367 井戸
　　遺物出土状況（西から）
2.（左下）598 井戸
　　完掘状況（東から）
3.（右上）367 井戸
　　遺物出土状況 1（北から）
4.（右中）367 井戸
　　遺物出土状況 2（南西から）
5.（右下）598 井戸
　　遺物出土状況（南東から）

6．347 溝（北東から）

図版十四　第十三―一面　全景・遺構

1．646 流路　断面（南西から）

2．665 溝　断面（南から）

3.（上）西半部　全景（北東から）　　4.（下）東半部　全景（北から）

1．西半部　全景（南から）

2．675 高まり・676 溝（南から）

3．675 高まり・676 溝（北西から）

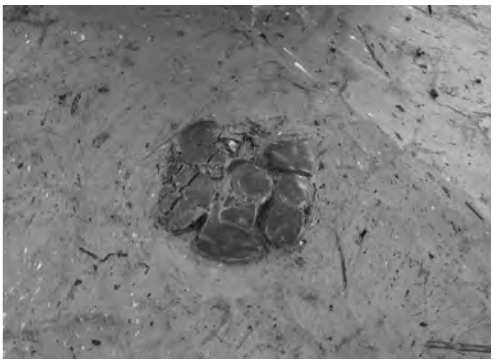
4．665 溝（北東から）

5．655 高まり・649 溝（北から）

6．648 溝・660 高まり（南西から）

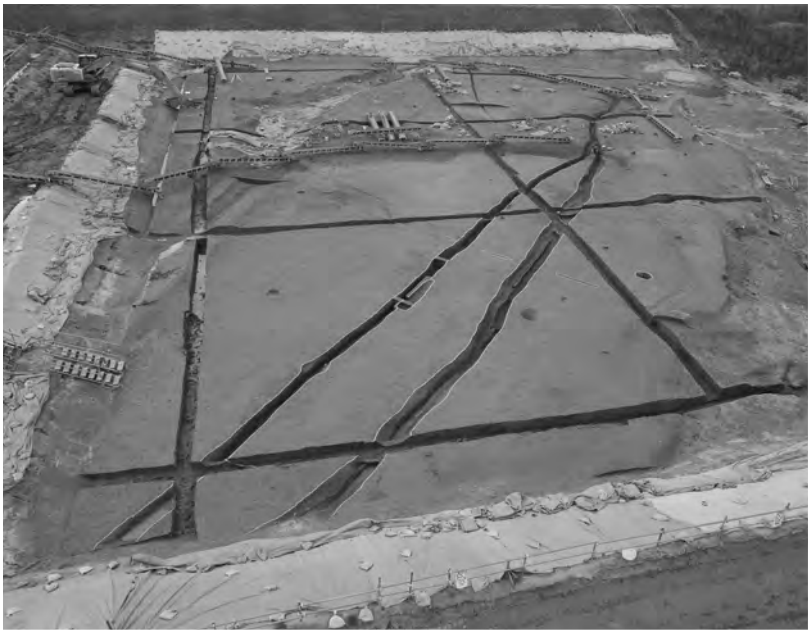
7．672 水口（南西から）

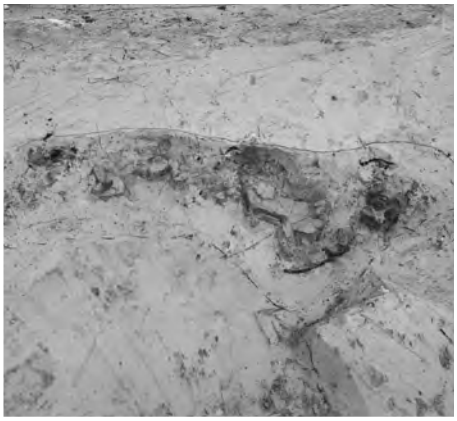
8．674 水口（西から）



9．663 高まり上土器出土状況（南から）

図版十六　第十三―二面　全景　遺構・第十四面　全景





1.（左上）第13－２面
　　北半部　全景（北から）
2.（左中）第14面
　　北半部　全景（北から）
3.（左下）第14面
　　南半部　全景（東から）

4.（右上）第13－２面
　　699 土坑（東から）
5.（右中）第13－２面
　　688 溝　断面（南西から）
6.（右下）第14面
　　北西部　全景（北東から）

図版十七　第十五面　全景（一）

1．北西部　全景（北東から）

2．西半部　全景（北東から）

3．中央部　全景（南から）

図版十八　第十五面　全景（二）

1．東半部　全景（南から）

2．南東部　全景（東から）

1．803 溝（木製品水漬け遺構）完掘状況（南西から）

2．同上　木製品出土状況（東から）

図版二十　第十五面　遺構（二）

1．803 溝（木製品水漬け遺構）上層遺物出土状況（西から）

2．同上・断面（南から）

3．（下左）同上・獣骨出土状況（北から）
4．（下右）同上・獣骨アップ（西から）

1．835 木製品水漬け遺構・864 溝・869 溝　完掘状況（東から）

2．835 溝　上層遺物出土状況１（北東から）

3．（上）835 溝　上層遺物出土状況２（南から）
4．（下）835 溝　上層遺物出土状況３（北東から）

図版二十二　第十五面　遺構（四）

1.（上）835 溝木製品水漬け遺構 - ①横断面（西から）　2.（上）835溝木製品水漬け遺構-②・③間断面（南東から）
3.（下）同上 - ③横断面（北東から）　4.（下）同上 - ③縦断面（北西から）

5.（上）835 溝木製品水漬け遺構 - ④横断面（南西から）　6.（上）835 溝木製品水漬け遺構 - ④縦断面（北西から）
7.（下）同上 - ⑤横断面（北東から）　8.（下）同上 - ⑤下層縦断面（北東から）

1．835 溝木製品水漬け遺構 - ②
遺物出土状況（南から）

2．同上 - ④
竪杵出土状況（北東から）

3．同上 - ⑤
木製品出土状況（南東から）

4．同上 - ②
土錘出土状況１（南東から）

5．同上 - ②
土錘出土状況２（北西から）

図版二十四　第十五面　遺構（六）

1．835 溝木製品水漬け遺構　完掘状況（南西から）

2．同上 - ①　完掘状況（北西から）

3．同上 - ③　完掘状況（北東から）

4．同上 - ④　完掘状況（北東から）

5．同上 - ⑤　完掘状況（北東から）

1．114 落ち込み
遺物（615）出土状況（南から）

2．864 溝（東から）

3．864 溝　断面（東から）

4．869 溝　遺物出土状況（北から）

5．869 溝（東から）

図版二十六　第十五面　遺構（八）

1．石錘出土状況（南から）

2．833 炉（南から）

3．788 炉（東から）

4．857 ピット（南から）

5．石棒出土状況１（南東から）

6．石棒出土状況２（東から）

7．727 落ち込み土器出土状況１（北から）

8．727落ち込み土器出土状況２（南西から）

9．862 ピット柱根検出状況（北から）

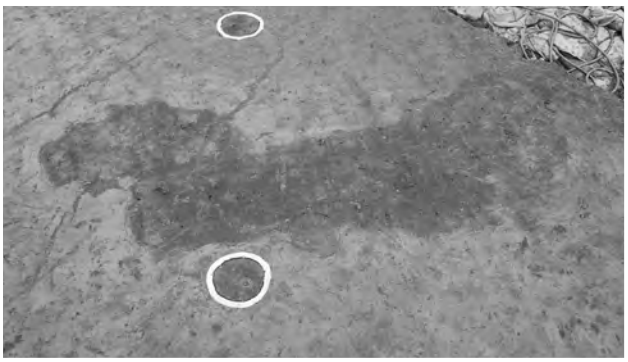
1.（上）掘立柱建物７検出状況（南東から）　　2.（下）完掘状況（南から）

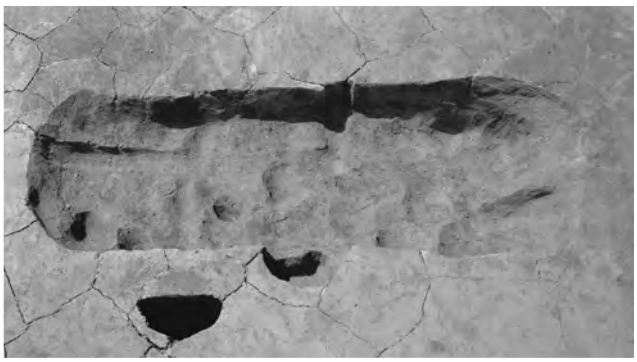
3．同上 895 ピット　柱根検出状況（東から）

4．同上 896 ピット　柱根検出状況（南から）

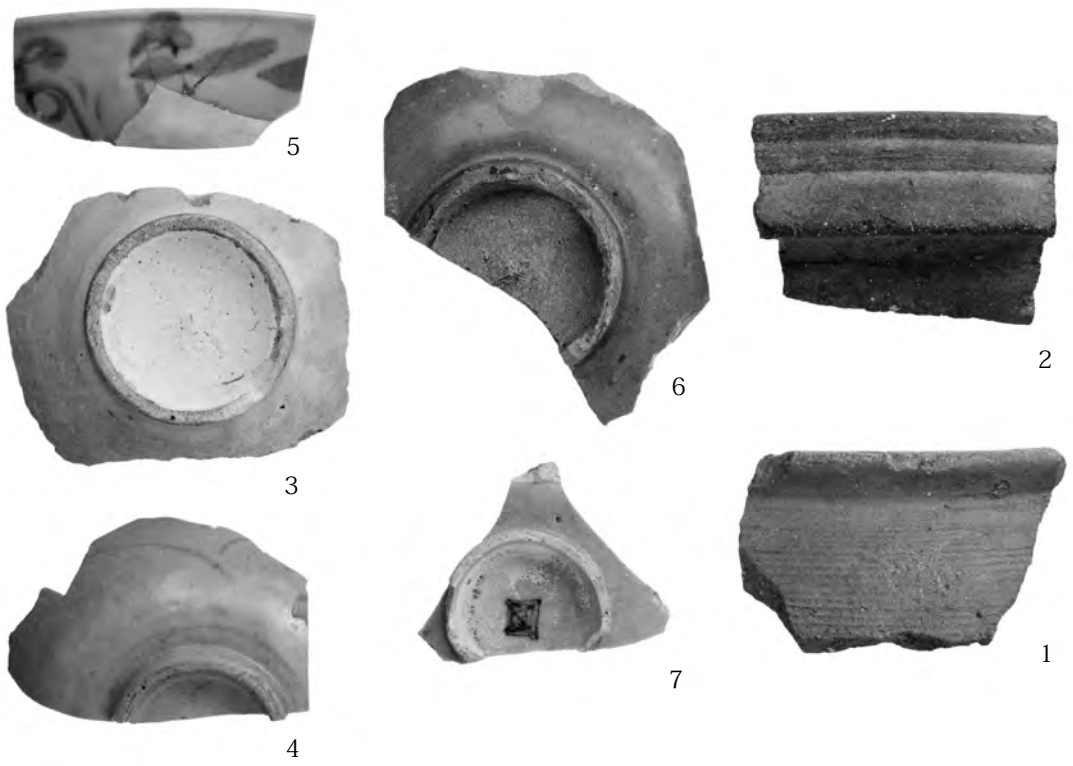
図版二十八　第十七面　全景（部分）　遺構

1．南半中央部　全景（南から）

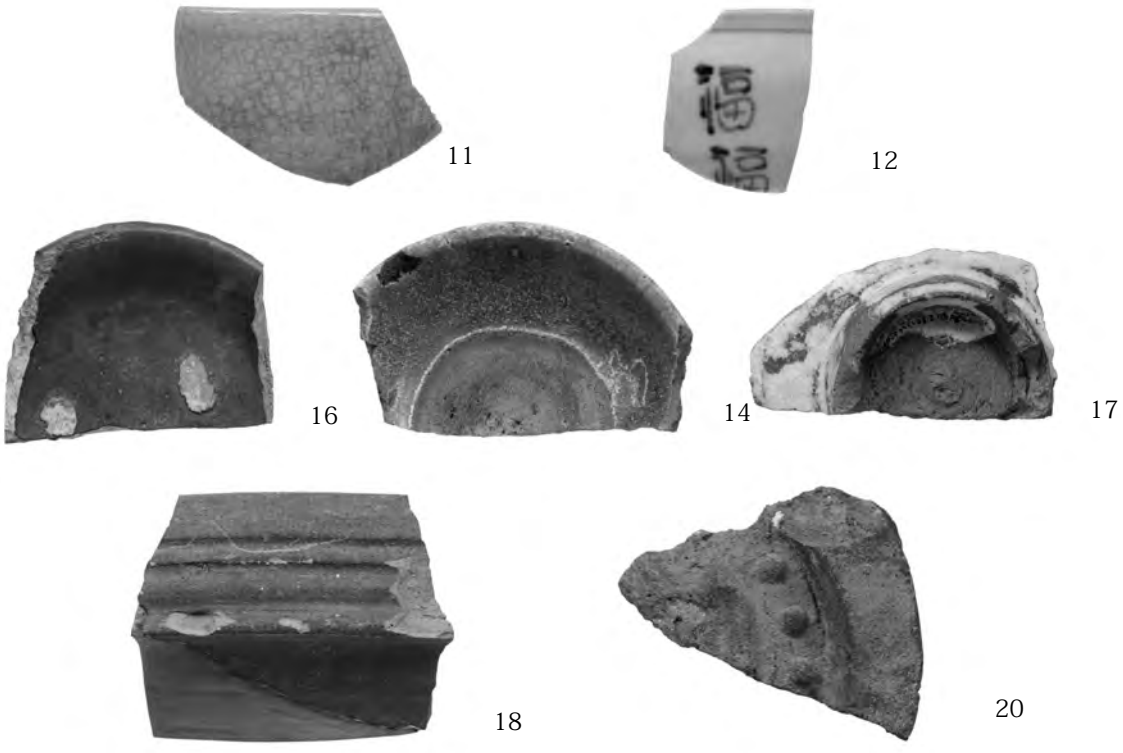




2.（上・左）971 木棺墓検出状況（南東から）
3.（上・右）971 木棺墓完掘状況（南東から）
4.（中・左）972 木棺墓検出状況（東から）
5.（中・右）972 木棺墓完掘状況（東から）
6.（下・左）975 木棺墓検出状況（北東から）
7.（下・右）975 木棺墓完掘状況（北東から）



第１層（4）、1b 土坑（5）、第１～1b 層（3）、第 1b 層（1・2・6・7）



第２－２層（11・12）、第２－３層（14・16・17）、第２－４層（18・20）

図版三十　第二層・第三層・第二面から第四面　遺物

13

25

32

26

33

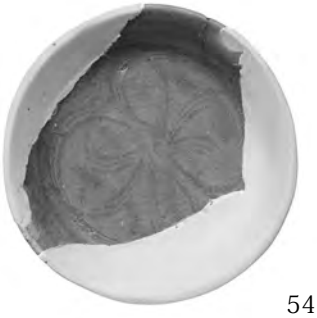
40

37

46

50

45


54

51

27

28

38

34

29

第２－２層（13)、第２－３面（27・28)、第２－５層（25)、第２－５～２－5b 層（26)、第３層（32)、49 島畠（33)、61 島畠（46)、62 坪境畦畔（45)、64 島畠 (40)、70 島畠（50)、71 島畠（51)、第４面（29)、第４層（37・38)、60 島畑（34)、第５層（54)

図版三十一　第十面　遺物（一）

79

90

89

88

88'

80

91

81

156 井戸（79 ～ 81）、310 井戸（88 ～ 91）

図版三十二　第十面　遺物（二）

126

98

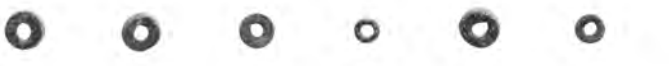
92

123

99

93

102


104　105　106　107　108　109

110　111　112　113　114　115

116　117　118　119　120

103

310 井戸出土（92・93・98・99・102 ～ 120）、402 井戸（123）、272 土坑（126）

図版三十三　第十面　遺物（三）

122

129

124

130

131

128

132

136

141

138

402 井戸（122・124）、485 土坑（128）、493 土坑（129）、460 溝（141）、160 ピット（130）、164 ピット（131）、232 ピット（132）、315 ピット（136）　547 落ち込み（138）

図版三十四　第十一面　遺物

158

160

161

161'

162

163

164

166

180

367 井戸（158・160 ～ 162）　598 井戸（163・164）　612 土坑（166）　603 溝（180）

図版三十五　第十から第十一層・第十二―一面・第十三―一面　遺物（一）

157

189

202

194

203

197

207

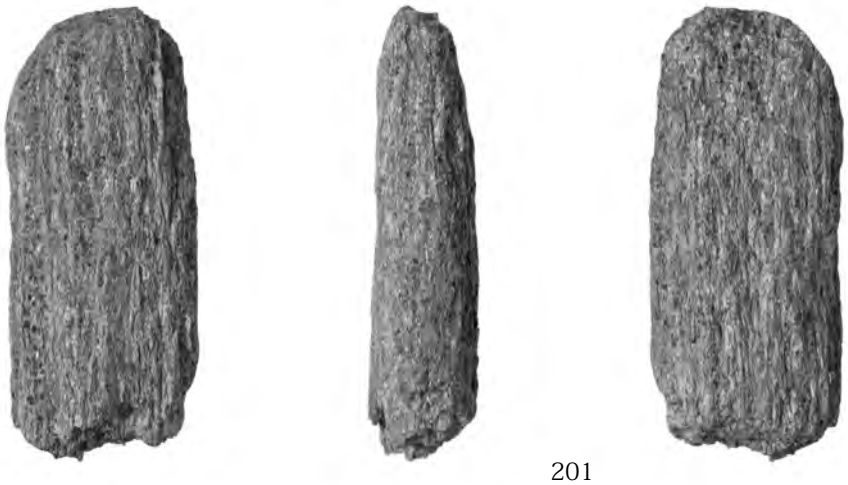
第 10 ～ 11 層（157）、第 12 － 1 面 637 落ち込み（189）、638 落ち込み（194・197）、
第 13－ 1 面　663 高まり（202）、655 溝（203）、646 流路（207）

図版三十六　第十三―一面　遺物（二）

205

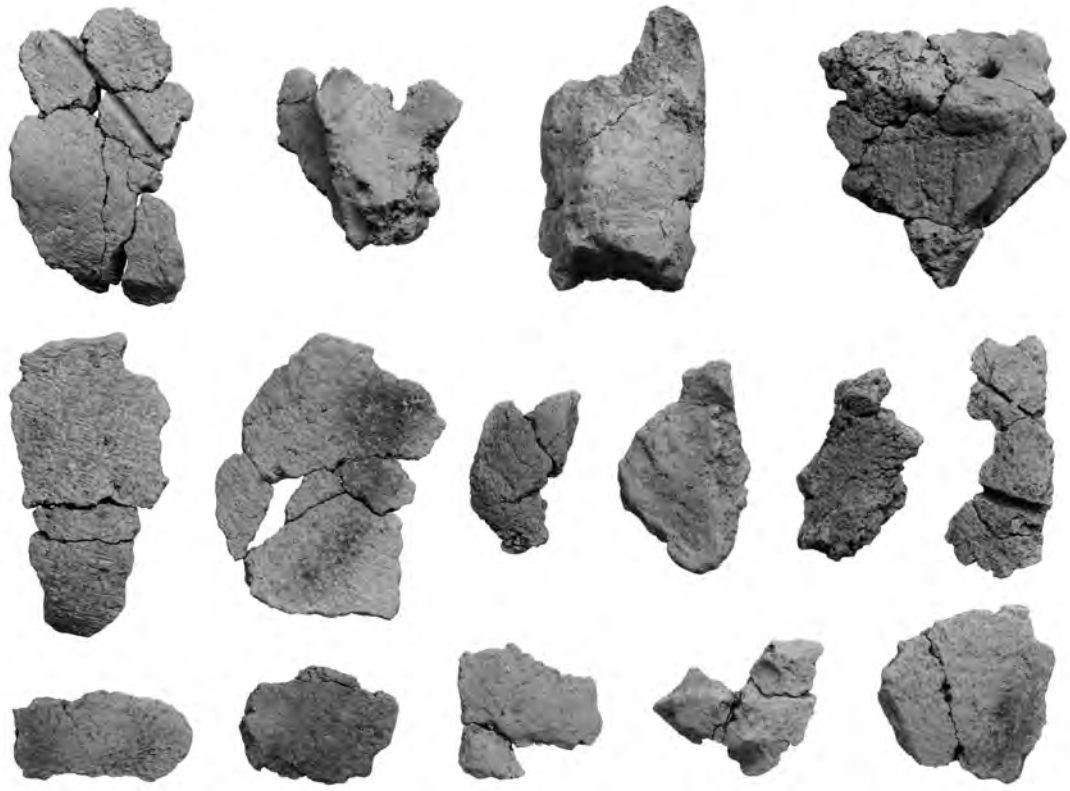
206

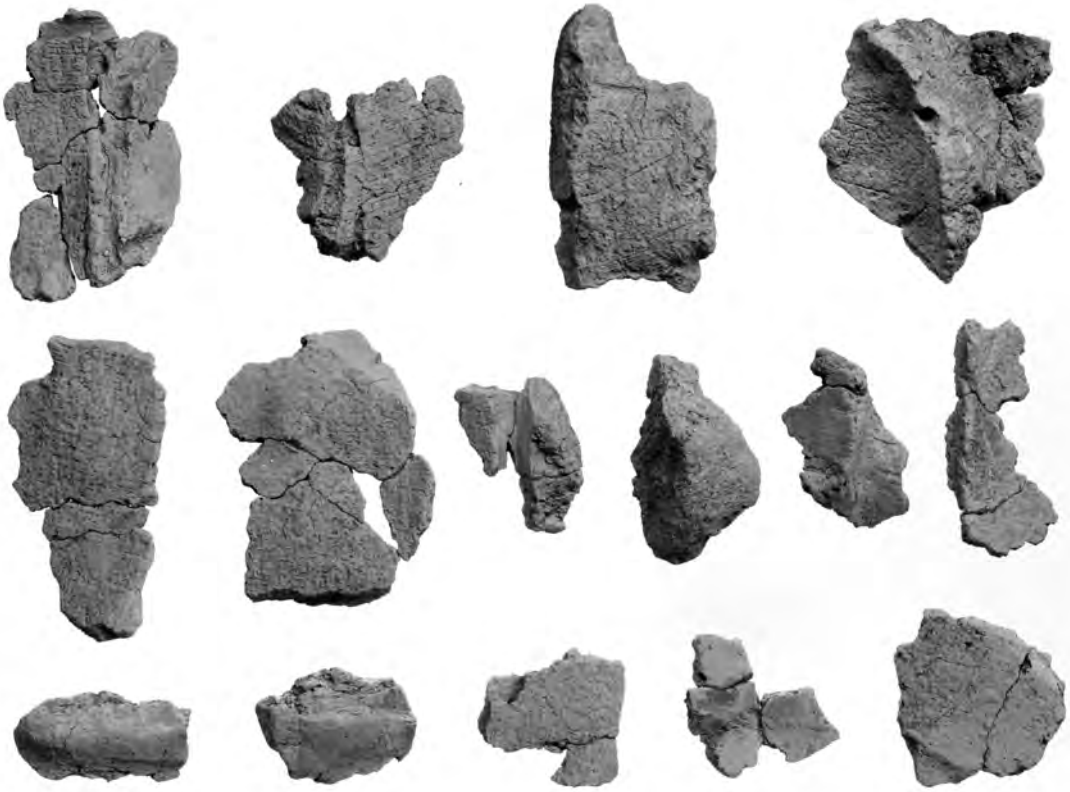
199



201

665 溝（205・206）、第 13－1 面　658 高まり（199・201）





699 土坑　壁土状焼土塊

図版三十八　第十四面・第十四層　遺物

242

262

263

295

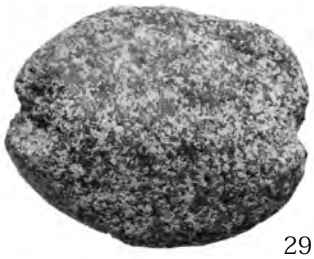
286

287

288

289

290



291

292

293

294

717 溝（242）・第 14 層（262・263・286 ～ 295）

図版三十九　第十五面　遺物（一）

297

299

324

298

316

301

322

317

305

300

328

310

728 溝（297）、729 溝（298・299・300）、730 溝（301）、731 溝（305）、732 溝（310）、
840 溝（316・317・322）、842 溝（324）、856 溝（328）

図版四十　第十五面　遺物（二）

340

335

343’

346’

347’

343

346

347

349

357

350

354

816 土坑（340）、821 土坑（335）、803 溝（343・346・347・349・350・354・357）

図版四十一　第十五面　遺物（三）

363

372

365

369

366

374

371

361

367

803 溝（木製品水漬け遺構）

図版四十二　第十五面　遺物（四）

377

373

376

378

375

375’

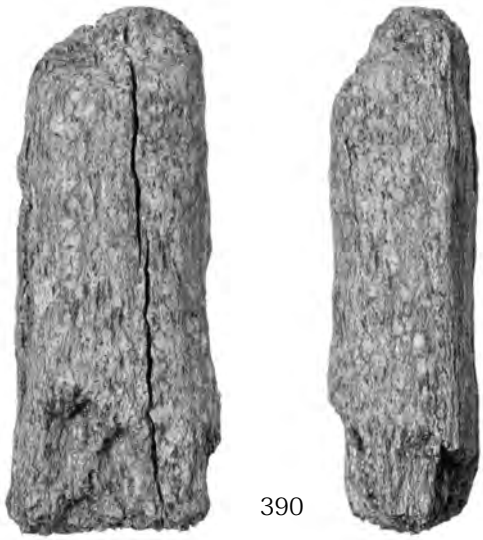
379

380

382

803 溝（木製品水漬け遺構）

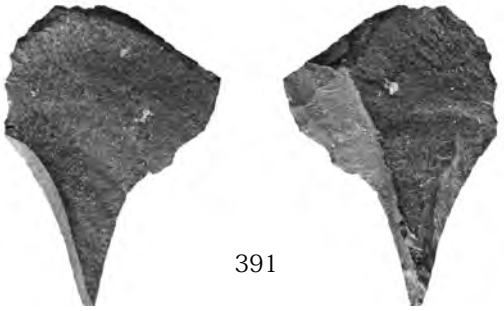
図版四十三　第十五面　遺物（五）



390

394

395



391

417

420

423

427

421

425

803 溝（木製品水漬け遺構）（390・391・394・395）、835 溝（417・420・421・423・425・427）

図版四十四　第十五面　遺物（六）

431

432

434

433

436

438

443

447

444

446

445

835 溝（木製品水漬け遺構）

図版四十五　第十五面　遺物（七）

449

478

473

479

465

477

480

475

835 溝（木製品水漬け遺構）

図版四十六　第十五面　遺物（八）

463

464

468

467

466

470

471

835 溝（木製品水漬け遺構）

452

460

454

461

457

462

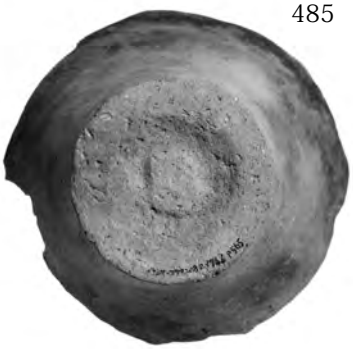
456

481

835 溝（木製品水漬け遺構）

図版四十八　第十五面　遺物（十）

485



486

486’

486”

487

488

491

493

492

500

498

499

501

505

506

835 溝（木製品水漬け遺構）

図版四十九　第十五面　遺物（十一）

385

竪杵製作用原木？

388

803 溝・同木製品水漬け遺構 -①

図版五十　第十面・第十五面　遺物（十二）

121

386

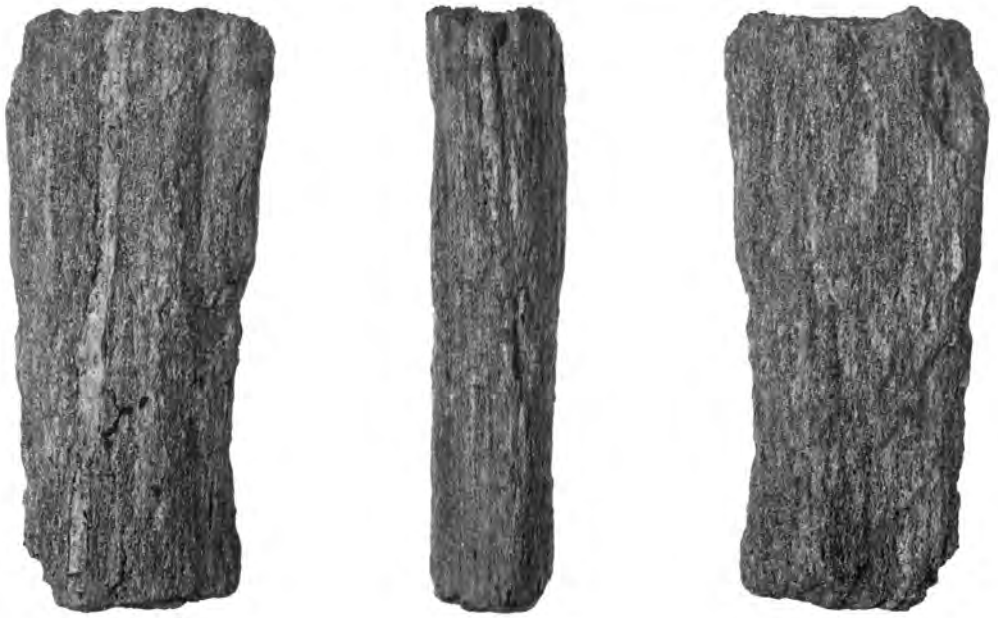
384

387

389

第 10 面 310 井戸（121）、第 15 面 835 木製品水漬け遺構（384・386・388・389）

図版五十一　第十五面　遺物（十三）



559

507

508

509

510

511

512

513

514

515

516

518

519

520

521

523

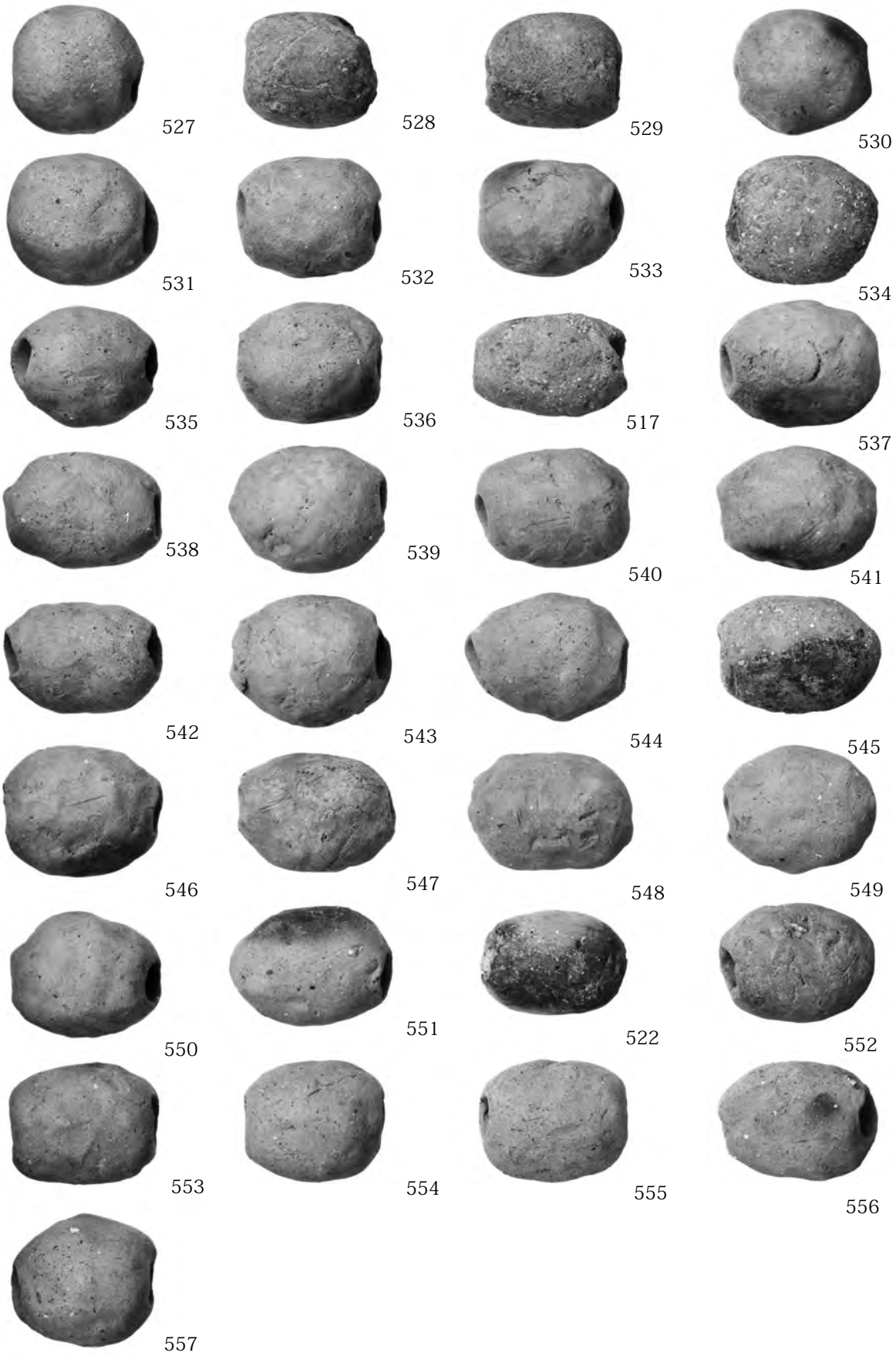
524

525

526

835 木製品水漬け遺構

図版五十二　第十五面　遺物（十四）



835 木製品水漬け遺構

図版五十三　第十五面　遺物（十五）

558

397

398

400

409

402

406

835 溝（558）、864 溝（397・398・400・402・406・409）

図版五十四　第十五面　遺物（十六）

405

569

404

572

408

560

579

615

564

726 溝（569）、814 溝（572）、864 溝（404・405・408）、865 溝（560・564）、
869 溝（579）、1142 落ち込み（615）

図版五十五　第十五面　遺物（十七）

580

584

583

588

593

590

595

587

611

869 溝（580・583・584・587・588・590）、725 流路（593・595）、857 ピット（611）

図版五十六　第十五面　遺物（十八）

599

605

600

606

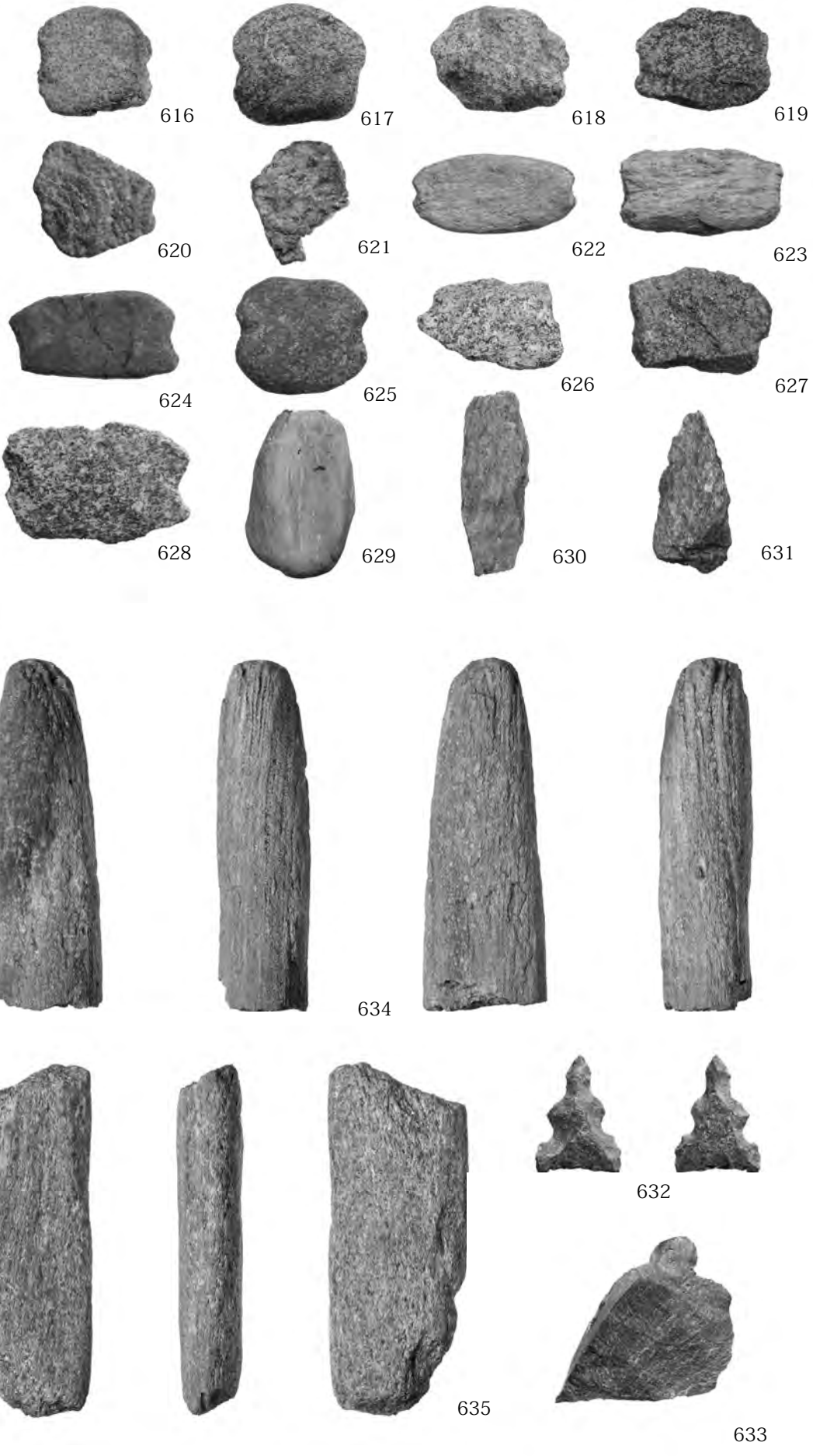
607

601

608

725 流路（599）、727 落ち込み（600・601）、854 落ち込み（605 ～ 608）

図版五十七　第十五面　遺物（十九）



石錘出土地点

図版五十八　第十五層　遺物（一）

636

637

639

647

648

651

652

653

649

650

654

655

656

657

658

659

660

686

661

662

663

683

684

包含層

689

690

692

693

694

516

527

516

527

第 15 層（689・690・692 ～ 694）、835 溝（516・527）

図版六十　第十六面・第十六層　遺物

698

707

700

708

702

709

703

715

705

721

958 土坑（698）、967 土坑（700・702・703）、977 溝（705・707・708）、
1132 ピット（709）、第 16 面（715）、第 16 層（721）

725

732

728

733

731

734

729

735

730

737

971 木棺墓（725・728 ～ 732）、972 木棺墓（733 ～ 735）、975 木棺墓（737）

報　告　書　抄　録

ふりがな	いけしま・ふくまんじいせき 13
書名	池島・福万寺遺跡 13
副書名	一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書（池島Ⅱ期地区08-2調査区）
巻次	
シリーズ名	公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第219集
編著者名	（編）井西貴子　松尾奈緒子　飯田浩光　前田俊雄　後藤信義
編集機関	公益財団法人　大阪府文化財センター
所在地	〒590-0105　大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号　　℡072(299)8791
発行年月日	2011年11月30日

ふりがな		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
いけしま・ふくまんじ遺跡	おおさかふ 大阪府 ひがしおおさかし 東大阪市 いけしまちょうちない 池島町地内	27227	93	34°38′48″	135°37′45″	平成20年９月１日～平成22年９月30日	3,637㎡	一級河川恩智川治水緑地建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
池島・福万寺遺跡	生産域	古代～近世	坪境畦畔・水田・島畠・井戸・土坑・溝・土器埋納遺構	陶磁器・輸入陶磁器（青磁・白磁）・瓦質土器・土師器・須恵器・瓦・土製品（犬形土製品）銭貨（天禧通寶・皇宋通寶）・金属器（鉄釘・桿秤鉤）	条里型水田の変遷。畠跡。
	集落・生産域	古墳	掘立柱建物・ピット・土坑・溝・水田・落ち込み	土師器・須恵器・木製品（木錘）・石製品（翡翠製勾玉・滑石製有孔円板・滑石製臼玉・砥石）	微高地上の集落と微低地部で展開する水田域。
	集落・生産域	弥生	掘立柱建物・木棺墓・木製品水漬け遺構・水田・水口・井戸・炉・土坑・溝・ピット・流路・落ち込み	弥生土器・突帯紋土器・土製品（土錘）・木製品（竪杵・平鍬・建築部材・柱根・礎板・陽物形木製品）・石製品（石庖丁・石棒・石錘・砥石）・石器（サヌカイト製大形刃器・刃器・石錐・石鏃）	弥生時代中期後半から後期の水田の変遷。前期の集落と墓域。木製品水漬け遺構と縦杵や平鍬などの木製品。木棺墓３基を検出。
		縄紋	自然流路		

要約

今回の調査区は弥生時代前期の集落域の縁辺部にあたり、木棺墓や掘立柱建物、さらに木製品水漬け遺構や炉跡など多数の遺構が検出された。また、遺物についても溝に廃棄された多量の土器の他に竪杵や平鍬などの農工具、さらには石錘や土錘といった漁撈に関わる遺物も出土した。それ以外にも石棒・人形土製品・陽物形木製品など祭祀に関わる遺物も出土し、徐々にではあるが弥生時代前期のムラの様子が明らかとなってきた。一方、弥生時代後期から古墳時代中期の遺構面においても集落域を検出することができ、掘立柱建物や井戸などの遺構や、弥生時代後期の線刻を有する土器や古墳時代前期の陶質土器などが出土した。

これらの集落域は、これまで重要な池島・福万寺遺跡の調査で明らかにされてきた生産域を営んでいた人々の社会を復原する上において非常に成果を得られたものといえる。しかし、今回、検出されたのは集落域のごく一部分であり、その全容を明らかにするには今後の調査成果に期待したい。

公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第219集

池島・福万寺遺跡13

（福万寺Ⅱ期地区08－2調査区）

一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書

発行年月日／2011年11月30日

編集・発行／公益財団法人　大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社　中島弘文堂印刷所

大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号